中国少数民族民俗大观

主编：索文清
莫福山　吴重阳
刘万庆　王炬堡

ISBN 7-211-02998-6

9 787211 029983 >

ISBN 7－211－02998－6
G・2038　定价:43.00元

中国少数民族民俗大观

主编：索文清　莫福山
吴重阳　刘万庆　王炬堡

福建人民出版社

中国少数民族民俗大观

ZHONGGUO SHAOSHU MINZU MINSU DAGUAN

本书编写组

*

福建人民出版社出版发行

（福州东水路 76 号　邮编：350001）

福州七二二八工厂印刷

（福州鼓屏路 33 号　邮编：350001）

开本 850 毫米×1168 毫米　1/32　24.875 印张　8 插页　587 千字

1998 年 5 月第 1 版

1998 年 5 月第 1 次印刷

ISBN 7—211—02998—6

G·2038　　定价：43.00 元

本书如有印装质量问题，影响阅读，请直接向承印厂调换。

撰稿人：（以姓氏笔划为序）

丁　宏	于乃昌	马启成	文明英	王　迅	王树武
王恒杰	王建民	巴图宝音	甘万莲	白振声	过　竹
过　伟	汎　河	刘　晓	刘万庆	刘翠兰	吕林慧
阿　霞	杜玉亭	李友楼	李双剑	李茂林	李秀英
李绍尼	李鉴踪	汪青玉	汪丽珍	严汝娴	吴雅芝
张国杰	苏赫巴鲁	青　觉	罗日泽	罗懿群	金东勋
范玉梅	郑国乔	杨　权	杨　春	杨圣佐	赵志忠
赵福荣	胡绍华	胡振华	施联朱	索文清	陶学良
耿金声	黄建明	莫福山	盘承乾	曾思奇	鲁　丁
朝　克	彭南钧	韩国刚	葛忠兴	梁庭望	潘朝霖

编务：吴雅芝

插图：周秀清

照片：北京民族文化宫展览馆提供

目　录

蒙古族 …… (1)
蒙古袍 …… (2)
马奶酒 …… (2)
成吉思汗火锅 …… (3)
烤全羊 …… (4)
蒙古八珍 …… (5)
白食 …… (6)
手扒肉 …… (7)
蒙古包 …… (7)
勒勒车 …… (8)
内画鼻烟壶 …… (9)
求名问属宴与沙恩吐宴… (10)
蒙古“博”…… (12)
那达慕大会…… (13)
敖包会…… (15)
端午猎日…… (16)
赛骆驼…… (17)
马头琴…… (18)
蒙古象棋…… (19)

回族…… (21)
妇女盖头…… (22)
盖碗茶…… (22)
河州砖雕…… (23)
回族婚俗…… (24)
速葬…… (25)
花儿与花儿会…… (26)
宴席曲…… (27)
口弦…… (28)
见面道“色兰”…… (29)

藏族…… (31)
藏帽…… (32)
帮典…… (32)
酥油茶…… (33)
忌食奇蹄牲畜肉…… (34)
糌粑…… (34)
移动的房子——帐篷…… (35)
物为信，歌为媒 …… (36)
牦牛踩场…… (36)
藏历年…… (37)
瞻佛节…… (39)

传大招……（40）
沐浴节……（41）
雪顿节……（42）
拉夜会……（44）
赏花节……（44）
采花节……（45）
望果节……（46）
嘛呢堆……（47）
哈达……（48）
转经筒……（49）

维吾尔族……（50）
小花帽……（51）
爱得丽斯绸……（52）
抓饭与烤馕……（53）
烤全羊与烤羊肉串……（54）
维吾尔族婚礼……（55）
肉孜节……（57）
古尔邦节……（57）
英吉沙小刀……（58）
十二木卡姆……（59）
麦西来甫……（61）

苗族……（63）
女子服饰……（64）
苗家婚礼……（65）
游方……（66）
敬酒礼……（67）
议榔……（68）
护寨树……（70）
接龙……（70）
芦笙节……（71）
姊妹饭节……（73）
跳花节……（74）
四月八……（75）

彝族……（76）
土掌房……（77）
吃火草烟……（77）
乌蒙彝族婚俗……（78）
拖拉婚仪……（80）
背新娘……（81）
丧葬舞……（82）
花腰带……（82）
鸡冠帽……（83）
父子连名谱系……（84）
婴儿命名……（85）
女子成年礼……（86）
十月太阳历……（87）
毕摩……（88）
“锁德”与“锁宰”……（89）
祭倮……（90）
库施节……（91）

火把节……（93）
插花节……（94）
巍山彝族年节……（95）
孔告……（96）
颂牛节……（96）
姑娘节……（97）
阿细跳月……（98）
掷石竞赛……（98）
跳火绳……（99）

壮族 ……（101）
壮锦 ……（102）
烤整猪与白斩鸡 ……（102）
驼背粽 ……（103）
倚歌择偶 ……（103）
上门和寡妇再嫁 ……（104）
二次葬和悬棺葬 ……（104）
敬老亭和寿米缸 ……（105）
打背工 ……（106）
铜鼓 ……（106）
花山崖壁画 ……（107）
壮乡歌圩 ……（108）
中元节 ……（109）
莫一大王节 ……（110）
花王节 ……（110）
埋蛙节 ……（111）

布依族 ……（113）
刺绣 ……（114）
蜡染 ……（114）
五色糯米饭 ……（115）
丰收酒 ……（116）
敬客酒 ……（116）
石板房 ……（117）
梳高头 ……（118）
浪哨谈情 ……（118）
甩糠包 ……（120）
追打嫁女 ……（121）
谢厨师 ……（122）
唢呐送客 ……（122）
吹木叶 ……（123）
护寨树 ……（124）
洗脸洗第一，洗脚洗第七
……（124）
查白歌节 ……（125）
牛王节 ……（126）
毛杉树歌仙节 ……（127）
神仙田歌会 ……（128）
月琴 ……（128）
姊妹箫 ……（129）

朝鲜族 ……（130）
契玛和赤古里 ……（131）

打糕 …… (131)
朝鲜冷面 …… (132)
克依姆奇 …… (133)
头顶水罐 …… (134)
老两口回婚礼 …… (135)
新郎住妻家 …… (135)
老人花甲礼 …… (137)
婴儿抓周 …… (138)
跳板 …… (138)
荡秋千 …… (140)
氏勒米 …… (140)
伽倻琴 …… (141)

满族 …… (143)
旗袍与木底鞋 …… (144)
马蹄袖与靰鞡 …… (145)
萨其马·火锅·满汉全席
…… (146)
三面炕 …… (147)
新娘走红毡 …… (148)
死人走窗户 …… (149)
穆昆达 …… (150)
木兰围场 …… (151)
养活孩子吊起来 …… (152)
西墙上的祖宗板 …… (154)
柳枝与佛托妈妈 …… (155)
父子不同席 …… (155)
象征八旗的八角鼓 …… (156)
赛威呼 …… (157)
珍珠球 …… (158)

侗族 …… (160)
侗家服饰 …… (161)
侗寨鼓楼 …… (162)
风雨桥 …… (163)
侗族婚俗 …… (164)
送新娘 …… (166)
努宁美 …… (166)
行歌坐月 …… (167)
玩山凉月 …… (168)
侗家丧葬 …… (169)
放草标 …… (170)
大雾梁歌会 …… (171)
大歌 …… (171)
侗戏 …… (172)
赶歌会 …… (174)
多耶 …… (174)
斗牛 …… (175)
吹芦笙 …… (176)
闹年锣 …… (177)
供奉萨神 …… (177)

瑶族 …… (179)

五色衣裳 …… (180)
坐月甜酒 …… (181)
鸟鲊 …… (181)
木楼 …… (182)
隔窗对唱与吊楼谈情 … (183)
女娶男嫁 …… (184)
出殡坐灵椅 …… (184)
行半屈膝礼 …… (185)
石牌法律 …… (186)
上山围猎 …… (187)
长鼓与长鼓舞 …… (188)
达努节 …… (189)
耍歌堂 …… (190)
对唱 …… (191)

白族 …… (194)
白羊皮服饰 …… (195)
“登机”帽 …… (195)
凤冠帽与凤尾鞋 …… (196)
乳扇 …… (197)
砂锅鱼 …… (198)
竖房仪式 …… (199)
走马转角楼 …… (201)
掐新娘 …… (202)
敬老 …… (203)
年节喜庆 …… (204)
妇女产期的赐福 …… (206)
栽秧赊 …… (206)
绕三灵 …… (208)
霸王鞭 …… (209)
兵器舞 …… (210)
大理三月街 …… (211)
仗鼓舞 …… (212)

土家族 …… (214)
西兰卡普 …… (215)
土家服饰 …… (216)
妇女围围裙 …… (218)
糖馓和粑粑 …… (219)
咂酒和镰刀肉 …… (220)
木屋吊脚楼 …… (221)
婚礼陪哭嫁 …… (222)
孝歌 …… (225)
娘家看月祝米酒 …… (226)
祖先崇拜 …… (227)
见者有份 …… (228)
薅草锣鼓 …… (229)
过两次年 …… (230)
故都老司城 …… (232)
打溜子 …… (234)
咚咚喹 …… (235)
元宵闹花灯 …… (236)
摆手节 …… (237)

哈尼族 …… (240)
阿茨古 …… (241)
贺生酒 …… (242)
莫搓搓 …… (243)
祭寨神 …… (244)
祭龙 …… (244)
六月年 …… (246)
十月年 …… (248)
尝新节 …… (249)

哈萨克族 …… (251)
哈萨克帽 …… (252)
宰羊待客 …… (253)
熏肉和马肠 …… (254)
毡房 …… (255)
周年祭 …… (256)
挽歌悼亲人 …… (258)
架鹰狩猎 …… (259)
姑娘追 …… (260)
婴儿礼和小孩骑马礼 … (262)
火崇拜 …… (263)
阿肯弹唱会 …… (264)
库布孜与斯布斯额 …… (266)
叼羊 …… (267)
赛马 …… (269)
飞马拾银元 …… (270)
拔棍比赛与穿麻袋摔跤… (271)
马上摔跤和马上拔河 … (272)
冬不拉 …… (273)

傣族 …… (276)
花统裙 …… (277)
傣锦 …… (277)
香竹饭 …… (278)
普洱茶 …… (279)
竹楼 …… (280)
贺新房 …… (281)
笋塔 …… (282)
纺线场上结伉俪 …… (283)
一线系鸳鸯 …… (284)
丢包觅佳偶 …… (286)
裹毯子谈恋爱 …… (286)
傣族葬俗 …… (287)
小乘佛教 …… (288)
灵披勐 …… (290)
道不拾遗 …… (291)
赶花街 …… (292)
放飞灯 …… (293)
龙船赛 …… (293)
泼水节 …… (294)
象脚鼓 …… (296)

黎族 …… (298)

黎族桶裙 …… (299)
拉梓隆 …… (300)
布隆亭竿 …… (300)
热婀 …… (302)
逗娘 …… (303)
婴儿穿衣仪式 …… (304)
待抱奥 …… (305)
孚念孚 …… (306)
竹竿舞 …… (307)
人形骨簪 …… (308)
古老的乐器“叮咚” …… (309)

傈僳族 …… (311)
搭亲家 …… (312)
看鸡头瞧猪板 …… (313)
肝生 …… (314)
撵山 …… (314)
“秋天” …… (316)
踩门与破门 …… (316)
除牛刑 …… (318)
澡塘节 …… (319)
刀竿节 …… (320)
拉歌节 …… (321)

佤族 …… (323)
黑布包头与筒裙 …… (324)
鸡肉烂饭 …… (325)
水酒 …… (326)
饮苦茶 …… (327)
草木房与悬空楼 …… (327)
串姑娘 …… (329)
平安死与凶死 …… (331)
“木依吉”崇拜 …… (331)
佤族泼水节 …… (333)

畲族 …… (334)
凤凰装 …… (335)
长夜对歌 …… (335)
山歌牵姻缘 …… (337)
女婚男嫁 …… (339)
“作表姐”与“迎亲伯” … (340)
唱借锅歌与吃千斤饭 … (342)
以歌赴丧 …… (344)
祠堂 …… (346)
排行 …… (348)
树头祖牌 …… (349)
祖图 …… (351)
祭祖 …… (352)
节日登山 …… (353)
操石磉 …… (354)
二月二会亲节 …… (354)
畲家拳 …… (356)
打尺寸 …… (358)

竹林竞技 …… (359)
三月三染乌饭 …… (359)
招兵节 …… (361)

高山族 …… (363)
歌舞相亲和鸣臼接婿
…… (364)
布农新娘的人廪襄祓礼
…… (365)
多种连名制 …… (366)
赛跑成丁和长老晋级 … (367)
阿美人的卡布特年龄群
…… (368)
雅美人的飞鱼祭 …… (369)
布农人的打耳祭 …… (370)
排湾人的五年祭 …… (372)
赛夏人的矮灵祭 …… (372)
杀猴除秽和出猎成丁 … (373)
大帽舞、杵舞和甩发舞
…… (374)
刺藤球与荡秋千 …… (376)

拉祜族 …… (377)
以黑为美的服饰 …… (378)
竹筒茶 …… (379)
竹筒饭和玉米糕 …… (379)
掌楼 …… (380)
媒人求婚 …… (381)
上门婚 …… (382)
离婚宴 …… (384)
抛蛋择棺定坟 …… (385)
狩猎活动——杀阿 …… (386)
磨八 …… (387)
祖先牌位“页尼” …… (388)
扩扎 …… (389)
新米节 …… (390)
六月节 …… (391)
葫芦笙 …… (392)
小三弦 …… (393)
哩嘎嘟 …… (394)
响篾 …… (395)

水族 …… (397)
“反结”与“者勾” …… (398)
首饰 …… (398)
掐猪耳与敬鸡头 …… (400)
九阡酒 …… (400)
鱼包韭菜 …… (401)
肝胆酒 …… (402)
交杯酒 …… (403)
干栏屋 …… (405)
水家婚俗 …… (406)
石棺墓 …… (408)

舞蹈 …… (409)
端节 …… (410)
卯节 …… (411)
苏宁喜 …… (413)

东乡族 …… (415)
织褐子与擀毡 …… (416)
鸡尾宴 …… (417)
平伙 …… (418)
新婚砸枕头 …… (419)
唱“哈利” …… (420)
“订茶”与“麦海勒库和”
…… (421)
戏谑新郎和戏谑公公 … (422)
耍火把与打秋千 …… (423)
打“咕咕杜” …… (424)

纳西族 …… (425)
七星披肩 …… (426)
琵琶肉 …… (427)
千层饼——粑粑 …… (428)
窖酒 …… (429)
三房一照壁与四屋一院落
…… (430)
纳西婚俗 …… (431)
纳西葬俗 …… (432)
穿裤礼和穿裙礼 …… (433)
东巴教 …… (434)
“猛本”和“祭三多” …… (436)
干木古 …… (437)
纳西火把节 …… (438)
麒麟舞 …… (439)
纳西古乐 …… (440)

景颇族 …… (442)
跳新房 …… (443)
婚姻形式 …… (444)
送魂仪式 …… (445)
丧葬舞 …… (447)
春菜 …… (448)
水酒敬客 …… (448)
猎物分配 …… (449)
传递信息的方式 …… (450)
原始布告 …… (451)
拉事与讲事 …… (452)
祭“能尚” …… (454)
叫谷魂 …… (455)
目脑纵歌 …… (456)
打“汤碟” …… (457)

柯尔克孜族 …… (458)
“阿克卡勒帕克”帽 …… (459)

“什尔达克”花毡 …… (459)
包糟酒 …… (460)
“阿依勒”的变迁 …… (461)
叼羊传说来自叼狼 …… (462)
“诺鲁孜”节 …… (463)
三弦琴“考姆孜” …… (464)

土族 …… (466)
彩虹花袖衫 …… (467)
拉线果日玛腰鞋 …… (468)
扭达 …… (468)
阿拉普色 …… (470)
酪馏酒 …… (471)
互助大曲 …… (472)
土族风味食品 …… (473)
土族葬俗 …… (474)
土族村落 …… (476)
土族庭院 …… (477)
土族婚俗 …… (478)
桑嗯专 …… (480)
迎送客人三杯酒 …… (481)
爷爷骑牛祝满月 …… (481)
婴儿洗三礼 …… (482)
蓄发仪式 …… (483)
纳顿会 …… (484)
土族刺绣艺术 …… (486)
五屯艺术 …… (487)
安召舞 …… (489)
轮子秋 …… (490)
土族人的姓氏 …… (491)
土族人的名字 …… (492)

达斡尔族 …… (495)
从小学刺绣 …… (496)
胛骨饭和柳花芽菜 …… (497)
多窗结构的房子 …… (497)
流放木排 …… (498)
猎貂 …… (499)
冰上捕鱼 …… (500)
琥珀色的烟叶 …… (501)
除夕的烟火 …… (502)
黑日抹灰脸 …… (503)
鲁日格勒 …… (503)
哈聂卡 …… (504)
鹿棋 …… (505)
曲棍球 …… (506)

仫佬族 …… (508)
走坡 …… (509)
同年鞋 …… (509)
送嫁十姐妹 …… (510)
闹堂 …… (511)
婆王和社王 …… (512)

防老衣 …… (513)
麦秆帽 …… (514)
掘地为炉 …… (515)
挑新水 …… (516)
依饭节 …… (517)
斗鸡会 …… (518)
舞草龙 …… (519)
凤凰护蛋 …… (520)

羌族 …… (521)
麻布衫与女儿麻 …… (522)
云云鞋 …… (523)
碉房 …… (524)
火葬 …… (525)
祭山会 …… (526)
白石崇拜 …… (527)
木姐珠 …… (528)
阿爸木比塔 …… (529)
推杆 …… (530)
五月五 …… (531)
羌笛 …… (531)

布朗族 …… (533)
三尾螺头饰 …… (534)
剁生 …… (535)
酸茶 …… (535)
从妻居 …… (537)
爬竿取包 …… (539)
养子 …… (540)
做“节” …… (541)
布朗族葬俗 …… (542)
代袜么和代袜那 …… (544)
宋坎节 …… (545)

撒拉族 …… (547)
吾热合苏斯 …… (548)
婚礼上的挤门 …… (548)
赫撒斯 …… (549)
撒拉曲 …… (550)
骆驼戏 …… (550)
的格乃奥依娜 …… (511)
打“蚂蚱” …… (552)
拔腰 …… (552)
宰靠 …… (553)

毛南族 …… (554)
花竹帽 …… (555)
毛南三酸 …… (556)
毛南菜牛 …… (556)
订亲三步曲 …… (557)
婚礼歌 …… (558)
卖猫月 …… (559)

肥谱 …… (560)
肥套 …… (560)
放鸟飞 …… (561)
同填与同顶 …… (562)
审老虎 …… (563)

仡佬族 …… (564)
丢布娶亲 …… (565)
“追”姑娘 …… (566)
拜堂 …… (566)
踩堂舞 …… (567)
祭神树 …… (568)
吃虫节 …… (569)

锡伯族 …… (571)
迎亲婚俗 …… (572)
莫昆墓地 …… (574)
海尔堪神 …… (575)
喜利妈妈 …… (576)
“杜因拜专扎坤”节 …… (577)
射箭 …… (578)

阿昌族 …… (580)
烟盒订情 …… (581)
天明进夫家 …… (581)
送饭盒 …… (582)
火烧猪肉凉米线 …… (583)
大年初一开财门 …… (584)
洒花水 …… (585)
会街节 …… (586)

普米族 …… (588)
木楞房 …… (589)
猜钥匙 …… (589)
给羊子 …… (591)
祭山神 …… (593)
巴丁拉木 …… (594)
转山会 …… (595)
转海会 …… (596)

塔吉克族 …… (598)
绣花棉帽 …… (599)
辫饰 …… (600)
三世同堂的大房子 …… (600)
纯情的婚礼 …… (601)
骆驼送葬 …… (603)
墓上建筑“麦克布拉” … (603)
出生礼 …… (605)
待客礼节 …… (605)
以吻会亲友 …… (606)
引水节和播种节 …… (607)
切脱恰特尔节 …… (607)

巴罗提节 …… (608)
高原乐器鹰笛 …… (609)

怒族 …… (610)
传情物——羊毛袜 …… (611)
吹竹号报丧 …… (612)
侠拉 …… (613)
怒族过新年 …… (614)
捕鱼 …… (615)
刻木结绳 …… (616)
立石为界 …… (617)
迎客宴 …… (618)
敲犁头祈雨 …… (619)
祭谷神 …… (620)
嗒标 …… (621)

乌孜别克族 …… (623)
花帽和皮帽 …… (624)
喜穿艾提克 …… (624)
别具风味的纳仁 …… (625)
海勒哇 …… (626)
居室装饰 …… (627)
乌孜别克婚俗 …… (627)

俄罗斯族 …… (629)
服饰 …… (630)
饮食 …… (630)
风味食品饮料 …… (631)
住宅 …… (632)
婚礼 …… (633)
婚礼纪念日 …… (634)
丧葬 …… (636)
圣诞节和复活节 …… (637)
禁忌 …… (638)

鄂温克族 …… (640)
长袍 …… (641)
奶茶 …… (642)
驯鹿 …… (642)
桦皮船 …… (644)
火崇拜 …… (645)
达拉干 …… (645)
牛粪圈 …… (646)
套马杆 …… (647)
杆子马 …… (648)
狩猎 …… (649)
采人参 …… (650)
鄂温克人的礼节 …… (650)
打狗熊游戏 …… (651)

德昂族 …… (653)
五色娑罗布 …… (654)

德昂人与竹 …… (655)
妇女腰箍 …… (656)
自主婚 …… (657)
竹篮探情 …… (659)
撒鲜花祝新娘 …… (660)
献佛不献坟 …… (661)
谷娘权力比佛大 …… (662)
洗手洗脚礼 …… (663)

保安族 …… (665)
保安装 …… (666)
羊皮筏子 …… (667)
保安婚礼 …… (668)
保安腰刀 …… (671)
保安令 …… (672)
马上运动 …… (673)
夺腰刀 …… (675)

裕固族 …… (676)
高领长袍 …… (677)
甩头茶 …… (678)
支果干 …… (679)
九杆帐房 …… (680)
戴头 …… (681)
瑶达曲戈 …… (683)
杜苏尔池 …… (684)
马踏迎亲帐房 …… (685)
柔箭射新娘 …… (686)
原始信仰“汗点格尔” … (688)
敬客双杯酒 …… (689)
羊背子 …… (690)
婴儿剃头礼 …… (691)
马驹剪鬃仪式 …… (692)

京族 …… (694)
认亲 …… (695)
踢沙和撒木叶 …… (695)
踩高跷与游水捉鸭 …… (696)
渔箔 …… (698)
嘎古集团 …… (698)
祭海神 …… (699)
哈节 …… (700)
跳天灯 …… (701)
独弦琴 …… (701)

塔塔尔族 …… (703)
服饰 …… (704)
塔塔尔族食品 …… (704)
建筑工艺 …… (705)
婚礼 …… (706)
葬俗 …… (707)
摇篮礼和 40 份水礼…… (708)

撒班节 …… (709)
民间舞蹈 …… (709)
赛跳跑和爬杆 …… (710)

独龙族 …… (712)
独龙毯 …… (713)
董棕粉 …… (713)
长竹楼和藤网桥 …… (714)
剽牛祭天日 …… (716)
独龙山寨夜不闭户 …… (717)

鄂伦春族 …… (719)
狍皮衣饰 …… (720)
桦皮桶煮肉 …… (721)
烧面圈 …… (722)
忌食狗肉 …… (723)
仙人柱 …… (723)
认亲 …… (724)
丧葬仪式 …… (725)
周年祭 …… (727)
安嘎 …… (728)
乌恰吞和尼玛都伦 …… (729)
妙法诱兽 …… (730)
桦皮制品 …… (730)
诸神崇拜 …… (732)
狍骨占卜 …… (733)

赫哲族 …… (735)
鱼皮衣服 …… (736)
地窨子 …… (737)
狗拉爬犁 …… (737)
结婚仪式上的训话 …… (739)
送魂仪式 …… (740)
干钩钓鱼 …… (741)
挡亮子捕鱼 …… (742)
叉草球 …… (743)

门巴族 …… (745)
门巴服饰 …… (746)
酒醉歌迷 …… (747)
婚礼 …… (748)
骂郎家 …… (750)
石楼和木楼 …… (751)
门巴木桥 …… (752)
本教巫师 …… (753)

珞巴族 …… (755)
炫耀力与勇的装束 …… (756)
米酒鼠宴 …… (758)
长屋和小栋房 …… (759)
藤网桥 …… (760)
葬仪 …… (762)
物候历 …… (763)

万物有灵观 …… (764)

基诺族 …… (767)

上新房 …… (768)

巴漂与巴宝 …… (769)

泼污水 …… (770)

舅舅赠送新娘的竹凳 … (771)

拟人式葬俗 …… (772)

成年礼 …… (773)

村社神器大鼓 …… (774)

多元连名制 …… (775)

●蒙古族

蒙古族人口为4,806,849人(1990年统计),主要聚居在内蒙古自治区和新疆、青海、甘肃、黑龙江、吉林、辽宁等省、自治区。

“蒙古”一名最早见于唐代，译为“蒙兀室韦”。蒙古族有自己的语言文字。蒙古语属阿尔泰语系蒙古语族，分为内蒙古、卫拉特、巴尔虎-布里亚特3种方言；文字是13世纪初用回鹘字母创制的，后经本民族语言学家多次改革，现已规范化。

蒙古族原信仰萨满教，自元朝始信仰藏传佛教。

蒙古袍

蒙古族为了便于骑马、放牧以及抗严寒酷暑，有穿袍子的习惯。清代的蒙古袍，均改为满族便服式长袍。其特点是领子高，右侧开襟，身量肥大，袖子长，下端左右一般不开衩（东蒙科尔沁、喀喇沁一带开衩）。布里亚特蒙古人，女袍束腰，已婚妇女袍子的肩上有皱；鄂尔多斯、阿拉善的已婚妇女，袍外穿长坎肩；科尔沁妇女喜穿短坎肩。蒙古袍子的沿边、袖口、领口、胸襟均绣有花彩边；纽扣也很讲究，有的甚至是用银、象牙等加工成的。有些地区未婚女子扎腰带，一出嫁便成为“布斯贵浑”，意为不扎腰带的人。现代，除老年妇女外，都有束腰的习惯。

蒙古袍的用料，夏袍（亦称单袍）多用细布、绸缎之类；冬袍（亦称棉袍或皮袍）多用粗布、毛料。冬季穿的皮袍，有吊面的也有白茬的。蒙古袍的颜色，男子多喜欢棕色、深蓝色；女子多喜欢桔红、浅绿或粉红、浅蓝。老年人多喜欢青、灰两色。

近几十年来，蒙古袍款式也有革新、变化，特别是女青年穿的夏袍，有的近似连衣裙，有的像旗袍。

马奶酒

马奶酒系蒙古族最享盛名的特产之一。马奶酒在古代就很盛行。蒙古族人最初在远行狩猎时，为了防饥渴，把马奶装在皮囊（或牛的膀胱）里带在身旁。由于整天飞马颠簸，结果奶质分离，渣滓下沉，醇净的乳清浮在上边，成了有催眠作用的马奶酒。由此人们逐渐学会了酿制马奶酒，其制作方法是：把马奶倒入一个大皮囊里，然后用一根特制的木棒搅拌。棒的下端像人头般粗大，

是挖空了的。快速搅拌时，马奶开始发出气泡，像新酿的葡萄酒一样发酵变酸。这样一直搅拌到能提取出奶油时为止。马奶酒色白味佳，元代诗人许有壬形容它“味似融甘露，香疑酿醴泉”。

马奶还可以酿造较烈性奶酒。做法是，把新鲜生奶倒在木桶或缸里，用木棍搅动；待奶发酵到乳清、脂肪分离后，除去脂肪，把剩余奶浆倒入铁锅中；锅上罩一个形如蒸笼的木桶，把它封闭好，并从木桶中引出一管导入一瓦罐中，瓦罐置于冷水中。锅下用猛火烧，蒸汽在瓦罐中凝成液体即为奶酒。这种酒无色透明，度数不高；如果加入一些酸奶子再酿出来的酒称“阿尔占”，即回锅酒；三酿的称“浩尔吉”；四酿称“德善舒尔”；五酿称“沾普舒尔”；六酿称“熏舒尔”。六酿为上品烈性奶酒，清朝时把它列为“御用品”。

近些年来，随着科学的发展，人们已发现鲜马奶制成酸马奶后，对许多慢性病都有疗效，如对慢性支气管炎、胃肠道溃疡、粘膜炎、胃液减少症、习惯性便秘、重病后二次贫血、赤痢等，尤其对肺结核的疗效更高些。经测定，马奶中维生素 C 的含量比牛奶高 9 倍，是可贵的防癌、抗癌剂。

内蒙古许多地方生产马奶，酿造马奶酒。锡林郭勒有的地方每年农历八月还要过马奶节。

成吉思汗火锅

成吉思汗火锅，即蒙古族烤烧火锅，也称铁板烧，是蒙古族传统烤烧食品——火锅烧肉。在一个古香古色、雕龙镂凤的炭火盆上，架着一个像古代士兵头盔似的铁锅。锅里放上适量的油，食者将薄薄的肉片贴在锅上烤。当肉烤得焦黄酥嫩，溢散出香味时，用筷子夹起肉片，放到盛着香油、糖、醋、芝麻、盐、胡椒面、味

精等十多种调料的小碗中浸蘸后享用。这种火锅肉香、酥、脆、嫩、甜、麻、酸、辣，清新爽口，不肥不腻，堪称烹调之佳品，佐酒之美味。

火锅炙肉片所以冠以成吉思汗之名，因为它源于成吉思汗时代。相传，成吉思汗在一次围猎宿营时，看见士兵架在篝火上的肉被火熏得焦黑，外糊内生，很不好吃。他灵机一动随手取一士兵头盔，放在篝火上，拔出腰刀，把猎来的黄羊肉切成薄片，贴在“锅”上，烤成外焦内嫩的肉片再吃。“铁板烧”从此诞生了。成吉思汗西征时，这种食品传到欧洲，后又转传到东南亚和日本，以至风靡世界。这种火锅炙肉，在转传中又有发展，炭火锅发展成电火炉、酒精火炉等，并且当饮完酒后，人们又在炙肉片的锅内添上鸡汤，加上海味（或者加上豆腐），使它又成了佐饭的汤菜。

烤全羊

烤全羊，蒙古语叫“昭木”或“好尼西日那”，是蒙古族独具风味的食品，也是款待尊敬的客人最隆重、最具有礼节性的宴筵。

烤全羊要选用上等绵羊，宰杀后用热水燙毛。取出内脏，清洗干净后，羊的身上涂上料酒和香油送进专门的烤炉去炙烤。烤炉多用炭火，火文而不烈。羊烤到金黄油亮，外焦内嫩时，即可出炉。

客人入席后，首先食用配菜，饮酒。在酒兴最浓时，两名烤羊厨师用食盘抬上炙烤得哧哧响的全羊。在客人赞赏声中，厨师把羊再抬回厨房，将肉切成片盛盘，然后把贴骨肉切好端上。

招待尊贵的客人，除用烤全羊外，也有的请客人吃全羊席。全羊席是蒙古族的传统宴席。据记载，成吉思汗 39 岁时，曾设整羊宴席。到元朝和清康熙、乾隆之后，全羊席已相当丰盛。它以一

只全羊烹制出70多种菜肴。如以羊百叶制“素菊花”，以羊蹄筋、骨髓合烧的“蜜汁随筋”，以不同部位羊肉做成的“清炖百合”、“五香兰肘”、“酥烧枇杷”、“樱桃红腐”等等。全羊席不仅菜名高雅，而且烹调技艺精湛。它兼容各大菜系的烹饪特点，形成了自己的烹调风格，具有独特的民族风味。

蒙古八珍

内蒙古不仅是全国五大牧区之首，而且是野生动物的天然宝库。据不完全统计，仅鸟类就有346种。野生禽兽中不仅有驼鹿、马鹿、黄羊、黑熊、獐子、野兔、雉鸡、大雁，还有珍贵的飞龙(榛鸡)、天鹅等。因此，也就产生了平原地区少有的珍馐名肴。其中“蒙古八珍”尤为古今中外美食家所津津乐道。元代著名诗人白珽在宴席上品尝了蒙古八珍，赋诗赞道：

八珍肴龙凤，
此出龙凤外，
荔枝配江蚍，
徒夸有风味。

诗人所称“八珍”，即“醍醐”、“麋沆”、“野驼蹄”、“鹿唇”、“驼乳”、“麋羔”、“天鹅炙”、“元玉浆”等。

醍醐是在提炼牛乳时浮在最上面的油。《本草纲目》说：“酪为油者是醍醐，不可多得极甘美”。麋就是獐，獐也是鹿科的一种。獐肉一向被视为猎区珍品，其幼羔当然更为名贵。野驼蹄，食用的多是普通的蒙古骆驼，其蹄与熊掌齐名。鹿唇，通常食用的犴唇，犴也称驼鹿，是鹿的一种。驼乳，不仅是饮用珍品，也是药用珍品。麋即麋鹿。天鹅炙即烤天鹅。元玉浆即马奶酒。

蒙古八珍是牧猎区的名贵食品，有些现今虽已少见了，然而

随着鹿等动物的人工饲养，鹿科等食品正在增多。况且珍品也不限此八珍，比如“飞龙宴”即是北方极享盛名的珍肴。

白　食

奶食，蒙古人称为“查干伊德”，意为“白食”，指奶和奶制品。它与肉食——红食相对，是蒙古族的主要食品。

奶茶，为牧区人们生活中所不可缺少。蒙古人喝奶茶的历史至少可追溯到宋辽茶叶开始由南方传北方的年代。奶茶用砖茶和奶煮成。奶茶煮好后，除去残茶，装入壶中饮用。喜欢咸的可加适量盐，喜欢甜的可加些糖。既可单独饮用，也可在喝茶时吃些炒米、奶皮子、手扒肉等。

奶酪，也叫酸奶子，是夏季的美食。鲜奶食用不了，就盛在盆罐中，暑夏时经过一宿半天，乳就发酵了，出现了分离现象。这种沉淀后的凝状物就叫奶酪。它酸甜可口，清凉消暑。

奶干，民间称奶豆腐。就是奶发酵后，取出表层油脂（蒙古人称为“乌日沫”），把沉淀的糊状酸奶子装入粗布袋里，经过挤压除去水后，通过模具制成各种形状的奶饼，晾干即成。也有的直接用鲜奶熬制，待煨熬到粘米糕状时取出直接食用。食用时佐以白糖、黄油，香甜粘韧，别有一种风味。

奶皮子，是草原上的上等奶品。在夏秋季里，把牛奶放到锅里用微火煨。牛奶沸后，一面用勺子扬，一面用生奶点，直到牛奶上面凝成一层奶皮后，经冷却取下即成。

奶油，也称黄油。它是夏秋两季把浮在奶子上的脂肪、蛋白（即“乌日沫”）取出来，经过滤后在锅中炼制而成。奶油色微黄，含有各种营养物质，是一等补品，也是招待客人的佐食佳品。

手扒肉

辽阔的草原，长期的游牧生活，使蒙古人形成一种粗犷的性格，在饮食上的典型反映即是手扒羊肉。

手扒肉最通常的做法，是把羊肉切成若干块，放在白水中煮（或稍放一点盐），水开后就可以取出食用。精明的厨师都知道，水一开就起锅肉最鲜嫩；两开起锅，肉就硬了；三开再起锅，肉就烂了。吃时不用筷子，而用蒙古刀割、刮、挖、剔。

招待尊贵的客人，更讲究的是吃“羊背子”，蒙古人称为“乌查”。其做法是把全羊由第七根肋骨至尾部割为一段，四肢、筋、胛各为一件，带尾入锅。煮熟后，用大盘端上，客人用餐刀在羊背上画一十字形，厨师迅速把肉解开，就可食用了。

手扒肉，无论在牧区或农区，都是招待贵客的佳肴，一年四季都可以吃到。不过羊剪掉春毛后，进入伏天，羊毛正长得疏密适度，且羊膘也最好，所以伏天是杀羊吃手扒肉的最好季节。

蒙古包

蒙古包的历史悠久。远在汉代前后的匈奴时期，就已经有了“毳幕”、“毡帐”的名称。到13世纪，不仅有了牧民住的小帐幕，还有可汗住的金帐，以及架在车上用20匹马前后两排拉的大帐幕。把毡帐叫做蒙古包，大约是在我国满族和蒙古族交往频繁以后。满语把家叫“博”，所以满族人把蒙古人的家（房）叫“蒙古博”，用汉字表达时，取其音和形，谐音叫做“蒙古包”。蒙古人自己叫做“格尔”。

蒙古包的骨架分两部分，一部分是用2米多长的粗柳条交叉

编织成菱形网眼的侧壁。这种侧壁叫“哈那”，每片大约1.7米高、2.3米长。小包只用4片哈那，叫“四合包”。大包有的用12片哈那。连接处用皮绳勒紧，围成圆形。包的顶端多用直径3厘米的细木棍，编成扇形包顶。包顶和侧壁用皮条和鬃绳系紧。蒙古包骨架的外部覆以毛毡。冬季天冷时，要覆2至3层，夏季一般只用一层薄毡。包顶有天窗，用以通风、排烟、采光。包门向南或东南开。

包内正面右侧为家中主要成员宿处，左侧为次要成员宿处。从前，信奉佛教的人，在蒙古包的西侧（或者住房的西间）设置佛龛，供奉佛像。蒙古包中央设有供饮炊和取暖的火炉（古时无火炉，一般都是在帐幕中央火塘生火，烟从天窗出去）。包内地上铺羊毛毡。包门口和火炉旁铺畜皮或兽皮。现代的蒙古包，骨架有的用钢架，卧榻有的铺设矮床。

一个蒙古包一般只供一夫一妻及其子女居住。新婚夫妇要建新包，有的由新娘的父母陪送。家庭经济条件好的或眷属多的，一家有几个蒙古包。旧时，妻妾多的，每个妻妾都独有一个蒙古包。凡是两个以上蒙古包的家庭，按照蒙古族以西为尊的风俗，都是长者居最西侧的蒙古包。

在民间，蒙古包外多用树条木桩或勒勒车围成篱笆，形成庭院。仓房有的用旧蒙古包，有的用带篷的勒勒车。

勒勒车

勒勒车系蒙古族草原牧民的主要运输工具，又叫大轱辘车。这种车，轮子特别大，一般都在1至1.5米左右。多选用桦木、柞木、榆木和柳木制成。其制作方法是，先将选好的木条加温烘烤成弯形，两三根弯木连接在一起围成外轮。车轴和外轮间穿上15

至 20 根车辐，便成了大轱辘。两个车轮穿上轴，加上车辕就成了勒勒车。

勒勒车由于轮子大，无论草高、雪深或道路泥泞，它都能适应，所以从古代一直沿用至今。在内蒙古的东部地区，特别是呼伦贝尔、哲里木、锡林郭勒一带，每个牧民家都有两三辆，七八辆，甚至几十辆。一牛驾一车，牛的缰绳通常拴在鼻锯子上，每辆车的牛缰绳往前车上一拴，一个妇女或儿童都可以赶七八辆以至十几辆。平日用它搬运木料、树疙瘩、牛粪，迁草场时用它搬运蒙古包。有的富裕牧民为了显示富庶，在嫁女时，一车装一包裹，要用十几辆、几十辆勒勒车去送嫁妆。由于每个牧民都有很多勒勒车，所以平日不用车时，常将车围在蒙古包四周，用作栅栏。

内画鼻烟壶

到蒙古族家庭作客时，殷勤好客的主人常常拿出一个非常精致的小扁瓶交给客人，客人从瓶中倒出一点鼻烟粉末，用手指捻搓后，用鼻吸入。这瓶就是鼻烟壶，蒙古语叫“呼呼尔”。

鼻烟是明万历十年（1582 年）由意大利传教士利玛窦带进中国，后传入蒙古各地，清康熙、乾隆年间到了盛期。

鼻烟壶专用来装鼻烟，3 厘米多高，形状有佛手形、茄形、莲蓬形、梨形等。用料有玉、象牙、琥珀、翡翠、陶瓷等。

鼻烟壶不仅用料精美名贵，而且它那径寸之内刻有千姿百态的内画，成为世界古董商不惜重金争购的艺术珍品。鼻烟壶成为人们珍爱的工艺品，大约始于清道光年间。相传，北京有个能写会画的文人胡金禄，家境贫困，又嗜好鼻烟，有时瘾犯无烟，无奈用细棍挠取烟壶内壁上残存的烟粉。他偶然发现无意中挠划的

烟壶，外观很是好看，于是受到启发，试刻些兰竹梅菊等内画出售。于是内画壶受到人们的喜爱，成了争相抢购的畅销品。从此内画鼻烟壶成为工艺品。后来内画越来越精细，题材越来越广泛。如《刘海戏金蟾》、《盗御马》等各具神态、栩栩如生的内画，受到国内外专家好评。内画专家王习三所绘《清代帝后像》、《美国历代总统》，在香港和美国展出时引起轰动，他们称中国为“烟壶之乡”。

求名问属宴与沙恩吐宴

蒙古族婚礼至今仍保留着男方提前一天到女方娶亲的习俗。娶亲队伍出发时，新郎要穿上彩色喜服，腰带上左边挎哈特刀，右边系着漂亮的荷包，旧时还要身佩弓箭，以显出新郎的威武，还含祛邪之意。随新郎一起去迎亲的除媒人、主婚人外，还有祝词歌手和伴郎。到了女家，要参加两道宴席。头道宴是“求名问属宴”。席间喝过三杯后，男方祝词歌手就起身唱道：

把新酿的奶酒斟满金盅，
把银白的哈达举过头顶，
请席上的嫂子告诉我们，
姑娘的属相和姓名。

于是，求名问属宴上喜剧式的对歌就展开了。对歌的一方是男方的祝词歌手，另一方是女方“嫂子”（新娘的同辈歌手）。

祝词歌手：求名宴上要问名。
　　什么属相请说清。
嫂子：真嫂子呀还没来，
　　假嫂子呀还没到，
　　我连时辰也说不清，

还要请你去寻找。

祝词歌手：我骑着葫芦哟，
飞到科尔伦岛，
呼伦贝尔草原啊，
有人驾云往回飘；
我把这云朵哟，
一直追到这个屋；
云上坐的人哟，
正是席上的两位亲嫂，
把姑娘的名字和属相，
告诉吧好不好？

嫂子故意不说出姑娘的属相和名字。歌手又穷追不舍，于是展开激烈的歌战。这中间通常要唱《骆驼的属相》、《黄羊的习性》、《礼物问答》、《哈特刀的来历》等，直唱到尽兴，嫂子才告诉姑娘的属相名字，求名问属宴也才算结束。

第二道宴在晚间举行，是新娘出嫁和离别宴，蒙语称“沙恩吐宴”。席间既有对歌又有同辈的嬉闹。宴席开始，歌手唱道：

玲珑的“小沙恩”，
连着骨头连着筋，
只要“沙恩”在，
大腿小腿不能分。

珍贵的“小沙恩”，
连着血肉连着心，
“沙恩”要比人啊，
连着男女两家亲。

歌毕，这枚联结“男女两家亲”的吉物——“沙恩”（俗称

“羊嗄拉哈”）就被新郎和新娘姐妹争夺起来。但在女方主持人的偏袒下，“沙恩”为女方夺得。为夺回“沙恩”，男方祝词歌手就要亮开歌喉唱起《赞“沙恩”》、《亲家歌》、《姑娘的歌》、《“额莫”的歌》等，一直唱到《报时歌》，因为启程出发的时刻到了，女方姐妹才无可奈何地把“沙恩”交给新郎，新娘也才可以登程出发。途中，还有一项十分有趣的“抢帽子”活动，即女方亲友要千方百计地把新郎的帽子抢来扔到地上，迫使他下马去拣，以影响迎亲的行速。男方则要互相掩护，不让女方抢去帽子。于是一路上骏马奔驰，互相追逐，你呼我应，嬉闹逗趣，具有浓厚的草原婚礼气氛。娶亲回到家，还要唱《拜火歌》、《拜亲歌》;《祝愿歌》等等，直到深夜把新人送进洞房。

蒙古“博”

蒙古“博”，是蒙古民族最早信奉的萨满教。“萨满”一语，源于满—通古斯语族语言，意为“因兴奋而狂舞的人”。北方民族均称其为萨满，唯蒙古人称之为“博”或“孛额”。

蒙古“博”，产生于母系氏族社会，蒙古汗国时代进入鼎盛时期，被尊崇为“国教”。经过元、明两朝，藏传佛教崛起，蒙古“博”渐衰；到了清代，藏传佛教进入盛期，蒙古“博”也就消亡了。唯独东蒙科尔沁、郭尔罗斯等地，因地处东北，在满族萨满教的影响下得以幸存。

行“博”的仪式一般在夏末秋初进行。行“博”的巫师也叫萨满。萨满是否神通广大，要看其过“九险”的功夫，所谓“九险”即九口铡刀、九张烧红的犁铧、九把锥子、九把火、九根针、九杆扎枪、九个烙铁等等。过“九险”一般都在搭起的高台上进行。高台丈许，四边有九阶木梯，每阶均绑上一柄铡刀，刃朝上。

台中置一斗，斗中盛满五谷，五谷上插着黄花幡旗。萨满一手握鼓，一手握锥，光脚踩刃上台。然后大法师按蒙古“博”的规矩，一一考问八方“腾格里”（天神），答对者才获得行“博”的资格。

在举行“博”之仪式前，萨满要头戴法冠，身着法裙，手执法器，身挂九面铜镜。科尔沁地方行“博”治病时萨满还要用神鞭、宝剑、腰刀等法器。其仪式大体有请神、降神、送神三个程序，所有行“博”过程几乎是舞蹈与音乐的结合，唱词十分严谨、生动。科尔沁“博”认为：“舞动是神灵的作用。法裙、神镜、神铃是坐骑（也有说是翅膀的），手拿的是神鞭，所以能奔驰飞翔（旋转、跳跃）。以这种特殊的步伐能步入天堂与神灵交往，再回到地面上向人们传谕。”如今，蒙古“博”虽已少见，但东蒙各盟已经成了东、西方宗教研究者们争相瞩目的地方。

那达慕大会

那达慕大会是蒙古族古老的传统盛会。那达慕是蒙语，意为娱乐、游艺。据刻在石崖上的《成吉思汗石文》记载，远在1225年成吉思汗即举行过盛大的那达慕大会。此后，多少个世纪以来，在蒙古草原上，每逢庆祝战功、祭旗点将、军民欢聚，以及盟旗聚会、敖包祭奠、官员升迁、活佛坐床等都要举办那达慕大会。

那达慕大会的主要内容是“练三艺”，即摔跤、射箭和赛马。因此，那达慕大会实际成了群英聚会、争夺勇士称号的大会，每次那达慕（尤其是盟旗那达慕）夺出的“头布盔”第一名者，其美名会立刻传遍草原，他不仅可得到金鞍宝马，或者银鼻梁骆驼，或者九九重赏，还会得到人们的尊崇和姑娘的爱情。

赛马，在草原上是有久远历史的活动。蒙古族被称为马背上的民族，马就是牧人的腿，牧人们从幼童起，就在放牧时以跃马

飞驰为嬉。在好手如林的那达慕大会上，骑手们往往显示出高超的骑艺、惊险的动作及坚韧不拔的毅力，争夺十分激烈。而射箭中的骑射，在有限赛程内，一弓三箭，箭箭中环，更是精彩。

摔跤，也是那达慕大会的重要内容。蒙古人称摔跤手为“布赫沁”，他们身穿的摔跤服，蒙古语叫“卓铎格”，是革制绣花厚坎肩。有的还在卓铎格的边沿嵌上一排闪闪发光的铜帽钉。穿上这种摔跤服，像穿盔甲一样威武。摔跤时，无论怎样激烈，任凭撕、揪、抓、拉、勾、绊，都不会伤人或扯碎衣服。比赛开始，几名有威望的长者带领摔跤健儿举行入场式。此时，场上开始唱起浑厚、雄壮的摔跤歌，为即将出战的布赫沁壮怀：

布赫——贴力呗！
布赫——贴力呗！
从七勃里挥舞而来，
震得山摇地动，
从八勃里挥舞而来，
踏得山川颤抖；
从前面猛一看去，
犹如一只斑虎；
从后面乍一看去，
好似一只雄狮；
他有猛虎般的力气，
他有雄狮般的身躯。
这摔跤手啊，实在令人惊奇！

这时，布赫沁模仿雄鹰的动作，跳着鹰舞，跃入场内。两个布赫沁像放出来角斗的公牛一样，慢慢地相互接近，俯身前视，斜睨着眼，十分警惕地寻觅着战机。经过一番智慧、力气和技艺的较量，胜者照例要受到勒莫日沁（祝辞家）的祝赞。过去，参加

摔跤者多为青壮年男子，现在由于妇女社会地位的提高，女摔跤手不仅出现了，而且不乏佼佼者。

那达慕大会除“练三艺”外，还有物资交流及演出文艺节目等活动。白天，会场临时搭起的彩棚点，出售各种绸缎、布匹、砖茶、日用百货及土特产。晚间，青年们围着熊熊的篝火，伴随着马头琴的节拍，通宵达旦地歌舞。

敖包会

敖包会是蒙古草原盛大的民间传统祭祀活动。

敖包亦称“鄂博”，蒙古语堆子的意思。旧时多是人们在萨满或喇嘛选择的地方，用石头堆起一个或几个圆坛，作为公众祭祀的崇拜物。

祭敖包，在蒙古族相当普遍。旗有旗敖包，屯有屯敖包，甚至较大家庭在祭祀时也垒起敖包。有的地方敖包也不只一座。关于祭敖包，有三种传说。一是来自古代的萨满教，是古代北方民族的祭祖山活动。相传北方民族南迁时，总是在新的地方确定新的祖山（如鲜卑山、乌桓山）进行祭祀。到了平原、草原地区仍要垒石为山进行祭祀。时间久远了，把它发展成祭山神、祭水神、祭路神、祭英雄的祭祀活动。二是据说有一次成吉思汗被蔑儿乞惕人追赶，隐于孛儿罕山中，三百蔑儿乞惕人绕三匝没有发现，遂离去，成吉思汗幸而脱险。他对山九拜说，孛儿罕山保我性命，我将每年祭之。此后，成吉思汗即使远离孛儿罕山征战，每当召集文武大臣聚会时，也都要拣石垒一敖包，以祭孛儿罕山。元代，忽必烈制典规定皇帝及诸王，每年必须致祭名山大川。三是据说古时有一牧童给主人放羊，一时睡熟，狼群袭来，一些羊被狼咬死。牧童醒来知道主人不会饶过自己，便自杀。因他死后常阴助牧人，

牧人们便把他当作草原保护神加以祭祀。

祭敖包仪式，一般每年阴历五六月或春、秋举行一次。祭前要把敖包修饰一番。敖包顶上插丛枝，立经幡，杆顶要安“嘎如迪”（凤凰）为冠首，悬以印有经文的丝制经幡，并在几道下垂的绳弦上系以三角形小彩旗。

祭敖包初期往往要杀牲祭祀，藏传佛教兴起后，才将血祭改为果品祭，由活佛或大喇嘛率领众喇嘛绕敖包诵经，众人随行，边走边祈祷，有的还要掰些奶酪往敖包圆坛上投放。祭祀场用大锅煮肉粥，参加祭祀的人都可以吃，途经的赶上了也可以吃。祭祀结束后，要进行赛马、射箭、摔跤比赛的那达慕活动。

端午猎日

每年阴历五月初五，蒙古族有一个特殊风俗，即“打大围”。由于时值端午节，所以称作“端午猎日”、“猎节”。

打大围是一种许多村屯联合举行的群众性狩猎活动，一年进行二三次或五次不等，日期从庄稼上场后，或三六九、或二五八，或互相约定，但端午猎日是恒定不变的。端午猎日的由来有不少传说。其中一则说，很早以前，一年阴历五月初五蒙古部落遭到异族的偷袭，恰好全部落成员都外出打大围，从而幸免了一场劫难。从此以后，每到五月初五，都要打大围，一来叫人们记住这一历史事件，二来也是一种军事训练。另一种传说则说，成吉思汗在五月初五这一天因围猎时坐骑受惊致残而殁，后人把五月初五定为猎日，以示尽杀群兽，悼念圣主之意。这个传统猎日，一直沿袭至今。

打大围开始前几天，大体约定了围猎的路线、范围。推举的“阿宾达”，即打大围的总指挥，须是一位既善于打猎，又德高望

重、办事公道的人。打大围的方式一般有两种：一种为“哈拉嘎阿卜”，即门猎。主要是在山区，猎人把猎物从山口往一个山沟里围，然后捕猎。另一种是“呼热恩阿卜”，即围猎。这是在平原地区，许多村屯猎手，从四面八方往中间围捕。打大围这天天刚放亮，猎人们便骑着最好的猎马，背着枪（或弓箭），挎着刀，别着匕鲁（俗称“涛力棒”，是抛打野兽用的拐形小棒），带着成群的猎狗（有的猎狗还戴着嵌有铁钉、红缨的脖掐，以保护咽喉），农业区还赶着大车，从不同的地点进入围场围猎。到了中午，猎人们三五相聚，点起篝火，就地野餐。餐后继续围猎。下午，临近中心区，围猎进入高潮。这时，被围的野兽东窜西逃，猎手们便使出浑身解数射杀。直至天晚，猎手们才带着猎物返回各自的村屯。

赛骆驼

骆驼是蒙古族喜爱的珍贵动物。仅阿拉善境内就有18万峰双峰骆驼，约占全国骆驼总数的三分之一。骆驼性格温顺、敦厚、吃苦耐劳。草原上有这样一个传说：天帝选十二个动物到天庭轮流值年，规定了出发的时间，并按照到达天庭的先后顺序确定“十二属相”。出发这天，好心的骆驼怕大家睡过了头，挨门逐户去呼唤上路，结果它自己却落到十二名之后。天帝感念它的忠诚，就把十二属相的特征全部集于它的身上。所以骆驼就有了“龙的额头虎的身，鸡的脖子马的臀，鼠耳牛蹄蛇的眼，鸡胸兔唇猪的音”。

骆驼从表面上看似乎很迟钝，可跑起路来却疾驰如飞。于是大漠地区的人们把赛骆驼列为“那达慕”的一个体育项目。赛程通常为10至20公里，以跑圈赛快为主。参加比赛的骆驼，通常

通过挑选，以身躯高大，匀称，四肢修长者为佳，然后经过严格驯养，方能上阵角逐。比赛时，每峰骆驼头上都饰以彩绸红花，项上挂上驼铃。骑手着民族服装。一声令下，几十峰骆驼争先恐后，奋力向前跑去。场上歌声、喊声、欢呼声响成一片。老人们展开洁白的哈达，捧着斟满奶酒的银碗为获胜者敬酒。这种比赛别有情趣，在第二、三届全国少数民族传统体育运动会上，蒙古族牧民的赛骆驼表演，受到了国内外观众的热烈欢迎。

马头琴

马头琴，蒙语称“绰尔”，是蒙古族古老的拉弦乐器。演奏技巧很复杂，讲究弓法和指法，流派也比较多。由于演奏风格的不一，其声音既可以有粗犷豪放、浩瀚深邃之感，又可收到圆润婉丽、如歌如诉的效果。现代的马头琴演奏家以色拉西、桑都仍、齐·宝力高等为代表。

谈起马头琴，有这样一个优美的传说：很久很久以前，在蒙古草原上，有个年轻牧民叫苏和，他唯一的伙伴是一匹枣红马。有一年，旗里开“敖包会”，王爷要亲自挑选一名出色的骑手，把公主许配给他。在这天的赛马中，苏和的枣红马一路领先，第一个跑到了终点。但王爷听说苏和是个穷奴隶，不仅食言拒嫁公主，还

要强占他的枣红马。他派人把苏和抓进王府，对他说："我给你十两银子，把你的枣红马给我留下。"苏和说："请王爷恕罪，你给我金山银山，也换不去枣红马。"王爷大怒，令府丁把苏和毒打一顿，并把马占为己有。苏和回到家里，遂大病不起。一天，他正在呻吟中，朦朦胧胧地见到枣红马身中10根利箭跑回家来。苏和抱着马的脖子，边哭边拔掉利箭，血从箭口流出来，马死了。苏和怀念着枣红马，饭不吃，夜不眠。一天夜里，他梦见了枣红马对他说："主人，你不必为我悲怆，用我的尸骨做张琴吧！你唱歌，我永远为你伴奏。"苏和醒来，就用马的头骨做琴头，身躯做琴箱，马尾做琴弓和弦，制成了一张琴。从此以后，草原上就有了马头琴。

马头琴的音箱，木制，呈梯形，两面蒙饰有图案的马皮或羊皮（也有的蒙蟒皮，还有板面）。琴身用硬木制作，琴弦由两股雄性马尾制成。民间演奏的方法（亦称"朝尔"演奏法）是左指按弦；专业演奏的方法是顶弦演奏。马头琴善于表现柔和深情的乐曲，特别适合演奏悠长辽阔的旋律。在伴奏民歌时，多用三度、四度的颤音来模仿演唱的特点。

近年来，改革后的马头琴，选用类似大提琴的弓子，用尼龙丝弦代替马尾弦，并将定弦提高四度，既保留了原来柔和、深厚的音色，又增强了音量及音色的亮度。

蒙古象棋

蒙古象棋，蒙语称作"沙特拉"。这种象棋和国际象棋相似，但又有自己的特点。棋盘黑白相间，纵横八格。黑白双方（也有的为红黄二色）各有棋子16枚。棋子是用软木雕刻成的各种模型。这16枚棋子，甲方为：官长1，狮1，驼2，马2，车1，宝盆1，

猎狗 8；乙方为：官长 1，虎 1，驼 2，马 2，车 1，宝盆 1，猎狗 8（猎狗，也有甲方为小狮，乙方为小虎）。棋子布局：猎狗列前八格；后八格，官长与狮（虎）居中，驼、马、车、宝盆左右分置。狮、虎可走八面，驼需走斜线，猎狗只能向前走一步，走到对方底格，前后左右斜才都可以走。把对方官长困死者为胜方。

相传此棋源于古印度的“四人棋戏”（音译为“却图郎卡”），7 世纪传入阿拉伯，改名为“沙特拉兹”。15、16 世纪左右，传入欧洲，形成了现在的国际象棋。成吉思汗于 13 世纪西征时，把它从古波斯带回蒙古。后经蒙古族人结合草原特点逐步变革，才形成今天弈法多变的蒙古象棋。

●回　族

回族人口 8,602,978 人（1990 年统计），是我国人口较多、分布广泛的一个少数民族。大分散、小集中，多与汉族和其他兄弟民族杂居。以宁夏、甘肃、河南、新疆、河北、青海、山东、云南、辽宁、北京、安徽等省、自治区、直辖市分布较多。

回族自称“回回”，是唐、宋以来，主要是 13 世纪以来迁入的中亚各族人和波斯人、阿拉伯人，包括七世纪以来侨居东南沿海某些商埠的阿拉伯和波斯商人后裔，在长期发展中吸收汉、蒙古、维吾尔等族成份逐渐形成的。

回族通用汉语。在文化上曾受阿拉伯、波斯等西亚传统文化的影响。回族普遍信仰伊斯兰教。

妇女盖头

西北地区的回族妇女头上多戴着“盖头”。这是我国回、东乡、保安、撒拉等信奉伊斯兰教民族妇女的一种特有头饰。

盖头亦称“面纱”，是穆斯林妇女遮面护发的头巾，从头部直垂肩部。戴盖头的习俗源于伊斯兰教把妇女的头发列为“羞体”。《古兰经》规定：“你当告诉众穆民女子，俯首下视，遮其羞体”，“当令她们把头巾垂在衣领上，不要露出装饰。”而宗教教义又源于现实生活，伊斯兰教发源地阿拉伯半岛的风沙很大，水源稀少。人们平时难以及时沐浴，妇女们戴上头巾，既能防风沙，又可以保持面部清洁。我国的穆斯林妇女虽然已弃用面罩，但仍以头巾护发。一般把头发、耳朵、脖子都遮掩起来。

盖头的颜色因年龄和地区的不同而有所区别。在西北地区，年老者尚白色，中年妇女尚青色，少女尚绿色。妇女戴盖头多选纱布、绸、缎、的确良等料制成。在样式上，老年人的盖头较长，披到背心处；少女和少妇的较短，只披到肩上。少女的盖头，还喜欢嵌金边，绣有风格素雅的花草图案。

过去有的地区穆斯林青年女子出门，除戴盖头外，还戴有面纱；在家里不戴盖头和面纱，但来了陌生男子要回避。目前戴盖头的习俗在青年女子中也有变化，许多回族少女以绿色尼龙纱巾代替，一些城镇的中年妇女则以黑头巾代替盖头。

盖碗茶

回族喜爱喝茶，茶的名堂很多。有红糖砖茶、白糖清茶、冰

糖窝窝茶等，但不论饮何种茶，都讲究盛在“盖碗”里喝，这已经成为民族的习惯。

盖碗俗称“盖碗盅”，亦叫“盖碗子”、“盅子”，上有盖，下有托盘，中间是盛放茶水的主体——杯，底小口大，小巧玲珑，细瓷刻花，十分可爱。喝茶时用托盘托起茶碗，免得烫手；冲上茶水后，茶叶尚未泡开时，可以拿起盖子，顺着水面轻轻刮一刮；盖上盖子，则可以保持茶水的香气。

普通的盖碗茶是以茶叶、冰糖和桂圆沏成的，称为“三香茶”，茶香果味醇，别有一番风味。喜庆日子或嘉宾光临，则以“八宝茶”相敬，八宝一般指茶叶、冰糖、芝麻、红枣、桂圆、花生、柿饼、核桃仁和葡萄干；这茶闻起来香气扑鼻，喝起来味醇可口，难怪回族人说：“金茶银茶甘露茶，抵不住我们回回人家的盖碗茶。”

回族待客喝茶，主人必拿出炸馓子之类小点心，盖碗茶未到，酥馓、盘馓以至油香先摆满一炕桌，请客人在亲热甜蜜的气氛中细细品尝。

河州砖雕

河州砖雕，是甘肃临夏回族自治州的民间传统砖瓦雕刻工艺，在甘肃、青海、宁夏一带久负盛名。

临夏，古时叫河州，河州砖雕以此而得名。它源于北宋，成

熟于明清。特别是清末，能工巧匠辈出，砖雕作品丰富多彩。河州砖雕分“捏活”和“刻活”两种。所谓“捏活”就是先把粘土泥巴，用手和模具捏刻成龙、凤、狮和各种花卉鸟虫等图案，然后入窑焙烧成砖。“刻活”就是在青砖、瓦上用刀刻出各种浮图或画幅，常见的有《泰山日出图》、《碧波荷花图》、《五松图》等，刻工细腻，图案精美。在临夏，到处都可以看到砖雕艺术。在建筑物的各个部位，如山墙影壁、通道洞门等，因物设图，巧施雕镂，琳琅满目，美不胜收。

临夏的红园、东公馆，是河州砖雕艺术保存最多最完整的地方。红园的砖雕多是回族砖雕名家周声普及其族人的杰作。一字亭北侧照壁上的《石榴双喜图》，玲珑别致，惹人喜爱，是优秀的艺术品。东公馆在临夏南关，整个公馆亭台楼阁，曲径回廊，都用砖雕图案装饰，是砖雕艺术的结晶。

回族婚俗

回族男女成年后，男方家长看中了对方女子，就先请本族的长辈或亲友为儿女提亲。一般由男方采取主动。第一次提亲时，要给女方家带去糖、茶等礼物；第二次提亲人登门，要带上若干分别包着糖、细茶、核桃、枣等的礼品包。如果女方亲亲热热地招待提亲人并收下礼物，就表示同意这门亲事；反之则表示回绝。

对方应允亲事后，就要准备财物，选定结婚吉日。回族一般以“主麻日”，即星期五为吉日。结婚那天，男方要用车接新娘。新娘要穿红衣服，洗大净，俗称“离娘水”。同时，还要请“全可人”（即父母双全、子女双全、夫妻和睦的人）送亲。送亲宜早不宜迟。把新娘接到门口时，新郎要围着车转一圈，然后将新娘和送亲人迎进大门。新娘的脚不能沾地，要由哥哥（或是舅舅）抱

着走进新房。两方客人互相问好后，便举行念“尼卡哈”仪式。先由阿訇诵读《古兰经》某些章节的经文，意思主要是结婚是圣行，祝愿双方婚姻幸福美满。然后，阿訇当着证婚人问新郎：“你愿意娶她为妻吗？”新郎立即表态；再问新娘，新娘表示同意后，阿訇即宣布：“从现在起，你们正式结为夫妻。”并告诫两位新人要互敬互爱。接着，阿訇便开始念尼卡哈经，为新婚夫妇祈祷。尼卡哈经是《古兰经》中有关婚姻家庭方面的训条，又叫喜经。念毕喜经，阿訇向新郎、新娘及众人撒核桃、红枣、花生等喜果，以此祝新婚夫妇“早生贵子”。婚礼结束，即开婚宴。

回族的婚宴十分丰盛，且具有民族特色。因地域不同，习惯不一，各地筵席上菜的种类不尽相同，但有一个共同的特点，即一律不招待烟酒。婚宴后，也兴闹新房，青年男女挖空心思想点子，在阵阵欢声笑语中戏弄新郎新娘，直到深夜。

速　葬

回族有句俗话：“天下的土地，埋天下的回回”，意即人死在哪里，就埋在哪里，而且讲究就地速葬。人死后，一般是晨亡午葬，晚亡次晨葬，停尸不超过三天。这也是其他信仰伊斯兰教的民族普遍实行的一种丧葬习俗。

回族称死亡为“无常”，丧葬仪式大体仿效伊斯兰教创始人穆罕默德逝世时的葬法。人死后，先将尸体用白布盖上，然后由同性年长者沐浴净身，擦干后用白布裹尸，经过一番宗教手续后，将尸体放进长方形木匣（伊斯兰教称为“塔布提”或“塔卜”）等待殡礼。

回族出殡简单安静，不用鼓乐吹打，由死者亲友抬尸赴墓地，妇女一般不送葬。墓坑系南北走向，先挖三四米长的直坑，再在

坑壁西侧掏一偏穴以备停尸。尸体抬到墓地后，亲友们在墓坑边把尸体从“塔布提”中抬出，站在墓坑中的人用手捧接，将尸体头北面西置于坑底偏穴，以示向往圣地麦加。然后用土填实直坑，并在地面留长形墓志。埋葬完毕，家属亲友围于坟前，静听阿訇诵念《古兰经》，为亡人祈祷。

死者葬后三天，头七、二七、三七和四十、百日、周年一般要请阿訇诵经，并炸油香、馓子等分送亲友。以后每逢开斋节、古尔邦节，亲人要到坟地悼念亡人。

回族丧葬以“薄葬”为特征，不分贫富贵贱，职位高低，皆用白布裹尸，不允许用任何贵重物品陪葬。凡死者皆用清真寺专制的同一个“塔布提”抬送，埋在同一墓地，占地大小一样。这种传统丧礼习俗，反映出回族崇尚节俭和追求平等的美德。另外，回族中有了“无常”，不论与死者是否认识，凡知情者，都自动帮助丧葬和参加殡葬仪式，而且各自根据亲疏关系和家庭经济情况，资助丧主。对于鳏、寡、孤、独亡人，或家在外地无依无靠者，以及死者家中确有困难者，众人无不乐于资助，以使亡者尽快入土安息。

花儿与花儿会

“花儿”，亦称“少年”，又称“山歌子”，是甘肃、青海和宁夏等省区回族和撒拉、东乡、保安、藏等民族中流行的一种山歌。因对歌时男方称女方为“花儿”，女方称男方为“少年”而得名。

花儿约有 300 年的历史，一说由元曲演变而来，曲调称“令”，有百多种。其旋律高亢豪放，悠扬婉转。歌词即兴而编，语言朴实，比喻运用自如，是当地回族和各族人民在长期共同劳动和共同生活中，培育出来的一朵绚丽多彩的艺术之花。

花儿分独唱、对唱和联唱三种形式，既可抒情，又可叙事，而且长于写景，内容涉及天文地理、历史、家庭生活等方面，但情歌尤多。因流行地区不同，在发展中受各民族文化影响而形成以临夏为代表的“临夏花儿”和以岷县为代表的“洮岷花儿”两大流派，各具特色。除平时演唱外，各地每年都举办“花儿会”进行比赛。

“花儿会”的由来在各民族中都有优美的传说，多与仙女下凡歌唱及劳动与爱情相联系。各地会期不尽一致，有在每年正月十五举行的，也有在二月二、三月三、五月端阳、六月初六、八月中秋、九月重阳等时间举行的，其中以六月初六在甘肃莲花山（临潭、临洮和康乐三县交界处）和青海五峰山（互助土族自治县西）举行的花儿会规模最大。届时，临近各县的各民族歌手、群众不分男女老幼，穿着艳丽的服装，络绎不绝地前去赴会，少者数千多者数万。在莲花山，花儿会分四个赛程进行：即拦路问歌（当地人在半路拉起绳子，由老歌手拦路问歌，来者当场答歌方可通过）、游山对歌、夜歌（夜晚围着篝火对唱）和告别。会上人山人海，从田头到山头，从河边到树林，人们打着伞，摇着彩扇，边走边唱，悠扬动听的花儿此起彼伏，交织成巨大的歌海。会期一般为 4 天，除赛歌外还进行物资交流。临别时，各地歌手用花儿互道祝福，相约明年再见。

宴席曲

生活在甘青交界地区的回、撒拉、土等族群众，在婚嫁等喜庆日子里都有演唱“宴席曲”的传统习俗。

宴席曲是一种民歌，亦称“家曲”、“喜曲”。它不像“花儿”那样多在山里或回避长辈才能唱，而是随处可唱。宴席曲有固定

曲调和歌词，并伴以简单的舞蹈动作助兴，既可抒情又可叙事。歌词大都是歌颂爱情、劳动、自然景物和历史人物，也有赞颂男女穿着衣饰的，一般是五字句和七字句。曲调有二三十种，旋律优美动听，节奏轻松明快。舞时头部依节奏摆动，手足作拳术动作，幽默潇洒，颇具民族特色。回族宴席曲常见的有“莫奈何”、“褐赂马”、“脚户哥打尖”、“十二月花果”等，撒拉族宴席曲流行的约有十数种，其中“阿里巧”、“依秀儿玛秀儿”、“巴西古溜溜”、“韩二哥”、“阿舅日”等较著名。这一类宴席曲有人物，有情节，人物性格鲜明，形象栩栩如生，情节曲折，生动感人。表演形式上由原来男子歌舞发展到男女合唱合舞。

口　弦

口弦，是我国西北回、撒拉等民族的民间乐器，亦叫“口儿”、“口琴”。体积很小，制作方法简单。常见的口弦有两种：一种是竹制的，长10厘米左右，扯线弹拨；一种是铁制的，长5厘米，拨钩弹奏。撒拉族的口弦多用一片紫铜或白银片弯成马蹄铁形状，再在中间嵌上一条极薄细的黄铜片。弹奏时把口弦噙在嘴边作共鸣箱，通过口形、气流变化进行控制，用手指弹拨发出声音，音量微弱，音调起伏很小，但听起来低回缠绵，丝丝入扣，很

能叩动听众的心扉。口弦上往往拴有五彩穗子、珠子等装饰品。

在旧社会，回族和撒拉族妇女受封建礼教的束缚，歌舞弹唱被看作是违教和非礼的行为，而且“家女不见外男，青丝不见青天”，妇女们只能悄悄用口弦倾诉愁怀。那时，回族和撒拉族妇女每逢亲人因徭役支差，放排经商，从军出征，久离故土，而自己孤守家田，愁思万端又无法排遣之时，便常常趁夜深人静，三三两两，不约而同地聚在一起。在炕头上，院落中，绿荫下，互相偎依着尽情吹弹口弦，把她们满腔的忧、愁、怨、恨倾泻无遗。久而久之，口弦便成了人们聊以自慰或借以自娱的好伙伴，流传愈来愈广。

如今，口弦和花儿一样，已成为青年男女倾吐爱情的媒介。

见面道“色兰”

回族特别讲究礼节，见面时必须互道“色俩目”，书面简称“色兰”。色俩目系阿拉伯语，意为平安。这一礼节来源于宗教规定，《古兰经》多次强调见面问候的重要性，说：“见家人祝安，遇外人祝安”，又说：“你们博扬祝安，以表互爱与和平”。

这一礼节的问词是：“俺色俩目尔来坤”，意为“求真主为你降福！”答语是“渥尔来坤色俩目”，意为“也求真主降福于您！”祈求真主降福（或安宁）本身含有宗教色彩，但因沿用已久，已成为信仰伊斯兰教各民族群众的礼节之一。

互道色俩目有一定的规矩，一般由晚辈、幼者、男人采取主动。表情要真切庄重，不能摇头晃脑，嘻嘻哈哈。若见了老人不道安，即为失礼，会遭到他人的议论和谴责；若有人向你道色俩目，你不理不睬，不但惹人轻视，还可能引起误会。就连出门在外写家信时，称呼后面也须加上祝安词，或写“代色俩目问候”一

语。

互道色俩目是人际往来中最尊敬最高尚的礼节。若两个人思想上有了隔阂或发生纠纷时，经调解，只要有一方首先向对方说声色俩目，并被对方接受，矛盾就会得到缓和；出门人在异乡遇到素不相识的穆斯林，只要说声色俩目，就等于作了自我介绍，同时表示对他人的尊敬，对方定会喜不自禁。道色俩目也是穆斯林群众在节日期间的最好祝贺，所以在开斋节和古尔邦节期间，小辈和年幼者必须登长辈和年长者的门说声色俩目，祝贺节日快乐。

●藏　族

藏族人口为4,593,330人(1990年统计)，主要聚居在西藏自治区，青海省的海北、黄南、果洛、玉树等藏族自治州和海西蒙古族藏族自治州，甘肃省的甘南藏族自治州和天祝藏族自治县，四川省的阿坝藏族羌族自治州、甘孜藏族自治州和木里藏族自治县，云南省的迪庆藏族自治州。

藏族自称“博”，并因地而异，居住在西藏阿里地区的称为“兑巴”，后藏地区的称为“藏巴”，前藏地区的称为“卫巴”，西藏东部和四川西部的称为“康巴”，西藏北部和四川西部、甘南、青海称为“安多娃”，统称“博巴”。“巴”、“娃”，藏语意为“人”。

藏族有自己的语言文字。藏语属汉藏语系藏缅语族藏语支，分为卫藏、康、安多三种主要方言；藏文系参照梵文某些字形于公元7世纪前期创制，为自左至右横写的拼音文字。

藏族普遍信仰藏传佛教。

藏　帽

西藏地处高原，日照强，气候多变，风沙较大，群众一般都喜欢戴帽子。由于地区、性别、年龄、身份的不同，所戴帽子的形状也不尽相同。西藏的帽子种类繁多，样式各异。最常见、最流行的是“霞冒加赛”，即“金丝帽”的意思。

这种帽子，里子是毡帽坯，帽顶复以金丝缎，边沿镶以丝带，帽沿有四个，均呈舌状，前后沿大，左右沿小，帽沿边上缝有毛皮，在阳光照耀下，闪闪发光，非常漂亮。该帽质地优良，保暖性好，可以遮阳光，抗风寒，经久耐用，美观大方，所以男女老少均喜欢戴用，只是戴的形式和方向不同。女人一般把两个大帽沿都折进帽内，只留左右小帽沿在外，显得秀气漂亮；男人一般把左右及后边的帽沿折进帽内，只留前边一个大帽沿，显得威武英俊。刮风下雨时，四个帽沿均露在外，这样可以保暖、挡风、防雨。老年人通常把四个帽沿都露在外面，显得庄重慈祥。

帮　典

“帮典”是藏语，即妇女的围裙。它是藏族妇女喜爱的服饰之一，也是藏族妇女的标志。不满15岁的少女一般不带帮典。帮典织法独特，编织精密，色彩鲜明，美观大方，加金丝银线织角镶饰后，更绚丽鲜艳。帮典的生产一般先手工纺纱，然后染色、刷毛，织成条状，再错落拼缝成围裙。

帮典的品种很多，最好的藏语叫“斜玛”，用14至20种染色毛纱，精工织成；其次的一种叫“布鲁”，是比较普通的围裙。藏北牧区多用黑牦牛绒或山羊毛织造，垂以绦穗，藏语称为“霍莫

帮典”。有些地区也有采用染印彩色十字图案的。

相传织造帮典已有五六百年历史。西藏织帮典最著名的地方之一是贡嘎姐德秀区的帮典厂，享有“帮典之乡”的美称。该地的帮典作为服饰和装饰品，远销各地及邻国，备受藏族妇女欢迎。

酥油茶

酥油茶是生活在高原的藏族人民离不开的珍贵饮料。它是用熬制后的砖茶汁和盐巴、酥油（类似黄油，是从牛奶中提炼出来的）用特制的酥油桶搅打而成。酥油桶，藏语称之为“冬莫”，由两部分组成，即筒桶和搅拌器，筒桶用木板或粗竹做成，上下口径相同，外面箍以铜皮，上下两端用铜做成花边，显得美观大方。搅拌器是在比筒口稍小的圆木板上安一根比桶略高的木柄构成。圆木板上有 4 个直径约 4 厘米左右的小孔。搅拌器使液体和气体上下反复流动。

酥油茶的具体做法多种多样。一般是先把砖茶水煮好，滤去茶叶，把茶水倒入桶中，然后加入酥油和少量盐巴，有的还要加进一些炒熟的芝麻、味精、生鸡蛋和牛奶，再用双手将木柄上下捣动，待桶中之物完全交融后便成了酥油茶。打好的酥油茶通常倒入茶壶内，置于文火上，供全天饮用。倒茶时向一个方向摇动茶壶，随喝随倒。

酥油茶不仅有滋补身体、防止唇裂、提神解渴的作用，而且能产生很大的热量，饮后可御寒充饥，是高寒地区的最佳饮料。有客人来访，家庭主妇会马上端出清香可口的酥油茶，恭恭敬敬地捧到客人面前，殷勤待客。客人不能轻易拒绝，至少要喝上三碗，喝得越多，越受欢迎。

藏族有嗜茶的习惯。据文献记载，藏族人民已有 1000 多年的

饮茶历史。公元7世纪文成公主进藏，带去的百物之中就有茶叶，并推广唐朝的饮茶方法。文成公主又“使乳变为酪，使酪变为酥油”，从此才有了酥油茶。所以，酥油茶是汉藏人民世代团结和友谊之果。

忌食奇蹄牲畜肉

生活在西藏高原的藏族人民忌食驴、马、骡等奇蹄动物的肉。过去大部分地区也没有吃飞禽和鱼类的习惯。对自然死亡及病死的牲畜也不食用。

藏民狩猎，不为食肉，仅为取得麝香、鹿茸和熊胆等名贵药材及毛皮。

藏民主要食用牛羊肉及奶制品。吃法很多。或把牛羊肉带骨剁成块放在大锅内加佐料煮，熟后盛入盘内，用藏刀割成小块，蘸辣椒吃，称做手抓肉；或把肉剔下，做成菜肴和肉包子吃；或在秋季牛羊体壮膘肥时宰杀，割成肉条挂起，任寒风吹干，称做风干肉；或把连骨肉块煮熟，加上糌粑再熬成肉粥，藏语叫“土巴”。风味都很独特。

糌　粑

“糌粑”是藏语音译，是藏族的主要食品。糌粑的制作方法是：拣去青稞（属大麦类，有白色、紫黑色两种）中的小石块、小土块等杂物，用水洗净，待晒到八成干时，放入锅中炒熟，然后磨成细面，这就是糌粑。它与北方的炒面有点相似。但北方的炒面是先磨后炒，而西藏的糌粑却是先炒后磨，一般也不去皮。

糌粑有几种，最好的是“嘎玛糌粑”，用上等白青稞磨成，质

白味香。青稞和豌豆一块炒磨的糌粑，藏语叫“北针”，味美而耐吃。用黄豌豆去皮后磨成的叫“针细糌粑”，色黄而有甘味。完全用炒豌豆磨成的叫“那麻糌粑”，完全用炒蚕豆磨成的叫“加生糌粑”。

藏族吃糌粑，大都先把酥油茶或青稞酒倒入碗里，然后放入酥油、白糖或奶渣，最后把糌粑放在上边。再用手指向一个方向不断搅拌，同时把碗自然旋转，直到湿度均匀，能捏成团为止。吃糌粑时一般佐以菜肴、酥油茶和辣椒。早晨，藏族群众一般喜欢一边用小勺吃干糌粑，一边喝酥油茶，藏语叫“糌粑岗木”；有的则爱把糌粑、白糖、奶渣放入碗内，倒上茶水，慢慢搅拌着吃，这种吃法，藏语叫“强都”。晚上一般把煮好的肉块、骨头加水煮开，加入糌粑和萝卜丝慢慢熬，待煮成粥状再喝，藏语称“土巴”，味道甚美。

移动的房子——帐篷

帐篷在藏区素有活动房屋之称。农区和牧区均有。农区一般是在农牧产品交换、过林卡节、演藏戏等节假日时才搭起来。一般为布料缝制，边上饰有彩色绸缎，呈方形、长方形或椭圆形。通常能容纳七八人至十多人；大的帐篷可容纳上百人。

牧区则普遍使用牦牛毛帐篷作为住房。牧民们先用牦牛毛纺线，织成粗氆氇，缝成长方形或椭圆形帐篷。使用时，当中支撑木杆，外面用毛绳拉开钉在四周的地上，周围用草饼或牛粪饼垒成墙垣，以保暖和避风。帐篷门一般向南开。白天将帐篷帘子对开分撩两边，人可自由出入，晚上放下，用带结紧。

近门中央，支石埋锅为灶，用于取暖和做饭。帐篷顶部留一长缝，沿缝缀有小钩，便于排烟通气和启闭。

这种帐篷，虽然简便，但因用牦牛毛编织而成，质地粗厚，具有经久耐用，不怕风雪，采光性能好，冬暖夏凉等优点，很受牧民喜爱。牧民经常逐水草而游牧，这种帐篷可以随时拆卸和搬迁，很适合牧民游牧生活的需要。

物为信，歌为媒

藏族青年在恋爱婚姻上别具特点。他们往往在生产劳动、节日欢聚、娱乐集会上联络感情。然后，用对歌方式相互表达爱慕和追求之情。如双方中意便互赠信物，或用抢帽子等形式表达钟爱之心。姑娘看中了小伙子，就会把身上佩带的一件装饰品（项珠、耳环、戒指一类）作为信物送给小伙子，如小伙子欣然接受，并回赠了信物，即说明他也爱上了姑娘。假如是小伙子先看上某位姑娘，也主动馈赠戒指或帽子等信物给姑娘，如姑娘接受，说明她也爱上了小伙子。有时一个青年看上了一位姑娘，出于羞怯或其他原因，他会用主动抢走姑娘帽子的办法求爱。几天过后，他主动去送帽子，如姑娘愉快地取回帽子，则表明姑娘也爱上了小伙子。如果姑娘不同意，或已有意中人，就不再要回自己的帽子。

牦牛踩场

牦牛踩场已有1000多年的悠久历史，是深受藏族人民欢迎的传统打场形式。秋收季节，也是藏族人民传统的农牧产品交换季节（也称盐粮交换季节）。

每当“望果节”过后，西藏地区的那曲、安多、当雄等地的牧民便筹集物品，整理行装，长途跋涉，不辞辛劳，风餐露宿，赶着满驮着盐巴、碱、皮张、羊毛、酥油、奶渣、风干肉等物品的

牦牛群，浩浩荡荡地向农区进发。

牧民到了指定或传统的交换地区后，就用驮来的物品或宰杀淘汰的牦牛、绵羊换取他们需要的青稞、糌粑、面粉、氆氇、茶叶、茶具、红糖、布匹、蜡烛、松耳石、珍珠、耳坠等物品。踩场活动就是在这种交换过程中进行的。一般在使用牧民的牦牛踩场前，先要议定好条件。如踩完这个村或这个乡要交换多少粮食及其他物品。牦牛踩场体力消耗大，普遍要掉膘，所以决定给哪家踩场后，主人要进行丰盛的招待，同时也要另外给一定的报酬或额外的粮食。这些事情都谈妥了，才开始踩场。

踩场一般都在午后进行。参加踩场的牦牛头数视青稞、大麦等谷物的多少、场院的大小而定，少时由几头或十几头一起踩场，多时由几十头一块踩。踩前农民要把谷物在场上摊均匀，牧民再把牦牛赶来。农民要围站在场院四周，防止牦牛跑掉，另由两三名壮年男子拿着棍棒或牦牛鞭走到牦牛中间向一个方向驱赶。牦牛便顺着一个方向慢慢奔跑。驱赶的人和场院四周的人同时吆喝："啊勒啸啊！""啊勒啸啊！"（意为：快快跑呀！快快转呀！）。牦牛慢跑了几十分钟后，便调转方向再慢跑。趁着牦牛休息喘气时，人们要赶快翻场。等把全场翻匀、翻透，再把牦牛赶到场上继续踩。如此三次，青稞、大麦等谷物基本上脱粒，就算把场踩完了。

藏历年

藏历年是藏族人民最隆重的传统节日，藏语称为"洛萨"，相当于汉族的春节。藏历12月初，人们开始紧张地准备供过年用的吃、穿、用、玩等年货。家家户户在水盆中浸泡青稞种子，培育青苗，以便在藏历大年初一，能将长了约5厘米长的青苗摆于佛龛、茶几之上，预示新的一年风调雨顺，粮食丰收。12月中旬开

始每家每户准备酥油和白面，并陆续炸各式各样的果子，藏语叫“卡不塞”。临近新年，每户都要准备一个叫“竹素琪玛”的五谷彩斗，斗内装满拌好酥油的糌粑、炒麦粒和人参果等食品，上面插着青稞穗、鸡冠花，摆着酥油塑成的羊头。所有这些都是吉祥物，标志过去一年的收成，预祝在新的一年内风调雨顺、万事如意，农牧业能获得更大的丰收。

除夕的前两天，家家户户进行大扫除，摆上新卡垫，贴上新年画。在打扫干净的灶房正中墙上，用干面粉撒上“八吉祥徽”。在大门上用石灰粉画象征吉祥、永恒的“卐”号。有的人还在自家的房梁上画很多的白粉点，表示人寿粮丰。晚上，每家都吃面团土巴，藏语叫“古突”，在面团土巴中特意制作几个包有石子、辣椒、木炭、羊毛等不同夹心的面团，每一种东西有一种说法，石子预示心肠硬，木炭预示心黑，辣椒预示嘴利如刀，羊毛说明心肠软。凡吃到夹心的人，必须即席吐出，从而引起哄堂大笑，以资助兴。除夕晚，家庭主妇要煮好“观颠”（放有红糖、碎奶渣、糌粑的热青稞酒），初一早上天刚亮就送到各人床前，请他们喝。

大年初一天刚亮，主妇们从河里背来“吉祥水”，然后唤醒全家人，穿好新衣，按辈份排位坐定。长辈端来五谷斗，每人先抓几粒，朝天抛去，表示祭神，然后依次抓一点送进嘴里，以示吉祥。这时长辈顺祝“扎西德勒”（吉祥如意），晚辈总要回贺“扎西德勒彭松措”（吉祥如意功德圆满）。举行新年仪式后，便吃麦片土巴和酥油煮人参果，接着互敬青稞酒。

初一当天一般是闭门欢聚，互不走访或作客。同时这天也绝对禁止扫地，不能说不吉利的话。初二亲友之间相互登门拜贺新年，互赠哈达。在城乡演唱藏戏，跳锅庄和弦子舞。在牧区，牧民们点燃篝火，通宵达旦地尽情歌舞。民间还进行角力、投掷、拔河、杂技和赛马射箭等活动。

瞻佛节

瞻佛节在西藏布达拉宫、哲蚌寺、甘丹寺、扎什伦布寺、青海塔尔寺和江孜、日喀则等地都有，是藏族人民诵经、传招、求雨的宗教纪念日，渴望大佛赐福益寿，天下太平，粮丰人安。一般在藏历四月至六月份举行。

日喀则扎什伦布寺的瞻佛节，是宗喀巴弟子根敦珠巴在1468年创办的。至今已有500多年的历史。最初的佛像与展佛台狭窄矮小，仅有十几米高。从四世班禅洛桑确吉坚赞开始，历代班禅大师对佛像及展台进行更新和扩建，才形成了现在的宏伟规模。

展佛台依山矗立在扎什伦布寺右侧上方，高28米，宽3米左右，长41米，四周有石砌围墙，远远望去，犹如宽阔的银幕。

瞻佛节历时3天，每天展出不同的佛像，供信徒朝拜瞻仰。第一天，展出“过去佛”即无量光佛，作为过去，让人纪念；第二天，展出“现在佛”，即释迦牟尼，以示再思世尊之恩；第三天，展出“未来佛”，即吉尊强巴贡波，愿世间众生在强巴问世之时，能转生于强巴周围，聆听佛音，得以超度。

瞻佛节庄严、隆重，极富宗教色彩。喇嘛身披袈裟，兴高采烈地举行法会。每天清晨，钟声长鸣，香火通明，喇嘛们将彩缎镶成的巨幅佛像，捆在梯形木架上，由16个身强力壮者抬起，前面“狮子”引路，后面仪仗队尾随，法号声声，锣鼓咚咚，香烟

缭绕，众僧口念佛经，信徒虔诚礼拜，缓缓来到展佛台前。九时左右，大佛悬挂，在展佛台上的阳光照耀下，彩缎光彩夺目，五彩缤纷，极为壮丽，给人以难言的神秘之感。

大佛瞻仰完后，还要演唱藏戏，组织跑马射箭等活动。

传大招

传大招，藏语称为“默朗钦波”，意为“大祈愿法会”。始于公元1409年，是宗喀巴大师倡导的四大佛事之一。

15世纪初，宗喀巴为振兴衰微中的藏传佛教，推行改革，创立了格鲁派。为广募资财，宣扬教理，扩大影响，决定仿照古印度祇园精舍城法会的形式举行大祈愿法会，得到了乃东王札巴降曲的大力支持。藏历第七饶迴土牛年（公元1409年）正月初一，在阐化王札巴坚赞的大力资助下，大祈愿法会首次在拉萨隆重举行，来自西藏各地参加法会的僧俗信众达一万多人，宗喀巴为主持人。宗喀巴圆寂后，该活动中断了19年，根敦嘉错时重又恢复。从此，传招一年一度，已有500多年历史。

法会从藏历正月初三至二十四，三大寺僧众及卫藏、安多和康区各地信徒（多时至数万人）云集拉萨大昭寺进行各种宗教节日活动。传招期间，大昭寺里，佛号常鸣，经声不断，千盏供灯长明；大昭寺外，经幡飘飘，香烟缭绕，香客朝拜不绝。除地方政府拨专款每天要放3次布施外，各地的富家商人和贵族也趁此到拉萨放布施。

藏历正月初三，哲蚌寺正副铁棒喇嘛带领有关人员去布达拉宫觐见达赖喇嘛，领取法旨后即到大昭寺、小昭寺朝拜释迦牟尼像，并宣布法会的注意事项。初四，大祈愿法会正式开始，清晨，举行迎请护法神的宗教仪式。从五世达赖开始在法会上举行辩经

活动，考选“拉然巴格西”（藏传佛教的最高学位），以后形成制度。所以此后几天，达赖喇嘛要从布达拉宫移居大昭寺进行讲经和主持辩经活动。辩经活动分早、中、晚3次，与法会的3次集体诵经活动交替进行。这样的辩经活动一直持续10天左右。

藏历正月十五，举行“觉哦却巴”，即供灯节。当天晚上，拉萨八角街四周，摆满了五彩酥油塑成的花卉、图案、人物、鸟兽。城乡人民，纷纷拥到八角街游玩。精美多姿的酥油灯花吸引了万千观众。人们狂欢起舞，彻夜不眠。

从藏历正月十九至二十四还要分别举行“天母节”、驱鬼仪式和送鬼仪式，法会才告结束。

1986年藏历正月初八至十七，中断了二十年的传统盛会在拉萨再度举行。广大信徒莫不欢欣鼓舞，外地和邻省藏族地区来拉萨朝拜的香客就有10万多人。

在这次祈祷大法会上，通过辩经考试有6名僧人荣获“拉然巴格西”学位。十七日下午，众僧齐集拉萨河畔举行固堤仪式，祈祷来年风调雨顺，国泰民安。

沐浴节

沐浴节，藏语称“嘎玛日吉”，在西藏已有800多年的历史了，是藏族人民特有的具有浓厚民族气息的节日。该节一般在藏历七月初六至十二举行，历时7天。

关于沐浴节，在藏区流传着许多传说。相传很久以前的一个秋天，高原上发生了罕见的瘟疫，人畜大量死亡。大慈大悲的观音菩萨为了救渡黎民于苦海，便派七仙女从玉液池取来7瓶仙水，倒入西藏所有的河流溪水里。当夜，老百姓都在梦中看到一个面黄肌瘦、遍体疮痍的姑娘跳进一条清澈的河水中沐浴，随即姑娘

病态全无，容颜照人，变成一个非常美丽健康的姑娘。百姓们便效仿此法，战胜了瘟疫。从此，每年初秋，自金星（又名太白星）在天空升起，在人们能看得见它的7天内，即定为沐浴节。人们认为此时的河水比“圣水”还灵验，洗澡可以有益健康、消除百病，全年会吉祥如意。据藏文天文历书记载，此时的水有八大优点：一甘、二凉、三软、四轻、五清、六不臭、七不损喉、八不伤腹。

沐浴节时，无论是城市、农村，还是牧区，男女老少全家出动。这时的拉萨河两岸沉浸在节日的欢乐气氛中。人们带上帐篷和艳丽的遮阳伞、卡垫等，成群结队来到河畔的草坪上、树丛中。老年人在河边洗头擦身，年轻人在河中洗澡游泳，孩子们在水中嬉戏打水仗，妇女们尽情沐浴，或欢快地清洗衣服、被褥。姑娘们在河边以水为镜精心梳洗打扮，一派欢乐景象。休息时，一家人围坐在帐篷里，边品尝芳醇的青稞酒、喷香的酥油茶和可口的点心及菜肴，边聊天、边唱歌，一派舒畅欢乐景象。所以，现在的沐浴节既是藏族人民喜爱的传统节日，又是群众性的卫生活动，还是休息、娱乐的大好时光。

雪顿节

雪顿节，是西藏藏族的传统节日之一。“雪”是酸奶的意思，“顿”是宴的意思。原是夏秋之季宗教活动中举行的奶酪宴会，俗称吃酸奶子节，后因雪顿的活动内容逐渐演变为以藏戏会演为主，又把它称为“藏戏节”。此节日西藏各地都过，只是时间比拉萨地区略晚些。

宗喀巴在“改革”西藏宗教时，为新创立的格鲁派制定了严格的戒律。因夏季是高原上各种生命最活跃的季节，故规定僧众

要在室内念经修习，不准外出活动，以免在无意中杀生。到藏历七月初入秋季节，天气转冷，各种虫子等生物逐渐蛰伏起来。那些虔诚的僧徒经过夏令安居，长时间的宗教学问研修之后，可以走出房屋到户外活动了。这时也正是牛羊膘肥体壮，出酥油、奶最多最好的时候。喇嘛纷纷出寺下山，世俗百姓都要准备酸奶子布施。喇嘛们除了吃一顿酸奶子（有的还以糖米饭招待）佳宴外，还尽情欢乐玩耍，这就是雪顿的来源。

17 世纪中叶，雪顿活动的内容开始增加演出藏戏。宗教活动和文娱活动相结合并形成固定的雪顿节。因以哲蚌寺为中心活动，故又称“哲蚌雪顿”。五世达赖从哲蚌寺移居布达拉宫后，每年藏历六月十三过雪顿节，仍是先在哲蚌寺进行藏戏会演，第二天才到布达拉宫演出。18 世纪初罗布林卡（宝贝园林）建成以后，成为达赖夏宫，于是雪顿节的活动中心又从布达拉宫移到罗布林卡，并开始允许市民入园看藏戏。这时的雪顿活动更加完整，形成了一套固定的节日仪式。

每年藏历六月二十九，各地区的藏戏团一早就到布达拉宫向主管藏戏的官员报到，并进行简单的表演仪式。当晚各戏团要返回哲蚌寺。藏历六月三十为哲蚌寺雪顿节，演出藏戏一天。是日也正是哲蚌寺的瞻佛节，要把一百多米高的锦缎绣绘佛像大唐卡，在寺院专设的大山墙上升挂起来，让千万僧俗群众瞻仰礼拜。藏历七月初一，由拉萨、日喀则、穷结、雅隆、堆龙德庆、尼木等地的四个剧团、六个“扎西雪巴”（藏戏的一种）、一个牦牛舞班子和一个“卓巴”（打鼓舞）等表演团体在罗布林卡进行联合演出。藏历七月初二至初五，再由江孜、昂仁、南木林、拉萨等四个剧团轮流演出广场戏。

雪顿节经过 300 多年的发展，已形成独具雪域大地特色的戏剧艺术节。除了进行藏戏会演外，其他各专业文艺团体和业余文

艺宣传队也参加演出。在节日期间，罗布林卡内外，商业部门以及附近各乡还拉来各种物资，摆摊设棚，进行物资交流，使传统的雪顿节更显得欢腾、热闹。

拉夜会

拉夜会是青海省贵德县一带藏族群众民间传统节日。每年农历六月二十二举行。这天是贵德藏族的祈神日，祈求神佛保佑风调雨顺，人畜两旺，五谷丰登，吉祥如意，年年太平。本世纪40年代，该节又增加了大量民间文艺娱乐活动。其中以男女对唱最具特色。在节日前一天，整个娱乐区就被装饰一新。各式各样的摊位、售货亭、帐篷和凉棚便搭了起来。节间，藏族青年男女穿上色彩绚丽的服装，戴上各种首饰，青年妇女美丽大方，小伙子们英武潇洒，三五成群地汇集到娱乐区。有的购物，有的品尝小吃，有的玩各种游戏。到了傍晚，一对对青年男女摆开拉夜的战场。通常是一男一女对唱，内容主要是恋爱的悲欢，善恶的报应，勤劳致富等。一对唱完后，互相敬酒，下一对接着唱。唱歌者虽主要是青年男女，但一些上了年纪的老人，尤其是青年时代的歌手们，有的也要情不自禁地表演一番，更增添了拉夜会的热烈气氛。拉夜会的欢歌笑语一直要延续到深夜，人们才依依不舍地散去。

赏花节

又称“看花节”。四川省阿坝藏族羌族自治洲马尔康一带藏族群众的传统节日。每年农历六月举行，节期三五天不等，有些地方可达十多天。农历六月，天气怡人，遍地葱绿，草原如茵，山

花烂漫，百花盛开，河水清澈，透明见底，又是田野里禾苗生长的旺盛季节。届时，藏族群众身着节日盛装，带着食品、乐器、卡垫、酒水、炊具、帐篷，骑着装饰得十分神气的骏马，成群结队地去野外游玩，欣赏大自然的美景，观赏千奇百态的山花。最后选一个傍山临水的合适地点，搭起帐篷，支起锅灶，熬茶盛酒，边吃边喝边歌舞。老人们则祈祷神灵降福，各业兴旺，村寨安康。夜晚，燃起一堆堆篝火，歌舞活动达到高潮。节日期间，还要举行摔跤、赛马、打靶和文艺演出等活动。此节日既可休息，又可交流感情，有益于身心健康。

采花节

又称“女儿节”。甘肃省文县与四川省交界处的博峪一带藏族群众的传统节日。每年农历五月初四举行。节期两天。此节相传已有数百年的历史，起源于一个美丽动人的故事。相传在很早以前，博峪是个人烟稀少荒僻的穷山沟，人们以采集、狩猎为生，以树叶兽皮为衣。一天来了一位叫莲芝的姑娘，她聪明美丽，勤劳聪慧，乐于助人，品德高尚。她教会了当地人开荒种地，织布缝衣，还从山上采来神花百草为乡亲们治病医伤，当地人非常感激。有一年的五月初五，姑娘又上山采花集药，被狂风卷下崖岗身亡。人们非常痛惜悲伤，为了纪念她，便把五月初四定为采花节。届时人们要举行“抢水”、“采花”、“祝福”等一系列活动。节日的早晨，人们要上山抢泉水洗身、饮用，传说可以得到吉祥，祛除百病。然后姑娘们盛装打扮，在兄弟的陪伴下，纷纷进山采花。采花队伍一路歌声不断。当走到溪水长流、百花盛开之处，姑娘们搭帐支锅，小伙们插上新木刀、木斧、木箭祭祀花神，缅怀莲芝姑娘，以求风调雨顺，人畜两旺，万事吉祥。尔后姑娘采花，小

伙饮酒，高唱山歌，尽情游玩。夜幕降临，姑娘们头戴花环，手捧花束，围着篝火和小伙子们跳舞唱歌，通宵达旦。第二天采花队伍背着鲜花筐、草药筐一路歌声返回村口。家里欢迎的人们也早等在村外，采花队一到，人们便手拉手地来到麦场上，盛情欢迎、款待。姑娘们则给大家赠送礼品——山花和草药。这时领头人摇起马铃，人们跳起圆圈舞，为采花的青年人祝福。大家互敬美酒，相互祝福身体健康、吉祥如意。大家边喝、边唱、边舞，直到尽兴方散。

望果节

望果节是藏族人民预祝农业丰收的节日。“望果”从字面上讲，就是“转地头”。

在藏区农村，除了藏历年，就数望果节热闹。望果节在藏区已有1000多年历史，最早流行于雅砻香布（今天的雅鲁藏布江中下游河谷）地带。据《本教历算法》等资料记载，早在公元5世纪末，即布德贡杰时期，雅砻地区已经兴修水利，开始使用木犁耕地，农业生产比较发达。这时，为了确保粮食丰收，藏族首领布德贡杰便向本教（西藏的原始宗教）教主请求赐法，教主让农人绕田地转圈，求上天保佑丰收，这就是望果。但此时，望果仅是开镰收割前的一种宗教活动。

本教流行西藏时的望果活动，起初以村落为单位，全体乡民出动，绕本村田地转圈游行。队伍前头由捧着柱香和高举幡杆的人引路，接着由本教巫师举“达达”（绕着哈达的木棒）和羊右腿领队，意为“收地气”、求丰收。后面跟着手拿青稞穗和麦穗的乡民。绕圈之后，把谷物穗插在谷仓或供在神龛上，祈求好收成。随后，便进行娱乐活动，内容有角力、斗剑、耍梭镖等。最后便是

群众的唱歌跳舞活动，痛痛块块地玩一天。

8 世纪后期，在以莲花教主乌坚白玛为首的佛教宁玛派兴盛时期，望果活动自然地带上了宁玛教派的色彩。使符念咒是宁玛派的特点，这时的望果活动便用念咒来保佑丰收。

14 世纪时，佛教格鲁派创始人宗喀巴来到西藏，通过对西藏佛教的“改革”，格鲁派壮大成为西藏主要教派，居统治地位。于是望果活动便渗进更多的格鲁派色彩。例如，在游行队伍之前，要举佛像、背经文。这时的望果活动，已正式成为传统节日，娱乐活动又增加了赛马、射箭、演藏戏、杂技等内容。

望果节主要流行于农业区。一般是在谷物将要成熟时举行，没在固定的日子，各地也不尽相同。拉萨地区多在阳历 8 月 1 日前后开始，节期三五天不等。江孜和日喀则地区则在阳历 7 月中旬左右。云南省中甸地区藏族群众也在阳历 7 月份欢庆望果节，他们称该节为“兰包日果”。望果节一过，便开始了紧张的秋收秋种。

现在望果节的形式和内容也发生了变化。节日期间，人们除参加和观看赛马、射箭、藏戏、跳舞以外，还要进行丰盛的郊宴。这时城镇中的亲朋好友也赶来做客，一起欢度节日。云南中甸地区的望果节（兰包日果）则要跳“相会锅庄”、“问答锅庄”、“告别锅庄”，而且队队相比，村村相赛，互相祝愿，相互交流，气氛非常热烈。

嘛呢堆

西藏地广人稀，道路难辨，藏族群众遂于通衢要道或山口堆放石块，做为界址和计算路程的标志。后由于藏传佛教的传布，佛教徒往往在石头或石片上刻上六字真言和其他经文，放置在这些石堆上。由于过路信徒不断地往上添加石块石片，石堆慢慢扩大，

天长日久竟成了山丘状，这就是嘛呢堆。“嘛呢”二字取自六字真言中的两字，意为“超渡众生，慈悲无边”。

大的嘛呢堆，方圆数十米。在嘛呢堆的顶端密插用竹竿或树枝做成的经幡（嘛呢旗）。这些经幡用布、绸、纸做成，上面写或印有六字真言以及其他经文，扎制成串，五颜六色，随风飘动，表示祈祷。凡信徒过此，除添加石头、石片外，还要按顺时针方向绕转几周，口中不断诵经，以积“功德”。这种大小不等的嘛呢堆，在藏区随处可见。

哈　达

哈达是藏语音译，是藏族和部分蒙古族用于礼仪的丝巾。

献哈达是藏族最普遍的一种礼节。婚丧节庆，迎送馈赠，拜会尊长，觐见活佛，喜讯往来，都有献哈达的习惯。

哈达是一种生丝织品，多产于四川西部，织得稀松如网，但也有用上等丝绸做成的哈达。按质料可分为四种。普通为棉纱织品，称“素希”；较好的为丝织品，称“阿希”；更好的高级丝织品，称“浪翠”。在特定时间和场合还使用蓝、白、黄、绿、红各色组成的五彩哈达。哈达的长短不一，长者可达十几米，短者仅有一两米。藏族人尚白，自古以来，认为白色象征纯洁、吉祥，所以哈达一般为白色。献哈达是对人表示祝愿、纯洁、诚心的意思。按佛教教义的解释，五彩哈达是菩萨的服装，是仙女的飘带，神圣无比。蓝色表示蓝天，白色表示白云，绿色表示江河湖水，红色寓意护法神，黄色则象征大地。五彩哈达是献给菩萨和近亲时做彩箭用的，是最珍贵、最隆重的礼物。在佛像和寺院的树木上常常能看到信徒们敬献的哈达。

据说，哈达是在元朝时传入西藏的，藏传佛教的萨迦法王八

思巴会见元世祖忽必烈后返回西藏，带回了第一条哈达。当时的哈达，两边是万里长城的图案，上边织有“吉祥如意”字样。所以说哈达也是各民族相互学习、文化交流的象征。

转经筒

当进入藏区，或步入拉萨，举目可见老年男女个个手中擎着一个小小的桶状物，口中念念有词，不停地转动，不管是行走站立都不停歇。他们手中之物，便是转经筒。

转经筒是藏传佛教徒祈祷用的法物。它形状似桶，中贯以轴，内装纸印经文，上下两端固以轴承，周围用梵文刻有“唵、嘛、呢、叭、咪、吽”六字真言，筒外加金属箍壳，精致美观。按顺时针方向摇动（本教教徒按逆时针方向）。

转经筒大者高一两米，一般固定在建筑物内或房顶，又称为转经轮。手摇者最小，一般高 10 厘米，直径 8 厘米，但镂饰精美，上方一角固定有悬锤，摆动时，借悬锤惯性之力使经筒转动。信徒们认为转动一周等于念筒内所藏经咒一遍，长此转动，可教化众生得到解脱，功德无量。对自身也会广集功德，修好来世。所以信徒们在寺庙里会用手推动一排排的转经轮，在家里和路上年迈者会经常摇动转经筒，用以积德求福。

●维吾尔族

维吾尔族人口为7,214,431人(1990年统计),主要分布于新疆,大部分聚居在天山以南,少数分布在湖南省桃源、常德等县。

维吾尔族自称“维吾尔”,意为“团结”、“联合”。在不同时期的汉文古籍中出现的“袁纥”、“回纥”、“畏兀尔”等都是同音异译。

维吾尔族有自己的语言文字。语言属阿尔泰语系突厥语族;文字是以阿拉伯字母为基础的拼音文字。

维吾尔族在古代曾信仰萨满教、摩尼教、祆教(拜火教)和佛教,11世纪以后主要信仰伊斯兰教。

小花帽

维吾尔族花帽，是久负盛名的民族工艺品，其造型、纹饰和色彩蕴含丰富的审美意识，成为维吾尔族的标志，博得了国内外人士的喜爱。

花帽通称“多帕”，新疆东部也称“伯克”，经过数百年的演变，形成了独特的艺术风格。根据制作工艺、图案纹饰和地方特色，可分为不同种类和式样。

从制作工艺看，多数是以顶为中心，四瓣缝合的小花帽，也偶有五瓣花帽。历史上还曾有过六瓣组合花帽。

图案纹饰基本上采用刺、扎、串、盘等绣法。可分为钩花刺绣、扎绒刺绣、盘金银绣、十字花绣、格子架绣、串片绣、丝线结绣、丝线平绣，还有融刺、扎、串、盘于一体的综合绣等。此外，还有一种白布便帽，缀以朴素淡雅的彩色小花，既可做衬帽，又可平时戴用。花帽的图案、姿态各异，色彩绚丽，而其基本骨架主要取材于新疆当地的花卉果实等自然形象。花帽上还常有些附加装饰，如镂刻金银片，或缀上翡翠、玛瑙、琥珀、珊瑚，或装上金银宝石花、孔雀翎等，把小小的花帽装点得五彩缤纷，鲜艳夺目。

各地的花帽具有明显的地方特点。如今遍及全疆的巴旦木花帽，是一种男用花帽，口小顶大，黑地白花，上部棱角突出，古朴庄重。它最早流行于喀什地区，如今仍以喀什人戴用最多。和田地区的女式小花帽，满布彩绣，四角突起，在女花帽中别具特色。吐鲁番花帽，彩花满顶。伊犁花帽，造型扁浅圆巧，色彩柔和，纹样简练，颇具淡雅之美。还有一种小巧花帽，直径不足10厘米，流行于和田、民丰、策勒、且末一带，用针别在盖头披巾

上，饶有一番情趣。

维吾尔人在节日、盛会、办事、访友时，都要为自己精心挑选花帽，姑娘向小伙子表达爱情时，也常用花帽做为信物。如今它又成为畅销的旅游工艺品，为国内外游客所钟爱。

爱得丽斯绸

“爱得丽斯”绸，维吾尔人称为“玉波甫能卡那提古丽”，意思是“布谷鸟的翅膀花”，以此来美喻它如彩霞般的色彩及其给人们带来的春天的气息。

爱得丽斯绸，采用古老的扎经染色的方法制成，按照精心设计的图案，在经纱上扎结染色。扎经的工艺非常繁杂精细，全部图案花饰、布局配色都要在扎经时确定。之后，还须经分层染色、整经织绸。色液在花饰轮廓上浸润散漫，形成自然的色晕，故图案层次鲜明，色彩富丽多变而又错落和谐，形成了独有的风格。

爱得丽斯绸根据地区不同，各有独特的色调和工艺特征，主要有以下两大类型：

一种是和田、洛甫的爱得丽斯绸。讲究黑白对比，素淡典雅，图案也较疏朗粗犷，配色多以黑白两色交互为底及为花，也有用红、黄、蓝、白等相间的花色的。图案多种多样，很少雷同。

另一种是喀什、莎车的爱得丽斯绸。以色彩鲜艳、图纹细密严谨为其特征。图案的花纹与色彩对比强烈，富丽华贵，光彩照人。有趣的是，尽管其图案千变万化，其基本图型都取材于维吾尔人生活中常见的花型，如巴旦木花、梳子花、木板纹花等等，经艺人的妙手加工，形成爱得丽斯绸浓郁独特的民族艺术风格。

抓饭与烤馕

维吾尔族喜用的饭食，最有代表性的莫过于抓饭与烤馕。

抓饭，顾名思义，是用手抓吃的饭。维吾尔语称“朴劳”、“波糯”。

抓饭营养丰富。其原料是鲜羊肉、胡萝卜、洋葱、大米、羊油、植物油等。从中医观点分析，确有壮阳益肾、补气养血、安神益智、生津止渴的功效。相传古时有位医生，年迈体虚，久医无效，便摸索研制出一种色香味俱全、营养丰富的主食进行食疗。他每天早晚各吃一小碗，果然食欲大增，不久身体就康健了。一传十，十传百，众人纷纷仿效，这种灵验的“药物”遂传入维吾尔族的家家户户，这就是今天的抓饭。

凡遇婚丧大事、宾客临门或节假日，维吾尔族都要做抓饭。吃饭时，请客人团团围坐。主人执壶端盆，递送毛巾，依次请客人净手。然后端上色泽油亮、香气扑鼻的抓饭，请客人直接从盘中抓着吃。

抓饭的制法很讲究。首先要选用肥嫩的羊肉，切成小块，用植物油炸，再放洋葱、胡萝卜一起炒，并按口味放盐等调料，加水后约过 30 分钟，把洗净泡透的大米放入锅内，焖约三四十分钟即可。

抓饭的种类很多，根据用料的不同，主要分成两大类：肉抓饭与素抓饭。

肉抓饭，多用羊肉，也有的用牛肉、鸡肉、鸭肉、鹅肉等等。植物油可以是菜籽油、花生油、棉籽油、胡麻油、豆油等。除植物油外，一般还放些羊油、牛羊骨髓油、酥油等等。

素抓饭，可甜可咸。甜味的可放些葡萄干、杏干等干果；咸

味的可放些蔬菜、粉条、鸡蛋之类。在夏天，维吾尔人还常在饭中放些酸奶子，既有营养，又消暑解渴。

抓饭中，最讲究的要数“包子抓饭”。维吾尔人称之为“阿西曼吐”，即在每碗抓饭中放上几个薄皮包子，用来招待贵宾好友。

馕，是维吾尔人一日不可缺少的主要面食，至今已有上千年的历史。传说，唐僧取经时，就是靠着身上带的馕走过新疆大沙漠的。

馕在维吾尔人生活中倍受青睐。至今，维吾尔人还有一种习俗，就是在婚礼上，德高望重的主婚人，要分别赐给新郎新娘一小块馕，两位新人须郑重而愉快地一同将馕蘸着盐水吃下去，以示恩爱偕老。

馕的主要原料是面粉，也有用玉米面的。面粉和好后，多数要经发酵；也有的在面中加清油、羊油而不用发酵，这种馕叫油馕。

馕分素、肉两大类。素馕，可咸可甜。根据口味，可选加芝麻、洋葱、鸡蛋、清油、羊油、酥油、牛奶、盐、糖、葡萄汁等。肉馕，要以羊肉丁、孜然粉、胡椒粉、洋葱末加盐等佐料，拌馅放入面中。

馕多为圆形，中间薄边沿厚。大小厚薄不等，都在馕坑中烤制，其味无论咸、甜，皆香酥可口，食用方便。可干吃，可泡食，而且长久存放也不易干裂、霉坏。

烤全羊与烤羊肉串

维吾尔族的烤羊肉，是鲜香异常的美味佳肴，其中尤以烤全羊与烤羊肉串最负盛名。

维吾尔族的烤羊肉，主要选用素有草原“珍珠”美称的新疆

绵羊。其肉质鲜香肥嫩，无膻腻之味，是其他地方的羊肉所无法相比的。新疆最著名的肉用羊种，首推阿勒泰大尾羊、哈萨克羊、巴音布鲁克大尾羊、塔什库尔干大尾羊等。

烤全羊的制法很讲究。首先，选用膘肥体健的一二岁羯羊（骟过的公羊），屠宰、剥皮、去蹄、去内脏、收拾干净。也可内外擦一遍细盐。用干净木棍将羊从头至尾穿上，经整形，再用蛋黄、姜黄、孜然粉、胡椒粉及适量辣椒面和精白面粉，调成糊，把糊汁抹满全羊，再把羊置入热馕坑中，盖严坑口并用湿布将坑口密封，焖烤 90 至 120 分钟，全羊呈金黄色，即可取出食用。其香嫩鲜美，无与伦比。

烤全羊是维吾尔族高级宴席上的豪华菜，也可做节日郊游的助兴食品。

烤羊肉串的制作比烤全羊简单。先选上好的新鲜羊肉，切成约 3 厘米大小的肉片，穿在干净的铁钎子上（铁钎长短没有严格的限制，以扁平为好），再放在铁皮制成的烤肉槽上烤。在红红的炭火上，羊肉串滋滋冒油，边烤边撒上适量的精盐、孜然粉、辣椒面，过几分钟再翻过铁钎烤另一面，同样撒上调料，再过三四分钟即烤熟。其肉质鲜嫩，味兼咸辣。在袅袅青烟中飘散着孜然与羊肉混合的奇香，令人望之神驰心迷，闻之馋涎欲滴，食之无不称快。

维吾尔族婚礼

维吾尔族的婚礼是相当热闹的。按照礼俗，男女双方先要举行订婚礼，表示双方家庭对男女二人的婚事都已认可，才确定结婚的日期及婚典事宜。

结婚典礼非常隆重。首先是在女家进行“迎娶仪式”。一大早，

女家已是宾客满堂，仪式开始，来宾分两厢站立，女左男右。婚礼按照传统由阿訇或伊麻木（宗教师）主持，现在一般请德高望重的老人主持。身穿礼服的新娘新郎双双立于主婚人面前。主婚人先问新郎新娘是否愿意与对方结婚，得到二人肯定答复后，就按传统习惯，将两小块馕蘸上盐水，郑重其事地分赠新郎新娘，新人须双手接过表示祝福的礼品，当场吃下，以示对爱情的忠贞及同甘共苦、白头偕老的愿望。这时，众宾客同声祝贺，顿时，场上响起欢快的维吾尔族歌曲，人们纷纷卷入轻歌曼舞之中。之后，宾客落座就餐。

下午，新娘着礼服披轻纱，在众姑娘簇拥下，步出家门，随新郎坐上披红挂彩的车子去男家。一路鼓乐，一路欢歌。

新娘来到男家门前时，按传统习俗，男方要在门口点起一堆火，表示驱鬼避邪。由一人取一点火，在新娘头上绕三圈，新娘再绕火堆转一圈，然后方可进门。这种仪式如今大多已不用了，新娘下车，就脚落红毯、毛毡铺成的迎新路，走进家门。

第二天，男家布置一新，接受亲朋好友的祝贺。热情的主人家铺好了餐布，端上香喷喷的抓饭、羊肉，摆上喜酒，请大家用餐。客人们酒酣兴起，先由年轻的小伙子带头，拨动琴弦，打起手鼓，人们不约而同地翩翩起舞。天晚了，长者一般纷纷告辞，而精力充沛的青年人则要等到揭盖头的时刻。他们挤满了洞房，唧唧喳喳地议论着坐在炕上、蒙着盖头、低头不语的新娘子。在人们的欢笑中，事先安排好的一位姑娘，突然揭去新娘子头上的盖头，顿时，婚礼的最后一个高潮到来了，人们簇拥着新郎新娘，又沉浸于欢快热烈的歌舞之中。婚后一星期左右，新娘回娘家，称为回门。男家要送礼，女家要设宴招待，岳父母还要送“袷袢”给女婿。

肉孜节

肉孜节，是维吾尔族的传统节日。在维吾尔等信奉伊斯兰教的民族中，肉孜节又称“开斋节”。“肉孜”，是波斯语的音译，意为“斋戒”、“封斋”。一进入斋月，人们就开始“把斋”，即白天水米不沾，天黑以后才开始吃东西。第二天天亮开始“把斋”，这样连续一个月，开斋以后又恢复正常饮食习惯。

关于肉孜节的由来，有这样一个传说。古时候，人们为躲避外族侵犯，常常昼伏夜出，炊事、饮食也随之节制，历代沿袭，成了习俗。

肉孜节，深受维吾尔、回等信奉伊斯兰教的民族的重视。每逢肉孜节到来之前，人们就要大搞卫生、理发沐浴、准备食品、赶制服装，比平时更加严格地礼拜，用教义约束自己。在斋月，饭前都要做“都瓦儿”（即两手平端眼前，默念经文），表示对安拉的虔诚与感激，然后再用饭。

把斋一个月后开斋。开斋那天非常热闹，教徒要到清真寺礼拜、上坟、念经，穆斯林之间互相问候、馈赠，其中很重要的是要炸“油香”，以作馈赠。受赠者则不该拒绝。吃油香，要掰着吃，不可整块咬。

古尔邦节

古尔邦节，与肉孜节一样，也是维吾尔族的传统节日。信仰伊斯兰教的维吾尔等民族的人民，把它称作“小开斋”节。

古尔邦是阿拉伯语的音译，意为“献牲”；所以古尔邦节也称“献牲节”、“忠孝节”。关于古尔邦节的由来，古代阿拉伯曾有这

样一个宗教传说："先知"伊卜拉欣夜梦"真主"安拉。安拉命他宰杀自己的儿子伊斯玛尔乃，借以考验他对安拉的忠诚。他毫不犹豫地接受了命令，当他举刀执行时，安拉又命他以宰羊代替杀他的儿子。阿拉伯人高度赞扬、由衷钦佩尽忠尽孝的伊卜拉欣父子。他们依照传说每年都宰牲献给安拉。伊斯兰教继承了这一习俗，规定伊斯兰教历太阴年十二月初十为古尔邦节，并尊奉"先知"伊卜拉欣为圣祖。

维吾尔族非常重视古尔邦节。节前要清扫，制作食品，节日当中还要宰牛、羊、驼，周济贫民，待客人，赠友邻，尤其要到清真寺沐浴礼拜，听阿訇诵讲《古兰经》。节日还伴有各种各样的民族文娱活动。

英吉沙小刀

新疆维吾尔族的英吉沙小刀，精美锋利，驰名中外，深受人们喜爱。

英吉沙县在新疆塔里木盆地西部，是英吉沙小刀的最早产地。以后，这种制刀技艺传入了和田、莎车、喀什、库车等地，成为这些地区独具特点的民族工艺品。

英吉沙小刀的历史，可追溯到大约300年前。传说有位维吾尔制刀师傅叫买买提，在英吉沙城南卡尔窝西镇以制小刀为业。他制的小刀工艺精良，刀体美观，刀刃锋利，很受人们的喜爱，在市场上供不应求。附近的人们纷纷仿制，并互相竞争，于是花样不断翻新，质量不断提高。英吉沙小刀不仅是新疆农牧民们须臾不可离身的生活、生产用具，而且还跻身于工艺美术品之列。

英吉沙小刀最突出的特点是刃口极其锋利，用以削铁，铁屑飞起而刃口不崩不卷。它不但选用钢料要好，而且要有高明的淬

火技术，而这种技术通常是秘不外传的。经过淬火之后的刀体，用手指轻轻一弹，放在耳边，可听到连绵不绝的清越之声。

英吉沙小刀的造型多式多样，常见者有弯式、直式、箭式、鸽式等品种，每个品种又分成许多种花色、规格及不同的民族形式。但最典型的要数维吾尔人喜用的弯刀。不管哪种造型，或古朴，或俏丽，都线条匀称，通体和谐美观。

英吉沙小刀讲究装饰。根据用途、品级和价值的不同，分别使用铜、银、玉、骨、宝石等镶嵌在刀柄上，并拼出各种图案。尤其是白银与宝石拼镶的花饰，更显得古朴庄重。也有用塑料、有机玻璃做装饰的，色彩鲜艳，物美价廉。

与其他名牌刀剪相比，英吉沙小刀更注重自己的标记。每把刀体上总要打上各种图案做标记，如巴旦木花、月亮、太阳、葫芦等。有的还打上制刀人的名号。英吉沙县小刀厂是这种小刀规模最大、最权威的生产厂家，凡该厂生产的小刀，刀柄上都镶嵌着两朵巴旦木花，还在刀上刻出维吾尔文及汉文的“英吉沙”字样。

英吉沙小刀，尽管刀形千变万化，制刀的能工巧匠们，总是能“量体裁衣”，制出合体的刀鞘。刀鞘以木片为骨，做成与刀体相宜的内套。再缝以牛、羊皮做成外套。有的先在皮革面上制出各种花纹，染上各种颜色。还有的用铝、铜，甚至用银制成刀鞘，显得更加庄重、古朴、珍贵。

十二木卡姆

维吾尔族音乐，源远流长，丰富多彩，其中的精华，要数《十二木卡姆》。

《十二木卡姆》是对由一部部大曲组合起来的规模宏大的维吾

尔古典乐曲的总称。至于它名称中的“木卡姆”与“十二”，专家们多有考证，但观点不一。“木卡姆”，大曲之意。据认为是公元4世纪维吾尔人的艺术创造。“十二”，说法不一，有人认为是指十二部大曲，有人认为指十二生肖，也有人认为不是确指，而是借古代西方文明的特定命数。

从内容上看，《十二木卡姆》融古典叙诵歌曲、民间叙事组歌、舞蹈乐曲、即兴乐曲于一炉，共含340多首，堪称恢宏瑰丽的艺术巨制。

从形式上看，它又因地区的不同而形成了许多种类。“伊犁木卡姆”、“多朗木卡姆”、“哈密木卡姆”、“吐鲁番木卡姆”、“喀什木卡姆”等等。这些地区的“木卡姆”在规模、形式、曲调等方面，都各具独特的风格。

如“喀什木卡姆”，共有12套大曲，每套由“琼拉克曼”、“达斯坦”、“麦西热甫”三部分组成。其中“琼拉克曼”意为大曲，起板为自由节奏，音乐风格典雅、深沉。“达斯坦”意为叙事组曲，多为咏叹性，音乐抒情流畅。“麦西热甫”则是采用亦歌亦舞的形式。这12套大曲，每套的程式整齐一致，但其内容、旋律又各有特色。“喀什木卡姆”是维吾尔族音乐中最丰富的一种，全部演唱一遍要24小时。

又如“多朗木卡姆”，流传于多朗地区。目前只搜集到9套。在表演风格上一开始就是高亢、奔放、激昂的散板，给人一种粗犷豪迈的感觉。

再如“哈密木卡姆”，共有19套大曲。每套又分成两部分。开始是一首较长的散板序唱，接着是9至17首歌曲组成的一大组演唱，中间没有间奏曲。“哈密木卡姆”基本上是一种民歌套曲，演唱形式很自由。

维吾尔木卡姆的传统演出形式，是由一名歌手演唱，多种维

吾尔乐器伴奏。乐器中一般包括“萨他尔”、“弹拨尔”、“热瓦甫”、“艾介克”、“都塔尔”、“卡龙”、“苏尔奈”、“耐依”、“巴拉曼”、“达夫”等等。当然，因地区不同，木卡姆的伴奏形式亦有差异，所使用的乐器也是同中有异。

经过专家们的系统整理，《十二木卡姆》已于解放后正式出版。近年来，新疆文艺工作者已经把这套规模宏大的乐曲搬上了舞台，受到了人们的欢迎。

麦西来甫

“麦西来甫”在维吾尔语中是“集会”、“聚会”之意。它是能歌善舞的维吾尔族人民创造的一种娱乐性的民间歌舞集会。

麦西来甫，至今还保持着古代维吾尔族浓郁的游牧生活气息与聚会娱乐习俗的痕迹，表现了维吾尔族淳朴、热情、粗犷、豪放的性格。比如，舞蹈动作中，男子用手在胸前有节奏地左右挥动，有力而迅捷，好似披荆斩棘，寻兽围猎。女子则与男子相协调，或双手或单手高举过头，时左时右，动作健美明快，似为男子举火照明。又如，双人对舞变为圆舞，似狩猎者最后合围，拼力捕杀群兽的场面。最后，所有男女舞者随着欢乐的曲调不停地在原地旋转，好似群居之人狩猎成功，共庆丰收的场面。

麦西来甫有大型小型之分。维吾尔族人在业余、晚间休息时，都可同近邻、亲友相聚，举办小型麦西来甫，吹拉弹唱，亦歌亦舞。而在节假日、婚喜日、贵宾临门或有重要大事时，还常常举办更为隆重的大型麦西来甫。届时，人们都要穿上鲜艳的服装，阖家前往。

麦西来甫因各地风情特征不同，衍变出各种内容丰富、风格迥异的地方形式，有同行间轮流举行的，有季节性野游的，有少

女少妇聚会的等等。

因背景和目的不同，可分为节日麦西来甫、喜庆麦西来甫、集体麦西来甫、邀请麦西来甫、赔情麦西来甫、和解麦西来甫等等。

在众多种类的麦西来甫中，喀什地区麦盖提县的“多朗麦西来甫”最负盛名。它的主要音乐是“多朗木卡姆”，分9个乐章，用多种传统乐器演奏，配有传统民歌，内容多为情歌和歌谣，热情奔放，富有生活气息。它的舞蹈可分为独舞、双人对舞、圆舞等多种形式，节奏热烈欢快，矫健轻捷。多朗麦西来甫内容极其丰富多彩，有敬茶、对诗、抢“黛茉”（腰带）、唱民族、判官司等等。

多朗麦西来甫还有长期形成的、约定俗成的规则。每次都须公推公正无私、有一定威望的人来做首领、“法官”和“衙役”。凡有犯规者，由他们判决处罚。受罚者或赔情，即用自己的饮食水果招待大家；或受罚即表演节目。这些节目常常是引人发笑的游戏，受罚者也心甘情愿地接受。

●苗　族

苗族人口为7,398,035人(1990年统计)，是我国西南地区人数较多的少数民族之一。苗族主要分布在贵州、云南、湖南、四川、广西、湖北、广东、海南等省、自治区。在黔东南和川黔滇交界地带，有较大的聚居区。

苗族自称为“壮”、“蒙”、“毛”、“果雄”、“带叟”等。历史上曾因地而异，在“苗”字前冠以不同的名称，如“长裙苗”、“短裙苗”、“红苗”、“黑苗”等。解放后，根据苗族人民的意愿，统称为苗族。

苗族有自己的语言，苗语属汉藏语系苗瑶语族苗语支，分湘西（东部）、黔东（中部）和川黔滇（西部）三大方言。1956年，创制了4种方言的拉丁字母拼音文字方案。

苗族宗教信仰主要是自然崇拜、鬼神崇拜与祖先崇拜等。

女子服饰

苗族分布较广，各地的语言和服饰差别较大。苗族分3大方言区，18个土语区，服饰各异，即使是同一土语区，也有许多不同服饰。过去志书，往往根据各地服饰不同而把苗族分为数十种乃至百余种，这种分法是不科学的，但从中可见苗族服饰的多样性，尤其女装样式更多，达130多种，仅贵州省就有100多种。各地女装不同，但有共同之点：平时穿的便服，较为简朴，节日的盛装则很讲究。衣服头饰，各种花纹图案，千姿百态，色彩斑斓，挑花刺绣，工艺精美。这几年，苗族服饰在北京、贵阳等地展出，受到国内外观众的赞誉。

贵州西部和云南东北部的苗族妇女，穿蜡染花裙或白裙。裙脚条纹，表示祖先渡过黄河、长江迁徙而来。苗女上衣和披肩，绣的花纹图案，种类繁多，色彩鲜艳，有方形纹、菱形纹、千字纹，有花草、树木、田园、弓箭，记录着祖先在长江、黄河一带的生活，表现他们对故土的眷恋之情。

贵州黔东南苗族妇女，多穿“百褶裙”，名为“百褶”，实际是500褶以上。有长裙、短裙，都用藏青色土布制成。腿上裹布。上装艳丽耀眼，土布作底，绫罗绸缎作面，用五色丝线绣各种花纹图案，常见有龙、凤、虎、鸟、狮、马、花、鱼、蝴蝶等。有的还配缀银花、银片、银铃等，谓之“银衣”。苗女十分喜爱银饰，除上衣缀银外，还有手戴银手圈，颈项戴银项圈，头戴银帽、银梳，头插银角、银花、银簪、银泡、银雀、银针、银蝶等，全身穿戴银饰多达50多种，重一二十公斤，这是富有的标志，也是精美的艺术品。

苗家婚礼

黔东南苗族的婚礼很热闹。在良辰吉日，男家派出接亲队伍挑着肥猪和糯米饭去女家接亲，女家门口设几道关卡，要接亲人喝酒唱歌，即“唱拦门酒”，才准进屋。女家置办喜酒后，派出送亲队，挑着糯米饭，与男家接亲队一道，几十人浩浩荡荡，把新娘送到新郎家。一路上，不断有人来向他们“抢”喜糯米饭（新娘饭）吃。孩子们知道接送亲队伍过路，便在路边用木棍架起简易的小桌，桌上放几双小木筷，然后躲在附近草木丛中等候。接送亲队伍路过时，便把糯米饭团放在桌上。孩子们便一拥而上，抢新娘饭吃。青年们在寨边路口摆一方桌，桌上放着许多空碗和筷子，然后在附近屋里躲起来。接送亲队伍到来后便把糯米饭团放在空碗里。小伙们一拥而上，抢新娘饭吃，还把糯米饭捏成小团，递到新娘和接送亲人们的嘴里，然后唱起歌，祝新娘幸福。

快走到新郎寨子时，队伍停下来，新娘和伴娘打开包袱，取出新衣裙和银饰穿戴打扮，然后进村。新娘头戴银角银花，身穿银饰锦衣，手戴银手圈，项戴银项圈，真是如花似玉。为什么新娘要穿银衣、戴银角？传说先前是女子当家，男子出嫁。但是，男子不愿去，父母亲就拿出许多银子，做成银饰锦衣和银角（牛角状）让男子穿戴，既漂亮，又威武，于是，男子就愿意出嫁了。后来改为女子出嫁，女子也要这一套打扮。这种银衣叫“男衣”（亦译为“雄衣”）。

新娘离家时，右脚先跨出门，到男家，左脚先跨进门。新娘从娘家带来的花伞，交给新郎的妹妹，再进堂屋拜敬祖先。之后，新娘由新郎的妹妹带领，到井边去挑“喜水”，以示她已成男家的人了。

有的地方有“讨花带”的习俗。吃罢晚饭（或第二天），新娘在新房里，小伙子们从外面拖着新郎，闯进新房，向新娘讨花带。新娘身边带着早已织好的许多花带。新娘羞羞答答，小伙子们尽情说笑，伴娘总是为新娘解脱，与小伙子们舌战。最后，新娘在小伙子们的“威逼”下，用花带捆住新郎，并递给每个小伙子一条花带。

游　方

游方是黔东南苗族青年谈情说爱的主要方式。游方一词，系黔东南苗语的音译。

每年秋收到第二年春播这段时间是游方的好季节。青年小伙子吃罢晚饭，便三五相约，到几公里以外去找姑娘玩。他们来到游方坡（也叫游方坪，是固定的游方场所），用木叶吹起悠扬动听的“邀妹曲”，或打口哨传送暗号，或吹芜笛和祖箫，邀请姑娘来游方。姑娘们听到，便相约来到游方坡，与小伙子谈情说爱，对唱情歌，至夜深方离散。喜庆节日，更是青年们游方的好机会。每到苗年或春节芦笛会时，小伙子总是从一个村子游（玩）到另一个村子。姑娘们一般在本村附近与小伙子玩，而小伙子则去几公里甚至更远的地方去游方。白天，他们在游方坡对歌，在芦笛场吹芦笛跳芦笛舞，晚上，相约对歌，谈情说爱。有一些节日是专门让青年男女游方的，如“爬坡节”、“咚冲”等；普通节日是综合性的，游方是其中一项内容。

“游方不把情歌唱，短棒打蛇难拢边”，“情歌便是小姻缘”。唱情歌是游方的主要手段和内容。初见面，要唱“见面歌”、“询问歌”，表示礼节和相互了解。相互了解以后，便唱“赞美歌”，相互赞美。接着，小伙子大胆求爱，唱“求爱歌”、“青年歌”。相互

爱恋，便唱“相思歌”、“求婚歌”。

通过游方，男女双方有了感情，小伙子便唱歌向姑娘求婚。如果姑娘同意，就把礼物送给小伙子，小伙子也送姑娘礼物。开始互赠的是小礼物，如毛巾、头帕之类，如双方订下终身，便脱下新衣或银项圈作凭证，最后约定日期结婚。这种自由婚姻，背着父母，不用媒人，苗语叫“让宇”。当夜深人静，新郎约几个“伴郎”，带着煮好的鲤鱼和糯米饭，来到新娘屋外等侯。新娘也作好准备，收拾衣物，带着伞和米（约250克），在几个“伴娘”的陪同下，悄悄走出家门，与新郎伴郎相会。双方一起到寨边一平地上，摆开鲤鱼和糯米饭，祭祀祖宗和天地，然后分吃。吃罢，伴娘回家，新娘便同新郎和伴郎而去。来到新郎家门口，新郎之妹出来接新娘的伞，把新娘引进屋。第二天，新郎家请一个能说会道的人提着鸡或鸭到女家说亲，并赔礼道歉。如女方父母同意，就把鸡鸭杀来宴请家族长者，承认这门亲事。如不同意，就不收礼。过一段时期，男家再托人送礼来说亲，这时，女方父母即使不愿意，但木已成舟也只好同意。

敬酒礼

苗家以热情好客著称。客人来，主人感到很荣耀，很高兴，总是热情接待。一般待客，菜肴差些不要紧，酒是必备的，以酒助兴，以酒表达情谊。

贵州黔东南苗族敬酒，热情洋溢，妙趣横生。客人来到，如果是事先约定的，主人就备好酒肉，在大门口“拦路敬酒”，多用牛角，叫“敬牛角酒”，也有用酒碗或羊角敬的。客人喝了酒，主人又夹肉给客人吃，然后迎客进屋。席间，酒过三巡，女主人就端起酒壶酒碗来到桌边向客人敬酒，表示欢迎。接着主客互相敬

酒。主人右手端酒碗敬客人，客人左手接碗，右手又端酒碗敬主人，主人左手接碗，主客同时饮酒，这叫“交杯（碗）酒”。如果人多，围着大桌，那么，敬酒时，每人都递酒碗给右边的人，大家同时敬酒，同时喝酒，这叫“团圆酒”。当酒兴正浓时，女主人敬客人一次酒，就在客人脸上盖个印，敬两次，盖两个印，这叫“打酒印”。打一次酒印，大家笑一次，乐一次。主人总是想尽办法让客人喝。接着，主人又用另一种办法来敬酒，即“唱歌敬酒”，唱一首，喝一次。客人往往也是歌手，喝了酒就马上唱酒歌回敬。这样，主敬客、客敬主，不断地唱，不断地敬，一醉方休。但不要过份耽心，客人总是会控制自己的。当客人回去时，主人送客敬酒，虽然没有“十里长亭”，但却别有风味。送客的主人，有几人，甚至几十人的（整个家族送客）。送客人数，根据客人的多少来定。人多时，主人抬着酒缸，端起酒壶酒碗，每走几步，停下来，唱歌敬酒。那依依惜别的话语，那欢乐的歌声笑语，山应谷回，情深谊长。送了一两公里路，甚至更远。最终，主人依依不舍地停下脚步，目送客人离去，客人却是一步一回头。这时，主人和客人又对唱飞歌，那高亢的歌声，“飞”向对方，相互祝福致意。

议　榔

议榔，黔东南苗族叫“构榔”，“构榔会议”。“构”即“议”，“发誓”的意思，“榔”即“规约”，也有的地方（如榕江、从江）叫“埋岩（栽岩）”、“埋岩（栽岩）会议”。

议榔是制订规约的会议，也是执行规约的组织，过去有以村为单位的，也有以几个村或一个地区为单位的。过去有议榔坪，坪中竖一议榔石。主持议榔的“理老”（寨老、长老）一般是年岁较

高，熟悉古理古规，善于言辞，办事公道，在群众中享有威信的人。他们能带领群众制订和执行规约，调解纠纷。如果是一个大寨子议榔，就由寨老召集族长开预备会。如果是几个寨子议榔，则由几个寨子理老联合开预备会，提出规约条文，或检查原订规约执行情况，提出对违犯规约的人的处理意见。议榔那天，人们听到那惊天动地的牛角号声后，便赶到议榔坪集中。理老身着古老盛装，威严地吟诵那古老的理词和制定的规约，吟诵一条，用梭镖猛击议榔石一次，直至吟诵完毕。诵毕，杀一头牛（有的杀猪）在议榔坪分食，剩下的分回家去。人人吃上议榔肉，个个都记住规约条文，自觉遵守。对于议榔的目的，理老在吟诵的理词中说得很清楚，“为了团结地方，为了团结村庄，莫像牛乱跑，莫像马发野”，“为了粮食入仓，为了美酒满缸”，“不准许弄坏田土，大家才有饭吃；没有盗，没有贼，地方才安康”，“议榔要所有人都知道，议榔要所有人都遵守”。议榔词对维护社会秩序，保护公共财产和私人财产，团结对敌等，都有具体要求，对违者的处理也有具体的规定，轻则批评、罚款，重则驱逐，以至处死。旧时“议榔”曾规定，有谁偷他人东西，就罚一头猪，在议榔大会上宣布执行，杀了猪，分给每户一串肉，大家吃肉，接受教训。有时为了对付外敌，也召集议榔会议，动员宣誓。历史上最大一次议榔会议发生在1855年，台江各个议榔组织首领汇集在台江的殿梅尼地方，杀牛会榔，即有名的“殿梅尼起义誓盟大会”。会上，宣誓起义，制定起义榔规，推举张秀眉等为首领，从而掀起了一场轰轰烈烈的苗族农民起义斗争。

新中国建立后，苗族地区除执行政府法令外，很多地方根据议榔的传统习俗，召集村民大会，制订本乡本村的乡规民约。

护寨树

黔东南苗族大多按氏族建寨居住，一个寨多为同一家族，即一姓一寨。过去对村寨地址的选择，很讲究“龙脉”，认为龙脉好则村寨平安，人畜两旺；龙脉不好，就会多灾多难。这里的苗寨多建在山脚下、河边、沟边或山腰空旷处，有水源和可开垦的土地。苗寨前，或是平坦的良田，或是层层梯田；寨后，山林茂密，鸟语花香；寨边，古木掩映。寨边古木，多为枫香树，黔东南苗族崇拜枫木，奉之为护寨树、神树。古歌唱叙祖先来源：枫木变蝴蝶妈妈，蝴蝶妈妈生出12个蛋，其中一个生出姜央——苗族祖先。因为这样，苗族总爱在寨边栽上枫香树。过去人们还常给枫香树敬献酒肉，求它保佑村寨和家人平安。寨边枫木，高大挺拔，枝叶繁茂，把苗寨打扮得更加秀丽，所以，有的人把它叫做风景树。寨边空旷处，是鼓坪、芦笙坪。逢年过节，人们都到这里跳鼓舞跳芦笙舞。一个苗寨，少则一二十户，多则数百户以至千户，雷山西江号称“千户苗寨”。

接　龙

接龙，是湘西、黔东北、川东一带苗族祈求风调雨顺、人寿年丰、吉祥如意的祭祀活动。有全村寨的接龙和家庭的接龙两种，一般在农历二月或十月举行。

传说过去苗族反清斗争声势浩大，清政府为之震惊，以为是由于苗乡龙脉好，藏龙卧虎，于是要派兵到苗乡挖龙山，斩龙脉。苗家知道后，举行接龙仪式，把龙接回家中，祈龙保佑，从而形成习俗。

接龙，首先在堂屋设龙座，即用糍粑捏成五个大龙粑和五个小龙粑，摆在堂屋中间。接着，请巫师祭雷神和龙神。所祭的五个龙神是东方青龙、南方赤龙、西方白龙、北方黑龙、中央黄龙。然后，由男女主人扮成龙公龙母，加上家庭其他成员和亲戚，组成接龙队伍，在巫师的率领下，到河边或井边接龙，取“龙水”。接龙队伍，个个身着盛装，共同牵着一条长长的白练，在山涧河谷中行走，远远望去，犹如游龙穿行。取回的龙水，埋在堂屋地下，谓之“安龙”。最后敲锣打鼓庆贺，主人杀猪宰羊，宴请亲朋。现代的接龙活动，减弱了祭祀因素，增强了歌舞娱乐内容。“四月八”传统节日，也增加接龙项目，增添了节日的欢乐气氛。根据接龙仪式创作的接龙舞，深为群众喜爱。

芦笙节

每年秋收到第二年开春，在清水江畔的苗族村寨，到处都可听到悠扬的芦笙曲。苗族人民十分喜爱芦笙，“听到芦笙响，脚板底就痒”，除平时和各种节日吹（跳）芦笙外，还有专门的芦笙节。黄平谷陇九月芦笙节（农历九月二十七至二十九），凯里舟溪正月芦笙节（农历正月十七至二十），雷山西江苗年芦笙节（农历十月底），丹寨尝卡苗年芦笙节（农历十一月底）等，是最盛大的芦笙节，周围数十公里的苗族群众都来参加，少则一两万人，多则五六万人。

节日开始，人们潮水般地涌向芦笙场（坪）。苗族姑娘快要走到芦笙场时，就在路边草地上停下来，跟随而来的母亲便打开包裹或箱子，取出花衣银饰，把姑娘打扮得花枝招展。这一身打扮简直是艺术的精品、富有的标志。盛装的姑娘缓缓步入芦笙场，千万双羡慕的眼睛投向她们。

这时，“芦笙头”先吹奏起芦笙，接着人们便都吹起来，跳起来。芦笙队有两人一组的，有几十人为一队的，小芦笙吹曲，大芦笙和莽筒伴奏，那音响，震山谷，冲云霄，撼人心弦。姑娘们围成圈，随着芦笙曲起舞。年轻的芦笙手，开始吹“开场曲”，意思是感谢当地老人热情接待，赞美姑娘的漂亮。“开场曲”后，接着吹“邀请曲”，邀请姑娘跳芦笙。姑娘们开始跳了，小伙子就吹“敬礼曲”、“平步曲”、“转身曲”等等。当跳得正欢的时候，小伙子吹起“讨花带曲”，姑娘们听了，就取出早已准备的花带系在小伙子的芦笙上。小伙子得了花带，就吹“感谢曲”。这是一般礼节，但有时却会播下爱情的种子。

芦笙节是怎样兴起来的，说法不一。有个传说是：从前有个漂亮的姑娘，被白野鸡精抢走。青年猎人在森林里听到姑娘呼救，便把白野鸡精射死，姑娘得救。姑娘的父母四处找青年猎人，找不到，便想了个办法，举办芦笙会。青年猎人戴着白野鸡尾来参加芦笙会，姑娘一眼认出，便与他成亲。从此，每年这一天要都举行芦笙会。

芦笙会还举行斗牛、赛马、斗雀等活动。斗牛是在芦笙场附近的旱田里举行。四周人山人海，十几头牛分散在人丛中，个个膘肥体壮，头系彩带铜铃，圆睁红眼，跃跃欲试。待编好轮次后，牛主即牵牛进场。当两牛相斗时，四周的呐喊声、锣鼓声，惊天动地。芦笙在斗牛旁边吹奏“斗牛曲”，为牛助威。斗胜的牛，趾高气扬，观众为之喝彩，牛主引以为荣，寨上的人，敲锣打鼓，吹奏芦笙，为之祝贺。

近代的芦笙节，还增加许多比赛项目，如打篮球、爬山、对歌等。

姊妹饭节

吃姊妹饭，黔东南苗语叫“鲁嘎良”。“鲁嘎”直译为吃饭，“良”即伙伴，就是姑娘们会餐。平时客人来，姊妹们常常凑些酒肉米饭，合伙会餐招待，这是吃姊妹饭的形式之一。别有风趣的是，每年农历二月十五（有的地方是三月十五），全村姑娘集中会餐过节，请外村男青年来参加，大家唱歌谈情，并开展各种文化娱乐活动，这就是姊妹饭节。

传说古时候清水江畔有个苗寨，姑娘长得很漂亮，也很勤劳，但因为这里偏僻，外村青年们不知道，互不来往。于是，他们想了个办法，在二月十五这天，全村姑娘集中起来，捉鱼捞虾，杀鸡备酒，煮糯米饭，宴请外村青年小伙，大家唱歌跳舞。这样，姑娘们就找到意中人。年年如此遂形成习俗。

节日前两天，母亲们就忙着准备酒肉，蒸各种花色的糯米饭，作过节准备。节日这天早上，大姑娘约大姑娘，小姑娘约小姑娘，十人一帮，八人一伙，大家凑米、肉、鸡蛋到一家去，请这家老妈妈煮。姑娘们带着鱼虾窠扒到田里捉鱼虾，不管是哪家的田，都可去捞（平时是不允许的），拿回来煮吃。下午，姑娘们会餐后，就赶紧梳妆打扮，准备接待外村小伙子。她们在寨边游方坪上安放坐凳，小伙子来了，各坐一排，摆成阵子，谈情对歌。性急的小伙子向姑娘“讨”花糯米饭（姊妹饭）吃，姑娘们不会马上给，要与小伙子对歌。小伙子对歌取胜了，姑娘才把早已准备好的用布或竹篮包装好的花糯米饭送给小伙子。这饭团里有个“谜团”，包的是姑娘的心思，若饭团里包着包谷面，就是希望小伙子回赠姑娘绣花用的丝线；包树叶，就回赠帕子；包树钩，就希望两人的心相钩（心相连）；包树叉，是希望做一般朋友等等。第二天，

除青年男女对歌外，还举行斗牛、赛马、踩鼓等活动。男女老少，主人客人都沉浸在欢乐的节日气氛之中。

跳花节

跳花节是贵州省中西部和云南省的苗族青年男女吹芦笙和谈情说爱的传统节日，多在正月上中旬举行，个别地方在二月或十月举行。

跳花地点叫花场，也叫花坡。花场要栽花树。清乾隆年间爱必达著《黔南识略》中记“以冬青树一束植于地上，缀以野花曰花树。男女皆艳服，吹笙踏歌跳舞，绕树三匝曰跳花。”现在各地的花树多为杉木，也有用大竹的。树高三米至十几米不等，树冠悬挂各色彩带（或红绸），有的保留树冠枝叶。

跳花节除青年参加外，许多老人和小孩也去观看。有的从几十公里外提前赶来。节日这天，人们从四面八方拥入花场，花场主在花树下洒酒吟词，吹奏芦笙。礼炮响后，宣布跳花开始。小伙子先随着花场主绕花坪吹芦笙，姑娘们随着芦笙曲翩翩起舞。有的地方歌舞进入高潮时，姑娘们就“牵羊”。她们用花手巾或红绸一端拴在吹笙小伙子的腰带上，一端自己握着。小伙子被牵得越多越光荣，在旁观看的父母也为之高兴。许多地方的芦笙场上，芦笙手表演许多难度较大的芦笙舞，有双膝全踢前蹲吹芦笙的，有头和脚支地吹笙的，有头脚支地腰腹架空翻滚吹笙的，有头下脚上爬楼梯吹笙的。更为精采的是爬花杆吹笙比赛。芦笙手手捧芦笙，双脚紧扣花杆，脚朝上，头朝下，一面吹笙，一面用脚猛抽，引体向上，直达竿顶，然后缓缓下来。这种集杂技、歌舞、音乐于一炉的表演，技艺高超，场面惊险，扣人心弦。白天，青年男女用芦笙、口琴、木叶等吹奏表达爱情的调子，同时，唱歌跳舞，

共同欢乐。相互有了初步的好感，便约晚上同去某家作客，或者姑娘请小伙子到自己家里作客，很多人就通过这种活动而获得如意的终身伴侣。

四月八

每年农历四月初八，贵阳市郊的苗族，穿着节日盛装，会集贵阳市中心喷水池，吹芦笙，吹箫笛，唱歌跳舞，这就是贵阳苗族“四月八”传统节日。

传说贵阳市区，原叫黑洋大箐，苗语叫“格洛格桑”，原为苗族住地。苗族首领格波绿率领族众，开垦良田，生活富足。他射死母猪龙，得龙心宝物，使这里风调雨顺，人寿年丰。有个叫河都务的部落对此垂涎，骗走龙心，占领这片土地，苗族被赶到附近的高坡，格波绿率领族人抵抗，不幸牺牲。这一天正是农历四月初八。九年过后，苗家出了一个青年英雄叫视德龙，他率众攻打格洛格桑，不幸被箭射死，他牺牲的地点就是现在的喷水池，时间也是农历四月初八。这以后，苗族人民怀念故土，怀念英雄祖先，每年四月初八都集中到喷水池唱歌跳舞，附近的布依族也一起过节。

现在，贵阳“四月八”，除了传统的群众性歌舞活动外，政府还组织各种文化活动和比赛，各族人民和中外游人也踊跃参加，市区主要街道，人山人海，盛况空前。

●彝　族

彝族人口为6,572,173人（1990年统计），主要分布于云南、四川、贵州、广西四省、自治区。四川省凉山彝族自治州是我国最大的彝族聚居区。

彝族自称繁多，因地而异，有“诺苏”、“密撒”、“腊苏”、“罗罗”、“撒尼”、“阿细”等。解放后，根据广大彝族人民的共同愿望，以“彝”作为统一族称。

彝族有自己的语言文字。彝语属汉藏语系藏缅语族彝语支，分为6种方言。原有一种表意文字，史称“爨文”。1975年，制定了四川《彝文规范试行方案》，确定了819个规范彝文文字。

彝族的宗教信仰主要是万物有灵的自然崇拜和祖先崇拜。云南、贵州的部分彝族受道教和佛教的影响较大。

土掌房

滇中、滇南一带的彝族，喜爱冬暖夏凉的土掌房。土掌房是四周以土舂的墙（即夯土墙），也有石墙，上面搭上横木，再铺茅草、麦草，最上面铺沙泥、窑泥、粘土。这是很实惠的就地取材的特殊建筑。山区、半山区的彝、哈尼、汉族人民喜爱这种建筑。土掌房按自然的地势斜度安排楼的层次，一、二、三层不等。房顶可用来晒粮、打粮、晒衣物等，既清洁，又不受鸡狗干扰。遇雨时，用木制的厚板拍捶裂缝，雨水自然淌走。多数土掌房用木梁、木筋框架，支撑得比较牢固。家境较富裕的人家门楣饰八卦，檐前伸出一根龙面虎嘴的雕花木头，寄托着他们的古老信仰和审美情趣。

吃火草烟

吃火草烟是彝族青年男女夜间聚会、对歌玩乐的一种活动。滇南彝族喜抽筒烟，男女玩场聚会，由姑娘给小伙子装烟、燃烟，每燃一次，往往要对不少民歌，因此称作“吃火草烟”。

玩场一般是在本寨子的公房里，有时也选择在山头上、树林里、篝火旁。届时男女青年尽情唱、跳、吹、弹，嬉戏往往通宵达旦。当玩到兴浓时，男女相互唱“奢调”，这时，姑娘拿上点燃的火草绳子绕来绕去唱道：“嫌我不嫌我，给你点烟火？”小伙子回答：“帮我点烟火，恐怕雷打我。”姑娘又唱：“雷打门前对高树，不打郎和妹。”就这样一唱一和，往往使小伙子的手都抬酸了，才得到姑娘点燃一次烟筒。

相传，很早以前，彝家姑娘如爱上心爱的小伙子，并不给他

点草烟，而是在他的新衣裳上烙一个大洞。小伙子看到这情景，自然分外高兴。姑娘又微笑着拿出针线，在洞上绣上一朵美丽的花，这也是姑娘向小伙子表露的爱情之花。后来在新衣裳上烙洞渐变为点火草烟的习俗。

乌蒙彝族婚俗

阳春三月，江南遍地青绿，昆明百花怒放，而云贵高原的乌蒙山，却是“沾衣松雾微成雨”，另有一番景象。乌蒙山不仅气候迥异，山峦起伏苍翠，别具一格，而且乌蒙山彝族人民的婚姻习俗，也是非常有趣的。

首先，订婚要吃允口酒。过去绝大部分是包办婚姻，都必须请媒人去提亲。媒人到女方家介绍男方情况，女方父母满意了，答应两家开亲，这被称为女方“允口”。此后，男方请媒人和儿子背上一壶酒到女方家去吃酒，称之为吃插香“允口酒”。彝族人很注重信用，一般答应之后绝不变卦。女方父母喝了男方送来的“允口酒”，就算订了孩子的婚姻大事。

吃过允口酒，还要行“吃烧鸡”仪式。由于女方允许与男方结下亲家之约，媒人与男方父子可去女方家送礼吃饭。所送礼物只是一对鸡，一对牛角酒。女方家杀这对鸡，招待媒人与男方父子，然后把鸡的两支大腿骨（一般称为鸡卦），分成两包，男女两家各拿一包。过去彝族识字者很少，没有文字的凭据，这对鸡卦就是结婚证了。

过去，由于青年婚姻大都是父母之命，媒妁之言，男女双方常都不满意。一般在送礼商定结婚日子的时候，女方青年的伙伴都相约唱“酒礼歌”，用歌来控诉买卖婚姻，抒发心中的悲愤。

唱“酒礼歌”只有40岁以上的中老年妇女兴致最浓。她们手

上甩着手巾，由一位大妈领唱，其余三人帮腔，周围的妇女低低相和：

一只凶狠的野狼，
在沟边转来转去；
放在沟边的一群小猪，
自由自在地拱吃草根。
一只幼弱的小猪，
被野狼一口衔走了。
这是一件可怜的事，
真是说不出的伤心。

一只可恶的老鹰，
在蓝天里飞来飞去；
一群小鸡在篱笆下，
自由自在地啄虫；
一只瘦弱的小鸡，
被狠毒的老鹰叼去了，
这是一件凄惨的事，
小鸡的伙伴着实痛心。

一个可恨的媒人，
在房前屋后走来走去；
一伙可爱的姑娘，
在家中自由自在地织布唱歌；
一位秀丽俊俏的姑娘，
被可恨的媒人说走了；
这是一件悲凉伤心的事，

剩下的姑娘十分悲凉。

这低沉的歌声给人们留下深刻的印象。

行完“吃烧鸡”仪式，还要行结姻仪式。结姻，彝族称“送期”，即男方送女方布匹、钱财。富者可送半边猪、一斗米、一斤盐；贫者送猪前腿肉或后腿肉。灯笼、彩旗、唢呐等，贫富都必办。结婚时，只能请同辈亲戚当“押礼先生”。在乌蒙山区，这个“押礼先生”必须是为人正直，能说会道，善于打圆场，为两边亲戚信任、喜欢的人。“押礼先生”负责送去男方给女方的礼品，过去是布匹、衣料、银器首饰等，而今则是表、毡子、毛毯一类。到了女方家门前，必须提防女方的亲朋前来戏打。被打得越重，认为新婚夫妇越发富贵，这是彝家的古老风习。

拖拉婚仪

云南彝族的一支，在他们的婚俗中，有一种独具一格的仪式——拖拉婚仪。婚期一到，男方派人到女方家娶亲，派去的人必须是同辈的两个小伙子和四个姑娘。两个小伙子的任务是抱一床新被子，这自然比较容易。四个姑娘的任务就比较艰巨了。她们要拉回新娘。六个娶亲人一进新娘家在与女方家寒暄一阵后，就开始拖新娘，新娘自然要极力反抗，快要拉出门坎，新娘又奋力逃回小屋去，如此反复多次。人们认为，反复拖拉会给新人带来幸福，也显示出新娘的身价。如果遇上体魄壮实、力气较大的新娘，那可苦了四个娶亲姑娘。只要把新娘拖出大门上了大路，就不用费力了，新娘会愉快地尾随娶亲人，而且娶亲小伙子还要将被子顶在她头上。至今，这一独特的风俗仍被完整地保留着。

今日的彝族男女青年都是自由恋爱。拖拉婚仪只是作为娱乐形式保留下来。

背新娘

背新娘是彝族古老的抢婚遗俗之一。这种独特的婚礼仪式，至今较为完整地保留于滇东、滇西一带。

彝族青年结婚的仪式是比较隆重的。首先，由男方派出一批小伙子和同辈姑娘到女方家娶亲。娶亲队伍人越多越显得有气派，一般是由媒人、唢呐手、新郎的伙伴和陪郎组成。陪郎必须是男方的兄弟、堂兄弟或表兄弟，条件是父母健在、人品好。人们相信这会给新郎新娘带来吉祥幸福。娶亲不许骑马、坐轿，只能步行。每过一村唢呐手都需高声吹奏。到了新娘家，先在用树枝搭的看棚里坐下，喝茶和糖开水。待吃完饭后，唢呐手吹迎亲调，吹过三遍，新娘的哥哥或弟弟从楼上把新娘背下来，一起到新郎家去。途中，过河、过桥、爬坡、上坎，都必须背着新娘。送亲娶亲的人，一路上弹着三弦、月琴，吹着唢呐、短笛，唱着“背新娘歌”、“娶亲调”等，有的还边走边舞，热热闹闹地把新娘迎到新郎家。

娶亲的队伍快到新郎家里，有人鸣枪、放鞭炮传递喜讯。新郎家人出来把娶送亲的人和新娘迎入家中，由老人或有名望的毕摩（彝族祭司）为新郎念进亲经，新娘新郎拜天地和父母及祖先，喝交杯酒。尔后男家要举行婚宴和联欢活动，人们一边喝酒，一

边对歌。小伙子拉二胡，姑娘吹木叶，围成一圈，共同跳舞。新娘新郎也被众人拉入联欢队伍中，尽情歌舞，往往闹到通宵。

丧葬舞

滇东、黔西一带的彝族，丧葬仪式特别隆重。在丧葬仪式上要跳丧葬舞，这种舞蹈威严肃穆。由于丧葬舞规模宏大，耗费不少，因而在大部分地区已逐步消失，只有部分地区仍保留这古朴、原始的葬仪。

老人死后，在安葬的前一天晚上，亲戚朋友要组织“一棚狮子”（由几十人组成的庞大闹丧队伍）。他们抬着祭品、经幢、布匹、绸缎，鸣枪、放爆竹、吹唢呐，浩浩荡荡，前来闹丧。丧家得知信息，孝子要戴白包头出村跪迎。吊丧的队伍进了村子，火枪声、爆竹声、大号、小号、唢呐声、锣鼓声震耳欲聋，小山村顿时沸腾起来。吊丧队伍的顺序是：首先是一个扛大刀的引路人，只见他挥舞大刀，来到灵棚前，一刀砍掉茅草人；其次是一戴面具的哭宝宝，后面跟着舞狮子的和两个耍金钱钗的；之后是两个耍鼓杆的；然后是持齐门棍的；还有耍镗耙的，弄大鞭的，耍金钱棒的，耍链的，耍流星锤的等等，边走边舞。有的还挤眉弄眼，做咬耳朵、亲吻等滑稽动作，有人还吼着驱邪撵鬼的吆喝声。在人们的传统观念里，丧葬场面越大，越显示子孙富贵，这种丧葬仪式现已逐渐消失。

花腰带

红河岸畔的彝族男女青年的订婚礼品是很别致的。女青年送给男青年的一般是绣着花、鸟、鱼、蝶的花腰带，男方送给女方

的是手镯、耳环。绣花腰带成为男女青年真诚相爱的信物。谁有了花腰带、耳环、手镯，就表示他（她）有了意中人了。

关于“花腰带”流传着一个美丽的民间故事：从前，有一对恋人，感情很深，可父母却硬把女儿嫁给富豪子弟。小伙子悲愤至极，殉情于约会地点，变成蝴蝶。姑娘也气死在“抢亲”路上，变成花朵。善良的鸟儿给蝴蝶和花朵传递信息，促它们团圆。花、鸟、蝶的花腰带赠送情人象征着对爱的坚贞。至今彝族男女青年仍送这独特的订婚礼品，以表示对爱情的诚挚。

鸡冠帽

滇中南一带的彝族姑娘，最喜欢戴银光闪闪的鸡冠帽。鸡冠帽形似雄鸡鸡冠，雄赳赳，红彤彤，把勤劳、朴实的彝家姑娘衬托得婀娜妩媚。

鸡冠帽，是用硬纸剪成鸡冠形，再用1200多颗银泡镶绣而成的。远远望去，很像一只啼鸣的雄鸡。关于鸡冠帽，还有不少优美动人的传说故事。

传说，有一对长得似金竹一样标致的青年，在一个月明的夜晚到林中约会，不巧被魔王发现，小伙子被魔王杀死。姑娘不堪被辱而逃跑，魔王紧追不舍，当追到一村寨时，雄鸡啼鸣，魔王不敢再追。姑娘知道魔王怕公鸡，就抢了一只雄鸡到小伙子身旁，想不到小伙子奇迹般地复活了，一对情人终于结成美满婚姻，过上了幸福美好的生活。

在彝族撒梅人中也有一则传说，相传古时候异族侵犯，人们还在梦中，由于雄鸡突然啼叫，他们被惊醒后安全转移。姑娘们为缅怀公鸡的功绩，就按它的形状制成鸡冠帽戴在头上。鸡冠帽是彝族姑娘吉祥、平安的象征。每逢节日，姑娘们都要精心戴上

它，以示雄鸡永伴，幸福吉祥，那鸡冠上的大小银泡，表示星星和月亮，给她们带来光明。

父子连名谱系

至今大多数彝族地区每个家支都有世代相传的父子连名谱系。除以氏族名作为姓氏外，一个人的全名还应包括家族名、父名和自己名。如阿侯鲁木子的全名应为阿候·布吉·吉哈·鲁木子。其中，布吉为家族名，吉哈为父名，鲁木子为本名。主要是父子连名，具体方法是父亲名字末一个或两个音节与儿子名字的前一个或前两个音节相同。如凉山彝族的一道谱系：阿则伊勒——伊勒本兹——本兹黑也——黑也尔子——尔子毕克——毕克杰耶——杰耶卜日——卜日石毕——石毕吉赫——吉赫俄普——俄普别沙……。彝族人对家支谱系十分重视。在贵州彝文文献《西南彝志》中父子连名的谱系达130多代。在四川凉山彝区，每个家支都有50代以上的谱系，尽管代数如此之长，但每个男子都能一口气背出，有的不仅能熟背单传的家谱，而且也能熟记家支的分支谱系，一口气能说出数百个人的名字。一般土司与黑彝男子都可以背诵古时候祖先的名字。如果一个黑彝远离自己的家支进行活动，或在冤家械斗中被对方俘虏，只要能背诵谱系说明身份，就可得到亲戚与友好家支的帮助，避免陷身为奴。家支成员到陌生处或遇到陌生人，证明其身份的，主要就是看他能否背诵家支谱系；而在某些节日、集会场合，谁能把家支谱系和祖先业绩讲得流畅、系统，而又娓娓动听，谁就能博得人们的尊敬。由此可见，作为父系血缘纽带联结起来的父子连名谱系，在彝族的社会生活中具有重要意义。

婴儿命名

凉山地区彝族婴儿命名的时间无一定律，有的在婴儿出生后的五日、七日或九日，多取单日为吉，有的在婴儿出生一月后择日进行。凉山彝族在为孩子命名时，先由母亲将孩子第一次抱出家门以“见天沐日”，并作象征性喂食，有的还要请毕摩杀羊杀鸡，念经祈福，赶鬼驱邪。在煨烧羊肉、遍飨亲友之际，或由毕摩、或由父亲为婴孩剪去后脑胎发，并为之题名。有的也请祖父母、或外祖父母或其他长辈题名。取名的具体根据和寓意，一般有以下几类：一为按兄弟姐妹排行命名，即以兄弟姊妹的排行顺序，依次命名，男孩子阿木、木乃、木吉、木嘎、木牛等，女孩为阿依、阿呷、阿芝、阿各、阿略等。名前冠以姓氏，名后加上性别代称，便是孩子完整的姓名。如沙马家的长子，便叫“沙马阿木子”；吉吉家的二女儿，便叫“吉吉阿呷嫫”。二为根据所崇拜的图腾命名，凉山彝族尤为崇拜虎、鹰和一种称为“伟”的走兽，人名中多有“拉体”（猛虎）、“拉立”（红色虎）、“九体”（翔鹰）、“九诺”（黑色鹰）者。三为根据生母命宫岁位来命名，即以孕妇分娩时的虚岁年龄，按八向方位反时针方向推出相应的岁位，即以此命名。如孕妇分娩时是23岁，推得其岁位为东方，即日出方“布都”，其所生婴孩便得名“布都”，寓有旭日东升，人丁兴旺之意；此外还有“伊木”（水尾方南）、“立色”（东北方）等。四为题贱名，先请毕摩为婴孩排流年，如婴儿命宫不好，怕日后夭折或多病多灾，则向牲畜洒以酒肉，有的还特意用畜粪抹在孩子头上，而名以“牛儿子”、“青马儿”、“小狗儿”，甚者有名以“勒土（猪食槽）”的。用这些贱名，以示鬼神，“这是一个脏孩子、孬孩子”，望鬼神不要将其带走。此类名意在防子夭折，以求免灾，易于抚育，带

有符咒意味。五为以鲜花命名，这仅限于女婴，常见的有“曲韦”（白色鲜花）等。六为以山水巨石命名，彝人崇拜大自然，认为山川河流均有莫大的神力，故用地物给孩子命名，如“尔诺”（巨石）、“瓦特”（峭岩）、“伊哈”（大江之子）等。此外，凉山彝族每人都有两个名字，其中一个为“主名”，多在正式和庄重场合使用，并只有长辈才能称唤，另一个为“次名”，则人人均可呼叫。如金曲家一男孩的主名为勒什，次名为尔戈，一般外人只知其次名，主名几乎很少为人知道。

女子成年礼

四川大小凉山女子成年时举行的名为“沙拉洛（勒）”的换裙仪式，以衣饰的改变标志社会承认并接纳受礼者进入成人社会。

大凉山彝家少女成年时基本沿行此礼，称“沙拉洛”，意即换童裙。一般在女子15至17岁之间举行，个别也有在女子初潮后举行的，但多择单岁，取其吉利，具体日子须请老人择算吉日佳期。一般由母亲或长辈妇女主持，仪式参与者皆为女性，但有的地方也不甚严格。换裙礼主要有三项。一为改变发式。仪式前彝家少女梳独辫垂于脑后，仪式上受礼时则在头发顶际中分两股，在耳后梳成双辫，再戴上头帕，额前的刘海用少许水打湿抹光。二为改变耳饰。换裙前一般以耳线为饰，以后就将耳线取下，换上银光闪闪的耳环。三为改变裙式。换裙前女子穿浅色（一般为红白两色）两截童裙，裙边镶有一粗一细两条的黑布边。换裙后，则穿上中下三色相连的成年百褶裙。仪式开始时，参与者要说些逗弄少女的戏话和祝愿词。换裙程序均由家里请来的一个漂亮、能干、要好的妇女执行。仪式内容各地大同小异，一般要延请毕摩断口。随后为受礼女子挂耳环，梳双辫，再换新裙。换裙仪式结

束后，家里要杀猪宰羊宴请宾客，穷户也要杀鸡泡酒来招待亲邻。这时，男子方可参加。举行过换裙礼的女子，其社会角色也相应地发生转换，她可以自由自在地赶场、观看赛马、出入社交场合；可以交朋友、找情人，即在社会中已具有与性成熟相应的社交权利。

十月太阳历

十月太阳历是彝族先民创制的一种特殊的历法。彝族太阳历以十二属相轮回纪日，由三个属相周 36 天为一个月；360 日为一年，即一年为十个月。十个月终了，另有五日放置于十个月之末，作为“过年日”，拜亲访友，游乐饮宴；尔后，新年伊始。每隔三年在五天“过年日”内加一个闰日。如果上年元日为鼠日，由于一个月为三个属相周，则该年每个月的首日恒为鼠日；这样，五天或六天“过年日”的开端也是鼠日。如果过年日是五天，则下年元旦为蛇日；如果过年日是六天，则下年元日为马日。如果下年元日为蛇日或马日，则该年每月月首恒为蛇日或马日。这样，各月的首日及所有对应日期的属相完全相同，第二年纪日的属相也只须在上年的基础上推后五或六个属相就行了。这种历法，不按月亮盈亏，一个月为 36 日，一年为十个月另加五日或六日为过年日。因此，它是太阳历，以地球绕太阳为周期。

历法是人们在生产生活中计算较长时间的系统，它必须大小适度，才便于传用。人类世代积累的经验证明，日、月、年三个不同的时间长度，须按照自然界的规律，相互配合协调，才符合简便实用的规律。寒来暑往，草木枯荣，周而复始的变化与人们生产生活的关系十分密切。彝族十月太阳历是由观察星象北斗柄的指向来划分严冬星回节和盛夏火把节，以此确定寒暑的。

彝族借观察北斗星的斗柄指向定寒暑年节，傍晚斗柄正下指为大寒即年终星回节，斗柄正上指为大暑即火把节；由此把一年均分为上下两半年，各占五个太阳月。可以算出，十月太阳历一年的长度为365．33日。结构整齐、科学简明、使用方便是太阳历的特点。

毕　摩

毕摩是彝族的祭司，也是彝族文化的保存者和传播者。古代彝族社会在很长的历史时期里实行的是“兹、莫、毕、格”的制度，即兹——君，莫——臣，毕——祭司，格——工匠。由这四种职务统治管理各彝族地区。可见毕摩在历史上曾是统治阶层中有举足轻重作用的职位。随“改土归流”政策在彝族地区的推行，“兹、莫、毕、格”制度也相继消亡，“兹、莫、格”在彝族地区逐渐失去了作用。但是毕摩由于掌握了彝族文化，在社会中仍然有威望，仍受到人们的尊重，被视为令人羡慕的职业。至今毕摩在彝族社会中仍享有较高的社会地位。

毕摩掌握了比常人更多的历史、文化、科技知识，主要从事宗教活动。作为宗教职业者，其主要职能为司祭仪、行巫医、决占卜、主盟誓。他们主持的宗教仪式有安灵、送灵、禳灾、祈福、驱鬼、治病、招魂、占卜、盟誓、神明裁判等。作为彝族社会中掌握文化的人，毕摩是彝族传统文化的保存者和传播者，其文化方面的职能是整理、规范、传播彝族文字，撰写传抄包括宗教、哲学、伦理、历史、天文、医药、农技、工艺、礼俗、文学等各类文献。毕摩在彝族人的生育、婚丧、疾病、灾患、征战、节庆、出猎、播种、联盟、联姻等生产、生活活动中都发挥着一定的作用。

毕摩的传承以世袭相续为主，也有拜师受业的。前者父传子

或祖传孙，一般在子孙中选择岁位、属相适于做毕摩且聪颖好学者；拜师学习的，举行拜师仪式后方接纳为徒弟。学习的方式主要是跟随老毕摩四处做各种仪式活动，仪式前由老师讲授，仪式中帮助操作，跟随念诵经文，仪式后由老师答疑解释。有空便抄写经书，背诵经文。学习期限因人而异，因学习的法事活动难易而异。有的二三年，有的七八年方可出师。在人们心目中，有家传渊源的毕摩，其法术能力总要比拜师学习而成者高超。如逢安灵、送灵等重要的仪式活动，必须要由有家传背景的毕摩来执祭。

法具是毕摩从事祭祀活动的手段和根据。毕摩法具有鹰爪、神扇、神铃、神签筒、神笠和经书。各种法具在各种仪式中均有自己特殊的功能和用途。鹰爪是毕摩的护法物，也是毕摩神力的象征物。神扇用以祭鬼驱鬼，招魂送魂。神铃因其铃声传布的广远来通神鬼。神签筒内装竹签用以占卜。神笠是毕摩的保护伞和避邪物。经书是毕摩做法事的重要根据。

“锁德”与“锁宰”

在哀牢山彝族地区，盛行着“锁德”、“锁宰”习俗。这种习俗在红河州石屏县龙武、哨冲尤为盛行。

“锁德”、“锁宰”是彝族尼苏语，意为打记号。“锁”为“记号”，“德”为“打”，“宰”为“认”。在彝族社会生活中自然界的一件物品，一旦打上记号，该物即为打记号者所有。这种“锁德”、“锁宰”的使用范围很广。

人们在路旁或在深山老林中发现蜂巢，便在蜂巢旁边打上记号，他人见到“锁德”后，知道该巢有主，不再猎取。行人走在路上看到牛马粪，又没有带积肥工具时，就在粪堆上插上草或树枝，或放一块小石子，有的则把粪便翻过来或移动个位置，就表

示其粪有了主，他人不再去占有它。上山伐木，发现被人削去部份皮的树，就知道该树已被人“锁德”过，也不会再去砍它了。

旧时彝家山寨碾米、磨面，全靠木碓、石磨。如需舂米磨面，就得先去“锁德”、“锁宰”。其办法是用扫帚打扫碓房或用自家的木碓插在碓杆头部，后来者见此“锁德”也就只有自觉地排队了。

“锁德”习俗还运用在生、死、病痛以及宗教禁忌中。门头上挂羊角，左右侧门挂雨帽，门槛下烧稻草，门外竖犁头等都是“锁德”的象征。它们分别向人们昭示一定的意义。如门口竖犁头、门头拴黄泡刺表示屋内有卧床不起的病人，见此“锁德”，邻居及村里亲友就得登门看病、送药、送米、蛋、肉、糖等滋补品。门框旁插上燕尾似的白旗，则表示屋内人去世，见此“锁德”，人们必须相互转告，主动到该家表示哀悼，帮助料理丧事。门口挂上雨帽的“锁德”表示禁忌，说明该家生了婴儿，正坐月子，禁止外人入内。门上挂羊角的“锁德”也表示禁忌，说明正在招魂或刚刚招完魂，禁止入内。

祭　倮

每逢农历的二月间，属牛、龙、猴日，是彝家祭倮的好日子。此时梨花竞放，桃花似火，滇南呈现出一片生机盎然的景象。

祭倮，即祭神树，彝语称“咪嘎哈”。届时，每户一个男子，身带木刀，头顶糯米大饼，饼插鲜花，相聚于神树前，烧香、磕头、祈求神树保佑全村吉祥平安，消灾祛病，羊牛兴旺，五谷丰收。祭司对着神树叩跪三拜之后，边杀猪边祈祷：“寨神啊，你上通天，下及地，别处天旱，这里不旱……求您保佑全寨人畜兴旺，五谷丰登。”并以猪、鸡血染大饼和木刀，再将大饼顶回家中，全家分食，以示人人受福、受禄。木刀置门头，以驱邪魔。猪肉则

按全寨人数平分。本寨的其他民族，凡参与祭祀的，也分得一份，决不拉下一人。家人出远门，这份“神”赐肉一直留着让出门的人返家享用。

祭司还从附近一棵树下，取一块非常平滑、形状美观的山祖石，用清水洗净后置于树下，众人朝石叩拜。山祖石被认为威灵无比，只能由祭司藏于神树下。祭司必须是人品好、有儿有女、身无刀枪伤者。

有的村寨在向神树神石敬酒前，先由两个小伙子端着酒碗，绕祭场一周，学着布谷鸟或骏马叫唤。他俩边走边问大伙：“可听见了，布谷鸟叫啦，种得庄稼啦，丰收在望啦。”说罢众人相聚喝酒。人们围成一圈，游戏、唱歌。这天人们有天大的不顺心也不得发脾气，以示让神树喜欢。

关于祭倮，还有一则传说：相传有一彝家英雄名叫阿倮，力大无比。他到彝山开辟草山，适有恶魔“压嫫”侵扰彝寨，人畜不安。阿倮来到“压嫫”屋中，用计杀死妖魔的七个儿子。妖魔告到阎王处，阎王反要处死阿倮。阿倮屈死，尸体变成参天大树，即神树；阿倮的心变成坚硬的石块。后来彝家便有了敬神树、立神石的风俗，以悼念阿倮为民除害的英雄事迹。以祈阿倮变的神树神石保护寨子，保佑人畜安康，送来丰收年景。

库施节

“库施”是彝语，意为过新年。彝族的历法是十月太阳历，每当新老年交替的时候，大小凉山彝族要欢度一年一度的库施节。

库施一般以自然村寨为单位，在秋后的农历十月上旬内选择吉日举行。不同地区和不同村寨过年的日期也不相同，每年的具体过年日期也不固定，它是由占卜的方式来选定的。其择日方法

也不尽相同。有的村寨是由毕摩占卜而定，如果次年获得好收成，便将这天作为吉日继续沿用，否则另择日期。若过年这天有人死亡，就永不用该日过年。有的村寨是根据彝历来择日，一般在彝历兔月（即农历十月）中选定，选择哪几天要根据传统的计算方法来确定。按彝历计算，属猴、属虎的日子为佳，属狗、属鼠的日子次之，忌属猪、属龙日；但都以“它波”日为最好。“它波”是“六姐妹星”和月亮交错的日子，28 天交错一次。“它波”后的七天内都算“吉日”。忌“威尼”日，即“它波”前七天。

吉日择定后，彝寨就忙碌起来了。按彝族传统习惯，过年后七天内不能下地干活、推磨、砍柴，更不能吵架，燃柴须劈好，按单数堆成几堆。家家户户还要忙着缝制新衣、磨面碾米、买盐打酒、邀请亲友。

节期一般为三天。第一天各户门口就烧起一堆火，浓烟滚滚直升天际，含意有二，一为祈丰年，二为请祖先。然后把装好燕麦、荞面和碗筷的口袋，经过“碳醋”熏过挂在主位的上方，其意为请祖先神灵食用。主事者还要口念咒词，驱除邪恶。这也叫“清洁法式”，即把各种炊具、刀子放在门口经“碳醋”熏过后才放回屋内，接着烤荞饼，烤好后先祭祖宗。然后开始煮饭，准备杀猪。过年所杀的猪十分讲究，忌用尾巴太短或红嘴皮的猪。一个寨子长辈家的猪先杀，依此类推。杀过年猪的人也有规定，杀过人的，打死过乌鸦、猴子、猫和狗的人不能杀过年猪。杀猪前，先斟酒敬祖，后敬杀猪者，屠者操刀而立，手捧木制酒碗，一饮而尽。杀猪时须拴好猪，不能沾染血迹。猪杀后，先取些猪肉、猪肝烧熟，置于主位上方祭祖。再取猪胆、脾和头以及整个前肢放在主位上祭神。

过年的第二天大人们互相道贺和玩秋千，孩子们则玩游戏。下午男子们成群结队，兴高采烈地挨家挨户串门祝贺。各户在年节

期间要备上足够的酒，以敬前来贺年的客人。

第三天举行送祖宗神灵回祖界的仪式。黎明之前，随着公鸡啼鸣声，人们把饭、肉等各种熟食祭品放在篾席上祭祖，同时在门上挂一装有炒面的口袋，意为让祖灵上路时权当干粮。男主人们向祖先神灵致告别辞。孩子们站在门口或房屋周围，手里拿着盐巴和木盆，呼叫祖先神灵赐给他们猪、羊、牛、马、鸡，祈求六畜兴旺、风调雨顺，家人四季平安。

火把节

每年六月二十四（也有的在二十五或六月初六的）是彝族最隆重的节日——火把节。它也是白、纳西、哈尼、拉祜等民族的共同节日。

火把节是彝族人民最重视的节日之一，人们穿上最漂亮的衣服，杀猪宰羊，饮宴歌舞，敬祭祖先神灵，以示共贺。火把节之夜，家家户户点燃小火把，奔驰田间村头，遇到朋友，则在火把上撒松香粉、火药面，发出“啪、啪”之声，以表祝贺、嬉戏。各村还立有10米高，二人合抱的大火把，系上火把梨和莲花等装饰品。黑夜里火光冲天，照亮一公里以外的地方。各家还以瓜、豆、葵、麻籽等食品赠送儿童。人们沉浸在一片欢乐、热烈、和睦的氛围中。

关于火把节有许多传说，其中一则说：很久以前，天上有个凶神叫斯热阿比，常到人间作恶，激起了彝族人民的不满，大家推举一位叫阿提拉巴的英雄与斯热阿比作战，经过九天九夜的战斗，终于杀死了凶神。此事激怒了天王，便放“天虫”到人间吃庄稼，妄图饿死百姓。“天虫”吃了三天三夜，眼看庄稼没救了，人们便共商灭虫大计。最后决定动员所有男女老少，用火把烧虫。

就在六月二十四这天，人们举火把到田间地头烧虫，经过三天三夜，大部分“天虫”被烧死，一小部分躲到别处。为了防止再来侵害，决定每年这时候都要高举火把，年复一年，便形成了火把节。如今的火把节已成了彝族人民欢乐的日子，也是彝族男女青年择偶的最好时节。

插花节

每年农历二月初八，滇西一带的彝族都要举行传统的“插花节”。早春二月，当地昙华山区，百花怒放，马樱花开得格外迷人。彝家人将各种花摘来，插在房屋门头、畜厩门上，有的还绑在牲畜头上，姑娘都选几朵色彩鲜艳的花插在包头上，小伙子则将花别在挎包上。这里顿时成了花的海洋。人们插花，祈求吉祥如意，五谷丰收，六畜兴旺，吉祥平安。

插花节这天，家家户户还要杀鸡宰牛宰羊，欢宴饮酒。男女老少穿上新衣，会集于昙华山或村乡集市，吹起芦笙，弹起月琴，唱起《梅葛》调等传统歌曲，跳起“左脚舞”，尽情欢乐。男女青年还趁此谈情说爱，物色意中人。

彝族人民特别喜爱马樱花。这种落叶乔木不嫌土地贫瘠，耐

干旱。相传马樱花曾长于宫中与牡丹媲美，后贵人嫌马樱花的皮粗糙，因而被冷落。于是，它变为仙女入深山安家。彝王侮辱彝姑，强迫她们做他的牛马，不少人跳岩自尽。马樱花仙姑非常痛恨彝王，便扮彝姑以毒花毒死彝王及其喽罗，为民除害。人们为纪念马樱花的英雄壮举，便每年举行插花节。还有一则传说：很久以前昙华山上有个能歌善舞、心灵手巧、美丽无比的彝家姑娘米依鲁。有一天她在山上放羊，突然来了一只狼，向羊群扑去。在这危急时刻，青年猎手朝列赶到，打死狼，羊群得救。米依鲁感激不尽，采了不少鲜花献给猎人，猎人朝列把鲜花插在米依鲁的头上，从此两人相爱。后来昙华山一土司建“天仙园”，欺骗不少姑娘进园，供其蹂躏。米依鲁得知，于二月初八这天头戴剧毒鲜花，毒死土司，自己也因与土司同饮毒花泡的酒而身亡。朝列抱尸哭了三天三夜，最后流出滴滴鲜血，将漫山的白杜鹃染成了血红色。从此，人们视鲜花为忠贞的象征，并于米依鲁去世的日子举行插花活动，以怀念她除恶利民的品质，后来逐渐演变为一年一度的插花节。

巍山彝族年节

云南巍山县山塔、龙街一带彝族的传统年节，在每年农历腊月除夕举行。节前，家家户户要杀猪宰鸡，做糯米面、磨豆腐、擀面条、酿白酒，备好节日食品。节日当天，各家各户张灯结彩，贴门神和春联，并在院子中心栽一棵枝叶茂盛、高三四米、有三盘树枝的松树，名为“天地棚”。然后在树干上扎一把松毛，将香柱插在松毛上。树下置一供桌，桌上燃灯作天地神位，并摆有猪头和鸡祭献。在房屋后墙，也栽一棵松树，名为“米士”，代表厩神。祭祀厩神以求其保佑六畜兴旺。在祭完天地神灵和厩神后，再祭

自己的祖先。黄昏后，各家皆以红纸“封门”，正月初二别家的童男前来“踩门”方可开门。龙街彝族节时还要在堂屋内外铺上青松毛。山塔一带彝族节前要将嫁出去的女儿接回家团圆。已生育的，在正月初二以后，就返婆家；未生育的则待正月十六以后返婆家。入夜后，全家团聚欢宴，由家长给儿女们讲家史、故事，通宵达旦，俗称“守岁”。五六岁儿童站在门坎上比高，据说这样比才长得快。

孔　告

孔告为彝语，意为欢庆的日子，是广西那坡县彝族的传统节日。各地方节日时间不定，有的农历四月初三，有的四月十一，也有四月十二的。节期三天，内容主要是祭祀祖先、土地和山神；演习古代彝人战争和生活的场面；由世袭的节日活动主持者吆喝唱本民族的历史以及跳金竹舞、对歌、饮酒、聚餐等。其中以跳金竹舞最为重要，跳舞之前要用猪头祭祀祖先，然后，众人随着芦笙、铜鼓的节奏跳舞。金竹舞要跳两天。关于节日来历，相传很久以前，彝族的首领“九公”在一次战争中失利，被迫躲进一片金色竹林。他急中生智点燃竹叶以迷惑敌人，敌人果然畏退了。后来，九公不忘金竹的救命之恩，在村寨的场南中央栽了一簇金竹，并在农历四月率族人转绕金竹跳舞唱歌。后来加进祭祀祖先、讲叙族史的内容，逐渐发展为固定的节日。

颂牛节

云南西北山区彝族的节日，每年立冬日举行。传说这一天是天牛下凡效劳人类的日子，所以举行纪念活动以歌颂牛的功劳。届

时，各家各户要把耕牛全部赶到牛神崖前草坪上集中。草坪上围插 12 根松杆，上边挂满用红绸捆扎着的荞麦、燕麦、包谷，中心放有一个大簸箕，内盛用洋芋制成的黄牛和用萝卜制成的水牛模型。这些“牛”用荞梗或玉米秸作腿，荞粒或玉米粒作眼，麦穗尖作角，玉米糕和切成寸段的燕麦秸，作为牛的饲料。活动在一位老歌手带领下开始，大家牵着挂红绸的耕牛，绕簸箕踏歌而舞，歌唱耕牛的功劳，歌颂精心饲养耕牛的人以及当年获得好收成的人家。最后，按成绩大小，老歌手把“牛”和“饲料”奖给牛的主人。饲料当场用来喂牛，“牛”则装在用彩线编织而成的“牛轿”中。之后，大家赶着耕牛载歌载舞，游村过寨。牛模型拿回去供在家堂，它是家中代代相传的宝贝。

姑娘节

云南金平彝族姑娘们的节日，又称“姑娘街”，时间在春节后的第一个赶场日。届时，除彝族姑娘外，瑶、苗、哈尼族的姑娘们也来参加。歌舞是姑娘节的主要活动，姑娘们在街场上手拉手围圈歌舞，展示自己的青春和美貌。而买卖货物是姑娘节最有特色的活动。这天，歌舞过后姑娘们要把自己带来的山货、药材卖掉，然后购买花边、丝线、银质首饰。买东西时，会出现小伙子抢着替姑娘付钱的场面。这些小伙子口中唱着花灯调：“好久不赶四方街，篾帽团扇排又排，妹要爱啥快快买，妹买篾帽哥开钱”。他们勇敢地向自己中意的姑娘献情。姑娘节是男女青年交流感情、谈情说爱的时机。夕阳西下，赶街归来的沿途，情歌声声，一对对恋人沉浸在喜悦和甜蜜的气氛之中。

阿细跳月

居住于云南省路南、弥勒、宜良一带的彝族，能歌善舞，而最流行、最有影响的要数“阿细跳月”。这种舞蹈一般在节日夜晚跳，届时男的弹奏大三弦，吹笛子，女的拍掌而舞，人数不限，但必须是双数，因在月出时开始，到月落方止，故名“跳月”。

阿细跳月舞蹈的产生，相传是祖先在刀耕火种时，因抢节令，放火烧山，被火烫着脚底，人们边跳边抖，同时，发出“阿啧啧”的呼声，以后逐渐演化成舞蹈动作。至今跳月时，舞蹈者还不断发出“阿啧啧”的声音。

跳月的最初阶段是用小三弦伴奏，较幽雅，动作舞步较小，又称“老人舞”。男女谈情说爱于树林中，也运用这种娱乐形式。随着生产的发展，生活的逐步改善，思想感情更为充沛，小三弦改成大三弦，节奏欢快，动作富于跳跃，舞蹈时的大摆手、大击掌，表现了热烈浓重的感情。

阿细跳月的基本舞步是快步和三步乐。三步乐由五拍组成，反复重跳、进退、转身，极为自如，可成大圆圈，人称为“快三步乐”。也有“慢三步乐”和“娃娃舞”。跳月是彝族文化中一颗光彩夺目的瑰宝。

掷石竞赛

掷石是彝族人民非常喜欢的一种体育竞赛活动。这种活动的形成与人们的生产生活习俗紧密相关。彝族人民无论是放牧、捕鸟、狩猎都用得着掷石，由此发展成了一项体育竞技活动。掷石比赛分为两种：一是比距离，以掷出远距离为优胜；一是比准，以

打得准为优胜。

掷石的方式分为两种，一是直接手拿石头将其掷出；另一种方法是把石头装在掷石器中，然后手持掷石器的绳子，旋转数圈后掷出。

所谓掷石器是一个边缘系着绳索的敞口小网兜。使用方法是兜里放上石头，手抓住兜绳，旋转数圈后通过旋转产生的离心力将石头掷向目标。常见的掷石器有以下几种：

一种是竹皮、麻绳或皮革做的敞开网兜，网边系着三条大约60厘米长的绳索。使用时，把三条绳索合陇，网兜里放置石子，手指套在其中一根绳索的套结上，在头上旋转数圈后，猛然撤去捏在手中无结套的绳子，将石头抛出。

第二种是网兜上系上两根绳索，其中一根结套。使用法与第一种大致相同。

再一种是在掷石兜的绳头上系一根约60厘米长的木棒，然后手持木棒旋转将石头抛出。

跳火绳

跳火绳是居住在我国西南地区的大、小凉山彝族在闲暇时玩的一种游艺。这种游艺多在火把节之夜举行，有浓郁的“火文化”特色。“跳火绳”与“甩火把”交织在一起形成火的世界，场面蔚为壮观。

火绳多由一种山间藤条拧成。绳的中段绑上浇有油的布条或棉纱，点燃即成火绳。

跳火绳还可以进行体育竞赛。比赛场地一般选在村外一块平地上。比赛时要在场地两端划上起点线和终点线，其形式类似短跑比赛。

跳火绳比赛有单人跳比赛和双人跳比赛两种。所谓双人跳比赛即以双人为一组参赛。其赛法是：参赛者手执燃烧的火绳，立于起跑线上，一听到号令，就双手握住火绳一边甩一边跳，不顾一切地冲向终点线，以最先到达终点线者为胜。

跳火绳比赛，以众多人数参赛或表演的场面最为壮观。多人参赛宛如火海一般，闪动着无数的火花、火环和火球，加上观众助威声、喝采声和欢呼声，整个场面充满着热烈欢乐的气氛。

●壮　族

壮族人口为15,489,630人（1990年统计），主要分布在广西壮族自治区及云南省文山壮族苗族自治州，少数散居于广东、湖南、贵州、四川等省，是我国少数民族中人口最多的民族。

壮族自称因地而异，有“布爽”、“布壮”、“布侬”、“布曼”等20多种。解放后，统称“僮族”。1965年，根据周恩来总理的提议，经国务院批准，改称“壮族”。

壮族有自己的语言文字。语言属汉藏语系壮侗语族壮傣语支，分南北两大方言；1955年创制了拉丁字母拼音文字方案。

壮族信仰多神，崇拜自然，如祭祀山神、水神等。唐代以后，佛教、道教先后传入壮族地区。近代以来，也曾有少量城镇居民信仰天主教、基督教等。

壮　锦

壮锦是壮族妇女精心制作的传统手工艺品，隋唐时代已经萌芽，宋代正式形成，明代盛极一时，成为宫廷额定的贡品。壮锦以大缕棉纱为经，以五色绒线为纬。事先绘有图案（传统图案可以不绘制），然后根据图形，用绒线一缕一缕地织上去，故其色彩斑斓，结实耐用。纹饰题材广泛，结构严谨，形象生动。传统图案主要有万字纹、水纹、云雷纹、菊花、蝴蝶穿花、凤栖牡丹等二三十种。解放后增加了民族团结、葵花向阳、桂林山水等80多种纹样。壮族习惯于以大幅壮锦作为被面，新婚必不可少。妇女们还喜欢将它用作幼儿的背带，背起来格外醒目。少女总爱在衣领、衣袖、衣摆、裤脚等处镶上带形壮锦花边，穿戴起来越发显出俊俏。此外还用来做床毯、围裙、腰带、手提袋、头巾、壁挂、台布、几垫、窗帘等，用途很广。它给壮族人的生活增添了欢乐，增添了色彩，是壮族妇女审美情趣和智慧的结晶。

烤整猪与白斩鸡

烤整猪是壮族的传统食品。猪的选择比较讲究，一般是几公斤重的细嫩小猪，或者是专门饲养的几十公斤重的小猪。其中以巴马香猪最为著名，这种猪只长到35公斤左右，肉质鲜嫩，烤后有一股特别的香味。其作法是，先将生猪宰杀后，脱毛洗净，掏出内脏，冲洗晾干，再选用优良火炭，将整猪用长铁条穿好，放在火上慢慢烘烤，边烤边转，肉皮上还要涂些香料、盐等佐料，烤成后的整猪，外焦里嫩，香气扑鼻，油而不腻，为待客上乘佳肴。

白斩鸡流传于岭南地区。其做法是将细嫩的项鸡（未生蛋的

母鸡）宰杀，去内脏，里外洗净，整只放入开水中煮到七八成熟后取出，破成两半，横切成一指多宽细长条，肉略带血丝。吃时蘸碟中佐料，有酱油、葱、姜、腐乳、辣酱等，脆嫩可口，略带甜味，是壮族人过节及待客佳肴。壮族人有“无鸡不成宴”的俗语，指的就是白斩鸡。

驼背粽

驼背粽是壮族传统食品，为过节时的待客佳肴。做法是将上等糯米洗净、浸泡之后，用粽叶包裹。这种阔叶植物叶面柔韧光滑，带有一股清香，煮熟后不龟裂。包时，在糯米中间加一条经佐料浸泡过的肉条，有的还要裹上绿豆沙，然后包成两头扁平、背面中间隆起的形状，形如驼背，所以称为驼背粽。这种粽子大的一斗米，小的也要半公斤左右，要煮较长时间才能熟透。刚煮熟的粽子，可以从一头剥开，用捆绑的细藤（有的是稻草）切成两指宽的薄片，即可食用，不用其他佐料或菜肴。凉粽需切片后用生油炸，外焦里嫩，脆香可口。壮族群众也常用粽子作为馈赠礼品。

倚歌择偶

倚歌择偶是壮族男女青年选择配偶的方式。青年男女在路上相遇，或歌圩上相会及歌台上相识，在对外表有初步印象之后，如有意进一步发展友情，便通过对歌互相试探，联络感情，考察对方知识、品德、爱好，而后决定是否定为情侣。定情之后，便可以请媒人。以歌联情，一般男方先唱，叫做引歌。比如男方唱道：“引妹唱，清潭起浪引鱼来。丹桂开花引蝴蝶，山伯来引祝英台。”

一般男的要唱多首，女的才答歌。所以小伙子往往尽量施展歌才，以期引起女方的好感。比如唱道："唱句山歌把妹逗，看妹抬头不抬头。马不抬头吃嫩草，妹不抬头想哥逗。"女的听了卟嗤一笑，这就有望了。也有的男方嘴笨，唱得不精彩，连唱两个小时女的不答腔，他只好知趣走开。在他离去之前，别人不得从中插入，否则违礼。对唱到中间的盘歌，以女问男答为主，主要考查男方。所以过去壮族村寨往往集资请歌手来教壮歌，儿童从八九岁即开始习歌，培养临场随机应变之才。

上门和寡妇再嫁

上门和寡妇再嫁是壮族传统婚俗。

上门壮话叫"很兰"，意为加入别姓家族，是早期对偶婚和氏族可以接收外来成员的遗风。按多数地方习俗，家有独女需招人入赘，女儿大而弟妹年幼也可以招婿上门，以便维持家业。有的地方赘婿可保持原姓名，但子女须随母姓。多数地方赘婿须改从女方姓，并与妻子的兄弟、堂兄弟排行，其名字只保留后一个字，中间一字与兄弟、堂兄弟相同，表示同辈。兄弟姐妹亦以兄弟相称，不叫姐夫或妹夫。上门不限于未婚青年，有的中年人丧妻后亦可携子上门。

按壮族习俗，夫死，寡妇可以再嫁，不受限制，但在夫家地位较低，在妯娌中不大受尊敬，直到与新夫生了子女，境遇才有所改善。

二次葬和悬棺葬

壮族葬俗比较特殊。人死后，其子汲水浴尸。入殓前，棺底

铺上石灰，再铺白布。入殓后，停灵数日，请师公、道公做道场，而后掘坑埋葬。其子于灵位下设地铺穿孝一个月，不得与妻子同房。3 年后，再把先人遗骨挖出来，洗净揩干，按人体骨骼部位组装入金坛。金坛是特制的陶坛，高 1 米多，鼓腹腹径约三四十厘米，有帽形倒盖。装好之后，择吉日在山上被认为风水好的山梁、干燥岩穴等地埋入地下，再圈坟立碑，以后每逢清明节前往祭扫。这就叫做二次葬。

悬棺葬的习俗已有几千年的历史。人死之后，截一段大圆木，将中间挖空，或破为两半，雕成船形，称船棺。入殓后，用绳索吊到预先打好桩的遮檐式山崖上或大山洞内，是为悬棺葬。壮族悬棺多为船形，或两船相覆，称为覆船棺。有的地方几十具船棺依次排列，蔚为壮观。船棺与古代越人习用舟船有关。

敬老亭和寿米缸

建造敬老亭和购置寿米缸是壮族祝寿的传统习俗，主要流行于桂西东兰等县。年逾古稀的老年人，为了表示年至耄耋者仍不忘造福社会，在祝寿仪式之后，特选一条大路的某一地方，例如适于行人休息的山边、小坳或风景绝佳之处，建一座小亭子，以供过往行人歇凉，这就是敬老亭。亭子雕梁画栋油漆一新，正面梁上画着两条鱼，表示福寿绵长。亭成之日，老人邀集少数至亲好友在亭中小酌，识字者还要研墨作诗，书写对联，对主人表示祝贺。以后，这个亭子就成了行人歇脚的地方。行人在此小憩，必遥祝亭子的主人福如东海，寿比南山，感念他造福于行人。

寿米缸是一个鼓腹小口陶缸，高约 50 厘米，腹径 30 厘米左右。在老人年过半百的寿诞之日，儿女便为他购置一缸，内加半缸大米。以后每年寿诞之日，儿孙祝寿之后，都要以新换旧，添

加新米。按壮人习俗，即使青黄不接，全家断炊，也不能把缸中大米掏尽，否则会影响老人的寿数。所以寿米缸中总有小半缸米，表示老人福寿绵绵。

打背工

打背工壮话叫“滚泄”、“托尧”，意为相邀互助，是全民族性的传统生产习俗。壮人在建房、耕地时，全村人都自动聚集，无偿相助。特别是春耕，全村主要劳力先集中一家，种一天，主人适当招待。如受帮者家境贫寒，各人便从家里自带饭菜，并不计较。一家一天，周而复始。这种轮流耕种不用排队，不抢先后，不讲究劳力对等，不议论招待厚薄，人人自觉自愿，以此为荣。劳动中，人们抢着干重活，不需别人督促和分配工种。大家一面劳动，一面唱歌，一面交谈，田野间歌声四起，笑声阵阵，充满了劳动的欢乐。打背工这种习俗，对促进邻里和睦，解决春耕春种不误农时，有积极的作用。在实行生产责任制的今天，它可以解决单家独户生产中遇到的一些困难。

铜　鼓

铜鼓最初发源于滇中万家坝。公元前3世纪传到壮族祖先文化中心浔江以南、郁江以东的玉林地区及邕江之北、郁江西岸的贵县一带。鼎盛期产生了北流型、灵山型、冷水冲型等三种代表型的铜鼓。这三种类型铜鼓自成体系，被称为东式鼓或粤系鼓。目前广西铜鼓近千面，占世界现存的一半。

壮族祖先创造的铜鼓，鼓身分为三截，鼓腰呈反弧，体型高大凝重，最大面径达1米多，重300公斤。花纹与西式（滇式）不

同，鼓面鼓身充满了云雷纹，鼓面中心的火星纹变为太阳纹。周围是翔鹭纹，中心无立雕，唯边沿多有单蛙、群蛙、累蹲蛙立雕，中间偶杂有牛橇和武士骑马纹。整个鼓面是天空的景象。鼓身主要有船纹、鸬鹚纹、羽人纹、水波纹、席纹、鹿纹等。所有的花纹都是象征性的，形象夸张、奇特，给人一种神秘的气氛，与滇式铜鼓强烈的写实风格形成鲜明的对照。

铜鼓早年是壮族宗教仪式的法鼓，其身上的形象多为图腾，蛙图腾居于显要地位，因此具有维系氏族、部落的神秘威力。后来变成了指挥战斗的战鼓，用以鼓舞士气，鼓在人心在，鼓失人心失。进入阶级社会后，它又变成了奴隶主权力和地位的象征。在节日里，它又成为人们的乐器。壮族使用铜鼓的习俗，一直延续到解放前。现在有些地方还跳铜鼓舞。由于铜鼓是法器、重器，壮人视为至宝，旧时习俗，不用时埋入地下，防止丢失。擂鼓亦有专人，不得随便敲击，十分庄重。

花山崖壁画

花山崖壁画约产生于春秋晚期到西汉，前后延续六七百年，是壮族祖先祭祀民族守护神——蛙神的圣地。崖画分布于广西南部左江及其支流沿岸，共有 84 个地点 183 处 287 组，多绘于河流急转弯处的山崖上，少数在陆地山崖，前后绵延几百公里，形成一个以天地为陈列室、以山崖为画屏的规模宏伟的画廊，是世界罕有的大规模岩画。

崖画上的形象主要是人物，还有少量犬、铜鼓、铜锣、竞渡船、鸟、鹿等形象，总共达数万之多，均为朱红色，虽经 2000 多年曝晒，仍然相当鲜艳，表现了较高的技艺。人物形象高的达 3 米，小的也有几十厘米，姿态划一，均双手弯肘上举，双脚下蹲成骑

马势，犹如蛙在水中游泳的形态，被称为蛙形舞姿。画为投影式，远观形似鬼影，个体有较强的动感，整体则显得划一、严峻、狰狞、不可一世，具有原始宗教的神秘色彩，也有奴隶社会奴隶主凌驾一切之上的可怖的气氛。其中大人物画像个体高耸，头有羽翎，身背宝剑，手持匕首，旁列铜鼓，与周围向其欢呼的小人物形成鲜明对照。

画的内容和社会功能，有的认为是镇水神，有的认为描写誓师或祝捷，有的认为是祭祖先。多数认为画上大人像实为蛙神，整体描绘的是壮族先民祭祀蛙神的场面。壮族祖先是最早发明水稻种植的民族，水稻与水关系密切，而蛙的叫声又与水旱有一定关系，所以把它尊为图腾，直至升为民族守护神。它是壮族三大神之一。

壮乡歌圩

歌圩是壮族传统的大型文化娱乐活动。歌圩有悠久的历史，它萌芽于早期的对偶婚，经过长期发展，隋唐正式形成，出现了歌仙刘三姐。宋代到明代，发展到了高峰。

举行歌圩的日期，各地不尽一致，通常在春节、三月三、四月八、中元节、中秋节等节日举行，而以三月三为最普遍，被定

为壮族的歌节。此外，在婚嫁、乔迁、满月等喜庆日子也有临时性的歌圩。

歌圩多在野外小山坡上或小河之滨举行，在各地都是固定的。所以壮人称为“窝坡”、“隆端”，意为到山坡上去，到田野中去。每当佳节来临，青年们都要穿上节日的盛装，从邻村邻县赶到传统地点，或云集于山椒水湄，或汇合于城厢村寨，或簇拥于林间草地，或共登于山丘丛林，尽情歌唱为乐。歌圩的内容以男女青年对唱情歌，倚歌择偶为主，但也常常伴随有放花炮、埋蛙、抬佛像游行、演戏、舞彩蝶彩马、同吃五色糯饭、抛绣球、碰红蛋等丰富多采的活动。歌圩上男女对唱有一定的程序，即引歌、初会歌、搭话歌、初问歌、盘歌、赞美歌、追求歌、初恋歌、定情歌、深交歌、赠礼歌、嘱别歌等。其中盘歌是用来考察对方智慧的，内容古往今来，天上地下无所不包。歌圩对于培养壮族一代歌师和歌王，以及保存和发展民族文化，起了重要的作用。

中元节

中元节又称鬼节，是壮族仅次于春节的重要节日。中元节要过三天，即农历七月十四至十六。从七月十四开始，家家户户都要杀猪宰鸡杀鸭，包粽子，供在神台上，买来白色、紫色纹纸，剪成鬼衣和纸钱，放在神台前以敬祭祖先。神台上烛光摇曳，香烟缭绕，供品终日不撤，节日气氛浓郁。一日三餐之前，都要先把祭品加热供祭，然后烧一些鬼衣纸钱，将其灰烬包好。房檐下也有一供桌，供祭野鬼。十六日，将鬼衣纸钱烧尽，把灰包在一起，外裹荷叶，由一老年男子用竹棍挑到水边，抛入水面，任其漂流。传统的说法是，这样做可以让祖先把鬼衣纸钱带走，以保子孙安宁。中元节也是群众社交的节日。这一天，妇女们都要偕同丈夫、

子女回到娘家。她们通常给娘家带去鸡、鸭、猪肉及一些土特产，作为礼品。孩子们也把这一天看成是最愉快的日子，他们可以享受到外公外婆的爱抚，吃到可口的食品，尽情玩乐。有的地方还要举行歌圩、打陀螺等文娱活动。

莫一大王节

农历六月初二的莫一大王节是桂西北壮族的盛大节日。这一带壮人把莫一奉为自己的祖先，在神龛上有他的神位。相传莫一出身贫苦，是个放牛娃。父亲因抗粮被丢下深潭后变成神牛。父亲给了他一粒珍珠，他吞下去以后力气大增。后来皇帝派兵来打壮人，他用伞赶山抗敌。皇兵请来天神趁他鏖战之机，砍下他的脑袋，但他却没有倒下去，大笑三声，吓退皇兵。莫一实际上是壮族远古牛部落的祖先（“莫”壮语意为黄牛）反抗封建统治压迫的英雄。每年六月初二，桂西北壮人家家户户都要杀猪宰鸭祭祀他。有莫一大王庙的地方，还要杀一头猪送到庙里，用猪肉和内脏做12道菜，摆在神台上供祭。全村每家出一人到庙里聚餐，然后每户从每道菜中夹一点带回家去表示祝福。莫一大王节每年一小供，三年一大供，十分隆重。现在拜莫一大王的祭祀活动已经很少了。

花王节

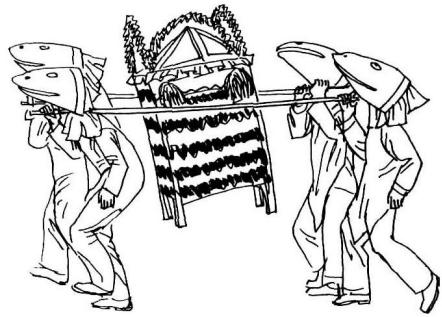
农历二月初二为壮族的花王节。花王指的是壮族始祖姆六甲。传说她是从混沌初开时大地上唯一的一朵花蕊中长出来的，后来成了壮人的生育之神。她居住的仙山又称花山，山上鲜花如海，五彩缤纷，洋溢着永葆青春的生命。谁家要生孩子，花王便从花丛

中摘下一朵花送给她。每逢二月初二，妇女们都要在自己的卧室门口供祭花王。壮家妇女卧房门口上方都有一个弓形花带，竹子做骨，盖以白纱布，上缀若干红色花朵，表示是花王的神位。

这一天是妇女们的节日，她们互相串门，笑逐颜开，不同姓的还可以结拜姐妹。

埋蛙节

埋蛙节是桂西东兰、凤山一带壮族的传统节日，实为古老的蛙图腾祭祀日的遗韵。整个节日分为寻蛙、孝蛙、埋蛙三个阶段，历时一个月。春节初一初二两天，邻近各村的男女青年一同外出寻蛙。此时蛙正在冬眠，人们漫山遍野挖土寻找，歌声、笑声传遍原野。最先找到青蛙的，即为蛙婆，被认为是最幸福的人，人们立即欢呼雀跃，簇拥到蛙婆周围并郑重地把青蛙装在竹筒里，置于一个用竹条做骨、五色纸糊成的花楼内，由蛙婆抬到各村，逐家祝祷丰年。这是第一阶段。第二阶段，把蛙抬到后稷亭，延请师公诵经，众人向蛙神上供，并轮流为之守孝，直至正月底。第三阶段是正月末，人们隆重地把蛙护送到传统埋蛙地点，挖出去年的蛙骨，把今年的蛙埋进去。如去年蛙骨呈黄色，便视为吉祥，今年一定风调雨顺，老少泰安，于是敲打铜鼓，开始盛大的歌圩，庆祝埋蛙节的结束。如蛙骨发黑，则认为不吉利，即请师公祝祷，祈上苍弃祸降福，然后再举行歌圩预祝丰年。按壮族神话传说，蛙为雷王之子，本为



上天神物，后来被派到人间做天使。它有呼风唤雨的本领，佑护壮民安宁的神功。因此，人们在埋蛙节时送它回到天上，为壮民向雷王请求一年风调雨顺。如今埋蛙节的许多内容已经改变，青年人偏重在节期搞娱乐活动了。

●布依族

布依族人口为2,545,059人(1990年统计),主要聚居在贵州省黔南布依族苗族自治州、黔西南布依族苗族自治州及安顺地区和贵阳市。在黔东南苗族侗族自治州、铜仁地区、遵义地区、毕节地区、六盘水地区及云南的罗平,四川的宁南、会理等地也有分布。

布依族自称“布依”、“布雅伊”、“布仲”、“布饶”、“布曼”等。据史籍记载,历史上有“牂牁僚”、“西南蕃”、“仲家”、“夷家”、“俚僚”等多种称谓。解放后,根据本民族人民的意愿,统一以布依族作为族称。

布依族有自己的语言,布依语属汉藏语系壮侗语族壮傣语支;过去没有文字,一直使用汉文。1956年,创制了拉丁字母拼音文字方案。

布依族宗教信仰主要是祖先崇拜,信仰多神和自然崇拜。

刺　绣

据史书记载，明弘治年间（公元1488至1509年）布依族妇女“腹下系五彩桃花方幅，如绶”（明·弘治《贵州图经新志》卷一），说明明代布依族就已盛行刺绣。刺绣，在贵州镇宁、关岭一带的布依族称为“刁贵”，在望谟、册亨一带称“姑绣”。刺绣的种类较多，有“贵独绒”、“贵独巴”、“贵杂玛母”、“贵高崇”、“贵绍”等10数种。其花纹有人物、花卉、鸟兽等图案。通常用作服饰、帐檐、门帘、被面、背带、枕套、荷包、鞋面、手帕等。刺绣的技艺精巧，色调和谐，纹饰素净大方。刺绣的方法有平绣、绉绣、辫绣、缠绣、挑绣等10种。布依族的刺绣和蜡染一样，民族特色鲜明，深受国内外人们的喜爱。

蜡　染

布依族的蜡染历史悠久。宋代即有“南宁州特产……蜜蜡，蜡染布等”记载。宋代的南宁州在今贵州惠水县境内。这一带自古即是布依族聚居区，上面所述南宁州的蜡染布，无疑是布依族先民所制。由此可见，早在宋代时布依族先民已盛行制作蜡染。清乾隆年间，有“永丰州之罗斛、册亨等处……妇人首蒙青花布巾”之记载（乾隆《贵州通志·苗蛮》）。青花布即蜡染布。布依族蜡染的方法是：先把蜜蜡略加温，熔成蜡汁，然后用铜制蜡刀蘸上蜡汁，在自织的白布上精心地绘成各种花草鸟兽虫鱼，再放进自制的蓝靛缸中渍染为蓝色或浅蓝色，最后将布捞起煮过，使蜜蜡熔脱，再挑到河里去清洗，绘蜡处即呈白色。蜡染的花纹图案，具有鲜明的民族特色，或描龙画凤，或绘刺梨花，或采用涡

状及波状花纹等等。蜡染布除用于服饰外，还用作床单、被面、帐檐、窗帘、桌布等。因其图案文静素雅，美观大方，深受国内外欢迎。

五色糯米饭

五色糯米饭是布依族地区传统食品。逢年过节，或贵客临门，布依族就用五色糯米饭待客。同时还要杀一只鸡，砍为八块，把鸡脖颈和鸡头连在一起，煮熟以后，盛在瓦钵里面，摆在八仙桌的中央，鸡头从瓦钵里伸得高高的。盛鸡的瓦钵四周，摆上腊肉、香肠、木耳、豆腐、粉丝、白菜等若干碗菜肴。再在这些菜肴的四周摆上八碗五色糯米饭。这样，乍一看去，满桌的饭菜，酷似一只开屏的孔雀，极为美观。关于五色糯米饭，相传是很久以前拱桥寨的布依姑娘竹妹发明的。竹妹为了让糯米饭又美又香又能多放几天不会馊，就不辞辛劳，翻山越岭，涉水跨涧，到四方八寨去向老年人请教。红籽寨寨老教她用红籽刺根煨水染糯米饭，又红又香又能消食化气。紫荆寨寨老教她用紫荆藤皮煨水染糯米饭，又紫又香。枫香寨寨老教她用枫香叶煨水染糯米饭，又黑又香。糯花寨寨老教她用糯米饭花煨水染糯米饭，又黄又香。竹妹经过千辛万苦，找来上述原料，把糯米饭染成红、紫、黑、黄四色，留下一些不染，成白色。这样就制成了五色糯米饭，既好看，又喷香，多放几天也不会馊。人们为纪念聪明能干的竹妹创制出像孔雀开屏一样美丽的五色糯米饭，就将拱桥寨改名为孔雀寨，把竹妹叫做孔雀妹。吃五色糯米饭的习俗也一直流传至今。

丰收酒

布依族的传统习俗，凡是风调雨顺的丰收年成，都要酿制米酒，到次年农历正月间，便邀请亲友到家欢庆丰年，喝酒唱歌，名曰“丰收酒”。届时客人陆续到来，围坐火塘边，主人边递茶边唱“客气歌”：“昨晚灯花爆，今早喜鹊叫，都说要有客，贵客真来到。”入席后，主人打开酒坛，客人就唱道：“米酒绿央央，开缸十里香，下河洗坛子，醉倒老龙王。”桌上已摆满各种佳肴，但主人却谦虚地唱道：“美丽的孔雀，刺笆林歇脚，饿了没食吃，渴了无水喝；简慢贵客了，只是来空坐。”客人又唱道：“酒肉摆满桌，八碗九缸钵，压弯桌子面，压断桌子脚。”接着就边吃边品尝盛情的丰收酒，主客互相祝福。散席后，主人送客人到寨边时，双方共同唱道：“腊梅花谢了，桃花正含蕾，吃过丰收酒，分手把家回；春风轻轻吹，大地暖微微，家家选好种，户户积足肥；阳雀声声催，节令莫迟违，春天早下种，金秋谷成堆；年年米酒绿，岁岁猪羊肥，世世享安康，代代都富贵。”唱罢，主客拱手道别，并相邀来年到自家喝“丰收酒”。

敬客酒

唱歌，是布依族人民生活中不可缺少的一部份。在某种意义上说，唱歌就是比聪明与智慧，考真挚和诚实。喝酒，也是布依族人民生活中不可缺少的一部份。布依族人民善于酿酒。糯米是自己种的，酒曲是自己采来百草根做的。酿出的酒在18度左右，其味醇香甘美。酒用大龙坛盛装密封，需用时，将挖空了的革当（葫芦）伸进坛里提取。平时，凡来客人，主人就递一杯“茶”，有

经验的客人接过“茶”慢慢品尝，无经验的客人接过来一口喝下，就闹笑话了。原来这不是茶，是糯米酒！迎亲或逢年过节，主人要在大门口摆一张桌子，桌上摆好酒壶和碗，客人一到，主人斟酒，双手端着，唱迎客歌：“凤凰飞落刺笆林，鲤鱼游到浅水滩；今天贵客到我家，不成招待太简慢，献上一碗清淡水，只望客人多包涵。”客人吟歌答道：“画眉飞上梧桐树，小虾游到大海里；今天来到富贵府，主人殷勤真客气，只因我的口福浅，这碗仙酒不敢饮。”若客人不会唱歌，主人唱一首，客人只好喝一碗酒，一直要唱五首或九首，客人也就要喝五或九碗酒以后才能进屋。席间，主人要请善歌的姑娘或中年妇女来向客人敬酒，有的提酒壶，有的拿碗，到客人身边时先斟一碗酒，再唱一首歌：“客人远道来，实在是辛苦，没有鸡鸭鱼招待，喝碗淡酒当鱼肉。”客人答道：“八仙桌子四角方，鸡鸭鱼肉摆中央，山珍海味样样有，多谢主人热心肠。”若不会唱歌，姑娘们每唱一首歌，就得“敬”你喝一碗酒。

石板房

居住在贵州南盘江流域的布依族，房屋建筑多为吊脚楼，古称干栏。楼底圈牲口、堆杂物，楼上住人。由于镇宁自治县黄果树瀑布及白水河一带的岩层特殊，一层一层的落石板取之不尽，质地又好，因此，这里的布依族人利用自然优势就地取材，在干栏建筑的基础上，改建成石板房，用石板砌墙，用石板盖屋顶，除了檩条和椽子外，整座房屋几乎全系石板建成。甚至日常用具也多为石头制造，如石臼、石磨、石碾、石灶、石钵、石桌、石凳、石盆、石槽等等。石板房的建筑，既显示了布依族人民高超的建筑技术，又体现了他们适应大自然的智慧。这种石板房冬暖夏凉，

防风，防雨，防火。由于是就地取材，所以造价低廉。整个村寨从房屋到路面均为石板构成，显得整洁优美，充满鲜明独特的民族特色。

梳高头

梳高头是贵州省镇宁县布依族妇女头饰习俗，有青年式、中年式、老年式三种。年轻姑娘的高头是将头发绾成拱桥髻，披向脑后，再在髻上由前往后插一支粗如小指头的骨签，长30多厘米。这种骨签，古代用牛骨，近代有的以牛骨为主干，外包银片，现代已演变为用纯银打铸了。骨签既是一种装饰品，也是一种防身武器，一旦遇上歹徒，即可拔下自卫。结婚生育子女后的妇女，取下骨签，改戴“银碗”。银碗戴在拱形发髻末端，约重几十克，碗底铸有一个光芒四射的太阳，在太阳心镶嵌着两个小扣，每个小扣上又吊着一尾小银鱼，工艺之精令人叫绝。进入老年时期的妇女，既不用骨签，也不用银碗，只将头发绾成拱桥形即可，名曰“戴七帽”。梳高头插骨签也好，戴银碗也好，戴七帽也好，其拱桥髻都用一块拱形榔树皮搭成。榔树皮有一块1.7米长花帕包着，两髻对称地配着两块绣花汗帕。包榔皮的花帕上用红、黄、蓝、青、紫等彩色绦线绣着八尾鱼、四只小鸟和一朵八角花。整个头饰工艺繁杂，绚丽美观。

浪哨谈情

浪哨，意即谈恋爱。布依族青年男女的浪哨形式，主要是唱歌，其活动有一定程序，依程序的不同，有各种内容的歌，如初识、试探、赞美、热恋、盟誓、思恋、分离、送郎、苦情、逃婚

等歌。青年男女初次见面，就唱《初识歌》，姑娘唱道："沟水慢慢淌，为的是去浇灌田庄；燕子衔胶泥，为的是建筑窝房；蜜蜂打花粉，为的是酿制蜜糖；姑娘我纺线，为的是织布缝衣裳。勒赛（小伙子）呀，你为何来到我们寨上？木叶吹烂几大堆，又不知为了哪一桩？"后生也须用歌作答，说明来意。为互相摸清底细，就唱《试探歌》，小伙子唱道："姑娘呵，你的嘴赛蜜甜，可是你的心我不得见，只怕你口和心不一样，像荷叶上的水珠容易变幻，在我这边散开了，又到那边去团圆。"探询摸底后，双方情投意合，就从心底迸发出赞美对方的《赞美歌》："寨上的姑娘哟，赛过朵朵玫瑰，讲话像唱歌，唱起歌来惹得哥心醉。"双方的感情又深了一层，就唱起《热恋歌》："假如你是一条大河，我就变做一条小溪；任凭山大沟坎曲哟，绕山绕坎也要来汇集。"为巩固忠贞爱情，双方立下金玉誓言，唱起《盟誓歌》："你看树上那两朵花，红艳艳真像火把，任凭狂风吹，它们总是紧紧相依不分桠。姑娘呀，我们要学树上的那两朵花。"青年们平时要从事劳动，会面机会少，就唱《思念歌》："坐在芭蕉树下，穿针引线绣花；远处传来笛声，使我心乱如麻。停下手中针线，听听吹箫的是不是他？笛声时隐时现，只怪风声太大。还怪芭蕉树叶，故意和风说话，老是摇着扇子，扇得刷啦刷啦……"小伙子的思念之情更是深沉疾醉："想念姑娘呀，心神不定错沉沉。走路常常踩进水坑里，在家常常碰板凳；错把小鸡当鸭唤，错把石磨当饭甑。像被箭射中的山鹰，周身瘫软没精神。"由于思念，后生往往到姑娘寨上去约会，分别时，姑娘就唱《送郎歌》："送郎送到五里坡，只送五里不送多，多送一里怕人讲，少送一里心不落。"一路难舍难分，就触景生情唱起了揪心的《分离歌》："太阳照蔗林，蔗叶绿茵茵，我俩要分离，蔗叶如刀绞痛心……芭蕉哟，你的叶子不要翻，情人要分离，蕉叶如刀割心肝。"过去，布依族青年男女只有恋爱自由，没有婚姻自

由，被父母逼迫与陌生人成婚，受尽苦处，一首《苦情歌》唱出了他们内心的痛苦："园里的青菜没有长高，就被摘去煮吃了；林中的笋子还没有成竹，就被砍去作船篙。妹妹还没有长大呵，就被阿爹嫁出了。"为了反抗封建婚姻，就双双逃走，逃婚时就唱《逃婚歌》："快把干粮放在口袋里，我们一起逃到远方去……只要我俩做夫妻，纵然一死也甘心。"在热恋中，就互送"信物"，男的送女的一条毛巾，女的送男的一双白毛底布鞋。若双方决心结为夫妻，就互相"丢聘"，互赠衣物，各拿对方的一两件穿过一次洗过一水的衣服作"把凭"，誓死结为良缘。

甩糠包

布依族青年男女在浪哨时，都要互相甩糠包。糠包，系用花布缝成，有鹅蛋大小，内装米糠，因此得名。布依族青年男女在对歌浪哨之前，看中了谁，就甩糠包去打他（她）；喜欢上谁，就专门接他（她）甩过来的糠包。然后，以糠包为凭，成双成对地到僻静处去对歌浪哨，倾吐爱慕之情。由于糠包上缀有多条绣花要须，抛甩时，你来我往，犹如双双彩蝶满天飞舞，十分好看。甩糠包是怎样兴起的呢？相传在古时候，有个布依姑娘出生时，因家境贫寒，全家吃的是糠拌野菜，爹妈就为她取名叫"糠妹"，意思是要她永远记住一家人是怎样从苦日子里熬过来的。糠妹长大后，美如一朵木棉花，又很勤劳，绣花做活样样能。一天，有七个后生同时来向她求亲，她就想了个办法来考验他们，说："你们正月十五那天再来吧，谁抢到我喜欢的花包，我就和谁成亲。"约期快到了，糠妹用各种布缝了七个装有粳米、糯米、小米、高粱、绿豆、豌豆、米糠的花包。正月十五那天，七个后生来了，糠妹向他们甩去了七个花包。六个好吃懒做的后生争抢装有米或豆的

小花包，想娶得糠妹，但一一被她拒绝。只有一个敦厚勤劳的后生最后拾了个剩下的装糠的靛染粗布包，结果，糠妹就以身相许。因为这布包是糠妹缝的，里面装的又是米糠，所以人们就叫它“糠包”。从那以后，青年男女浪哨时，往往以糠包为红线，哪个后生被姑娘甩去的糠包打中或接住，他就是那个姑娘的情侣。每逢节日或吃酒赴场会情人的头几天晚上，姑娘们总要精心地缝糠包，并边缝边唱：“吃完饭洗完碗我把灯挑，竹篮里拿出一把尖剪刀，选块蜡染花布慢慢剪，丝线穿针缝糠包；灯花灯花你莫笑哟，风儿风儿你莫把竹窗敲，我要把心缝在糠包里，明天糠包坪上向他抛。”

追打嫁女

贵州镇宁县一带的布依族，在举行婚礼之前，男家要请两个精明能干的小伙子和一个聪明伶俐的姑娘到女家接新娘。女家也要请两个姑娘陪伴新娘到男家。接新娘的小伙和姑娘叫“抱鼓”和“娅鼓”，他们把新娘悄悄接出寨子时，要被女家寨上的人“追打”。这一风俗有个有趣的来源：很早以前，有个美丽的布依姑娘阿嫦，和一个英俊的布依后生韦卜通过对歌浪哨订下了终身。韦卜正忙着置办聘礼，不料有队官兵拥着一乘花轿来到阿嫦家门口，一个年轻的将军带来成挑的金银，要买阿嫦为妻。阿嫦妈一面杀鸡宰鸭敷衍将军，一面悄悄叫阿嫦的两个女伴连夜去给韦卜送信。韦卜闻讯，赶忙邀约两个伙伴和一个年轻姑娘一道去接阿嫦。连报信的姑娘一起，他们一行六人赶到阿嫦的寨边，韦卜让两个后生和三个姑娘潜入寨中去接阿嫦，他在寨边接应。五个人刚把阿嫦接出寨外，将军发觉情况有变，就停下杯盏，带人追赶。韦卜和两个后生临危不乱，叫三个姑娘带着新娘先跑，他们留在后边

抵挡，边打边跑，跑过三重山，越过三道谷才甩脱官兵。从那以后，这里的布依族接新娘时，都要追追打打送亲，成了一种风俗。

谢厨师

在布依族婚礼上，送亲客随着男家迎亲的大队人马，押着嫁妆把新娘送到男家后，男家摆席招待。入席后，八仙桌上除摆八个碗、八双筷、八只酒杯外，什么也没有。许久不见上菜，陪客的主人故意高声问道："怎么还不端菜来？"厨师们回答："我们本想把菜端来，只是手板太油了，一来怕打滑了碗，二来怕贵客们嫌脏。"这时送亲客领队急忙取出事先准备好的新毛巾，走进厨房一边向厨师们赠送新毛巾，一边吟道："厨官太辛苦，烹炒龙凤肉，手艺实在高，我们饱口福。不得知怎来感谢，送块粗麻布，你们快收下，拿去揩油污。"厨师们每人收下一块新毛巾后，才一一端出菜肴。酒未过三巡，菜刚尝几口，一群姑娘又来说："菜凉了，我们收进厨房热一下。"说完，七手八脚地把菜肴全部端回厨房。许久不见菜端回，陪客的主人又故意高声问道："菜还没热好吗？"姑娘们回答："没有柴了，菜无法热。"这时，送亲客领队心领神会，忙起身向同席者说："请大家停箸稍候，我去把菜请来。"说完，摸出事先准备好的若干个小红封，走进厨房，送给姑娘们一人一封，说："表姐们辛苦了，上山砍来的柴不够烧，这里有几分钱，请表姐们代我去买两挑柴来赶快把菜热好，免得大家久等。"姑娘们嘻嘻哈哈地接过红封后，就把菜端回到桌上去。

唢呐送客

布依族有唢呐送亲客的习俗。在婚礼中，当送亲客把新娘送

到男家，酒席过后动身回程时，新郎家在大门口摆上一张八仙桌，桌上平放着一对唢呐。这时，送亲客领队便摸出两个红封放在桌子上，把唢呐扶起来，喇叭盘扣在桌面，喇叭嘴朝天竖着，以此表示需要吹唢呐送行，谢主人的盛情。吹唢呐者收了红封，拿起竖在桌面上的唢呐吹一曲“出门调”，与主人一道敬送客人。出了寨门再吹几曲“过山调”，祝客人一路顺利。唢呐送客的礼仪，既充分体现亲戚间的团结互敬之情，又是向所过村寨的人们“报信”：某家有这样隆重的喜庆。反之，如送亲客领队没有经验，不送红封，不扶起桌上躺着的唢呐，那么既要被人耻笑不懂礼节，又要被早已等在一旁的主人寨上的姑娘们“敬”酒，有多少姑娘在场就要喝多少杯酒，那后果就可想而知了。

吹木叶

在布依族浪哨歌中，有一首歌这样唱道：“小河慢慢淌，姑娘河边洗衣裳，洗完花飘带，又把花格头帕洗，抡起捶衣棒，一棒一棒捶得响；忽听对门山梁上，传来木叶声声昂，木叶好比拨火棍，搅乱我心肠；身在河边心已飞，一边捶衣一边望，不小心，一棒捶在手背上，哎哟哟，吹木叶的真魍魉，害我心烦意又乱，害我手背挨一棒。”此歌说明了吹木叶在布依族青年的爱情生活中，占着一定的地位。据传很早以前，布依后生丹叶，由于家境贫寒，二十五六岁尚未娶亲。一天，丹叶在山上砍了一挑柴后，躺在树林里休息，这时晚风吹起，树上叶子发出各种优美动听的声音。丹叶由此得到启发，摘下一片枫香叶，把叶边一折，放在唇上，轻轻一吹，果然吹出悠扬的声音。于是，丹叶每天上山砍柴，就把自己的辛酸和无妻室的苦处编成21支曲子来吹。婉转悠扬的木叶声感动了九天云上的七仙女，遂下凡来和丹叶结成夫妻，过着男

耕女织的美满生活。从那以后，布依族才兴起了吹木叶。特别是青年男女谈情说爱时，木叶成为他们恋爱的媒介。

护寨树

绝大多数的布依族村寨中，都有一株古树，人们称之为“护寨树”。护寨树大部分为榕树，也有枫香树和榔树。相传很早以前有个勤劳善良的布依阿妈也岩（布依语即岩家妈），在寨子中央栽下一株榕树苗，经常浇水培土，榕树长得枝繁叶茂，像一柄大绿伞，为寨上的人们遮荫挡风。它散发的清香毒死了蚊虫和蝗虫。谁要是有了伤风感冒，只要剥一小块护寨树的皮煨水喝，连服三次，伤风感冒即好；要是患了风湿，只要摘下几片护寨树的叶子煨水洗，风湿即自会痊愈。每年插秧季节，护寨树就邀约附近山岭的杉树、梓木树、青杠树、柏树等伙伴向天空发出股股清香，化作云雨降到田地里。因此人们很敬重护寨树，后来每个布依村寨都要种一株护寨树，全寨人为它培土浇水，精心照料。若寨子受到外侮，人们就聚集在护寨树下商量对策；农闲或逢年过节，人们也聚到护寨树下，老年人议往事，谈庄稼；青年们对歌嬉戏；阿嫂们纺线纳鞋底；娃崽们吊着树枝荡秋千，俨然一个露天俱乐部。

洗脸洗第一，洗脚洗第七

自古以来，布依族人民保持着一种传统的美德。不管是否认识，凡在路上相遇，年少者自觉地站到路边，礼让年长者先行。在走亲访友或赶场路上，只要多人同行，年老或年幼者都走在前头，中青年殿后，以便照应。在路上，遇年长者挑担或背东西，不管认识与否，年轻人总要为年长者担一阵，直到岔路分手为止。客

人来到家里坐下后，家里人进出办事，不从客人面前过，只从背后走；若客人背靠墙壁不能通过，主人须先向客人打招呼："得罪了，过你面前。"然后才从客人面前走过。客人入席，主人为客人添饭时，要绕到背后去接传碗，不能从其他人的面前或头上接递。客人未吃饱饭之前，主人即使已吃饱，也不能先放碗，要拿着碗筷坐在原位，等最后一个客人用餐完毕，才一起放下碗筷。有客人来访，不能盯着客人久看，在客人面前不能吐痰擤鼻涕，不能挖耳或鼻孔，不能拍打身上的灰尘，不能高声大气说话或狂笑，不能翘二郎腿。早上，姑娘们为客人端洗脸水前，自己一定要先把手脸洗净；晚上洗脚，一定要让客人先洗，这就是"洗脸洗第一，洗脚洗第七"的规矩。不管自家小孩多么淘气，在客人面前，不能打骂小孩，更不能骂鸡骂狗，否则，有"逐客"之嫌。

查白歌节

"弹过月琴吹木叶，唱罢山歌吹短笛。牛郎织女要相会，只等六月赶查白。"这首浪哨歌，表达了布依族青年男女盼望一年一度的查白歌节到来的急切心情。查白坐落在贵州南盘江畔黄草坝（今兴义市）北面约25公里的一个布依山寨旁，是个面积约数十公顷的大土坡，又叫查白场。每年六月二十一，方圆数百公里的布依族和苗、壮、彝、瑶、仡佬等各族青年男女，汇集到查白场上，一面纪念查郎白妹，一面浪哨、游方。相传从前这里有个美丽聪明的布依姑娘白妹，和憨厚勇敢的布依后生查郎相爱。查郎从虎口救出白妹后，不料白岩寨头人野山猫害死查郎，抢走白妹。白妹宁死不从，在六月二十一夜晚，一把火烧了野山猫家，自己也纵身火海，以身殉情。后来查郎、白妹的灵魂变成两只白仙鹤，凌空比翼，飞上九天，成了紫云歌仙。人们为纪念这对不畏强暴

为民除害的忠贞夫妇，议定六月二十一为“查白歌节”。

牛王节

“九名九姓独山州，南郊紫泉北石牛。年年四八牛王节，家家花饭摆门楼。”这是贵州独山一带布依族人民流传的一首歌谣。相传四月初八是牛王的生日，俗称“牛王节”。在贵州独山墨寨与荔波阳凤两县交界的地区，每年这天都要举行隆重的祭祀和庆典，家家用紫泉酒、五色糯米饭等食品敬牛王、喂耕牛；挑选最肥壮的牯牛来角斗。据说很早以前，布依族祖先布杰鉴于子孙日多，原地住不下，就把他们分到各处有山有水的地方去开田拓土。到插秧时节，因子孙分散居住，布杰老人来不及一处处去查看他们的备耕情况，便想了个办法，选定四月初八这天，各寨子孙牵牛拉马，到指定的草坪赛马斗牛，看谁的牛喂得膘肥体壮，预测谁能种得好庄稼，秋收得到好收成。从赛马中，看谁喂的马体壮膘肥跑得快，预测有骏马驮粪肥下田，秋后，有骏马驮五谷进仓。这一习俗一直沿续至今。“四月八牛王节”，不管是斗牛还是赛马，实际上是布依族人民的备耕大检阅和显示春耕力量的一种方式。

毛杉树歌仙节

贵州安龙县德卧乡的纳拿与者棉两个布依族寨子间有个小土丘，名叫“毛杉树”。每年农历三月初三后的第一个蛇场天起，成千上万来自册亨、望谟、贞丰、兴仁、兴义等县，以及广西隆林县、云南罗平县的布依族和各族青年男女，云集到毛杉树地方来赶三天的歌仙节。毛杉树歌仙节有一个动人的传说，相传在很早以前，竹松后生杉郎和芭蕉寨布依族姑娘树妹相爱，不料魔狼把树妹抢去，杉郎历经千辛万苦救回树妹并成了亲。魔狼为报仇，遂变成千千万万的麻抓（蝗虫）吞噬庄稼。树妹得到九天云上的莲花歌仙的金嗓子，便亮开歌喉，从这个田坎唱到那个田坝，一连唱二十七天，一直唱到德卧地区。所有的麻抓都随着歌声到九天云外喂了莲花歌仙的金猫。庄稼保住了，可树妹因劳累过度，于次年三月初三蛇场天卧病不起，离开了人世。杉郎悲伤万分，不久也离开了人世。人们将他俩安葬在者棉和纳拿之间的一个土包上。不久，他们的坟前长出两棵高大的杉树，枝叶细长，叶尖倒垂，像树妹生前披着的头发。人们说这是杉郎、树妹的化身，遂把两棵杉树取名叫“毛杉树”，把他们安葬的那个小土包也称为“毛杉树”。从此以后，每年三月初三后的第一个蛇场天起，一连三天，四乡八寨的布依、苗、壮、彝、瑶、仡佬等各族青年男女，穿着节日盛装，成群结队，吹着木叶、洞箫、勒尤、口弦、芦笙，弹着月琴，包着五色糯米饭，纷纷涌向毛杉树，一面纪念杉郎树妹，一面对歌、浪哨、游方找情侣。从此，三月三赶毛杉树就成了布依族和各族青年男女的传统歌仙节。

神仙田歌会

农历正月初五到初七这三天，布依族青年男女，成群结队，以木叶、姊妹箫、月琴声引路，从四乡八寨汇集到南盘江畔安龙县幺塘乡洞洒寨旁叫做“神仙田”的地方赶歌会。这神仙田歌会原是纪念布依族起义英雄王仙姑的民俗节日。据历史记载，清嘉庆二年（1797年），布依族人民在王仙姑（乳名王阿崇）的领导下，发动了南笼（今安龙）农民大起义，反抗清朝的苛政。相传王仙姑是天上仙女下凡，身上有“仙气”护卫。她小时在洞洒寨旁石板上用手指画田土，刚一画完，寨前的荒草坝就变成了肥田沃土，人们就叫它“神仙田”。又传王仙姑起义时和官兵打仗，能腾云驾雾。后因官兵人太多，起义失败。王仙姑在京城英勇就义时，再次显灵，把皇帝拉来做替身，自己腾云上天还原成了仙女，永远护卫着布依族人民。布依族人民为了纪念自己的民族英雄，就议定每年正月初五到初七，即王仙姑领导起义的日子为“神仙田歌会”节。尔后，歌会也为布依族青年男女浪哨游方找情侣提供了绝好的机会。

月　琴

在布依族浪哨歌中，往往提到月琴，如“圆圆的月琴壁上挂，猛抬头我看见了它。停下手中纺车，忙把月琴取下。刚刚定准弦音，心里却想起了他。琴声虽然委婉，不如他会说话。”在布依族地区，每当月明星稀的夜晚，后生们就三五成群地抱着月琴，来到姑娘们的竹楼下，叮叮咚咚地弹起一首首动人的心曲。姑娘们听到优美的琴声，知道情人来了，就走出竹楼赴约。据说在很早

以前，布依族后生勒木和布依姑娘妹丝为反对封建婚姻，争取姻婚自由，双双逃进深山老林。一个晚上，他俩追逐一只九节狸，来到一股山泉边，见山泉从高岩淌下，注入岩脚水凼里，发出叮咚悦耳的声音。这时，恰巧月亮从树丛的空隙中倒映在水里。他俩从中得到启示，遂以水凼为琴盘，悬岩为琴把，流泉为琴弦，仿造了一把琴，弹起来叮咚作响，犹如泉水之声，悦耳动听。因是仿照水凼造的琴，当晚又有月亮倒映在水凼里，勒木和妹丝就将它取名叫“月琴”。

从那以后，月琴就成了布依族青年男女浪哨时传情达意的工具。难怪痴情的姑娘们在一首浪哨歌中这样唱道：“我在灯下纺棉线，棉线老是断；莫去怪线断，只怪自家心里烦；莫怪心头烦，只怪楼下月琴叮咚弹；背时月琴哟，声声把我唤。”

姊妹箫

布依族青年爱吹姊妹箫，只要听到姊妹箫声，一天的劳累云消雾散，满腹的烦闷也随即不见踪影。特别是在明月高悬的宁静之夜，只要听到委婉动情的姊妹箫声，一对对情人就会寻声赴约。关于姊妹箫有这样一个传说：很早以前，在滚滚的南盘江边，住着一户布依族人家，家有七姊妹，个个聪明伶俐，勤耕善织。一天，她们放在晒楼上的七根晾纱线和晾靛染布的楠竹竿，因散发出阵阵馨香，招来七只蜜蜂各在一根竹竿上螫了一个小孔，江风徐徐吹来，七个小孔发出七种优美动听的声音。七姊妹由此得到启示，就砍来一节筛竹，每个人在竹节上学着蜜蜂各钻了个小孔，这样，就制成了七孔箫。人们为纪念聪明勤劳的七姊妹就把这种箫叫作“姊妹箫”。从此，青年男女浪哨时，往往用姊妹箫来传递情思，呼唤情侣。

●朝鲜族

朝鲜族人口为1,920,597人(1990年统计),主要聚居在吉林省延边朝鲜族自治州和吉林省其他地方。黑龙江省、辽宁省、内蒙古自治区及内地的一些城市也有分布。

朝鲜族有自己的语言文字。朝鲜语的归属尚无定论。朝鲜文创制于1444年,有40个字母,系音素字母,拼写时,把同一音节的音素迭成字块构成方块形文字。

朝鲜族在历史上除信仰基督教和天主教外,还信仰本民族特有的天道教、青林教等,佛教在朝鲜族中也有较广泛的影响。

契玛和赤古里

朝鲜族妇女的服装别具一格，一般是由黄、绿、红、粉红、紫红的丝绸制作。上身着短衣，下身穿长裙，色彩艳丽，样式优美。

短衣为斜领，无扣，以布带打结，朝鲜语叫做“赤古里”。女子的短衣仅有男上衣的三分之一长，只能遮盖突起的胸部。短衣的衲子、衣襟和下摆协调柔和，富有曲线美。少女的短衣更加别致，上衣的袖子由七彩相间的绸缎做成，轻盈柔美，煞是好看。

裙子的长短，视年龄的大小而有区别。长及脚面的长裙多为中年以上的妇女穿，短至膝盖的短裙则多为少女穿，腰间有许多皱褶，随风飘动。这种长短裙，统称为“契玛”。

赤古里和契玛的长短，曾经历过较长的历史演变过程。据古代文献资料记载，赤古里的袖子和下摆是由长变短，契玛的系腰部分则是由短变长。到19世纪，赤古里的袖子和下摆都比较短，和现在朝鲜族妇女穿的很相似。

从前，朝鲜族妇女最喜欢草绿色，以“绿衣红裳”为最高尚的礼服。但随着生活条件和人们审美观念的变化，妇女对赤古里、契玛颜色的追求越来越多样化，有的喜欢“黄衣蓝裳”，有的则喜欢“红衣白裙”，而中年妇女一般最喜欢玉色的赤古里和契玛。

打　糕

打糕是朝鲜族最爱吃的传统食品之一。凡逢佳节或红白喜事，每家都用打糕招待亲朋好友。

顾名思义，打糕是打出来的。制作时，先把糯米蒸熟后，放进木臼里，用木棰砸打成糕团，然后切成片状，洒上小红豆面或

炒豆面，或蜂蜜、白糖，吃起来啧啧有味。

打糕的原料，主要是糯米。不产糯米的地方，则用小黄米或糜子；所洒的豆面原料，除用小红豆外，还可用黄豆、绿豆、松籽、栗子、红枣、芝麻等。

打糕的历史比较长。早在18世纪朝鲜族的有关文献中已有记载，当时称打糕为“引绝饼”，并称引绝饼已成为传统食品之一。

朝鲜冷面

冷面是朝鲜族的传统食品之一。其主要原料是荞麦面、小麦面和淀粉，也可用玉米面、高粱面、榆树皮面和土豆淀粉制作。

冷面的制作方法是：将荞麦面及淀粉加水拌匀，压成面条，煮熟捞出，然后冲以凉水冷却，再加入泡菜、梨片、苹果片、酱、醋等佐料，以及牛肉汤或鸡肉汤。这样制成的冷面，既清凉馥郁，又甜美新鲜。因此，朝鲜族人不仅在炎热的夏天爱吃冷面，即使在寒冬腊月里也喜欢坐在温暖的炕头吃冷面。特别是每年到农历正月初四的中午，朝鲜族有全家一齐吃冷面的习俗。据民间传说这一天吃面条，可以“长命百岁”，故冷面也称作“长寿面”。

制作冷面的主要工具是一种简单的木制压面机。这种压面机有2米长，机子中间装有直径40—50厘米的凹型圆盘。圆盘多用铁片或铜片制作，上面凿有密密麻麻的小孔。压面时，将和好的面团塞进圆盘内，再用挂有杵子的长木头压出细长细长的面丝，压出来的面丝通过小孔缓缓流进滚烫的热锅里，自然煮熟，然后用笊篱捞出。

朝鲜族吃冷面的历史很长。据日本史书记载，17世纪上半期，朝鲜僧天珍已将制作冷面的方法传到日本。现在，除延边朝鲜族自治州外，全国各大中城市几乎都设有朝鲜冷面馆，朝鲜冷面已

深受兄弟民族顾客的欢迎。

克依姆奇

“克依姆奇”是朝鲜族喜欢吃的一种泡菜，它是以白菜、萝卜、黄瓜、大葱、芥菜等蔬菜为原料，佐以大蒜、辣椒、生姜、虾酱、黄花鱼酱等盐渍而成的。

克依姆奇的种类很多，有白菜克依姆奇、萝卜克依姆奇、黄瓜克依姆奇、大葱克依姆奇等。萝卜克依姆奇还有片状、丝状、块状等多种，各有不同的新鲜味道。

克依姆奇是冬天的主要副食品，从十一月一直吃到第二年的四月，而且保存6个月仍能保持味道新鲜，所以被誉为“冬季半年粮”。克依姆奇含有大量的维生素，长期食用可以防止漫长的冬季里因缺乏新鲜蔬菜而引起的各种疾病。因此，每年十月，朝鲜族居民家家户户都要准备数百公斤白菜、萝卜、几十公斤大葱、大蒜、芥菜和辣椒等。一到腌菜的日子，三四名妇女结为一组，逐家轮流制作克依姆奇。克依姆奇的作法较复杂。常见的白菜克依姆奇的作法是：先剥去外面的烂叶子，然后将干净的白菜浸泡在盐水缸里，过一两天后拿出来用清水洗干净，放在大盆里，把叶子一张张翻开，用辣椒面、蒜酱、生姜面混合制成的佐料涂抹，弄整齐后一张张装进大缸里，拿到5℃左右的地窖里贮藏起来。放盐的数量因各地气候的差异而不同。一般是“北道人”（祖先由朝鲜北部迁入的朝鲜族）口轻，放盐少；“南道人”（祖先由朝鲜南部迁入的朝鲜族）口重，放盐多。

朝鲜族食用克依姆奇的历史悠久。早在上古时代即开始腌制萝卜、黄瓜、茄子、韭菜、竹笋、大蒜等蔬菜。到了新罗、高丽时代，就能以川椒、生姜、橘皮等多种调料，制作较高级的克依

姆奇。18 世纪以后，白菜的栽培技术得到普及，白菜克依姆奇广泛出现于民间的饮食中。

头顶水罐

在朝鲜族聚居的地方，常见身穿民族服装，头顶水罐、木盆、柴禾、包袱的朝鲜族妇女熙熙攘攘地走在田野、山坡、井边、溪畔或大街、小巷。她们步态轻盈，手臂轻缓，线条柔美，婀娜多姿，与青山绿水相映，好似一幅生机盎然的画面。

顶运是朝鲜族妇女一种特殊运输方法。顶运主要靠脖颈的承受力支撑物体的重量。头顶物体时，物体下面垫一块用草绳或葛藤编织的垫圈，没有垫圈时，也有临时用一块手帕代替的，以分散物体的压力，减少头部因承受面过分集中而产生的疲劳。

顶运的物体，多为水罐、竹篮、筐子、铁筒、瓦盆、木盆等各种容器以及大小包裹或柴禾。顶水罐一般不用手扶，全靠颈部和头部动作的灵活配合，走路时身板笔直，如行云流水一般。

朝鲜族妇女顶水罐的习俗从何而来，据民间传说，很久以前，有个财主趁男人们都外出去做民工，村中只剩妇女之机，扬言要挑脖子软的妇女欺侮。妇女们听了都琢磨如何对付，终于想出了表示自己脖子不软的办法：各家去河边取水时，把水罐放在头上顶着，那财主全都不敢欺侮了。从此以后，顶水罐不仅成为朝鲜族妇女机智勇敢、坚贞不屈的象征，而且形成了特殊的运水习惯，一直流传到今天。朝鲜族妇女顶水罐的真正原因，恐怕是由于她们在很多时候都是背着孩子劳动，不能再背别的东西，因此只好用顶运。

老两口回婚礼

朝鲜族有一种特殊的婚姻仪式，叫做“回婚礼”。“回婚礼”在老两口结婚60周年纪念日举行。举行“回婚礼”，必须具备如下三个条件：一是老两口都健在，二是亲生子女都在世，三是孙子孙女无夭折。如果亲生子女或孙子孙女中有死亡者，则不能举行“回婚礼”。

“回婚礼”比普通婚礼盛大。这一天，老两口要穿着结婚时穿过的礼服，接受摆满山珍海味和五颜六色果品的丰盛婚席。两位老人的子女、儿媳、女婿、孙子、孙女，以及村里的男女老少都前来祝福、祝寿，热闹异常。1987年，吉林省龙井县八道乡举行过一次“回婚礼”，婚礼的主人公是朝鲜族故事大王黄龟渊和他的老夫人。他们老小三代16口，全部健在。因此，村里为他们举办了隆重的“回婚礼”。当日，两位老人接受了回婚大席，并坐花车游遍全村。当地党政及群众团体的负责人也前来祝酒、祝寿，表达了党和人民政府对老年人的关怀。

新郎住妻家

现在朝鲜族举办婚礼是“女嫁”和“男娶”同时进行的。可是从前则不然，新郎要先“嫁”到新娘家，过一段时间之后，才把新娘娶回家。这种结婚方法，朝鲜族称作“罕早那得丽”。在朝鲜语里，至今仍把男人结婚叫做“到妻家”，把女人结婚叫做“到夫家”，这说明“两次婚”的婚俗，在朝鲜族里是源远流长的。

在“罕早那得丽”这种婚俗中，男女订婚要通过中间人介绍。订婚之后到结婚之前，男女双方和双方的亲戚之间均不得相见。婚

约一旦订立，由男方父母选择良辰吉日确定婚期，然后通过媒人转告女方。

婚事一般举办两次。第一次是男家“嫁”儿，女家迎婿。这一天，新郎头戴纱帽，身穿冠带，腰系犀带，脚穿白布袜、皂木靴；新娘则头梳“大发”，束以“簇头里”（用黑缎子做的花冠），上身穿淡绿色的赤古里，下身穿红色的长裙，外披长衣，手缠绸巾，脚穿白布袜、勾勾鞋。

新郎前往新娘家时，要骑骏马。送亲的傧相只去一人。还要带些装有礼品、婚书和木雁的“礼状函”。新郎到了新娘家的大门口，脚踩草带下马，随即把带来的木雁和礼状函交新娘家的人。递交木雁叫做“传雁”，意味着前来寻觅配偶。

举行婚礼时，新郎脚踏凉席步入礼厅。新娘因脸上盖着遮面巾，要由娘家的亲人扶进去。新郎和新娘到齐之后，两人相向而立，新郎站在东侧，新娘站在西侧。婚礼的仪式共有三项内容：第一项是由主婚人宣读婚书后，新郎蘸取水盆中的净水，向四面弹撒；第二项是新郎用筷子把碗里的一片栗子夹起来翻个个儿；第三项是新娘和新郎互相跪拜行礼。之后，新郎抱着木雁，拉开洞房的门，把木雁顺着炕面推进炕里。如果木雁卧着身子，意味着头胎将会生儿子；如果木雁仰着身子，则意味着头胎将是女儿。推完木雁之后，新郎入新房，享用酒食，叫做“受大席”。大席桌上摆的食品，除了山珍海味等佳肴外，还得放一只炖熟的公鸡，公鸡的嘴里要叼一个红辣椒，据说这是为了美观。新郎在享用大席上的饮食之前，先让供席的人在各种菜肴、果品之中每样拣出一点儿打个纸包，以便奉献给自己家的老人。打完之后，新郎便跟陪伴他的新娘家的亲属们一起享用酒席。大席撤去之后，陪餐的新娘亲属们便引逗新娘跳舞唱歌，欢乐一番。到晚上，新郎受“夜桌”，喝完新娘的敬酒之后，两人便同枕共寝。婚后第三天，新

郎带些礼品归家。约过半个月之后，新娘家里要派去人马把新郎接回。新郎重返新娘家以后，可以长期地留下来跟妻子一同生活。

过半年或一年以后，新郎要把新娘娶回家，举办第二次婚事。新娘到了新郎家，只受大席而不举行婚礼。大席上摆的食品，与女方家大席上的基本相同。退席以后，新娘到院子里给公公、婆婆、叔公、婶母等长辈们行跪拜礼，并一一敬酒。次日早晨，新娘跟男家同辈人行对拜礼。至此，婚事才算结束。

现在婚礼与前不同，新事新办，新郎不骑马，新娘不坐轿，出现了许多朴素、大方、热闹的新的婚礼仪式。

老人花甲礼

花甲是老人诞生60周年纪念日。每家朝鲜族的老人在这一天，都由子女们为父母举办“回甲宴”。

这天，老夫老妻从里到外穿着子女们特意为他们制作的新衣裳，入坐寿宴席的中央，然后，前来祝贺的同辈兄弟和本乡年逾花甲的老人依次入席，坐在老两口的左右两边。宴席桌上，摆满水果、糖果、糕点、酒菜之类。此时，子女们穿着节日的盛装，来到寿宴席前，以辈份长幼为序敬酒。首先是大儿子向父亲跪拜，站起敬一杯酒，等父亲喝完再跪拜。按同样方法，向母亲敬酒。这之后，便是大儿媳、二儿子、儿媳、三儿子、儿媳及孙子们，也按上述方法，先祝酒后行礼，依次退下。待儿孙们行礼结束，亲朋好友们才依次上前敬酒。

礼毕，子女们宴请前来祝寿的亲戚朋友。

婴儿抓周

在朝鲜族的人生仪礼中，婴儿的一周岁纪念日最受重视。而生日当天的抓周儿活动十分别致。

一周岁纪念日当天，婴儿母亲要给孩子穿上一套精心制作的漂亮衣裳，男孩穿七彩袖的丝绸短袄，外加坎肩；女孩穿七色彩袖、襟垂飘带的短袄和红色的罗裙。当天早晨，等前来贺喜的客人到齐后，做母亲的就把婴儿带到事前准备好的生日席桌前。桌上，无规则地摆着打糕、冷面、小豆、水果、货币、丝线、玩具枪、书本、算盘、纸张、笔墨、小琴等食品和日用品。如果是女孩子，就把玩具枪换成剪刀、尺子和针线。婴儿站在桌前的雪白棉布上，“过目”这些“涉猎物”。这时，前来贺喜的亲戚、朋友、邻居们纷纷把钱、礼物等放在婴儿面前。婴儿母亲让孩子从席桌上摆着的五花八门的东西中，选择自己的意中物。人们则根据孩子抓取的东西来判断长大以后的前途。如果抓取的是谷物、钱或算盘，就认为孩子长大之后会发家致富；如果抓取的是冷面或丝线，就认为这孩子命大福大，长命百岁；如果抓取玩具枪，就认为这孩子会成为一名军人；如果抓取笔墨或纸张，就认为这孩子聪明，会念书，有出息。这个婴儿在生日席桌上任意抓取意中物，借以预测婴儿的爱好和前程的办法，就叫做“抓周儿”。

跳　板

跳板是朝鲜族妇女普遍喜爱的游艺项目之一。

早先，这种游戏在正月十五进行。每到这一天，新媳妇和姑娘们便穿红戴绿，欢聚一起，一升一落地压着跳板。它是一种以

跳蹬为特征的全身运动，既可锻炼身体，保持健美的体态，又可培养果敢性格和坚强意志。民间流传着一些描写跳板的俗语，如“正月里跳跳板，则当年脚底不会入刺”，“姑娘不会跳跳板，出嫁后难产。”说明跳板是适于妇女户外锻炼，有益于身体健康的运动形式。

跳板的长度为5—5.5米，宽度35—40厘米。在跳板中央垫一块圆木、稻草捆或装有泥土的草袋，由一个人或两个人坐在中间，借体重将木板固定在板垫上。然后双方各站板子一端，一先一后跳跃。压跳板的方法有多种：有的腾空而起，翻滚而下；有的跃身曲体，双腿伸直，落地垂立；有的挺胸展臂，双腿分开，落地合拢。跳板的比赛方法有两种：一种是在规定的时间（一般是2分钟）内，以运动员系在脚脖上的线抽出来的长度（即跳的高度）决定胜负；另一种是将规定的跳板动作连结起来的表演，或手持扇子、圈、花环等进行自由表演，评定的依据是看动作是否符合规定，动作的姿势和技术是否正确，或看动作的难度以及完成动作的质量及姿势优美程度。

从前，跳板在正月初至二月间进行，现在一般改在五月端午节或“九三”纪念日（即延边朝鲜族自治州成立之日）在体育场上举行。

荡秋千

荡秋千是朝鲜族妇女最喜爱的传统游艺项目之一。一般在四月初八至五月端午，即春末夏初期间进行。每逢端午节这一天，朝鲜族妇女便集结在百花深处的开阔地里，选择一棵大柳树或老松树，在其粗大的横枝上悬挂长长的秋千绳，或在特制高达12米的秋千架上，系一条U字形秋千绳，进行秋千比赛。荡秋千时，那些穿着漂亮衣裳的少女、少妇在凉爽的树荫下悠悠荡起，长裙在空中飞舞，有时像矫健的鹰在展翅飞腾，有时又像轻盈的燕子飘在地面。

荡秋千比赛的评定方式通常有两种：一种是在秋千架前方离地面高8至9米处横拉一条系有一串小金铃的彩索，运动员用力荡高以踢到金铃，踢到金铃次数多者为优胜；另一种是在秋千板底下系一根彩线，用以量运动员从起点荡至空中最高点的距离，视其长短决定优劣。现在一般采用前一种比赛方法。每当运动员的脚尖碰上金铃，空中便响起朗朗的铃声，观众的情绪也为之振奋起来，爆发出一阵阵的掌声和欢笑声。

荡秋千显示了朝鲜族妇女爽朗、勇敢的性格。照惯例，对于在比赛中获冠军者奖给一台缝纫机。

氏勒米

“氏勒米”是朝鲜族男子普遍喜欢的一种古老的体育项目，古代叫做“解抵”、“角”、“角力”或“角戏”，现在一般叫做“摔跤”。这种体育活动，平时在河边的沙地或田野的草坪上进行，正式比赛一般在平整的运动场里进行。比赛场地较简单，通常是圆

形，直径 8 米，上铺一层沙子，沙层厚度约 50 厘米。朝鲜族氏勒米的特点是使用腿带。腿带用长 3 米的白布做成，围在腰际，并有伸缩性地缠在右侧大腿上。腰带用的是约 1. 5 米长的带子。比赛开始时，双方蹲着，身子略往前倾，右膝着地，左膝弯曲，足掌轻压地面。尔后，双方互相搂住右肩，各自右手抓住对方的腰带，左手抓住对方的腿带。裁判员的哨声一响，双方同时站起，使尽全身的力气，想方设法摔倒对方。氏勒米的技巧多种多样，有内勾、外勾、箍脖、背肚子摔等。据统计，包括手臂、腿脚、肩腰、背肚等人体各部位的动作，可以举出 40 多种。

相传，氏勒米远在高丽时代就已经在民间流行。据在吉林省集安县发现的高丽古角抵壁画描绘，有两人摔跤、一人主持、四周群众围观的场面。公元 4 世纪以前朝鲜族祖先已普遍喜爱摔跤运动。到了高丽时代，这种游戏在民间广泛普及。封建统治阶级往往通过摔跤比赛，从民间选拔武艺高强的人，并委以重任，以维护其统治。老百姓也把这些人称之为“勇士”或“壮士”。

大型氏勒米，多半在端午节或其他喜庆节日里进行。根据不同的年龄、气力，分为少年、青年、壮年三个等级。通常每次比赛要进行三个回合决定胜负。按习惯，只要来到摔跤场，任何人都可以参加比赛。比赛时，群众纷纷前来围观、助兴，场面十分热闹。在正式比赛中，获得冠军者可以得到一头大黄牛作为奖品。获奖者要骑着大黄牛，带上大红花，绕场一周，向欢呼的群众答礼。据朝鲜族老人说，以黄牛作为奖品，是因为自古以来黄牛是重要的役畜，而氏勒米又与生产结合紧密之故。

伽倻琴

伽倻琴是朝鲜族最喜爱的民间乐器之一。相传，早在公元前，

今朝鲜半岛上就出现了类似伽倻琴乐器，叫做“辰韩琴”。到了公元6世纪时，朝鲜半岛上的古国之一伽倻国里出现了一位音乐大师于勒。经这位乐师的发明创造，辰韩琴遂发展成伽倻琴。

早年的伽倻琴是用一块较厚的梧桐木板制作。先抠空木板，做成音箱，再把12根弦挂在琴码上，两头拧紧，以供弹拨。现在的伽倻琴，已从12弦逐渐增至13弦、15弦、16弦、21弦、23弦，以扩大音域，增强表现力。

伽倻琴的基本弹法是：一端着地，一端平放于腿上，上身稍向前倾，眼睛看着琴码，右手弹，左手按，两只手平行移动。手指的动作有抹、拢、拨、挑、拉、推、划等多种。其中最富有表现力的是拢弦法，即用右手指配合左手指将琴弦上下摆，通过弦的振动，产生音色变化，以期得到表达不同情感的效果。

●满　族

满族人口为9,821,180人（1990年统计），主要分布在辽宁、吉林、黑龙江三省，以辽宁省为最多，其余散居于全国各地。

满族的直系先民为明代的“女真”。往上可追溯至隋唐时代的“靺鞨”，北朝的“勿吉”，汉代的“挹娄”，先秦的“肃慎”。

满族有自己的语言文字。满语属阿尔泰语系满-通古斯语族满语支。满文是16世纪末借用蒙古文字母创制的。清代以来，随着满、汉交往增多，满族普遍习用汉语、汉文。现在黑龙江省个别边远地区的少数老年人还会说满语。

满族信仰萨满教。

旗袍与木底鞋

在当今世界上，你不论走到哪里——在巴黎街头，在伦敦的超级市场，在纽约的服装模特橱窗，在悉尼的海滨——都可以看到穿着华丽的五颜六色旗袍的漂亮女郎。旗袍，这个昔日满族妇女服装已经代表着中国，代表着中国女性服装走向了世界。

旗袍这一独特的满族妇女服装与满族早期的渔猎生活有关。昔日满族妇女同男子一样骑马射猎。旗袍两边开叉正是为了上下马方便；窄小的袖口更有利于拉弓射箭；领口高而紧，跑马时可以防止灌风，又可以防止蚊虫等钻进脖子。旗袍的面料一般都用棉布，富裕人家也用缎子之类。一般在衣边上绣有彩条，在大襟上绣上花鸟等图案。满族新娘一般都喜欢在新婚之日穿上漂亮的大红旗袍。

满族女子服饰除了身着漂亮的旗袍外，上身还经常外罩一坎肩，脚上穿旗鞋，俗称“花盆底鞋”。这种鞋适合于满族女子“天足”的特点。走起路来稳重、端庄，富有节奏感。满族妇女喜穿这种高底木鞋，还有个传说：在满族早期部落时代，虎尔哈河上游有个阿克敦城，部落长叫多罗罕。他有一个格格（即女儿），叫多罗甘珠，长得像天上的仙女。在虎尔哈河对岸，有一个古顿城，头领叫哈斯古罕，为人奸诈、贪婪，依仗自己的势力横行霸道。他看中了多罗甘珠，并多次派人向部落长多罗罕提亲，但均遭拒绝。有一年秋天在虎尔哈河沿岸大小部落集会敬祭神树的日子里，哈斯古罕设计杀害了多罗罕，并假借为多罗罕送灵之机攻打阿克敦城。阿克敦城三面是 1 米深的池塘，一面是路，已被哈斯古罕封锁。时间一长，全城粮绝，并且闹起了瘟疫。一天，当多罗甘珠眼望茫茫的草甸子发愁时，无意中发现一群白鹤站在泥塘中长时

间不下沉而从中得到启示。她号召全城人学着白鹤的样子用树杈做起“鹤脚”，就这样，连夜走出泥塘，突然出现在哈斯古罕面前，用乱箭将其射死，其部下纷纷归顺。从此，虎尔哈河两岸联成了一个兄弟般的大部落，过着和平安定的生活。从此妇女们上山采蘑菇、采榛子，为了防备踩着毒蛇，都喜欢穿上这种木底鞋，而且越改越精致，世代流传。

马蹄袖与靰鞡

任何一个民族的服饰都与这个民族特定的社会生活有关。满族早期生活在白山黑水之间，以渔猎生活为主，其服装首先要求能防寒，同时又不妨碍渔猎。马蹄袖的设计正好适应这种需要。冬季狩猎拉弓射箭伸不出手，戴手套又不能过厚，为了防寒，他们就想出了在原袖口上再缝制一个可以卷上放下的活袖口，而且只缝一半在外侧挡手背。这种袖口大多用毛皮做成，既可抵御严寒，又不影响射猎。满族人一般称它为“箭袖”。后来，人们习以为常地在衣服上缝上一个箭袖，即使满族入关后，也没有改变这种习惯。昔日箭袖逐渐失去实际作用而变成了一种装饰。不仅如此，男子的长袍、马褂，甚至每人身后留条大辫子也与满族的渔猎生活有关。满族服装一个很重要的特点是袖口窄小，与中原宽衣大袖形成鲜明对照。衣服左衽，与汉族人服装也不同。长袍左右开叉也同样是为了骑马射箭的方便。满族男子发式，前半剃光，后半结辫，长期戴帽，与他们长年出没在丛林中捕杀野兽，采集山珍，防止树木刮头，方便出入林中有关。如果像中原汉族传统的长发挽髻，恐怕就很难出入丛林。

满族人在冬天一般脚穿“靰鞡”。这种鞋用牛皮做成，防寒防潮，里面再絮上“靰鞡草”，格外暖和。这种鞋一直为东北各民族

人民所喜爱，直到今日这种鞋在东北农村仍然可以见到。

萨其马·火锅·满汉全席

“萨其马”是满语，指的是一种地道的满族糕点。它是将油炸过的短面条用糖等粘到一起，然后切成方块，吃起来香甜可口。

在饮食方面比较有代表性的还有满族火锅。满族人家一般都有一个用于吃火锅的套桌，桌子中间有一个活动圆板，用火锅时将圆板拿下，火锅放于桌子中空处，锅底下放上火盆。桌边摆满各种兽肉及飞龙等禽肉以及酸菜、粉条之类。众人盘膝围桌而坐，每个人面前放一个小碟，内装清酱、大蒜等调味品。满族人一般称此为吃“什锦火锅”。这种吃法是与满族早期的渔猎生活有联系的。满族人有时打猎要到很远的地方，吃住只能在野外。他们往往在丛林中燃起篝火，上面放上吊锅或用石头支起锅来，地上放着的各种各样打来的飞禽走兽自然成了锅中之物。众人围坐锅旁，不断加火加肉，一方面可以御寒，一方面可以饱餐。久而久之，人们习惯于这种吃法，即使不是在野外狩猎，也照样在家里这样吃，于是野餐变成了家宴。

更能代表满族“食文化”的莫过于驰名中外的“满汉全席”了。这种宫廷佳宴最集中地代表了整个满族烹饪技术。满汉全席形成于清代中叶，是满汉文化交流的产物，而满族菜肴在全席中占有特殊的地位。像全席中的野鸡片汤、蒸鹿尾、蒸驼峰、燎毛猪羊肉、烧乳猪、烧小猪、野参七星肘子等名菜，不论在选料、作法，还是在吃法上都是地道的满族特色。全席中出现的山珍如猴头、熊掌、人参、鹿尾、飞龙、野鸡、蜂蜜等，大部分也是来自满族老家东北。

三面炕

如果你有幸到满族人家作客，给你留下深刻印象的恐怕莫过于西、南、北三面大炕了。满族人家西墙上放祖宗板，供奉祖先，所以西炕为上，一般不住人，客人来了随便坐西炕为满族人家所忌讳。南炕为大，一般供长辈人住。北炕为小，一般为晚辈人住。满族的炕很讲究，炕边镶以木制炕沿，炕沿下用大块木板雕成花纹图案，镶成炕围。炕上一般铺上苇席或炕毡。炕面下为多排烟道，三面炕烟道相通。一面生火，三面炕同时受热，尽管冬季户外冰天雪地，半年严寒，但屋内却始终是温暖如春。火炕多用土坯或砖头铺面，保温时间长，即使晚间睡觉没人加火也仍然很暖和。

火炕的发明对于满族来说是一场建筑和住房方面的革命。据史书记载，满族先人曾经是“夏则巢居，冬则穴处”。他们在北方严寒面前无能为力，只好深挖洞穴藏身，而且越深越好，地面上只留下一个个如坟头似的屋顶。天气转暖，地下潮湿闷热，为了防止野兽的袭击，他们又只好住在高处，筑巢为家。是火炕把他们从洞穴中解救出来，从而在地面上建起了一座座冬暖夏凉的房子。

满族房屋一般为三间，东面一间南面开门，为厨房，西边两间为住房。大多开南窗、西窗。窗一般为上下两扇，下扇不动，上扇可以向外开。窗上多用木条拼成各式漂亮的花格，窗外多糊以高丽纸，并将油掸洒纸上，防止雨雪淋湿。满族称烟囱为“呼兰”，一般立于房子的西侧，以砖和土坯砌成。更早的却是用整根圆木，中间掏空，里外抹泥做成。这一点与满族生活在大森林里，到处可见树木有关。满族房前一般都有一仓房，满族人称其为

“哈什”，用于装粮食。为了防止野兽、牲畜偷吃粮食，仓房一般都离地面近一人高，这可能是由满族先人“巢居”方式演变而来。满族房屋四周大都有院墙，院墙朝南正中都设有院门，院门后设影壁一座，影壁后立祭天索罗杆一根。

如今在满族聚居的地方，很难找到过去那种典型的房屋格局了。三面炕的布局在有些地方也进行了改造，往往是南北大炕保留，西炕拆除，取而代之的是电视柜、大衣柜、大沙发等现代家具。

新娘走红毡

满族青年的婚姻过去一般都循“父母之命，媒妁之言”的旧习。如男女双方一方有意，就求媒人从中过话；双方有意，就由媒人带着男方双亲去女方认门，俗称相门户。如女方同意，男方就须赠以簪铒等物做为定礼，俗称放定。然后男女双方父母商量聘礼，择吉日送到女家。不久，男方选定结婚日期，并通知女方，俗称问娶。

娶亲的头一天，男方便组织起一个庞大的迎亲队伍，一般是打旗的、打锣的和吹鼓手在前，伴郎和新郎在后。新郎左右肩披红，胸前戴一大红花。接着是架红毡等帮忙的人，后面是新娘用的花轿，花轿后面是迎亲的马车。这支队伍在午夜过后，黎明之前正值残星点点、晨曦未明之时出发。此时，女方家里更是彻夜不眠，灯火通明，等待着迎亲的队伍。待迎亲队伍来到栅栏门外，众人纷纷下马，侍立两旁。媒人带着新郎来见岳父、岳母，行过礼后，岳父家招待迎新人和新郎。这时，娘家人往车上装陪嫁物，多数是箱柜，里面装娘家送给姑娘的衣物等。天未亮，新娘就身着大红旗袍，梳大卷头，戴耳环，蒙红盖头，脚穿花盆底鞋，由

新娘的哥哥抱上花轿。新娘上轿后，迎亲队伍在前，由娘家组成的送亲队伍在后，浩浩荡荡向婆家走去。

当娶亲队伍抵达婆家时，顿时爆竹声声，鼓乐齐鸣。新郎先向花轿虚射三箭，然后新娘由伴娘搀扶，从轿中出来。这时，地上早已铺好了红毡，不让新娘的脚沾地面。新娘迈着轻盈的步伐，缓缓向前走，铺红毡的要前后奔跑将红毡不断地往前倒，直到新娘走到天地桌前为止。待新郎新娘拜完天地后，将新娘搀入洞房。在洞房门口放一马鞍，让新娘跨过。然后上炕坐帐一日，俗称坐福。晚上新房中地上放一张桌子，新郎新娘手挽手，绕桌三圈后对饮。这时外屋数人唱喜歌，俗称“拉空齐”，表示对新郎新娘的祝福和期望。如今满族娶亲的仪式已大大的从简了。

死人走窗户

满族一般实行土葬。人死后，将尸体放在西间的板子上，头朝西，脚向东。从屋内往外抬时，不能从门出，必须走窗户。因为民间有这样的说法，门是活人走的，不能让死人走。其实，这是一种古老的灵魂观念在葬俗上的反映。原始人类认为“万物有灵”,“人死后灵魂不死”。本民族成员的鬼魂既是祈求保佑的对象，同时又是惧怕的对象。他们祈求先人的魂灵保佑本民族、氏族的兴旺，又怕触犯了神灵给本民族、氏族带来灾难。因此，许多民族最早都采取了火葬的方法，用以迷惑死者，使其迷失回家之路。满族人让死者走窗户，也是这种原始观念的反映。

满族的人死后用的棺材与汉族用的截然不同。汉族的棺材上盖是平顶的，而满族的棺材上盖却是起脊的，尤如盖房子有脊一样。这一点也许与棺材是死人之所，理应跟活人所住房子一样构造有关。

人死后在院内挂红幡是满族丧俗的一大特点。红幡一般是由红布做成，整幅布分为四条，如人手状，上下用黑布装饰，悬于门前高杆之上。待悬挂数日后，吉日出殡时，亲戚、朋友、邻居等众人一轰而上，你争我夺，将幡抢碎，每人抢得一块红布拿去给小孩做兜肚之类的小用品，以求“去邪”，让孩子平安长大。

满族还有人死后将其所用衣物尽焚之俗。这种习俗大约是昔日满族先人火葬习俗的残余。历史上女真人曾实行过火葬。人死后，将尸体与死者生前所乘鞍马、衣物一起焚烧。然后再将祭祀饮食之物尽焚之，亦称作“烧饭”。清初，这种习俗还很盛，王公贵族丧礼所烧用物及祭品更是靡费。而一般平民后来多以烧死人枕头代之。这种人死焚枕头的习俗至今在东北民间仍有遗存。

穆昆达

“穆昆达”，意为“族长”，是满族早期氏族部落时期的产物。满族早期的社会组织是以血缘为基础的氏族组织，以同祖同宗视为一家，每个大家族中都有一个威信很高的族长。这个族长既不由官方任命，也不是世袭，而是由族人推举的。穆昆达在家族中有至高无上的权力，可以裁决族中一切事务。在祭祀时由他带领全族人一起进行，甚至在婚丧嫁娶等方面也必须得到他的允许。

穆昆达管理族中事务的主要手段是依照族规和家规进行。这些族规和家规对氏族和家庭来说，具有法律效用。满族人家一般都有所谓“家法”，族中人若有不敬不孝、偷窃、奸淫等行为就要受到家法惩处。轻者打板子，重者族长有权处其“死刑”，往往是在祖坟旁杖死或勒死。所以，族中人如果做错了事，穆昆达一说“拿家法来”，当事人就会被吓得不知所措。

在昔日的满族生活中，家法不仅一般老百姓家有，王公大臣

家有，就是宗室皇家也有。

随着时代的变迁，满族家族中的穆昆达已经消失了。但在偏僻的山村，人们仍然习惯于由本宗族中德高望重的人主持宗族祭祀和修续家谱。

木兰围场

“木兰”一词为满语，原指“哨鹿围”，后词义扩大泛指围场。昔日满族八旗驻地一般都有自己的围场，大大小小，星罗棋布。至今黑龙江省境内仍有木兰县，河北承德地区仍有围场县，都是昔日满族围场的遗地。

满族早期的狩猎，一般都依所属氏族或屯落进行，规模较小。往往是10人为一“牛录”，并设一人为头领，称为“牛录额真(箭主)”。这一生产组织后来逐渐演变成军事组织。到了努尔哈赤时期，将300人编为一牛录，设一牛录额真；将5个牛录组成一个“甲喇”，设一“甲喇额真（队主)”；5个甲喇组成一个“固山”，设一“固山额真（旗主)”。并设黄、白、蓝、红四旗，后增设镶黄、镶白、镶蓝、镶红四旗，这样就形成了八旗制。

出猎打围，一般都按旗分排开，不论平地山地，圈占一处，称作围场。然后分成两边由远而近，逐渐推进，一般称为合围，将野兽围在一处，最后杀死。这种打围的场面十分壮观，成百人甚至上万人将方圆几里或十几里地围住，天上猎鹰群飞，地上猎犬吠叫，四处八旗飘扬，山谷人声鼎沸，在广袤的山野上绘制了一幅热闹的围猎图。

围猎除带上猎犬外，海东青是他们的重要助手。这种产于东北、被称作“鹰中第一等”的飞禽，是从女真时期开始向皇室进贡的。它一天可以飞出1000多公里，能捕捉天鹅，甚至能捕捉到

鹿。满族民间有关于海东青帮助女真人击败大辽兵的传说。有的氏族还有祭祀“鹰神”的习俗。可见，海东青在满族渔猎生活中的地位。

养活孩子吊起来

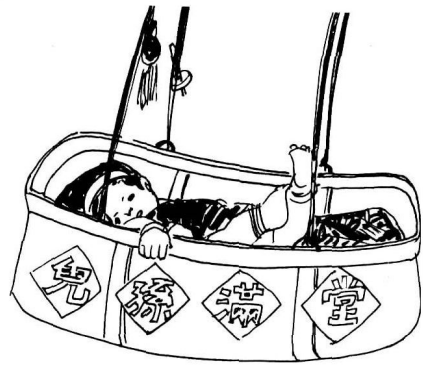
过去，人们常说，“关东城三大怪：窗户纸糊在外，姑娘叼个大烟袋，养活孩子吊起来”。但却很少有人知道这种习俗来自生活在白山黑水间的满族。

满族人家的窗户很有特点，一般为上下对开的两扇，而且都是从外向内关闭，主要是怕夜晚虎、狼等动物撞开进屋。这种形式的窗户在今天的沈阳故宫、北京故宫以及东北民间仍然可以见到。早年满族人家的窗户上还不曾有玻璃。为了防寒，冬季往往在窗户外边糊上高丽纸，待干后涂上油。这样既增加了透明度又可以防止雨雪。逢年过节，满族的姑娘、媳妇们还用彩纸剪成各种人物形象、花鸟鱼虫的窗花贴在窗户上，以此增加节日的气氛。

东北盛产黄烟，并有“关东烟”的美名。满族人吸烟的历史很悠久，并且不分男女皆有此好。过去，满族人吸烟每人必备烟袋一杆，火镰一套，烟荷包一个。烟袋分为烟袋嘴、烟袋杆、烟袋锅三部分。烟袋嘴一般为玉的，形状大小不一，中间有小吸孔。烟袋嘴的好坏足以证明主人的贫富。烟袋杆一般用木或竹制成。烟袋锅一般都用铜铸成，上有一弯头与烟袋杆相接。整个烟袋的长短不一，短者近尺，长者一米开外。老人的烟袋一般较长，除了用来抽烟之外，有时也当作“武器”用以教训儿孙或儿媳妇。火镰是没有火柴时的点火用具。它的形状像镰刀，用钢制成，用它打在火石上，发出火星，点着火绒，然后用火绒点烟。烟荷包是装烟用的。满族的荷包很讲究，做工细致，描梅刺凤，对于年轻

人来讲它还是传情的信物。随着时间的流逝，今天我们在满族聚居的地方已经见不到“姑娘叼个大烟袋”的情景了。昔日的烟袋已经被卷烟和香烟所代替。

满族早期是一个以渔猎为主的民族。在一个家庭中往往男女同样骑马狩猎，婴幼儿便成了他们的累赘。于是，在父母出去打猎时，往往把孩子放进一个用桦树皮做成的悠车中，用绳子拴在两边的树上，犹如一只小船在空中摇荡。悠车一方面可以解放母亲的双手，另一方面在父母外出时可以防止野兽对孩子的袭击。如今在东北的一些地方仍然可以见到这种习俗，所不同的是现在悠车多用木材做成，并且在悠车旁边还写上“儿孙满堂”、“福禄双全”等吉言和一些绘制的小花卉图案。在孩子睡觉时，满族妇女常常是边悠边唱，一直唱到孩子熟睡为止，从而形成了独特的满族摇篮曲。迄今为止，许多满族老人仍然可以用满语哼唱。比如，至今流传在黑龙江省宁安县一带的一首《悠摇车》中唱道：



悠悠扎，巴卜扎，
狼来啦，虎来啦。
悠悠扎，巴卜扎，
玛虎跳过墙来啦。
小阿哥，悠悠扎，
你爹出兵发马啦。
大花翎扎，亮红顶扎，

挣下的功劳是你爷俩的。

西墙上的祖宗板

满族的祖宗板安放在西墙上。它是一块约60厘米宽，50厘米长的木板，上面放有祖宗匣子、妈妈口袋、神刀和箭以及捻香碗、蜡台等。祖宗匣子里面装有祖宗神像、谱书、谱单以及排辈用的字单等。满族人家每个“哈拉”（姓氏）都有家谱或谱书，上面详细记载了本哈拉的祖先和来源，并有详尽的从祖先开始直到近支十辈或几十辈的家庭成员谱单。满族谱书和谱单一般都用满文撰写，只是到了近代才逐渐翻译、转抄成汉文，但许多家庭仍然保留着满文原谱。我们今天在满族聚居的地方仍然可以见到许多完整无缺的家谱。这些谱书和家谱对于我们研究满族历史、语言、文字、宗教信仰、风俗习惯等都具有重要的价值。

满族每年祭祖很隆重。祭祀前十几天开始酿米酒，磨面做糕，准备猪羊。祭祀当天，家中长者净手更衣，恭敬地将祖宗匣从祖宗板上接到西炕，打开后将祖像挂于西墙之上，前面放置桌子，供上黄米饽饽等供品，将鞑子香捻成一字形放入捻香碗中点燃。这时，全家按辈分面向祖宗每人叩三个响头，然后分别到南北炕或外屋坐好，萨满开始跳神，只见他手持神鼓，腰扎腰铃，在旁边数面大台鼓的配合下，边敲边跳，随着身子的摆动，腰铃哗哗作响。同时，萨满口诵满语祭词，乞求祖先保佑阖家无灾无难，美满幸福。

萨满跳神祭祖今天在满族地区已经基本上见不到了，但祖宗板和祭祖活动在一些地区仍然可以见到，特别是每年的节假日，祭祀活动更为活跃。人们往往把今天的祭祖活动看作是对先辈们的敬仰和怀念，而与宗教没有关系。

柳枝与佛托妈妈

满族有祭祀“佛托妈妈”之俗，视她为保佑子孙繁衍、人丁兴旺之神。满族人家祖宗板上一般都留有其神位或偶像，“背灯祭”也是专门为其举行的祭祀活动。

“佛托”为满语，意为“柳枝”，“妈妈”在满语中意为“祖母”，这里作“神”或“娘娘”解。因此，“佛托妈妈”实为“柳枝神”或“柳枝娘娘”。满族人因“柳”耐寒冷、耐干旱而对它怀有特殊的感情，柳树旺盛的生命力使他们自然而然地与自身的子孙繁衍联系在一起，企盼自己的民族具有柳树般旺盛的生命力，生生不息，代代相传。

满族人每逢清明墓祭时，有在坟头插柳枝的习俗。一般作法是，在苞米棒上贴五色纸条，下边用柳条之类插入，然后插在坟头上。在死人坟上插柳枝，一方面可以表示亡者有后，另一方面也可以告慰亡灵。

父子不同席

满族自古以来就有“祭祖敬老”风气。入关后，又受汉族封建伦理观念的影响，从而形成了满族重礼习俗。这种重礼习俗主要表现在对长辈的尊敬上。昔日，满族的小辈对长辈要三天一小礼，给长辈请安；五天一大礼，见长辈得“打千”。青年人平日在路上遇到长辈，无论认识与否必须给对方让路；如果骑在马上，必须下马，毕恭毕敬站立路边，待老人过去后，方可上马再行。否则，会被别人认为不懂礼、少家教。即使一个人长年征战在外，做了将军、高官，衣锦还乡也要在乡亲们面前恭恭敬敬。他必须在

村口下马，步行走进屯子里，见到人必须打招呼，见到长辈必须“打千”请安。

小辈在长辈面前除了说话、办事要小心谨慎外，还有许多讲究。其中一个重要方面是“父子不同席”，即父与子不能在一张饭桌上就餐。如果家里来了客人，长辈的客人由长辈出面作陪，小辈的客人由小辈出面作陪。有时，小辈的朋友出于礼貌谦让长辈，长辈也会说，“你们小哥儿们吃吧，我还有事”，婉言谢绝。满族人的这个规矩，常常给办喜事的人家带来麻烦。安排宴席时，必须严格按照辈份。如果把叔叔辈安排与侄子辈一桌，叔叔辈的就会拍案而起，扬长而去，给喜事带来不快。

象征八旗的八角鼓

八角鼓是满族的打击乐器，是满族曲艺八角鼓、岔曲及牌子曲的重要伴奏乐器。它最初在清代乾隆年间八旗军队中流行，以后才传到民间。清末以来，在北京、沈阳等地很流行。八角鼓的鼓身为八角形，框用木制，宽度约 17 厘米，单面蒙上蟒皮，周围嵌上响铃，并装饰有一长丝穗。这种乐器在演奏时可以用手指击鼓面发出声音，也可以摇震鼓身或用手指搓鼓面发出铃声。在演唱时，演员手中的八角鼓，既是道具又起指挥作用。

传说，八角鼓以八旗得名。鼓身的 8 个角象征着满族八旗，又表示吉祥如意。7 个边开 7 个梅花孔，每孔穿 3 个小钹，共 21 个，下面拴一个长流穗，是代表 21 个旗佐和一面罕纛旗。可见，这种乐器的产生是与八旗生活有关的。

“八角鼓”又是满族的一种民间说唱形式，因用八角鼓伴奏而得名，曾广泛流行于北京、东北及内蒙古等地。它原是满族人民在狩猎时的民歌。围猎之暇，以此自歌自娱，后在清代八旗军队

中流传，发展成为一种曲艺形式。八角鼓曾在乾隆年间盛行一时，以后逐渐衰落并有所演变。到了嘉庆年间专业艺人几乎没有了，仅由八旗子弟作非职业性演出。

八角鼓是由多种曲牌组成，常用的有“太平年”、“罗江怨”、“金钱莲花落”等，唱词多以七言为主。从清代流传至今的八角鼓段子很多，曲目多以传统故事和民间故事为主。演唱时主唱人手持八角鼓，另有三弦伴奏。近年来，内蒙古呼和浩特市新城区的满族，对传统的八角鼓进行了挖掘整理，并以八角鼓段子为基础，创作出《对菱花》等满族戏。

赛威呼

“赛威呼”是满族的传统体育项目之一。“威呼”是满语“小船”之意。这种船是满族早期渔猎生活的产物，一般是由一根大的圆木凿制而成，亦称为“独木船”。它的特点是平舷、圆底、锐唇、修尾，长在五六米左右，大者可容纳五六人，小者可容纳一二人。满族人成年累月就驾驶着这种小船在江河湖海中与风浪进行搏斗，世世代代用此船打渔、采珍珠来维持生活。早年满族有农历七月十五在河边放灯的习俗，同时也在这一天举行赛威呼的比赛。这一天各式各样的灯五颜六色十分漂亮，河中划船健儿你追我赶，岸上岸下一片欢腾，热闹异常。

满族人对这种竞赛项目十分感兴趣，但由于东北冬季漫长，江河封冻期长，加上水面较小，远远满足不了这种要求。因此，赛威呼的项目就逐渐移到陆地上举行。比赛时，每个队四五名运动员排成一列纵队，队员手中共持两根竹竿放在身体两侧。每队的排头站在起跑线上，发令后，各队以纵队形沿着自己的跑道跑到终点。比赛的距离根据不同的年龄组，分设 60 米、80 米、100 米

项目。这种体育项目要求几名运动员步调一致，用力均匀，互相协调。在陆地上比赛划船的项目，其难度不亚于在水中划行，同时也更增加了比赛情趣。

近几年，随着满族文化遗产的不断挖掘、整理，北京、河北、辽宁、黑龙江等省市对这一传统民族体育项目进行了认真的整理、加工，并且在原有的基础上制定了一些比赛规则，使它更加严谨、更加规范。目前，一些省市已经把它列为民族运动会的竞赛项目，同时，在一些中小学当中进行普及，受到了欢迎。

珍珠球

珍珠球俗称采珍珠，是满族的传统体育项目之一，源于满族的采珍珠的水上劳动。昔日，生活在白山黑水之间的满族人民世代有在水下采集珍珠的习俗，他们的足迹遍及东北的黑龙江、松花江、牡丹江、嫩江等流域。在劳动中，他们把从水下采集来的蛤蚌投放到独木舟上的筐篓里。久而久之，这种劳动动作逐步发展成体育活动。满族人用“绣球”象征珍珠，竞相往网中投掷，同时又有一二人每人手拿两片大蛤蚌壳，用以阻止珍珠进网，不让采走珍珠。于是，一种与生产劳动紧密相连的，有攻有守的，以跑、跳、传、投为主的满族体育项目便问世了。

目前珍珠球运动项目的挖掘整理工作已经取得了可喜的进展，并且已经初步制定了一套完整的竞赛规则。这项运动一般是在长 28 米、宽 15 米的长方形场地上进行的。场地用三条线（限制线、封锁线、得分线）划分成四个区（水区、限制区、封锁区和得分区）。每场比赛由两个队参加，每队出场 6 人，在水区内双方 6 名队员可向任何方向传、接、投、拍、滚球，力争将球投进本队得分区持网队员的抄网内，并阻止对方获得珍珠球和得分。封

锁区双方 4 名队员，各手持两个象征蛤蚌的球拍，在封锁区内阻挡对方投向抄网的球。得分区双方 2 名队员手持抄网各一个，在得分区内网住本方或对方投来的球。在规定时间内，得分多的队为胜方。

珍珠球，有点像篮球和手球，但由于得分区的抄网不固定，所以比篮球和手球更加激烈。它不仅要求场上队员不停地跑、跳、投，还要注意与水区、得分区同伴配合默契。珍珠球这一运动项目大约产生于 1616 年后金时期。入关后，分别传到了北京、天津、河北、内蒙古等地。

●侗　族

侗族人口为2,514,011人(1990年统计)，主要分布于贵州省的黎平、从江、榕江、天柱、锦屏、三穗、镇远、剑河、玉屏等县和湖南省的新晃、靖州、通道等县，以及广西壮族自治区的三江、龙胜、融水等县。

侗族自称为“甘”，隋唐文献中多称“峒人”、“侗僚”、“侗苗”。解放后，统称为侗族。

侗族有自己的语言，侗语属汉藏语系壮侗语族侗水语支，分南、北两大方言；过去无文字，一直使用汉文。1958年，创制了拉丁字母拼音文字方案。

侗族信仰多神，崇拜自然物。

侗家服饰

侗乡各地服饰虽有差异，但都能鲜明地表现出侗族人民的民族特色。侗族的服饰，一般喜用黑、青（蓝）、深紫、白四种颜色。黑青色多用于春、秋、冬三季，白色多用于夏季，紫色多用于节日。男子多穿对襟短衣，有的喜欢右衽，无领、无扣，下身分着裙和穿裤两种，习惯束腰带，包头帕。妇女的裙子，不分季节，多用黑色，非常讲究色彩搭配，以黑色为主，另用其他色彩相配，使整个色调明快而恬静，主次分明。以洛香侗族妇女的春节服装为例，上身穿青色的无领上衣，下围黑色裙，内衬镶花边衣裙，腰前扎一幅天蓝色围兜，身后垂黑白色飘带，配以红艳艳的丝带，红色丝带在黑白色飘带间显得非常突出。

挑花刺绣是侗族世代传习的手工技艺，姑娘们一般在七八岁时就开始学习挑花、刺绣，到成年时已具有熟练技巧，达到不用起样就可以随意构图、随手挑出的水平。其图案纹样主要取材于自然界的花卉形状，一般如梅花、桃花、八角花、野菊花、卐字花等，也有一些几何形图案。这种挑花多以白色或黑色布为底，用彩色丝线，构图严整、对称，色调鲜艳，富有生活气息。刺绣多见于被面、鞋面、小孩背兜、鸡毛裙、胸巾角等。其图案纹样，亦多取材于自然景物，如花、鸟、鱼、虫之类。

侗锦也极负盛名，清代《黔记》、《黎平府志》都有记载，称为棉锦。棉锦以白纱为经，蓝纱为纬，配以各色彩线，编织而成。更有织以花木禽兽的，栩栩如生。

饶有情趣的是，挑花、刺绣和侗锦、侗布、花带等，都常是侗族姑娘用以表达爱情的信物。在民间的“订亲”习俗中，姑娘们赠送此类信物是主要内容。既表示真心诚意，又表现心灵手巧。

侗寨鼓楼

“燕子飞得高，鼓楼顶上乐逍遥”。侗寨中最引人注目的要算是鼓楼了。鼓楼以它独特的结构和高耸的形体成为侗族村寨的标记。

明万历年间绥宁县官府的《赏民册示》所记“村团或百余家，或七八十家，三五十家，竖一高楼，上立一鼓，有事击鼓为号”，这里所指的高楼就是侗族鼓楼。鼓楼建立在寨子中心或寨门附近。一般是一姓一座。有的村寨有几个族姓，就有几座鼓楼。鼓楼是侗族群众集会议事的中心场所。从前，鼓楼的上层悬有一个长形大牛皮鼓。鼓用大树干挖空，两头蒙以生牛皮制成。每遇寨内发生关系全寨的事件需要聚众商议时，由看守鼓楼的“传事”击鼓，全寨父老闻声而至，由寨老主持议事。凡议定乡规民约、处理民事纠纷均在鼓楼进行。鼓楼也是休息娱乐的公共场所。一天劳动之余，夜幕来临，大家便来到鼓楼休息聊天。人们围着火塘，谈生活，唱古歌，弹琵琶，讲故事。特别是逢年过节或外寨的人来访时，都聚集在鼓楼或鼓楼前的石板坪上，唱大歌，吹芦笙，踩歌堂，热闹非凡。

鼓楼是一种纯木结构建筑，全用卯榫嵌合，不作钉铆，坚固经久，不少鼓楼历经数百年的风雨侵蚀，仍十分完好。如被列为湖南省重点文物保护单位的通道最大的鼓楼——马田鼓楼，建于清顺治年间，距今已有300多年历史。鼓楼形似宝塔又如楼阁。底部一般为四方形，上面为多层重檐，少则三五层，多则十几层。如原贵州从江高增鼓楼高达17层，惜1954年毁于火灾，重修的才13层。现今侗族最高的鼓楼为比江高千鼓楼，有15层，高20多米。每层飞檐翘角，或彩绘，或刻花，纹样有龙、凤、狮、鹿、鱼、

鸟、花草等象征吉祥和幸福的图案。鼓楼顶部多为角伞形，置葫芦宝顶。有的在顶上立数米高的铁杆，有的在尖顶上装着能迎风鸣叫的铜质飞鸟。整个造型古朴精美，典雅端庄，巍峨雄伟，使侗乡风光更加迷人。

鼓楼与侗家生活密切相关，是每个侗寨的政治文化中心，近年来被看成是侗族文化的象征。

风雨桥

侗乡溪流上建有各种各样的桥梁，其中木质结构的风雨桥为侗族桥梁建筑之冠。风雨桥因桥面上建有长廊式的桥屋可蔽风雨而得名。又因其宏伟美观，也称花桥。风雨桥多建在村寨附近的通衢溪河上，一般为杉木组合托架简梁式木桥，桥台上建长廊，桥墩上建亭阁。它以独特的艺术结构和高度的建筑技巧而负盛名。

著名的风雨桥有贵州省黎平县的地坪桥，湖南省通道侗族自治县的坪坦迴龙桥等，均是风雨桥中的杰作。广西壮族自治区三江侗族自治县可谓集风雨桥之大成，号称我国古代四座名桥之一的程阳桥就坐落在该县林溪河上。这座桥五墩四孔，每墩上都筑有桥亭，以长廊连贯，中间的桥亭为五层六角形，两侧为五层四角形，两端为五层殿形楼亭，如彩龙飞降，雄踞寨旁，极为壮观。

该县还有一座在建筑史上更有价值的琶团桥。它的建筑年代早于程阳桥，在功能处理上有独特之处。桥面分人行道和畜行道高低两层，东岸依山势地形有两个出入口，人畜分道，集亭、廊、阁、栏于一处，有休息、乘凉、谈心、眺望等立体功能，堪称是一举数得的建筑构造范例，被誉为“古今中外，独一无二”。

侗家生活在山区，修桥铺路和每个人的生活息息相关，热心公益的侗族人民都乐意为此出力，几乎所有风雨桥都是群众集资

修建的。筹建时，由当地有名望的父老出面募捐，群众有钱出钱，有木出木，有力出力。桥成勒石镌名，以昭后世。落成之日，要举行隆重的踩桥仪式，周围数十公里路的村寨都来祝贺。祝贺的队伍抬着猪肉、腌鱼、糯米、酒，有的还带着芦笙队、歌班、戏班，放着鞭炮从四面八方汇集到新桥附近的空旷场地上。崭新的桥身上挂满妇女们送的布匹，迎风飘扬。本寨的群众家家出动，忙着蒸糯饭、煮猪肉，招待客人。踩桥开始，鞭炮齐鸣，笙声震天，一般由有威望的老人为前导，也有由附近村寨的各族代表带领，从靠村寨的一端走过那端，人们随着走过桥去。踩桥仪式结束，文艺活动开始，上百架芦笙在吹奏，几十对青年在踩歌堂……到处是欢声笑语。

侗族婚俗

侗族婚姻一般需要通过“行歌坐月”、“玩山对歌”等自由恋爱方式。但订亲时，必须取得双方父母的同意，然后才能选择吉日成亲。

侗族婚俗，一般都需要通过如下程序。

说合：侗族男女青年虽然可以自由恋爱，但“媒妁之言”束缚极大。所谓“说合”，就是要由亲朋辗转介绍，再选择父母双全的族人向女方登门求婚说合。还要看“年庚八字”，如果“命中相克”，则难配良缘。随着社会的进步，说合的旧习也不断变化。

订婚：一般通过聚会唱歌的社交活动相互认识，增进了解。双方在情投意合的基础上，互赠“把凭”即信物后，男女青年始向双方父母言明或请熟人说亲，只要双方父母认可，就算是订婚了。男方家长送去一两公斤片糖，让女方“打油茶”请客（意为此门亲事是甜蜜的），同时带上两三公斤肉和糯米酒，让女方款待房族

（意为此门亲事又是心喜的）；也有送腌鱼、腌鸭、腌肉和糯米等表示认亲。女方回赠自种棉花、自纺纱线、自织侗布或自染的侗布匹，做为回礼（意为女方勤劳手巧）。此外，尚有以糯米粑粑等款待男方亲友的。这时，就算是两家和社会都认可订亲了。此后，无论男女双方到任何地方去“行歌坐月”或“玩山对歌”，都被人们认为是“别人的媳妇”或“别人的丈夫”了。

迎娶：侗族结婚多在腊月或春节期间进行。每至结亲，多由男方选一老妇带几位姑娘和儿童前往女家迎接，女家送亲者多属同宗姑娘或老人，陪同新娘一起步行至夫家。有的地方接新娘在夜间进行，先将新娘接到新郎寨附近的亲友家“歇脚”，待黎明将至，再到新郎家。新娘进屋即鸣鞭炮，此时，寨人知晓：“黎明将至炮声响，良辰谁家迎新娘”。

闹新娘：新婚之日，凡寨里寨外的人，不管是与新郎新娘家认识与否，都可在晚间结伴到新郎家去喝新娘煮的油茶，这叫“新娘油茶”，并可以随便看新娘和评品新娘打油茶的手艺等等。青年男女在此期间，成群结队地在夜间去吃“新娘油茶”。在新婚的头几天夜里，新娘与随去的同伴三至四人每晚都要为青年们做“新娘油茶”。人们围着火塘一边看新娘打油茶，一边有说有笑，歌来歌往，欢乐非常。有的侗寨，正当人们围坐火塘边吃油茶的时候，会突然闯进来一群小伙子。他们有的画着花脸，佯装赤贫，并提着烂桶、烂箩；有的穿着老妇衣裳，围在新娘身旁，边嬉边向新娘恭贺，而新娘则向他们敬油茶，递香烟，惹得一屋的人同新娘以及伴娘捧腹大笑。这时，主人家即给小伙子们送酒肉和糯米饭。每人手上都有东西带回去，滑稽闹剧方告结束。

送新娘

送新娘是侗族婚姻的重要礼俗之一。

送新娘的队伍由男方的男女青年组成，他们穿着艳丽服装送新娘回家。小伙子们吹着芦笙走在前面，接着是新娘和陪伴的姑娘，最后面是抬红猪、挑年糕、挑腌草鱼和酒的人。他们一路走，一路放鞭炮，同时把糖果、油果、香烟等撒向观看送新娘队伍的男女老少。新郎家送给新娘家的礼物，是给新娘家为房族亲友办酒席用的，叫做“回门酒”。回门酒的宴席高潮是唱酒歌和新娘为送来礼物的人们——送新娘队伍敬酒致谢。新娘要将自织自染的漂亮侗布送给送亲的人，以显示自己的勤劳和精巧手艺。吃回门酒以后，新娘还要至新郎家“转脚”一两夜，再回娘家居住。其间，待农忙或逢年过节及有重要事情时，男方另派人去迎接新娘至家，夫妇方能同居生活数日。如此一往一来数年，直到怀孕，新娘才长住夫家。侗族民间有“三年上，五年下”之说，意思是：嫁走的姑娘要住在娘家，“少则三年，多则五年”，即所谓“不落夫家”。现在“不落夫家”的习俗已有很大的变化。

努宁美

“努宁美”是侗语，就是看新姑娘的意思，是侗家最盛行的一种风俗。侗家姑娘每逢到同伴出嫁到的男方寨子去走亲，或同伴生了小孩办喜酒，或“月也”（集体做芦笙客），或去别的寨子过节等等，都会引起人们的极大关注。特别是年轻的小伙子们，每到此时都要结伴去“努宁美”，也就是说，准备去会会新姑娘们。

新姑娘们来这个寨希望探听小伙子们有否选择终身伴侣的意

向，但她们又总是喜欢装作若无其事的样子，故意说走累了，或者说明日要下地干活，需早休息，便提灯睡觉去了。可是来“努宁美”的小伙子们，便隔窗以歌挑逗。于是姑娘们也趁机跟他们周旋，彼此歌来歌往，试探对方的聪慧。这种隔窗舌战，若是男方输了，只好请人帮助，或由别的男青年来接替；要是女方输了，就得陪伴小伙子们“行歌坐月”。如果不分胜负，就通宵达旦，或者第二夜、第三夜继续进行，人声不息，歌声不断。有一首“努宁美”歌是这样开头唱的：

男：今朝你们来了没见影，
　　隔窗说话也难辨真颜；
　　鲜花开在河对岸，
　　眼看心焦也枉然。

女：河岸的榕树早有鸟栖，
　　刻花的竹笼已住画眉；
　　这寨的单身都已成双对，
　　行歌坐月实恐惹是非……

行歌坐月

行歌坐月是侗族男女青年的一种社交活动。侗族青年在一起唱歌、谈情说爱的机会和方式是很多的。每逢节日或农闲季节便相邀唱歌游玩。在侗族北部地区，这种活动一般是白天在山坡上对唱情歌，寻找对象。在侗族南部地区，除了节日喜庆之外，青年男女相邀唱歌游玩，一般都在夜晚。男青年三五成群，一面唱歌、一面弹牛腿琴串巷走寨或到姑娘家去；姑娘们则多相聚在鼓楼等公共场合等候，即所谓“行歌坐月”。它是播种爱情的一种形式。如情歌中所唱：

男：拨响清脆的牛腿琴，
它是我心上的歌声；
好心的姑娘啊！
请你开门把我引进。
女：月儿进了云霄，
老人上楼已去睡觉；
啊！那走寨动听的琴弦，
把我的心弦缠绕……

玩山凉月

侗族北部地区男女青年唱歌谈情说爱的社交习俗——“玩山凉月”活动是白天在山上进行的，所以也称做“玩山”唱歌。在唱歌之前，一般先讲“开堂白话”。“白话”非常有趣，它接近口语，但节奏感强，高低起伏，抑扬顿挫，听起来倍感亲切，是一种音乐化了的口语。白话和歌曲有机地联系在一起，成为传达感情的一种特殊形式。例如剑河“玩山凉月”歌中的《借记歌》：

男：（白话）千里迢迢，百里遥遥；郎从郎乡，跋山涉水，过岭翻坡。一来探路，二来探姣，心想连妹；一无凭，二无证，才来邀妹，借木搭桥。

（唱）：画眉借山来歇凉，
小鱼借水来归塘；
哥不借妹钱和米，
借妹凭记连心肠。

女：（白话）青山渺渺，开石辟路；大海茫茫，造船整桨；哥你诚心，约妹借记；妹家穷无金没宝，妹借头发表心意，头发结缘架鹊桥。

（唱）：十五凉月好个天，

好个明月照天边；

大小凭记表心意，

哥莫冷心离花园。

通过“玩山凉月”，许多侗族青年男女建立感情得以喜结良缘。

侗家丧葬

侗族盛行土葬。老人去世，首先通知舅家和女婿，而后亲戚房族到场商议后事。老人“落气”之后，需带纸钱到河边去焚烧，称作“买水”。买水必须向顺流方向舀一瓢。侗人认为，买顺流水为的是亡人的灵魂会顺流而下到半边清和半边浊的河流那里去找老祖宗来源的地方；反之，亡灵就去不了。买水回家沐尸，为亡人更寿衣，男的须剃少许头发，女的则梳头髻，才上灵床，放在堂屋，脚向门外，头对正堂。死者手里还要抓糯饭和纸钱，口中含碎银，以便去阴府的途中吃用。丧葬期间死者家属和房族不能吃肉，而吃腌鱼。房族亲友一律披麻带孝，子女亲友皆向死者跪拜，日夜守灵，不时给死者焚香化纸、吹唢呐，通宵达旦。出殡时，有的地区有停丧待葬之俗，将棺木置于郊外墓地，架在木凳或木枕上面，待一定时候再葬。个别地区还有悬棺葬俗，现在这些丧葬风俗已有改变。

侗族人在日常生活中离不开歌，婚丧节日更是离不开歌。在丧葬之日，有唱哭歌之俗，其声调凄楚哀怨，体现了死别的悲伤。

如儿女哭爹娘：

晴天朗朗起乌云，

秋天骤起闷雷声；

死讯如闻天崩地裂，

千根倒刺戳痛我心。

众人以歌相劝：

莫要尽往一处想，

要把前后都望望；

过去的日子像筷子短，

往后的日子像竹竿长；

不看竹子看笋子，

不看禾草看禾秧。

放草标

草标，侗语称“多谷”，由于它用草类打结作标记，因此俗称草标。在侗族民间，草木、田地、土石和水池……都可以放草标，草标既说明主人的留言，也告诉请莫乱动。它是侗族民间以物代言的一种常见现象。一般用茅草、稻草打结成为疙瘩，有布纽扣式的，有田螺式的，有箭头式的，也有人头式等等，用以表达特定的内容。比如上山砍柴，一时来不及运走，就把已砍好的柴，堆放一处，只要打个草标在上面，旁人就不会去动。稻田放鱼，只要放一草标，旁人是不会进去捞的。菜园里，红薯地，如放有草标旁人就不会进去摘、挖；田里，地里，凡是种有作物，只要打上草标，旁人就不会放牧、放禽。围山打猎，为了不误伤人命，路口放有草标，旁人就不会闯入。山上清泉，如放有草标，表示人饮用，不要牵牛去喝，等等。青年男女在山上唱歌谈情为表示去向，放置草标，旁人不可乱捡，以免妨碍青年约会。草标尚有各种妙用，有其严格的保密性。它的标形，方位，由人们相互事先商定，仅仅在一定范围的人会意。

草标是无声的语言，为侗族古朴之俗，带有“结绳记事”的

痕迹。以草标作信号，方法虽简单但很实用，所以延续至今。

大雾梁歌会

湖南省通道侗族自治县县城的西南角上有座雄伟的山峰——大雾梁。每年立夏前18天，即大戊之日，湘黔桂三省（区）边境的侗、苗、瑶、壮、汉各族青年盛装打扮，云集山梁，举行大雾梁歌会（因是大戊之日上山梁，也有称其为“大戊梁”的）。与会者少则数千，多则上万。这个歌会的形成也与爱情悲剧相连。民间传说，通道五通地方有户肖姓富室，其女肖女与从贵州古州来她家当雇工的门龙相恋。肖女之父嫌贫爱富，不许他们结合，硬将肖女许配同村财主之子。这对真诚相爱的恋人便在立夏前18天的大戊日出奔逃婚。当门龙背着肖女涉渡五通河时，正值汛期，门龙失足跌倒，双双遇难。死后，化作两座互相紧靠的礁石，昂首屹立。从此，每年这天，人们便在门龙肖女经常约会的大雾梁上举行歌会，谈情说爱，以表达对不合理的封建婚姻制度的抗议，和对美好爱情的追求。

大　歌

大歌之“大”，有大型、古老之意。大歌都由“歌班”演出。传统的歌班是按房族为基本单位组成的。一个大房族可以单独组成歌班，彼此有血亲关系的房族可以组成多房族歌班。活动地点以鼓楼为中心。歌班成员一般是未婚青年，分成男班和女班。不同性别的班又按年龄划分为大、中、小三个班次。孩子们过了十岁就进入小班开始学歌；到十五六岁左右进入中班，除继续学歌外，还随着大班参加社会活动；十七八岁后就独立接待外寨来访

的歌班，并按习惯外出游访、赛歌、传歌、学歌。歌班中绝大部分主要成员结婚之后，歌班便自行解散，下一班又升了上来，一代一代往下传。歌班人数视房族青年人多寡而定，最少的有四人，多的可达二十余人。

大歌属多声复调音乐范畴，分高低声部合唱。合唱形式是领唱（独唱）与众唱相结合。因此，歌班中要选拔出唱高音（也称雄音）部的领唱歌手。高音从小开始培养，一般同时培养三人，但演唱时只用一人，其他成员唱低音（也称母音）。每个歌队都有老年的歌师来管理和教授。高音者亦起领队的作用，又称为“歌头”。

大歌的演唱场面比较隆重。当外寨的歌班来访时，本寨的歌班邀请他们进鼓楼对唱。男性歌班由女性歌班邀请接待，女性歌班由男性歌班邀请接待，同性歌班习惯上是不互相邀请的。大歌演唱在夜间进行。当夜幕来临时，双方歌班就进入鼓楼，对面排坐。高音坐在歌班的中间，男女老少在歌班的周围，鼓楼里挤得水泄不通。对唱开始了，先由主队唱迎客歌，客队回唱《赞鼓楼》。唱完这两首礼节性歌后，才进行正式的大歌对唱，一般由女方开头，男方回唱，通宵达旦，至第二天黎明方散。

大歌歌声优美，含蓄浑厚，引人入胜，深受听众喜爱。1986年9月，贵州侗歌合唱团参加巴黎秋季艺术节。她们演唱的鼓楼大歌使巴黎各界社会名流感到惊奇，称它为“第一流的艺术”，把侗族姑娘称为“东方艺术之星”。

侗　戏

侗戏是在汉族戏曲的启发下产生的。它的第一个剧目是移植汉族的戏曲，名称直接借用汉语的“戏”字，并把汉戏视为正宗，

称作“大戏”或“正戏”。它的伴奏乐器主要用汉族戏曲通常用的二胡（侗语称为“弦”），以长篇叙事歌为基础，融合于民族传统文化之中，发展成为具有独特侗族风格的戏曲。

侗戏是侗族群众文艺，由群众业余组织侗戏班演出，通行地区的大多数村寨有一个至数个侗戏班。一个戏班一般有十余人，有一名戏师（或称掌簿）和固定的胡琴手。戏师是戏班的主心骨，负责组织和教习。戏师和歌师常为一体。有的村寨，歌班即戏班，歌师兼戏师。有才华的戏师又是侗戏剧目的创作者，侗戏的传统剧目大多数出于他们之手。演出场地一般在鼓楼或鼓楼坪前的简陋舞台上。侗戏演出承袭了演唱叙事歌的传统，在正本演出之前，先由演员诵读一段开场白，演出结束时由全体演员唱一段“消散歌”。开场白是朗诵诗，节奏明快，音调和谐，朗朗上口；内容一般涉及人类来源、民族迁徙等。消散歌采用合唱形式，内容或阐明该剧的某种教育意义，或表示结束送别。有些地方在开台前还要祭祀戏祖吴文彩。侗戏没有区别脚色行当，没有形成程式动作，一般是横八字步。曲调饱吸侗歌的乳汁，唱腔有平调、哀调、仙腔等。平调用胡琴伴奏，旋律自然，吐词清晰，一听就懂，一学就会，男女老少都会哼上几句；哀调无音乐伴奏，如诉如泣，委婉凄楚，观众无不为之动容。

正是这些浓郁的民族气息，吸引着侗家的男男女女、老老少少。每逢演出，不仅本寨群众倾寨而出，四邻村寨也都蜂拥而至。演出时，观众与演员感情融为一体，唱至欢乐处，台下笑声四起；演到悲哀处，台下饮泣成片。有时台上唱，台下和，使人们得到美的享受。

赶歌会

农历七月二十是贵州剑河、锦屏交界处的高坝地区的盛大节日——赶歌会。这天，侗族男女青年成群结队从四面八方奔向歌场，赶会的多达万人。歌会的中心高坝寨头的绿草坪成了人山歌海。青年们沐浴着初秋的朝阳，尽情地用歌声来抒发爱慕之情。

相传，赶歌会是为纪念一位忠于爱情的侗族女歌手而兴起的。一百多年前，此地有位远近闻名的女歌手肖玉娘，她与青年吴承祖相爱，两人经常到该处的肖家塘边用歌声倾吐衷情。七月二十这天，他俩在塘边订下了山盟海誓。不久，吴承祖参加了姜映芳领导的农民起义军，不幸在战斗中牺牲。玉娘忠于爱情，终身不嫁，每年七月二十都到肖家塘边用悲哀的歌声倾吐她对已故情人的怀念。她的挚情吸引了邻近的男女青年都来陪她唱歌，为她分愁解忧。玉娘去世后，每逢这天，人们仍然来塘边玩山对歌，诉说玉娘和承祖当年没有倾吐完的真挚爱情。年复一年，肖家塘成了通过对歌进行交往和谈情说爱的场所。为了活动方便，大约在40多年前，赶歌会由肖家塘搬到了高坝寨。如今歌会一年比一年兴旺。

多　耶

“多耶”意即唱歌跳舞。表演时，人们围成一大圆圈，手拉手或手搭肩，一人领唱众人和，节奏分明，舞步整齐。这种歌舞结合的文娱活动，最早是侗族的一种祭祀性的活动。其歌词有两种：一种是歌师即兴编的；一种是比较成套的传统唱词，如“嘎萨岁”，它的意思是民族老祖母之歌。“萨岁”是侗族至高无上、主

宰一切的老祖母，人们把她当神来供奉。她是捍卫民族利益的侗族古代英雄，有成套的歌述其身世、经历以及成神的经过。歌中有许多涉及开天辟地、祖先传说以及祈祷风调雨顺、五谷丰登等方面的内容。因此“多耶”属于侗族文化中所保留的最古老的形式。随着社会生产的发展，其内容形式逐渐有了改变。

斗　牛

斗牛是侗族民间的一种娱乐活动。这种斗牛不是人跟牛斗，而是水牛跟水牛斗或者黄牛跟黄牛斗，俗称牛打架。

斗牛习俗，古来有之，相传三国时就兴起了。诸葛亮就曾让人在劳动闲暇斗牛为乐。侗族村寨在生产发展之际，各寨寨民筹集款项，选购身、蹄、头、角、线、毛等条件合格的大水牯（俗称牛王），并选择热心公益的人专门喂养，经常给牛王洗澡、梳毛，使牛王的皮毛发亮，肥壮无比。还给每个牛王冠以美名，如“春雷王”、“震天王”、“胜霸王”、“铁托王”等。每个牛王的名称都写在一块60厘米见方的木牌上，称为马牌。马牌两边或背面写有对联或斗牛诗，如“碰似闪电雷鸣，斗如关公斩将”。一头牛还配备数十面三角战旗。斗牛定在春冬的亥日进行，相传亥日是公正的日子（12天为一亥）。斗牛场选择在侗寨中四面环山，可容纳万人以上的田坝或山谷。

亥日凌晨，人们以寨子为单位，整装出发。姑娘们盛装打扮，佩戴银质项圈、首饰、耳环，闪闪发光。较远的寨子，人们还打着火把从四面八方涌向斗牛场。斗牛场里旌旗招展，迎风飘扬，人山人海。出征的牛王吃罢糯酒糯饭或腌鱼之后，眼耳通红，跃跃欲试。牛王被引进赛场，铁炮三声，笙鼓齐鸣。两牛骤然相见之时，奔驰、对碰、交角、斗力，其情景令全场轰动，山谷震撼。若

久斗难分难解，双方用大棕绳套住牛的一只后腿，一齐用力向后拉，表示和解。胜方的主人趾高气扬，给牛王披红挂彩，亲朋好友也一拥入场，爆竹连天，让牛绕场三周，高歌凯旋。败方主人垂头丧气，卷旗息鼓，筹款再购“天下为王”之牛，待下次再比高低。

吹芦笙

侗族村寨，以吹芦笙为农闲之娱乐，沿袭已久，相习成风。

芦笙的来源，相传当初只是为了祭祀祖先，歌唱英雄，欢呼胜利，喜庆丰收，让人们听到一种美妙动听的声音，在生活中得到鼓舞和欢乐。据说有个聪明的歌手，名叫金转，他进深山听了鸟声、泉声，用一根竹管把最好听的声音装在里面带回寨子，大家听了不满意。金转再次登上群峰，忽闻巨大声响，山鸣谷应。他又向前行，突见万丈飞瀑，震天撼地，便将其声分别用竹管带回，寨里的人听了，皆大欢喜，金转也就成为侗族造笙的始祖。从此，侗家人有了芦笙，每逢佳节，侗寨必是笙歌震天。

最盛大的吹笙活动要数芦笙比赛了。芦笙比赛有一年一次的，也有两三年一次的。比赛前，预先选定地点和赛期，通知远近村寨的芦笙队和亲友。临期，各村寨的男女老幼，竞相装饰，异常喜悦，齐集预约之地。竞赛前，各村寨的芦笙队按顺序进入芦笙堂，把最大最高的芦笙和地筒笙置于中心，然后围成圆圈，吹入笙堂调曲牌。男女青年随着吹笙者互相唱和。待各村寨的芦笙队唱游三转后，按同一曲牌吹笙比赛，以声高宏亮、节奏清晰者为胜。

芦笙的传统曲牌不少，有《迎客曲》、《进寨曲》、《行进曲》、《回程曲》、《祭典曲》、《礼仪曲》、《鱼上滩曲》及《颂祖先曲》等，

构成了侗族芦笙文化的重要组成部分。

闹年锣

湖北宣恩侗乡有闹年锣的习俗。在这里，凡是聚居的山寨，农历大年三十至正月十五期间，都盛行闹年锣。俗话说："闹年锣，闹年乐，歌声锣声喜心窝。"闹年锣象征着侗寨的兴旺吉祥。闹年锣也是山寨与山寨之间以娱乐进行的一种交流形式，看谁家的锣打得响亮。侗家闹年锣的专用锣要比一般的锣大。据调查，姚家湾的大筛锣，直径约60厘米，需用两人抬着在高山上敲击，其声能远传过几座山。最早的闹年锣，只单打一大锣和包包锣，随后发展到配合以钹、马锣、铛子等，后来又加上唢呐。到了清朝末年，不只是奏乐，还以歌配合。闹年锣的曲牌分两类：一类是"长行"，用于开头和走路；另一类是"载头"，与歌曲步伐相吻合。鸣锣引曲调，歌声应锣声。闹年锣的曲牌有"大摆队"、"八哥洗澡"、"牛擦痒"、"双龙抱柱"、"漫上劲"、"安青"、"马过桥"、"过街调"、"大开门"、"青天过"、"四平腔"、"黄蜂锁燕"、"节节高"、"竹叶青"、"翻山过界"、"满堂红"、"迎宾调"、"双探妹"等。闹年锣曲牌的多种多样，表现了侗族文化的多姿多采。

供奉萨神

贵州黎平、榕江、从江、通道、三江、龙胜等县的侗族村寨普遍供奉祖先女神"萨"，也称"萨子"、"萨玛"、"萨老"，是最高最大的老祖母之意。在这些地区的村寨中都建有供奉"萨"的"萨坛"。一般都是露天地坛，中间土堆，四周砌石块。土堆下埋着相扣合的两口大锅，锅内置妇女服饰、纺织用具和几颗白石子。

有的埋铁三脚架、铁锅、火钳、银帽、铁剑、油杉木棒及白石子若干。土堆上种一棵黄杨，象征萨的伞。有的还插一把半开的油纸伞。坛前铺成小石坪，供祀奉活动。

过春节在萨坛前踩歌堂是最隆重的祭萨活动。这种来源于祭祀性歌舞的活动采用踏步而歌、一唱众和的歌唱形式。大家或右手搭肩或手牵手围成圆圈，踏步而行，时进时退。由一人或两人领唱，众人唱每句歌的最后一个小段。其中夹杂一些衬词和呼叫声，雄壮而炽烈，庄严而欢乐。

各个村寨一般都有自己的一套歌词，也称踩歌堂歌。譬如贵州从江龙图寨的这套歌词由三个部分组成。第一部分是“嘎错”，意为踩歌堂仪式之歌，主要叙述踩歌堂仪式的来历。第二部分是“嘎耶”，意为踩歌堂之歌，包括《开春了》、《十八歌》、《春到了》等篇章。第三部分是“嘎萨”，意为“萨之歌”或“祭萨歌”，有18首，内容是叙述“萨”的身世、经历以及成神经过，其中还涉及开天辟地、祖先传说及祈祷吉祥等内容。

踩歌堂具有集体性歌舞的特点，曲调简单易学，节奏明快整齐，人数多寡不定，演唱欢乐热闹，是深受人们喜爱的群众性文娱活动。每逢节日或集会，在几个人的带动下，立即可能形成一个热闹的踩歌堂场面。

●瑶　族

瑶族人口为2,134,013人（1990年统计），主要分布在广西、湖南、云南、广东、贵州、江西等省、自治区。

瑶族自称“勉”、“金门”、“布努”、“拉珈”、“炳多优”等。因经济生活、地域、服饰的不同，又有不同的他称，如“盘瑶”、“山子瑶”、“顶板瑶”、“花蓝瑶”、“过山瑶”、“八排瑶”、“平地瑶”、“白裤瑶”、“红瑶”等多种称谓。解放后，统称为瑶族。

瑶族有自己的语言。瑶语属汉藏语系苗瑶语族，语支比较复杂，各地差别很大。无本民族文字，通用汉文。

瑶族宗教信仰因地而异，有些地区主要是自然崇拜、祖先崇拜或图腾崇拜；有些地区主要信仰巫教和道教。

五色衣裳

瑶族妇女的服饰，独具特色。她们常用五颜六色的丝线在服饰上绣花，所以古有“瑶好五色衣裳”之称。

瑶族妇女头饰最为讲究。其中有龙盘形的，即把十来米的绣花巾盘在头上，犹如巨龙盘踞于高山之巅，风趣至极；有A字形的，即用绣花巾缠绕而成，上窄下宽，接着再系上各色丝线，以及琳琅满目的彩色珠子，造型新颖，别具一格；还有半月牙形的，即将三块“半月牙”形的银牌，置于头顶上，用线把它与头巾连成一体，银光闪闪，远远望去，犹如嫦娥奔月。还有飞燕形、平板形和伞形等，不胜枚举。

上衣图案丰富多采，有表现树木花草和飞禽走兽的，有表现云霞、城堞和齿轮的，也有三角形、长方形和圆形的，还有印章形及人物形象的，真是千姿百态。衣领有圆领和立领两种。一般都是对襟，两旁镶有花边或红色绒线，无扣，将对襟交叉于胸前，以花腰带捆于腰间。有的还以五六块长方形的银牌或红缨系于胸前作为装饰品。袖口往往也镶有花边。广西龙胜各族自治县瑶族妇女的上衣，全用红丝线织成，鲜红艳丽，故有“红瑶”之称。

瑶族妇女的裤子最有特点，上面绣有各种美丽的花纹图案。广东连南县和广西十万大山的瑶族妇女，还常常穿平于膝盖的短裤。至于瑶族妇女穿裙子，明代前颇为盛行，到了现代，只有广西贺县、南丹、龙胜和广东的连南、乳源等县尚有部分瑶族妇女仍穿布片裙、绣花裙或连衣裙，其中布片裙前后各一片长布，左右两侧从上至下全开有叉口，所以两腿均为半外露，以示健美。

绑脚，为居住山区的瑶族男女不可缺少。它既起护脚作用，又显示出精神旺盛、威武、潇洒和刚毅。

坐月甜酒

瑶家的甜酒，一种为日常饮用；另一种则为妇女坐月时的滋补品。日常饮用的甜酒，不加任何成分，既可解渴，又可充饥。凡宾客临门，主人一般不是倒茶、递烟，而是先敬上一碗味美可口的甜酒。坐月甜酒与日常饮用的甜酒不同，在煮甜酒时，还要加放姜片、红糖和鸡蛋。这是一种很好的滋补品。坐月的妇女喝这种甜酒，可收到强身、补血和恢复健康之功效。所以瑶族妇女在坐月期间，每日三餐都不离甜酒。由于坐月甜酒具有独特的功效，所以瑶族妇女怀胎时，甜酒属必备的食品。如果居住在穷乡僻壤，当地不产糯米，孕妇家也必想方设法到山外去购买糯米，做上一坛甜酒。

坐月甜酒做法简便，即把糯米煮熟，并按照一定的比例，把酒曲与糯饭拌匀，放入坛中加以密封，待其发酵即成。在煮甜酒时，再加入上述配料就成为清香四溢的坐月甜酒了。

鸟　鲊

鸟鲊是广西金秀瑶山别具风味的食品。瑶山具有一种得天独厚的自然环境，即冬暖夏凉，四季如春。每年秋后当别的地方已是草木枯黄、溪水断流之时，金秀瑶山却另有一番天地。这里不但山青水秀，百花盛开，各种野果挂满枝头，而且溪水也终年长流不断。瑶山的金秋时节吸引了成千上万的鸟从四面八方飞来，为瑶山人捕鸟，做鸟鲊提供了方便。成群结队的飞鸟在山上饱食各种野果后，飞到小溪边饮水、嬉戏时，人们就用树叶把溪水遮盖起来，不让飞鸟饮溪中的水，同时用大木头挖成许多个长方形的木

槽，称作鸟盆，每个木槽都盛满溪水，在木槽上架设着许多条小竹杆（又称栖棍），上面涂着一层粘性极强的树胶。当飞鸟站在竹杆上饮槽里的水时，双羽就被胶水粘住了，而且越挣扎粘得越紧。到了傍晚，主人就背着竹篓到溪旁去收鸟盆。一个鸟盆往往能捕获到几只飞鸟，一家安装几个鸟盆，就能满载而归了。这便是做鸟鲊的“原料”。

做鸟鲊时，先除毛开腹，弃掉内脏。处理干净后，把大米炒熟，碾成米粉，与食盐拌匀，涂在鸟肉上，再放进坛中密封，鸟鲊的工序便告结束。

一坛鸟鲊可以留存一两年，甚至更久。鸟鲊不仅是金秀瑶族独特的美味佳肴，也是招待宾客的上品，还具有止痢的特效。

现在，这种捕鸟做鸟鲊的习俗在瑶山已不多见。

木　楼

瑶族房屋建筑风格多样，有木楼、茅屋、干打垒，有的地区也有水泥结构的砖瓦房。其中木楼最具特色，在湘粤桂三省区交界的林区最为常见。

瑶族习惯居住于依山傍水之地，所以木楼的地基分为前后两个部分，前低后高，成梯形，即前半部作吊楼，铺木板，后半部为地面。木楼坐落的方向不限，坐西向东，坐北向南皆可。房子结构以木作支架，以木板作壁，走廊和栏杆等都是木制品。房上或盖瓦，或盖杉皮，或盖竹筒等。木楼一般分为三层，即吊楼下为第一层，主要用于圈家畜；第二层住人；第三层储存粮食和其他物品。

居室内的布局合理，除厢房外，一般有左中右三大间正房。通常把左边的一间隔成前后两个卧室；中间的一间，分成前后两个

部分，前厅后室；右边的一间作厨房。

瑶族民间有许多能工巧匠，建造木楼的技艺相当高超，不需要图纸和专门的设计师，也不需要任何铁钉，两三层木楼即可拔地而起，十分牢固。木楼阳光充足，空气流通，居住舒适。登楼眺望，远山美景尽收眼底，使人心旷神怡。

隔窗对唱与吊楼谈情

隔窗对唱，是广东连南县八排瑶未婚的小伙子晚间到姑娘家窗外与姑娘悄声对唱。原来，当地瑶家姑娘，每到一定的年龄，就有自己单独的卧室。卧室之后一般都设有一个求偶的窗口。每当三更半夜，免不了有小伙子点着火把或照着手电前来找姑娘对唱。但不论小伙子来自何处，相识或不相识，姑娘们一般都不会轻易打开房门。小伙子无奈，只好站在窗外与窗内的姑娘对歌，倾吐自己的情意。如果姑娘不愿意与小伙子对唱，姑娘就从窗里递出一束火把给小伙子，示意拒绝。但是失败乃小伙子们的常事。他们并不因此而灰心丧气。因为瑶寨有许多姑娘的门窗都通宵达旦地敞开着呢！有时，小伙子们结伴围在一个姑娘的窗前，轮流与姑娘对唱，姑娘可从中选择自己的意中人。

隔窗对唱，都不是事先约定的，有时姑娘已进入梦乡，小伙子才赶到窗前用歌声把姑娘唱醒，但姑娘们习以为常，从不见怪，对唱照样进行。姑娘家的父母也从不干涉。当姑娘们遇到情投意合的小伙子，则寻找机会把房门打开，让情郎进来与父母见面。

广西金秀瑶山的茶山瑶在住房主楼旁设一个吊楼，姑娘们住在吊楼上，吊楼是她们谈情说爱的场所。上吊楼时，一般要通过主楼，小伙子找姑娘谈情时无法通过主楼，只好由楼下爬攀而上。所以当地瑶族人也把吊楼谈情称为“爬楼”。

女娶男嫁

俗话说“男大当婚，女大当嫁”。但在部分瑶族地区，却与此相反，即女婚男嫁，并习以为常。当女子到结婚年龄时，凡不愿出嫁的则留在家里娶丈夫。所以男子出嫁很普遍，父母均不阻拦。女子不论是出嫁，还是招赘上门，其家庭及社会地位都不受影响；男子出嫁也不受歧视。男子出嫁到女方以后，所生子女的姓氏，根据传统规矩，第一个子女随母姓；第二个子女随父姓。多子女的，则以此类推。男子如果是孤儿或被买到女方做女婿的，男方就得改名换姓，即改随女方姓氏，所生的子女也全都随母姓。这多少反映出母系氏族的痕迹。

男方如果是独生子，嫁到女方以后，家里父母若无他人照顾，则采取“两边走”的形式，即男女都有轮流帮双方父母劳动和承担抚养双方父母的义务；也都有继承双方父母财产的权利。由于瑶族既可男婚女嫁，也可女婚男嫁，故对生男还是生女，皆一视同仁，绝无重男轻女或重女轻男之现象。且婚后皆能和睦相处，极少离异。

出殡坐灵椅

瑶族丧葬仍保留着本民族的习俗。因瑶族内部的支系不同，各地丧葬习俗也不一样，有土葬、火葬及岩葬，也有在露天停棺而不埋葬的。葬礼有繁也有简。繁者宰牛，举行隆重葬礼，简者杀猪或宰羊，举行简单仪式。

出殡时，一般都将死者放入棺内举行出殡仪式。但在广东连南瑶族地区，则是让死者坐在灵椅上，抬至坟地以后，再将死者

放入棺内埋葬。连南的这一出殡仪式还有许多具体的程序。当死者刚刚告别人世，其亲属马上把尸体扶起来，让他坐在床沿，两腿往下垂直(预防死尸僵直不好坐灵椅)，待其子女为死者理好发、洗完澡、穿好新衣之后，便把死者移到灵椅上，并用稻草绳绑好，安放于厅堂旁，然后由道公们做法事，家祭一天一夜。出殡时，在灵椅两旁捆上两根长竹杠，搭成抬轿的架子，灵椅上还捆着一把张开的大油纸伞为死者遮太阳。最后由四人或六人把灵椅抬往坟地。

出殡的行列有一定的规矩。为首的是敲锣者，接着便是死者的儿媳妇或有关亲属，挑着两个瓦罐，分别盛着各种谷物、种籽和饭菜等随葬品。道公跟在灵椅之后，手里拿着神杖念着瑶经，沿途还不时地鸣放土炮，其余的送葬者共同扶着一条长白布随后悠悠而行。在叉路口还备有一两桶米酒，供送葬者饮用。

到了坟地，将死者从灵椅上解开，并由其直系亲属把死者移至预先安放好的棺材内，然后盖棺埋葬。灵椅留在坟上，并把遮死尸的大油纸伞打开，捆在坟边的木桩上遮坟。死者生前日常用的遗物，如烟斗、花背袋等均挂于坟上。现在这种葬仪逐渐简化。

行半屈膝礼

瑶族的礼仪名目繁多，其中瑶族妇女有一种与众不同的传统礼仪，即行半屈膝礼。这种礼仪一般用在两种重要的场合：一是在举行古老的宗教仪式——还盘王愿时；二是在举行婚礼仪式时。

还盘王愿，除道公们朗读瑶经、跳盘王舞之外，还特邀两名超群出众的女歌手，演唱盘王歌助兴，并挑选两名美貌的少女，穿着漂亮的服装，行半屈膝礼作陪，即当两名女歌手出场时，两名少女站在女歌手身旁，当女歌手唱到一定的章节或段落时，两名少女则同时行半屈膝礼，以示对盘王的敬仰。

举行婚礼时，新娘要分别向列祖列宗、父母叔伯及舅舅等长者各行12个半屈膝礼；新郎要行12个跪拜礼，以示对长者的尊敬。相传远古之时，盘王有六男六女，各为一姓，于是共有12姓，所以瑶族青年男女举行婚礼时，新娘要行12个半屈膝礼，新郎要行12个跪拜礼。

石牌法律

广西金秀瑶山的茶山瑶族人民，过去为了维护生活和生产秩序，自发地以血缘关系和相毗邻的村寨，建立一个或若干个大小不等的部落联盟性质的石牌组织。他们把处理村内外的各种事件的法规，刻于石牌上，俗称石牌法律，让所辖民众共同遵守，违者追究责任，加以严惩。

石牌的组织具有一定的民主性和全民性。男女老少都是石牌的组织成员。石牌头人由民众推举一名或若干名德高望重、办事公道的人来担任。不称职者也要通过民众来罢免。

石牌头人根据当地的情况预先草拟石牌条文，当众宣读通过，然后刻于石牌上，将石牌树立在村旁让大家遵照执行。立牌之日，还要举行仪式，由石牌头人烧香焚纸，朗诵一些教育人们遵守法规的话语，俗称“料令”（或料话），并共饮鸡血酒等。

石牌法律的内容，大致包括：保护生产发展、人身及财产安全、家庭婚姻、妇女儿童、防御外盗、抵抗外来侵略、调解内部争端以及保护商贩的正常交易等。由于石牌法律维护了当地群众的利益，所以得到了群众的积极拥护。

石牌法律惩罚甚严，有违犯石牌法律者，都要捉拿归案，按情节轻重给予罚款，抄没家产，直至死刑。人们一般都不敢违犯石牌法律。所以瑶山人民有“路不拾遗，夜不闭户”的良好风尚。

人们称石牌法律“大过天”。

上山围猎

瑶族居住的地区，山青水秀，鸟语花香，生息着各种飞禽走兽，犹如一个天然动物园。长期生活在这里的瑶族人民掌握了各种飞禽走兽的生活规律及其习性，积累了极为丰富的捕猎经验。瑶族猎手捕获的猎物主要是野鸡、白鹇鸡、鹧鸪、斑鸠、老鹰、飞鼠、野猪、箭猪、聋猪、山羊、麂子和豹子等，至于珍禽异兽稀有动物，则在保护之列。

瑶族捕猎的方式多种多样。其中集体围猎尤其盛行，也颇有情趣。农闲季节，一旦在山上发现了野猪、野羊或麂子之类，村上的人就相邀上山围追。由于瑶族信仰多神，认为山有山神，水有水鬼，一山一水、一草一木和飞禽走兽、虎豹豺狼，无不是鬼神管着的，所以上山围猎时，先由瑶族道公举行狩猎仪式，请山神保佑猎手们满载而归。参加围猎的人数众多，男女老少都有。有些妇女还背着小孩去参加。围猎者持枪、握刀、拎鼓、带着猎狗，浩浩荡荡往丛林走去。

狩猎的分工各有不同，持枪者分兵把守山坳口和交通要道，不持枪的则从四面围圈。布下天罗地网后，让数人带着猎狗和锣鼓在大包围圈内寻找猎物的行踪。一旦发现目标，则以哨声为号，众人加强警戒。一时间猎狗汪汪，锣鼓咚咚，杀声阵阵，吓得猎物东奔西蹿。当猎物跑到猎手的枪口之下，一般很难逃脱神枪手的枪口。如果猎物侥幸跑出了包围圈，再跟踪追去，如此反复直至捕到方休。分配猎物，也有一定的规矩，谁击中猎物，就把猎物抬到谁家去，并按照见者有份的原则平均分配，连猎狗和背在背上的小孩以及过路人都同样要得到一份。击中猎物的猎手，还可

以另外得到猎物的头和一张皮，以示奖励。内脏则让围猎的人们聚餐。

长鼓与长鼓舞

相传在远古的狩猎时代，盘王为了救国安民，英勇杀敌，终于获胜，并且博得了国王的一位美貌公主的欢心，两人结为夫妻。婚后，他们从平原迁到一个风景秀丽的南山养儿育女。一天，盘王为了给第三个刚刚降世的小儿子筹办满月酒而游山捕猎，不料被羚羊群撞下山崖死去，卡在一棵树叉上。瑶族先民为了纪念这位生前曾为国为民立过战功的英雄，就把那棵树砍来做成大、中、小三种不等的长鼓，并把羚羊皮剥下来蒙鼓面留给后人敲打，以示对盘王的纪念。从此，长鼓一直流传于瑶族民间，构成瑶族传统文化的重要标志之一。

长鼓舞，有文武两种舞蹈动作。文舞是以轻歌曼舞为特点；武舞是以节奏强烈、明快为特征。舞蹈内容丰富多采。其中表现劳动生产的，有36套舞蹈动作；表现狩猪生活的有72套动作。舞者常常是口不离曲，手不离鼓，足不离舞，即边鼓边舞边歌，场面庄重、热烈，鼓声洪亮、悦耳，充分表现了瑶族人民勇敢、刚毅和豪放的性格。

达努节

达努节，是广西西部山区自称为“布努”的瑶族，每年农历五月二十九为纪念创世女神密洛陀的丰功伟绩所过的节日。当地瑶语称为“达努节”（或祝著节）。

达努节，源于创造世界万物的远古神话。相传，古时天下无人烟，无飞禽走兽，也无树木花草，在那无边际的荒野里，只有东西两座耸入云霄的高大山峰遥遥相望。

东山，形似一位英俊的小伙子；西山，犹如一位清秀的姑娘。这两座大山每天各自向前移一点，后来像一对恩爱的小夫妻紧紧地靠拢在一起了。有一年的农历五月二十九，两座大山突然同时轰隆隆地炸开了。东山变成了一位漂亮的小伙子“布洛西”；西山变成一位美丽的姑娘“密洛陀”。后来他俩喜结良缘，先后生下三个聪明可爱的儿子。

一年，布洛西为了创立一个美丽的天堂而远走高飞了，留下了密洛陀和三个儿子。一天密洛陀到神仙那里去取各种种子回来并把种子撒遍大地，从那以后大地就有了五谷、瓜果和树木花草。之后，密洛陀也就此扬名于世了。

当密洛陀的三个儿子长大成人时，她已经年过花甲。于是她就吩咐三个儿子自去谋生。老大出外去做生意，买卖兴隆，家财万贯；老二到平原去耕种，五谷丰登；老三上山去开荒播种，结果禾苗全被飞禽走兽吃光，颗粒无收。于是密洛陀就送一只铜鼓给老三背上山去敲打，飞禽走兽听见铜鼓震天动地的响声，吓得逃之夭夭，再也不敢前来糟蹋庄稼了，于是老三年年丰收。从那以后，每年在农历五月二十九（密洛陀的生日），瑶族人民都要纪念创世女英雄密洛陀的丰功伟绩。届时，家家户户杀猪宰羊，酿

造醇香的美酒，蒸好五色糯米饭，男女老少身穿五彩斑斓、绚丽多姿的民族盛装，聚集在一起敲锣打铜鼓，跳铜鼓舞，歌唱瑶族著名的创世史诗《密洛陀》，共同欢度达努节。

耍歌堂

广东连南瑶胞自古以来在每年农历十月十六这一天，欢庆最隆重的节日——盘王诞生纪念日。相传，盘王是个开天辟地的英雄，所以瑶族最崇拜、最敬仰他。在节日里，除了举行祭祀盘王的活动以外，男女青年还要聚集对歌、交友，当地俗称“耍歌堂”。

耍歌堂分大歌堂和小歌堂两种。大歌堂举行三天，小歌堂举行一天。耍歌堂活动仪式，由瑶寨的道公或寨老主持。仪式之前，主持者分别通知各家各户预先筹备美酒佳肴，即米酒、糍粑、豆腐、鸡鸭、猪肉等，以款待远方前来共同欢度佳节的亲戚朋友。

在耍歌堂那天，村上的青年男女，都穿上盛装。特别是姑娘们，身上佩戴着各种精美的银饰品，头上插着洁白的羽毛，迎风飘荡，为节日增添了浓郁的欢乐气氛。

历时三天的大歌堂，每天都要安排一定的活动内容。第一天，大地刚从睡梦中苏醒，主持仪式的道公们，就到庙前摆上鸡、酒、米、肉等祭品，并喃喃地念着瑶经。一些童男童女随着长鼓的节拍舞蹈着，手里还不时地挥动着五彩缤纷的纸带。锣鼓声，牛角声，唢呐声和土铳声，犹如一曲曲动听的传统宗教乐章，缭绕着瑶家山寨。一些人从庙里抬着木制的高大神像到村巷中游行，然后临时安置于村中，从而揭开了耍歌堂的序幕。

第二天清早，又是土铳阵阵，金号齐鸣，鼓角喧天。寨上未婚的青年男女，打扮得漂漂亮亮，三五成群地涌向广场，摆开了

“歌堂”对唱的阵势。自朝至暮，成双结对的男女青年，面对面地站立着尽情地欢唱。第三天，男女老少又浩浩荡荡地把神像送回庙里安置。当日落西山，夜幕降临时，又是鼓乐齐鸣，要歌堂就在这欢乐的歌声中宣告结束。

对　唱

瑶族善歌，每逢村上某家来了姑娘，村上的小伙子们便在晚上不约而同地集中主人家邀请客人对唱。如果来的是小伙子，则由村里的姑娘们出来对唱。在客人到来的当晚，主人按照常规在堂屋里把火生得旺旺的，让听众围在火塘旁，一面取暖，一面聆听优美的歌声。还要在火塘上煮上一锅芳香的山茶，招待就座的宾客。对唱往往通宵达旦，听众也一直满堂而坐。

歌堂对唱的目的有二：一是进行民间文化娱乐活动，比试各自的聪明才智，故已婚和未婚者均可参加；二是未婚青年男女通过对唱互相了解，寻找意中人。

歌堂对唱的内容丰富多采。其中有反映盘古开天地、历史迁徙的，也有反映生产劳动和爱情生活的。曲调优美动听，比喻贴切，感情真挚。

对唱有一定的传统程序，包括序歌、请歌、劝歌、赞歌、对歌和送歌等。

序歌，是由主方向来客的主人表示歉意，又称“起歌堂”。如：

麻烦主，
主人生火煮茶香；
今夜唱歌麻烦主，
坐在火边起歌堂。
……

请歌，是主方邀客方对唱。主方千方百计地以歌的形式三番五次地请，以打动对方的心，当客方按捺不住时，他们便移步歌堂就坐。如：

十请妹，
今夜相逢好桂花；
今夜相逢金花朵，
移步歌堂喝碗茶。
……

劝歌，是客方就坐后，并不马上对唱，于是主方又三番五次地劝。如：

劝妹唱，
唱歌玩耍也无妨；
牛踩石板无脚印，
水面下力无损伤。
……

赞歌，是当客方开腔时，主方有意地称赞客方：

妹开腔，
好比鲤鱼来合塘；
鲤鱼进塘看深浅，
妹是歌仙美名扬。
……

对歌，是歌堂对唱的高潮，既热烈又紧张，一问一答，犹如一场智力竞赛。各自都想方设法出一些难题，让对方“卡壳”，使自己成为胜利者。但瑶族男女从小就学会了唱歌的本领，一般都不易被对方难倒，所以双方往往唱出“平局”。

答谢和送歌，是歌堂对唱的尾声。有时天刚蒙蒙亮，客方就要起程，这时主方要唱几首答谢主人和欢送客人上路的歌。如：

多谢主，
多谢歌堂主人家；
多谢主人情义好，
吵闹一夜到天亮。
……
送妹送到渡船头，
脚踏渡船眼泪流；
渡船去了又回转，
望妹日后到本州。

许多青年男女的爱情生活，往往就从歌堂对唱的歌声中开始，在歌堂对唱的歌声中建立。

●白　族

白族人口为1,594,827人(1990年统计)，主要聚居于云南省大理白族自治州，部分散居于云南其他地方、贵州省毕节地区、四川省凉山彝族自治州及湖南省大庸市、桑植县等地。

白族的先民，史称“滇僰”、“叟”、“昆明”、“西爨白蛮”等，白族自称“白伙”、“白尼”、“白子”，汉语意为“白人”。1956年，根据本民族人民的意愿，正式定名为白族。

白族有自己的语言，白语属汉藏语系藏缅语族白语支；通用汉文。

白族崇拜相当于村社神的本主，信仰佛教，也有部分人信仰道教。极少数人也信奉天主教或基督教。

白羊皮服饰

一首白族民歌唱到："白里透红小情妹，黑绒坎肩白衬衣；头上包块白头帕，身披白羊皮"。这四句唱词，每句都有"白"字，人称"白"字歌。这里描绘了白族在服饰上尚"白"的习俗。尤其身披"白羊皮"的习俗，为其他民族所少见。当今，白族人民的经济生活大有改善，许多农村姑娘身穿鲜艳的服装，但仍不忘外披一件洁白细软羊皮披肩。女子出嫁，除其他礼物外，父母必送一张雪白耀眼的羊皮作嫁妆。择此嫁妆，格外将究，求纯白羊皮，不掺杂毛，羊皮须完整保留羊的四肢和尾巴上的皮毛，不得残缺。若在集市上买不到理想的，就饲养一只白羯羊备用。富裕人家则选用"三合羊皮"，其价值当与一套绸缎被褥相当。至今，剑川沙溪一带女子出嫁离家门时，还保持有让新娘跪在羊皮上向父母磕头告别的仪式。

这一古俗所以千年不衰，与白族妇女在家庭中承担着重要家务劳动和农活分不开。剑川地处高寒，农业收成不定，男子常出远门，四季农活，里外家务，衣被缝工，妇女一应包揽。背负重物，要垫以羊皮，冬冷缺衣，以羊皮御寒，几乎从早到晚肩不离羊皮披肩。故披"白羊皮"是白族妇女勤劳智慧的象征。

"登机"帽

云南洱源县乔后区温坡、大树一带的白族妇女酷爱一种叫"登机"的绒球银饰帽。"登"为"戴"之意，"机"寓意双关，一指如斑鸠般美丽，二含"吉利"之意。在厚层的帽面上方用条形银饰连缀成或方格或菱形的图案，显得醒目大方；底边镶缝凸出

的圆形银扣，富有立体感；有的则在周边缀上珠链，在阳光的照耀下，发出闪闪的光芒，把姑娘桃红的脸颊映衬得妩媚动人。在山风的吹拂下，帽额上头嵌着的两对一高一低的钢丝弹簧绒丝彩球轻轻晃动，频频向人招手致意，使得姑娘更显得婀娜多姿，步履轻盈。

山区的姑娘初恋和婚嫁之前，务必缝制一顶“登机”，它是姑娘手艺水平高低的标志。平时姑娘戴着它赶集，探亲访友，以至参加盛大的民族节日活动。俗语说“不缝‘登机’，就找不到称心人。”

白族姑娘如此厚爱“登机”，内中有个美丽的故事：原来山村里有个长得如花似玉的白家姑娘叫素花，已和壮实漂亮的猎手阿鹰恋爱已久。但魔鬼黑面妖妄图霸占素花，破坏其美满姻缘。一天，阿鹰独自一人上山打猎，黑面妖刮起妖风，把阿鹰捉进了魔洞。素花闻讯不畏艰难险阻，昼夜翻山越岭，四处寻找。她的诚挚的恋情，感动了本主老爷，遂显灵送她一顶红绒灼灼、银光闪闪的“登机”。素花刚一戴上，顿觉身轻如燕，且力大无穷。她按本主爷的指点，历尽千辛万苦，终于找到了魔洞，与黑面妖展开了生死搏斗。经过数十个回合的拼杀，黑面妖渐感体力不支。此时，“登机”发出的闪闪银光，刺瞎了黑面妖的双眼，素花终于战胜了黑面妖，救出阿鹰，从此过上幸福美满的生活。素花的事迹鼓舞了纯洁的姑娘们，为争得自主婚姻和真正的幸福，纷纷缝制“登机”，“登机”遂成了吉祥的象征。

凤冠帽与凤尾鞋

凤冠帽和凤尾鞋系白族别具一格的传统服饰品种。

凤冠帽由两片翅形多层黑布缝制而成。帽的头尾向上高翘，宛

若振翅待飞的凤凰，帽名由此而来。一般凤头上镶一颗大红宝石或以玻璃、塑料等制品代用。两旁以两颗较小的宝石缀配，世称帽花。帽花左翼缀上二龙在争抢宝石之图样，称为二龙抢宝；右翼缀着朝阳翩跹飞舞的银质双凤。凤尾部垂下三股银链，以示舞动多姿的长尾。凤冠的其他部位缀满象征满天星斗的圆形银泡。帽顶部正中留出 2 厘米见方的圆孔，让乌丝亮发由此微露。帽体不大，戴在头顶，边连挑花头巾，外盘上乌黑的长辫，让人一看，既雍容大方，又格外妩媚动人。在山区戴此帽时凤头朝前，凤尾甩后；若下坡赶集，则凤尾朝前，凤头朝后。相传是象征凤凰永远留恋山区，不为平坝的花花世界所惑。这是千百年来住在山区的白族人民住山爱山在服饰文化方面的反映。

凤尾鞋的鞋帮用墨绿或粉红的缎子缝制而成。鞋头似船尖细而微翘，形似欲飞的凤凰。鞋帮上刺绣孔雀、雉鸡或梅花、海棠、玫瑰、荷花，姿态各异，配色考究，针线细密，清新明快，显得繁而不乱，雅而不俗，落落大方，栩栩如生。它充分显示了白族妇女绝妙高超的技艺。以前青年妇女都常穿此鞋，现因时代变迁，青年女子不多穿了，只有中老年妇女才缝制，供年节时穿用。

乳　扇

云南洱海北部邓川坝，素有乳牛之乡的称誉。这里几乎家家户户饲养乳牛，集市上处处设摊售卖乳烙、乳饼、乳扇。乳烙、乳饼，我国西北游牧民族均会制作，唯乳扇是白族独创。

乳扇实为固体乳制品，其制作方法独特：先备好一碗牛奶发酵后的酸浆，在锅里加热到 70℃左右，后舀进一勺鲜牛奶，二者互相作用逐渐变成絮状，此时用木勺轻轻把奶赶拢，使其凝成胶质乳团，再用木勺反复翻动、折叠，待乳块发白、滑溜时，将乳

块捞在掌心中，用手指轻轻边搓、边展、边拉，做成薄片裹在小圆棒上，并将薄片控制成扇状，绷在间隔约15厘米、长约三四米的两根细竹杆上。每架竹杆上可绷十来张乳扇。然后把绷满乳扇的架子晾在屋外，等水份稍干后松动裹在竹架上的扇“脚”，否则粘住竹杆，难以取下。再稍作晾晒，即可取下。

乳扇色淡黄，薄如纸，营养丰富，味道鲜美。老年人喜欢蒸食，食后提神补气；幼儿宜于煮食，食后健身发胖。居家待客，视为佳品。过油加盐，扇卷色金黄，又脆又香又甜。凡到过邓川、大理一带，食用过乳扇的宾客，无不翘手称赞。白族子弟平时乐于生食，奶味更浓；或将乳扇压成末放入鲜奶之中煮喝，或将盐面撒在乳扇上，然后将扇面裹在筷子上，边烤边卷边吃，乳香四溢，可享山村野味之趣。

砂锅鱼

白族地区的湖泊里，鱼类繁多。其中以洱海特产——弓鱼最为名贵。弓鱼，体形不大，每尾重约一两百克，肉嫩味美，子多刺少，白族人称为洱海花。

用弓鱼或鲤鱼烹调的砂锅鱼是大理白族人传统食品，主要炊具是砂锅，是由大理海东、挖色一带的白族人烧制的土陶制品。作法是，先将一尾或几尾弓鱼或鲤鱼刮洗干净，放入砂锅里清炖。待鱼半熟，放入泡豆腐、鲜鸡肉、腰花、蛋卷、猪肝、肉丸、猪蹄筋等近20种配料，再在炭火上烧煮片刻即成。

当砂锅端上餐桌，透过蒸腾的雾气，首先闻到鱼鲜，少顷，肉、蛋、鸡、肝、笋、参等高级营养品相溶渗透的异香醇味即扑鼻而来。鱼不入口，已使人涎水欲滴。砂锅里银亮的鱼身、金黄的蛋卷、翠绿的青葱、雪白的豆腐和鲜红的火腿，五色斑斓。整道菜

色香味俱全。

竖房仪式

白族人家起房盖屋，均须择吉日良辰，举行隆重的竖房仪式。其热烈程度，犹如嫁娶。

上梁头天晚上要举行两个较小的仪式：一是拜鲁班，即竖房主人与木匠师傅捧一斗谷子，谷上插放戥子、剪刀、墨斗、酒茶，一起到祖先堂前跪拜，祈求翌日上梁顺利；二是送木器，即拜鲁班后，由主人和木匠师傅带上一块生肉，以及米饭、茶酒、熟鸡蛋、木马模型、木屑等物，到“地师”看好的地点，烧好肉后吃肉与茶饭食物，丢下木马、木屑，才可回家。相传鲁班有一次为了赶工，做了很多和本人一模一样的木头人帮助干活。鲁班的儿子给父亲送饭时，竟真假难辨，回头问其母，母亲说：“脸上淌汗的便是。”当儿子认出并叫喊父亲吃饭时，那些帮工的木头人一齐停工不动，争着向真鲁班要饭吃。鲁班无法，只好答应，以后凡竖房的主人都必须给他们送吃的。这就是送木器的来由，以示对所有盖房木工的敬重。

上梁当日，在两层楼柱上，主人和客人早已贴满对联。中堂前檐大柱的对联极有份量，要体现主人的用意，如“汉柏秦松光甲地，吴山楚水壮华居。”其他侧柱也全是贺联。

中堂前台阶上早已摆好拜梁供桌。其上放置满斗的谷子。谷子上插着戥子、尺子、剪刀，预祝新房建起后给主人带来称不完的金银，量不完的布，裁不完的衣服。供桌前再置八仙桌，专供主人和客人敬献的贺喜点红馒头和其他肉、茶、酒供品。八仙桌前的木马上架着将要上房的中梁，中梁上画有八卦，写上建房日期，并包上红绸。来宾中贺喜的男子都要在中梁前跪拜，摆上捐

助的米和钱。

选定时辰一到，上梁仪式开始，木匠师傅双手抓起公鸡在中梁四周绕祭一圈，嘴里高声颂读祷词："鸡是什么鸡？鸡是凤凰鸡，头戴乌纱帽，身穿五色衣，今日你作开冠鸡，保佑竖房大吉利！"接着把公鸡鸡冠插破，将鸡血滴在中梁上，谓之"点血"。此后的中梁则成房神的象征。这时木匠徒弟踩梯而上，并口念祷词："一把梯子十三台，上了一台又一台，脚踩'仙人桥'（指搭好的脚手架），一步上天堂。"在徒弟拴好中梁两头的绳后，木匠师傅又念道："左边拴的连环扣，右边拴的扣连环，摇摇摇，摆摆摆，摇摇摆摆上天堂。"此时徒弟把中梁用绳拉上房顶并安上。木匠师傅口中又祈祷道："梁梁梁，你是树中王，今天选择黄道日，鲁班弟子用你做中梁；右入榫吉祥如意，左入榫如意吉祥"。待中梁安装好后，木匠师傅从屋顶垂下一根绳子，把放有馒头、硬币、小红旗和用红布扎口的净水瓶吊上屋顶，把四面小红旗各插在中梁的两头，并把红布小瓶挂在梁正中。瓶中的水必须是当地最洁净的泉水或江水。木匠师傅从空中把水浇下来，边浇边念："水是东海龙王水，左边浇龙头，右边浇龙尾，龙头龙尾一齐浇，引得东海龙王来。"

接着木匠师傅依白语东南西北的韵脚吟诵四段祷词，每念完一段，把馒头抛向一方，供客人哄抢。最后，木匠师傅把主人事先准备好的硬币抓在手中，高声朗读："子孙在发旺，主人来亮财，打开宝藏库，遍地是金钱"。话一落音，把钱抛向四方。这时场中贺喜的男女老少齐去争抢。抢到的预示自己赢得一份吉利而欢呼雀跃。随后，宾客入席，饮酒猜拳，鞭炮声不绝于耳。

走马转角楼

云南白族农家民居建筑有别于其他兄弟民族，它的特色是条石砌基，石灰刷墙，青瓦为顶，木头作架，庭院周正，门楼讲究，外观给人的印象是整齐、庄严、轩昂、大方。

起房盖屋，要求住房布局严谨，宽敞舒适，一般都是庭院组合的建筑群。经济条件稍好的，至少盖成“两房一耳”，或“三方一照壁”，富有之家则建“四合五天井”，讲究豪华气派的就把两院相连，称为“六合同春”，加之楼上楼下各幢走廊相通，人们就把这样的房舍命名为“走马转角楼”。

楼房分上下两层。楼上敬神灵、祖宗牌位，盛放粮食或杂物。楼下一般分为三间，左右两间为卧室，中间为客厅（当地汉语习称“堂屋”）。客厅门面用木雕，由丈把高的三合六扇格子门组成。雕花格子门大多出自剑川木匠之手，工艺精巧。每扇分上下两节，下节浮雕各种动物图案，上节采用多层镂空的手法，底层为连续几何花纹，表层以山石花鸟或人物故事的图案作浮雕，美观大方，栩栩如生。

凡“三方一照壁”、“四合五天井”式院落，均盖具有内地殿阁造型的装饰性门楼，这是白族民居建筑的重要特点。门楼檐角翘起，用天然的大理石画或油漆彩绘，将门头装饰得富丽堂皇。

照壁与房舍同高同宽，独挡庭院的一面，气势雄伟。照壁的平顶屋脊“坐起”，四角翘起，运用斗拱梁坊顶杠作用，出檐深远。白色墙面中镶嵌着大理石的山水画及彩花饰，色调淡雅，造型轻快活泼。院内照壁前还砌有花台水池，配花草景盆，使院落增添庭院色彩。

大理剑川一带盛产各种性能的石料，白族人心灵手巧，把它

用于建筑物的各个部分。为防风雨毁檐，檐口用石板挑出；为防雨淋浸蚀墙基，就用方条石砌墙基柱；为使院内天井干净永固，地面就以鹅卵石夹石板镶砌，并铺了各种图案，达到既经济又美观的目的。

掐新娘

生活在洱海之滨的白族人家在新婚仪礼中，尚保留着“掐新娘”，治娇气，求吉利的习俗。大婚之日，新娘坐轿、骑马或是步行来到新郎家大门口时，新郎的亲兄弟要出来将新娘背入客厅准备拜堂。在被背的这段十来米的路上或是将新娘背入室刚刚放下的工夫，新郎一方的长辈和来宾可以任意找机会掐新娘的肩、臂、手、脊、腰等部位，嘴里还不断的说道：“哟，新娘的嫁衣真漂亮啊！”表面上是赞赏新娘穿来的嫁衣，实际是以掐表示“疼爱”新娘。老辈人一般出于旧日的礼俗，轻轻掐拧，作作样子。掐的用意在于降伏新娘在娘家时养成的“娇气”，目的是要她进入婆家门后服服贴贴地接受公婆的管教。可新郎一方同辈的青少年宾客则不同，他们是真掐真拧，直掐得新娘无法躲藏，又不好意思喊叫，新郎在一边心疼新娘但又不好制止，只得笑脸相迎，爱莫能助，逗得宾客哈哈大笑。

掐新娘还有另一层意思，“掐”和“借”，白语为同音字。宾客“借”新郎、新娘的大喜，给自己沾点“喜光”，是增加喜庆气氛的举动，所以新娘在这一天被掐得再疼，也要忍痛含笑，不能生气惹恼宾客，这才算是有教养的好媳妇。

敬　老

白族素有敬老的传统。一是衣食住行先让老。在白族地区，人们从小就受到尊老、敬老习俗的教育。当子女成家立业之后，对父母的衣着十分注意，平时要让父母穿得干净利索，逢年过节首先给父母、祖父母辈穿上新衣。外人看子女是否孝敬长辈，从衣着上就能看出几分眉目。老人衣着过份寒酸，会遭社会舆论谴责。穿着整洁，人们会赞扬子女有孝心。

家里人平日三餐，子女或孙辈主动给长辈添饭夹菜。饭后勤于收拾碗筷，这在白族地区已成了习惯。

在正式宴席上，晚辈总是热情斟酒，主动给老人夹菜。先吃完的年轻人则把筷子架在碗上，双手托碗筷于胸前，左右平举一下，道声："大爹大妈请慢吃"，然后放下碗筷方能退席。

平时饮茶，必定是青年人把茶趁热按年龄大小依次双手先端给长辈，说声"请您先喝"。

在庭院里，遇有老人来做客，都要起身让坐，递送板凳，让老人坐在堂屋或庭院的正上方。晚辈要退到两边或坐在较矮的板凳上。若青年人当场失礼，旁人就要劝责，须立即改正。否则会认为父母教育无方。

二是为老人缝制寿鞋。洱源、剑川一带的白族妇女从儿时起便学做针线活，开始为老人缝制"寿鞋"。按这一带农家习俗，老人在六十花甲的"寿日"开始穿第一双寿鞋。儿孙满堂的老人每年都会收到女儿、儿媳、孙女们送来的寿鞋。老人穿换的寿鞋越多，越表明他们育儿教女有方，也说明他们受到儿女们的厚爱和敬重。在公众场合，穿上寿鞋，从众人面前走过，众人羡慕，老人舒心，儿孙脸上也颇感光彩。

这种寿鞋是用大红绸缎做帮缝成。鞋头拼出“寿”字的几何图案。图案下用蓝色丝线挑绣一枝极为素雅的针叶松枝，寓老人如同“万年老松”。鞋帮后跟缝成对称直角三角形图案，寓老人为人正派；鞋底用细线密针纳成“千层底”，格外结实可靠。

三是红白喜事老人先“开席”。在白族聚居的城镇村寨，凡办红白喜事，主人在正式宴请来宾的头天清早，便将本家族或村里德高望重的老人请来“先开席”，表现出白族晚辈对长辈的尊敬、关怀的美德。有的地方，人们把老人的这种聚会称之为“敬老会”或“老人会”。被请老人的名单需在头几天定好，然后婚家差人挨户去请。被请的老人也极感荣幸。他们在众宾客到来之前先期来到。主人和协理办事的“提调”在门口拱手作揖把老人迎进客厅。此时吹鼓手用唢呐吹奏“迎宾调”。

老人们在互相等待未入席之前，自由围坐在火盆周边，谈天说地，评古论今。如果是“白事”，便自然议论去世老人的良好品行与友善态度，以表达怀念之情。招待者恭敬热情地侍奉上烟、酒、茶给老人们享用。

“老人席”菜肴十分讲究。先上水果糕点，并上四盘八碟，最后上荤素佳肴“八大碗”。

“老人席”男女分坐，由家中当家长辈亲自陪同斟酒添菜，气氛极为亲善和谐。

近几年来，民间在制定乡规习俗，发扬民族精神时，常把“敬老席”列入乡规之中，使这一优良传统在新时期里得到了继承和发扬。

年节喜庆

生活在云南怒江地区的白族“勒墨”人，采用一年为13个月

的古老历法。过年叫“大纪架”。在过了360天后，约在第十三月到第二年的一月之间的龙日，才开始过年，休息娱乐12天。他们选龙日做除夕，蛇日为元旦。

除夕晚上，家家户户做好鸡、猪佳肴，备好美酒，供在祖宗牌位前，待举行祭祖仪式的家人团聚享用。祭祖仪式由叫“朵兮薄”的专业祭司负责。而专业祭司在村寨中只有一两人，他们负责挨家挨户举行祭奠仪式，各家各户只得在家恭候。未经祭司祭奠不许动箸，这是祖辈留下的规矩。小孩饥饿难忍也不能提前用餐，否则就是对祖宗“大逆不道”，将来会失去祖宗保佑，招来灾祸。因此从傍晚至半夜，都是村中吃年夜饭的时间。有的人家轮到最后，只好半夜才吃年饭。但家家乐意，以示虔诚。第二天蛇日才允许各家互相拜访祝愿。此后，青年男女，成伙成群相约在树林中戏耍野餐，尽情欢乐。

大理、剑川一带的白族，采用一年为12个月的历法。除夕晚餐更为隆重。这天，出门在外的人，要尽量赶回家中吃“团圆饭”。白天，把烧煮好的整猪头、整鸡及熟蛋、米饭、干鲜果品、油炸干栏粉片等美食用托盘、碗碟盛好，供在“天地君亲师位”的祖宗牌位前。全家人由年长者或当家主人领头行跪拜祭奠礼，烧香、点烛，一边跪拜磕头，一边心中默祝祖宗保佑赐福。之后，才能开宴。

大年初一早晨，各家各户煮好带有丰盛浇头的面条或饵块给本家族亲友长辈或村中有德行的老人送去，也给村中鳏寡孤独老人送去，以示敬重和慈心。小孩跟随大人，给长辈磕头拜年。各家事先备好给儿童的压岁钱。家家儿童都早盼年节到来。因去几十家拜年，可得到比平日多几十倍的零用钱。这天，尤其是清晨，各家各户都争取和睦气氛，人人穿上新装，不许打架骂人，否则认为会冲了一年的吉利。屋里屋外，村村寨寨，处处欢声笑语，爆

竹阵阵，迎接新年到来。

妇女产期的赐福

在洱海之滨居住的白族家庭，儿子娶妻完婚时，在洞房门楣上挂一面细筛子，筛子背后插上两支或三支箭，筛子正面还挂上一面铜镜。筛子寓意新媳妇心细如筛，能勤俭持家；箭寓意完婚后夫妇感情忠贞如箭；铜镜寓意夫妇心心相印，心明如镜，前途无量。

坐月期间，极不欢迎名声不好或耳聋眼瞎之人进入院内。认为这种人入内，会使坐月妇女的奶水不畅；还会使孩子染上这些有缺陷者的品行，不利于教育成才。此外，也忌讳鳏寡孤独者入门。每逢这种时候，家里人都十分留心登门客人，看见上述人前来，尽可能挡在门外。但是对德高望重、聪颖贤惠、有文化教养、品貌双全的男女来客进院串门，主人便把他们请到客堂就坐，煮上红米酒鸡蛋的甜食殷切招待。主人认为，这样做，来客的品行就会传给婴儿，以利将来成才。

栽秧赕

白族坝区以种稻为生，十分重视栽秧季节。白语云："五月农忙夫妻隔床"、"皇帝也要下田插几把秧"，可见及时栽插才能保证丰收。人们常说："及时一仓米，违时一把草"。

为了保障栽插的及时和顺利，洱源、剑川、大理一带的农村，一到栽插季节，各村的农户自发组织"栽秧会"，也叫"栽秧赕"。"赕"是相互协作的组织名称。每"赕"十几户、几十户、一百户不等。届时，赕中选出经验多、威信高的长者，委为"赕头官"，其

职权是安排和指挥一切栽插任务；另选出一至二人为“二门官”，协助赊头官登记、分配劳力，记录账目、出勤等杂务。

各赊事先准备好约5米高的栽秧旗。栽秧旗制作十分壮丽，红缨穗、银剑头，下插四方米黄色令旗，上书“令”字；令旗下扎一方斗，四面书写“五谷丰登”四字；方斗下扎两个大绣球，绣球间悬挂三角旗一面，五彩绸斜吊线上缀有金银玉器、珠泡等78种珠宝装饰；绣球下挂大三角彩旗一面，旗面四周缀象征七星的7面小圆镜，两面各书“国泰民安”、“风调雨顺”8个大字。彩旗顶端挂一张雉鸡皮，旗杆用蓝白两色绸料裹成螺旋形。

各赊的吉日良辰一般选在芒种日。头天“开秧门”，要举行隆重热烈的祭旗仪式。秧旗下设两个牌位，一是“汉丞相诸葛武侯之神位”，一是“轩辕皇帝之神位”。相传，诸葛亮南征至此，土民惊恐万状，先后逃离故土，使田地荒芜，作物违时，产量骤减，土民生活十分痛苦。为使部队无犯耕种栽插的当地土民，诸葛亮下令严肃军纪，赐给田间正在劳作的农民一面“令”旗，命保护生产。白族祖先感念诸葛亮体恤民情之心，于是将此栽插仪式传承至今。

每次栽插前先祭旗，乐队奏乐，全体赊员叩头祝祷，同时敬献香花果品。完毕便开始安排栽插活动。此后每天由二门官编排栽秧顺序，讲评栽秧质量。为鼓舞士气，栽秧期间还开展“抢旗”活动。抢到旗的为胜方，败方要主动帮助胜方栽插一段时间；届时唢呐手高奏“栽秧调”、“龙上天”等欢快乐曲，男女青年对唱情歌。整日欢声笑语响彻田野，一派热闹景象。

栽秧完毕，要举行“关秧门”的庆祝活动。赊员到本主（本主是“本境土主”的简称，为本村寨保护神）庙中杀鸡宰猪会餐，公布账目，也叫“散赊”。此时，男女老少盛装汇聚广场举办“田家乐”活动。秧田官身着新衣，外披棕衣，骑马开道。继之有人扮

渔、樵、耕、读四种人入场，霸王鞭队载歌载舞，尽情演出。有时打白族快板，有时唱大本曲，有时演吹吹腔，欢闹达三四个小时方尽兴而散。

绕三灵

每年农历四月二十三至二十五，苍山脚下，洱海之滨，村村寨寨的白族青壮年男女，聚集数万人，盛装艳服，成群结队，边歌边舞，参加三天的祭祀与狂欢相结合的“绕三灵”。

绕三灵的含意是“朝拜、游玩三处佛寺风景区”。这可以从今天朝拜的寺名和游玩的方式中得到证实。四月二十三小朝喜州的金龟寺，名为“仙都”；四月二十四大朝庆洞村圣源寺，名为“神都”；四月二十五末朝大理崇圣寺，名为“佛都”。“仙、神、佛”三都的营建与朝拜，反映了白族信仰巫、道、佛三种宗教，并发展成以自然崇拜开道，杂揉道、佛的哲学思想体系。绕三灵期间，每晚都在寺庙前的草地上或树林里，尽情歌舞，通宵达旦。第三日朝毕“崇圣寺”后，来到洱海边的马久邑，在保安景帝和公主的本主庙前祭祀、歌舞，欢乐一番后，才各自散去。

参加绕三灵时，根据个人的爱好和要求，各形成一列队伍。每队的领头都必须是一对年长的白族老歌手，二人合扶一枝柳树或竹子，其中一人挥着牦牛尾主唱，另一人甩着花手巾打浑，一路高唱“大本曲”或各地的“白族调”。内容不定，即景生情，边编边唱．边走边舞。后面则是十多人小乐队，有的吹树叶、笛子或唢呐，有的弹三弦、月琴，其中大多是当地出名的歌手，有男有女，以对唱为主。再后面便是几对或几十对打“霸王鞭”、“双飞燕”、“金钱鼓”的队伍。在路上或投宿场地，男女青年通过这项活动，可互相认识，自由恋爱。不少青年男女通过绕三灵结成了

美满姻缘。

这项活动源于白族对山神、水神的原始崇拜，以祭“苍山神”和“洱河灵帝”为开端，吸收道、佛二教的朝拜仪式，才演变为三教合一加游玩的大规模的狂欢性节日。虽朝代变更却久盛不衰。

霸王鞭

霸王鞭是白族人民每逢重大民族节日必演的群众性娱乐舞蹈。它可边舞边唱长篇本子曲，也可作纯舞蹈性表演。人数多少视需要而定。单人、双人、数十人、上百人不等，有时竟多至千人。有关史籍记载：“霸王鞭者，以竹竿五尺长等，身节凿孔三寸，置徇嵌以二三铜钱，其孔差错相间，拍之则钱动摇，以作喧声。手握竹竿之中，而拍其上下截，拍手承以臂，拍头承以颈，拍腰承以股，仰俯曲伸，辗转反侧，无不中节，亦绝技也。”一般女的舞霸王鞭，男的舞金钱鼓或双飞燕。金钱鼓是角上串有铜钱的六角形手鼓。击打时发声比霸王鞭声更为奔放清脆。双飞燕由四片竹片组成，每片吊扎彩带。每只手各握两片竹片击身，动作抒展矫健，铿锵有力。无论舞霸王鞭，或敲金钱鼓，或击双飞燕，均按节拍规律，在手、臂、肩、胸、腰、腿、膝、脚间敲击，同时上述部位主动送击，要求双膝微颤，

肩、腰晃动，连续跳跃舞动，套路完整多样。一般常打12下、14下、16下；舞打中又分行进、停留、下蹲几种步伐。男女之间交错对击时，有“背合背”、“心合心”、“脚勾脚”、“凤穿花”、“双彩花”、“五梅花”、“一条街”、“龙吐水”等竞技动作和舞蹈队形，动作十分干净利落。既适合体育锻炼，又可作群众性的团体文艺表演。

霸王鞭多在绕三灵、春节、三月街、火把节等大型民族节日或庆典活动中表演。源于“楚庄跻王滇”时期的楚人兵器歌舞，后为白族吸收。滇西北，水源丰富，竹林茂密，白族人遂将竹杆兵器改制成舞蹈道具。明代白族大文人李元阳认为白人为楚人之后裔，故直呼“霸王鞭”，湖南白语称“金尺竿”，相传由棍木兵器演变而成。

兵器舞

在云南洱源县，至今还流传着各种兵器舞蹈，就种类而言有“春秋刀舞”、“双头棍舞”、“单棍舞”、“双刀舞”、“长矛舞”、“猴刀舞”六种。大多在本主会、春节期间表演。通常以锣鼓、唢呐伴奏，曲牌多用“将军令”、“阵前曲”、“摆马”等。就表演场所和身段、技艺特征而言，可分四类：

1. 舞蹈性兵器舞。配合春节时的“龙灯”、“狮舞”、“耍马”、“耍鹤”表演技巧动作，意在吸引观众，镇妖驱邪，招财进宝，庆贺村寨和人们四季平安。

2. 戏剧性兵器舞。用于白族吹吹腔戏中的武场，有固定的套路和程式。

3. 祭祀性兵器舞。多用于宗教活动，如本主会、水陆大会、财神会和一些巫师活动，给人造成神秘离奇之感。

4. 武术性兵器舞。历来用于军事征战、守家护院、健身强体。艺人通常武医结合。

前三种兵器表演多用木或铁制成的道具。第四种使用真兵器。

民间艺人在表演中注重身、眼、手、脚的自然密切配合，一招一式，攻守自如，又随机应变。“春秋刀舞”稳健有力，刚柔相济；“双刀舞”洒脱无羁，轻松明快；“棍舞”则敏捷快速。

兵器舞蹈源于南诏、大理国时期。那时国力强盛，军队骁勇，战略战术空前发展。流传至今的兵器舞蹈，实则是武术技战的艺术化。白族人民历来酷爱文韬武略，明清时期，各地还普遍建造文庙武庙。许多白族居家的窗木雕、碑刻等民间艺术品上都有“耍刀”“舞棍”的图案。

大理三月街

“乌绫帕子凤头鞋，结队相携赶月街，观音石畔烧香去，元祖碑前买货来。”这是清代大理学者师荔扉写的一首《月街词》，它反映了三月街上白族人民的两项活动：一是烧香拜佛，二是集市贸易。三月街，每年于农历三月十五至二十举行。会期可持续 7 至 10 天。人数多达十五六万人。

街市在古城大理西门外苍山中和峰脚下的旷野里。届时，布棚栉比，彩旗林立，商旅云集，游人如蚁。它成了白族主办的滇西乃至半个中国的物资交流大集市，影响波及国外。

暮春三月，正是洱海四周各族农民农忙前夕。各族农民为作好一年的农事准备，来此出售农副产品和土特产品，选购牛、马、农具以及精美的大理石制品。姑娘们选配嫁妆，老人给儿孙购买玩具，也要到此间来。届时，还有少男少女们不失时机地对唱选伴侣，艺术家们在万头攒动的舞台上表演技艺……

作为集市贸易的三月街，千百年来因天时、地利，总是盛行不衰。明朝著名的地理学家、旅行家徐霞客，于公元1636年，经过长途跋涉，来到苍洱之间，饱览了大理风光，又接连逛了两天三月街，笔下曾如此描绘了当时情景："俱结棚为市，环错纷纭。千骑交集，男女杂沓，交臂不辨。十三省物无不至，滇中诸蛮物亦无不至。"清末《大理县志稿》载："盛时百货生意颇大，四方商贾如蜀、赣、粤、浙、桂、秦、黔、藏、缅等地，及本省各州县之云集者殆十万计，马骡、药材、茶市、丝棉、毛料、木植、磁、铜、锡器诸大宗生理交易之，至少者值亦数万。"新中国成立后，三月街的规模愈益增大。每年省、州的文艺活动绚丽多彩，还举办振奋人心的赛马活动。到时，滇西的白、彝、纳西、藏、苗等各族骠悍的骑手云集苍山脚下赛场，只待号令鸣发，骏马倏忽若飞，越堑跳墙，狂逸突奔。马术技艺，更令观众赞叹不已。

三月街的由来，民间传说与佛教有关。佛教故事集《白国因由》中说，唐代永徽年间，南诏细奴逻时期，观音于三月十五到大理传教，在此讲经升天，白族祖先为纪念其恩德，遂每年来此聚会焚香祭祀并交易货物，逐渐发展成为街期。这是虔诚的佛教徒为弘扬佛教而编造的神话故事，实际此前大理坝区早有集市贸易。

仗鼓舞

仗鼓舞俗称"跳邦藏"，是湖南桑植白族地区人民在喜庆节日中的一种舞蹈娱乐形式。以仗鼓作主要道具。鼓长1.2米，两端内空，大如碗口，用皮革绷衬成鼓；中间细小可握，整个鼓形像根杵。跳时，人数不限，但必须是每三人为一组，鼎足而立，一人执鼓，一人拿钹，一人提小锣。用笛子、唢呐、大号、锣、鼓

伴奏，舞姿变化多样，常见的有“翻天印”、“雷公扫殿”等九九八十一套路。其中不少动作夹带武术招式，灵活多变，动作优美。相传，白族始祖自滇来桑落户时，常受官府和地头蛇欺压。一天，白族兄弟三人在家用杵打糍粑，突然闯进几个自称“公差”的人无理挑衅。兄弟三人顺手用木杵横扫直打，赶跑了“公差”。为了纪念胜利，兄弟三人每年打糍粑时都要手舞足蹈一番。以后经过几代人的加工，终于发展成为集体舞蹈。它是桑植“土家族摆手舞、白族仗鼓舞、苗族猴儿鼓”三朵艺术奇葩之一。

●土家族

土家族人口为5,704,223人(1990年统计),主要分布于湖南省西部，湖北省西部，四川省东南，以及贵州省东部。

土家族自称“毕兹卡”，汉语称为“土家”，意为“本地人”。土家族有自己的语言，土家语属汉藏语系藏缅语族，语支未定。大多数人通汉语，只有湘西的永顺、龙山、古文等聚居区，还完整地保留着土家语。无文字，均用汉文。

土家族宗教信仰以民间宗教（信鬼神、崇拜祖先）为主。过去普遍信仰土王，各村寨都设有土王庙，又叫摆手堂。

西兰卡普

西兰卡普是土家族著名的民间传统工艺，又叫土家织锦，土家语称西兰卡普。

相传一个会织土花被面的土家姑娘名叫西兰，她织的花散发出阵阵芳香来，惹得蜜蜂来唱歌，逗得蝴蝶来起舞。她能织一百多种花。人们为了纪念西兰，便把她编织的土花被面叫做西兰卡普。土家族姑娘出嫁时，每人也都要编织一两床西兰卡普作嫁妆，表示对西兰的纪念。

西兰卡普是以红、蓝、白等色棉线作经线，依据各人的不同爱好，选择各色棉线或者丝线作为纬线，通经断纬、反面挑织而成。西兰卡普的全部编织工序都是织锦姑娘靠着一双灵巧的手，用一只牛骨挑针，在古老的木质斜形腰机上操作完成的。据说，土家姑娘编织的传统的西兰卡普图案，有近200种之多。中国工艺美术大师、西兰卡普传人、土家族民间工艺老艺人叶玉翠在70多年的编织生涯中，除了自己创新的图案外，织过140多种传统图案。我们现在能见到实物的传统图案还有120余种。图案中有表现动物的石必（小野兽）花、猴手花、马必（小马）花、阳雀花、蛇皮花、蝴蝶花、野鸡尾花、狗牙齿花、猫脚迹花等，这些花纹图案，体现了土家人“围山赶仗，见者有份”的遗风和对集众赶仗的缅怀；有源于各种植物的梅花、荞子花、韭菜花、苞谷花、玫瑰花、金勾莲花、八角香花、梭罗花、牡丹花、菊花；有取材于常见的家庭用具的桌子花、椅子花、粑粑架花、棋盘花、神龛架子花、豆腐架子花等，它反映了衣食住行、起居饮用的器皿家什在土家人民生活中的重要性，仿佛散发着土家人的糯米粑粑、油炸豆腐和苞谷烧酒的芬芳；有表现民族民间风情的迎亲图，它把

花轿、新娘、媒人、督管、送亲客、打旗帜的、打溜子的、吹唢呐的、搬帐子的、抬嫁奁的等等，全都活生生地表现出来；有反映民族政治历史的“四风抬印”、“土王五颗印”等图案，与民族族源的神话密切相关；也有反映姑娘爱情生活的“喜鹊闹梅”、“凤穿牡丹”、“荷花鸳鸯”等；还有直接受汉文化影响，表现民族文化交流的“福禄寿喜”、“鲤鱼跳龙门”、“二龙抢宝”、“双凤朝阳”、“长命富贵”、“龙云图”等。

西兰卡普的传统图案造型，风格独特，别具一格。有单一形的连续对称，直线造型，黑白交替，正反相生，象征手法和抽象表现，单一形的演变和深化，小花的适形填空和档头边缘衬托，五色成纹等等。

现在，西兰卡普的图案又有新的发展。许多壁挂工艺品，如“开发山区”、“湘西行”、“摆手节”、“六月六”、“母子情”、“白果花传奇”、“张家界风光”、“北京八景”等，都是采用传统的花色、线条、构图编织的，深受国内外工艺美术界和群众的欢迎。产品由过去单一的土花被面、衣、帽，发展到旅游袋、坐垫、沙发套、电视机罩、壁挂、信插、服装、鞋帽等多种新型产品。这些产品，飘洋过海，远销美国、日本、意大利、泰国、菲律宾等国家；国内的北京、南京、上海、重庆、贵阳、长沙等各大中城市，均有销售，受到国内外广大顾客的喜爱。

西兰卡普是生长在土家山乡的一朵常鲜不败、芬芳扑鼻的民族工艺之花！

土家服饰

土家人的服饰，据《永顺县志》记载：“土司时，男女服饰不分，皆为一式，头裹刺花巾帕，衣裙尽绣花边”。男女服饰稍有区

别的地方是：男衣少花边，女衣多花边；男裙较短，女裙较长。男女都穿对胸上衣和八幅罗裙。

“改土归流”以后，土家族男女服饰逐渐有了区别。男人穿的上衣叫琵琶襟，衣领不高，衣袖宽大，扣虽在胸前，但不是对胸，而是曲折形，似琵琶，故称琵琶襟。安铜扣，衣边镶布条。妇女上衣叫银钩，有衣领（矮颈）；衣襟、袖口缀有一条宽青边，青边后面再等距离地贴两条五色梅花条。一般以蓝布作上衣，显得庄重、大方、美观。男裤一律是青蓝布作裤身，白布作裤腰。裤脚口边约6厘米处有两条布作装饰。女裤除裤腰是白布外，裤身分上下两节：上节为蓝布或青布，膝盖左右两边有挑花图案；下节为青布或蓝布裤脚，距裤脚口约20厘米的地方，有一条花边。

男女头上都包丝帕，男人和姑娘包“人”字形；已婚妇女因梳发髻，插有金银首饰，则包“锅螺圈”。有的姑娘则为长辫子，捆起红头绳，吊在背后。中青年妇女都喜欢穿绣花鞋。男人一般穿青布鞋。

妇女的首饰有，耳上有银质耳环，形似“瓜子”、“灯笼”、“单环”等；手腕戴有银质或玉石手镯；手指上戴有“三镶戒”、“一颗印”、“单股子”等银质戒指；胸前挂的“牙线子”、“扣花”，上系有银链、银牌、银铃、银牙扦、银珠子等一串；头上插有多种银花、宝针。这些首饰既是富有的象征，也是美的标志。

儿童的服饰主要表现在帽子上。根据年龄大小、季节炎凉来确定戴不同的帽子。一般是春秋天戴“紫金冠”，夏季戴“冬瓜圈”，冬季戴“狗头帽”、“鱼尾帽”、“风帽”。帽子上用五色丝绒绣“喜鹊闹梅”、“凤穿牡丹”、“长命富贵”、“福禄寿喜”等花鸟和字样；帽子的正前面钉上“大八仙”、“小八仙”、“十八罗汉”等银菩萨；帽顶和帽后钉上银链吊的银牌、银铃。小孩手腕上不论男女都要戴银手圈，银手圈上还吊有空心银锤和银铃。大人背着

小孩去拜年或吃喜酒，一路叮叮哨哨的铃声，清脆悦耳，欢快异常。

妇女围围裙

土家族妇女一般都在胸前围一围裙，姑娘一般不围，这是出嫁与未出嫁的区别标志之一。

围裙主要有银链挂在颈上的，有扣绊扣在外衣颈上的，即挂式、扣式两种。围裙用蓝色或青色的土布做成，和外衣一样长短，大小合身，围齐腋下，两边安一带子，捆在背后。围裙上有挑花。土家妇女用白线在蓝衣或青衣上面挑出各种各样的花草图案，布局对称、均衡，构图精致，美观大方。

相传有一个土家姑娘非常聪明伶俐，嫁给一个老实憨厚勤耕苦作的青年。一天一个骑马人遇到这位青年人在挖土，便问道："挖土哥，挖土哥，一天锄头落几落"。青年答不上来，回去问妻子，妻子教他如何答问。第二天，当骑马人再次问起"锄头落几落"时，挖土哥则反问道："骑马哥，骑马哥，一天马蹄落几落？"骑马人十分惊异，于是问及原委，青年一一照实说了。骑马人告诉他，我明天到你家来作客，要你妻子给我做"七样饭"、"十样菜"，拿出"原生碗"、"空心筷"来招待我。青年回到家里，一五一十地对妻子说了。妻子说："你接那骑马人到家里来作客好了，我会按照他的要求款待他的。"骑马人按时来到他家里，吃茶之后，妇人摆出一碗鸡蛋妙韭菜，一钵绿豆饭，木碗蓼竹筷款待。骑马人一看，正是他说的"七样饭"、"十样菜"、"原生碗"、"空心筷"，边吃饭，边夸道："大嫂聪明贤慧，才智过人"。在辞别他们夫妇时，骑马人留下三尺布做围裙。后来，围裙既是媳妇的标志，又是妇女才智的表现。

糖馓和粑粑

无论你是常年往来的亲友，还是素昧平生的客人，到了土家乡里，人们都会热情款待。平常一般都是酒饭相待，逢年过节则是别具一番风味和情趣。首先用大碗给你泡一碗糖馓，以示土家生活甜美。接着烤两个粑粑给客人，并取一碗蜂蜜或白糖，摆在客人面前，请客人用粑粑蘸糖吃，这不仅是生活无比美好的反映，也是土家亲友幸福团聚的象征。

糖馓是选用上等糯米制成的。先将糯米蒸熟，在固定的模型里，压成厚薄均匀、大小适度的块状，让其阴干，不可暴晒，然后放在油锅里一炸，便成为一张又脆又香的糖馓，因其为圆形，故有人又叫它为团馓。吃时用开水冲泡，味道甘甜鲜美；因是油炸而成，非常酥软，老少皆宜。糖馓也可以吃干的。刚炸出来的糖馓，芳香扑鼻、脆酥爽口，大人小孩都很爱吃。土家人娶亲嫁女，起屋上梁，看月子，拜年，都兴用糖馓作礼物。有的用染料在团馓上画上红色或绿色花纹，写上“福禄寿喜”、“长命富贵”、“万事如意”等字样，以示祝福，既美观大方，又情深义重！

土家人每到过年时节，都要打糯米粑粑。其做法是先将糯米洗净，泡上一两天，再滤干蒸熟，盛在粑粑糟内，用锤打烂，捏成大小均匀的坨子，压成圆形。待阴干后，泡在坛子里，十天半月换一次水，这样，可以放到端午节，经久不坏。有的在打粑粑时，将豆粉包在中间，然后用油炸，这种粑粑脆香松软，却不腻人，非常可口。平时粑粑内包豆粉或猪肉，再在锅内蒸熟，也是一种很好的食品。土家人为儿子定亲或走亲拜年，一对大如明月的大粑粑是不可少的。这也是团圆的象征。招待客人，有时把粑粑切成小块和甜酒一起煮着吃，也别具风味。

咂酒和镰刀肉

土家人是好客的，宴请贵宾以“大碗喝酒、大块吃肉”为盛情，而以“小杯喝酒、小块吃肉”为小气、吝啬。很早以来，土家人款待宾客的最高礼节是请吃咂酒和镰刀肉。

咂酒的做法是，用糯米掺小米，或是高粱掺小米，蒸熟拌上甜酒曲，酿成甜酒，然后将酒分别装在几个不大不小的坛子内，密封窖入地下即成。家中来了客人，取出一两坛，用竹管插入坛中，宾主先后吸其汁。随着客人的酒量大小和喜饮浓淡的程度而定，边吸边掺开水（夏天掺凉水），直到喝尽为止。土家人酿的咂酒，味浓、醇香、甜蜜、爽口，非常逗人爱喝。由于喝得有味，加之主人相劝，客人往往不知不觉地醉倒。

镰刀肉是将肉切成大块，形似镰刀而得名。主人先将猪肉煮熟，然后切成一块一块，再炒几下，刚炒出油则酌点酱油，放点胡椒粉等佐料，即刻用大莲花碗盛装。猪肉像搭桥一样横跨碗上，冒出两头。从未到过土家人家里作客的，一见这镰刀肉，在筷子上一闪一闪的，常常胆怯三分，不敢轻易动筷子。镰刀肉，看来吓人，其实味道鲜美，肥不腻人，瘦不扎牙，落口消溶，芳香扑鼻。无论是腊肉，还是新鲜肉，其味总是清香可口，逗人爱吃。土家文人《竹枝词》对咂酒和镰刀肉这种古老的饮食习俗和宴宾美德曾作了形象的描述：

蛮酒酿成扑鼻香，
竹竿一吸胜壶觞；
过桥腊肉莲花碗，
大妇开坛劝客尝。

木屋吊脚楼

土家人多居住在依山傍水的山区。这儿崇山峻岭，森林密布，木材资源丰富，修屋可就地取材。用珍贵的楠木作柱头，千年不朽，故土家人多修建木房居住。一般是一家住一栋房屋。按人口和经济条件，房屋有大有小：小的有三柱五棋（三根柱头，五根棋筒为一排）连三间的，稍大的有四柱七棋连五间，或五柱五棋连五间。大富人家修建的有七柱九棋、七柱十一棋连五间的和四合天井的大院。

木屋的建筑工艺，结构美观。大挑扬起，笼檐低垂，恰似藏龙卧虎，昂首挺胸，气宇轩昂。根据土家人的习俗："要得发，不离八。"每一栋房屋的空间——长、宽、高，都要有一个"八"字，如三柱五棋连三间的房屋，开间一丈四尺八寸宽，进深一丈八尺八寸长，空间一丈六尺八寸高。

正屋的座向一般是背山面水，坐北朝南，或坐南朝北。正屋中间的一间叫做堂屋，后壁供有"天地君亲师位"的祖先牌位，专作祭祀祖先、婚丧嫁娶等红白喜事待嘉宾之用。堂屋左右两间叫"人间"，是饮食起居的地方。"人间"又以中柱为界装上板壁，分为前后两小间。后面一间作卧室，前面一间作伙房。伙房间内，设1米见方的一个火坑，四周用青石板作火坑岩，镶嵌得紧紧的，不漏灰、火。火坑中架一个"撑勾儿"，即三脚架，作煮饭、炒菜时架鼎罐、锅用。火坑上面一人高处，从楼枋上吊下一架木炕，是供烤腊肉和烤湿物用的。父母住左边"人间"，儿媳住右边"人间"。若有两兄弟分了家，兄长住左边"人间"，小弟住右边"人间"，父母住堂屋神龛后面的"抱兜房"。不论大小房屋都铺天楼板，分板楼、条楼两种。卧房上面是用木板铺的板楼，可放各种

物件和装粮食的柜子、桶子等；伙房上面是用木条或竹条铺成有空隙的条楼，可放需要烘干的各种粮食或者瓜类等有关物品。堂屋的大门和“人间”的窗户，多装格子，或雕花草，或做成“万”字格。房屋装好后，四周用桐油油过，既防腐防虫，又光亮美观。

在正屋的两头，一头建一名为“马屁股”的屋，一头接个偏屋。在“马屁股”这间打灶，红白喜事在灶上蒸饭炒菜，也可安碓、磨。在偏屋里设猪牛栏、鸡鸭舍和厕所。较为富裕的人家，则在正屋两边配厢房或吊脚楼。厢房又叫横屋，分上、下两层，下层作粮仓和安碓、磨，上层作书房、客房。吊脚楼比较精巧，楼有飞檐、楼台、走廊。飞檐彩格，楼角高翘，楼台腾空，楼脚似吊，故谓吊脚楼。楼上一般作姑娘楼，是闺女们用腰机编织西兰卡普（土花被面）、绣花、绩麻、做鞋等活动场所，也是主人陪客人乘凉聊天的地方。楼下则作猪牛圈、厕所等用。

吊脚楼是这家房屋气势、风格的标志，也是房主勤劳致富的象征。故有的正屋两边也都配吊脚楼不配厢房。不管修吊脚楼有多大的难处，木匠师傅总是把它修得十分壮观，给人一种优美、舒适的感受。木匠师傅也以建吊脚楼显示技艺而自豪。

这种木屋吊脚楼，在土家地区，村村寨寨到处可见。

婚礼陪哭嫁

过去，土家族的婚姻，在“改土归流”以前，一般来说是自由择偶。只要男女双方互相爱慕，经“梯玛”（巫师）作证，便可成亲。婚礼仪式是十分庄严的；告祖礼、庙见礼（夫妻拜堂）都是在供有八部大神的祠庙里进行。“改土归流”之后，土家族与汉族的交往渐多，除经济、文化交流外，也相互通婚，因而土家族

的婚姻礼仪有了很大变化，于是有求婚礼、定亲礼、拜年礼、送日子礼、戴花酒礼、拦门礼、告祖礼、堂见礼、拜茶礼、送高亲礼、回门礼等。

求婚礼。男方家长或本人看中了某家姑娘，便请媒人到女家去求婚。媒人拿一把伞，表示团圆，也是做媒的标志。同时，媒人从男方家拿一块1公斤多的猪肉作为“手行”（礼物）。媒人第一次去女方家，女方一般不收“手行”。第二次去，女方若收下了，这门亲事便有了八成的希望。若是仍不收“手行”，那么，媒人也就不用去求了。当女方收下“手行”后，媒人再登门求亲，女方一般都会同意这门亲事。

定亲礼。男方备办礼物、衣服，由媒人率人送去，然后将女方的生辰八字写在纸上，交给媒人带给男方。

拜年礼。定亲后，正月间，择双日，男方向女方拜年。除主要给女方送猪腿、糍粑、糖馓、酒、肉等礼物表示敬意外，还要给女方的伯伯、叔叔每家各送去一只猪腿表示谢意，女方则以两双或四双布鞋和礼钱作为回礼。如果男方要求当年结婚，则送一只有猪尾巴的猪腿。女方同意结婚，将猪尾一起收下；如不同意则将猪尾巴割下，退给男方。

送日子礼。女方同意结婚，这时男方便选择结婚日期，一般都选择秋冬季节。男方将日期通知女方时，要送去一定的礼物，这就是送日子礼。结婚前一两个月或半个月，出嫁姑娘就要哭嫁。开始隔一夜哭一次，婚期越近哭得越多，每夜都哭。这期间，全寨同族的姊妹和伯娘、婶娘都要前来陪哭，谓之“陪哭嫁”。同时，家族都要准备一顿丰盛的饭菜，宴请出嫁的姑娘，叫作“陪嫁饭”。结婚前夕，出嫁姑娘哭一夜。

土家姑娘哭嫁的仪式，有对哭、群哭、顺哭、间哭等。对哭即一个人陪出嫁姑娘哭。群哭则是一群亲友或姑娘姊妹陪出嫁姑

娘哭。顺哭就是从老到少，从大到小，一一陪出嫁姑娘哭。间哭就是不按辈份大小谁到谁就陪出嫁姑娘哭。这些就是土家姑娘哭嫁仪式的独特性，与其他兄弟民族的哭嫁有很大区别。

戴花酒礼。男子“圆礼”（送彩礼）将新娘的衣服、丝帕、袜子、金银首饰等送往女方之后，出嫁姑娘梳头装新，戴簪花首饰，故谓之戴花酒礼。这天，女方将嫁妆整整齐齐，井然有序地摆在堂屋中，亲友都前来送礼祝贺。新娘打扮一新，花枝招展，在室内迎接招待亲友，在闺房同姑娘姊妹一一哭诉衷情，以哭代歌，相互规劝和祝福。

拦门礼。当男方娶亲队伍到达女方门前时，女方摆一香案，陈设酒肴，点燃香烛，阻止娶亲队伍进屋，故谓之拦门礼。这时，男方的督管先生与女方的拦门先生互相司礼后，唱拦门歌，相互盘答。盘唱的内容有关于婚姻和酒的来源、历史传说、民间故事等等。男方督管先生唱输了，则从香案下钻过去，再撤走香案；女方拦门先生唱输了，则搬开香案，表示失礼。然后，请娶亲队伍进屋休息，坐席开餐。这天晚上，女方亲友中的姑娘和男方娶亲来的小伙子，则通宵不眠，还要进行“抹黑”活动。男方家的小伙子被姑娘们抹黑的越多，说明被女方姑娘看得起的越多。

告祖礼。男方发轿娶亲的那天晚上，举行告祖礼。就是把儿子成家立业、完婚之喜，报告祖宗。由于告祖礼程序多，所以往往要进行到深夜。告祖结束后，款待告祖人员和前来贺喜的亲友。这时从亲族中选几个未婚兄弟同新郎饮酒，互相敬劝，各表其情，尽兴而散。

堂见礼。迎娶新娘来到男方后，举行堂见礼。由一位夫妻双全、子孙满堂的妇女把新娘从轿内牵出来，同新郎在祖先位前祭拜祖先，俗谓拜堂。

拜茶礼，又叫“请大小礼”。新婚第二天，新郎新娘请前来贺

喜的客人们吃糖茶，故叫拜茶礼。从母系亲属开始请起，接着请父系族长，从姨表到姑表，从直系到旁系，按辈份大小都一一请到。新郎新娘敬奉一杯糖茶给长辈和兄嫂，吃茶的长辈和兄嫂则要发给“封包”（礼钱）。

送高亲礼。新婚第三天，早餐后，喜事结束，女方亲人也要回去了。这时，新郎则从大门到大路上三五次的鞠躬送行，女方亲人则打发“封包”。

回门礼。宾客散尽后，新郎和新娘背一些酒肉糖食果饼之类的礼物一起到新娘家去拜会女方父母，谓之回门礼。到了娘家，吃一顿饭后，新娘新郎又返回来。回门礼表示今后亲戚之间要常来常往了。

孝　歌

土家族的老人去世后，由长子或长女（无儿女者派侄女或其他晚辈）到水井里取一罐新鲜水，烧热后给死者洗澡，然后穿上寿衣和大红寿鞋，腰上扎一捆白线（按死者享年计，一岁一根），尸体放在门板上，脸覆盖着数张“钱纸”，胸口放一只鼎罐盖，脚边点上清油灯。棺材放在堂屋正中，从七至九户邻居家中取来火灰撒在棺材内，再铺上一层草皮纸后入殓，待亲友看过后再密封。

灵柩一般要停三至七天，白天请道士念经。这几天内，择一吉日为“大葬日”，杀猪宰羊祭奠死者，举行丧礼。晚上，凡属正常死亡的就组织唱孝歌，行家礼。孝歌内容很多，大都是歌颂死者在世的恩德，借以表达对死者的悼念。土家人称丧事为“白喜会”。老人登仙而去，当然是喜事，是百年好事。但非正常死亡的要请道士来超度亡魂。

阴阳先生选好坟地。在举行大葬礼的第二天，灵柩上山，亲

友送葬。抬棺出门，沿路要丢“买路钱”（纸钱），经过人家门口要放一个火把。灵柩边走边用“子孙棍”（竹杆上捆七至九节钱纸）敲打棺材盖，道士敲打着送葬锣鼓，抬丧者将灵柩送往墓地。

灵柩抬到墓地，下墓井前，由道士在井内用小米画上八卦，雄鸡冠血画佛，洒雄黄酒，棺材方能入坑。再由孝子跪在棺材上，首先挖三锄泥下坑，挖一锄，喊一声：“爹（或妈），你转来！”然后众人推土下坑，搬石砌好坟墓。坟上要插一把纸伞，一根“子孙棍”，倒放一只畚箕，插上已出嫁女儿和侄儿们送的“活乐伞”（纸扎的，如花圈），做好坟堆后，再放鞭炮，表示安葬完毕。

此后，死者家属们要向新坟连续送三夜火把，满“三朝”后，还要带上酒和“刀头肉”到新坟上“捉魂”，将蜘蛛和其他小虫捉来放进纸筒内封好，拿回家供在神龛上，表示亡人已到祖先神位上，同历代祖先们一起生活了，现在这种古老葬俗逐渐绝迹。

娘家看月祝米酒

土家族有一种娘家看月，吃祝米酒，或叫“打十朝”的习俗。当妻子分娩后，丈夫要抱一只鸡去丈母娘家报喜。生男孩就抱公鸡，生女孩就抱母鸡。丈母娘一见“喜鸡”就知道是添了外孙儿还是外孙女。

吃祝米酒，是一种古老的习俗，一般是第一胎比较隆重。婴儿外婆家得到喜讯后，便准备礼物。到了婴儿出生后的第十天，男方准备“打十朝”，女方的亲属便去“看月”，男方的姊妹们也要来吃祝米酒。外婆家除了送去10只鸡，120个鸡蛋，一挑甜酒，一架抬盆（四格分别装米、粉、面、肉或糖等）外，还要送去木制摇窝、西兰卡普被盖、衣裤、帽子、鞋袜等，表示关怀，其余亲友则送去甜酒、鸡、蛋、米等物，以表示祝贺。

吃祝米酒一般是女性前往，男性成员送去礼物当天便回家。客人一般住一天两夜，才各自回家。外婆则要留下来照顾坐月女儿的产期生活，待婴儿满月后，便把女儿和新生婴儿接回去住十天半月，谓之出月。临行时，由丈夫背着孩子护送，同时，送去一些酒肉作礼物，答谢丈母娘。

婴儿出生后，第一个到家中来的人叫“踩生人”。据说踩生人将自己的福份分给新生儿一份，因而产妇家对踩生人必须以甜酒煮鸡蛋，烧酒和腊肉等佳肴热情招待。由婆婆抱来刚出生的孙子给踩生人看望。踩生人则说些“大发大旺”、“大吉大利”、“长命富贵”、“易养成人”等吉祥的话语，表示对主人和孩子的祝福。

祖先崇拜

土家人认为祖先是时时刻刻关顾子孙、处处事事保佑后代的最好的神。因此，对祖先十分尊敬。土家人堂屋的神龛，就是他们家中祖先的神位。初一、十五日装香小敬，过年过节要大敬。有的在吃饭时，用筷子夹点菜在饭碗内把筷子插着，静默几分钟，表示对祖先的敬意。不论在自己家中或者别人屋里都如此。整个土家族的祖先是“八部大神”，又叫“八部大王”。八部大神即八个部落的酋长，死后祭祀为神。在永顺县的老司城、龙山县蹄寨等地都建有“八部大王”庙，是摆手节盛会群众祭祀游乐之处。过年时人们背着猪头去敬奉，跳摆手舞时抬着整猪（杀死修好毛的）去敬奉。轮到哪一族姓的人祭祖时，就由这一族人中德高望重的长者主持。仪式非常隆重、肃穆。在长者率领下，这一家族的男女老少，将各种祭祀物品，如猪头、猪肉、糍粑、糖馓、豆腐、五谷、家禽、野禽、野兽和酒饭等，抬的抬，背的背，高举着龙凤旗，身披着西兰卡普，一路锣鼓喧天，鞭炮轰响，来到摆

手堂祭祀祖先。先由长者奠酒，高唱“社巴歌”（民族史诗），举行三拜九叩大礼，然后跳摆手舞。连续三天的祭祀，规模宏大，气氛热烈。

相传土家族先民在长途迁徙中，为了民族的生存，经过千辛万苦，不畏艰难险阻，从常德（古代朗州）溯沅江，经酉水到达灵溪，在武陵山区定居下来，开创家园。先民教育后代，不忘祖先恩德，故一年一度祭祀祖先的活动，就成为后代对祖先感恩报德的虔诚之礼。

见者有份

每当农闲季节，或野猪等野生动物为害时，土家族即群集一起围山打猎，谓之“赶仗”或“赶心”、“撵肉”。这是一种保护庄稼辅助生产的活动。

每年从正月初一起，就开始赶仗。赶仗队伍有严格的组织分工，查脚迹的是少数懂得野猪、麂子生活习性，会侦察野兽行径的老人，他们负责侦察、判断野猪等活动地区并划分包围圈；守网壕的是熟练猪网技术的人，守壕口上的猪网。“赶心”的人进入包围圈内，带上猎狗、猎刀大喊大叫地搜索，将野兽惊动出来，让猎狗追赶撕咬，赶心者碰上就打，跑到卡子上就毙，跑到猎网中就杀，使野猪、麂子等无路可逃。野猪等猎物倒地之后，谁先到近前谁就连喊三声“啊——喂”。大家知道猎物已获，就从四面八方赶到野猪倒地的地方，清点到场人数后，就把猎物抬回家。一路上鸣枪放炮，齐喊“啊——喂”！在赶仗活动中，大家都自觉地遵守祖传下来的规矩：在山里不得取走他人的猎具；不准私取他人猎物；两伙人在山中赶仗，不约而遇，这伙人打死另一伙人追赶的猎物，猎物两伙人平分。分配猎物的原则是：除炮手可以得

兽头、皮、血口肉以示奖赏外，其余都严格遵照“围猎赶仗，见者有份”的原则，实行平均分配，显示出原始社会平均分配的遗风。

过去，土家人赶仗前要敬媒嫦神。相传媒嫦是一个勇敢无畏，善猎著称的女猎手。有一回，老虎窜进寨子咬人，媒嫦便与老虎拼搏，她骑在虎背上，拳打脚踢，老虎受了惊吓，狂奔乱跳，媒嫦紧紧地抓住老虎的耳朵不放。等人们前来相助，老虎已奔进森林，当人们在深山中找到媒嫦时，她已奄奄一息，在她身边躺着一只死虎。她死后，土家人崇拜她为猎神。在土家族民间舞蹈中有表现媒嫦与虎拼搏的壮烈场面的媒嫦舞，在土家族乐器咚咚喹的曲牌中，也有怀念媒嫦的曲牌——媒嫦曲。

薅草锣鼓

薅草锣鼓是土家生产习俗。

薅草锣鼓有的叫“挖土锣鼓”，有的叫“打闹”或“薅草鼓”等。因各地唱的歌不同，音响乐器不同，故有“文锣鼓”（锣鼓、钹、马锣）、“武锣鼓”、“爽锣鼓”（两套锣鼓加唢呐）之分，唱腔则有高腔、平腔之别。

土家人长期生活在大山中，山多田少，开垦荒山挖土，薅草保苗是主要劳动，为了防止野兽破坏生产，由驱兽而形成的一种组织劳动、指挥生产的方式，发挥鼓舞劳动热情、娱乐心情、提高功效的薅草锣鼓，世代相传，成为土家劳动生产的重要组织形式。

薅草锣鼓一响，歌师就唱引子，接着请神，请天地日月神、五方五位神、八部大神、彭公爵主、向老官人、田好汉，还有土地神和歌娘歌爷等，将人们的期望寄托于神灵的保佑与守护，唱出

人们的愿望和夺取丰收的理想。歌师在请神之后开始唱扬歌，也称主歌。扬歌有固定的唱本，也有即兴而歌的作品，内容十分广泛，有“洪荒歌”，即洪水神话、“白果姑娘”、“东山哥西山妹”，还有外地传入的民间故事，如汉族的四大传说：《孟姜女》、《白蛇传》、《梁山伯与祝英台》、《七姐下凡》等等。这些故事都已“土家化”了，如《梁山伯与祝英台》中把祝英台说成了土家姑娘，她是土家少女的打扮，而且是土家少女中织土花铺盖（即西兰卡普）的能手。这样就给劳动者以亲切的感受和真实感，如见其形，如闻其声，劳动起来就会忘记疲劳，更加有劲。扬歌还唱以劳动人民苦难生活为题材的歌，如穷人苦歌、长工苦歌、单身苦歌。扬歌有时也用盘歌形式，盘问天文地理、历史人物，既是以喜怒哀乐来娱乐和陶冶人们的心灵，又给人以历史和生活的知识，唱者有趣，听者有味。扬歌还唱当时劳动情景和场面，赞扬那些劳动认真下力的人，规劝那些马虎懒惰之人，这就起到组织生产指挥生产的作用。

当一天劳动快结束时，对请来的神灵都要表示送行，在烧香、化纸、奠酒之后，唱送神歌。

《永顺县志》中有描述薅草锣鼓的《竹枝词》：“金鼓喧闹薅草苗，歌声意切语声嘈，新词最爱孟姜女，不识红牙又绿么。”“赶山薅草上山坡，一片歌声夹鼓锣，唱了桃园三结义，放工又唱送神歌。”

建国后，薅草锣鼓的习俗在土家族聚居区仍盛行不衰，在春耕夏耘的季节里，到处可以听到薅草锣鼓的高昂歌声。

过两次年

土家族的年节是农历腊月二十九到三十两天。若是腊月小，则

是二十八和二十九两天过年，叫做“过两次年”。为什么过两次年呢？相传古时，有一年土家族正在喜迎“团年”，却传来敌人要攻打的消息，土家先祖聚集一起，共同想了一个将计就计的办法，悄悄地杀猪宰羊，将杀好的猪羊收藏在门角落里，用蓑衣盖着，提前一天团年。团年后，土家先祖约定鸡叫出发，埋伏在山峦之间以守为攻。第二天敌人果然来攻，土家人以逸待劳，一鼓作气，冲下山峦，一场恶战拼杀，把敌人杀得落花流水。土家先祖凯旋回寨后，一来为庆贺胜利，二来又值团年正日，人们决定再次团年。这就是过两次年的来历。

土家族过年是非常隆重而热闹的。年前半月就赶集采购糖食果饼、墨鱼海带、香烛纸草、灯笼爆竹。家家户户扯布缝新衣、做新鞋、杀年猪、推豆腐、打粑粑、做香肠、贴对联。“一声爆竹送旧岁，两杯美酒迎新年”。团年先敬奉祖先，并吃坨子肉和合菜。这坨子肉和合菜，也有个来由。据说土家祖先要打仗，来不及把肉切细，菜也不能一样一盘的炒，只能把猪肉砍成大块大块的，拌上小米和灌肠、香肠一起蒸在米饭上，谓之蒸肉块子；炸豆腐、粉条、胡萝卜、白菜一起炒；猪下水、墨鱼、海带放进鼎罐一起熬。这就是团年时饮酒吃饭必备的坨子肉和合菜。由于当时切碎的姜、葱、蒜没顾上炒，只好在吃饭饮酒时临时洒在合菜上。因为先祖第一次年是提前过的，怕走漏风声，把大门关严，静悄悄的，所以直到现在，团年吃年夜饭时，还不准小孩大声说笑。土家人过第二次年时不吃蒸饭吃煮饭，不吃蒸肉而吃炖鸡。传说土家先祖打胜仗归来，因提前过年把猪肉都吃光了，只好杀鸡摆宴，庆贺胜利，再次团年。除夕夜，家家户户都要烧一节大柴蔸，约一两米长，烧到正月十五，谓之烧年火蔸。年火蔸越大越旺，来年的猪越大，日子越兴旺。全家要老少围火守岁，彻夜不眠，谓之守三十夜。据说这也是为了打仗防备敌人偷袭传下来的习俗。当姐

妹们守岁，讲故事，猜谜语，备办炒花生、葵花子时，兄弟们则一个拿刀，一个拿一碗年饭，到果木林和竹林里给果树喂年饭。拿刀者砍一刀，问一句，拿饭者在刀口上喂几粒饭，答一句。问答多是“结不结?”“结!”“大不大?”“箩筐大!”“甜不甜?”“像蜜糖!”“掉不掉?”“掉不了!”到了竹林，一个用刀敲竹，一个洒饭，边敲边洒边说：“发笋子！发笋子!”这是一场十分有趣的活动，青少年多爱争先去做。当鸡叫的时候，守岁的人们，立即燃放早先准备好的爆竹，并高声呼唤：“青龙是我的!”这是土家人的“抢年!”传说一村一寨之间，哪家的爆竹最先燃放，他家来年五谷丰登，人财两旺。

故都老司城

在土家族发展的历史上，湘西的老司城曾是土家族政治、经济、文化的中心。“五溪之巨镇，漠漠之边城”，都是指土家故都老司城。南宋绍兴五年（公元1135年），溪州第十世土司彭福石建立城池，故又名福石城。老司城俗有“城内八百户，城外三十家”，老百姓“只准买马，不许盖瓦”和“土司王宫盖青瓦，百姓房屋盖茅草”的传说。这里苍松翠竹遍布山冈，大河小溪纵横交织。古代渔猎繁盛，近代农桑发达。灵溪河两岸樟楠掩映的古城和松竹笼罩的山寨，互相陪衬，显示着它的昌盛与繁华。它经过了32代土司的苦心经营，有近600年的历史。土家诗人彭施铎的《竹枝词》描写了它的盛况：“福石城中锦作窝，土王祠畔水生波，红灯万盏人千迭，一片缠绵摆手歌。”

祖师殿是老司城最古老的建筑，前临“碧水灵溪”，后依“罗汉晒肚”，左有“插帽金花”相衬，右有“苍松翠竹”点缀。它与玉皇阁、藏经楼、皇经台等古建筑连接在一起，宏伟壮观。祖师

殿建于五代后晋天福二年（公元937年）。明嘉靖年间，彭翼南率领“土兵”抗倭凯旋归来，又修缮一新。正殿柱粗数围，上架木椽处无斧凿痕迹，民间传说为鲁班师傅显圣所致。该殿为双檐歇心顶，都是木料结构，无铁钉。34根柱头落地，支撑梁木，柱榫承接是一斗二开和一斗三开的斗拱承鼎，平单层檐。结构奇特的梁架，古朴别致的斗拱，凝聚着土家工匠的智慧。1959年，湖南省人民政府将祖师殿列为第一批重点文物。

坐落老司城中心的彭氏宗祠，为明万历十九年（公元1591年）溪州第26世土司彭元锦督建，清顺治九年（公元1652年）重修。这座宗祠建筑，斗拱飞檐，青瓦盖顶，木楼相衬，格外美观。如今，它已成为土家人民文化教育活动的中心。在这里，老司城小学哺育着一代新人。逢年过节，张灯结彩，身穿琵琶襟、银钩等绚丽的民族服装的男女老少，从四面八方汇集而来，在协操坪上燃起篝火，围成圆圈，跳起欢快、健美的摆手舞，唱起欢乐、幸福的山歌。

翼南牌坊是土家族人民为纪念民族英雄彭翼南和“土兵”抗倭的胜利，于明万历十二年（公元1584年）建立的。牌坊坐南朝北，四柱三门，上刻“子孙永享”四个大字。这是土家族人民为保卫祖国立下的赫赫战功的见证。

老司城除现今留存的祖师殿、彭氏宗祠、玉皇阁、藏经楼、皇经台等古建筑外，有史可查的还有土司城隍庙、八部大王庙、王显祠、玉极殿、崇圣殿、观音祠、将军山祠、圣英殿、关帝宫等。古城中，遗留着层层鳞次栉比的山庄，土寨旁，蜿蜒着红褐卵石铺筑的古道。这千古遗迹，记载了百年盛衰，那断墙残堞，显示出往日雄姿。如今，老司城又成为人们旅游的胜地。

打溜子

在湘鄂川黔四省毗邻的土家族聚居区，普遍流传着一种古老而优美的打击乐，名叫“打溜子”，土家语叫“家伙哈”，又叫“打五子家伙”、“打挤钹”。它用于婚嫁、年节、摆手等喜庆场合，是土家族人民最喜爱的器乐合奏。

土家三大乐：咚咚喹、打家伙、摆手锣。一支溜子队伍由四人组成，能用的乐器有马锣、火锣、头钹、二钹四件，在演奏时，每人各操一件乐器，配合严密，互相照应，相得益彰。

土家人原来把打溜子用于深山围猎，驱赶野兽。相传从前洛峒有两家人在同一天接媳妇，上寨的一家是穷人，下寨的一家是大富人。大富人家把全寨喂的最肥的猪都买来杀了，还把全寨人喊去吃酒。上寨穷人同下寨的大富人家比不得，只得请几个年轻力壮的青年上山“赶仗”。说来也巧得很，这几个人拿着“家伙”上山去赶，一天竟打了两头又大又肥的野猪。他们打起“家伙”热热闹闹地抬回来，并派人把一头野猪送到女方去；另一头野猪招待帮忙的亲友。等到大家酒足饭饱之后，几个年轻人想起赶仗的情形，大家又敲敲打打地聚众而乐。这时给下寨大富人家帮忙的人，老老小小都跑过来看热闹，穷人家里热热闹闹，欢笑不已。第二天，发轿去娶新娘时，穷人家便打着“家伙”，抬着花轿去迎接，而大富人家娶亲却冷冷清清，连抬花轿的人也找不到。从那以后，土家人接媳妇，迎亲队伍中都有一两支溜子队。

溜子曲牌一般由“绞子、牌子、溜子”三部分组成。曲牌繁多，变幻莫测，内容丰富，风格独特，民族色彩和乡土气息浓郁。它既有婚嫁专用曲牌，如《催轿曲·流星赶月》、《拜堂曲·喜鹊闹梅》、《闹房曲·双凤朝阳》等，也有适合年节和摆手节等多种

场合通用的曲牌，如《出门曲·八哥洗澡》、《行进曲》中的《画眉跳杆》、《鲤鱼摆水》、《锦鸡拖尾》等。乐曲表现力强，描写现实生活惟妙惟肖，刻画大自然风光生动形象，模拟各种禽兽的声响，情态栩栩如生。

土家族打溜子代表队曾多次赴京演出，近年来，又在国外演出打溜子，轰动了国际乐坛，为祖国赢得了荣誉。

咚咚喹

“咚咚喹，咚咚喹，咚喹咚喹咚咚喹……”

走进土家山寨时，立刻就会听见一阵阵清脆悦耳的短笛之声，这就是土家族姑娘最喜爱吹奏的“咚咚喹”所发出的美妙的乐音。

咚咚喹是用一节小竹子做成的短笛，竹管上挖四个音孔；靠近节子边，削一气空，竹片削薄似簧片，即可吹奏。

每当喜庆节日或是放牧山野、打猪草、砍柴休息时，姑娘们便三五成群地从山中砍来小竹子，做成一只只精巧的咚咚喹在一起吹奏，倾吐她们心中的欢乐和幸福，歌唱她们的生活与爱情，表达她们的理想和心声。

相传很久以前，有个姑娘叫冬冬，同邻村的一个青年相好，冬冬吹着小竹短笛，小伙吹着木叶，两人互表情意。成亲之后，男耕女织，生活过得甜蜜美满。一天，冬冬的丈夫在耕田时，被一伙官军抓走了，一去就杳无音信。冬冬天天盼望，夜夜思念，她吹奏着短笛，倾诉着喜怒哀乐的情感，吹出了几十种曲牌。过了三年，冬冬因思念丈夫成疾，不治而亡。后来，土家姑娘为了怀念冬冬，就把她吹奏的短笛叫做咚咚喹。

在各种喜庆节日，姑娘们成群结队地吹奏咚咚喹，抒发自己的欢乐和愉快的心情。吹奏的曲牌有《咚咚喹》、《乃哟乃》、《巴

列咚》、《那帕克》、《呆都哩》、《慢巴列咚》等等。在跳摆手舞时，姑娘们吹起咚咚喹作为伴奏，整个舞场里锣鼓喧天，歌声悠扬，笛音清脆，舞步矫健，使人们沉浸在欢乐的氛围之中。土家姑娘也通过咚咚喹的吹奏，向小伙子表达爱慕的心意和感情。

元宵闹花灯

土家人在欢度佳节之际，除了祭祖摆手之外，还要开展多种多样的文娱活动，主要的有玩花灯、打三棒鼓、玩龙灯、舞狮子、采莲船、打团鸡等等，以玩花灯最具特色。

玩花灯的时间是从年三十夜晚开始，一直玩到正月十五元宵节为止。真是寨寨出灯，户户迎灯，每晚都要玩灯，每家每户都要玩到。除本村本寨外，外村外寨也常去玩。

土家花灯由旦角、丑角二人表演。旦角叫“妹妹”，多是男扮女装，扎假发辫，包头巾，穿短围衣，系花裙，右手拿花折扇，左手拿彩巾；丑角叫“哥哥”，反穿皮袄或皮褂，扎腰带，头戴顶子帽，扎裤脚，右手拿大蒲扇。二人在大方桌上或堂屋院坝里，随着乐器伴奏和打击乐的点子旋转唱跳。旦角的舞步端庄、乖巧、秀丽；丑角的舞姿朴实、健壮、诙谐。

花灯的演唱内容非常丰富，唱词浩如烟海，清新优美，主要有《腊月二十九过大年》、《小小花灯初才玩》、《玩起花灯迎新春》、《拜年》、《花灯调》、《闹花灯》、《单身汉》、《绣荷包》、《接郎》、《月望郎》、《十二月鸟名》、《十二月逢春》、《唱十二月》等等。如《腊月二十九过大年》这样唱道：

腊月二九过大年，敲锣打鼓闹喧天。
新衣新鞋人人穿，大人细娃都喜欢。
家家团年坨子肉，合菜熬肉样样全。

饭后打起灯笼玩，山歌唱得心儿甜。

车车灯来彩龙船，狮子龙灯到处玩。

从古没过这样年，只有解放才得见。

除了年三十晚上不唱拜年外，正月初一到十五家家都要唱拜年：

别人拜年拿酒菜，花灯拜年空手来，

热子闹子玩花灯，唱个四季鲜花开。

玩花灯，每到一家，主人以烟茶招待并放鞭炮致谢。半夜时分，玩到哪一家，哪家则办酒席招待玩花灯的人们。这样，花灯往往要玩到深夜。正月十五是元宵节，是花灯收场之日，这天晚上要玩到天亮为止。

摆手节

摆手节，是土家族最隆重盛大的民族传统节日。每年农历正月初九开始，十一结束。开始必须是晴天，如遇下雨或下雪，便顺延下去，但需逢单日开始。土家摆手节祭祀祖先——八部大神（也叫八部大王），也有的村寨是祭祀彭公爵主、向老官人、田老汉。摆手节的祭祀活动一般是由本民族本村寨中德高望重的长辈老人主持。祭祀的仪式非常隆重，气氛肃穆。三天的祭祀程序和摆手舞蹈活动都有严格的规定。参加摆手祭祀活动和跳舞的人数很多，规模宏大。摆手舞的列队是龙凤彩旗在前，接着是主祭人，后面是抬、背各种祭品的，持齐眉棍、长枪、长矛、弓箭、大刀的，扛猎枪的，放三眼铳和鞭炮的，参加跳摆手舞，唱摆手歌和各种文艺表演的。男的无论老少都披“西兰卡普”（土花铺盖），谓之“披甲”；女的穿着民族服装。先在本村一座土地堂前集合，祭祀开始。接着吹响土号、牛角，鸣金击鼓，燃放鞭炮。这时，主

祭人一声令下，扛龙凤彩旗的沿着规定的路线向摆手堂奔跑前进！后面披甲的人跟着奔跑而去。当扛旗的将路拦住后，就在原地休息，待主祭人赶到并举行规定的祭祀活动后，再下令前进。在奔跑前进中，有翻坎、过沟、爬坡、过河等各种艰难险阻的考验，从而培养后代的英勇不屈、顽强战斗的精神。如此反复进行三四次后，扛龙凤彩旗的到达距摆手堂半公里路的地方停下来，等所有参加摆手节的人到齐后，重新列队，浩浩荡荡地走进摆手堂。接着是祭祀祖先。献礼队伍将各种供品按一定规矩陈设在八部大神的香案前，又将围猎、赶仗获得的各种走兽飞禽悬挂在堂内的绳索上，以示敬献之意。在鸣炮奏乐之后，主祭人奠酒，行三拜九叩的大礼，唱《摆手歌》。第一天唱《开天辟地》、《兄妹成亲》两部分，唱完后，带领跳摆手舞的队伍（36 对 72 人）在摆手堂内跳 36 圈。然后在摆手堂前的坪坝上，男女老少，一起跳表现神话内容（《兄妹成亲》）和反映渔猎时代生活的摆手舞。第二天唱《民族迁徙》和《十二月生产》两部分。表演反映生产、生活的摆手舞，不准外族人听，不准外族人看，据说是怕外族人发现迁徙的目标，不利于安居乐业。第三天唱古代英雄的故事，如《将帅拔剑》、《唐亮犬铁》、《鲁力嗄巴》、《书热拔配》等。唱后，跳反映古代英雄业迹的摆手舞。最后，杀头猪，送驾扫堂，把一切妖魔鬼怪赶出去，以保佑子孙免受灾祸。

有的地方还与摆手舞穿插演出《茅古斯》。这是一种原始戏剧，反映原始的渔猎生活，以及后来的娶亲、教书先生的教学活动等，表现了土家人的进化状况。

晚上的活动不固定，有的跳舞，有的对歌，老年人对山歌，互相盘歌，青年男女之间对情歌。还有打溜子、吹咚咚喹、吹木叶、舞龙灯、耍狮子、玩花灯等各种表演。

除此之外，摆手节还有打靶、射箭、打秋千等活动。打靶是

在百步之外，竖一块门板或树桩，作为靶子。青壮年用“啄子火”（鸟枪）射击，看谁的命中率高。少年儿童则开展射箭比赛，距离40米左右，谁命中率高，给一定的礼物奖励。打秋千也是青少年非常喜爱的一种活动。

土家族的摆手节，是土家人民祭祀、跳舞、唱歌、演戏、开展体育竞赛等综合性的群众文化活动。它的目的在于崇敬祖先，教育后代，继承传统，交流经验，促进民族的发展、繁荣和团结。

●哈尼族

哈尼族人口为1,253,952人(1990年统计),主要聚居于云南省红河哈尼族彝族自治州、江城哈尼族彝族自治县、墨江哈尼族自治县，新平、镇源、元江及西双版纳的勐海等县也有分布。

哈尼族的先民，史称“和蛮”、“和泥”、“哈泥”、“阿泥”等，哈尼族自称“哈尼”、“爱尼”、“白宏”等。解放后，根据本民族人民的意愿，以“哈尼”为统一族称。

哈尼族有自己的语言,哈尼语属汉藏语系藏缅语族彝语支,分为3种方言。1957年，创制了拉丁字母拼音文字方案。

哈尼族信仰多神和祖先崇拜。

阿茨古

阿茨古是哈尼族的一种歌唱形式。哈尼族能歌善舞。人们在田野里劳动，或是在山坡上放牧，都喜欢高唱山歌，以歌为乐，调剂身心，消除疲劳。行进在山间小路的过往行人，常常对唱山歌，以减少自身的孤独感。

“阿茨”没有固定的唱词，往往即兴而歌。凡四季天象、农事生产、人情世态、家乡山水、男女爱情等内容皆可入歌。曲调高吭嘹亮，歌词欢快明朗，颇具高原山野情味，给人一种奔放豪爽的感觉。

“阿茨”在哈尼族爱情生活中占有十分重要的地位。它是男女青年表达感情倾述衷肠的最佳方式，人们以此寻求伴侣，选择对象。哈尼族不少恩爱夫妻，都是通过“阿茨”结识的。有一首“阿茨”是这样对唱的。男：“呕喽，对面山上的好姑娘，快把你那红红的脸儿转过来，快把你那清脆歌声丢过来，我们两个来唱唱，我们两个来讲讲。等到月亮升上东山坡，我们就相会在幽静的棕榈树下，别人不会来偷看，我们可以相亲相爱倾诉衷肠。”女：“对面山上的小伙子，你是一颗刚成熟的果子，别忘了哺育你的阳光雨露，别忘了施肥浇水的慈善父母，生活的道路该怎样走，你要多动脑子多想想。我们相会在棕榈树下，应该认真地畅谈畅谈，别人偷看也不怕，你我高兴大家欢唱。”

“阿茨”也可以用缓慢沉着的曲调来吟唱，以表达内心的郁闷和哀伤。有的失恋者常常自言自语，憋闷之时便登山独唱，以减轻内心的痛苦。其中有首是这样唱的：“大雁成群地飞去了，只留下一根羽毛；我走出古老的扎笆门，只留下一点声音。树上的鸽子成双成对，我却象山鸡一样孤单。寨子边的竹啊，开花以后就

死了，我还不如一根竹子，得承受失恋的痛苦。唉！我今生今世白把你爱，白把你爱……”

表达男女爱情的“阿茨”，对唱的时间地点有严格规定，夜幕降临不能唱，村中屋内不能唱。另外，谈情说爱的“阿茨”，同宗异性不能对唱。

贺生酒

哈尼族的婴儿诞生，都要办一桌贺生酒席，招待本寨乡亲。若婴儿诞生时，赶不上当年的祭寨节，次年祭寨节也要补办一桌，婴儿姓名才能被人们承认。

贺生酒席十分丰盛，大多由男子上山打猎，准备各色野味，女人下水田捕鱼捞虾，捉泥鳅，准备若干佳肴。年轻的父母总要准备富有特色的酒宴，希望在乡亲面前显示自己的才能和手艺。

贺生酒一般在农历二月间祭寨神后一天。酒宴从下午三四时开始，一直持续到深夜甚至次日太阳出山。席间把酒引歌互相祝福。长者爱唱创世史诗和民间习俗歌，史诗由一人领唱，众人和声；习俗歌多为合唱对唱。席间还要摆设代表新生儿性别的物品，若是男孩可摆一只小鸟或一只小松鼠，女孩则摆一条鲜鱼或一碗小虾。参加宴席的人看到性别标志物，就知道这家新成员的性别，便以适当的祝福词向孩子的父母敬酒，有些热心人还为孩子取名供父母参考。祝福词即兴发挥多为赞美夸奖孩子父母的吉利语言。如“亲亲的寨人，哈尼的后辈，我今天喝了贺生酒，想到寨中增加了猎手，看到寨里添上了勇士，我的心儿哟，像火塘一样热烘烘的。你们敬的米酒，像山茶花一样馨香，像冬蜂蜜一样甜美。亲亲的寨人哟，我等待着你们把娃娃养大，愿他长得像神树一样挺拔刚劲，教他长得像牛儿一样勤劳温驯。我们等待着，等待着来

年喝他的新婚喜酒。”赞美女婴的词语更加绚丽多彩。在哈尼山寨，贺生酒宴自始至终都充满着欢乐气氛。

莫搓搓

“莫搓搓”是哈尼族带有古风的葬俗，它隆重而又神奇，一般只为正常死亡的高龄男女举行。

准备举行莫搓搓葬礼的人家，老人尚未去世就商定好费用的开支，饲养好黄牛和山羊。在哈尼族观念中，葬礼杀牛羊要比宰杀其他动物荣耀得多，即使是珍贵的禽兽也不能与之相比。

一旦老人寿终正寝，要放土炮三响，向四周村寨报丧。当天，要请人为死者洗澡更衣穿鞋，然后放在堂屋中，两三日后入棺。富裕人家还以银器贝壳之类入棺随葬。灵柩要留在家中三至五个月。留置期间，每天早晚饭前各放土炮三响。每 12 天举行一次隆重的守灵仪式，俗称“莫伤”。“莫伤”时午餐要杀鸡宰羊，请村中男性长辈和外村亲戚到家喝酒吃肉唱葬歌，并留宿一夜“陪丧”。“莫伤”时同宗女子要唱“米刹威”挽歌。当晚，青年男女聚集于丧家房前屋后，吹拉弹唱，跳“落作舞”，直到深夜。

莫搓搓出殡仪式极为隆重，历时二至三天。届时，远方的亲友带着鸡和羊，成群结队地到丧家吊丧。进门即行吊丧礼，然后随主人吩咐分散到村中各家杀牲吃饭。宰杀的黄牛、山羊，一部分供全村人在村中广场上食用，一部分送给村外的亲友。对死者的舅舅要特别优惠。出殡时，丧家要在堂屋中挖开一个墙洞，第一锄必须由舅舅来挖，否则，出殡仪式就不能进行。待墙洞挖好，丧家全体人员和近亲，手扶棺木，哭唱挽歌，前呼后拥，穿过墙洞，将棺木抬出置于房后屋檐下。随后，祭司吟诵古歌和送葬歌，既安慰死者，又激励世人。

祭寨神

居住在滇南哀牢山一带的哈尼族，每年农历二月都要举行一次村寨性的祭祀活动。以村寨为单位，先在寨子后山或侧面山头选择一片葱郁的树林作为神山，在林中选择一棵挺拔的大树作为埃玛（古代护寨英雄）的化身，在树脚下放置一块长1米宽30厘米的石板作为祭台。届时由“咪谷”（即“祭主”）主持祭祀。咪谷由寨民民主选举产生。当选为咪谷的人必须德高望重，一身清白，儿孙满堂。

祭祀之日，当太阳从东方升起，咪谷就率众进入寨神居住的神林，杀猪宰鸡供祭。午后，神山上锣鼓齐鸣，召唤寨中另外的人上山。参加祭神庆典的群众，带着酒肉饭菜，争先恐后地进入神林。在神林中，每个家族都有摆设酒席的地点，大家席地而坐。参祭者不能随意喧哗，围坐祭台的九个男子，手脚都不能随意移动，如果有人咳嗽或搔痒抓腮，会被认为是对寨神不恭，祭心不诚，甚至认为神祇会因此而降祸于村寨。

祭典开始，咪谷吟诵祭词。接着，咪谷取一点供品，埋于祭台基石下，参祭者每人向寨神叩头。

祭毕，人们便各就各位，开怀畅饮。酒肉丰盛，气氛热烈，席间还鸣枪放炮助兴，到太阳落山，方告结束。宴席上若有剩余食物，一律不许带回家中，只能挖一土洞埋于祭场。

祭　龙

红河两岸的哈尼族，常将龙树和龙树林视为护寨神。每年都要举行祭祀活动，久而久之，人们就把这一活动称为祭龙，即对

神树的祭祀。

祭龙仪式十分隆重，一般于每年农历二三月间属龙之日举行，历时三天。但各地时间不一，如红河地区的哈尼族支系叶车人是于农历腊月间第一个属龙日举行。祭龙十分神秘，一律不让外族人、外寨人参加。各寨的祭龙时间又秘密确定，届时全体人员按时统一行动。

祭祀前要民主选举“龙头”和“二龙头”各一人。候选人要有较高威望，为人忠厚，品行端正，夫妻感情融洽，儿孙满堂。祭祀前几天，龙头要沐浴更衣，不吃零食，不与妻子同床，睡觉不能翻身，以此表示对寨神和护寨神的虔诚和恭敬。龙头首先负责断路，将狗血涂抹的木刀木枪悬挂于村口，将村寨的火神、瘟神送出寨门。断路之后，不许外人进入村寨，若有人不慎进了寨门，那就不允许退出去，要等祭龙活动结束，才能出寨返回。

寨民们负责清洗水槽，掏洗水井，并在寨中修建一间房子。然后在建房挖第一锄的地方刨出一块平地，摆上供桌。桌上置谷一斗，米一升，酒一瓶，碗四个。米上压手镯或银元。

祭祀时，“摩匹”（巫师）将酒倒入碗中，然后念祈祷辞，祈求寨神护佑。摩匹一边祈祷一边杀猪、鸡、鸭作牺牲。猪要选择毛色纯黑的作祭品。牺牲之血滴入酒碗，供奉护寨神。祭毕，由专人将猪鸡鸭肉背往龙树林，途中不能说话。

随后，龙头身着黑缎长袍，新布包头进入龙树林，举止庄重，神态严肃，行至供桌前端入坐。供桌上放有煮熟的鸡鸭和红蛋，并立一把大伞，挡住强烈的日光。龙树林附近有九个青年围圈静坐，作为陪祭。

村中各户带上供品，以篾笼提着鸡鸭，用篾桌抬着食物，有的还背上一头小猪，簇拥着一对以男童装扮的美女，敲锣打鼓地前往寨子各要道喊魂。传说以前有一对男童装扮的美女与魔鬼拼

搏，终于杀死魔鬼，拯救了哈尼族百姓。祭龙这天他重现原形，以表纪念。然后人们浩浩荡荡进入龙树林，行至龙头前磕三个头，献一个红蛋。献完祭品，龙头念祭辞，祭护寨神。随即鸣枪放炮，枪声炮声震撼山野。祭毕，祭品让参祭者分食，猪鸡鸭肉也共享。

龙树林祭祀一般只派男人参加，不育夫妇经特许可以上山献猪腿一只，以求生育。

节日第二天，凡有新生婴儿的人家，要带礼物到龙头家报名注册，以续家谱。

第三天，全村男女老少自带酒食集中到龙树林欢歌痛饮。龙头端坐正中，人们分列两旁，饮酒唱歌。演唱内容非常丰富，从天地形成、人类起源、历史故事乃至生产活动、风情民谣，无所不包。优秀歌手受到村民的尊敬和爱戴。

六月年

六月年，哈尼语称“库扎扎”，是哈尼族的传统节日之一，于每年栽秧结束时举行。各地节日时间略有差异，如滇南红河、元阳一带的哈尼族，于农历六月属牛日举行，红河哈尼支系叶车人却于农历五月属猴日过节。节日历时六天，每天都有丰富的活动内容。

节日第一天，寨中各户必须割一捆茅草，供盖秋房使用；同时，各户在自家房顶上还放置九捆青草，送给天神“孟咪”喂马；各户在屋内火塘上方悬挂的炕笆上搁一升酒，敬献天神。这三件事缺一不可，因为哈尼族认为祭祀时祭品不全会冒犯天神，天神将降灾祸于人间。接着就是翻盖秋房，架立秋千，安置磨秋等等。秋房以六棵木柱支撑；秋千用四棵龙竹架设，秋索选用结实的野生藤条；磨秋用最好的楸木制作。

次日举行祭祀活动。届时杀牛一头，牛由村民集资购买。下午，咪谷（主祭）率领牛徒（助祭）、寨主和摩匹（巫师）到秋场的秋房内，以公鸭一只，公鸡母鸡各一只为祭品，迎请天神孟咪与哈尼人一同欢度节日。祭祀由咪谷主持，牛徒负责传话，摩匹演唱祭词，众人虔诚祈祷。

第三天开展娱乐活动。人们在秋场上尽情欢乐，有的荡秋千，有的旋磨秋，有的跳鼓舞，还有的吹笛唱歌。年轻人还去串寨，他们互相邀约，穿上节日盛装，骑上高头大马，到附近村寨走访游乐。姑娘们在村寨等候，她们穿着自己亲手制作的衣服，三个一堆，五个一伙地等待着别寨的小伙子。小伙子进寨时，大多乔装打扮，有的带着脸谱，有的抹上油彩，身穿长袍，肩披花毡，腰束红绸，手提棍棒，甚至还背着鸡笼，形形色色，百态千姿。姑娘们将小伙子迎进秋场，这时锣鼓齐奏，歌声一片。姑娘们踏着鼓点跳跃起舞，舞姿优美，秋场上呈现一片欢乐气氛。

节日的最后一天，各户自备一桌酒席。中午时分，秋场上大鼓擂响，家长们率领着儿孙捧着酒菜入场。人们依次摆开酒桌，把酒引歌，歌手们乘兴演唱民族史诗，唱民族的起源、迁徙、定居和风俗等等。人们还高唱四季歌以增加岁时知识。宴会要持续到黄昏。叶车人的酒宴安排在晚上。太阳落山时点燃火把，先在屋内走一圈，以示驱邪除恶，然后将栗木棍送到村外路边，插成一排，顺序祭祀，敬送天神回家。栗木棍代表天神的马鞭，火把供天神照明。送走天神，家长才率领儿孙抬着酒菜进入秋场。因酒宴安排在晚上，旷野漆黑，人们便在磨秋上拴起火把照明，火把熊熊燃烧，火光四射。在粗犷的呼喊声中开宴，大家互相敬酒祝贺。叶车人还常常利用聚会时间，商谈村中大事，制定生产计划。宴席之后，小伙子们趁着酒兴，用手电朝着姑娘们聚集的地方照射。数不清的光束纵横交错，电光在哪里停留，哪里就出现骚动。

姑娘们的心，此时也最为激动，她们希望在电光中结识情侣，通过恋爱自定终身。因此，姑娘们并不回避，相反还带着几分激情等待着。

十月年

哈尼族以十月为岁首，这时，正值五谷丰登、猪羊肥壮；又因收获之后，处于农闲时期。在农历十月第一个属虎日为初一，有的地区以十月第一个属龙日为初一。节期历时十三天，每天均有活动安排。

节日期间，家家户户舂糯米粑粑，酿闷锅酒，宰杀猪鸡并以其心肝供奉祖先。哈尼族非常重视祭祖，凡出嫁的女子此时都要回娘家认祖归宗，她们进门的第一件事就是将所带的鸡蛋酒肉取出供奉祖先。届时还要请“贝玛”（宗教职业者）占卜，看“猪肝卦”和“鸡脚卦”，以此预测来年庄稼是否茁壮，人畜能否兴旺等等，有时还为年轻的妇女卜算生男还是生女。女子回娘家往往喜欢互述婚后生活情况，内心一切喜怒哀乐均可畅谈。姐妹们相互安慰开导，有的还为受气者出谋献策，以争取较好的生活环境。此时男人不得偷听，若有违者，要受处罚。

十月年中最有特色的是街心宴，哈尼语称“姿八夺”，即轮流作庄喝酒。它以村寨为单位，小寨子全寨聚会，大寨子可分为二三组进行，以组轮流作庄。每天下午，庄组织各家在寨中摆簸箕宴。簸箕一个接一个沿街摆设，有的长达数十米。人们烹制许多美味佳肴，送到桌上，看哪桌的菜肴最受欢迎，看哪家的菜肴吃客最多，称之为比菜。谁的菜受欢迎证明烹调手艺高，吃客不绝说明谁的人缘好。

宴席开始，由主持人“阿窝”致词，然后各户当家男子入席

就坐，姑娘斟酒上菜。菜上桌后，人们自由组合入席。凡老年人聚在一起，谈古论今；带孩子的妇女聚在一起，互相交流育儿经验；年轻人自行结伴，小伙子小姑娘互相打情骂俏，风趣活泼。“阿窝”先向人们祝酒，乡亲们便起身，举酒碗齐呼“嗦——哦嗦”。人们边饮酒边高唱酒歌“哈尼哈巴”，老人介绍祖先业绩，讲述民族习俗，畅谈生产经验，制订耕作计划，大家洗耳恭听。传统仪式结束之后，人们开始狂欢痛饮，年轻人纷纷向长辈敬酒，当宴会进入高潮时，满街都是“嗦!”“嗦!”的喝彩声，人们狂欢齐舞。

太阳西斜，人们又聚集于广场，烧起堆堆篝火，弹三弦、四弦，吹响树叶竹笛。在牛皮鼓铙锣的伴奏下，男女青年踏着乐曲翩翩起舞。若有客人光临，主人必请他们同全寨人一起踏歌起舞。十月年的夜晚，哈尼人沉浸在欢乐的海洋中。

尝新节

农历七八月间，云南哈尼族山寨的农作物相继成熟。这时，男女老少要过一个别具风采的节日，这就是“吃新谷”。节日历时三天，一般在农历八月第一个属龙日或第二个属龙日过节。汉语“龙”的字音，在哈尼语中有“增添”和“多起来”之意，人们便认为“龙日”吉利。节日期间，没有村社性的祭祀活动，祭祀和酒宴均由各家自行安排。

居住在滇南红河、元阳和金平的哈尼族，对“吃新谷”的庆

贺特别隆重。节日的第一天，人们天一亮就到田里背新谷。选择八成熟的黄谷，连根拔起。数目为单不为双。谷子拔好不能靠手提，一定要用背箩背回家。途中不能说话，遇到来往行人也不能打招呼，以避免发出不吉利的话。如果在路上碰着老鼠或蛇等动物就认为是不吉利，遇到鳏夫寡妇也认为不好。所以，背新谷要在动物尚未出来活动之前和路上无行人时全部完成。新谷背回家，将它栽于水井边或菜园里。

下午吃新谷前，先杀鸡。一般喜欢杀阉鸡，希望来年生活像阉鸡的羽毛一样美丽丰满。并把地中的瓜豆蔬菜拿来尝新，还要备一碗嫩竹笋，因为刚刚破土的竹笋象征着万物的生命，节节冒尖，蓬勃向上。烹制好各种菜肴，取来新谷，以手搓下谷粒，连壳放入锅中烘焙，直到炸出米花，除净谷壳，将米花放入碗中，抬上饭桌。第一把米花是敬狗的，如果家中无狗，也要象征性地抓一把祭献。然后年龄最大的人先吃米花，吃米花要用手抓，抓到的米花若是单数即可吃下，若为双数就得重抓，直到抓成单数方能吃下。米花食毕，人们品尝以新谷做成的饭，以瓜豆做成的菜。桌上一物一味，味味相加，其乐无穷。席间，人们还谈论庄稼的长势，核算作物的产量，安排秋收的劳力。

据说“吃新谷”是为了纪念哈尼族的始祖塔婆和塔婆之子欧罗的。塔婆为人类寻求五谷良种，培育六畜良种；欧罗将良种和金银珠宝送往人间。哈尼族祝祭歌中有记载：“远古的哈尼祖先哟，把尝新的吉日良辰，选在八月属龙的日子，为了不忘始祖的艰辛，为了不忘欧罗的恩惠，哈尼人八月吃新米饭，首先要祭祀塔婆和欧罗。”

开宴之前，人们往往同唱这支祝祭歌，以糯米粑粑祭天。他们祭祀太阳、月亮和星星，祈求日月星辰永远像糯米粑粑一样洁白明亮，永远照耀着哈尼山寨。

●哈萨克族

哈萨克族人口为1,111,718人(1990年统计),主要分布于新疆伊犁哈萨克自治州、木垒哈萨克自治县、巴里坤哈萨克自治县和甘肃阿克塞哈萨克自治县。

哈萨克族史称“阖萨”、“曷萨”、“阿萨”、“可萨”等。哈萨克族有自己的语言文字。哈萨克语属阿尔泰语系突厥语族;文字系以阿拉伯字母为基础的拼音文字。

哈萨克族大多信仰伊斯兰教。

哈萨克帽

哈萨克族的帽子实用、漂亮。男子冬天多戴一种哈萨克语叫“托马克”的高顶皮帽。帽顶高而尖，尖顶上有四棱，帽侧有两个耳扇，后面附有一长尾扇。多用春羔皮制做帽面，用水獭皮压边，帽子里层用狐皮、黑羊羔皮，有的帽顶还饰以猫头鹰羽毛。这种帽子帽顶犹如雪山高耸，使人有一种高大雄伟之感，冬天非常适宜于御寒。还有一种叫“库拉帕热”的帽子，帽形呈圆锥体，帽里面缝着狐皮或羊羔皮，帽面为各色绸缎。夏天，哈萨克男子多戴一种薄白毡制作的、黑绒翻边的帽子。

哈萨克族妇女的帽子和头饰，出嫁前后有所不同。未出嫁的姑娘戴哈萨克语叫“塔克亚”的花帽，这也是哈萨克民间传统的刺绣工艺品。“塔克亚”是用马皮做的圆斗形帽子，帽顶水平，帽口直径约 17 厘米，帽沿上大下小，一般用颜色鲜艳的红、蓝各色绸缎作面，帽壁上用各色彩线精巧地绣成花，并缀以各种串珠，有的还嵌以名贵的珠宝，鲜艳夺目。帽顶上插有一撮猫头鹰羽毛，象征着吉祥如意、勇敢坚定。另一种称为“标尔克”的水獭皮作的圆帽子，也为未出嫁的姑娘所戴，帽壁绣花并插有猫头鹰羽毛，与帽顶相接的部位用各色串珠装饰。姑娘出嫁时戴一种名叫“沙吾烈克”的尖顶帽，相当于汉族新嫁娘从前戴的一种凤冠。“沙吾烈克”帽里用毡作，外面罩有布、绒或绸缎，上绣花并用金银珠宝装饰，帽子的正前方还饰有串珠垂吊脸前。“沙吾烈克”喜气艳丽，新娘婚后一年内都戴它，表示姑娘的人生道路走上一个新的台级。哈萨克妇女在结婚一年后开始戴花头巾，生下第一个孩子后要换戴一种名叫“克米谢克”的头饰。这种头饰用白布制作，戴上后仅露出面部。三四十岁以下妇女戴的“克米谢克”绣有各种美丽

的图案，年长的妇女则佩戴花纹不太鲜明的“克米谢克”，或者戴白色头巾。

哈萨克人的帽子种类很多，各有特点，它适应了不同的季节，代表了人们的审美情趣。

宰羊待客

哈萨克人以热情好客著称于世。宰羊待客是哈萨克人隆重的待客礼俗之一。远方的客人光临，主人让客人喝过奶茶后，便去牵来一只肥羊（头黄身白的羊最佳）站在毡房外真诚地说：“尊贵的客人，你远道光临，我不胜荣幸。请允许我为你宰羊。”随后，把羊牵进来让客人过目。客人中的长者这时要代表大家作“巴塔”祝福，对主人的盛情表示谢意，并祝福主人家人畜两旺，百事如意。然后，主人出去宰羊。

哈萨克人宰羊干净利索，犹如古代的庖丁解牛，游刃有余。他们熟练地剥去羊皮，把羊肉和五脏分开，用火燎去羊头上的毛。然后把羊头洗净，同切成大块的羊肉一锅煮。煮时，清水下锅，不放任何佐料，待肉熟时，才放入少许盐。羊肉煮烂捞起，其味异常鲜美。吃时，再放些洋葱之类的调味品，愈加诱人食欲。

哈萨克人宰羊待客很有讲究，羊的各个部位该分给谁吃都有一定含义。进餐时，主人先要把羊头端到客人面前，以示尊敬。客人这时应先把盘中的羊头端起，割下羊头左颊面上的一片肉放入盘中，以示接受；再割下一只羊耳朵给主人的孩子或座中最年幼者，意思是让孩子听长辈的话；然后，再把羊头还给主人。以上礼仪结束后，大家才动手削肉。吃肉时，只吃盘中靠近自己的肉，切忌在盘中乱抓或挑肥拣瘦，否则会被看作失礼。羊的十二根骨头和其他部位的肉分配给何人是有一定规矩的。通常，给年长而

尊贵的客人，是羊头和臀部上的肉；给女婿和媳妇是羊腿上的关节肉和胸肌肉；给小孩的是羊舌头、耳朵、腰子和心脏。按照哈萨克人的习惯，有时主人还把又香又嫩的羊肉捧在手上，送至客人嘴边。客人这时一定要用双手接下表示谢意。有时，客人亦可借花献佛，抓起盘中的一块肉回敬主人或主人家其他成员。

熏肉和马肠

熏肉和马肠是哈萨克人的两大风味特产，遇有节日喜庆则是待客的佳肴。

哈萨克人制作熏肉有着自己的特点。其作法是：将羊肉或马肉按一定的规格连骨头切成块，撒上盐，然后挂起来，下面用柴或麦草点着熏，火用文火，大约十几天后即可吃。还有一种作法是：将羊的内脏掏空，烧掉毛，皮连肉一起剁成块，撒上盐，再熏干。熏肉存放时间较长，一般可保存到第二年六七月份仍然味香可口。

熏肉吃法有多种：一可清炖，切碎后拌面片吃；二是做抓饭时吃；三是作炒肉吃，放的蔬菜和调料主要有葱头、大蒜、花椒、胡椒等。熏肉由于味香可口且存放时间长，深受哈萨克牧民欢迎。

哈萨克草原上马多且品种好，人们制作的马肠亦闻名遐迩。马肠的作法是：先将马的肋骨肉切成条状，调好五味，灌入长约1米的马肠内，两头用畜筋扎紧，然后晾开，风干。此外，哈萨克人还把牛羊瘦肉撒上盐灌进肠衣内，两头扎紧，晾干，称作腊肠。

马肠和腊肠脂肪丰富，具有特殊风味，其吃法很多。主要有：一是做抓饭用；二是与熏肉一块清炖；三是拌面条、面片吃；四是单独清炖吃；五是与蔬菜拌着炒。

毡　房

毡房在哈萨克语中被称为“宇”，汉文古籍中曾称为“毡庐”、“穹庐”等。它是哈萨克人在大草原上生活、居住的重要地方。

哈萨克人住毡房的历史源远流长，远在公元前105年，远嫁乌孙的汉朝细君公主在《黄鹄歌》中就写道：“穹庐为室兮旃为墙，以肉为食兮酪为浆”。这里说的“穹庐”实际上就是毡房。乌孙为哈萨克人的先祖。

毡房由围墙、房杆、圈顶、房毡、门五部分组成，原料基本上就地取材。其骨架由红柳做成的圆栅和圈顶构成。围墙（栅栏墙）用横竖交错相连接的木杆栏构成，可以自由拆合。它的上面是下部弯曲、上部笔直的木杆作撑杆。撑杆下部绑在栅栏上，上端插入圈顶眼内。圆形圈顶既是屋顶，又是窗户。在栅栏的围墙外围上一层毛线编织的芨芨草帘，然后，在房架上裹上围毡。顶部中央开一直径30厘米左右的天窗，上安一活动毡盖。白天揭开用以通风接受阳光，夜间及雨雪天盖上以防风寒。毡房门小，离地面较高，以防积雪和严寒。门多开向东南，以避北风，外面再挂一毡帘子。冬、春天寒，放下门帘可以挡风雪；夏天卷起，通风凉爽。最后，用毛绳在外面拦腰扎紧，一座稳固耐用的毡房随即形成。

哈萨克牧民的毡房根据其规模和用途大致可分为四种：一种是霍斯底毡房，其特点是无房墙，房杆是直的，木圈顶多为正方形或圆形。房杆直接插入圈顶的洞眼内，房杆周围不围芨芨墙篱，仅围以栟毡。这种毡房便于安装、拆卸、携带，特别适用于放牧骆驼、远游、打猎及游览等。第二种是有四块房墙的毡房。这种毡

房有房杆 65 根左右，木圈顶有 65 个洞眼。其房内容积小，多用于结婚和一般牧民居住。第三种是由 6 块房墙组成的毡房。第四种是由 8 块房墙组成的毡房。这两种毡房较为华贵，选用毡房铺盖的毡较为严格，其墙篱、围墙主带、绳索等都用漂亮的彩色毛编织。毡顶的四角和蒙毡的下沿上面，用红布或红条绒嵌上三角形或方形的各式图案，门上也绘以花草图案。这两种毡房宽大、漂亮、舒适、造价高，过去只有牧主、巴依和部落头人才住得起。这种毡房的房墙、房杆、圆圈顶都用朱漆或红土油刷，房杆和房墙上常雕刻花纹并镶嵌银子，人们称之为“白色的宫殿”。

毡房内的陈设与布置有一定规矩，主要分为放置东西与住人两大部分。入毡房门内约一米半的中间设有火塘，用以做饭、煮奶、取暖、照明等；进门右半部是储藏食品和放置炊具、器具的地方，左半部为儿媳床位；儿媳床位对面是主人床位（卧室）。毡房的后半部铺有地毡，上盖以花毡，是招待客人及客人晚上睡觉的地方。

哈萨克人的毡房用途很多。隆冬时节，外面冰天雪地，里面温暖如春。接羔时，是护理病弱羊羔的“医院”；夏季又是牧民制酸奶、提取奶油、做各种奶制品的“车间”。它是一些牧民儿童上学的“课堂”，又是牧民婚礼喜庆的地方，也是人们欢歌起舞的地方。毡房的构造适应了哈萨克牧民的流动放牧生活，它制作简易，拆卸方便。哈萨克族民间有个谜语是：“先放倒，后竖起，捆扎好，再培土”，即指搭毡房。毡房，在今天仍是大多数哈萨克牧民的居住场所。

周年祭

“阿斯别尔吾”在哈萨克语中是“周年祭”之意。哈萨克人十

分重视对亡人的祭祀与悼念活动，较为隆重的有“结提森别尔吾”（七日祭），“哈尔根别尔吾”（四十天祭）及“阿斯别尔吾”（周年祭）等，这中间“阿斯别尔吾”尤为隆重。

当死者去世将满一周年时，其家属就开始筹备周年祭的活动。主人预先召集死者的亲朋好友，商讨周年祭的准备工作。一般在举行周年祭的前一个月或一周内要向来客发出“萨乌恩”（祭奠通知）。届时，主人根据自己的经济状况宰杀一些牲畜，以备招待来客。若毡房内拥挤，就在地面上掘一排或几排地坑，安锅煮肉煮饭。所有参加周年祭活动的亲友就地聚餐。如果死者是年长者或是有威望的，那么主人还要预先通知前来者，提前选马、选摔跤手等，以备在周年祭期间赛马、摔跤。当祭奠者来齐后，要将主人生前乘骑的马牵到毡房前（这种马哈萨克语称“托里阿特”），这时死者的妻女伤心地哭着向“托里阿特”告别，然后宰杀掉以示志哀，接着众人开始会餐。

周年祭举行的时间一般为三至七天。届时，亲戚、朋友和应祭者都要给主人家送来牲畜和礼品，表示济助。这类物品在哈萨克语中称“阿克得克”。周年祭期间宰杀的牲畜的皮是不能留在主人家中的，按习惯规定要分给鳏寡孤独者。规模较大的周年祭期间还要举行赛马、摔跤、对唱等娱乐活动。

按照哈萨克人的习惯，周年祭期间还要重修亡者的墓。一般人的墓多是用石块和土块垒起来。截至周年祭前一年内，习惯上死者家中不娶、不嫁、不摆宴，妇女40天不出门，男性外出不得参加对歌以及“姑娘追”等娱乐活动，以示哀悼。

周年祭后，按照哈萨克人的习惯，亡者的妻子可以取下头上的白纱；儿女们可以脱下黑色的丧服。死者家属将死者生前穿过的衣服交给主持丧礼的老人。周年祭活动表示了哈萨克人对死者

的隆重哀悼，同时也标明了悼念死者活动的终止。

挽歌悼亲人

哈萨克人在人亡后，对死者要作长时间的哀悼。一年之内，亡者的妻子需身穿黑服，头包白巾，以表悼念。在这期间，只要遇上与死者相关的事和节日，都要唱挽歌，以示对死者的怀念。

挽歌的内容主要歌颂死者一生中的功绩和重大经历，表示家属和亲友的缅怀和哀悼。曲调通常是固定的。唱挽歌的时间是：每天旭日东升和太阳落山时唱，远远看见前来吊唁的就唱，与吊唁人见面时要大声唱。如果前来吊唁者是妇女或近亲，大家互相拥抱唱，直至别人将他们拉开并经一番劝慰后方可停止。

从前在牧区还有几种唱挽歌的形式：死者刚去世后妻女坐在帷幔里唱；搬家转场时唱；举行周年祭时唱。当死者家属搬家或转场时，要把死者生前用的马鞍备在死者生前乘骑的马上。这种马被称为“托里阿特”。马鞍上盖有死者生前的夹袢和布大衣。“托里阿特”由死者的妻女牵着走，牵马人每路过一个牧村时都要唱挽歌，说唱死者的功绩和愿望。

过去，哈萨克族各个部落唱挽歌的习俗各有差异。如在葬礼上，克烈部落中听到亲朋的死讯后，骑马来到死者家，女人抱着女人痛哭唱挽歌；乃蛮部落中听到死讯后，吊唁人快马加鞭，边走边哭，喊着“我的心肝”等来到死者家，男女拥抱痛哭。

今天，哈萨克人的丧葬习俗中的许多传统悼念活动已简化。不过，死者妻女在一年之内还常常哭泣，唱挽歌悼念。

架鹰狩猎

哈萨克牧民一般都擅长狩猎，利用猎鹰追捕猎物是他们狩猎的一种方式。

猎鹰是哈萨克猎人狩猎的主要助手之一，它体大、嘴尖、爪子锋利，性情凶猛，视觉敏锐，这是主人长期驯养的结果。猎人驯鹰前首先要捕获一只雏鹰，这要冒极大的风险。鹰巢一般都筑于深山绝壁上，当猎人从石洞中捕雏鹰时，母鹰会拼命扑来，用身体猛击或用爪子抓。这时稍有疏忽闪失，便会丧身于鹰爪之下。哈萨克猎人在这方面有着丰富的经验，他们事先准备了夹脑和网，用各种方式捕获雏鹰。有的猎人把网撒在山坡上，将羊羔放进网内，鹰来叼羊时就陷落于网内；有的猎人用小鹰、鸽子等作诱饵，在下面张开大网，在小鹰或鸽子的翅膀上系上马尾，作成圈套，牢牢系在网的绳子上。老鹰望着痛心疾首的小鹰不顾一切地俯冲下来营救，或为捕食鸽子，就被皮套套住就擒。

鹰捕回来后，猎人就要注入全部心血精心喂养、管理，还要为它制作皮绊、眼罩等。随后日复一日地放鹰、驯鹰。未驯之前，把鹰喂得膘肥体壮。但这是一种虚膘，它的肌肉要变得有力量才行，这就需要拉膘。驯鹰开始后即进行拉膘，这时不但不给它进食，还要给它洗胃，用热水洗澡，洗得它浑身出汗，再加上挨饿，有的直翻白眼。晚上还要“熬鹰”，即把鹰放在专门驯鹰的粗绳上。上绳伊始，鹰站不稳，人则不断地用棍子敲打绳子。由于绳子不断晃动，鹰自然无法睡觉。鹰极度疲乏会掉在地上，猎人抢起鹰用清水冲洗鹰头，喂茶水和盐水。如此几天，把鹰饿得皮包骨头，没有精神，膘就拉下来了。这时，猎人即开始驯鹰。先用特制的罩戴在鹰头上，不让它看见任何东西，然后由专人喂些兔子、鸽

子、飞禽肉等。这一段时间，鹰便与主人建立了感情。这期间，主人还要驯练它起飞、制动、滑翔、下坠、捕捉猎物等。大约过半个月之后，鹰被驯化，这时，主人就要在房间里用肉喂鹰，如鹰见肉即来，就可以到外边去放鹰。

喂鹰时，先喂瘦肉，不喂脂肪。只喂半饱，不要饱食，因为“鹰饱不抓兔”。放鹰时，不见猎物，不揭眼罩，更不能解开脚绊，这正是俗话所说：“不见兔子不放鹰。”经过猎人精心驯养后，一只双眼锐利、善于捕获猎物的猎鹰脱颖而出。它凭着一身绝技在草原上捕捉黄羊、狐狸和兔子，返回后就规矩地落在鹰架上休息。

哈萨克猎人架鹰出猎的场面十分惊心动魄。猎手骑着骏马出猎，左手架鹰，右手扬鞭。一旦发现猎物，猎人即选好地形，急速揭开鹰头上的眼罩，扯去鹰脚上的皮脚绊。猎人一声呼哨，被饥饿、禁锁折磨得发狂的猎鹰箭一般腾空而起，向惊窜的狐狸或黄羊劈头盖脑俯冲下来，钢爪牢牢地揪住猎物。在哈萨克草原上，各种猎物，天上飞的、地下跑的，只要猎人把那眼尖、敏捷、凶猛的猎鹰撒出，顷刻间就会被生擒回来。据有经验的猎人估计，一只猎鹰一年可捕捉数百只狐狸，还可以捕捉恶狼。猎鹰是草原上天然的除害能手。对于哈萨克猎人来说，一匹好的骏马难换一只猎鹰。

姑娘追

“姑娘追”哈萨克语称做“克孜库瓦尔”。这是一种古老的传统娱乐和马上体育活动，多在夏秋两季或节日喜庆时举行。它表现了哈萨克人娴熟的骑术以及青年人寻求爱情的特殊形式。

姑娘追通常在绿草如茵、宽阔平坦的草原上举行。届时，参加的青年男女，由组织者或长辈分组，按双方年龄等条件组成对

手，有时一次多达数十对。比赛开始后，身着盛装的男女青年各乘一匹自选的快马从起点开始，并排执辔，走向观众目力能及的较远的地方（一般都预先规定好）。在去的途中，小伙子可以向姑娘任意戏谑，说挑逗的俏皮话，表示爱慕之情，甚至吻她。按习俗，无论男方怎样戏闹都不算过分，姑娘不得恼怒和生气，只能忍受。到规定地点后，小伙子要掉马头急驰返回。姑娘这时策马急追，这才是真正姑娘追的时刻。如果姑娘追不上小伙子，就算小伙子获胜；若追上，便可以抓住小伙子的衣襟用马鞭抽打，以报来时的戏谑调笑。不过，一般姑娘都不会真打，有的只用马鞭在小伙子头上频频绕圈，使其望而生畏，出现狼狈之状。姑娘获胜后一般有奖品。

有关姑娘追的传说在哈萨克民间闻名遐迩。传说很早以前有两个部落头人结成儿女亲家。接亲那天，媒人夸口新郎的马是马群里挑出来的千里驹。新娘父亲听后，为了夸耀自己的马和女儿的骑术，提出女儿骑马向迎亲的相反方向跑，小伙子若追上就过门。否则，改日再来。小伙子紧紧追上，当把姑娘的马牵着回来时，姑娘提出让小伙子在前面跑，自己追。这样，本来是追姑娘反而变成了姑娘追。后来，这一活动又增加了一些新的内容，逐渐演变成现在的姑娘追。

姑娘追在过去有时促成了哈萨克青年男女爱情。若姑娘对小伙子产生爱慕之情时，追上也只是把鞭子高高举起，轻轻落下，以遮人耳目。至于小伙子即使真挨几下，心里也是甜滋滋的。今天，姑娘追已成了哈萨克族节日、喜庆及草原盛会时的重要娱乐活动之一。一对对青年男女通过姑娘追加深了互相了解和感情；已婚夫妇互相追赶，显示了其生活美满和家庭和睦。有时中年人甚至年长者亦参加，使这一娱乐活动愈加妙趣横生。

姑娘追场面壮观，十分热闹，为哈萨克草原上一大盛会。牧

民们在这一天都身着盛装，扶老携幼，骑上骏马从四面八方赶来。长长的人群马队围成了一至二公里的大圆圈，老人们盘腿而坐，孩子们三三两两地坐在马背上。比赛时，人欢马叫，草原沸腾。观众不时为姑娘娴熟的骑术喝彩。今天，在全国少数民族体育运动会上，姑娘追已成为哈萨克族的特有项目。

婴儿礼和小孩骑马礼

婴儿40天礼和小孩骑马礼是哈萨克族民间传统习俗，充满了浓郁的草原气息。

按照哈萨克族习惯，婴儿的肚脐带长好后，隔一天，就要洗一次盐水澡，既消毒又卫生，一直洗到40天为止。哈萨克人把婴儿出生40天当作满月，届时举行隆重的礼仪。

40天礼那天，婴儿的父母要宰羊煮肉，准备丰盛的食品以待来客。凡是牧村里的妇女及亲戚朋友，都要被邀请来。被邀请者除特殊情况，都要到场。客人们喜气洋洋地祝贺孩子健康成长，每个人都要给孩子赠送礼物，包括衣服、纽扣、串珠、布、袜及银饰、彩珠、猫头鹰羽毛等。有的也以餐布包着的水果糖、包尔沙克（一种油炸面食品）当礼物。

主人家这天热闹红火，到处充满喜气。参加贺喜的客人都要在主人家吃喝玩乐。人们酒足饭饱后，弹着冬不拉，互相对歌，歌词内容大多是祝愿父母身体健康，祝孩子长命百岁。夜深人静，主人家还琴声叮咚，歌声不断。

小孩一般自五岁就开始练习骑马，第一次骑马要举行隆重的仪式。届时，大人要为孩子插上哈萨克人喜爱的猫头鹰羽毛。孩子骑着备有“阿夏麻依”（小马鞍）的马，前去拜访亲戚。亲戚们要为小骑手准备奶疙瘩、包尔沙克等喜食。此外，还要赠送马鞍、

马肚带、马蹬、马鞭等礼物。从此，这个小孩便有了自己的鞍具，乘骑二至三岁的马驹，开始了一生的草原马上生涯。

火崇拜

哈萨克族民间长期崇拜火，这与他们早期信仰原始宗教有关。自然崇拜是哈萨克人信仰过的原始宗教之一，这中间对火的崇拜尤为典型。

哈萨克民间认为，火是光明之神，是驱逐一切妖魔的神，为人类带来了光明和温暖，是人们生活和畜牧业生产不可缺少的东西。火在哈萨克族民间被视为神圣之物，因此千百年来人们形成了崇拜、敬畏火的习俗。

火，在哈萨克人家中是锅灶的保护神（相当于内地汉族民间的灶神）。新婚的媳妇第一次踏进家门时，要往火上浇油，使火烧得更旺，以示为家中带来好运气。妇女在照料婴儿时，须把婴儿的摇床放在靠近火的地方，让火光照耀着婴儿，表示可以避邪。牲畜发病时，哈萨克人用火熏。每年夏天牧民转场搬迁时，牲畜都要“净身”，即“避邪”。一般是在迁往夏牧场的途中点上两堆火，然后让驮载东西的牲畜和畜群从两堆火之间走过。通常还有两位老年妇女站在火堆旁，口中不停地念“驱邪，驱邪，驱除一切恶邪!”。畜群中除马以外，其他都要通过火堆，马在哈萨克族民间为“净畜”，一堆火燃烧殆尽，即使成了灰堆，人们也不得围转或践踏。对于刚出嫁的姑娘回娘家时，更要严格遵守这一条。由此又引申到其他方面，如客人在毡房里只能从左边进入，离开时从左边走出，这同样体现了人们不能绕毡房间的火炉走圈的禁忌。诸如此类还有：不能用脚踩火，不许在火上吐唾沫，不准围着火堆乱跑，不可压灭火苗，更不许往火上撒尿。牧民转场、搬家时要

把炉灰一块儿带走，预示到了新居会交好运。

更有趣的是，有些哈萨克人以打火镰的方式为孩子命名。打火镰时叫出什么名字，孩子就以此称呼，以示吉祥。哈萨克人对火的崇拜，表明了火在游牧民族历史上起了十分重要的作用，同时也是他们早期信仰原始宗教所留下的痕迹。

阿肯弹唱会

阿肯是哈萨克族对身背冬不拉、骑马漫游的行吟诗人的称谓，实际上是优秀歌手之意。阿肯弹唱会是哈萨克族民间演唱艺术的聚会，流传已久，每年夏秋在哈萨克草原上都要隆重举行。

阿肯弹唱会的时间一般都选在夏秋之交，这时气候温和，草原上绿草如茵。地点通常在风景优美的夏牧场上。预先在这里搭起许多漂亮的毡房，以供宾客住宿。参加者都是从各地选派出来的著名阿肯，有宝刀不老的老艺人，亦有初出茅庐的青年歌手。这样的弹唱会实际上是一年一度人们用诗歌进行哲理辩论和才智较量的活动，同时又是向人们传播知识、启迪思想的场所。弹唱会的时间短则七八天，长则十天半月，一般由对唱进行的实际情况来决定。参加者有上百人乃至千人以上，有的牧民甚至从百里以外翻山越岭而来。

阿肯弹唱会开始时沿袭哈萨克族传统的开幕式，隆重且富有民族特色。当主持人宣布开始，年长的妇女们便把预先准备好的包尔沙克（一种油炸面食）、奶疙瘩和糖果等撒向人群，并向桌子上摆的许多金边花碗中倒满马奶。这时，尊贵的长者都要从座位上起来向群众祝贺，著名的富有天才的民间诗人要当场赋诗，用诗歌的语言对盛会表示赞颂和希望。开幕式结束时，主持人要牵来一匹两岁的白鼻梁枣骝马，请老阿肯祝词。两岁马表示尚未役

用，白鼻梁表示纯洁。这种仪式表示“让阿肯的歌像骏马一样跑遍绿色的草原。”随后，这匹马被宰杀。用餐时由专人捧着盛肉的托盘送到各个毡房门口，以示隆重庆祝。

弹唱会上，阿肯们的表演形式以对唱为主。表演者即兴编词，自弹自唱，一问一答。以答词切题，准确无误，口齿伶俐，含蓄多趣为优胜。对唱的形式和名目很多，一般常见的有“哈拉吾今”（民谣对唱），多在小伙子和姑娘之间。对唱时双方都可以在民谣中加进一些诙谐、幽默的言词，以抒胸怀，或表达爱慕之情。还有一种对唱为长歌对唱和短歌对唱，从内容上可分为“哈特阿依特斯”（简称对唱）、“居木巴古阿依特斯”（谜语对唱）、“米萨勒阿依特斯”（比喻对唱）、“阿曼达苏阿依特斯”（说教对唱）、“萨合那什阿依特斯”（告别对唱）及“巧克塔吾阿依特斯”（赞颂对唱）等。对唱时有四人对唱和两人对唱，一般多以两人对唱为主，两人伴唱。两人对唱，又多为一男一女，亦有男子与男子对唱及一个阿肯与几个阿肯同时对唱。极少有女子之间对唱。对唱时都是对唱者自弹冬不拉自唱，亦有少数清口谈唱、高诵低吟的。近年来，个别地方还采用了手风琴伴奏。对唱内容十分广泛，可取历史题材，亦可歌唱现实；可猜谜语，可考智力，可表达爱情，可相互戏谑，可褒，可贬，可讽，可怨。具体唱时，对方唱什么，必须答什么。歌词可即兴编唱，但也有一定规律可循。曲调上任意选自己得心应手的，不必与对方相同。

当阿肯对唱到动人心弦时，旁听的人也情不自禁地卷入对唱中去，形成了十分热闹的局面。当阿肯口中唱出了风趣或智慧歌词时，周围拥坐的群众会不断发出“嘿！拜力！（好）”的喊声。对唱虽有时间限制，但若双方唇枪舌剑难解难分时就要延长，最终以一方用奇妙的发问难住对方，才在欢笑中结束。有时，虽主持者一再宣布时间已到，但对唱双方兴犹未尽，只好站起来边走边

唱，在听众簇拥下唱进了休息的毡房，在赛场之外继续进行。

阿肯结对的胜负，一般以听众的赞许为标准。听众的赞许则以一方词穷意尽，失于情理为依据。按照传统习惯，败者要给胜者赠送毛巾或手帕。获胜的阿肯声誉顿增，听众往往把他与驰骋疆场、累建功勋的英雄一样相提并论，但亦把败者当作久经沙场的战将，绝不轻视。

阿肯弹唱会闭幕式上，要给评选出的优秀阿肯赠予系着红绸的冬不拉琴，祝愿他不孚众望，创作出更多更好的诗歌。对几位年事已高、德高望重的老阿肯，按传统民族习惯要给他们献上夹袢。

库布孜与斯布斯额

库布孜是哈萨克族的一种拉弦乐器，斯布斯额是一种吹管乐器。这两种乐器音色优美，悦耳动听，流行于新疆维吾尔自治区哈萨克族地区。

库布孜琴身木制，由琴箱、弦轴和弓子三部分组成。民间旧制琴杆呈弯月形，一般张两根丝弦。近年来，哈萨克族乐器工作者对库布孜进行了部分改良。琴身全长 60 厘米，音箱上宽 15 厘米，下宽 10 厘米，长 24 厘米。琴杆笔直并装有指板，张四根丝弦。整个琴的上端向里弯曲，琴腹呈大勺状。

库布孜的乐声与小提琴相仿，演奏时琴箱置两膝间，运弓方法与大提琴相同。库布孜多用于伴奏或独奏，其音色优美，婉转动听。传统乐曲主要有《阿勒泰》和《黑眼睛》等。

斯布斯额多用背阳山坳中生长的苇茎削制，亦有用杨木制成。一般管长约 50 厘米，直径 1.5 厘米，中空无簧。管上通常有四个按孔，有的为三孔或五孔。管外扎细绳，包以羊肠，以防管身干

裂。

斯布斯额竖着吹奏，管口略偏左唇，气流冲击唇边与管口，先由喉部发一长音，同时将气息送入管中，使管内气柱震动，发出一种轻微的口哨音与笛音的混合音。其声呜呜，音色飘逸悠扬，悦耳动听，深为哈萨克牧民喜爱。

斯布斯额可伴奏，亦可独奏，特别适宜吹奏抒情性的乐曲。有时，还可以利用其颤音、装饰音等演奏法模拟大雁等动物的鸣叫，其维妙维肖可达到乱真的地步。传统的乐曲有《思念》、《额尔齐斯河的波浪》、《赛驼》、《红色走马》及《绑着的枣骝马》等。

叼　羊

叼羊为哈萨克族传统的马上娱乐活动，一般在节日喜庆时举行。它十分动人地表现了哈萨克人的机智、勇敢和娴熟的马上功夫。

叼羊盛会来临前，牧民们要派出代表广为宣传，并进行地点和日期的选择。叼羊当天，牧民们不论男女老幼都着节日盛装，喜气洋洋地来到指定地点，习惯而自觉地围成一个大圈围。

叼羊一般有三种形式。第一种是分组叼，过去代表各自的部落，今天则代表各自的集体，实际上有如体育运动中的集体对抗赛。被叼之羊，哈萨克人称为“灰狼”。据说，这个名称可能是古代突厥人以狼为图腾的崇拜习俗流传而来。被叼之羊要预先割掉头，扒掉内脏，放置场地中间。骑手们排成两队，雄赳赳，气昂昂，如弦上箭待发。主持者一声令下，两骑手急驰奔向羊。最先抢到羊的骑手飞驰而出，冲出重围，后面的骑手们策马紧追不舍。骑手根据情况如传球般利索地把羊扔给伙伴，有时又被对方争夺去。草地上群马奔驰，时而追赶一骑，时而混战争夺，其场面十

分壮观激烈，骑手们的机智勇敢和娴熟的马上功夫在这里得到了充分发挥。当某队最后把羊“叼”到规定地点时，围观者报以热烈的欢呼声和掌声，最后获胜者得到丰厚的奖品。伊犁哈萨克自治州昭苏县的哈萨克牧民的叼羊活动独具一格：叼羊开始，骑手们分红、蓝两队，每队五骑。他们的叼羊犹如体育运动中的篮球比赛，在马背上把羊传来传去，潇洒自如，驾驭技巧娴熟，人识马意，马知人心，配合十分默契。他们参照现代体育项目中的篮、排球比赛规则，拟定了一套叼羊规则，巧妙地把草原传统马上运动与现代体育竞赛形式结合起来。

第二种形式是两人单叼，有如体育运动中的单打比赛，出场的两位骑手代表各自的集体，两个分别抓住羊的一端，拚命拉扯争夺。谁最后夺得羊，谁就为胜。这是力量与骑术的单个较量。

第三种形式为群叼。届时，主持者把羊放在场地中间，骑手们听到号令声后争驰抢羊。谁抢到羊，并将其放到规定地点即算获胜。叼羊时，先叼到羊的骑手飞马奔向目的地，其余骑手快马加鞭急起直追，观众们欢呼雀跃，呐喊助威。后来者追上前者后紧紧抓住羊的一端拼命争夺。时而数人相持，难解难分；时而一人得手，甩掉对手。雄壮的骏马时而疾驰，时而配合主人拉扯，形成了动人心弦的紧张场面。

过去，叼到羊的骑手可以将羊随意从一家毡房顶上扔进去。这时，毡房主人认为是莫大的吉庆和喜悦，主人要宰羊煮肉，款待客人。客人们肉饱奶足后，开始跳舞、唱歌，娱乐通宵达旦。

叼到羊的骑手在草原上倍受人们敬慕，会得到姑娘们的青睐。牧民们为他们披红挂绿，奖励颂扬。哈萨克老人传说，吃了被叼之羊的肉，不仅可避灾驱邪，而且还会交上好运。传统的叼羊活动多在金秋季节举行，这是牧民为了庆贺牧业丰收、预祝明年增产，也是为了鼓励牧民精心养马，培育良种，提高马术。

在新疆维吾尔自治区，从事牧业生产的柯尔克孜、塔吉克、维吾尔、乌孜别克族也举行传统的叼羊活动。

赛　马

赛马是哈萨克人十分喜爱的民间传统体育活动，它集中地表现了这个游牧民族健壮的体魄和高超的骑术。

哈萨克族的赛马，分赛走马和赛奔马两种。赛走马时用的是五岁以上的成年马，骑手多为成年人，主要比赛马的速度、耐力、美观、稳健。比赛时，要求骑手以自己高超的骑术把马压住，使其走得稳、快、美，又不使马跑起来。赛场上群马疾走，奋力争先，十分壮观，有点与体育运动中的竞走相似，不过把人换成了马而已。

赛奔马，主要比马的速度和耐力，以先到终点为胜。这是较赛走马更为广泛的赛马形式，一般说的赛马即赛奔马。赛奔马多用五岁以上的马，参赛的骑手大多为十二三岁的哈萨克少年。赛程一般达二三十公里，时间多选在八九月份，这时秋高马肥，牧草茂绿，正是赛马的黄金时节。

赛马多为个人赛，以跑速评定名次。赛马在草原上是一件大事，早在赛前两个多月人们就开始了准备工作。首先骑手们要选马。哈萨克人选善跑的马标准是：棒棰肚、马蜂腰、大蹄子、高腕子，这样的马善跑，又有耐力。被选出来的马除精心喂养后，一般还进行40～60天的调教，亦称“驯马”，使之适应以后的比赛。

赛马当天，场地周围观众密集，参赛的骑手多由10至15岁的哈萨克少年组成。骑手们身穿白衬衣（用以防暑），鞭梢上拴块手帕（用以擦去马奔跑时眼睛上的汗水）。参加比赛的马也被打扮得漂漂亮亮，扎起脑鬃，梳辫好毛尾，马尾上还要插上猫头鹰羽

毛，马身上披着用红绿等色布制作的披衣（哈萨克语称“凯吉幕”），显得十分威武、精神。参赛的人马聚齐后，主持赛马的人要将主人的马一一登记，然后派出几名小伙子把马送到起跑地点，紧张的比赛即将开始。

比赛开始，这是一个十分激动人心的场面。小骑手们个个左手握缰，右手扬鞭，如离弦之箭疾驰，人马一起奋力向前。这既是一场马的速度和耐力的比赛，也是一场考验骑手骑术和胆量的比赛。观众中“加油”、“加油”的喊声不绝于耳。快到终点时，小骑手们人人争先恐后作最后的冲刺，一般比赛到后半段基本上决定了名次。裁判们早已准备好了，他们依照规定按名次引导小骑手们抵达终点，前去领奖。按规定：若有 100 匹马参赛，就取前 51 名。第 51 名哈萨克语称“乌孜力斯”（即应奖的最后一名），得的奖品与第一名同样多。获奖的马由主人牵来领奖，这也是赛场上较为激动人心的场面。获得第一名是件十分荣耀的事，大家都要前来向获胜的小骑手和家长热情祝贺。冠军一般要给予很高的奖赏，奖品是匹两岁的马驹。其余的分别按名次奖给羊、布料等物品。这时，人们像潮水般地拥向获奖者，给获奖的马披红戴花。裁判们抓起一把把“包尔萨克”（一种油炸面食品）、水果糖、方块糖，奋力向热情的人群撒去。

今天，赛马比赛被列为体育比赛项目之一，它在哈萨克人的节日、喜庆、娱乐活动中占有重要地位。

飞马拾银元

飞马拾银元为哈萨克族传统的马上运动之一，多在节日喜庆时举行。届时，预先把一块银元（或贵重物品）用绸子包好，放置草地上（为了考验骑手们的本领，有时还在草地上挖一浅坑，将

银元置坑内)。比赛开始，骑手们顺次飞马奔驰，谁能俯身将草地上的银元捡到又不落马，即算获胜。银元，也就作为奖品给获胜者。有时，还要奖给获胜者小羊羔、小牛犊及马驹等。飞马拾银元是考验骑手们骑术和智慧的马上运动，在哈萨克草原流传已久。有关它的来源还有一段动人的传说。

传说很久以前，哈萨克草原上有一部落首领的女儿名叫库兰旦，容貌端庄，心地善良，机智勇敢，而且还有一身不凡的马上功夫。她在草原上闻名遐迩，不少小伙子向她求婚，都被拒绝。她理想中的情人是一个骑术过硬的人。后来，她想了一个主意，将自己的一只金耳环用绸布包上，放在草地上，谁能飞马捡到，她就嫁给谁。这天，方圆百里众多的骑手们云集草原上，库兰旦摘下耳环，亲自包好放在指定的地点。父亲一声令下，骑手们一个紧跟一个驰马飞过，谁也没捡到耳环。轮到一千零一个骑手了，只见他骑着白龙马，单手一提马缰，双脚一磕马镫，骏马仰天长啸飞驰向前。在经过放耳环的地方时，小伙子很快将马缰往胳膊上一挽，单腿离镫，作了一个漂亮的金钩倒挂动作，身子轻轻地偏到马的一侧。就在这一瞬间，他敏捷地俯身拾起耳环，又端坐在马上。部落首领当场把女儿许给了这位马术过人的骑手。

拔棍比赛与穿麻袋摔跤

拔棍比赛与穿麻袋摔跤是哈萨克族民间传统体育活动，其器材简易，绕有风趣。

哈萨克人崇尚勇敢和力量，拔棍比赛就是表现力量的一种比赛。比赛时，两人面对面席地而坐，双方脸对脸、脚蹬脚摆好架式。裁判平端木棍，公正地摆在对赛者中间，然后让双方交叉手。双方两手紧握木棍，作好赛前的准备工作。随着裁判一声口哨，双

方用力把对方拉向自己。若把对方拉过来，或是对方被迫站起来，即算获胜。比赛时，双方使尽平生之力狠拉木棍，围观的群众也随着紧张起来，人们一个个屏住呼吸，攥紧拳头，暗地里为选手鼓劲，其场面紧张有趣。比赛不仅是凭力气，而且要有技巧，是力量与意志的较量。哈萨克族民间的经验是“身子平，坐地稳，呼吸匀，用劲狠”。短短十二字概括了拔棍比赛的基本要领。

穿麻袋摔跤是哈萨克族少年儿童传统的体育活动，十分有趣和惹人发笑。参加比赛的儿童必须将双腿套在麻袋或羊皮口袋中，袋口高至齐胸，并把绳子扎在腰间，然后与对手摔绞。这种摔跤姿势奇异，妙趣横生。比赛者的下肢被限制死了，只能用上肢的力量。欲获胜，不但要保持自己身体平衡，还要想方设法把对方摔倒。参赛者多为儿童，场地是绿草如茵的草地，倒了也安全。观看比赛的人往往笑得开心，小摔跤手们不但姿态各异，而且有时像口袋似的直着倒下去。这种活动可锻炼儿童的上肢力量及灵敏智慧。

马上摔跤和马上拔河

马上摔跤和马上拔河是哈萨克族传统的马上运动之一，也是力量和智慧的较量。它体现了哈萨克人娴熟的马上功夫和草原体育活动的特色。

通常，参加马上摔跤的双方运动员各骑在自己挑选的马上。当裁判员发出口令后，两马相接，双方即展开激烈的马上博斗。比赛规定：双方不许拉扯对方的衣服或用拳击，而以把对方摔下马或把对方抢至自己马上者为优胜。一般马上搏斗，接连许多个回合双方难分胜负。有时，一方策马向前，欲乘机从后面抱住对方，脱离马鞍放置草地。不意对方随机应变，机智地用脚勾住马缰，一

个急转身绕到对方马前，相互抱住摔得难解难分。个别技艺超群的摔跤能手再加上坐骑配合默契，可连胜数人乃至十几人。比赛双方的胜负，决定于自己的骑术、力量及坐骑的优劣。

马上拔河一般多在节日喜庆时举行，也有在赛马活动后举行。比赛时，两骑手分别拉着一条长约2米的皮绳两端，绳中间系一红带为标志，垂直于“河”中央。当裁判员发出口令，两骑手扬鞭策马，奋力向相反的方向猛拉。人马配合，若将红带拉过“河”界即获胜。

马上摔跤和马上拔河多选择绿草如茵的平坦草原，其场面紧张、激烈，十分壮观。赛场周围观众很多，人们不断为各自的骑手呐喊助威，一向平静的草原沸腾起来，充满了欢乐和笑声。

冬不拉

冬不拉是哈萨克族传统乐器之一，流行在新疆维吾尔自治区的阿勒泰、伊犁、巴里坤及其他哈萨克族地区。

冬不拉是一种双弦弹拨乐器，通常全长80—90厘米，琴杆及背板用一块完整的红柳木或松木挖制，板面用另一块红柳木或松木砍制。音箱分圆底、平底和尖底几种。民间传统的冬不拉主要有琴箱扁平的“阿拜依”与琴箱呈瓢形的“江布尔”两种。50年代前，传统的冬不拉多为哈萨克人自制，比较优质的乐器则出自哈萨克族马鞍工人之手。50年代后，冬不拉专业乐器制作者开始出现，其制作方法亦有改进。如背板不用一块完整的木料挖制，而以数块木板拼合而成，音品改用塑料片或铜片镶嵌。新疆伊犁哈萨克自治州文工团乐器小组于50年代曾以两种传统的冬不拉为基础，进行了一系列的乐器改良，制成了各种不同的冬不拉，其中包括最高音、高音、中音、中低音、低音各种类型，扩大了音

域和音量，增强了乐器的表现能力。

冬不拉是哈萨克族大众化的乐器，差不多人人会弹，家家都有。它在哈萨克族民间流传广泛，有关它的来历，还有两个动人故事。传说，很早以前有个名叫哈姆巴尔汗的牧民，一天他正在牧羊，耳边忽然传来了叮咚的声音，很是悦耳动听。抬头一看，原来是远处树枝上挂着几根被风吹干了的羊肠发出的响声。于是，哈姆巴尔汗把羊肠带回毡房，找了一块木头挖空作琴箱，然后在上面安上指板，拨动之后，果然发出叮咚的悦耳之声。从此，冬不拉在哈萨克族人民中间世世代代流传下来了。

还有一种传说，从前哈萨克草原上有一个美丽的姑娘，她有勤劳的双手和美妙的歌喉。许多王公、贵族、“巴依”和头人向她求婚，都被她拒绝，唯独答应了一个年轻勇敢的猎手。猎手有着高超的骑术和箭术，还有嘹亮的歌喉。但姑娘还要试试他的智慧，她指着身旁的一棵青松说：“你要让青松说出你求婚的语言。”小伙子动手砍倒松树，锯断并劈成一个大木匙似的形状，再挖空木匙头部，安上羊肠作的琴弦，弹出了美妙动人的声音。这声音像思恋着的情人发出的誓言，感情是那么真挚和缠绵。美丽的姑娘十分感动，终于把自己的爱情献给了智慧的猎手。从此，冬不拉成了哈萨克族人民喜爱的乐器。

冬不拉可以独奏、伴奏，也可以合奏。哈萨克人歌唱时都用它伴奏。演奏时，多采取坐姿，琴体斜抱怀中，左手按弦，右手拨弹。弹奏方法大致可分向下弹和向上挑两种。弹时，食指、中指、无名指和小指并拢，指尖成一排，从上往下扫出，要求同时击弦。挑时，用拇指从下往上拨弦。此外，还有食指在弦上来回弹挑，食指和拇指上下轮流弹挑，食指、中指、无名指和小指并排在弦上来回弹挑等。弹奏时，一般多拨动双弦，仅个别情形下弹单弦。冬不拉音色明亮浑厚，音量不大。哈萨克族民间有许多

歌手，人们称之为“阿肯”。许多阿肯不仅能演唱民歌，而且能熟练地演奏冬不拉曲。优秀的哈萨克族阿肯同时也是优秀的冬不拉弹奏乐师。

●傣　族

傣族人口为1,025,128人(1990年统计)，主要聚居于云南省西双版纳傣族自治州、德宏傣族景颇族自治州和耿马傣族佤族自治县、孟连傣族拉祜族自治县。云南省的景东、景谷、普洱、澜沧、新平、元江、金平等县也有分布。

傣族自称“傣仂”、“傣雅”、“傣那”、“傣绷”等，解放后，根据傣族人民的意愿，统称为傣族。

傣族有自己的语言文字。傣语属汉藏语系壮侗语族壮傣语支，分为德宏方言、西双版纳方言和金平方言。文字来源于梵文字母的拼音文字，分傣仂、傣那、傣绷、金平4种，现通行西双版纳和德宏两种傣文。

傣族普遍信仰小乘佛教，同时保留着原始鬼神崇拜的残余，有的地区还有信仰基督教的。

花统裙

统裙又称桶裙或筒裙，是傣族妇女的传统服装。统裙历史悠久，在制作、式样上都独具特色。

傣族的统裙有长短两种，长者及脚踝，短者至膝盖。其制作方法是先将布织成方幅，然后稍加剪裁，缝制成为桶状。裙上横向织有各种花纹图案，或染成各种颜色。统裙最早是用木棉织成的娑罗布制作，后用棉布，讲究的用绸缎，现在除用丝绸外，多用尼龙、灯心绒、金丝绒等布料缝制。每逢节庆或街期，傣族妇女都要盛装打扮，身穿窄袖短衫和色彩艳丽的统裙，个个亭亭玉立，犹如群群孔雀与百花争艳，显得绚丽多姿。

傣　锦

傣锦是傣族的一种民间工艺，用细纱为经，红线为纬织成。纱支较粗，手感柔和，以彩色棉线为主，有别于丝织锦。傣锦在傣族民间极为普及，傣族妇女人人会织。

傣锦历史悠久，风格古朴，以其织工精巧、图案别致、色调鲜艳、坚牢耐用和富有民族特色而著称。傣锦的图案丰富多彩，因居住地区不同，形成各自不同的风格。西双版纳素有“动植物王国”之称，其傣锦多以白或浅色为底色，以动物、植物、建筑、人物为题材，所织孔雀、骏马、龙、凤、象、麒麟皆栩栩如生，象征和平、吉祥和力量；佛塔、寺院、竹楼等图案则寄寓着对美好生活的追求；版纳傣锦线条宽窄错落，形体夸张简练，图案规律化，具有粗犷、质朴感和浓郁的装饰性。德宏地区多以黑或深色为底色，红、绿、黄、蓝等浓色为纹，间或掺以金线，多以菱、方、

六角、回形纹等几何形为图案，结构严谨，纹饰古雅，浓艳谐和。

傣锦的花纹组织要求极严，首先要将花纹组织用一根根细绳系在“纹板”（花本）上，用手提脚蹬的动作使经线形成上下两层后，开始投纬线，如此反复循环，最后织成十分优美的傣锦。设计一幅傣锦图案，有时要将几百根、几千根细绳在“纹板”上表示出来，若结错一根绳，就会使整幅傣锦图案错乱不堪，可见一幅傣锦浸透傣族妇女多少辛勤劳动的汗水，展示出傣族妇女何等惊人的智慧。

傣锦在过去主要用于制作统裙、筒帕、被面、垫单、窗帘、手帕及某些宗教用品。现在傣锦的品种不断增加，新设计的花色新颖的傣锦屏风和沙发垫等新产品，以其鲜艳的色调、瑰丽的图案、浓郁的民族风格，在国内外深受赞赏。

香竹饭

凡到西双版纳傣家做过客的人，都会赞美那清香甜润的傣家香竹饭。

香竹饭是傣族人民招待宾客的佳品。关于香竹饭的来历，有一个故事：相传很久以前，有一 个吝啬狠心的领主，经常不让雇工们吃饱饭。一个聪明的雇工想出了一个办法，他用刀砍下一节节的香竹筒，把熟了的糯谷搓去外壳，放入竹筒，再加上水，然后放在火上烘烤，很快一筒筒清香四溢的糯米饭就做成了。雇工们再也不饿肚子了，香竹饭从此也就流传开来。

香竹是一种像鸡蛋粗、节长的细竹子，内壁有一层香气扑鼻的竹膜，因此有香竹之称。香竹，傣语称为“埋毫拉”，意为“煮饭竹”。做香竹饭时，先将舂好的糯米用清水泡透，再将香竹截成段，每段保留一个竹节做筒底，将竹筒洗净，放入泡好的糯米，加

入适量的水，用香茅草或芭蕉叶塞住筒口，然后将香竹筒放在火上烘烤，待筒口冒出热气约十分种后，竹筒里的饭就煮熟了。这时，取出竹筒，用木棒将竹筒捶软，捶得越软越好吃。捶软后，把竹筒剖开，一筒筒粘有乳白色竹膜的别有风味的香竹饭便可食用了。香竹饭柔软细腻，其味清香无比。香竹饭一般是用来给小孩当点心或招待贵宾的，如你能品尝到傣家香竹饭，那将是你一生的荣幸。

普洱茶

普洱茶是云南西双版纳傣族地区出产的名茶，是中国茶叶中的一秀，素以独特的风味、优异的品质享誉海内外。普洱茶因早年茶叶加工集散地在普洱县而得名。普洱茶的树种与国内其他地区的小叶种茶不同，版纳茶树是大叶种。茶树为高大乔木，不同于呈灌木型的一般茶树，是世界茶树原产地代表性茶树。普洱茶的特点是：外形条索肥壮均实，冲泡后其色浓红，饮后令人口角噙香，回味无穷。普洱茶性质温和，有消炎清热的功用和健身减肥之奇效。

普洱茶的品种很多，最常见的是普洱散茶，用普洱散茶可制成“普洱方茶”、“普洱沱茶”、“七子饼茶”、“普洱紧茶”等多种。西双版纳傣族种茶的历史已有一千余年，早在唐宋时期的不少文献中都有关于傣族产茶的记载。唐代南诏统治者所饮的茶即产自西双版纳等地。文成公主入藏时也携有西双版纳所产的茶叶。元、明、清时，普洱茶的生产达到了极盛时期，明代文人谢肇淛说，士庶所饮之茶，皆为普洱茶。清朝将普洱茶列为贡茶。我国清代的古典文学名著《红楼梦》中对普洱茶亦有过描述。普洱茶很早就销往国内外，唐代已运往西藏，宋代开始销往内地，清代普洱茶

已远销越南、缅甸、印度等地。现在普洱茶已远销日本和西欧的许多国家和地区，成为中外闻名的名茶。

普洱茶的产地为西双版纳的六大茶山，即基诺山、革登、倚邦、莽枝、蛮耑、慢撒，周围几百公里皆是产茶之地。如今在西双版纳州勐海县南糯山还有一株“茶树王”，树高 5.5 米，主干直径 1.38 米。据科学家考证，这棵茶树曾经过人工栽培和采摘，约有 800 余年的历史。茶树王虽年老而体不衰，四季郁郁葱葱，年年可采鲜茶。如今茶树王像一朵奇花，成为版纳人民心中的骄傲，也吸引了众多的国内外游客前来观光，而且他们总要在茶树下面留影做为纪念，同时也是希望普洱茶的芳香永远留在自己心中。

竹　楼

在西双版纳河谷平坝的大河两岸、小溪旁、翠竹丛中，隐现出一幢幢别致玲珑的楼房，这就是傣族人民喜好的传统住宅——竹楼。竹楼是一种干栏式建筑，因以竹子为主要建筑材料而得名，流行于西双版纳及孟连、耿马、德宏的瑞丽等傣族地区，以西双版纳地区最为典型。

傣族竹楼，每幢面积约六七十平方米，近似方形，以数十根大竹子支撑，在离地约 2.5 米处铺上楼板，房顶用茅草编成的“草排”复盖。梁、柱、墙壁、地板皆用竹子。竹墙的孔隙很大，既通风又透光，故楼内无窗。楼顶呈 A 字形，两面的坡度较大。竹楼分为两层，楼上住人，楼下用以饲养牲畜、堆放杂物，也是舂米、织布的地方。楼梯置于竹楼的一端，一般为九级。拾级登楼，先是走廊，正面为宽大的阳台，是放置水缸、洗晒衣物、淘米、洗漱及纳凉的地方。室内以竹篱笆隔为两间，内间为主人卧室，外间为堂屋。堂屋进门处有高出地面约十几厘米的火塘，供烹饪取

暖照明之用。堂屋既是接待宾客的场所，也是室内活动的中心。卧室呈长方形，有两道门与堂屋相通。男女数代同宿一室，席地而卧，一人一铺。睡觉的规矩是高处为上，低处为下，因此睡觉时必须头枕在高处，朝一个方向。卧室，外人不得窥视和入内。客人上楼时须将鞋子脱在楼梯旁边或走廊上，赤脚进屋。

竹楼周围，以竹篱笆为院墙。宅院内栽种着劲秀挺拔的椰子树，枝干高大的柑柚、芒果，香甜可口的香蕉、木瓜和婆娑苍翠的竹丛，呈现出一派浓郁的亚热带风光。

竹楼具有两大优点。一是能防蛇虫、防潮湿、防野兽。二是建筑材料来源广，就地取材，比较经济。这两大优越性，使竹楼历久不衰，成为傣家人十分喜好的住宅。

随着社会生活的不断变化，傣家竹楼也在变化。现在多数竹楼已改为宽敞的木楼或竹木结构的楼房。茅草盖顶已改为瓦顶或石棉瓦。楼内安设了玻璃窗，悬挂漂亮的窗帘，但仍保留了竹楼的传统建筑形式。

贺新房

建造新房，是傣族人民生活中的一件大喜事，因此，每当新房落成时，要举行隆重而别致的迁新房和贺新房的仪式，场面热闹欢快，充满欢乐的气氛。

按照傣族的传统习俗，进入新房前要举行乔迁仪式。先由主人邀请亲友和村中的老人来“坐堂”（坐新房），诵读经文以图吉利。届时，老人们带着礼物被邀坐在新房的堂屋里，然后，新房的家长披着蓑衣，戴着棕叶做的帽子，率领全家来到堂屋前向坐堂的老人们请求进入新居。这时家长向坐堂的老人们恳求：“尊敬的爷爷、奶奶们，我们请求在此吃住。”堂屋中一位德高望重的老

人便问："你们从何处来？带来什么东西？"家长回答："我们来自山村野林，带着子孙儿女、五谷牲畜和金银财宝。"老人又问："你们都是勤劳善良的人吗？"家长作了肯定的答复后，坐堂的老人们才允许主人乔迁新房。

乔迁仪式之后便是贺新房。先由主持仪式的老人宣布："吉时良辰到！房子稳固坚牢！夫妻和睦相爱！财富畜兴粮丰！百事如意！都是这一刻，上新房吧，亲友和贵客！"顿时，鞭炮齐鸣，"水——水——水"的欢呼声响彻新房上空。这时大家开始帮新房主人搬东西进新楼。首先上楼的是抬牛头的小伙子，他们唱着祝福的歌，跳着狂欢的舞，沿着楼梯，唱一段歌，上一级楼梯。打扮得花枝招展的姑娘们，手拿缸子和面盆，排列在楼梯两旁，把清香含情的祝福水，泼向欢歌狂舞的小伙子们。紧跟着抬箱子的壮年人，抱着被褥的已婚妇女和抬着饭菜的姑娘们依次上楼。人们进楼后将家具安排好，由壮年人在火塘上安放铁三脚架，并架柴烧火。人们围坐在一张张竹篾桌前，举杯畅饮，歌手们放开歌喉高唱祝福歌。当歌手唱到高潮时人们便不断爆发出"水——水——水"的欢呼声。贺新房便在这一片又一片"水——水——水"的欢呼声中结束。

笋　塔

笋塔坐落在西双版纳的曼飞龙寨的后山顶上，系傣族古代建筑的瑰宝。

笋塔，以其形状如雨后春笋而得名。曼飞龙笋塔是西双版纳塔中之佼佼者。笋塔呈圆形，结构新颖，外表美观，颇富傣族建筑艺术的特色。笋塔由一座母塔和八座子塔组成，母塔高20余米，子塔高10多米，犹如一棵挺拔刚劲的大龙竹之下长出来的八株竹

笋，给人以绚丽多姿的感觉。母塔塔基周长40余米，子塔塔基周长6米多。每个子塔都有一座神龛，神龛中有一尊佛雕像和一幅佛画像。佛雕像仪态传神，栩栩如生。佛画像色泽鲜明，神态自然。神龛之上还有一只腾空遨翔的泥塑凤凰。母塔顶端装饰着铜制“天笛”——铜铃，子塔的顶端各挂一具铜佛标。风吹铜铃和佛标，发出悠扬之声，数里之外皆可闻。

笋塔朝南的一面有一扇小门，里面有一佛教“圣迹”，即小门内的大青石上深嵌着的一个巨大脚印，脚印镀着厚厚的一层金粉，由两尊金身佛像守护着。脚印的前面，有一眼一米深的水井，井虽浅，且又在山顶，但却水花汩汩，取之不竭。脚印和水井，据说都是“帕召”（佛祖）留下的“圣迹”。因此，笋塔遐迩闻名，过去东南亚一带的香客络绎不绝的来笋塔朝圣。

笋塔入口处左右两侧，各有一条两米高的蛟龙镇守。笋塔侧有一佛寺，寺内供有佛像。寺前塑有麒麟一对，还塑有一只富有版纳特征的大象。寺塔相映，使笋塔显得更加雄伟壮观。

据傣文史籍《佛祖游寺》记载，笋塔建于傣历565年（公元1204年）的宋代，是在佛教传入傣族地区后，由傣族的能工巧匠建造的。

纺线场上结伉俪

傣族姑娘的纺线场，也是青年男女谈情求爱的情场。

傣族姑娘成年以后，毗邻的年龄相仿、性格相投的姑娘们便结伴在住地附近的空场搭起纺线场——“喊洪”。有的喊洪四周围有竹篱，设有简易的门，喊洪内还设有一个供照明之用的火塘。每当农闲季节，在夕阳西下，明月升空，缅桂花散发出阵阵幽香，夜来香飘进竹楼时，姑娘们便三五成群，提着纺车，带着草烟、槟

榔、花生、枇杷等果品和小凳子来到喊洪，点起篝火，摇起纺车，等待着蜂绕花枝。此时，村边的竹丛中也响起动听的歌声和傣族特有的木叶声。这是向姑娘们求爱的信号。歌声、木叶声由远而近，最后小伙子们便来到纺线场，他们披着毯子，蹲在篝火旁，边挑动篝火，边和姑娘们谈笑。如果话不投机，姑娘便用含蓄话语或歌声来拒绝小伙子的求爱，或者故意将纺车弄出噼里啪啦的怪声，表示逐客。如果姑娘有意，就拿出藏在裙下的小凳，请小伙子坐，并用风趣而富有寓意的话向小伙子提问："阿哥呀，阿哥，你今天是用南瓜下饭，还是用盐巴下饭。"（这是傣族的两句谚语："用南瓜下饭对姑娘满心喜欢，用盐巴下饭有困难才来洽谈"）如果小伙子回答是"用南瓜下饭"，姑娘就知道小伙子喜欢她，于是两人越说越亲热，距离也越来越近，最后小伙子便勇敢地把毯子展开，与姑娘依偎在一起。此后，就停止纺线，互诉衷情，一直到东方破晓，晨鸡齐鸣，方才依依不舍的归家。如此多次互抒情怀，最后结为伉俪。

一线系鸳鸯

傣族婚礼隆重而风趣，其中颇具民族特色的是拴线仪式。拴线，傣语叫"树欢"，直译为"拴魂"，意即把新郎新娘的魂拴在一起。

傣族婚礼一般在女方家进行。婚礼之日，先将一张竹篾小桌放在竹楼堂屋靠里的一端，桌面上铺一层芭蕉叶，放两个芭蕉叶做成的圆锥形盒子，盒子里面放有煮熟的雌雄鸡各一只。桌上还要放一杯酒、红布、白布、芭蕉、甘蔗、盐巴以及盛有糯米饭和白线的芭蕉叶盒子。主婚人坐在婚礼桌的上首，亲友紧挨主婚人围桌而坐，新郎新娘按男右女左跪于主婚人的对面。拴线仪式开

始时，先由主婚人致贺词，在座的人均伸出右手搭在婚礼桌上，低头聆听贺词。贺词大意是希望新婚夫妇相亲相爱，不争不吵，互相体谅，互相尊敬，白首偕老，永不离分。贺词念毕，新郎新娘要去争抢泡在酒盅里的槟榔叶，按傣族的传统习俗，谁先抢到酒盅里的槟榔叶，谁就会在未来的家庭中居于主导地位。尔后新郎新娘各从桌上拿起一团糯米饭，先在酒杯里蘸一下，然后一一点祭鸡、盐等物，如此三次。接着主婚人站起来，从桌上拿起一根较长的白线，一端搭在婚礼桌上，然后从左至右绕过新娘新郎的肩和背，将另一端再搭在桌上，表示把一对新人拴在一起，祝福他们永远相亲相爱，白头偕老；尔后，主婚人再拿起两根较短的白线，分别拴在新婚夫妇的手腕上。接着在座的老人亲友用白线分别拴在新郎新娘的手腕上，通常是男方亲友先给新娘拴，后给新郎拴，女方亲友先给新郎拴，后给新娘拴。边拴边祝福他们婚后的生活像甘蔗一样甜美，祝他们的幸福像贝叶一样长绿，祝他们的爱情像澜沧江水一样纯洁，祝愿他们生儿子会犁田、盖房，生女儿会织布、插秧。拴线礼便在一片祝福声中结束。

丢包觅佳偶

丢包不仅是傣族青年男女喜爱的一种传统娱乐活动，也是他们选择对象、寻觅情侣的一种方式。每当傣历新年来临之际，姑娘们就精心地用花布条拼制一种多菱形的布包，包内装满棉籽，四角缀有花穗子，正中有一根60厘米左右的提绳，包上还绣有各色花纹。这就是姑娘们的爱情信物——花包。

丢包时，身穿盛装的姑娘和小伙子来到约定的广场上，男女各为一队，相对而立，相距约二三十米。男方由小伙子头“奈冒”带领，女方由姑娘头“奈少”带领。开始，姑娘们先将花包抛向小伙子们，然后是漫无目的地互相乱掷，若对方接不着包，就意味着输了，得向丢包人敬献鲜花和其他纪念礼物，若女方接不着男方丢来的包，也要向男方献一朵鲜花。

丢包进行到一定时候，就转入互相物色对象的阶段。此时，当姑娘看中自己喜爱的人时，就把心爱的花包掷给他，对方接住了，就表示他也有意于她。于是，两人就对掷起来，你来我往，意味着将自己的心交给对方。这样互掷一段时间后，姑娘忽然把包掷得又高又远，会心的小伙子就佯装接不住花包，然后走到姑娘面前愉快地认输，并把事前准备好的礼物送给姑娘，于是两人一同离开丢包场，或到村边的树林中，或到僻静的小河旁去倾吐爱慕之情。

裹毯子谈恋爱

裹毯子谈恋爱，是流行于傣族，特别是德宏地区的傣族的一种普遍的恋爱方式。这种恋爱方式别致而又富有情趣。每当节庆、

宗教活动或赶街的日子都是裹毯子谈恋爱的极好机会。男青年在物色情侣时，无论酷夏严冬，皆身裹一条毯子，毯子的颜色五花八门，但以草绿色的为多。毯子不是披在身上，而是裹在身上，换言之，即用毯子蒙住头发、耳朵、鼻子和嘴巴，仅露出一对眼睛。他们单独或集体立于路旁，等待自己的意中人。单独等待者有两种情况：一种是初次选择情侣，裹着毯子站在路旁，搜寻自己的目标。若相中某一过路姑娘，男青年便上前攀谈，如果姑娘也有意男方便用毯子将自己和姑娘裹在一起，边走边谈，或者同到一个僻静的地方谈情。若双方同意，便约定下次相会的时间和地点；如若双方谈不来，则友好地分手，决不结下怨恨。另一种是等待去年相中的那个姑娘。在这种情况下男青年得相当耐心等待，天气再热，裹着毯子汗流浃背，也不能将毯子拿掉，因为毯子乃是一种标志，便于姑娘识别。姑娘来了以后，两人遂一同到僻静地方幽会。

集体裹毯子求爱者也不少见。一群裹毯子的男青年在路边漫游，若遇到一群姑娘，男青年们便上前邀约，若姑娘们同意，便在一处旷野燃起篝火，或唱歌跳舞，或做游戏，在攀谈中相互了解，增进感情。若双方有意，男青年便用毯子将姑娘和自己裹在一起，离群而去，在僻静之处倾吐爱慕之情。

傣族葬俗

傣族的葬法有三种：土葬、火葬、水葬，一般平民多是土葬，僧侣、贵族多行火葬，凶死者实行水葬。

傣族习俗，人临死前，要由亲属为其念经，并从佛寺取来一块黄布，盖在身上，以示其为佛教信徒。人死后，由家人抬到堂屋正中的柱子前，更衣沐浴。洗脸时，必须由下往上，以示与活

人有别，并在死者口中放入一些金、银。妇女死后，则要穿上最好的衣裙，戴上首饰。死者用白布裹尸，放进用白布铺底的棺材后，再盖一层白布，然后封棺。根据死者家境和身份，停灵一至三天。停灵期间，全村要停止一切生产活动，为死者守灵，办丧事。还要请僧侣念经超度，制做冥房。守灵者可以喝酒、跳舞，史籍称之为“娱尸”。

出殡之前，要选择墓地。墓地选择的方法有二种：一种是用一个鸡蛋先在尸体前祷告，然后将鸡蛋掷于村寨公共墓地的地上，鸡蛋在哪里摔碎就在哪里下葬。另一种是用点燃的蜡烛放在砍刀上，由人举着在坟场中来回跑动，蜡烛在哪里熄灭，死者就葬在哪里。

出殡时，由佛爷、波占（宗教活动的主持者）在前引路，由村人抬棺，棺后是送殡者。送葬沿途要扔出一些死者生前用过的物品，以备死者在阴间时使用。葬后不留坟堆，不守孝，不祭拜，也不扫墓。

小乘佛教

小乘佛教即“南传上座部佛教”，经由缅甸、泰国传入我国傣族地区，已经有1000多年的历史。在公元十五六世纪时，佛教已渗透到傣族人民生产、生活的各个方面，成为全民性宗教，对傣族的社会政治、经济、文化有着深刻的影响。

西双版纳、德宏等地的傣族有寨必有寺，人生的每一个环节都离不开佛教，出生时要请僧侣取名，生病要拜佛，从小要跟随父母礼佛听经，参加各种佛事活动。男孩长到十岁左右要进佛寺当和尚，当过和尚还俗后的人才被认为是受过斋戒、有教养、有学问的人，受社会的尊重。没有当过和尚的人，被称为“岩百”、

“岩令”，即没有知识、不开化的愚人，被人瞧不起，甚至找对象都困难，死后也没有人给念经超度。因此，过去傣族的男男女女都是佛教的虔诚信徒，佛在他们的心中占据着极为重要的地位。

傣族的小乘佛教分为不同的派别。西双版纳属润派的摆坝（山野派）和摆孙（田园派）两个支派。德宏、临沧一带属摆庄、多列、左底三派。各派的区别主要是戒律和祈祷仪式的不同，摆孙、摆庄戒律较宽，僧侣和信徒人数较多。摆庄派僧侣可食肉、吸烟，还可自由出入民家。摆坝、多列、左底派戒律较严。摆坝派僧侣原来隐居山林，终生独处。左底派僧侣过定期流动的集体生活。左底、多列两派还禁止杀牲食肉，信徒皆不许饲养猪、鸡等禽畜。

小乘佛教的各派僧侣皆划分为不同的等级，并有一套严格的升迁制度。西双版纳僧侣分为七个等级，男孩入寺受戒后称为“怕”（和尚，其中有大、小和尚的区别），由“怕”递次升为“杜”（佛爷，其中有大、小佛爷之分）、“祜巴”（一个地区的大佛爷）、“沙弥”、“桑哈拉鲊”、“帕召祜”、“阿戛门里”。“阿戛门里”是僧侣中的最高一级，学识渊博，只有“召片领”（西双版纳最高封建领主）的血亲才能担任。耿马和德宏地区的僧侣分为“内拉多”、“早闷”、“早丈”、“中丈”、“早尚”五个等级。不同等级的僧侣在佛寺中的地位也各不相同。

傣族佛教寺庙有一套从上至下的组织系统。西双版纳最大的佛寺叫瓦竜，统辖全地区所有的佛寺。各勐所在地也有一座瓦竜，统辖全勐的佛寺。勐以下陇、播、火西等行政单位也各有一座中心佛寺，统辖各村寨的基层佛寺。

傣族佛寺中保存了大量的傣文书籍，其中很多是刻在贝叶上的，称为傣文贝叶经，也有写在纸上的佛经，西双版纳号称有经文 84000 卷。除经卷外，还有各种佛教故事、文学作品、历史记

载、天文历法、医药卫生、数学以及语言等傣文著述。僧侣在佛寺可掌握有关佛教的知识，还可学到一定的文化，因此佛教在继承、传播傣族文化方面起到了一定的作用。但佛教所宣传的唯心主义宿命论思想，有其消极作用。

灵披勐

“披勐”，又称“丢拉勐”，傣语意为神，是云南西双版纳等地傣族崇拜的保护神。“灵”傣语为祭祀，灵披勐就是祭祀部落神，是傣族最大的祭祀大典。

西双版纳傣族聚居区共分为30多个勐一级的地区，每个勐都有一至几个勐神——披勐。有的披勐据传说是最早建立该勐的英雄和领袖人物，也是部落酋长的化身；也有的是该勐历史上曾经被战败的魔鬼。对这些披勐都必须按时祭祀，以祈求其保佑平安和丰收。

灵披勐是全勐性的祭祀大典，故规模盛大、仪式隆重。一般是一年一祭，或一年三祭，也有三四年甚至九年一祭的。每次历时两三天。从祭礼开始，全勐要停止生产和其他活动。在祭祀的日子里，首先要用竹排、树枝插在通往其他勐的路口，或安置其他标志，表示关闭勐门，防止非本勐成员闯入。如有非本部落神保护范围内的外人误入，将要受到处罚。

灵披勐要举行隆重而繁琐的仪式。首先，祭祀用的牲畜要经过严格的挑选，一律用公水牛，体大膘肥，完整无残，有的地区是纯白色，有的地区是纯黑色，不得有一根杂色毛。参加祭祀的人必须严格遵守规矩，并要着统一的服装，男子要包同一颜色的包头，背包一律挎在左边。妇女不得参加，小孩也不许上树观看。开祭时，将祭牛牵到祭坛，头东尾西，牢牢地拴在祭神桩上。祭

司身着红色衣服，缠花布包头，腰持利刀和助手一起来到祭场，站在祭神台祈祷，以鸡酒祭天地，祈求上天赐福。然后用树枝反复在牛背和其他部位来回甩动，并不断高喊“杀牛！杀牛！”使祭牛畏惧，此时，祭司助手手持削尖的竹片向牛的肋部猛刺，从牛倒地的方向和姿势判断吉凶。然后，将部分牛肉、牛皮烹调作祭祀后，分给在场的祭司、官员和群众，过去还要分给土司一条牛腿，最后祭司再次祈祷，保佑全勐平安。

道不拾遗

道不拾遗，夜不闭户，在傣族的乡村是普遍现象。进入傣乡村寨，在座座竹楼中，你见不到农家院门紧闭上锁的情景。傣家竹楼的周围仅以矮木栅或竹篱笆作院墙，院门只是矮矮的柴扉，而且院门和竹楼的家门均虚掩着，无锁无插销。矮院墙和虚掩着的门，并不是为防盗而设，只不过是为防止家禽家畜乱跑才设置的。

傣家人从古至今有一条不成文的规矩，即把偷盗视作最大的耻辱。凡不属自己的东西，贵重至黄金、宝石，小至一针一线，一概不能拿取，否则，即是奇耻大辱，为村人所不齿。不仅大人如此，就是小孩也从小就培养起这种道德观念。傣家人对偷盗者用一种习惯的“法律”加以约束，轻者警告，重者开除出寨，这在过去就意味着走向死路。因而在傣乡很少发生偷盗事件。今天，竹楼旁的谷仓、竹楼下饲养的鸡鸭，邻里都互相信托，彼此放心，从不担心丢失。即使是鸡鸭一时找错了窝，到别的竹楼下生了蛋，细心的邻居也能从蛋的形状、颜色上判断出其主人，主动送回。

赶花街

每逢农历五月初六，居住在元江、新平、景谷等地的傣家村寨便沉浸在一片节日的欢乐声中，欢庆一年一度的传统佳节——赶花街。

赶花街的历史来源已无法考证，据民间传说，原来是男女青年不定期的对歌择偶的日子。后随着历史的发展，时间的推移，逐渐演变为传统的节日，其规模不断扩大，内容也变得丰富多彩了。

节日当天，火红的太阳刚露头，在那湛蓝的江边、凤凰花下便人潮如涌，欢声雷动，成群结队的男女青年向花街中心汇聚。姑娘们头戴鲜花，身着花边统裙，背着猪油糯米饭和美味食品，准备给自己的意中人吃。小伙子们也穿着漂亮的衣服，带着最佳的美酒，来找他们的情人共饮。

年轻的姑娘们并不去观赏那琳琅满目、五光十色的商品，却在母亲和亲族婶娘的陪伴下，与本村的其他姑娘们东一群、西一伙地摆开随身带来的糯米饭、猪肉干巴、腌鸭蛋、冰糖、水果等美味食品，边品尝边比美，说长道短，指手划脚，选择自己的意中人。一旦姑娘喜欢上某小伙子，便在母亲等人的陪伴下，带着食品，移到小伙子身边对歌，以沟通感情，试探对方的诚意和人品。对歌时，吟唱者先用花毛巾遮住自己的面部，歌声一停便取下毛巾，因此人们赋予这种对歌一个美妙的名称——“蒙面情歌”。双方歌来歌往，委婉甜美，情趣盎然。对歌时，母亲和婶娘并不离开姑娘，一直守在身边，还不时对姑娘进行提示和开导。直到红日西沉，人们才兴尽而归。每年的赶花街，都促成无数的恋人结为伉俪。

放飞灯

飞灯，傣语称“贡菲”，是傣历新年的一项传统娱乐活动。放飞灯据说原先为歌颂佛祖的佛法无边，后来含义有了变化，傣家人把飞灯放上天，以寄托理想和愿望，表示傣族人民的光明前景。

飞灯形似现代的热气球，以热气作动力，使其升空。它是用韧性很强的构皮纸 84 张，糊成一个大球，大如一间傣家竹楼，下面留有一孔，孔周围系 1 米多长的粗绳四条，绳端系一粗篾圈。先将纸球张开，点燃柴火向球内熏热气，几分钟之后，纸球便膨胀起来，产生上升力。然后在一个十字木架上绑上浸透生油的白布，引火点着，再把燃烧着的木架绑在篾圈上，此时松开手，纸球便带着一团火冉冉上升，越飞越高。初时如一个大气球，下面带着熊熊燃烧的火矩，后来逐渐变成一盏挂在天空的明灯，最后便像一颗明亮的星星闪烁在天际。做飞灯用的纸是傣族自制的，它是用傣族地区特产的构树皮制成，其纸坚固如羊皮。下边的火炬是用浸在油中数十天的生布缠成，作为飞灯的热气来源。它可燃烧十数小时而不灭，所以一盏飞灯放上天，到次晨火仍不灭，待油布燃尽后，飞灯还可完整地落下来，只不过已在数十公里之外。飞灯制作技术之精湛实在令人赞叹。飞灯的下面，还可悬挂无数的烟花球，用火药线互相联在一起，当飞灯上升时点着引线，升到半空，烟花不断爆开，发出五彩缤纷的亮光，犹如天女散花。

龙船赛

傣族每逢新年都要举行隆重而热闹的龙船比赛，这是傣历新年的一项重要活动．尤其是澜沧江边的景洪坝和橄榄坝地区，这

项活动尤为隆重。

关于龙船赛，在傣族中有一个动人的故事。相传在古时候，勐巴拉纳西（西双版纳）的国王作恶多端，人民的生活痛苦不堪。天上的一颗星星知道后，萌发了怜悯之心，于是变作一个人身蝉面的人——洪窝（傣语称人身蝉面的人为洪窝）来到勐巴拉纳西，与国王经多次较量，最后在龙王、天神的帮助下以赛龙船的形式，严惩了国王。洪窝从此做了勐巴拉纳西的国王，给人民带来了幸福。傣族人为了纪念洪窝，每年新年举行划龙船比赛，龙船上芒锣发出的“洪窝——洪窝”的响声，就是在呼唤洪窝。

龙船赛在新年的第二天举行。除夕那天，参观的男女老幼从四面八方不断涌来，在宽阔的江滩上，搭起看台和发奖台，还有耸立着的高升架以及各种销售食品的棚子。龙船以木做成，扎以彩花，并装成龙、孔雀、大鱼等形象。龙船狭长，每只可乘六七十人。比赛开始前，所有赛船手都紧握船桨，静静地站立船中央等待出发的命令。锣声一响，无数的龙船便唰唰地在江面上疾速前进。船头一人做俯卧撑状，促使赛船加快速度，船尾一人紧紧掌握方向。赛手奋力向前划桨，龙船你追我赶，两岸观众不断发出“水——水——水”的加油声，赛手们则不断发出“洪窝——洪窝”的喊声，船上船下一片欢腾。龙船便在欢呼声和加油声中竞相冲向终点。

泼水节

泼水节是傣族最隆重、最富有民族特点的节日。泼水节是傣历的新年，相当于汉族的春节。泼水节傣语称为“桑罕比迈”，因在节日期间人们相互泼水祝福，故名泼水节。云南的布朗族、德昂族、阿昌族也过此节。

泼水节的来源在傣族民间有着许多神奇的传说。据说在远古时傣族地区有个魔王作恶多端，人们恨之入骨，却又奈何不得。后来魔王抢来七个姑娘作妻子，聪明的七姑娘从魔王口中套出其致命弱点，才将魔王置于死地。但当魔王的头掉到地上时，地上就燃起大火，姑娘一抱起魔头，大火即熄灭，为避免大火燃烧，七个姑娘便轮流抱着魔王的头，一年一换。每年轮换时，人们便向抱魔头的姑娘泼水，以冲去身上的血污，洗去一年的疲劳。此后，为纪念这七位姑娘，就形成了一年一度的送旧迎新的传统节日——泼水节。

泼水节的时间在傣历六月六日至七月六日之间，相当于公历四月。这时，犁田、栽秧的农忙季节即将开始，为辞旧迎新，祈求佛祖和天神保佑五谷丰收、人丁兴旺，人们尽情欢乐，互相祝福。节日的前几天，傣家便忙着杀牛宰鸡，清扫房屋，擦洗碗盏用具，缝制新衣，准备节日的食品和祭品。节日活动要持续三至四天，第一天叫“宛多尚罕”，意为除夕；最后一天叫“宛叭宛玛”，意为“日子之王到来之日”，即傣历元旦；中间的一天或两天是介乎两年之间的空日，叫作“宛脑”。节日的第一天清晨，男女老幼都要沐浴更衣，青年们则盛装打扮，穿最漂亮的衣裙，戴上最喜爱的首饰和鲜花。有的地区在泼水节的前一天，青年男女还要上山采摘野花和树枝，在佛寺前扎花房或搭花塔，同时还要堆沙塔。泼水节这一天，人们很早就抬着供品到佛寺里赕佛。先在沙塔和供品前滴水，尔后膜拜佛像，聆听僧侣诵经，为全家祝福。这时，姑娘们挑来一担担飘着香花的清水，倒进用木料做成的龙身里，香水从龙口中流到佛像身上，为佛洗尘。人们用洗过佛像的水洗眼睛，祈求佛的保佑。老人们用手或树枝洒水，彼此洗尘，互相祝福。年轻人先为老人泼水祝福，然后便互相泼水嬉戏和彼此祝愿。泼水时，起初用手或碗泼洒，后来便用盆、桶泼，

边泼边歌，越泼越高兴、激烈，鼓声、锣声、泼水声和“水——水——水”的欢呼声响成一片。过往行人和远方的来客也要参加泼水，以示祝福。德宏地区，还要走村串寨泼水三天。

泼水节期间，还举行赛龙船、丢包、放飞灯等传统娱乐活动和各种歌舞晚会。入夜，人们在灯火照耀下，纵情歌舞、欢呼。现在泼水节期间，还增加了文艺演出、电影晚会、体育竞赛、物资交流等活动，更加丰富了节日的内容。

象脚鼓

象脚鼓是傣族最具代表性的民族打击乐器，几乎每寨都有一套或数套。布朗族、基诺族、拉祜族、景颇族受其影响也都有象脚鼓。

象脚鼓有着悠久的历史，明代以前就已经使用。傣族传说，象脚鼓是由古代两位驯象驭手仿照象脚创制的，因而命名为象脚鼓。象脚鼓制作很费工，先要选择适当的曼么树或芒果树树段做鼓身，削成中间细两端粗，然后再将圆木镂空，鼓面蒙以牛羊皮，鼓面四周穿以牛皮索与横绕于鼓身的皮带相连，演奏前可调整皮索松紧以定鼓音的高低。鼓身涂有鲜艳的色彩，并雕有孔雀图案或用孔雀羽毛加以装饰。鼓身上系有编成花纹的背带，还系有黄色或其他彩色绸带。演奏前还需要用糯米饭在鼓面中心粘一圈，使鼓声更加悦耳。

象脚鼓的种类很多，大小也不一样，大致可分四种：大号象脚鼓，鼓长可达 3 米多，后半部鼓身较细，鼓面和尾面的直径约 40 厘米，演奏时尾部放置地面，背起背带。大号象脚鼓，鼓音厚实，鼓语丰富，气势雄伟，鼓音传得很远，但鼓手较累，一般一次只能演奏三至五分钟。中号象脚鼓，鼓身长约 90 厘米，鼓面与

尾面的直径约30厘米，鼓身后半部较细，这种鼓多流行于德宏地区。次中号象脚鼓，鼓身长约60至80厘米，粗而短小，鼓面及尾面直径约30厘米，此鼓在西双版纳最为流行。因鼓身短而轻巧，便于边奏边舞，且鼓音浑厚、大方，因此很受青睐。小号象脚鼓，鼓身长约40至50厘米，鼓面和尾面直径约20厘米，大多供傣族儿童学习象脚鼓时使用。

象脚鼓的演奏方法多样，有拳击鼓心、掌击鼓心和指击鼓心等方式，还以指击鼓边相配合。击鼓者可根据需要，将几种奏法交替使用，使鼓音强弱快慢节奏分明，形成一种热烈欢快的气氛。

象脚鼓除用于伴奏外，青年男子还可边奏边舞，称为象脚鼓舞。舞时，将鼓上背带挎在肩上，鼓斜挂腋下，双手拍击鼓面，在芒锣、铙钹伴奏下，舞蹈者踢腿蹬脚，很像比武，其场面十分壮观。

●黎　族

黎族人口为1,112,498人（1990年统计），主要分布于海南省。

黎族自称“孝”、“岐”、“美孚”、“本地”等。“黎”这一专有族称，始于唐末，固定于宋代，沿用至今。黎族有自己的语言，黎语属汉藏语系壮侗语族黎语支，不同地区有不同方言。1957年，创制了拉丁字母拼音文字方案。

黎族宗教信仰以祖先崇拜为主，杂以自然崇拜，有些地区还保留着图腾崇拜的痕迹。

黎族桶裙

桶裙，是黎族妇女服饰。桶裙一般用野生爬地毛藤、山麻纤维或棉花纺织而成。因黎族支系和居住地区不同，桶裙的长度和图案也存在差异。侍黎支妇女喜穿长桶裙（75～80 厘米左右）。至于花纹图案，流行于乐东县三平地区的桶裙，织绣的多是抽象化的动物图案，桶裙身绣一条或几条细线，用白线绣成矩形环列的几何花纹；抱由地区的桶裙，多织“黄莺在森林中”的象征性纹样；志仲地区的桶裙则是织抽象的猫纹，整条桶裙（桶裙头除外），从腰部至尾部布满花纹；望搂溪中游一带和三亚市一、四区，东方县一、三区则普遍流行乌鸦花；陵水地区的桶裙上多描绘婚娶礼仪中的人物，使桶裙显得生动活泼，富有情趣。

杞黎支除了保亭黎族苗族自治县九曲岭地区的妇女穿长桶裙外，一般均穿短桶裙，长至膝盖，大多织绣几何纹或人形纹，织工比较粗犷、古朴。

聚居于白沙黎族自治县境内的本地黎支妇女穿的桶裙，特点是短而窄，长仅 29 厘米，桶裙尾在膝盖以上 20 厘米左右，上不能遮盖小腹，俯腰即露出臀部，是黎族桶裙中最古老的一种。这种桶裙的花纹和色调虽然比较单纯，但由于在织造时有意嵌入一些云母片、金银箔、明片或羽毛等，使桶裙闪闪发光，显得华丽。

分布在东方和昌江黎族自治县的美孚黎支妇女所穿的桶裙属于特长型，其长往往可以覆盖脚面。这种桶裙分为纯扎染裙和彩织桶裙两种，均由 5 幅桶裙布缝接而成。前者，5 幅布均属扎染，后者，第二幅布即桶裙头是以红色棉线为主，配以各色丝绒线织成的，其余四幅都是扎染纹布。

居住在保亭、陵水、琼中和三亚市交界地区的台黎支妇女所

穿的桶裙，属于长型。由于受汉族服饰的影响较深，桶裙头花多已省去，桶裙身多是黑色或横细线条纹，只有桶裙尾花嵌入云母片，能显示出民族传统特色。

拉梓隆

“拉梓隆”系黎语，意为嚼槟榔，是黎族古老习俗，流行于海南省三亚市和陵水、乐东等地。

拉梓隆是黎家的嗜好，平时不论在家里闲谈，下田劳动，或是走在路上，嘴里不停地嚼着槟榔。槟榔还是待客、订婚不可缺少的佳品。客人来访，主人得先招待客人拉梓隆，以示欢迎；小伙子看中了某个姑娘，就得托人往姑娘家送梓隆，表示问亲。若女方收下梓隆，就表示允婚，若女方退回梓隆，则表示婉拒。

拉梓隆，分生吃和干吃两种。生吃时，取刚摘下的新鲜槟榔，连核切成小指大小若干片，放进嘴里咀嚼；干吃时，先把生槟榔放进锅里煮熟，切成两半，用线穿成串晾干，长期保存，随吃随取。无论生吃还是干吃，都要与贝壳灰、烟丝等一起用蒌叶包成三角形，放进嘴里咀嚼。初嚼时，口水呈黄色，味苦辣；继续咀嚼时，味由涩变甜辣，口水变红，牙齿、嘴唇也随之变红，脸部有些发热。据说，拉梓隆有助消化、驱绦虫、降血压、提神和健胃等作用。

布隆亭竿

“布隆亭竿”系黎语，意为竹架棚房子。因状似倒扣在地上的船只，故又称船形草屋或船形屋，主要流行于海南省黎族地区。据传说，黎族人民设计和建筑船形布隆亭竿，是为了纪念早年漂洋

过海来海南岛居住的祖先。就类型而言，布隆亭竿有铺地型、高架型和向金字型过渡三种。其共同的特点是：用茅草或蒲葵叶作屋盖，以木头或粗竹子作柱子和梁；墙身一般为非承重墙，最常见的有编竹抹泥墙、竹条墙、竹笪墙和椰叶墙等。地基和边墙用石块垒成，其上架着纵向和横向的大竹竿或木条。架空地板的内地台，一般为原土夯实。

三种布隆亭竿各有独特之处。如主要流行于昌化江上游的通什、番阳和毛阳杞黎地区的铺地型，属竹木结构，既原始又简单。在建造时，先按纵长方形平面在地上立柱子，柱子的上端带有天然树叉或人工砍成的叉，作为支承屋梁用，再用石头垫高 30 厘米左右作地板。然后，在中柱和檐柱上面分别架脊梁和檐梁。接着，在脊梁和檐梁上架人字形小斜梁。小斜梁的下端为弧形，其上搁小檩条。小檩条上铺有用竹子或细树枝编成的方格子网，从屋脊顺着斜梁方向一直延伸到地面，覆以茅草，从屋脊两侧直垂至地面作墙，形成屋盖与檐墙合一的船篷状。全部构件的搭接处，均用藤条或野麻缚扎缠紧，使全部构件连成一个整体，有利于增强房屋的稳定性和提高抵挡台风的能力。

布隆亭竿分大屋和小屋两种，大屋有主柱四根，高和宽为 3 至 4 米左右，长十几米，设两个火灶；小屋只有主柱两根，高和宽为 2.5 至 3 米，长约 5 米，只有一个火灶。窗户设在屋顶侧面一处或两处，实际上是能够开关的天窗；门设在屋子的两端，门上的屋檐向前伸展，屋檐下是挂小孩布吊兜、摇篮、器物或休息座谈的场所。火灶设在门内的一角，灶旁放着水缸和一张高于地板的竹筏，供放置餐具和炊具。灶的上方悬挂一块竹筏，用来烤干食物用。屋内没有间隔和睡床，一般在灶旁的地板上铺席子，一家人席地而睡。

目前，在黎族地区，布隆亭竿已不多见，多数住宅已为尖顶

所代替，有些地区还出现了仿汉式住房。

热　婀

“热婀”是黎语侬孝方言，本意为玩，引申义为恋爱，是旧时黎族未婚青年恋爱方式之一。

黎族男女青年一般在十五六岁开始热婀。热婀分野外、村里和布隆闺（即未婚女青年的卧室）三种。野外热婀，通常在每年春季进行，农历正月初二至初五进入高潮 。届时，各村寨的未婚男女青年，每天早饭后，三五成群去野外游春。在游玩中，男青年以吹口哨（即吹指甲）或对歌的形式与女青年互致问候和搭话。经过了解，如男女青年双方有意便建立联系，每天或每隔三五天的晚上，男青年主动前往女青年家去玩，进一步接触和了解。待双方有了爱情基础以后，男青年便告知父母托媒人去女家送槟榔（即订婚）。

村里热婀，一般在男方或女方村中举行婚礼、做七或“沃八”（即“做佛”）的晚上进行。届时，附近各村寨的未婚男女青年都来参加。男女青年相遇后，经过搭话或对歌，双方投合的便相邀到野外僻静处长谈。此后，男方一有机会就主动到女方家玩，直至结婚为止。

布隆闺热婀，即男青年到布隆闺找女青年玩。太阳一下山，男青年打扮一番后，扛上枪，挂上刀，带着口弓（即口琴）或“租”（即鼻箫）步行到布隆闺去。男青年走到女青年住的布隆闺前，先不敲门，而是站在门外唱“请开门歌”。女青年听到歌声，若不愿对方进去，就唱“不同意歌”，男方也不生气，而自动离去；若听到女方唱“请进歌”，男青年就大大方方进去。但进去后，不能随便坐下，须等到女方唱完“请坐歌”，男青年唱完“答谢歌”，

才能按女方的指点坐下。男青年坐下后，接着唱“来意歌”，女青年如同意与之交朋友，就唱“迎意歌”。紧接着，男唱“试情歌”，女唱“投情歌”。由此你问我答，你唱我和，非常投机。以后，夜夜如此，月月这样，直至决定结成秦晋之好。

逗　娘

“逗娘”是黎族的婚娶风俗，即婚礼过程中的各种逗趣。其形式因支系不同而异。杞黎的逗娘活动，在婚礼过程中，要进行三次。第一次在娶亲的当晚。送亲队伍还未到达新郎村寨前，小伙子们点上火把守候在寨门。送亲队伍一走近寨门，小伙子们便举起火把争着照新娘和伴娘们的脸，看谁长得漂亮。此时，新娘和伴娘们就用精制的小圆竹笠掩住脸蛋。小伙子们改用动听的歌声去引逗，但姑娘们则把脸儿藏得更严密。于是小伙子们只好下狠心用火把去熏新娘和伴娘们的脸，用棍子绊姑娘们的腿。新娘和姑娘们这时只得走走停停，东躲西藏，但脸儿还免不了被熏得乌黑乌黑的，累得汗水淋淋，直至跨入新郎家门槛才算闯过“难关”。

第二次是在洞房里，新娘与新郎“争位”。上半夜，新娘吸完“屯酽”（缸装甜酒）后，和新郎入洞房休息。此时洞房里摆有新桌一张，上面放着“福酒”、糯米团和一盏煤油灯，灯前顺排着两张椅子。新郎和新娘一进洞房，要互相争坐最靠近煤油灯的椅子。谁首先抢到那把椅子，谁就一生管住另一方。新娘唯恐婚后受欺，就拼命地争坐前面的椅子，而新郎也不相让。如不分输赢，新郎和新娘往往暗地达成默契，由新娘把前面椅子让给新郎。新郎与新娘争位时，宾客聚集在洞房内外观看、嘻笑，场面十分热闹。

第三次是次日上午小伙子们和姑娘们争抢糯米团。当时，送

亲的姑娘们正紧张地舂糯米团，准备带回家分送亲友。小伙子们先是围观，等糯米团快舂好时，便动手去抢。顿时，你抢我护，你护我抢，场面十分热烈。有的小伙子手快，抢走了糯米团，也有的小伙子，不但没抢到糯米团，反而被机灵的姑娘们抓住。于是，姑娘们便顺手抓起糯米团往小伙子的头发上使劲地揉抹，让他三天三夜也洗不掉。

婴儿穿衣仪式

婴儿穿衣仪式是黎族美孚黎支系生活习俗，流行于海南省东方黎族自治县的美孚黎支系地区。穿衣仪式，男婴一般在出生后的第13天，女婴一般在出生后的第14天举行。届时，婴儿家都要杀鸡宰鹅，宴请客人，一般是生女请女客，生男请男客。仪式开始时，男婴由母亲在屋里用布裹好，抱出屋外交给父亲。接着，由道公念经，保佑婴儿平安。同时，请在座的任何一位客人将裹婴儿的布解开，并同婴儿父亲一道给婴儿穿上第一件衣裳。然后，婴儿父亲当众宣布婴儿从此时起有穿衣、脱衣的权利。最后，请在场的识字人给婴儿取名。男婴名字前习惯加“琶”（即男性），如“琶南”。女婴的穿衣仪式同男婴相同，不同的是由家婆（祖母）主持。女婴由母亲交给家婆，也要给女婴起名。女婴名字前面习惯加“摆”（即女性），如“摆春花”。

应邀参加仪式的客人，一般应带上一点礼物，如钱、米等赠给婴儿。客人离去时，主人也要回赠一点礼物，以示主宾双方吉祥，共同富裕。

待抱奥

“待抱奥”是黎语，意为招待客人，是黎族民间交际习俗。待抱奥的一般形式是，宾客一到，主人就在家门前摆好椅子，请客人坐下，并请客人抽烟、吃槟榔，表示欢迎。接着，将客人携带的物品，如猎枪、弓箭、尖刀、斗笠和刀笼等，拿到屋内保管好，然后，安排客人休息。安排停当后，主人就杀鸡、置酒，准备宴请客人。按惯例在酒席上，宾主不能混坐，而是相对而坐。男宾通常是先喝酒后吃饭，女宾则是先吃饭后喝酒。喝酒时，主人先双手举起酒碗向客人敬酒，然后将酒倒在地下，表示请祖宗鬼先喝。接着，再斟一碗，当着客人喝下，待将自己碗中的酒一饮而尽后，再斟满一碗酒双手捧给客人。客人把酒喝完，主人即夹一块肉送到客人口中，表示对客人的尊敬。

由于地区不同，待抱奥的方式也略有差别。如在纹茂地区，主人请客人吃饭，不能把筷子交叉放在碗上面，据说这样对客人不恭；也不能把两根筷子头尾颠倒放在碗口上，因为这种放法，被认为类似抬死人棺材上的竹杆，是对客人的最大侮辱。此外，主人只陪客人喝酒，不陪客人吃饭，因此，在客人吃饭时，主人应自动退出。

饭后，客人离开主人家时，主人不能在家里就将客人的物品交还客人，否则有对客人来访不欢迎或不希望客人再访之嫌。因此，主人送客时，一般是把物品带到家门口或村寨路口外，才交给宾客。

孚念孚

“孚念孚”系黎语，意为三月三（农历三月初三），是黎族民间传统节日。过去，仅流行于海南省昌化江畔的美孚黎支系，50年代后已流传到整个黎族地区。

孚念孚源于黎族民间传说故事。远古的时候，山洪泛滥，淹没了人间，世上只剩下一对兄妹。哥哥名叫“肋杠发”（意为“妃子”）；妹妹名叫“摆观任”（意为“观音”）。兄妹长大后，分头四处找寻伴侣。临别前，相约在每年的孚念孚回到燕窝岭相会。但兄妹俩走遍天涯海角，也未见人迹。妹妹便拿定主意，在自己漂亮的脸上刺纹，使哥哥难以辨认，终于在一年的孚念孚与哥结为夫妻。此后，他们俩男耕女织，生男育女，生活美满幸福。每逢孚念孚时，他们总是高高兴兴地率领儿孙们观花赏景。不知过了多少年，这对恩爱夫妻在山洞中死去了。黎族子孙后代为纪念他们传宗接代的功绩，便在每年的孚念孚举行祭拜活动，后来相沿成俗。

孚念孚原先只是单一的祭祖活动，后逐渐演变成男女青年自由恋爱和群众性欢乐盛会的节日。节前半个月，各村各寨的男青年便相邀上山狩猎，然后把猎获物腌制风干；女青年们则忙着酿糯米甜酒，包粽子，留待过节时享用。节日那天，各村寨均在老人主持下，举行祭祖仪式。青年男女则盛装打扮，各自带上准备好的肉干、糯米甜酒和粽子等，分别由一名俊俏的小伙子和一名漂亮而口齿伶俐的姑娘领头，聚集到活动地点。然后，各以对歌形式，相邀自己血缘氏族以外的意中人。一对对有情人随后携手并肩分散到丛林翠竹中和山间小河边，互相倾诉衷肠。已婚男女和老少，或在河里撒网打鱼，或在岸边的平石上生火做饭。

夜幕降临，山坡上，河岸边，便燃起一堆堆篝火。男女老少围在篝火旁，有的荡秋千，有的钻火圈，有的对山歌、比摔跤和跳舞等，人们尽情欢乐，气氛十分热烈。

天快亮了，人们各自收拾行李准备回家。这时，热恋中的男女青年们却依依不舍地互送定情信物，阿哥把银色的耳环穿到阿妹的耳上，或把鹿骨雕刻的发钗插在阿妹的发结上；阿妹则把亲手编织的七彩腰带系在阿哥的腰间，或把绣有各种艳丽花纹的头巾缠在阿哥的头上，相邀来年孚念孚再相会。

竹竿舞

竹竿舞，亦称打柴舞，是黎族民间舞蹈形式之一，流行于海南省黎族地区，以东方、昌江和乐东黎族自治县为主。该舞蹈一般在“孚念孚”（即“三月三”）、“沃八”（即“做佛”）、劳动间歇或农闲的晚上举行。舞前，人们或在庭院里，或在晒谷场，或在平坦的坡地上，平行置放两根 4 米长的大竹竿或木条作垫架，间隔为 2.5 米半左右，其上横放着 4 或 5 对 3.5 米半长的竹竿作跳杠。舞时，两边各蹲 4 或 5 人，各人双手握住竹竿的末端，按照一定的节奏，在垫架上张合、敲打，或站起来 在舞者颈部合击等，使之发出响亮、悦耳之声。舞者（单人、双人或更多的人均可）趁各对竹竿张合、敲打或高举击打之前的间隙，两脚不断地替换，敏捷地上跳下踏，前冲后跃，左转右躲，以及下蹲等，在避过双竿张合、击打的同时，跳出各种优美的舞蹈动作。每当舞者机警巧妙地避过各种险关时，拍击竹竿者则齐呼“嘿！呵嘿！”如舞者被竹竿夹住脚或颈部，就会引起围观群众的哄堂大笑。

人形骨簪

人形骨簪，即一种把兽骨加工成头簪，然后刻上人的形象的手工艺品。它作为黎族妇女的珍贵头饰，流行于海南省白沙黎族自治县的牙叉、白沙、青松、元门和南开区等广大乡村。这些地方也是刻制传统人形骨簪的老艺人的故乡。

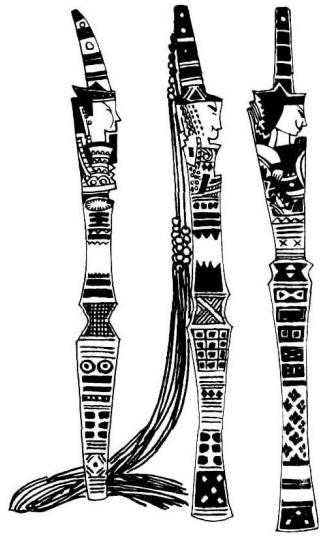
人形骨簪的制做，一般采用干燥、挺直而又洁白的牛腿骨或其他兽腿骨作原料，其长 25 厘米，宽 1.5 厘米，厚 0.8 厘米。

人形骨簪分独体单头和独体双头两种。其结构由顶部、中部和尾部等三个部分组成。顶部为仿古官职人物戴的高尖帽顶。帽顶横断面由数道白格和黑格组成，上面钻有几个小孔，用于悬挂小铃铛、小银链或各种颜色的丝穗，使骨簪显得更加鲜艳、多彩、美观；中部为人头雕像，有鼻子、嘴巴、耳朵和眼睛，形态逼真；尾部为装饰图案，分别雕刻着各种动物、花草、果实和民间常见的方形、三角形等几何图案，宛如一幅百物图。其刻制的程序是，先用小钢锯或利刀，按一定的规格、尺寸，将腿骨开成长条状，然后放在砺石上磨平、打滑。接着，用锐利的小钢刀刻出人头像及各种花纹、图案等。雕刻完毕后，把乌烟油涂入刻痕中，再在涂入乌烟油的刻痕表面，抹上熔化的蜂蜡封闭。最后，将其表面凸出的乌烟油和蜂蜡擦掉。这时，刻纹中的乌烟油便清晰地显现出来，成为黑白相间的精美人形骨簪了。

人形骨簪由于花纹、线条复杂，雕刻非常费时，一般每刻制一支，约需十多天。其用途除了作为妇女出嫁、走亲访友或喜庆佳节装饰品外，还可作为礼品馈赠亲戚好友；也可作为商品，交换耕牛、农具或衣物等。

据传说，骨簪上的人头像名叫“总管二”，是古代黎族人民崇

拜的一位部落首领。黎族老艺人将其刻制在骨簪上，是为了表示黎族子孙后代对他永久的崇拜与纪念。而变幻多样的图案，既是吉祥、富有和美好的象征，又是老艺人智慧和审美观的体现。因此，它对于研究黎族的民间传统工艺、风俗习惯以及图腾崇拜和民族的演化等，均具有重要的作用。



古老的乐器“叮咚”

“叮咚”亦称“打叮咚”、“咚咚”等，是黎族古老的民间打击乐器。叮咚用几种特殊的木料制成，音调清脆、洪亮。其制作方法较简单：先选好木料并去皮做横木，接着用绳索或红绸布将横木悬吊在大树枝或人工搭成的木架两端，然后精选两根约30厘米长质地坚硬的小杂木作敲棍，这样，叮咚也就制作完成了。叮咚的横木多少不一，二至五根均可。唯乐东、东方和昌江县一带的叮咚与众不同，是用一根木料劈成两半，一半厚而宽，一半薄而窄。此外，横木的大小、长短也没有一定标准，大者直径十几厘米，小者直径七八厘米；长者可达三米多，短者一米半多。用两根木料制成的叮咚，一般只能发出纯四度的音阶，音调通过移动吊挂两根木棒的红绸布或绳索进行调节。

演奏时，通常用左手反复敲打同一音调作为衬托音，用右手以先慢后快的节奏敲击主旋律，并运用变奏法形成高潮。敲击得越有节奏就越动听。用三根以上木料制成的叮咚，可得七个音阶，

其敲击技巧复杂、节奏多变。

叮咚的产生是与生产紧密相关的。长期居住在海南岛上的黎族人民，在相当长的历史时期中，过的是刀耕火种的原始生活，生产手段落后，产量低下。为了保护来之不易的庄稼，黎族人民每年从庄稼开花、结果到收获，总要在山栏地中间搭起“布隆陶盎”（即“小寮棚”），看守庄稼。为了消除寂寞和疲劳，也为了驱赶鸟兽，看守山栏者便砍来木棒敲敲打打。这样，既带来了乐趣，又保护了庄稼。久而久之，这种敲打就由简单的音阶发展到复杂音阶，直至后来成为一种娱乐的工具。

●傈僳族

傈僳族人口为574,856人(1990年统计),主要聚居在云南省怒江傈僳族自治州，部分散居在云南省的丽江、保山、迪庆、大理、楚雄等自治州和四川省的西昌、盐源、盐边、木里等市、县。

傈僳族史称“栗栗”，自称“傈僳”。傈僳族有自己的语言，傈僳语属汉藏语系藏缅语族彝语支。过去，曾使用两种文字，一是西方传教士创制的拼音文字，一是维西县傈僳族农民汪忍波创制的音节文字。1957年，创制了拉丁字母拼音文字方案。

傈僳族宗教信仰因地而异，怒江地区的傈僳族盛行原始的自然崇拜，相信万物有灵。

搭亲家

禄劝县的傈僳族有一个搭亲家的习惯。他们生了孩子，尤其是生了男孩，开始没有名字，后搭一个亲家为小孩取名字。其具体过程是这样的。小孩过满月，甚至几个月或半岁之后，由父母背上孩子，到离村很远的路上，把小桥略加修整，如填一点土，或是加宽等。修好桥后，留两三个青年人藏在桥的附近，其余的人到路旁稍远的森林里，杀鸡煮肉。第一个从桥上过的人，只要过了桥，藏在桥附近的人就出来把他拉住，并带往森林里做饭的地方，由孩子的父亲向他解释其意，摆上酒菜请他同吃。吃饭时，母亲怀抱小孩跪下向被拉来的人磕头，请其为孩子取名字。这时被拉者为小孩取一名字，同时送小孩一点礼物。所送礼物一般是钱，但了解此俗又非常乐意者，是将自己上衣的第一对纽扣撕下送给小孩。这表示他最深的情意，对小孩的父母来讲，也是最厚的礼物，没有比这更好的了。从此双方便成了亲家，孩子就成了对方的干儿子，并在他家的孩子中进行排行。

在取名字吃饭的过程中，双方要互通姓名、住址，叙说一般的家庭情况。主人要留亲家一同回到家里住几天。有人因急事要赶路，饭后就走了。过几天，父母背上孩子，拿上礼物，按亲家所说的地址，去认亲家。亲家母要为干儿子做一套新衣服，至少也要送一双鞋。三年内，每年春节父母都要带孩子到干爹家拜年。第三年，有能力的干爹要送给干儿子几只羊或一头母牛，繁殖的羊或牛是这个孩子的私人财产。孩子成人后与其弟兄之间分家时，这些羊或牛自然完全属于他，不在分配之列。

看鸡头瞧猪板

居住在云南省禄劝、武定、元谋、永仁等县的傈僳族有看鸡头瞧猪板的习俗。

年节或来了客的时候，一般要杀一只鸡，尤其是来了比较亲近的客人，杀鸡招待是主人热情的表示。鸡要由主人亲自宰杀，杀前要先祷告，用一只手把鸡抱在怀里跪在地上，用水或酒轻轻地浇在鸡头上，每浇一次鸡就甩一次头，表示被祷告的神灵或祖宗已知道在为他们杀鸡，愿意领受；另外也表示鸡愿意死去，即领生。这样连浇三次，鸡连甩三次头，然后杀鸡。

吃饭时，主人首先把鸡头给男客人或者男性长者。这时客人与主人间要互相推让客气一番，如有几个客人，他们之间也要彼此推让，最后由客人中的长者吃鸡头。

据说一个鸡头有几十块骨头，酒足饭饱之后，吃鸡头的人慢慢将鸡头拆开，拆下一块看一块，依顺序排在桌边。拆完鸡头骨后，进行认真的考虑，有时还要把其中的某几块骨头拿起来再看一次，或者请同座的人也看一看，一边看一边商量。最后由吃鸡头的人说：最近主人要发财，或者主人家的病人快要好了，或主人要大喜了等之类吉利的话，其实就是一种占卜的方法。据说看鸡头能预料一个月以内的事，而瞧猪板（猪肩胛骨）则可预料一年之内的事。

每逢过年杀猪时，猪板必须很好保存起来。春节期间来了既会瞧猪板又尊贵的客人时，才煮猪板请他吃。吃饭前主人将整个煮熟的猪板肉轻轻拆开、切好，但猪板不能拆得太干净，上面要留下一些肉。吃饭时主人要将猪板整块请客人边喝酒边吃，客人客气一番后才吃。等客人把猪板上的肉拆吃干净时，已酒足饭饱。

这时客人举起猪板对着太阳光翻来复去地观看上面的一些不十分清楚的纹路。然后根据这些纹路推断，主人家这一年内将要丰收，或有人上门来给女儿提亲，或是儿子今年能订婚等；有时也说主人家今年有大灾或小灾，或是东方有灾星，今年不能去东方等。

不论是看鸡头还是瞧猪板，所预料的事无任何科学根据。但是，不论是请吃鸡头还是请吃猪板，它确实表达了对客人或长者的尊敬。因为头是主宰生灵的最主要的部分，而猪板上的肉则是最好吃的肉。

肝　生

肝生是傈僳族人民自己制作，用以招待贵宾的一种美味佳肴。逢年过节、娶亲或贵宾来临，杀猪时将猪血接在一个大盆内，取出肝剁细放入猪血中，再放入适量的盐、鲜姜末、花椒粉，然后将猪的脆骨、瘦肉剁碎，炸熟放入装有猪血、猪肝的盆里，再倒些酒，点着火，用大竹片不断地搅拌，边烧边拌，直至将酒烧尽火灭为止。

这样制作的肝生，颜色鲜红、清香、可口。娶亲来贵宾时，当时做当时就吃；如杀年猪，做好后装入缸内封好，随吃随取，保存时间久，色香味不变。

这种美味对从未吃过的人来说，乍看见肉质鲜红的颜色往往生畏，但吃上一点就会越吃越爱吃。傈僳族人认为能吃上一顿肝生是最大的口福，或是受到了至高无上的招待。

撵　山

撵山是傈僳族群众的一种狩猎活动。狩猎时要漫山遍野地去

追赶，所以称为撵山。

据史书记载，傈僳族的先民善射弓弩，以狩猎为生。随着历史的发展与社会的进步，傈僳族虽已不以狩猎为生，但仍保持着善射弓弩，喜爱打猎的习俗。弓弩是每个傈僳族男青年心爱之物，有的弓弩相传几代。

傈僳族狩猎的方式各种各样，如对狼、豹等食肉动物用炸弹炸。炸弹系自制，鸡蛋大小，表面涂上羊油放置于狼、豹经常出没的地方，放置引线的一端系于钉在地上的钉子上。狼、豹嗅到羊油味即来叼食，拉动引线而使炸弹爆炸。非食肉性的动物，如麂子、豪猪等用下扣子的方法捕捉；对飞禽如野鸡等用“油子”引而捕之。

撵山是一种群众性的集体打猎活动。由有经验的人事先根据鸟兽的叫声、脚印等查明猎物，然后约定时间，全村的男青年，或两三个村的青年集体出动。出发前通知各户参加打猎的人带上狗及一个饭团。如果不去人只去狗则饭团交给别人带。出发时到村口集中，吹羊角号，狗听到号声纷纷从家中跑出，跟着人上山打猎。

到达打猎的地点，由有经验的人分配各人的位置，并将狗分成几群带到各自的位置，然后向猎物躲藏的树林开枪。狗从各个不同的方向叫着冲向树林，把躲藏在林中的猎物赶向宽敞的地方。等目标出现则开枪将猎物射死。如果未射中狗会穷追不舍，追赶阻截，直到将猎物射中打死。有时射不中，最终会被狗追上咬死。

傍晚，撵山结束，猎人聚集一起，根据人和狗的多少，将猎物剥皮，肉分成多份，人、狗平均分配，一人、一狗则两份，如果只去两条狗亦可分得两份；皮归开枪射中者所得。

“秋　天”

每逢干旱年月，居住在禄劝县的傈僳族就要进行“秋天”，即用烟去熏天。

据说雨是天神的眼泪，只要天神一流泪，地上就下雨。傈僳族大都居住在山上，种的是山田。山田又叫雷响田，只有雨水好才能种山稻，否则就只能种苞谷。如果碰上干旱，人们左等右等种不上稻，约在农历五月底，大家就进行“秋天”。

这天几个村统一进行。各村的男人带上刀斧，拉着几只羊，爬上本村最高的山顶，大家先祈祷、宰羊，然后年长者剥羊皮、煮羊肉，年轻人则砍树枝，收集干枯的树叶，堆在山顶上，一层干的一层湿的，堆得很高很大，等羊肉煮熟时，大家聚在一起吃肉、喝酒。吃完后，每人拿一把火从四周把堆好的树枝堆点着，滚滚的浓烟直上云天，数十公里外都可以看见。

如果“秋天”之后仍不下雨，则人们认为天神硬心肠，需要继续熏，有时要连续“秋天”两三次。现在这种作法已少见。

踩门与破门

傈僳族有踩门与破门的风俗。

傈僳族素有互助的精神，盖房子从来不需要挨家挨户去请人，只要说一声，村里的人就会来帮忙。这种帮助不需付钱，人人尽心尽力，主人只要每天管一顿午饭和晚饭即可。晚饭要有酒，午饭酒可有可无，就是有酒也不会大喝的。

但是如果有谁家另盖了新房，准备从旧房搬入新房时，一般是不请外人帮忙的，由自己陆续往新房里搬。在选择搬家的吉日

之前在新房里不起火不做饭，要在所择搬家的吉日的前一个晚上，才从旧房里把烧火做饭的铁锅拆下，全家住进新房。第二天，即所择吉日的这一天才在新房里正式起火做饭，表示已经搬家了。从这一天开始的一段时间内，别人就不能再进入他家的门内。要等主人择日请人踩门之后，才可随便出入。

主人按自己的心愿去请踩门的人，如果希望家里人丁兴旺就请多儿多女、多子多孙的人；如果希望出现识文断字的后代，就请有文化的人，等等。到吉日那天，主人关上大门站在门外等候踩门者的到来。踩门者到来之后，踩门者走前，主人走后，由踩门者推开大门踩门槛而过，进入堂屋，跪在主人事先准备的香火前祷告，希望这家从此人财两旺；同时主人跪在踩门者的一旁连连磕头。祷告完，主人摆上饭菜宴请踩门者。从踩门这一天开始，大家就可以随意出入他家的门了。

傈僳族人家大门上的对联与门神是在除夕夜里贴的。除夕睡觉之前由当家者到大门口点香祷告，送走了过去一年的一切不吉利，贴上对联和门神——即把门将军，不让一切邪恶再进入他家，这就是封门。

从封门开始，别人不能再进入他家，只有同宗的弟兄例外。大年初一大家只在公共场所见面，互相道贺，不进入家里。在见面时，主人按自己的心愿与对某个人的好感而请好破门的人。破门的时间各家不一，有的初一破门，有的初三才破门，但最晚不过初五。破门就是主人请事先说好的人到家里，实际上就是新的一年第一个到来的客人，主人用一大碗酒，一碗蜂蜜，两个粘粑招待。

破门之后，大家就来串门，主人以酒招待。

除牛刑

武定、禄劝一带的傈僳族群众每年大年初一要除牛刑。传说牛原来是天神，因触犯天条而罚到地下为人们服苦役。因为牛在过去的一年里耕地，给人们带来了丰收和吃穿，因此每年初一人们要祈求上帝减免牛的罪行，让其将来仍然回到天上去，故而叫做除牛刑，即替牛赎罪之意。

初一的早晨，在人们吃饭之前用三十晚上煮好的肉汤、肥肉、盐拌着米饭先喂牛。早饭后各家安排未婚的子女去放牛。这一天全村的牛都放牧到同一个方向。

牛放出去之后，几位热心的中老年男人就在村口的空地（或广场）搬石头架上几口大铁锅烧水，并且不断大声地喊“除牛刑了，除牛刑了！”大家听到喊声后，每家的主人把米、酒、肉、菜等陆续送到广场上，把肉切成大块放到大铁锅里煮。当每家的中老年人来了之后，妇女们就洗菜、淘米准备做饭；这时如果有送鸡来的，男人们就杀鸡。这一天，各家有什么拿什么，多少完全自愿，没有的也可以什么都不拿，不会引起任何议论或不满。

在大人忙着做饭时，大孩子们就提着篮子上山去揪松毛，送往广场，直到够用为止。同时几个十七八岁的男青年上山砍树，抬到广场上支秋千。这天的清晨，全村善跑的、枪法好的青壮年男子带上狗上山打猎。到下午三四点钟左右，全村男女老幼齐集广场，饭、菜及打来的野味做好了，放出去的牛也已吃饱陆续赶回村外的山坡上。人们在广场上撒上厚厚的松毛，菜、饭及酒各摆上一大碗，各家的主人在前排，其他的人在后面，一齐跪下磕头祈求上帝，叙述牛一年的辛苦，请求上帝饶恕牛过去的过错。祈祷完毕各家把牛赶回家关好、喂草。其他的人在广场上再撒一层

松毛，松毛上摆上各种肉、菜，人们到齐之后就自愿相约七八人，或十一二人，盘腿围坐在松毛上。在欢乐的气氛中，大家互相敬酒、传菜，彼此祝贺，谈笑风生，异常热闹。

年轻人吃饱后就去打秋千，或点起松明，吹起笛子。老头们则继续围坐在一起边吃边喝，边弹月琴边唱。而老太太们则来回地为老头们热菜热汤。夜深后，才各自收拾自己的家什回家休息。

澡塘节

怒江傈僳族自治州首府所在地六库市往北十公里，在跃进铁索桥北面怒江西侧的临江处，有两道花岗石台，台上有两个宽敞的温泉池，北边的叫妈布温泉，南边的叫登埂温泉。就在温泉的周围，傈僳族群众每年举行一次澡塘节。

每年的正月初一，傈僳族、白族群众穿着节日的盛装，带上年食、行李和炊具，扶老携幼，成群结队地乘坐汽车、马车从四面八方来参加澡塘节，有的甚至从数十公里之外赶来。参加澡塘节的人都打扮一新，其中姑娘们的打扮最为漂亮，她们戴着珊瑚料珠帽，胸前挂上贝壳带，穿着自己千针万线绣的花衣服，就好像仙女来到了人间。

最初人们来温泉是为了洗澡治病。相传古时候有个傈僳族的猎人来到这里狩猎，不幸被野兽咬伤，血流不止，就到温泉边去洗，结果血止住了，伤口逐渐痊愈。另外，这里还是热带沼泽地，瘴气到处弥漫，老百姓常常中毒，便到温泉里洗澡，驱散瘴气，病也就好了。总之，它能治百病。久而久之，习以为常，逐渐形成了节日的盛会，永盛不衰。

澡塘节在每年的正月初一至十五日。届时温泉边上帐篷林立，人山人海，各地有名的歌手云集一堂，大显身手。开始不拘形式，

各自选择自己的对手，以一男一女能歌者为主唱，周围有八个、十个青年围着和唱，后逐渐延伸成数十伙，甚至百十伙的人对唱。对唱内容十分广泛，有叙述劳动生产过程的，有歌颂党的政策的，有青年抒发爱情寻找终身伴侣的，还有中老年人唱传统节目的。对唱的歌词即兴而作，边构思边唱。对败一轮，又上一轮。除对歌外，还要对舞，以琵琶、口弦、短笛伴奏。歌声、乐器声和舞步声此起彼伏，就是到了深夜，仍然在熊熊的篝火旁回响，悠悠地由近而远回荡在怒江山谷。由于一年一度的澡塘节的主要内容是赛歌，因此又把它叫做汤池赛歌会。

节日期间，白天老年人在温泉里洗澡；夜幕降临时，青年们就相约到温泉里洗澡。在温泉里洗澡不仅可消除风湿和疲劳，而且也是青年们结识终身伴侣的机会。

刀竿节

刀竿节是居住在槟榔江两岸的猴桥、伦马、胆扎三个傈僳族乡的群众一年一度的传统节日。每年农历二月初八举行，为期一天。

这天，人们穿着节日盛装，聚集在刀竿场上。刀竿架用两根长20多米的粗壮挺直的树干做成，按一定的距离在两根刀竿之间绑上36把明晃晃的长刀，作为攀登的横档，刀刃一律向上。刀竿架立于场中央，长刀银光闪闪，像一架直插云天的银梯。爬刀竿的人，大都是健壮的中年男子，他们训练有素，具有一套特殊的爬竿本领。按传统习惯，爬竿者一律身穿红衣，红布包头，赤脚。当主持人宣布表演开始时，十多个爬竿者，个个精神抖擞地走向刀竿架，顿时，场上锣鼓喧天，鞭炮齐鸣。他们先绕刀竿跳舞唱歌。然后把主持人为他们斟好的一大碗白酒一饮而尽，随即跳上

刀竿，赤手握住刀刃，光脚板踩着刀刃像爬梯子一样，一阶一阶地向上攀登。此时，场内鸦雀无声，人人都为他们捏着一把汗。当他们爬到顶端时，还要作倒立、单手平衡撑等动作，观众无不瞠目结舌，赞叹不已。然后他们从腰里掏出一串鞭炮，点燃鸣放。刹时，噼噼叭叭的鞭炮声、观众的喝彩声、欢呼声响彻云霄，整个刀竿场一片沸腾。下刀竿比上刀竿更难，但是爬竿者仍然可轻松自如而下。当他们下到地面时，人们便纷纷地向他们敬上美酒。

爬竿结束后，还要进行跳“火海”活动。跳“火海”就是在刀竿场上燃起堆堆柴火，傈僳族男子赤裸上身，红布包头，腰扎红布带，光着脚板，以各种姿式跳越火堆，以表示他们敢闯“火海”的大无畏的英雄气概。跳过“火海”之后，人们便围在一起狂欢歌舞。

刀竿节最能体现傈僳族人民勇敢无畏、勇于战胜困难的民族精神。据史书记载，明代麓川大农奴主思氏叛乱，明朝派兵部尚书王骥统兵讨伐叛军，当地傈僳族人民也勇敢地拿起长矛、弩弓协助官兵平息叛乱，巩固了边疆，维护了祖国的统一。后王骥奉诏回京，农历二月初八在途中被奸臣害死。为纪念这位将领和在战斗中牺牲的人们，傈僳族人民便将这一天作为刀竿节，以上刀竿、跳“火海”来表示誓死保卫祖国边疆的决心。

刀竿节已被正式列为云南省少数民族传统节日之一。

拉歌节

云南盈江县苏典乡的傈僳族群众每年2月18日欢度传统的“拉歌节”，为期一天。主要是唱歌、跳舞、爬竿赛、高跷竞走等。节日前，修整跳舞场，用青翠的松枝和五颜六色的彩纸、纸花扎彩门，把跳舞场装扮得五彩缤纷，极富节日的喜庆气氛。节日里，

人们满怀喜悦，身穿各式各样、令人眼花缭乱的节日盛装。最惹人注目的是傈僳族妇女的头帕，上缀着银铃、银泡，脖颈上挂着的串串彩珠和由各色布料拼缝而成的百片裙。

关于百片裙，傈僳族群众中有这样的传说。在很久以前，傈僳族人民居住的地区遭到了豪强的掠夺，为了保卫家乡，男人们都外出打仗，只留妇女在家从事生产。由于长期在外打仗，他们很想念家乡的亲人，于是把打仗时获得的奖章，用一块布料包着带给家乡的亲人，以寄托他们的思乡之情。这样日积月累，带回的奖章和包奖章的布料就积攒了很多。妇女们就把这一块块的布料做成头帕、裙子，并把奖章缝在头帕、裙子上，剩余的奖章穿成串戴在脖颈上，以示她们永不忘记在外流血打仗的亲人。

这天，当地的景颇、拉祜、汉等各族人民也参加傈僳族人民的这一传统节日。人们兴高采烈地举行射箭、爬竿、打秋千、踩高跷等活动。晚上集中在一起，尽情地歌舞。

●佤　族

佤族人口为351,974人(1990年统计)，主要聚居在云南省西盟佤族自治县和沧源佤族自治县，在孟连、耿马、澜沧、双江、镇康、永德等县也有分布。

佤族自称因地而异，镇康、永德一带佤族自称“佤”；耿马、双江、沧源和澜沧的佤族自称“巴饶”、“布饶”；西盟、孟连的佤族自称“阿佤”、“勒佤”。解放后，统称为佤族。

佤族有自己的语言，佤语属南亚语系孟高棉语族，有3种方言。解放前，除部分地区使用过一种拉丁字母拼写的文字外，无通用文字。1957年，创制了拉丁字母拼音文字方案。

佤族普遍信仰万物有灵的原始宗教，部分佤族信仰小乘佛教和基督教。

黑布包头与筒裙

佤族由于居住的地区不同，男女服饰也各异。沧源一带男子一般较喜欢用黑布包头，穿无领短衫和短而宽的裤子。男青年颈上还多带有银项圈，喜欢纹身。西盟一带男子喜欢用青布或黑布包头，也有的用红布包头。但是用红布包头的只限以下几种人：一是头人；二是在村寨中较有威望的人；三是“英雄”人物和民间歌手。他们上身穿青布无领袖衫，下身穿折腰、大裆、宽而短的青布大脚裤子。身背本地编织的青布花边挂包，包边饰以长穗。个别富有者喜欢镶银或金牙来显示出自己的美貌。各地的佤族男子，外出时常背花挂包、佩长刀、铜炮枪和弩箭。刀长60厘米，宽4厘米，刀锋青光闪闪，刀鞘上镶嵌着精致的刻有漂亮的图案的银或铜饰，刀柄多是用银子做成的，上面刻有各样花纹。在佤族中，男子佩带长刀、身背钢枪被看作男性美和力量的象征，若男子不佩长刀，会被视为衣冠不整，不持枪、弩箭，则会被视为没有男子汉的气概。

佤族妇女的服装鲜艳、美观，各地的服饰式样大同小异。沧源佤族妇女用黑布包头，但与男子叠法不同。身穿黑或深蓝色无领上衣，衣服缀有数枚银泡或银质花，下着黑色筒裙，裙边间织红、褐色几何线纹为饰，非常美观。耳坠为银或竹木质的大圆耳环，腕戴银镯，小腿束数道篾圈。耿马的勐简一带的妇女，包黑色包头，耳戴银坠，上穿黄色斜襟短衣，镶有黑布条，以银币做钮扣，也有布扣。手戴银镯，下着黄白黑色绣裙，裙边镶织有黄、红、黑绕条，小腿套两端用不同色线织有几何花纹。腰系黑带，脚穿布鞋或胶鞋。四排山、贺派、耿宣一带的妇女，也是包黑色包头，耳戴大银坠，项戴银镯，腰系白色布带，下着褐、黑色织成

的横条纹筒裙，裙边织有几何花纹，长至膝下，系黑红色腰带，腰带两端线穗上分别缀有小贝壳和掏烟锅用的数棵小铁钎，小腿束数道篾圈。平时上山劳动或赶集身后不离背箩，嘴不离烟锅。西盟一带的妇女，裙子很有特色，既不像傣族筒裙，也不像有些民族的褶裙，而是用一幅布围起来的裙子。披散长发，把头发拢在背后，头戴银箍或竹藤制的发圈。双耳戴银环，颈戴一至数个银项圈和若干串料珠(有的料珠中还加有贝壳)。腰围若干个大竹圈，小腿和大腿之间戴若干个小竹圈或藤圈。还戴有臂圈、银镯，手指戴银戒指。

鸡肉烂饭

鸡肉烂饭，是佤族的一种传统食品，往往在逢年过节、祭祀、娶媳妇、嫁姑娘或者是招待贵客时才用。鸡肉烂饭的制作，各佤族地区大同小异，基本方法是：挑选一只肉嫩的母鸡，宰杀、拔毛、剖腹后，将鸡和鸡内脏洗净；鸡内脏用五茄皮菜叶包裹放入鸡腹内，缝合后，把整鸡放入盛着泉水的铜锅中，煮至七成熟捞出。然后把簸好的新米倒入鸡肉汤里煮，待米快煮干时，将烂饭抬下来放在炭火上，再把熟了的鸡肉撕成丝（3—6 厘米左右），撒在水分未彻底干的饭面上拌匀。鸡头插入一锅烂饭中央，然后盖上锅盖焖 15 分钟即可。在吃烂饭前，要由在场最年长的人先取食鸡头和鸡内脏，以表示对他们的孝敬。然后，才将已舂细了的鲜姜、薄荷、辣椒、蒜、葱花等佐料，撒在烂饭上面，搅拌均匀，这样鸡肉烂饭就制作完毕可以食用了。吃鸡肉烂饭时，不论烂饭数量多少，主人都要平均分给在场的各人一份，以表示平等相待。如远方的客人或久别的朋友到场，可以优先分到鸡肉烂饭，以表示主人对宾朋的尊敬和爱戴。

水　酒

水酒，是闻名于阿佤山的最佳饮料。水酒的制作方法是：以小红米、荞麦等为主要原料，用大铁锅煮一个半小时左右，端下锅，倒在一张专用的竹凉席上，拌上酒曲散开晾干，让其发酵成酒饭。然后，倒进罐里或大缸里储存，罐口内要用甜甘蔗叶片或芭蕉的叶子围拢，罐口可用盖子盖严，再压上一块合适的石头。储存时间一般为一个月左右，时间再长一些更佳。经过存放数月后，就可以随时取出泡饮。在泡饮时，将酒饭取出放入酒罐内，掺入泉水，搅匀后泡上半至一个小时，即可用备好的细竹管一头插入酒罐内，将酒汁吸出，并将弯竹管的另一头插入盛水酒用的葫芦内，这样酒饭与酒汁就自然分离。泡好的水酒呈白色，散发出沁人心脾的清香。有的在滤出后的水酒内放进少许的糖精，饮起来效果更佳。

水酒，是热情好客的佤族人民待客的最好饮料。水酒是由菌母发酵制成，喝后具有清凉利尿、促进胃液分泌、帮助食物消化的功能。

水酒和啤酒有相似之处，度数低，比啤酒稍甜香，清凉解渴，饮后使人神清目爽，久久难忘，且男女老幼饮用皆宜。每逢喜庆佳节，家家户户都酿制水酒娱乐饮宴。

饮苦茶

佤族喜欢饮苦茶，而不习惯喝泡茶。饮苦茶的方式是：将自己家里制作的茶叶（一般是绿茶）炒脆成金黄色，散发出香味后，放入底大口小的小型土制陶缸里；茶叶约占陶缸体积的三分之一到三分之二，然后倒进清水，并在茶缸口内放进一块小木片，炭火煎茶，并不时用小木片把茶叶压下，以防茶叶随着茶汁沸出缸外。第一遍倒进的水快煎干时，再倒进第二遍清水，第二遍的水煎剩二分之一时，茶汁即可斟出饮用。

佤族煎饮苦茶，一般在中午干活和晚上休息时。中午天气炎热，耕种、收获劳动较重，休息时，饮上一杯苦茶，颇能给农家人提神解乏。因此，佤族农家干活时，总要随身带上茶缸和茶叶，一到中午，便在田边地头烧上一缸苦茶来饮用。到了晚上，每家每户都要烧旺火塘，人们围坐在火塘旁，边聊家常，边煎饮苦茶。长期以来，阿佤人家已形成一种习惯：酒可以没有，但苦茶是少不了的。如果邻舍亲友来串门，总要先敬上一杯苦茶。饮苦茶时只用小杯，把茶汁斟出来，先敬给在座的长辈饮用，然后，按大人小孩顺序传递饮用。一缸苦茶煎上了一两次以后，就倒掉茶叶，再换新茶叶，一晚上得换四五次茶叶来煎饮。

草木房与悬空楼

佤族的村寨多建在大山腰和半山巅。村寨规模不一，一般为百户上下，大寨达四五百户之多。与汉族杂居的佤族，其住房受汉族影响较大。一般是四壁着地的草木房，即用木材作支架，墙壁围竹篾，房顶盖茅草。也有土壁草房和少量瓦房。沧源等地区

佤族住房类似傣族的架空“楼房”，不开窗户，前后两壁对开门，楼上住人，楼下关牲口。

佤族房屋结构和内部设置同宗教活动有密切关系。以西盟等地佤族房屋为例，其房屋外侧的前后均设廊，前廊堆放粮食和祭祀后保存的旧牛头骨，后廊置舂粮用的脚碓。住房开三个门，即鬼门(在房前壁左侧)、火门(在房左壁)、客门(在房右壁，与火门相对)。房屋外面接连鬼门的一边，设有竹晒台，鬼门外边离住房两三米处为家人的墓地。在火门前右边立祭祀用过的牛角叉，左边立祭祀用过的牛尾巴桩和杀猪祭祀用的剽猪石。住房一般隔为两间（也有三间），即主间和客间，主间在里，客间在外。房内设三个火塘，即主火塘、客火塘和鬼火塘。主火塘在主间，供家人做饭用，主火塘后、左、右三面设铺，后铺为主人睡处，未经主人同意，禁止客人在上面坐卧。左右铺为子女儿媳睡处。客火塘和鬼火塘在客间，客火塘居三火塘之中，用作煮牲畜饲料。鬼火塘在靠壁处，专供做鬼之用，人死后棺材也停放在此处。客间左壁中间插着竹筒，供房屋保护神“阿依俄”。竹筒附近挂鹿、熊、麂子头骨，供奉司猎的神。竹筒对面右壁挂新剽的牛头。祖先牌位也供在客间。

西盟地区还有所谓“大房子”和一般住房之分。大房为窝郎头人所居，四壁用刀劈斧砍的木板围之，壁上用石灰、火炭、牛血等色料绘有各种动物、人形的壁画，地板也是用刀劈斧砍的木板合并而成。把木刻的燕子和男性裸体像，安放在房顶屋脊上的两端。燕子是佤族崇拜的飞禽之一，男性裸体像则是他们信仰的祖先。

勤劳、勇敢的佤族人民在长期的共同劳动中养成了团结互助的美德，不论谁家盖新房、修旧房，全寨的人都来帮忙，出人力和物力（送茅草、木料和酒饭等）。由于“一家盖房八家来帮忙”，

所以，房子一般当日即成。在新居落成的当晚，村寨中青年男女都到主人家，在新屋前欢歌曼舞，以示庆贺，主人则设酒肉款待客人。

串姑娘

佤族男女同姓严禁通婚。过去，佤族部分地区曾一度盛行转房制，即夫去世后妻可转嫁夫之兄弟，如妻不愿意亦可另嫁他人，但必须由她嫁给的新夫偿还原夫结婚时给女方父母的聘金，即“奶母钱”和“买姑娘钱”。夫妻离婚，如果是男方主动提出，那么，女方一般不退还聘金；如果是女方主动提出离婚，则必须退还所有的聘金。

佤族在婚姻恋爱方面比较自由，家中父母很少干涉，但也有极少数包办婚姻现象。佤族男女青年一般在十七八岁就开始谈情说爱。佤族小伙子有“串姑娘”的习惯，即三五个小伙子相邀到姑娘家串门，一晚上可串数家。佤族姑娘往往同宿某一姑娘家里，等候小伙子来串门。有的地区小伙子串姑娘时，姑娘按传统习惯给小伙子梳头。有的姑娘不等小伙子说，就主动提一张凳子在门外屋檐下坐着，等着小伙子轮流来梳头，谁先来就先给谁梳，都梳完了，姑娘才进屋陪小伙子闲谈。通过串姑娘，男女青年结下情谊，再经过多次交往，加深了解之后，如果小伙子看中了姑娘，便托人或亲自给姑娘送去求婚礼物。如果姑娘也觉得小伙子称心如意，就收下礼物，算作答应了小伙子的求婚。然后，小伙子请“召多”（使者）作伴，带上礼物（通常是两包茶叶、一两桶水酒）到姑娘家向她父母正式提亲。姑娘的父母表态同意后，下次小伙子带同样的礼物再到女方家“和翁”，即把婚事进一步定下来。在“和翁”的当晚，由小伙子邀自己的亲属来家，让亲属知道这

门亲事。“和翁”之后，再由小伙子提几公斤猪肉到姑娘家，请全寨人都来吃一顿。至此，婚约一切过程才算最后办妥。订婚后男女双方互相约束，不得再与其他男女谈情说爱。

有的地区佤族求婚方式稍有不同。小伙子要寻找机会夺去姑娘的项圈或手镯等装饰品，当抢夺时即使姑娘心里已非常爱那个小伙子，也假装大叫大喊，以示反抗，此风俗当地称为“独特然木”。小伙子把姑娘的装饰品夺去后，如果姑娘在三两天内不来索取，便等于接受求爱了，双方即可禀告父母占卜完婚。

佤族的婚礼一般在秋收后举行，仪式比较简易。第一天，男女双方都要请本寨的人到家里吃一顿酒饭；第二天，男方给女家送去聘礼；第三天，男方将新娘迎归。

婚后，逢年过节，夫妻俩必须带上肉、水酒和茶叶回女方家拜年。过三年后再回女方家时，女方的父母将礼品拣出一半交女婿带回去。有的地区男子婚前要到女家劳动一段时间，婚后一定期间，夫妻每月还要协助女方父母劳动数天，这实际是作为女子出嫁后给女家失去劳动力的补偿。

佤族以男子为中心的一夫一妻制的个体家庭是佤族社会的细胞。同出于一个祖先的若干家庭组成一个家族，每一个家族都有自己的姓氏。姓氏的来源，有的取自祖先名，有的取自曾经居住或经过的村寨名或地名，有的则取自某一特殊自然现象。在社会及经济生活中，佤族的家庭还保留以下共同点：一、严禁家族内婚。二、祭祀祖先保持着相同的祭仪和祭语。三、有互相帮助承担债务和恤孤的义务，有互相继承财产的权利。四、每个家族都有自己的家族长，负责处理家族内部事务。五、某些家族仍有共同的墓地。六、个别家族还残存着家族公有地，收获用于家族公务。家族这些共同性，虽然血缘关系还起到一定作用，但随着各家族内部个体私有制的确立，代表这些活动的主要因素已是经济

关系和地缘关系了。

平安死与凶死

佤族实行土葬。成年人去世后，立即朝天空鸣枪、敲锣报丧，未成年人夭亡不报丧。成年人死亡后，死尸搁三天才能埋葬；未成年人死亡须在当天埋葬。西盟地区个别乡村死人埋葬后，也垒起坟，坟地离寨子200米左右，坟地四周都有着高大榕树。寨子规定，坟区的树木严禁砍伐。按佤族习俗，夫妻不能合葬。

佤族在埋葬死尸时有“平安死”（正常死亡）和“凶死”（非正常死亡）之分，并按不同的规定来处理。

正常死亡，指的是病死，认为是“好死”。埋葬时，有的用棉毯或自织麻布和竹席裹尸后放入棺材。西盟地区佤族用的棺材，是截一段约2米长，直径约50厘米的大树，从中间截开两半，按尸体的大小把截成两半的树凿空即成。尸体放入凿空的圆木里，将两半合成，用篾或绳捆紧。这种圆棺从外面看是段圆木，是棺椁最初产生的一种形式。

非正常死亡，指的是生育死亡、树压死亡、自杀、被猛兽咬死等。属于这类“凶死”者，死尸不能埋葬在寨内，更不能埋葬在公墓里，而要在偏远的野外去独葬。

佤族认为，死者还同生前一样生活，因此殉葬品都是死者生前所用生产、生活用具和食物。死者埋葬后，还要杀鸡举祭，祝愿死者“灵魂”快乐，保佑全家平安。

“木依吉”崇拜

解放前，在西盟、沧源和孟连等地区的佤族，对万物有灵的

自然崇拜信仰很深。因而“拉木鼓”、“祭水鬼”、“剽牛”等宗教活动接连不断。西盟等地佤族群众之所以普遍相信万物有灵，是因为过去佤族社会生产力极其低下，人们无法摆脱自然和疾病所带来的灾难，从而对自然现象和疾病产生恐惧心理，认为山川、河流、生物和所不理解的一切自然现象都有“精灵”（或称“灵魂”、“鬼”、“神”）主宰，这些“精灵”会给人们带来安危祸福，于是就对这些虚构的抽象力量加以崇拜。佤族最崇拜的是“木依吉”（沧源佤族称为“梅吉”），把它看作是主宰万物的最高精灵，是人类的最高主宰者。它似光、似火、似空气，无所不在，无所不能，开天的“达路安”，辟地的“达利吉”，爱地震的“格拉若姆”，掌打雷的“达阿撒”，佤族的祖先“格雷诺”都是“木依吉”的儿子。因此，每当新房子落成，都要搭竹凳请“木依吉”坐着观赏跳舞，以祈求“木依吉”和众鬼神帮助摆脱自然和疾病所带来的各种灾难。

佤族一年里的宗教祭祀活动从祭水开始，意在祈求人们有水饮用和来年风调雨顺。祭水是最大的宗教活动，全村男性务必参加。届时，由祭司为新引来的水祈祷，先接第一竹筒水，并用接的第一竹筒水在负责管水的人家煮饭。除祭水外，每年还以村寨为单位举行古老的取新火祭典。沧源县糯良地区佤族，过去取新火仪式由村里的头人主祭，以竹子摩擦的方式取火，擦出新火时鸣土炮庆贺。然后拿起点燃的火到家里升火。此外，插种、狩猎或遇到自然灾害等都要举行宗教仪式。

除了全寨性的宗教活动，佤族家庭和个人也经常祭祀鬼神，因为他们认为自己平时的一举一动都与鬼神有关，都要告知鬼神，以求消灾避难。佤族还崇拜祖先，每个氏族都要祭祀自己的祖先，都有固定的祭祀祷词。无论全寨性或家庭和个人的宗教活动，每次举行时都得杀鸡、宰猪或剽牛为祭品。在重大的宗教节日里，佤

族群众不分男女老少都穿上节日盛装，纵情歌舞，数日不止。

佤族泼水节

谈起泼水节，许多人只会想到傣族人的泼水节，而对佤族的泼水节则感到陌生。实际上，佤族的泼水节早已随着历史前进的步伐散发着独特的异彩。

佤族的泼水节，每年四月中旬举行。许多地方的佤族群众在欢度这一节日时，就自然而然地传颂着这样一个古老的传说：在很久很久以前，阿佤群山连续三年大旱，山上的常青树的叶子掉光了，庄稼枯黄了。为此，鹿埃松寨的七个姐妹去深山密林寻找水源。她们翻高山，越深涧，尖石扎破了姐妹的双脚，刺藤划破了衣裙，也未找到水源，但是七个姐妹不灰心，仍继续翻山越岭寻找。一天，七个姐妹终于在一个岩洞里找到了一股凉丝丝的清泉。为了把泉水引出山洞，她们搬来岩石去堵落水口，但石头都被激流冲走了。于是，七个姐妹便一个抱着一个，纵身跳进落水口，用身躯堵住，使泉水流出洞外。最后，可敬的七个姐妹化成了七块坚硬、晶莹的巨石，解救了阿佤山的人民。为了永远纪念这七个为阿佤山人民献身的坚强勇敢姑娘，每逢佤历 6 月 21 日，人们便兴高彩烈，欢歌曼舞，互相泼水，庆贺新生。佤族的泼水节每年一次，举行几天几夜。

●畲　族

畲族人口为630,378人(1990年统计)，主要居住在浙江省景宁畲族自治县，在福建、江西、广东、安徽的部分地区也有分布。

畲族史称“畲民”，畲族自称“山哈”，即指居住在山里的客户。解放后，统称畲族。

畲族有自己的语言，畲语属汉藏语系苗瑶语族；通用汉语汉文。

畲族宗教信仰主要是祖先崇拜，奉祀始祖盘瓠。

凤凰装

畲族妇女的传统服饰，斑斓绚丽，丰富多彩。衣尚青、蓝色，多着自织的苧麻布。

畲族妇女多穿大襟小袖衫，衣领袖口和右襟多镶花边。花边多宽纹的是中青年妇女的服装，花边少窄纹的是老年妇女的服装。不分季节都穿短裤，裤脚镶有锯齿形的花纹，束黑色绑腿。

畲族妇女的“凤凰装”别具风格，在衣裳、围裙上刺绣着各种彩色花边，多是大红、桃红夹着黄色的花纹，镶绣的金丝银线象征着凤凰颈、腰和美丽的羽毛；那后腰随风飘动的金黄色腰带，象征着凤凰的尾巴；周身悬挂着叮当作响的银器，象征着凤凰的鸣叫。相传畲族始祖盘瓠王因平番有功，高辛帝招他为驸马，在与三公主成亲时，帝后娘娘赐与三公主一顶非常珍贵的凤冠和一件镶着珠宝的凤衣，祝福女儿像凤凰一样给生活带来吉祥如意。当盘瓠王的女儿长大成人出嫁时，美丽的凤凰从广东潮州凤凰山衔来了五彩斑斓的凤凰装。从此，畲家嫁女必穿凤凰装，以示万事吉祥如意，相沿成俗，流传至今。

长夜对歌

“山哈（畲族自称）生来爱唱歌，歌声阵阵震山河；唱得满天星星笑，唱得大河鱼欢跃。”不管在阳光明媚的春天，还是在枫叶红遍的秋季，每当人们走进畲族山村，几乎随处可以听到悠扬悦耳、韵味无穷的歌声。特别是春节、二月二、三月三或来了远方客人，以及男婚女嫁之夜，定有一场通宵达旦的对歌活动。他们以歌为乐，以歌代言，以歌叙事，以歌抒情。所以，畲家人衣、食、

住、行、祭祀、婚嫁、病逝、爱情等，无不用山歌来表达。

畲族唱山歌，最有趣的莫过于长夜对歌（又称“陪来客唱歌”）了。长夜对歌又叫“烧火烤”（即“歌会”之意）。对歌的来客必须来自外乡，或离村较远的陌生族人。因为对唱的内容有许多是讲爱情的，本村同姓族人不能对唱，近村的熟人彼此了解，唱起来没意思。开始对歌时，先由主人开口唱“迎客歌”、“敬茶歌”，如果是来自远方的陌生客人，一定要请他唱“高皇歌”，其目的是试探对方是否真正的畲族。然后开始对歌，考问客人。如果客人善于唱歌，并能对答如流，应付自如，就会被认为是自家人，从而受到热情的款待。倘若客人歌少，迟迟不开口，主人会唱上一两个钟头，反正得让你开口，不开口是不行的。不会唱歌的就会受到奚落、嘲笑，调皮的青年还会用锅灰抹客人的脸，或被架犁当牛，弄得客人进退两难，狼狈不堪。

长夜对歌，非通宵达旦不可，老人们认为，不能唱半夜歌，既然唱了，就一定要唱到天亮，等那些听歌的鬼神们都散去后，才能停止，否则要倒霉。对歌除了娱乐以外，还有竞赛的性质，看谁唱得多，且内容不重复，畲族人叫“比肚才”、“争高手”。在对歌中，如果对方一连十来支歌都答不上，就算输了。主人输了，要好好招待客人吃一顿点心。客方输了，不但点心吃不着，还会听主人教训的歌声：“空长这么大，连歌都没有，回去学好了再来，把输在这里的歌担子挑回去。”遇到这种情况，通常会刺激客人回家以后努力学习唱歌。对歌时，无论相互间如何讥讽、嘲笑，都不会引起误会，人们都认为是善意的督促。对歌时，男女分开，各坐一边。妇女们特别爱挤在一团，即使不参加对歌的本村妇女，也与女歌手们坐在一起，以壮声势。上半夜，对歌一般都用传统的歌本上的歌词来进行对唱，目的是了解对方歌唱的能力，内容均为应酬性的。下半夜吃过点心之后，对歌才开始进入真正的比试

本领的阶段。如果双方旗鼓相当，到天亮还难分胜负，并且歌手好胜，老少助兴，主人又有意，就在第二天晚上或另约时间继续比赛，有时需持续三个晚上，直到分出高低为止。

赛歌前，为稳操胜券，双方往往互相摸底，作好准备，以便在对歌中抓住对方的弱点进攻。譬如，了解到对方是个不爱劳动的懒汉，就在对唱中抓住这点尽情地批评。如对方能虚心接受意见，态度好，就会得到和风细雨般的帮助，否则就会遭到挖苦、讽刺、奚落，直到认输为止。

山歌牵姻缘

畲族一般同姓不通婚，都在本民族内部盘、蓝、雷、钟四姓中自相婚配。由于姓氏少，加上居住分散，所以同姓不同房的或五服以外的也可以通婚，但比较少见。

畲族人民迄今仍保留着古朴而有趣的婚俗。畲族婚姻不计聘金，女儿出嫁，陪嫁妆奁，除一般高柜、衣箱外，还有农具、斗笠、蓑衣等，表示女儿出嫁后不忘勤劳立业的本色。最普遍的陪嫁物是两个竹火笼，表示新娘给新郎家带来了温暖，给老年人带来了幸福。家境稍富裕者，也有以耕牛作陪嫁的。

整个婚嫁过程，礼仪简朴，以唱歌贯彻始终。畲族这种“对唱山歌牵姻缘”的风俗别有情趣。青年男女自由恋爱，通过对唱山歌求爱。男青年试探时唱道：

砍好柴禾下山岗，三叉路口等少娘；
有心问你一句话，金鸡能否配凤凰。
少娘十八一枝花，蜜蜂飞来密麻麻；
有心来采花中蜜，请你少娘作回答。

如果姑娘愿意同男青年交朋友，就会坦率地回答：

十五月亮亮光光，郎到二十好定娘；
托个媒人到娘寨，有情总会配成双。

畲族青年男女通过对唱山歌，相互了解，建立感情，选择了自己称心如意的情侣，双方父母一般都会同意，但必须通过媒人说合、订亲，才能完婚。

浙江畲族仍保留着一种古老而饶有风趣的结婚仪式。结婚那天，新郎着新衣，领着“行郎”（善唱山歌的抬红轿人）和挑着酒菜、彩礼的“赤郎”（善唱山歌的厨师），步行到女家迎亲。路上，女方家的妇女们拿着板凳拦着新郎一行，这叫“拦赤郎”，此时，赤郎要放双响鞭炮，并拿出一双红包（内装两三角钱），才能过去。随后，女方关紧大门，唱起“拦门歌”，待男方行郎回唱“开门歌”，女家人才开门迎入新郎等，行郎一边唱“接亲歌”，一边将男方送来的彩礼一一点交给女方。女方主人唱着山歌请新郎喝茶，并送上洗脚水，脱草鞋换布鞋，这叫“脱草鞋”或“插田螺”。然后女方拿酒饭殷勤招待，但客人就席时，桌子上空无一物，见不到一羹一肴，甚至连餐具都没有。这时，大家静静地等待新郎唱山歌，要什么唱什么。如要筷子，则唱“筷子歌”，要酒则唱“酒歌”，每件东西都有它的歌。歌词虽然简单，只是两三句或三四句，但十分诙谐、有趣。新郎唱一首，司厨者接着和一首，随着一往

一来不停地对唱，新郎所要的东西就应声而来，摆满桌上，这叫做“调新郎”，又称为“答歌”。

吃完酒饭，新郎又需一首歌接着一首歌地唱，把席上的东西一件一件地唱回去。司厨者也唱着歌来收席。席毕，新娘盛装，梳头包罗帕、插银花，歌手们围着不断唱“梳头歌”：

衣衫穿了便梳头，一个梳头两个照；

今下始作新娘子，爱梳狮子凤凰头。

新娘梳妆完毕，头戴传统的凤冠，姗姗而出，与新郎交拜成礼。然后祭祖，大家围坐互拜，口唱“请女歌”、“嫁女歌”、“劝女歌”等。这一切程序都办了，新郎便告别岳父母等，偕同新娘步行回家。

一路上，新郎在前，新娘随后，各人手中都拿着雨伞，新娘羞答答地半遮着脸，两人不停地对唱山歌，以歌当话，互相对答，倾诉爱慕之情。到了夫家，敬拜翁姑，祭祀祖先，然后双双进入洞房。

女婚男嫁

俗话说，“男大当婚，女大当嫁。”可在畲族地区却出现饶有风趣的“女大当婚，男大当嫁”的婚俗。

畲族男子出嫁，和汉族男子上门入赘有所不同。一个畲族家庭，即使有三男四女，父母同样可以为女儿娶个新郎回来。男子嫁出，并非出于家境困难、兄弟较多等原因，富裕之家和独生儿子同样也可以出嫁。

畲族女婚男嫁有两种：一种是入赘给未婚女子的，叫做“招女婿”；另一种是入赘给寡妇的，叫“上门”。只有女儿而无儿子的家庭，多行招赘。男到女家落户的比较普遍，甚至有少数人家

把女儿留在家里“招儿子”，而自己的儿子反而嫁给别人家当儿子。若是家庭土地较多、房屋较宽敞，可以多留子女在家，虽有儿子亦把女儿留家招赘；若地少难分、屋窄难居，数子不能全部留在家中，就往往把长子以外的数子外嫁，但若父母溺爱某子，亦可把他留下，把其他儿子嫁出去。女婿上门按例必须改姓，特别是汉人入赘者更要改姓，孩子从母姓。族谱载：“无子而产育有女者，即将其女留家招赘，入赘为嗣，此是祖宗血脉，有所遗留也，可入正系图派矣。”但也有不改姓的。而且父权也不断向母权抗争，表现在招赘上门的女婿在为岳父家留下一个孩子后，即携妻回男家；有的则让孩子从入赘者的原姓。“上门”女婿不受族人歧视，也不遭乡亲白眼，和妻子家里的兄弟姐妹在家庭中享有同等的地位和财产继承权，担负应尽的义务，这说明畲族重男轻女的思想不严重。招赘时，女方要给男方送礼或给一定数量的钱，作为赡养男方父母的养老金。婚礼仪式与娶媳妇基本相同。不同的是女婿上门多为步行，也很少有嫁妆。

有的地方女儿招赘，继承财产，养老送终，所生子女两家对分，长子从父姓，次子从母姓。婚后倘有变故，不愿在女家过活，允许出走，出走前需付一笔双老赡养金。有嗣之家，有时也招赘，一般系儿子年少，欲以招赘担负田间的劳动，女婿劳动所得与女家平分。倘女方年少，则可例外，女婿就在女家劳动，日后双方如情意不合，可以分离。若由女方提出，男方就可以领走劳动期间的报酬；若是男方主动提出，则离开时分文皆无。

“作表姐”与“迎亲伯”

“作表姐”与“迎亲伯”是畲族婚俗之一，主要流行于福建东部畲族地区。“作表姐”也叫做“崩女人客”。凡是当年待嫁的姑

娘，其母舅家都会来请她与她的母亲去作客，次数不拘。届时姑娘盛装来到舅家，晚上，村里的男青年，需聚集在一起，陪她唱歌。

“作表姐”对歌，起头歌必唱难度较大的“黄蜂头”歌，以使歌手们彼此了解对方唱歌的能力和水平。同时开头唱些客气话，唱得主人称心如意，拿出烟茶招待歌手们，然后劝说姑娘放心对歌，唱好一夜歌。

如姑娘歌技出众，舅舅村里无对手，可由舅家介绍她到另一个与舅家有亲戚关系的村庄去对歌。能唱的姑娘人人夸，有时一连唱两夜。不会唱的姑娘则会遭到不客气的讥讽，所以“作表姐”是对姑娘出嫁前学歌成绩的一次检验。

“迎亲伯”是在婚前两天，由男家请一个好歌手，充当“亲家伯”，全权代表男家，挑着礼物，同媒人一起送到女家去。当亲家伯来到新娘家门前时，女方需把大门关上，待女方的妇女们考过他的歌唱才能后才迎进屋内，然后将板凳放在堂屋东首（大头）请他坐，懂规矩的亲家伯应马上将板凳挪到西首（小头）来，以示谦虚。女方请他抽烟时，他应先敬女方村中人，甚至连小孩也不例外。总之，处处显得十分谦卑。因为畲族人认为男方是驸马爷，女方是金枝玉叶三公主的后裔，所以“高头嫁女，低头娶亲”，男方比女方地位低。如果亲家伯不懂规矩，稳坐东首不动，女方村中妇女们就会马上点燃鞭炮，放在他身下，烧他的衣裳。

晚饭后，开始对歌。每段歌多由亲家伯起头，若对方对不上歌，就换一首，再不会，再换，换了几首还不会时，就算对方输了。亲家伯歌唱得好，女家妇女们就不敢难为他，一切以礼相待。否则，就会遭到女方村中妇女们的奚落，用灶灰涂成花脸，甚至连夜被轰出去。

此外，还有“作表嫂”、“作女婿”等对歌习俗。“作表嫂”，即

新婚夫妇于婚后第一个春天去男方舅家作客，舅家村中男青年来找新娘对歌。“作女婿”，乃新婚夫妇在婚后第一个春节去女方家作客，女方村中女青年来找新郎对歌。

唱借锅歌与吃千斤饭

唱借锅歌与吃千斤饭是畲族婚俗之一。畲族因居地不同，婚俗大同小异。有的地区过去由新郎登门接新娘回来成亲，后来新郎本人不去，由四种人组成的迎亲队伍，代表男方去迎亲。这四种人是：

“对门亲家”，由新郎的伯、叔长辈担任，代表新郎的父亲行事，向女家送交所有聘礼，这些东西要放在新郎家堂屋的桌子上，由女方的亲戚逐件过目。

“赤娘”，由身体健康、父母健在、已婚未孕的妇女担任，必须善唱山歌，代表新郎去迎接新娘。

“赤郎”，善唱山歌的厨师。

“行郎”，需能歌善唱、能说会道，专门挑送礼物、抬嫁妆和红轿。

上述迎亲队伍，由媒人带领，于举行婚礼前两天到女家。

男方要在女家备办酒席，宴请女方亲友，这叫“请大酒”。其过程十分有趣：首先，女方要“考赤郎”，因为这是男方在女家请客，故一切炊具、餐具、柴禾等都被女方藏起来，灶头上空无一物。所以当赤郎走进厨房后，要唱“借锅歌”，向女家借炊具和用品，如借锅灶，则唱“四四方方一品墙”；借火钳，则唱“姐妹不分一对”；借盐，则唱“海上白糖”……，要念唱四十多句借锅歌词，才能把用具借全。这时赤郎开始办酒席，他处处要动脑筋，施巧计，否则就会被罚酒、讥笑。赤郎刷锅、添水、放肉的动作要

敏捷，否则，冷不防女家“阿姨”、“姨姆”（即嫂子）就会撒一把米糠进去，弄得你添不成水，放不了肉。为了对付女方刁难，赤郎把大块肉放在灶头上，以吸引大家的注意力，把一小块肉放在袖筒里。这样，一刷锅，就添水，袖筒里的肉也就掉在锅里了。赤郎点火也决非易事，因为给的不是干柴，而是潮湿的树枝，燃点时，稍微不慎就会被“阿姨”、“姨姆”吹灭。因此，赤郎事先在怀里揣着棉花和蜡烛等易燃物，只要火一点着，湿树枝就会被搬走，换回干柴。

接着是赤郎持刀杀鸡。此举颇为讲究：地上铺上“拦腰”（围裙），摆上碗，杀鸡要把鸡血滴在碗里，如滴在围裙上就要罚酒，一滴血罚一碗酒。女方姑娘往往故意碰撞，使鸡血滴在碗外，罚赤郎喝酒。有经验的赤郎往往乘女方姑娘们不备，突然杀鸡，滴血在碗里，迅速把鸡头夹进翅膀提走。

夕阳西下，菜肴做好后，喜筵摆开，宾客纷纷入席，笑语欢声，一片喜气洋洋。酒过三巡，新娘在姨姆或赤郎的陪同下，端来了一个米筛，米筛里点燃着一对红烛，放上一壶酒、两个酒杯，到中堂首席向太公（即祖父）、舅公、长舅等敬酒。姨姆站在新娘背后，代她唱“敬酒歌”，这就是畲家婚礼中的“举盘敬酒”。新娘在席间敬酒时，接受宾客或上辈馈赠的红包，这叫“讨百家银”。

是晚，开始长夜唱歌，女方请来许多善歌姑娘与行郎、赤郎赛歌，双方各展其才，引吭高歌，通宵达旦。在对歌中，女方歌手常常唱出一些刁难的题目，请男方行郎回答，答对了，啧啧称赞；答错了或答不上来，妇女们就会往行郎脸上抹锅底黑灰，常常引起哄堂大笑。对歌结束后，客人吃点心，畲语叫“办回盘”。

结婚之日新娘一般要在头一天晚上动身，赶在天亮之前到夫家，以免路上碰见陌生人，否则，据说会不吉利。新娘在离开娘

家前，要到厅堂前“溜筷子”和吃“千斤饭”。这时堂上一张桌子上摆着两把筷子和一碗米饭，新娘一手拿着一把筷子，交叉着递给站在身后的哥哥。哥哥接着把筷子从新娘的腋下放回桌上，新娘弯腰噙三口米饭，喷撒在桌子上的手帕中，新娘的哥哥把它包好放在新娘的口袋里带回夫家。传说带回去的是“千斤饭”，可以年年饲养一只千斤重的大肥猪。新娘离家门时，姐妹们要一拉一送三次，才能动身，叫“留风水”。新娘要唱“别亲歌”，告别阿爹、阿妈、兄弟姐妹等亲人。新娘起行后，一路上不许回头看，认为回头看意味着日后要走回头路，夫妻不能白头偕老。新娘随身带有桂圆，路上遇到人特别是孕妇，就给几颗桂圆，以示吉利。有时偶然碰到两个姑娘同日出嫁，同走一条路或同走一段路时，一般事先协商好，让远途的先走，后走的需用一头角系红布、插着红花的黄牛在前面踩路，表示黄牛踩过的路又是新路。

新娘张伞到夫家大门时，踏着由红布袋铺成的路走进中堂。新娘踏过的红布袋由两位老年妇女收起，又铺到前头，叫“传袋”，意为“传宗接代”。新娘进入新房时，要递给传红布袋的两位老妇人各一个红包。有的地区新娘进夫家，先拜祖公爷后进新房，有的却先进新房后再与新郎一起出来拜祖公爷。拜时，新娘不下跪，要鞠躬、作揖三次。传说新娘乃高辛皇帝的公主，新郎是驸马，所以女方不下跪，只男方跪拜。礼毕，兄嫂（未孕）带新娘到灶前。新娘往每个灶门里添一次火，然后回新房，婚礼至此完毕。

以歌赴丧

畲民家中遇有年龄在50岁以上的人身故要报丧。父死，孝子去亲房叔伯家报丧。母死，去娘舅家报丧，邀请他们前来吊唁，才能入殓。当娘家亲人前来奔丧抵达村外时，要鸣放鞭炮作为通知，

抵丧家屋前时，孝子孝孙们要按长幼次序跪在门外，一手持香，一手敬酒，跪迎吊唁者，并对歌一首。丧家子孙唱道：

子孙跪落娘家前，无限悲痛泪涟涟；

双手把定娘家盏，行位报我要超荐。

娘家吊唁者唱道：

今日娘家是我来，接过儿孙酒一杯；

你母行次第×位，你今礼教做得对。

歌毕，娘家来人扶起丧家人，接过香，进至灵堂，把香插进香炉里。这时，孝子要端水给娘舅洗脚，然后请喝茶，吃点心，称之为吃“娘家茶”。

奔丧的亲属到达后，孝子要到河边烧纸钱，并提回一些给死者洗澡的水，这叫“买水”。死者如果是男子，必须取顺流水，以表示男在天；死者如果是妇女，则取逆流水，表示女居地之意。

死者落棺后，要唱“哭歌”。畲族盛行以唱代哭，以歌赴丧的传统葬俗。“哭歌”也叫“哭灵歌”，又称“白事歌”（即“丧葬歌”）。唱哭歌的除死者的子女、媳妇等直系亲属外，大都是亲眷的女客，人数少则几人，多达几十人不等。她们素装打扮，身穿白裙衫，头扎白罗帕，围坐在棺材边，整夜地边哭、边唱，以哀歌表达对死者缅怀思念之情，一直要哭到第二天天亮“抬丧”才止（有的甚至连续哭唱几天）。据说这种葬俗还有一段来历：传说始祖盘瓠王行猎，不慎被山羊撞落在高山悬岩下。盘瓠王子孙到处寻找不见，抬头望见在不远处的天空，乌鸦盘旋飞舞，上下翻腾，急忙赶前一看，只见盘瓠王尸体悬挂在岩壁的大树上，百鸟群集，正在啄食盘瓠王尸体。盘瓠王妻三公主见状不忍，赶忙率领子孙吹角敲鼓，编了千百首“哭歌”，边哭边唱，为盘瓠王驱走群鸟，保住了盘瓠王尸骸，并把盘瓠王遗体安葬在凤凰山上。历久相沿，遂成这一葬俗。

哭歌的内容为缅怀祖宗，悼念死者，诉说死者生前乐善为人，祈祷死者安息，并忏悔对死者生前照顾不周等等。如“哭娘歌”中有一段这样唱道：

没有爹娘无主张，家有金银枉思量；

有钱能买千般物，难买堂上双爹娘。

此外，还有“送孝歌”、“大离别”、“小离别”、“牛子圈”、“苦伶娘”、“二十四更歌”、“思亲歌”等哭歌，歌词悲切，催人泪下。

祠　堂

畲族的社会组织之一。畲族村寨多以血缘相近的同姓聚族而居，但有的村寨已经打破血缘组织而以不同姓氏的地缘组织为基础。

畲族比较集中的村寨一般都有“祠堂”和“房”的组织。同姓同祖属于同一祠堂（亦称宗祠）。祠堂由各房组成，设族长一人，由辈份最高、年纪较大、办事公正、有一定威信的老人担任。族长可按习惯法负责处理族内和族外的各种社会纠纷，负责管理族内公共事务，如收缴族租，掌管族账，执行族规，给晚辈分排辈份，主持修谱事宜和祭祖活动等。自清末以来，由于畲族居住分散，族长无法照顾各村族人的事务，族长名存实亡，已无多大的号召力了。因此，又出现了地方性的自然领袖。本民族内部事务的处理，部分已由自然领袖负责，无形中族长和自然领袖有了分工。但是，一般说来，族人对族长及族中长辈还是尊敬的。

自然领袖往往是在某一场合闻名而形成的，这种人不一定年高辈份大，但都能说会道，善于交际，处事公平，因而在群众中享有一定的威望，深得群众的拥护。举凡和外族打官司、内部发

生纠纷、兄弟分家等都请他来评理或调解。

有些村寨除祠堂外，还有一所家庙。

祠堂拥有公产田、山等，其收入供轮流祭祀之用。每年在冬至或清明各祭祀一次，有的在端午祭祀。祭祀时，祠堂祭坛上祖师爷前香烟缭绕，彩烛通明，供桌上摆放三牲、果品。祭仪简单，由主持祭祀的族长宣布，然后鸣放鞭炮，悬挂祖图，向祖宗三叩头。祭毕，上了族谱的人在祠堂里聚餐。席位的安排是：老辈上辈坐首席位，男人坐上位，妇女坐下位。没上族谱的人不得参加聚餐。餐后每人可分到两小块猪肉。家庙的祭祀日期比祠堂祭礼晚几天。

当某一姓人从当地迁出到新地定居后，如人口繁衍不多，或在新址居住的年代不长，一般不另立祠堂，仍与原迁出地的祠堂保持联系，无论祭礼还是修族谱，都要到原迁出地的祠堂办理。如果迁出后人丁兴旺，支派繁衍，在新址居住的年代又很久远，则可以从原迁出地的祠堂中分出一支谱牒来，另修宗谱，另建祠堂。以后这一支的人就不必再到原迁出地的祠堂祭祖了。

祠堂之下设有“房”的组织，按血缘的亲疏组成。同姓近亲的人为一房，称为“共房”或“介寮”（即一家人的意思）。同房的人聚居在一起，形成了一个由同一血缘关系亲属居住的自然村。实际上，“房”是某一宗族的某一支派。有的房还修有房谱。

祠堂的组织基本上是不变动的，房则可以变动，为了分别亲疏，老房内可分有新房。新房包括若干代，无定例，视人数繁衍多寡而定，当人丁发展较多时，为便于辨别血缘亲疏，由血缘关系较近的人另组新房。

排　行

畲族男子，一人多名。有乳名（小名）、世名（本名）、法名、讳名等。法名不一定人人都有，但乳名、世名和讳名却人人必有。妇女一般只有世名和讳名。

取世名严格按照宗族祠堂里规定的“排字世项”来定。至于一个人能否有法名，要根据本人是否祭过祖来决定，凡祭过祖的人，都有资格取得一个法名。

讳名是按排行的不同而命名的。畲族内部为了统一辈份，辨别是否本族或本姓人以及血缘的亲疏远近，各祠堂过若干年要排行一次。凡没有举行过“醮名”（成丁礼仪）仪式的，就没有排行的称谓，也不能上谱。排行时，先将本祠堂若干年内出生的男女的年、月、日、时登记起来，由族长和族中长辈数人将登记的人按辈份和出生前后进行排行，并于死后写入族谱。畲族以蓝、雷、钟为大姓，蓝姓以大、小、百、千、万、念六个字为行次，周而复始地排行。雷、钟两姓只有五个字排行，俗话说“雷不排念，钟不排千”，即雷姓按“大、小、百、千、万”五个字，钟姓按“大、小、百、万、念”五个字排行。妇女的排行是在娘家与同辈姐妹一起排的。

相传很久以前，有一位蓝姓的人祭祖，到另一家去挑“祖担”回来，本来“祖担”中只有五个香炉，可是发现挑回的“祖担”中却有六个香炉，挑担的人说：“搞错了怎么办?”师爷说：“念话”（意即“没关系”），从此蓝姓就多了一个“念”字辈。

排行时，如同辈的男子有二百人，就从一郎排至二百郎，女的同辈如有二百人，则从一娘排至二百娘。如果祖父为蓝大二十二郎，父亲则为蓝小×××郎，本人则为蓝百×××郎。有的地

区男不排一，女不排二。如“念”字辈，只有“蓝念二郎”与“蓝念三郎”，“蓝念一娘”与“蓝念三娘”等，而不排“蓝念一郎”与“蓝念二娘”。据说“蓝念一郎”和“蓝念二娘”两个位置，是留给不满十六岁而夭亡男女们的。

排行只有族长和参与排行事务的几位长辈才知道，他们严守秘密，绝不泄漏。因此，畲族男女在生前不知道自己 行次，只有死后才能告诉其宗属。老年妇女有的在生前备好棺材，其兄弟前去赴宴时，才得向族长索要其姊妹的排行。族长将其姊妹的排行写好后，用红纸包好交给他。在宴会上，外甥要向母舅敬酒二杯，舅父才能将排行的红包交给外甥，放在棺材内，这一仪式叫做“讨位”。但必须在母亲死后才能拆开看。有的生前未做棺材，母亲死后，母舅将排行带来，外甥要跪在母舅面前“讨位”。男子死后，孝子可直接向本族族长索取行次。

关于因祭祖而取得法名和死后用的讳名的含义，凌纯声在《畲民图腾文化的研究》中认为是“入社式的遗迹”。他说：“已祭过祖者须另题一名……祭祖之后即将法名及祭祖的日期写在一红布条结在祖杖上。此乃表示祭祖者已加入图腾集团。”这也许是为了区别亲缘关系的远近，以排除近亲通婚。

以“大、小、百、千、万、念”为排行，在生前就已排好，死后上族谱。有无排行，是老祖宗承认不承认你是“山哈”（畲族自称）人的标志。排行还有一个作用，可以测出是否畲族、何姓以及辈份的高低等。

树头祖牌

畲族十分重视崇拜祖先，每年二月十五、七月十五、八月十五为祭祖日，有的还在端午节小祭祖。每个家庭在堂屋中央供桌

上设祖灵神位，以一块红色祖牌为标志。关于红色祖牌的来历，闽东畲族地区流传着一则“畲歌与祖牌”的故事：畲族祖先勤劳勇敢，居住深山老林中，刀耕火种，狩猎为生。有一对夫妇，只生下一个男娃。当孩子六岁时，丈夫因抵抗官兵的欺凌，悲惨死去，遗下孤儿寡母相依为命。母亲含辛茹苦地把孩子抚养成人，可是儿子却忘恩负义，嫌弃亲生老母。后来，村里来了个聪明伶俐、美丽善良的牧羊姑娘，她擅长唱歌，每天赶着羊群上山，歌声不绝，小伙子总是尾随悦耳动听的歌声上山耕地。一天，他母亲送饭来迟一步，小伙子大发脾气，摔掉饭碗辱骂老母，善良的母亲吓得目瞪口呆。正在此时，小伙子看到牧羊姑娘的羊群中有一只小羊跪在母羊腹下吃奶，觉得很奇怪，便问牧羊姑娘。牧羊姑娘以歌作答道：

天上乌鸦最孝顺，地上羊仔最知母，
乌鸦啼哭守母死，羊仔吃奶就下跪。
今日阿哥为那桩，诸事不提问羊羔，
阿母待哥心肝肉，阿哥待母又如何？

牧羊姑娘的歌声刚停，又传来了老鹧鸪的啼声和小鹧鸪嗷嗷待哺的鸣声，两人只见一只疲惫不堪的老鹧鸪使尽自己最后的一点力气，把捕捉来的小虫送到小鹧鸪嘴里，然后，自己却颤抖了几下，一头栽倒在雪地里死去。牧羊姑娘触景伤情以凄惨的声音唱道：

鹧鸪鹧鸪你真苦，喂了儿子自命故；
飞燕捕虫喂小燕，小燕飞日不知母！

牧羊姑娘的歌声，感化了小伙子的心，顿然悔恨自己以往虐待母亲的过失，立志要痛改前非。欲向母亲下跪认罪，可是母亲误以为儿子又要打骂她，吓得丢下饭篮往回跑，不慎竟被一棵大树绊倒，一头栽在树根上，顿时鲜血直流，染红了树头，当场死

去。小伙子见状，后悔莫及，悲痛欲绝。他安葬了母亲后，日夜抱着鲜血染红的树头啼哭。后来，他把这根树头带回家里，制成一个木牌，写上母亲的姓氏，逢年过节，跪拜祭祀。自此之后，畲家人就用树头制成祖牌，染以红色，标志着祖先神位，逢年过节，摆上三牲祭品，敬拜祖先，以寄托哀思。

祖　图

祖图，又称盘瓠图，是畲族图腾信仰的主要标志之一。畲族把有关盘瓠传说的情节，在高约 30 厘米、长约 10 多米的布帛上绘制成约 40 幅连环画式的画像，称为祖图，代代相传。各地祖图所画盘瓠传说的内容大同小异，大致上都包含以下的情节，每个情节都绘一幅图画，组成一组连环画幅：

盘古开天地开始，有开天皇、开地皇画像，继则是高辛帝像；太医医国母耳疾，挖出一条虫；内臣养虫，内臣报高辛帝虫变金龙，叫龙麒（期）；番邦作乱；探子报高辛燕王兴兵犯界；高辛帝出榜招贤；龙麒揭榜；帝送龙麒漂洋过海，投奔番邦燕王，燕王赐宴；燕王饮酒醉吐，龙麒咬断燕王头；番兵追赶龙麒；众官迎龙麒；众内臣引龙麒见高辛帝，进献燕王首级；高辛帝赐龙麒衣服，命臣陪龙麒饮宴；高辛帝与三位公主商议招驸马；龙麒金钟变身；公主命宫女探视龙麒，龙麒身变头未变；龙麒金殿认公主；龙麒茅山学法；闾山九郎茆山三郎代龙麒变身；龙麒变为美貌才郎；高辛帝令龙麒、公主成亲；婚后迁居凤凰山；内臣斟酒接龙麒；龙麒游七贤洞；盘瓠王龙麒生下三男一女；盘瓠王请姓；盘瓠王祷告；盘瓠王夫妇商议狩猎；盘瓠王率领子孙行猎；山羊撞死盘瓠王，子孙寻尸；龙麒出殡；盘瓠王坟；盘、蓝、雷、钟四人谢恩；盘自能封立国侯，蓝光辉封骑国侯，雷巨祐封武骑侯，钟

志深封敌勇侯；最后以盘瓠王身世图说结束。

畲族人民十分重视祭祖。不同姓氏的畲族在祭祖时，不但祭祀本族同姓的祖先，还虔诚地祭祀本民族各姓的始祖盘瓠王（又称忠勇王），这一点与汉族的祖先崇拜不同。在祠堂或家屋的堂屋中央祖宗神位两旁都挂着一副对联："安邦定国功建前朝帝喾高辛亲敕赐，驸马金卿名垂后裔皇子王孙免差徭。"

畲族人民对他们的始祖盘瓠王非常尊敬，通过绘制连环画式的祖图和编唱长篇叙事诗歌"高皇歌"来叙述盘瓠王的出生、成长、生活和死亡的不平凡经历，歌颂盘瓠王的英勇杀敌和繁衍子孙的丰功伟绩，世代相传颂。每年还定期举行隆重的祭祀活动，同姓同祖族人共集祠堂，悬挂祖图，虔诚地瞻仰和祭拜盘瓠王。这是早期畲族原始社会中常见的图腾信仰的残留。

祭　祖

祭祖，畲族称"做树头"、"做阳"、"聚头"或"学师"。为了缅怀始祖盘瓠王不畏艰难的精神，畲族人民都希望自己能举行一次传师学师的祭祖仪式，取上法名，用红布条把法名及学师祭祖的日期写明挂在"祖杖"上。这种仪式称作"做树头"（即"传师学师"）。学过师的人称为"红身"，未经学师的则称"白身"。如一代不学师，就被称为"断头师"。畲族人民认为学过师能增强战胜恶魔的力量，免受人欺凌；不学师会失去与恶势力斗争的意志和毅力，易受人欺侮，因而十分重视"传师学师"。

凡要祭祖的人家，首先要把"游祖"挑回家。"游祖"，即两只竹箱，内藏祖图、祖杖、香炉、龙角、龙刀、铃钟等。祖图只挂中堂，设立香案祭祀，祖杖靠在香案旁。本族法师（学过师的）通过吟唱、跳舞的形式，表现盘瓠王历尽艰辛，往闾山、茆

山学师的神话般情节。

畲族以祭祖为荣，祭过祖的人，男的叫“法师”，女的叫“西皇母”或“皇母娘”，其社会地位高于常人。祭祖的次数愈多其社会地位也愈高。祭祖一次者，准穿红衣裳；祭祖二次者，都得穿青衣，头戴牛皮头冠（称方巾帽或孔明帽），上绘龙、虎等动物，下沿有两条带子。这种人又称“赤老鼠”，有资格主持父母的丧事，替别人做功德，否则，即使亲生父母亡故，也只能当孝子，却无权主持父母丧事，需请祭过祖的人代孝子治丧。凡儿子祭祖一次，就可穿青色衣，戴方巾帽，这种人被称为“房赵”。

祭祖者一拜天地，二拜祖宗后，要说：“保佑子孙，上山扛铳枪，枪头落火，枪尾得财”；“保佑子弟，耕田禾大熟，养蚕月月生，夫妻相厮守，阖家得团圆，人财都兴旺，六畜放满山。”

妇女欲做“西皇母”是有条件的，即必须夫家上代有人做过，且自己亦有子孙。一般多在30余岁至40岁左右时举行仪式。其时张挂祖图，做“西皇母”的妇女穿上蓝袍，由会作功德且有法名的男人主持。做过“西皇母”的妇女，死后可做大功德。但一家不能同时有两人做“西皇母”，所以必须俟家姑或祖婆死后，媳妇和孙媳方能做“西皇母”，普通人一生可做“西皇母”一次至二次。

节日登山

畲族传统体育活动中最引人入胜的是登山。每逢春暖花开的“三月三”和秋高气爽的“九月九”，以及夏至后的“封龙节”（有的在元宵节、二月二），在畲族村庄里都要举行群众性的登山比赛活动。登山地点多选择在海拔600米以上的高山上。届时不限地区，不分男女老少，连过路的客人也都可以参加助兴。当天黎明

时，人们穿着绚丽的民族服装，戴着精制的竹笠，云集到登山地点。当太阳从东方升起时，只听到一声鸟枪响彻山谷，接着鼓乐喧天，人们如箭出弦，各自择路抢道，争先恐后地攀登高山，表现出畲族人民不畏艰险的勇气和奋发向上的志气。最先到达目的地的为优胜者，获得锦旗和受到众人的赞慕。待参赛的人群都登上高山，便展开一场有趣的对歌，歌手们大显身手，嘹亮的歌声此起彼伏，气氛十分热烈。

操石磉

操石磉是畲族传统体育活动形式之一，流行于浙江景宁畲族自治县。一般选择在石铺的街道上进行。“操”即“推”，“石磉”即石块。石块呈扁圆形，底面光滑，大小不一，大的可达百来公斤重，小的几公斤或几十公斤不等。参加比赛的多为少年和青壮年。少年多为二人一组，一人双脚稳踩石磉，斜挺腰杆，称为“健杆”；另一人则对“健杆”挽臂抱胸，合力共同推动石磉前进。也有两人分别握住“健杆”往前拉，四臂宛如一根曲杠子，推拉着石磉前进。还有对阵的操石磉比赛，又叫做“对磉”。参赛的双方，各自把石磉向对方推移，让双方的石磉猛烈碰撞，如一方的石磉被撞滑到街边，就算输了。有的“健杆”倾斜，往往被震翻在地，周围群众便发出诙谐的呼喊声“烙，豆腐啦！烙，豆腐啦！”，意即如豆腐般碰撞不得。对于胜者则报以热烈的喝彩声和鞭炮声，整个活动具有浓郁的乡土气息和热烈欢乐的气氛。

二月二会亲节

二月二会亲节是畲族传统节日之一，流传于福建福鼎县畲族

地区。这里地处闽浙两省交界的小山谷里，四周高山环绕，聚居着蓝、雷、钟三姓畲族300多户，1600余人。据史料记载，这里的畲族因清初东南沿海迁界令，被迫从浙江蒲门甘溪一带迁来。由于族支繁衍，子孙散处于浙南、闽东各地，省亲路远，探亲无期，乃约定以每年春耕前的农历二月初二为“会亲节”，迄今已有200多年的历史了。

节日里，浙南、闽东的畲族男女，从四面八方云集在双华乡，访亲友，叙家常，互致问候。乡文化馆前搭起彩楼，四周人山人海，熙熙攘攘，挤得水泄不通，一场诙谐有趣的赛歌会就在这里举行。入夜，山谷里家家灯火通明，处处歌声嘹亮，锣鼓声响彻云霄，鞭炮声响震山谷。待提灯游村的信炮凌空而起，一队队人们手提鱼灯、兔灯、鸡灯、猪灯、寿桃灯、莲花灯、丰收灯、孔雀灯等，形成一条金色长龙，鱼贯穿行在各个畲村，山谷里礼炮齐鸣，烟火怒放。

居住在福建福安县境内的畲族同胞，每年农历二月初二都要到鼓楼山上举行庙会。关于二月二庙会的来历有个传说：古时，畲族先民过着迁徙不定的贫苦生活，后来在雷祖公的率领下，举族逃荒到福鼎县鼓楼山，得到当地汉族魏家兄弟的热情帮助，劈荒山，造良田，经过辛勤的劳动，定居下来。可是野兽出没无常，经常糟踏庄稼，危害畲民的生活。魏家兄弟见状，十分同情畲家同胞的困难，就生炉打铁，制作铃刀、神铳，帮助畲民消除兽害。雷祖公用树片做成号角，当野兽为害时，则吹响号角，人们闻声赶来，挥舞铃刀，举起神铳，围歼野兽。从此，人们才过着安定的生活。为了感谢魏家兄弟的帮助，颂扬畲汉两族人民共同创业的深情厚谊，畲家在鼓楼山上兴建一座庙宇，以纪念魏家兄弟，尊称他们为“魏公侯”，并于每年春耕前举行盛大的盘歌会。这天，大家都用糯米和蔗糖做成的米酒、馒斋，到庙上进行公祭。人们

舞起铃刀，鸣放神铳，吹响龙角，作驱赶野兽状，以祈求五谷丰登，人畜两旺。然后，大家在庙前架起两棵7米高的“火树”，照耀歌场，进行盘歌，通宵达旦。

畲家拳

畲族人民练拳习武之风十分盛行，经过千百年来的传承、加工、提炼，已形成了独具一格的民间武术。畲族武术分棍术和拳术两种。“盘柴槌”又称“齐眉杖”或“打柴棒”，是棍术中的一种。因器械之长短和功用的不同，柴槌又分两种，一种叫“丈八棍”，长4米，由一人耍弄表演，又叫“中拦”，有攻有拦。另一种2米多长，由两人对打，互相配合。棍术名目繁多，动作复杂多样，有七步、九步、猴子翻身、双头槌、三步跳、四步半、天观地测等。

拳术则广泛流传于畲族山村，是畲族人民世代流传的群众性护身和健身的体育活动。拳术中特别令人叫绝的是一种点穴绝招，即用手指头点按对方某一穴位，使之动弹不得，束手就擒。操这种绝技的多是德高望重的老拳师，他们不但武艺高超，而且还练就一身点穴解救之法。

值得一提的是福建罗源县八井村的畲家拳，攻防有术，招式多变，独具一格。他们称拳术为“打工头”。每逢年节和农闲，随处可见人们习拳练武的身影，可闻连连不断的吼声。全村三百多人中，至少有一半以上的人会拳术，他们的拳术功夫高深，技术精湛，远近闻名，称“拳术之乡”。

八井拳术经过畲族人民的千锤百炼之后，已初步形成了独特风格，既具有我国南方民间传统拳派那种短促有力、迅速凶猛的特点，又具有比较完整的攻防套路和鲜明的民族风格。八井拳术

的攻防套路有半龙虎、虎装、五虎、七星、十八罗汉等，其中以半龙虎为最基本的一套，动作多模仿动物，有时似老鹰展翅，有时如猛虎下山，有时像观音坐莲，每一个动作都有攻有防，攻防结合，连贯自如，节奏分明，步法稳健，简练实用。

福安县金斗洋畲村流传着关于畲家拳与少林寺之间关系的故事。相传清雍正年间，少林志士四起，高举反清复明的旗帜，震撼着清王朝的封建统治。清廷派兵镇压，焚毁泉州少林寺，肆意残杀无辜的寺僧。少林寺僧铁珠死里逃生，最后流落到福安县金斗洋畲村，在畲族村民的帮助下，铁珠隐姓埋名，在畲村金斗洋安居下来。他披星戴月，日以继夜，苦练武功，三年时间，练成一身好武艺，便开设武馆，教授畲民练拳习武，一时金斗洋畲村掀起了舞枪弄棒的“功夫热”。畲民勤学苦练，精益求精，博采武术之精华，遂创立了独具一格的武术流派——畲家拳。

金斗洋畲家拳内容丰富，有三战、四门、大七步等十几个拳术套路和棒、铁叉等十多个器械及各种对练套路，风格各异，特点不同。三战，是畲家拳的入门基础套路，又称“入门拳”。它练马（步）、练架、练力，简单易学，但很难达到精湛，所以拳师们常说：“要想功夫好，‘三战’里面找。”

绝招“一竹功”更是令人叫绝不已。把一根粗麻竹悬空架起，练功者二人在上面疾走如飞，一面练技，一面打拳，进退自如。

畲家拳练功的方法独特，人们砍伐一节竹筒，凿一孔，放入一条毒蛇，待蛇尸霉烂后，习武者把手插入筒内，蛇毒使手奇痒难受，五指须摩擦为快，从插米糠、大米、沙到铁砂，练就“铁沙掌”本领。

打尺寸

“打尺寸”是畲族传统体育活动形式之一，流行于福建闽东畲山村寨。每年“二月二”、“分龙节”、“九月九”歌会或辛勤劳动之余，畲族人民便群集于山野的平地上“打尺寸”。“尺寸”的打法是：选择一块30至50米长的平坦场地，在场的一端，画上一个直径约2米的圆圈。一部分人围着圆圈，圈中站立一人，左手持一根筷子长短的小竹条（叫做“寸”），右手持一根30厘米长的小木棍（称为“尺”），其余的则站立在圆圈之外。游戏开始时，中立者用木棍猛击竹条，使竹条旋转着向圈外飞去，圈外的人们则竞相奔跑、承接，如竹条落地，圈外的人则拣起竹条回投圈内，中立者可以用手接住，也可以用木棍再将竹条击出圈外。如是反复持续，不断的接击，圈外者不使竹条落地就算得胜，胜者便可转换站入圈内。人们在笑语欢声中，不断出现紧张、活泼、诙谐、有趣的场面，既培养机智、勇敢、顽强意志，又锻炼了身体。不少畲族男女青年还通过这项活动，相互了解，增进友谊，产生了爱情。这项活动具有浓郁的生活气息，因而深得畲族人民的喜爱。

提起“打尺寸”的来历，当地畲族流传着一个传说：相传唐代中宗景龙二年，闽粤赣三省交界地区的畲族先民，在民族首领蓝奉高等人率领下，举族反抗官军入侵。由于多数畲族义军是猎户出身，手执弓箭，箭无虚发，把官军杀得落花流水。后官军开来大批援军，义军寡不敌众，渡过汀江，退守江边，凭借江水天险，隔江抗敌。官军从江对岸射来万箭，蓝奉高手持断弓，左拨右挡，把官军射来的箭矢一一拨回敌阵，杀伤大批官军，使之不敢过江，终于守住了汀州城（今福建长汀县）。

为了缅怀民族首领蓝奉高的英勇事迹，畲族人民从此世代相

沿举行“打尺寸”活动，“尺”即断弓，“寸”即箭矢。最初该活动是在河的两岸举行，甲方在河岸持断弓防守，乙方则在对岸射箭。当箭矢纷纷射来时，甲方畲胞手持断弓，把射来的箭矢，一一挡回对岸。久而久之，尺余长的木棍代替了断弓，筷子长的小竹条代替了箭矢，“打尺寸”逐渐演变成现在这样的活动形式。

竹林竞技

竹林竞技是畲族传统体育活动形式之一。畲乡山寨多处半山腰，周围生长竹林。畲族人民因地制宜，充分利用山区竹林的优势，开展竹林竞技的体育活动，有爬竹竿、弓箭射击、打秋千等不同形式。

爬竹竿：即选择几株挺直翠绿的毛竹，看谁爬得高、爬得快。爬竿时，还讲究动作敏捷，花样新颖，有的爬竿只用双手不用脚，有的倒立着用双手往上攀爬等。

弓箭射击：即选用一些好竹子，砍下做成弓箭，以比赛射程远近和准确性来决定胜负。畲民中不乏“百步穿杨”的能手。有的还比赛射斑鸠。

打秋千：畲民打秋千与汉族、朝鲜族不同，具有自己的特色。青少年喜欢把碗口粗细且又十分柔韧的新翠竹拉弯下垂，在竹子末梢上将嫩枝编织成圈状座位，人坐上面，利用毛竹的弹力和身体重心的变化，在半空中上下悠荡，做出许多惊险的动作，真是动者应付自如，观者惊心动魄。

三月三染乌饭

畲族于每年农历三月初三，照例要蒸乌米饭，合家聚餐，馈

赠亲友，祭祀祖先。乌米饭的做法是，采集一种野生植物乌稔树叶，捣碎后用布包好放入锅中，加水煮成汤，流出黑汁，然后捞出布包，放入糯米，蒸成乌饭。这种饭色泽乌黑，由于乌稔能起开脾、防腐作用，贮藏在苧麻袋里挂在阴凉处，可数日不馊，食用时，以猪油炒热，香软可口。

关于乌米饭的来历，在畲民中流传着几种不同的说法。福建霞浦县畲族流传着这样一个故事：相传从前畲族人民在抗击敌人时，米饭常被敌人抢去。后来他们想出办法把米饭染黑，使敌人怕中毒而不敢抢食。这样，畲族人民才兵强粮足，终于把敌人赶出家园。又传说在唐朝时，畲族英雄雷万兴被关在牢里，他母亲送来的米饭常被狱卒夺走，雷万兴想法让母亲把米饭染黑，狱卒不知底细怕中毒才不敢抢食。后来雷万兴出狱，战死在沙场，后人在他牺牲的日子染吃乌饭以示悼念。闽东各县畲族还传说，在唐总章二年(公元669年)，畲族英雄雷万兴率领畲军抗击官兵时，被围困在山中。当时正值严冬季节，粮断援绝，情况万分危急，雷万兴发动畲军上山寻找食物，只见草木枯黄，唯有乌稔树。虽叶落殆尽，但仍然果实累累。畲军摘食乌稔果充饥，军威大振，雷万兴便于农历三月初三率众冲出重围，杀退官兵。后来在三月初三这一天，雷万兴在享用丰盛的鱼肉酒菜之余，忽然想起昔日被官军围困摘食乌稔果香甜可口的情景，便吩咐畲军上山采摘乌稔果来调调口味。可正值春暖花开之时，草木刚生出碧绿的嫩芽，畲军只得摘取嫩绿的乌稔叶子回来，和以糯米蒸煮成乌米饭。后来畲族人民为纪念雷万兴抗击官军的胜利，于每年农历三月初三蒸煮乌米饭祭祖，日久相沿，遂成畲家风俗。

招兵节

招兵节是畲族传统节日之一，流行于广东凤凰山区畲族地区。据说这个节日起源于丰顺县凤坪畲村。每年举行两次（一说三五年举行一次）：第一次在农历正月初五前，为“请兵节”，第二次在农历除夕前一天，为“送兵节”。每次节期为一天一夜。现在潮州凤凰山区的畲族则把请兵节和送兵节合二为一，每五年举行一次，称为招兵节，一般在农历大雪后到冬至前择吉日举行，时间一般为三天三夜。节日里在公厅搭一高木台，设神坛，摆香火炉，上插有各种兵马的令旗，男女老少穿着节日盛装，家家户户备办供品，宴请宾客。村里神坛前悬挂祖图，由村中德高望重的老人主持祭祖。由师公敲打道具，翩翩起舞，口中念念有词，吹牛角，一时鼓乐喧天，热闹非常。举行招兵节旨在恭请三奶娘娘驱邪除恶，扶正压邪，保佑全村风调雨顺，五谷丰登，人畜两旺，安居乐业。

说起招兵节，畲族人民还津津乐道一个有趣的传说：相传畲族师公的鼻祖是福建古田县临水宫的三奶娘娘，原名陈四姐。临水宫里有座白沙爷宫，白沙爷乃害人的蛇精，享受人间香火，为非作歹。宫里规定每年要用一名童男祭祀白沙爷，遭到在白沙爷宫里干活的陈四姐的哥哥坚决反对。白沙爷怀恨在心，把陈四姐的哥哥囚禁起来。为了营救自己的兄长，除暴安良，陈四姐踏上了去闾山学法的征途。一路上跋山涉水，历尽艰辛，在征途中又结识了李三娘和林九娘，三人结伴而行，终于到达闾山，直接受闾山法师的指点，学到了腾云驾雾、降妖伏魔的法术，把蛇精白沙爷处死于万丈深渊的潭底，不但拯救了哥哥的性命，同时也杜绝了每年一次献祭童男的恶习，使临水宫附近的人民得以安居乐

业，过着美满幸福的生活。

在广东凤凰山区还流传着招兵节由来的另一种传说，相传当年盘瓠王往番邦取番王头时，被番兵追赶到了海边，得神兵神将之助，方安然无恙地返国。畲民为了纪念自己的祖先，感谢这些神兵神将，遂每三五年举行一次“招兵”，向他们献祭。

●高山族

高山族是1945年后对台湾统属南岛语系语言的民族的概称。除已汉化的平埔人外，现在有阿美、泰雅、赛夏、邹、布农、鲁凯、排湾、卑南、雅美等9个话群，主要分布台湾中部山地、东部纵谷以及兰屿岛上，共约34万多人（1989年统计）。大陆还有2909人散居（1990年统计）。

高山族历史上有“夷”、“流求”、“岛夷”、“东番”、“土番”、“番”等不同称谓。其先民文化同大陆古越人之间存在渊源关系。语言隶属南岛语系印度尼西亚语族，传统信仰泛灵多神的原始宗教。

歌舞相亲和鸣臼接婿

擅长歌舞的高山族阿美人，通常以歌唱和舞蹈作为有情人成眷属的“鹊桥”。

盼到初秋部落盛典“丰年祭”这一天，小伙子斜挎着母亲缝制的槟榔袋——这是求亲的标记，汇聚会所旷地，夜以继日地跳“圆圈舞”。大家联翩把袖，顿足踏歌，在姑娘面前大显身手。姑娘们则站立一旁围观，落落大方，绝无大家闺秀那种羞涩之态。相中了哪个小伙子，就上前拉哪个的槟榔袋。此时，小伙子回眸顾盼，若是灵犀相通，立即把袋子移至肩上，待到夜阑歌舞终场，便双双到谷仓后檐下谈情说爱。从此，幽会频频，每每夜深星沉犹依依不舍，人们艳羡地谑称他们是“夜半恋人”。

阿美人崇尚母权，男子是作为情人与劳动力二重价值而存在的。随着“夜半恋人”浪漫史的终结，入赘婚标志着男子从情人到劳动力的转变，接婿仪式明显地涂抹一层女尊男卑的色彩。

接婿仪式选择在月夜。首先由当家人——姑娘的母亲操杵击打两遍木臼：第一遍通知女婿请其母舅来主婚，第二遍宣告迎婿入门。这种鸣臼报喜叫“罗基罗昆”。击臼有一定章法，臼声激越远播，音韵萦绕不绝，使家家户户都能分享到招赘添口的喜庆。

母舅作为新郎的“特命全权大使”登堂入室，呈上新郎的礼物——一条“娑锦”头巾，放在糯糕、粟酒中间祭献神明。然后，食指沾酒掷空，浅唱低吟祝婚歌。唱毕便入席。

穿着套袖长衣的新娘，接受祈神赐福的主婚礼之后，在父母的簇拥下迎宾送客，举止间不时流露出新娘兼主妇的矜持和得意。同新娘的雍容华贵相对照，新郎则被安排在厅堂门外，挨着窗口站着，除了从窗口抛进“娑锦”给母舅主婚之外，始终像木桩似

的垂手恭候，婚礼后又独自回部落会所与同年龄群的伙伴们过夜。

一连五天，新郎通过砍柴、打猎、帮工等一系列劳务“考核”之后，才被认可入门招赘。

布农新娘的入廪禳祓礼

高山族卡社群布农人结婚时举行一种禳祓仪礼，叫“巴洛支阿嫩”，意思是“请新娘坐谷仓”。

新娘过门不入洞房而坐谷仓，出于祈福禳灾、人寿年丰的动机。这种宗教性的奇特婚礼，往往伴随诸多禁忌。

按照世代相传的族规，大厅里的谷仓是布农人供奉谷魂与祖灵的圣地，通常采树皮精心编织，形状如同大木桶。仓上靠墙挂着一捆象征谷魂与祖灵的灵粟，叫“达摩谷”。灵粟是去年从地里优选的良种，穗长粒满，好像黄金一样熠熠发亮。禳祓之前，祭司在上面斜插猪皮、猪肉以及心肝肺等各四片以为供奉，谨请神灵纾尊降贵，给新娘行禳祓大礼。

禳祓礼其实是一种极简单的祈祖仪式：新娘盛装坐在谷仓里，她的公公站在仓外，手拎着一个生猪头，在新娘头上缓慢地转几圈，一边喃喃祈祷说：“新妇入仓，吉祥盈门，家畜成群，粟谷如山，子孙繁衍！”祈祖完毕，新娘就被“禁闭”在仓内，整整一个月接受祖灵于冥冥中的禳灾赐福。

新娘禳祓期间要恪守许多禁忌。例如，不许吃猪肠子，不许打喷嚏，不许同房，不许放屁，等等。其中最要紧的是，白天不许走神瞌睡，不然，触怒祖灵使谷物连年歉收，全部落都要挨饿。因此，从新娘入廪时起，年迈的婆婆在仓外监守，像看守囚犯一样负责监督和送饭。

为了防范邪魔作祟，新娘除解手外禁止出仓，如若出仓解手，

也要头顶大簸箕，把头脸罩得严严实实，俯首弓身匆匆去来，不让邪祟有可乘之机。此外，部落成员不时探望慰问，馈赠兽肉新酒，祝福她安然无恙。

20 世纪以后，随着文化交流的增强，布农社会移风易俗，传统的人廪禳祓礼遂被革除。

多种连名制

支系复杂的高山族，长期在生产力低下的原始社会徘徊，历史进程缓慢又不平衡。作为古代历史文化遗存的活化石——连名形态丰富多彩，蕴含富有学术意义的内涵和价值。

一、台湾东部的阿美人实行从妻居，长女或幼女继嗣，母权至高无上。命名形态采取母子（女）连名，狭义的形态女连母名，子不连母名；广义的形态不论子女俱连母名，例如，芙赛·阿娥（女）、芙果洛·阿娥（男）等。女连母名表明母女相承的正宗世系，男连母名则是出赘后保持舅父权的标志。

二、台湾北部的泰雅人，骠悍骁勇，崇尚父系一脉相传，命名形态采取父子连名，例如，夏特·达那赫，后连的父名表明父权对子女的确认。毗邻的赛夏人命名更具特色，第一，有反映古代图腾遗迹的“姓”，例如樟、枫、蟹等；第二，父子连名中间有表领属意义的词缀“阿”，使血缘世系一目了然；第三，直系长嗣的名字因袭祖名，出现了隔代重名的现象，例如（祖）达因·阿·厄玛乌、（父）厄玛乌·阿·达因、（子）达因·阿·厄玛乌，祖孙三代名字仅连名反复。

三、台湾中部的布农人，氏族群居，都有渊源图腾、祖名、发祥地、历史事件等氏族名称。氏族名连己名，以表明族属渊源，连名方式有前连、后连两种，前连如玛哈桑·达荷；后连如乌松·

玛多莱安等。氏族名称反映相同或相近血缘关系者，叫“嘎多斯朗”，即“禁忌联姻”；相反者叫“玛瓦萨”，即“适宜联姻”，因此，氏族连名不仅志亲疏，而且有别婚姻的职能。

四、台湾南部、东南部的排湾、鲁凯和卑南人均采取己名连家宅名。家宅名是家宅特有名号，连在己名后面，作为某一家庭成员的标记。例如，果瓦勒·玛法柳、洛安·巴法法隆，表明分别是玛法柳、巴法法隆家宅的成员。由于排湾人与鲁凯人已出现阶级分化的萌芽，部落成员分贵族与平民，贵族又分继承权的长嗣与无继承权的余嗣，这些等级与特权反映在人名上，己名与家宅名均有尊卑之分。

五、聚居兰屿的渔猎氏族——雅美人，他们实行一种与台湾岛其他高山族殊异的从子名亲。雅美人从幼命名，名前冠以“西”或“西米那”，标志部落成员，例如，西·布安、西·玛奈等。一有了子嗣，即行命名大礼，父母长辈都要放弃原名，依据子名并冠以称谓，作为自己的新名，例如，长子命名扎嘎利特，父名西·阿玛扎嘎利特（扎嘎利特之父），母名西·依娜扎嘎利特（扎嘎利特之母），祖父母名西·阿奔扎嘎利特（扎嘎利特之祖）。在雅美社会里，冠以子名，是难得的殊荣。

赛跑成丁和长老晋级

赛跑成丁和长老晋级是男子一生中两大转折关头。为此，高山族阿美人都要举行特殊庆典：赛跑角逐和“玛多瓦赛”。前者是对体力勇武的崇尚，后者是道德日臻完美的追求。

赛跑列为成丁礼经典性的仪式，正届成年的男子都要参加。赛程约3公里，包括坎坷的平地、山丘和沙滩。男子戴避邪的姜叶环，赤裸上身，下穿白色丁字裤，犹如战士待命出征，充满一种

箭在弦上的紧迫气氛。他们从会所出发，一路上你追我赶，展开角逐。沿途有亲属或恋人呐喊助威，并携糕、酒以备犒赏；后面跟着一位持矛的勇士，拔着白鸡毛，往落伍者的项背抛掷，同时祈神禳助："祖先与你同在，吉祥随神俱来！"最后，夺魁的男子被任命为成丁年龄级的首领，率领大家沐浴海滨祭祀海神。

从此，凡经赛跑考验的男子，加入年龄组织严格受训，承担农耕、渔猎、铺路以及卫戍等重任，赢得功绩和尊敬。二三十年后，与日俱增的资历与功绩转化为最高荣誉——"玛多瓦赛"，步入握有决策权力的部落领导集团。这时，每一个晋级的成员都要接受人生最后一次戏谑性的礼仪——"挨打"受戒。

"玛多瓦赛"的老大哥，首先轮番给每一个人敬斟一大杯醇香扑鼻的慰问酒。为了显示自己豪勇如昔，海量不让后生，大家无不捧碗一饮而尽，点滴不洒于地。劝酒之后，老大哥揪着新长老的胸襟，厉声训斥："你枉过岁月，名声过实，业绩与荣誉难等。从今以后，自当嗟悔，急起直追，奋发有为，克尽厥职，莫辜负祖先教诲与后生期望！"然后冲着他们身上连吐口沫，猛踢后腿。对这一通言过其实兼拳脚交替的训诫，新长老们唯唯颔首，表现出豁达大度的涵养。

阿美人的卡布特年龄群

"卡布特"是高山族阿美母系氏族社会里卓然独立的男子年龄群。阿美男子18岁成年，履行成丁礼后入会所受训，从此成为卡布特的一名男子汉。

小伙子加入卡布特之后，首先在初级段"巴嘎隆艾"（受差遣）承担杂役，例如扫地、挑水、烧炉子、伺奉长老等，睡地铺，禁女色，衣食简陋。经考验合格逐步晋升，参加耕、战、渔、猎，

驰骋纵横，建树战功，升至青年级最高级，获“青年之父”称号，俨然举足轻重的部落骨干。晋升壮年级后，开始承担训导下级青年的工作，事必躬亲，身先士卒，时刻用模范行为去示范教育青年，担任中流砥柱的角色。50岁左右荣升长老，有权参与部落宗教、生产和军事等重大活动的策划与领导，运筹帷幄至耄耋几无闲暇。男子的一生就这样循序渐进地晋升各年龄级，自觉履行所在级别的职责与义务。

卡布特是具有准军事性质的原始社会组织。它按照年龄与职责分成十几个到二十几个不等的级别，长幼有序，上下有别。每个人在这架庞大的机器里，是一个部件或螺丝钉，刻苦地磨砺意志，无条件地奉献才智。为了保证机器的运转，任何人除了克尽职责外，严明纪律，下级绝对服从上级，年长凌驾年幼之上。上级成员的训示与指导，下级成员分毫不差地实施，凡有任何抵牾与失误，则施以训斥、杖责、禁食、夜闯坟岗等惩罚。严明的纪律性，使等级森严的各年龄级充分发挥社会职能。

卡布特实行原始共产主义。即使仅一只猎物、一块粟糕，或是一瓮陈酒佳酿，都平均分配落实到每人手里，然后，宴飨歌舞，老幼同乐。长老允许享受的细微优待，仅仅是衣饰随便以及得到包含禁忌性的猎物首尾之类的食物。

雅美人的飞鱼祭

到兰屿岛旅游观光的人，无不兴致勃勃地观赏雅美人“飞鱼祭”盛典。

飞鱼祭渊源于飞鱼王梦谒雅美祖先告知鱼汛，使雅美后人年年丰渔的传说。以祈神谢祖为宗旨的飞鱼祭，包括试船、出海、渔猎、尝新、贮藏、终食等仪式，伴随着捕猎飞鱼活动，从三月鱼

汛到十月终食，断断续续长达8个月，堪称世界上时间最长、内容独具的祭祀庆典。

三月一日晨，在阳光灿烂的海滨举行试船仪式。海滩上放着两舷彩绘着玛卡玛乌格神像和太阳云翥图案的新船。船员穿着坎肩，戴着雪亮的银盔、胸饰，伫立船侧。舵手宰杀一只雄鸡，食指沾血涂抹船舷和滩上嵯峨嶙峋的礁石；船长举刀指天，喃喃召唤飞鱼王，并取出象征飞鱼的33个小竹筒，依次涂血祛邪。这时，众人扬举银盔，尖声嚎叫，耸身船外奔跑喧哗，奋力把木船推入海面。然后，回到家里，分别给晒鱼竿、鱼钩和兰草火把禳祓驱鬼，又回到海滩祭祀新船。

入夜，船员驾舟出海。船长于船头杀猪取血，从瓮里舀一瓢清水，同粟谷一起抛撒海面祭祀飞鱼。然后，竞舟逐浪井然有序地撒网捞捕。此时，万千渔火映着满天星斗，波光水色变幻，海山浪峰错落，海天相接，渔舟明灭，蔚为壮观。在捕鱼旺季的三四月间，船员们夜夜出海，黎明时分才回住地歇息。

第一次捕捞的飞鱼，分给船员带回家里举行“尝新祭”。全家人环绕银盔和胸饰覆盖的飞鱼席地祷告，然后把一条条飞鱼不经开膛剖肚放在锅里，完整无缺地煮熟，又一条一条规规矩矩地吃掉，不许掐头去尾，挑肥拣瘦，否则，会受到飞鱼王惩罚。

六月底，繁忙的季节基本结束了。人们忙着把晒干的鱼，贮存于陶罐以备食用。到了金秋十月，雅美人禁忌吃鱼，每个家庭都把吃不完的鱼统统抛撒野外，以示“终食”。

布农人的打耳祭

农历四月除草农忙刚过，布农男子就结伙上山围猎。中旬，狩猎凯旋，次日凌晨三时许便携带弓箭、火铳等猎具，有的还背着

周岁婴儿，聚集会所旷地举行猎人大典——打耳祭。

旷地上聚薪燃火，光可烛天。火堆旁斜立着一块“瓦拉奴”木制成的“嘎赫”盘。上面排列着三行兽耳：一对鹿耳、一对獐耳、一只山羊耳和野猪耳搭配，用粘糕依次整齐地沾在木盘上，显得特别醒目。传统的打耳祭叫“玛拉格达尼雅”，意为“箭射兽耳”。那些耳朵象征山林野兽，“射耳”寄寓着猎丰人寿的宗教含义。对初生的小子，自然还有祈祖赐福、长成擅猎的吉祥祝愿。

射耳时，小子由其父抱着挨近木盘，对着鹿耳、獐耳模拟性的挽弓射击，但禁忌接触山羊和野猪的耳朵，否则，长大出猎必然畏惧野猪，或者被山羊引入歧途坠崖身亡。因而小子履行礼俗时，其父喃喃默祷：“射鹿射獐，出猎无恙！”大人则不必拘泥旧俗礼制，或弯弓劲射，或持枪挺刺，欢声笑语，一扫适才的庄严肃穆，气氛顿然活跃起来。

天亮后，头目把两堆柴火搬进会所里，众人尾随而入，紧闭门窗。此时，会所变成猎人的神圣天地，禁忌女人和狗闯入。头目把各家各户奉献的祭肉放在火上炙烤，均分每人一大块，20岁以上的人还分到新酿的粟酒。众人沾酒洒地，祭祀随身携带的猎具以及迭放在后壁的兽骨人头，然后吃肉喝酒，即兴高歌狂舞，无拘无束地抒发猎人粗犷豪爽的情怀。

下午，兴致犹酣的老猎人，腰间挂着粘着蜜糖和一小撮兽毛的弓箭，席地而坐，跟着一位战功卓著的老猎手抚掌击节唱诵宣扬战功、箭术与巫卜神通的祷词咒语。老人乐此不疲，一股劲地唱着喊着，嗓子哑了，就出去喝酒润喉解渴，又复归原座，直唱得醉眼朦胧、天旋地转，方才罢休。

排湾人的五年祭

高山族排湾人“五年祭”庆典称“玛洛富格”，源于远古神话。传说排湾始祖是百步蛇化生，栖息在云雾缭绕的太武山上。他们每隔五年结伴下山视察山寨，福佑子孙后裔。每逢祖灵下山的七八月间，家家户户都要设祭迎灵酬神。

排湾人迷信鬼魂，唯恐横死的野鬼趁机作祟，坏了祀祖禁忌，因此祭前清扫庭院，在石凳周围插满枝叶繁茂的竹子，殷勤备至地请鬼魂纳凉。把野鬼笼络住了之后，主妇才到房前屋后和墓地等祖灵必经之处，分别呈献三五块糯糕，给祖灵接风。

接着，举行部落性“刺球”娱祖仪式。首先，三个藤球由氏族祭司专程送至部落祭司家里襄禊后交给长老。刺球仪式持续一个下午。刺中者意犹未尽地退出广场，未中者全力以赴投入竞逐，直至人人命中，都得到祖灵福荫，吉星高照，长老才挂球立柱。

黄昏时分，小伙子们挥舞佩刀，把刺球长竿砍断剁碎，放在石头围砌的方坑里掩埋，然后从立柱上摘下藤球，送回部落祭司家里。翌日晨，部落祭司又把球送到人迹罕至的野外小棚里贮藏起来，轰轰烈烈的酬神悦祖活动遂告结束。

赛夏人的矮灵祭

传说达爱人是先期抵台湾以骠悍闻名的“小黑人”，原与高山族赛夏人交好，曾向赛夏人传授种粟技术及有关祭祀。后因达爱人调戏赛夏人妇女，导致失和，酿成恶斗。赛夏人弱不敌强，遂设计锯断达爱歇息的渡桥，使之沉江溺死，举族灭绝。这段恩恩怨怨微妙复杂并被赋以神话外衣的民族关系史，就是矮灵祭的渊

源与文化背景。

矮灵祭是赛夏人祭祀达爱人亡灵的活动，订于农历十月十三至十八卜日举行。包括迎灵、延灵、娱灵、送灵和逐灵等五个祭典，通过一系列巫术性歌舞，维妙维肖地再现赛夏人与达爱人从友好到交恶的情景，以表达对达爱人亡灵既崇拜又畏惧的心情。气氛隆重热烈，情调欢快。

达爱亡灵与神灵应邀下山时，由祭司引导入村，赛夏人列队吟唱迎灵歌，同时推出木臼，竖立庭院里。一位标致的少女捧着一簸箕粟谷倾入木臼并操杵捣糕，表示盛情款待之意，然后载歌载舞送亡灵到娱灵所。

迎灵歌舞于夜间举行。迎灵场上火把通明犹如白昼，人们拥戴着亡灵围圈而舞，“手牵足顿别传神”。歌声如风随浪，妙语神韵；舞圈徐疾回旋，进退自如，尤其是三个小伙子的大帽舞，更具粗犷多变的风格，铃铛摇曳作响，舞姿舒展空灵，把人神共乐融洽无间的主题，渲染得淋漓尽致。

到祭祀尾声时，歌舞转为逐灵送客。盘旋无隙的舞圈，不时变幻出逐客的动作。舞者尖声怪叫，流露出不胜厌弃之情，围观的群众也拾起包着桃叶的小石子，纷纷抛向冥冥中的亡灵。最后以断木毁桥的舞蹈动作，象征当年赛夏人断桥不战而胜达爱人。

祭祀过程的舞蹈，巫术色彩浓厚。吟唱的祭歌共16章，也赋予既定的宗教含义，往往根据仪礼需要来选择。

杀猴除秽和出猎成丁

杀猴除秽和出猎成丁分别是高山族卑南少年与青年进入会所的重要礼仪，都在旱稻收成后的11月间举行，为期10天。

杀猴是十二三岁少年进入少年会所的仪式。开始时，少年用

锅灰涂脸，芭蕉叶缠身，持着棍棒凶神恶煞般地挨家挨户搅扰，驱赶邪魔，然后上山捕捉一只山猴囚于木笼里。祭司率少年团团围住木笼，各持长矛硬是把猴子活活刺死，折身返回会所高台下，竞相俯拾青年级成员从上面撒落的竹膜，投掷猴尸，表示驱邪招吉，弃旧图新。

第三天，少年们抬着猴尸至野外安葬。猴尸用木桩撑直，呈昂首挺胸的姿态。少年们一面殷勤地拿树叶“喂猴”，一面唱着不胜哀伤的挽歌，祈祷猴子背着扫地出门的邪魔，到遥远的地方安身立命。少年进入会所仪式至此结束。

随后举行十七八岁青年人成年仪礼的入会所仪式——大猎祭。祭司率青年进山，择地搭建茅舍祭台。当夜，老人给青年换上宽 85 厘米长 1 米，标志成丁的“瓦利森”腰巾，并就地围猎，所获猎物当场宰杀祭神。

经过简洁的成丁礼仪，青年们受命深入峡谷密林单独出猎。凡有所获，即送回茅舍储存。这样，每个青年在狩猎过程中不仅接受勇敢与智慧的锻炼，同时接受刻苦耐劳和自我克制能力的考验。

入山期间，即将卸任的青年级成员不时围绕老人住宿的茅舍奔跑呼吼，一边解下腰间的茅草结投掷房顶，以驱邪祛灾。以此向晋级成丁的青年进行道德示范教育。

大猎祭为期 5 天。猎队返村时，青年背着猎物沿途鸣枪报捷。村人闻声迎接，簇拥着老人聚会村前旷地，歌舞宴飨，通宵不绝。

大帽舞、杵舞和甩发舞

高山族歌舞既诞生于原始农耕兼渔猎、祭祀盛行、民风纯朴的沃土，又得惠于台湾南国风情得天独厚的营养，歌舞一体，声情并茂，以纯情古朴、楚楚动人的风采卓然于世。

大帽舞源于赛夏人传统矮灵祭的宗教舞蹈。3个体魄矫健的舞蹈者，臀部垂挂缀满响铃的袋状“道具”，戴着大帽子，帽沿也垂挂一排玲珑精巧的小铃。他们和歌而舞，盘旋进退，俯仰屈伸，错落变幻，徐疾有致。随着动作的跌宕起伏，铃铛摇曳铿锵，此起彼应，妙韵天成，形成一种情采独绝的伴奏。大帽舞后来演变为娱乐性的民间舞蹈，舞蹈者帽子扛在肩上，跳跃自如，舒展自然，更富魅力。

驰名中外的杵舞，主要流行于乌来山区和日月潭一带。取材于舂米劳作，其实是舞蹈化的劳动。舞者写实性地模拟舂谷动作，环绕石臼，操杵撞击石臼不同部位，仿佛击打琴键似的发出清浊各异、悦耳成韵的音色，编成神奇迷人的打击乐曲。妇女和杵踏歌，一边用脚掌有节奏地拨弄粟谷，歌舞和谐天衣无缝，创造出意在言外的诗情，给人一种难以言传的艺术享受。

甩发舞是雅美人创造的独特舞蹈。舞者多系天真活泼的少女。姑娘们有规律地横列成排，一边吟唱一边甩动头发，动作由慢到快，俯仰屈伸，盘旋往复，及至屈膝弯腰，秀发频频拂地，乃至高潮，歌舞嘎然而止，余韵绵绵不绝。舞者人数不限，阵容与声势颇为壮观。

刺藤球与荡秋千

刺藤球与荡秋千是高山族排湾人普遍喜爱的娱乐活动。史载每逢喜庆，风和景明，“抬邀树底，争此为戏”，“男女堵观，以为欢娱”。

刺球源于“五年祭”，原先使用的藤球及长竿都经神占巫卜，用特定的材料制作。藤球的球心用月桃木，然后采相思树皮，削成宽约1厘米的条幅，均匀地缠绕球心，制成直径约11厘米的球体，系上1米长索，即成“嘎比拉”——藤球。竹竿约4.5米长，也是祭司率青年上山采竹，生火炙直，用几节竹管衔接而成的，人称“米依那特”——刺竿。

刺球是五年祭祈祖禳福的一项重要祭典。祭司长老站在高台木架上高抛藤球，一边牵引长索，一边朗声唱出象征人寿年丰、武功战绩等吉祥物名称。青年举竿竞相挺刺，每刺中一次，观众群情激昂，狂呼呐喊，如醉如痴。刺中者被视为英雄盛情款待，荣耀至极。

荡秋千是刺球后男女青年踊跃参加的娱乐活动。架设秋千的四根柱子，经祭司卜日上山采伐。砍好运回村时，柱子须齐头并进，否则不吉利。秋千在旷地搭设，高约十六七米，藤索下面铺设一个可容一二人的藤垫。荡秋千时，姑娘坐在藤垫上，系上长索，请小伙子牵引操纵，两相配合，秋千荡漾摇曳，上下飘忽，令人心旷神怡。

贵族婚前的荡秋千含有驱邪纳吉的意义，是名门望族的专宠，平民不敢问津。但是，平时喜庆节日的秋千却是全民性的娱乐，特别是丰年祭，随着粟谷丰登，青年的爱情也春华秋实，一对对情人秋千嬉戏，灵犀相通，在天真无邪的欢声笑语中任凭爱情的旋律与神韵激荡洋溢。

●拉祜族

拉祜族人口为411,476人(1990年统计),聚居于云南省澜沧拉祜族自治县、孟连傣族拉祜族自治县,散居于云南西南边境各县。

拉祜族自称“拉祜”、“拉祜纳”、“拉祜西”、“拉祜普”,也称“倮黑”、“哥搓”、“缅”、“苦聪”等。解放后,根据本民族人民的意愿,统称为拉祜族。

拉祜族有自己的语言,拉祜语属汉藏语系藏缅语族彝语支;曾使用西方传教士创制的拉丁字母形式的文字。1957年,在此基础上创制了拉丁字母拼音文字方案。

拉祜族信仰万物有灵、多神崇拜的原始宗教和大乘佛教,有少部分人信仰基督教和天主教。

以黑为美的服饰

拉祜族历来崇虎尚黑，衣料大多为黑色，其基本款式为右衽大襟长袍，右衽圆领短衫或对襟立领短衫，肥大长裤。

拉祜族传统女服上身为右衽大面襟黑布长袍，长及脚面，两侧开衩，高达腰部，具有北方游牧民族服饰的特点，有人甚至认为它是中国旗袍之前身。在领口、盘肩、衣袖、襟边及衩沿镶有红、白、蓝三色几何纹布条、布块，显得艳丽而大方。前胸开襟边沿镶嵌上雪亮的银泡，显得雍容华贵。下身为黑布长裤，裤脚有纹饰，头缠三米多长的黑布包头作盘状，一端由后背长长地垂及腰际，头帕两端缀有彩色线穗。赤足、裹腿。

男服上身为右衽大面襟圆领黑布短衫或对襟立领黑布短衫，下身为裤管肥大的黑布长裤，头缠黑布包头或戴无檐黑布小圆帽，帽顶嵌有一颗宝石般大小的银泡。这种无檐黑布小圆便帽，中、老年妇女平时也常戴。男子服饰无纹饰。

拉祜族佩饰也相当别致。妇女耳戴大银耳环，腕戴银手镯，胸前配挂“普巴”，即大银牌，肩挎拉祜花背袋。背袋以黑布为底，两面均用红、白、蓝、黄、绿等彩色布条、布块组成几何图案或动植物纹样，并在背袋尾端及图案间隙处缀以红、白、蓝、黄、绿等色线穗，显得古朴、艳丽而明快，甚至连背袋的带子也用色线织上图案。男子佩饰有葫芦笙、花背袋、长刀、火枪等。

拉祜族所以喜爱黑色服饰缀以闪亮银泡，除其崇虎尚黑，以黑为贵之传统审美观外，还因为拉祜族青年男女每每在繁星闪烁的夜晚，私定终身，因此，特别喜爱象征黑夜和繁星的服饰。

竹筒茶

竹筒茶，拉祜语叫做“瓦结腊”，是拉祜族一种别具风味的饮料。它不仅具有醇厚的春茶香味，而且还散发着浓郁的竹香味，既解渴，又解乏，一杯下肚，令人浑身舒畅。劳动之余，喝上一杯，不啻赛过活神仙。

拉祜族竹筒茶的制作简单方便，但却很独特：将刚采摘下来的春茶叶，炒、揉之后，砍来山间青嫩的甜竹，去掉一端的竹节，将炒、揉好的茶叶放入筒内压实，然后放到火塘边上烤，等青竹烤干，即破开甜竹，取出茶叶，即成筒茶。

除竹筒茶外，拉祜族还有一种风味名饮——藤茶。藤茶野生于山上，又名野山茶。据说，藤茶可助消化。

竹筒饭和玉米糕

生活在祖国西南边疆的拉祜族习惯于用竹筒煮饭，煮出来的饭，味道异常清香。他们还以竹筒煮菜，煮出来的菜尤其是肉，异常鲜、嫩，味道十分别致。

用来煮饭的竹筒，一般都是薄竹，约胳膊般粗细，去掉一头的竹节，将大米或玉米面放入其中，加入少量的水，煮菜或肉时，就不必再加水了。然后用树叶塞紧筒口，放在火上烧，烧熟后即破开竹筒食用。用竹筒烧出来的饭，既有山谷的醇香，又有青竹的清香，味道极佳。

竹筒饭的产生与拉祜族古时的生活环境和生活方式有关。拉祜族历来生活在南方亚热带丛林山地，曾是一个游猎民族，四时迁移，居无定所，宜轻装行动，不宜携带笨重的炊具；且所到之

处山高林密，植被丰富，到处都生长着竹子，竹筒饭就这样被拉祜族的先人发明了。如今拉祜族已离开原始森林定居，竹筒饭赖以生存的环境业已消逝，竹筒饭已从日常生活中消失了，只是在每年季节性的集体狩猎中，还可以看到和吃到竹筒饭。

玉米糕确切地讲，应叫玉米饭，是拉祜族苦聪人的一种主要食品。拉祜族是个山地民族，祖祖辈辈住在山里，山是拉祜族的命根子，而玉米则是山地最易生长的农作物，因而也是拉祜族特别是苦聪人的主要粮食作物。拉祜族祖祖辈辈种玉米、吃玉米，久而久之，便形成了自己一整套独特的制作加工玉米的方法，玉米饭或叫玉米糕就是其中之一。

玉米糕的制作方法并不复杂，将玉米脱粒后舂成小碎块，簸出糠皮，用清水泡一夜，淘洗淋干后再舂细，用筛子筛三道，洒上少许清水，将玉米面揉搓成均匀的小颗粒，然后放到竹甑里蒸，蒸熟后就像泡糕一样，用筷子挑或用刀切成块食用。

掌　楼

掌楼是拉祜族传统的住宅。掌楼一般为正方形，象征着房主地位平稳，生活安定。有极少数为圆形或椭圆形。大小不一，以各户的人口数而定。一般为 33 根柱子，7 根或 9 根横梁，若干根椽子和竹笆片穿接、串连、铺搭而成。木料一般选用向阳坡上的红毛树，以其粗大的树干作房柱，胳膊粗细的枝干或金竹作椽子，用上等黄竹作竹笆，用又软又结实的山茅草铺顶。

掌楼一律为上下两层，上层住人，楼面及四壁均用木板及竹笆铺栅而成，由“阿科”、“沙骂底格”和“护格”三部分组成。“阿科”即寝室，长约 8 米，宽约 5 米，按辈份和人数隔为若干小间，一般隔成两间，里间为父母的寝室，也是供奉家神的地方，还

存放家人的衣物、钱财、篾柜等，外人一般不得擅入。外间为儿女们的住室，也是接待客人的地方，室内陈设极为简陋，除盛水的竹筒外，大半为竹筐、篮兜等物。没有桌子、凳子、床之类的家具。室内无窗户，光线昏暗，来客与家人进屋后便都围火塘席地而坐。火塘设在外间中央，长约1米，宽约0.5米，四周用坚硬的木头围住，底垫泥土，终年燃烧不熄，用以烧水做饭，照明取暖。火塘是拉祜族家庭生活的中心，对火塘也和家神“页尼”一样有着各种禁忌，外人不得随便触动。“沙骂底格”即碓房，长5米，宽1.5米，是舂粮食的地方。“护格”即晒台，长5米，宽4米，用以日晒谷物，夜赏星月，以及放置部分生产和生活用具。下层不筑墙，用以堆放柴禾杂物或饲养家禽等。房顶呈人字形，用藤索或竹篾将竹片和山茅草固定覆盖上，厚而密，且坡度较陡，不易漏雨，可以抵御住寒风暴雨的侵袭。楼房从右侧顺梁开门，门外设有用粗麻栗树干砍成的独木楼梯，供人上下出入。

媒人求婚

拉祜族父母一旦知道儿子选中了对象后，就得立即请媒人上女家求婚。先将媒人请到家中，在屋中央放一张方篾桌，桌上放四个酒碗，爹妈敬上酒，请媒人喝，恳求媒人前去说亲。依照男方父母的嘱托，媒人说亲得连走三趟，即所谓过“三关”。第一趟须带茶叶一包、烟草一包、酒一瓶；第二趟土罐两个、烟叶两把、酒20碗；第三趟土布一块、绿布约30厘米、谷子一箩（约20公斤）。女方则从男方送来的礼品中看茶叶香不香，烟叶辣不辣，酒劲大不大，布织得好不好，从而判断出男方的劳动本领如何，如果满意，便同意成亲。

女方为了考验男方是否真心诚意联姻，往往出难题考前来说

亲的媒人。媒人进屋后，须女方家里的人叫坐，媒人才能坐，否则，只能站着。

媒人坐下后，一般说："我这儿有点烟酒茶，大家一块来吃吧。"

女方家长答："还是你自己吃吧。"又问："你到底是来做什么的？"

媒人："问声主人好不好，××家要来娶亲，你家的青菜萝卜籽，可愿送到他家门？"

主人："我家没有青菜萝卜籽，我家青菜萝卜籽还不熟，要讨就到寨子边。"

媒人听后只得离去，到寨子边转一圈又回来，再次提出求亲，以表明求亲的诚意。

媒人："叫声主人听仔细，他家决定来娶亲，你家青菜萝卜籽，他家要来讨。"

主人："我家青菜萝卜苗苗小，我家青菜萝卜籽还不熟，要讨就到寨子头。"

再次将媒人赶走。被赶的媒人转去又转回，如此往返，少则三次，多则七次，直到女方父母唱："我家青菜萝卜籽已熟透，我家小女愿到他家门。"才算完成求亲的使命。

上门婚

拉祜族盛行从妻婚，即上门婚。女方同意婚事后，接着就要商量男方到女方上门的期限。这时媒人代表男方自喻小公鸡，女方自将姑娘比作小母鸡，一问一答，极富情趣：

媒人：我是受人之托来你家分养一只小母鸡做"种"的。

主人：我家有是有，不过隔不得娘。

媒人：不要紧，我们会很好地喂养它的。

主人：如果你家也有小公鸡要配的话，还是到我家先喂养3个月吧。

主人的意思是让男方先上门。这里的一个月相当于一年，3个月就等于3年。这种从妻居的上门婚，是以男子赴女方服役劳动为结婚条件，等于男子用上门期间的劳动来向女方交付妻子的身价。上门的期限一般为3年，长者可达15年之久，短者仅3个月，甚至3天。上门时，小伙不仅要带自身的生活用具，而且还要带生产工具和家禽家畜上门。上门期满后，方可带着妻子儿女（如果有了儿女的话）回自己家里居住，或分家另居。有的男子则终身上门，继承了女方的财产，上门服役婚变成了入赘婚。

按照拉祜族古老的习俗，婚礼一般在晚上举行。届时新郎在家人、媒人及村寨小伙的陪同下，背上芟刀，带上锄头、衣物、被子，还有公鸡、母鸡各一只，前往女方村寨。按规矩，新郎及其随行人员不能直接上女家，须在别的小伙家中稍候。这是因为，女方还要在形式上进一步落实女婿上门的期限。这时，便由新郎的父母前往女家，与女方父母进行请求结婚的对唱。对唱仍采用男方自喻小公鸡，女方自喻小母鸡的比喻性谈判。遭到一次拒绝后，男方家长便从女家出来，走到晒台上转一圈又回去，再唱一段请求结婚的对唱，又遭拒绝，又出去再转回来，如此往复，直到第七次女方家长提出要新郎当小黄牛，男方家长同意后，女方才同意举行婚礼。

拉祜族的婚礼，古朴而清新。婚礼由一位叫“结隆”的德高望重的老人主持。男女青年对唱山歌后，举行拴线仪式，由长者给新婚夫妇手腕上各拴一根红线，同饮一碗清水，表示心地纯洁，夫妻一心，白头偕老。之后，新郎新娘同吃鸡肉烂饭。新郎要事先预备好一个饭盒，将新娘的一份放在盒里，将自己的一份放在盒盖上，然后互相喂对方吃，这叫“互相供养”。最后，身着盛装

的男女青年陪伴新郎新娘，围着熊熊篝火，尽情欢歌曼舞，直至深夜。

是夜，新婚夫妇不在女家过夜，而要到山上歇宿，待翌日凌晨，由家人去将一对新人找回。早饭后，新郎新娘在亲友的陪同下，到女方地里从事一番象征性的劳动，然后用竹筒到山下背水分送给女家亲友。之后，双双来到男方家，在男家地里同样进行一番象征性劳动后，再回到女方家。从此，开始有一定期限的从妻居婚。

离婚宴

居住在云南省澜沧江一带的拉祜族，结婚时一般不办酒席，离婚时却要办离婚宴席。离婚宴由提出离婚的一方（无论男女）置办，宴请寨人吃喝一顿。前来赴宴的人们，却不必送礼。这一别具特色且带有惩罚性质的有趣风俗，一方面儆戒年轻人，择偶要慎重，一旦结合，便要终身相爱，白头到老，不得相互遗弃；另一方面，还含有儆戒双方，以后不要相互结怨之意。

拉祜族离婚仪式由村寨头人“卡些”主持，族中长者也参加。男女双方各执一根红线或一对蜡条的两端，由头人从中剪断或烧断，即算解除了婚姻关系。如一方要求离异，而另一方不愿意，则要由寨里的头人，根据情况判给不愿离异的一方牛或猪、米、布、钱等，但接受赔偿的一方，从此不能再婚，而另一方却仍可再婚。有了子女后离异，如果男方提出离异则须给女方一笔钱；如果女方提出离异，也需给男方一笔钱，不过仅相当于男方给女方的三分之一。子女由双方抚养，一般为子归父，女归母。寡妇改嫁为社会习俗所允许。

拉祜族的离婚宴却很难遇上一次，因为拉祜族青年历来自由

恋爱，自愿结合，父母很少包办。因此，一旦结发，便白头到老，婚姻破裂者极少，即使婚后一方伤残，彼此也不相遗弃，相爱如初。

抛蛋择棺定坟

拉祜族历来对丧葬特别重视。拉祜族传统葬法为火葬，但火化后还要进行土葬，将骨灰就地挖坑掩埋，垒石为坟。每个拉祜族村寨都有一个集体火葬场，称为“人埋山”，设在离寨子较远的山上，有点类似公墓。凡本寨成员死后，除凶死、难产死者外，均可焚化埋葬于此。在集体火葬场里，各户又都有各自的火化处。

拉祜族流行鸣枪报丧，以告亲友。亲友闻讯后，根据各自的经济情况，或送鸡或送米相助。出殡前送来的鸡，葬前用木棒统统打死，抛在坟墓上，除老人外，其他任何人都不能吃；出殡后送来的鸡，则由主人饲养起来。死者的儿女或亲属要为死者洗身，更换新衣，然后在死者口中放上一枚银币之类的东西，称为“含口”。死者双手交搭于胸前，裹上白布，放入圆木棺内，择吉日鸣枪出殡。圆木棺为一根粗大的树干挖凿而成，棺木的选择用抛掷鸡蛋的方法决定，即用一个鸡蛋向一株选好的大树抛去，蛋破即可砍倒为棺，不破则另选他树。取树干的一段，长度以人的身长为准，将其破开成一厚一薄两半，厚者为底，薄者为盖，分别掏凿出两个半圆的穴，两扇一合即成一口圆木棺，穴的大小以能放进尸体为准。

出殡前由“磨八”（祭司）在死者身旁招魂送鬼。招魂时，用白纸剪成人形标杆，点两支蜡烛，供一碗饭，少许盐，在死者身边跳神送鬼。然后由两位妇女或其妻儿，点着火把，背着死者生前用物及随葬品，在前面为死者引路，全寨人前往送葬。到了坟

山以后，磨八再跳神送鬼一次，然后用蛋占卜择地火化。磨八手持一个鸡蛋抛掷，蛋落地后即破，便在此地架柴火化；蛋着地后不破，则再行抛掷，直到蛋破为止。火化尸体的木柴堆成四方形，上放棺材，死者生前的生产、生活用具包括衣物、被子等均作为随葬品与尸体同时焚化，焚化后再将尸骨葬到公墓。新丧三日之内，家人要用蒿枝做筷子吃饭，全寨停止生产一天，以表示对死者的哀悼。

拉祜族视火葬为神圣，凶死、夭折之人不得火葬。刀枪伤、兽咬、溺水、泻肚、难产而死均属凶死之列，不能葬入公共墓地。

狩猎活动——杀阿

拉祜族以善猎虎豹而闻名，“拉祜”一词即是烤食虎肉之意。拉祜语称虎为“拉”，称在火中将肉烤至发香的程度为“祜”。

“杀阿”历来是拉祜族传统生活不可缺少的一部分，是拉祜族青壮年男子所喜爱的一项活动。杀阿没有固定的时间，一年四季均可，但六月二十四火把节，却是固定杀阿之日，必须出猎，直至猎获到猎物方可回寨。出猎前要祭祀猎神：出猎前的晚上，夜深人静之时，杀一只鸡，将其置于桌上，向四方祷告，询问出猎方向。祷告须在绝对神秘的状态下进行，不能让外人知晓。祷告完毕，剥去鸡腿皮肉，看鸡腿骨卦，以视神的旨意。

比较大规模的杀阿一般在农历正月和二月农闲时进行。整个寨子的男人几乎全体出动，浩浩荡荡地开进山里，或十多人一伙，或几十人一伙，风餐露宿，沿途狩猎，经月不归。狩猎时多分成两伙或三伙，一伙在后面追赶野兽，一伙则在前面堵截。主要的猎物有麂子、马鹿、岩羊、豹子、野猪、狗熊、飞鼠等。飞禽一般用弩射，走兽则用火药枪打。

分配猎物时，首先割下兽头奖给击中野兽者，然后砍下一只前腿奖给“理脚印”者，肉质最好的里脊肉，由围猎时出力最大的几个人分享，其余的按参加的人数包括猎狗在内平均分配。内脏则统统砍成碎块，装进60厘米来长的薄竹筒内，放在篝火上烧，由全体狩猎人员分食。

磨　八

拉祜族信仰万物有灵、多神崇拜的原始宗教。拉祜族供奉的天神厄莎为部落村寨守护神。据说，厄莎是创造宇宙人类、主宰天下万事万物、执掌人间吉凶祸福的天神。它被供奉在部落村寨后面的原始林木禁区中，严禁任何人进入砍伐，违者将受到重罚。厄莎的妻子是地神蜜娜妈，她主宰大地上一切生物的繁殖。司报神威莎茨雅、雷神姆页铁则被认为是代厄莎俯察人间、惩罚行恶者的神灵。此外，还有许多专司一职的神灵和各种精灵，如山神、水神、树神、坟鬼、房鬼、路鬼等。

“磨八”是拉祜族原始宗教祭司，其职责是，负责主持各种原始宗教的祭祀活动，如主持祭祀寨神、树神，以及替人看卦送鬼。有人得病，便请磨八看卦送鬼。磨八看过以后，根据鬼的大小决定杀牲的数量以及送鬼所需的时间。其方法是由病人拿给磨八一根草，磨八一面折草茎一面问卜，从而判断得病的原因，再根据病情的轻重分别祭以猪、狗、鸡、羊等牲畜。

磨八除看卦送鬼，还兼做草药医，如人生病了，看卦送鬼不灵，便搞些草药给病人服用。磨八除送某些特定的鬼神时，收取一定的报酬外，一般没有什么报酬，只是吃点祭鬼献神的剩菜剩饭，喝点祭鬼献神的剩酒。磨八与群众的关系较密切，在群众中有一定的威望。

磨八靠口耳传承，一般是子承父业。当磨八先得拜师，然后便跟着前辈磨八去看卦送鬼，在旁多注意观察和模仿。经过一段时间的见习之后，方可独立为群众看卦送鬼，并在实践中逐步取得群众的公认。

祖先牌位“页尼”

拉祜族历来崇拜自己的祖先，把祖先尊奉为家神。每个拉祜族家庭都供奉有祖先牌位，拉祜语称之为“页尼”。页尼为长约30厘米，宽约15厘米的一张高脚篾桌，上置数对蜡条，周围贴有白纸经幡图案，挂有两节小竹筒（祭祀时用来盛水或酒）。有的页尼为一个小竹片连成的长方形竹板，长约30厘米，宽约15厘米，挂在家长床侧的墙上，上置两个小竹杯。祭祀祖先牌位页尼是一件庄严的事，它是家长的神圣职责，家长死后则由长子主持。平时，一日两次（清晨、中午）向页尼赕饭、滴水。凡忌日、初一、十五、三十，逢年过节、结婚、生育、丧葬、迁徙、出行等均须向其举行滴水、赕饭、点蜡条等祭祀活动。有人生病，便向页尼磕头祈祷，请求祖宗神灵护佑，去病消灾。妇女临产，便在页尼前放置两对蜡条，表示有新人加入血缘集团，祈求祖宗神灵保佑母子健康。人死时，要办一桌酒菜，在页尼前祭供三日。遇有迁徙时，必须由长者背着家神祖先牌位页尼走在前面。页尼一经迁出，家人便不能再进旧屋。迁到新居后，也须首先安顿好页尼的位置，以示敬重。

比较隆重的祭祀页尼，是在谷子成熟和过年时。新谷成熟，必须先收回一些早熟的谷子，烘干后舂出来煮熟，再买点酒来祭祀页尼。只有在给祖先献过新米饭后，家人才能吃新米。一家人中，若长兄的谷子尚未成熟，尚未给祖宗家神祭献，其他兄弟的谷子

即使成熟了，也不能收割。一个页尼只祭一代，即只祭自己的父母。父母亡故，则停祭祖父母，改祭父母。兄弟、从兄弟共祭一个页尼，严格由长兄主祭，兄亡弟继，依次接替。如父在而母亡，则父亲继续祭祀自己的父母，子女则另建一座新页尼祭祀亡母。

扩　扎

“扩扎”意即过年，是拉祜族最隆重热闹的节日。扩扎一般在每年农历的正月举行，但不一定初一，要视日子的好坏而定，如日子不好，就往后顺延。一般多选在马、蛇、兔、猪、鸡日，不选牛、羊日。

除夕，拉祜山寨便热闹起来，家家户户洒扫除尘，辞旧迎新。舂糯米粑粑是三十晚上最重要的活动，全山寨炊烟袅袅，糯米飘香，碓声此起彼落，欢快而有力。人们首先将糯米粑粑敬献给天神厄莎，然后给牛吃一点，在犁、锄、砍刀等生产工具上抹一点，象征性地祭祀一下，以表酬谢之意。此外，人们还要沐浴，并将翌日的食物准备齐全。

扩扎共九天，分三个阶段，初一至初四为第一阶段，称为“扩路妈”，即大年。大年初一抢新水，可说是扩扎最富情趣的活动。凌晨，随着雄鸡第一声破晓的啼鸣，男女青年便争先恐后地冲出家门，穿过浓雾，趟着朝露，抢先来到泉水边抢新水。新水，在拉祜族看来是纯洁与幸福的象征。第一个抢到新水的人，被认为是最勤劳最幸福的人，将在新的一年里交好运。大年初一，按照拉祜族的习惯，不外出拜年，不坐在门坎上，不在门坎上砍东西，不说不吉利的话，吃年饭前不高声谈笑，不吹口哨。还要给狗喂好吃的，以示感激，据说狗给人类带来了谷种。初二这天人们开始带上糯米粑粑、猪肉和米酒，走村串寨，拜访亲友，互致

问侯。并弹唱歌舞，尤其是芦笙舞，是扩扎的主要活动。

初八、初九为第二阶段，称为“九黄会”。拉祜族是一个喜欢狩猎的民族，据传说，拉祜族男子因外出狩猎，未能赶上扩扎，因此用这两天来给他们补上，所以又称男人节。

十三日至十五日为第三阶段，称为“扩也”，即小年。过小年，村村寨寨荡秋千。

拉祜族扩扎期间禁止外人进入，如有外人无意进入他们的地界，便会被叫住带到路旁临时搭就的小棚中，暂时软禁起来，等扩扎完后才放行。在软禁期间，由寨里派两名青年监护，并在生活上给予特殊的优待。据传，从前拉祜族扩扎都要邀请周围的人共庆，后来因拉祜人嗜酒，一高兴便喝得酩酊大醉，个别外来人趁机拿走了拉祜族的金银首饰，因而引起了一场械斗。从此拉祜祖先立下规矩，扩扎期间严禁外人进入，现在这规矩已经废除了。

新米节

新米节，拉祜语叫做“俄四扎”，意即吃新米。每年农历八月十五，人们都要到田里挑些早熟的谷子回家脱粒后摊放在火塘上方的“炕笆”上烘，或放在大锅中炒。待烘干炒干后舂成米，煮出香喷喷的新米饭，并将第一碗新米饭敬献给天神厄莎。晚上，寨里的男女青年们聚在打谷场上，燃起熊熊篝火，手牵手围成圈，通宵达旦欢跳芦笙舞，边歌边舞，非常热闹。

关于新米节有这样一个传说：从前，拉祜族靠狩猎和采集野菜、野果为生，生活没有保障，到了冬天日子更加难熬。天神厄莎知道后，十分同情，决定帮助拉祜人。

一天，天神厄莎降临人间，来到一家叫扎倮的夫妇家，看到全家人有气无力地坐在火塘边烤火，厄莎便对扎倮夫妇说：“拉祜

要过好日子，必须学会种谷子。”

扎倮夫妇说：“没有谷种，叫我们怎么种？”

厄莎说：“谷种被天天到水塘边喝水的斑鸠偷吃了，你们要想得到谷种，就得想法捉住斑鸠。”

扎倮夫妇听了，十分感激。他们用绳扣子终于捉住了那只斑鸠，可剖开嗉袋一看，里面只剩下一粒谷子。正当夫妇俩失去种谷的信心时，厄莎又来对他们说：“一棵独木，百年后可以长成林；一粒谷种，六个月后可以收千粒。”并将种谷方法一一告诉了他们。扎倮夫妇按照厄莎所说的方法，种下这粒谷种，并精心照料。到了八月，他们终于收获了满满一碗谷子。夫妇俩高兴之余，将谷种分给了大伙，并带领大伙开出一块荒地，种下了谷种。到了第二年八月，山上到处长满了金黄的谷子，拉祜人高兴得围着谷子又跳又唱。

为感谢厄莎，于是每年农历八月十五，当第一批新谷入仓，第一次吃新米饭时，人们便首先恭恭敬敬地将第一碗新米饭献给厄莎天神，然后热热闹闹地庆贺一番。这一天遂被人们称为“新米节”。

六月节

拉祜族都过六月节，也称火把节。每年的农历六月二十四晚，拉祜族家家户户都在自家门前点起一支火把。远望拉祜山寨，似繁星点点。人们还高举火把到山上、田间转游，远看如一条条火龙在山间、田坝游动，蔚为壮观。寨外的草坪上，青年男女身着盛装，在熊熊篝火的映照下，手拉手围成圈，跳起本民族欢乐的芦笙舞，直至深夜。

关于火把节，拉祜族有一个优美动人的传说。从前，勐糯山

上住着两个人，一个善人，一个恶人。恶人面目狰狞，心地狠毒，专吃人眼睛；善人聪明温和，乐于助人。善人得知恶人吃人眼睛时，便对他说："人的眼睛是用来看东西的，人没有眼睛便不能下地劳动，上山砍柴，你不能吃人眼睛，要吃你就吃田螺吧。"从此，善人天天找田螺给恶人吃。六月二十四这天，善人没有找到田螺，便上街买了一只山羊，想以羊肉代田螺给恶人吃。

这只山羊没角，善人给它安了一对蜡角。到了晚上，善人点燃了山羊的两只蜡角，让它到山上找恶人。山羊朝山上跑去，两只蜡角如两支火把，恶人远远地望见火光，以为是用来点火药枪的。山羊在山上跑来跑去，寻找恶人，火光照亮了整座山梁，恶人以为人们抬着火枪，找他算帐，怕得要死，慌忙找了个山洞钻进去，并抬了一块大石头堵住洞口，只留一条小缝偷偷向外张望。

山羊继续在山上跑着，蜡角越燃越旺，跑到东，东山如同白昼；跑到西，西山如同太阳照。恶人在洞中见了，吓得全身哆嗦，躲在洞里不敢出来，连吓带饿，没有力气搬掉洞口的石块，最后被洞里冒出的水淹死了。从此，人们安居乐业，太平度日。

拉祜族为纪念这一天，每逢六月二十四，便在自家门前点起一支大火把，或举着火把到山间、田坝去转游，这就是火把节的由来。

葫芦笙

拉祜族喜爱歌咏而娴于舞蹈，逢年过节，欢歌舞蹈，通宵达旦。其音乐与舞蹈具有独特的民族风格和浓郁的生活气息。传统乐器有葫芦笙、小三弦、哩嘎嘟（竹笛）、响篾（口弦）等。葫芦笙是拉祜族最喜爱的传统乐器，每个拉祜族男子都喜欢吹奏葫芦笙。夜幕降临拉祜山时，从密林里、树丛中便会飘出阵阵悠扬的

葫芦笙声，柔和婉转，悦耳动听。据说，一个真正的拉祜族男子汉，随身必带两样东西，即火枪和葫芦笙（如今火枪已渐被锄头取代）。对恋爱中的拉祜族男女青年来说，葫芦笙尤有特殊的用途。每个拉祜族小伙子，都会别出心裁地吹奏出一支独特的葫芦笙曲调，召唤自己心爱的姑娘前来幽会。无论身处何地，只要几声悠扬的葫芦笙响起，其心上人便会穿过乱石丛林赶来相会。

葫芦笙因以葫芦做音斗而得名。在葫芦嘴上插根竹管，用作吹管，在葫芦肚子上插五根竹管，作为音管。五根竹管参差不齐，在每根竹管上开一小圆孔，其中在次长与最短两根竹管上，还开有一长方形小孔，吹奏时，每根竹管都会发出不同的音响，悠扬动听。葫芦笙上的竹管之所以是五根，有个传说：从前，拉祜族不会种谷子，后经天神厄莎指点，才学会了种谷子。有一年，粮食丰收，秋收后，人们推举五兄弟，去天宫请厄莎天神下凡和人们共庆丰收。五兄弟到达天宫时，厄莎正在睡觉，五兄弟轮流叫门都叫不应。于是五兄弟各取出一根竹管，五根竹管齐发出美妙乐声将天神从睡梦中唤醒。为纪念这五兄弟，人们将葫芦笙制成五个管，每个管代表一个兄弟。

小三弦

拉祜族最喜爱弹奏的小三弦，从形式到演奏方法都与汉族的大小三弦有较大的区别，其音响也与汉族三弦无相似之处，别有一番情调。

拉祜族的小三弦，琴弦为三根同样粗细的钢丝，琴码为一枚旧时的铜币，上面斜放一截小铁棒而成。弹奏方法非常独特，不用指尖触弦，而用指甲背面紧贴指板来按音，使小三弦获得了清晰明亮的余音，并为它那迷人的揉弦、滑音提供可贵的音源。弹

奏时，右手的食指上绑一小竹片，用第一关节弹奏。竹片坚韧有力，富有弹性，发音显得清新、有力而柔和。独特的形式与独特的演奏方法，使它具有独特的音响：音量小而集中，音色清晰而柔美，并有较持久的余音，像吉它，似古琴，虽不如二者宏亮，但比它们纤细，能维妙维肖地模拟人声。

哩嘎嘟

“哩嘎嘟”，即竹笛，是拉祜族青年喜爱的乐器，也是拉祜族青年男女的月下老人。哩嘎嘟与汉族的笛子相仿，所不同的是哩嘎嘟较短小，只有五个音孔。

关于哩嘎嘟，拉祜族有个动人的传说：从前，有个孤儿名叫扎莫，他爹妈生前借了头人一斗谷子。爹妈死后，扎莫被头人抓去抵债。在沉重艰难的奴隶般生活中，小扎莫渐渐长成一个机灵聪颖的男子汉。一年稻谷灌浆时，头人让扎莫上山看谷子。扎莫在地边竹林里搭了一个窝棚，白天，与小鸟对话，与山风对歌；晚上，吹一阵芦笙，数一阵星星。一天夜里，他梦见死去的爹娘复活了，梦见家里有了地，有了牛，盖起了新房，自己还娶了个美丽贤淑的妻子。醒来一看，却是一场梦。他想哭，没有泪；想喊，叫不出声。心里无名火起，操起一把长刀，猛砍身边的竹子。最后，瘫软在地，直喘粗气。忽然，他觉得有什么东西硌得后腰很疼，抽出来一看，原来是根金灿灿、滑溜溜的紫金竹。他把竹子拿在手里，左看右瞧，越看越喜欢，心想，用它做芦笙的竹管该多好。于是在竹子上钻了一个小圆孔，轻轻一吹，啊，美妙极了！声音悠悠扬扬，心中的烦闷随之烟消云散。扎莫高兴极了，又在竹管上钻了两个小圆孔，试着一吹，便能吹出简单的调子。他仍不满足，又在竹管上加钻了两个小圆孔，吹起来声音高低起伏，愈

发动听，扎莫爱不释手，为它取名叫“哩嘎嘟”。白天揣在怀里，有空便吹；夜里压在枕下，醒来便摸摸。他用它来倾诉爱与恨，回忆与向往，美妙的笛声时常引来林中的金鹿、麂群，引来天上的百灵、画眉，也引来了放牛姑娘娜海。

娜海也是个孤儿，有一副画眉般美妙的嗓音。他俩一个吹，一个唱，天长日久，两颗心紧紧贴在一起。不料，扎莫和娜海相爱的事让头人知道了，扎莫被乱棍打死，娜海哭得死去活来，最后吞食“狗闹花”（一种有毒植物）殉情，临死将扎莫心爱的哩嘎嘟留给了好朋友娜戈。娜戈悲痛欲绝，在一个凄风苦雨的黑夜，带着哩嘎嘟从头人家偷偷出走。她一路走一路吹，逢人便诉说扎莫和娜海的不幸。如有人想学哩嘎嘟，她便耐心地教，并仿照扎莫留下的哩嘎嘟做了许多，分送给拉祜乡亲们。于是，吹哩嘎嘟的人越来越多，天长日久，哩嘎嘟成了拉祜族纪念祖先，表达心声，寻求爱侣的乐器。拉祜族青年，不论男女都会吹奏。扎莫和娜海是在新米节前死的，因此后人只在新米节前后吹奏哩嘎嘟，为这传统节日又添一层喜庆丰收之意。

响　簧

响簧，又叫做口弦，是处于热恋中的拉祜族青年男女钟爱的乐器。响簧用竹簧片制成，约两指宽，薄而柔韧，中间削出两根细小的竹条，竹条的顶部成钩状从中剖为两半。吹奏时，左手持响簧片放于唇边，右手拇指拨动两根细竹条，使之与嘴唇相碰触，同时口中轻轻吹气。响簧的音量不大，然而优美动听。拉祜族青年特别是女青年，常用它来倾诉自己的情和爱。

关于响簧的来历有这么一个传说：三国时期，蜀汉丞相诸葛亮统兵南征，打到拉祜山时，遭到拉祜族的顽强抗击。拉祜族男

子善使弓弩，百发百中。蜀汉军屡遭挫折，连足智多谋的诸葛亮也感头痛。后来，诸葛亮想出一个计谋，让军士砍来山上的竹子做成响篾，到拉祜族营地附近吹奏。那优美的声音迷住了拉祜族妇女，她们提出用金银跟汉军交换响篾，汉军提出条件，用她们丈夫的弩板机来换。于是，妇女们便趁男人们不注意，偷偷地将弩板机拿去跟汉军换来响篾。如此，诸葛亮才得以攻破拉祜山，响篾也就从此传了下来。

●水　族

水族人口为345,993人(1990年统计),主要聚居于贵州省三都水族自治县,部分分布于贵州省的荔波、独山、都匀、榕江、从江等县及广西壮族自治区的西部。

水族自称“海水”,意为“水人”。水族有自己的语言,水语属汉藏语系壮侗语族侗水语支。过去曾有一种古老文字,称为“水书”,通用单字100多个,现通用汉文。

水族信仰多神,崇拜自然物,如古树、巨石、水井等都是崇拜对象。

“反结”与“者勾”

水族妇女为了美化自己的生活，常在围腰的胸牌、布鞋的尖端、袜垫、童帽和背带等物品上绣精美的丝线图案。但在所有的刺绣品中，“反结”背带和尖端上翘的刺绣鞋——“者勾”，可称为水族刺绣的珍品。

反结，指用梭结方法刺绣而成的背带。这种背带由几十块不同形状的图案拼镶而成，以纸壳为样，剪出各个部件的面料和垫衬的布壳；再用双针穿上彩线交织挑绣成底色图案；再用白马尾缠上丝线后绕制成各种细密的几何图案或花草图案，最后把绣好的各个部件拼镶在背带样布上。反结背带刺绣工艺精细，工序繁杂，能干的妇女几乎要耗费终年的闲暇时间才能完工。这种背带又是妇女显示自己审美才干和刺绣工艺的重要方面，为了取得社会的赞美，炫耀自己的天才，女孩子几乎从十岁左右起则与丝线和绣花针打交道。她们从学剪花开始，继而学粘布壳、缠马尾、描花，几乎把整个身心倾注于一针一线之中。在水族妇女的服饰中，脚下那双尖端上翘的绣花鞋——者勾，也是用此法刺绣而成。这种者勾通常作为礼服穿用，也用作妇女的寿鞋。制作反结背带与者勾绣花鞋，除了工艺之外，在剪裁时要择吉日，尤其要忌戒水书上记载的“腊血”、“皆没”、“沙伤”等凶祸之日，否则认为会招致祸殃。

首　饰

水族的首饰，多为银质，既是妇女的装饰品，又是珍奇的工艺品，主要有项圈、手镯、耳环、戒指、雅领、银钗、银梳、银

铃、银扣、银链和银花等。

雅领是悬吊于妇女胸前的大型首饰，取约30厘米长、15厘米宽的半月型银片，冲制出各种花卉图案；再用银片、银丝精心制成的双龙戏珠或飞凤和鸣的立体部件焊上去，同时在上面焊上小银链吊着的小银铃、银片，再配上一根悬于颈项上的粗银链即成。

过去水族妇女往往绾发为髻，插上银钗、银花和银片，穿银扣对襟阔袖的青布短上衣，下穿青紫色的百褶裙，戴雅领、项圈与手镯，显得雍容华贵。此外，项圈也称得上大型银饰品，一般分为补高寿的命圈和交际用的普通项圈。命圈的重量则依佩戴者的生辰与年岁推算，并择吉日锻制和佩戴。这一切都要经过鬼师或水书先生的推算确定。其重量大约在250克左右。

结婚用的项圈造型多样化，主要有圆形、扁形、棱形、棱形扭丝等。九阡地区和荔波县一带的水族，项圈上还套着成串的小银圈。这小银圈比戒指粗大，均由细小的银丝扭结成细微的小圈，再焊成为戒子型。这类的项圈，最轻的也有250克，重的则有750克左右。手镯的造型除与项圈相似之外，还有半圆空心型、圆形空心型等，同时在上面凿成龙凤等花纹图案。银链，多为妇女系围腰套于颈项之用，也作吊雅领之用，是用银丝扭结成梅花形小花之后，再连环相扣而成。银铃、银片，除了在雅领和头钗上作附属饰物之外，也用于童帽的装饰。为了美化自己，妇女们还有用凿上银花皮包着的银梳，还有空心的银扣，还有银皮花盖等饰物。这些首饰都是水族的银匠制作，有些是银器饰物制作的世家。这些首饰不仅美化了妇女的仪表，也往往是身价的反映。一些名门的女子，在出嫁时银首饰就有四五千克，甚至更多，而一般人家的女子出嫁，也少不了一千多克的银饰。银首饰美化了生活，也给生活带来了负担。

掐猪耳与敬鸡头

水族人民款待贵宾，往往是杀鸡鸭，打豆腐，甚至杀小猪或大猪招待。过去，在置办菜肴之前要有简单的祭祖仪式，这就是掐猪耳，或称献祭酒。

贵客来到，若杀小猪款待，多是将小猪放于大锅中和少许大米煮稀饭，然后用木盘盛着小猪摆于堂中桌上，再摆酒肉、豆腐祭祖。若杀大猪，往往要煮猪头供祭。开祭时，主宾端坐席前，多由客方德高望重的长者念祝吉之词："今天是暖和的日子，今天是吉利的日子，杀好猪，敬祖宗；敬美酒，洒甘醇；敬给双方公老，洒给两端亲戚；期冀两头平安幸福，友情要深至半腰，不要浅平脚背，情谊要长如江河，不要短如竹节……"主祭者一边念着，一边用筷子点着各个酒杯的酒点到桌上或洒于地上，并且又夸猪如何美好；再掐猪耳的一点点肉丢在祭桌上，然后让大家饮一杯酒，吃碗稀饭，即算祭祖结束。接着，就将小猪砍开割碎，办菜宴客。席间，要喝肝胆酒，并联臂交杯喝团团酒。若是杀鸡鸭待客，有的也要将鸡鸭摆出供祭，然后才砍开上桌。席间，主人习惯以鸡头、鸭头款待来宾，以表示对客人的尊重。假若客人不了解此俗，认为无肉可吃的鸡头无关紧要把它抛掉，那就是曲解了主人的一片盛情！

九阡酒

水族地区的名酒，要数贵州省三都水族自治县九阡地区糯米酿制的酒，人们习惯称为九阡酒。其实，按照水语称呼"薅纠线"的意译，应为九仙酒才名实相符。

九阡酒是水族的传统特产，它以糯米为原料，采集草、木本药物制成发酵的酒曲，在蒸馏出的低度米酒中再掺入适量的熬得橙黄的甜米汁，然后存入缸中密封，置于无震动、避光的泥地窖藏。每一周年，都要破封检查一次，当酒的色香味正常，还要加入适量的上等糯米酒，以填补失散的部份。密封达30年左右的九阡酒，会凝为状若略加稀释的浆汁体。饮用时，以一比十的比例与冷开水搅和，倘若再掺入鲜糯米酒，便成了勾兑的九阡酒。上乘的九阡酒，色泽棕黄，状若稀释的蜜汁，其味醇正，微甘可口，香气馥郁，沁人心脾。它不仅以色香味闻名，而且营养丰富，适量饮服能舒筋活血，健骨强身，助兴提神，即使误饮过量也不会损头伤体。对于九阡酒的来历，人们总赋予神奇的传说，传说仙婆选了九棵神奇的草药加到发酵的酒曲中，才使九阡酒变得好起来。其实，九阡酒所以好喝是与当地的水土、气候密切相关。1960年“五一”节，国务院举行的盛大宴会上，当时的三都县女副县长蒙世花代表九省市区的少数民族参观团向毛泽东主席敬酒，敬的就是九阡酒。此后，九阡酒在省、州的宴席上崭露头角。九阡地区虽偏僻，但九阡酒却使知味停车、闻香下马的客人络绎不绝。

此外，当地的水族喜欢在婴儿诞生时酿生辰酒窖藏，有的直待其成亲或过世时才启封饮用。当地过卯节时，寨寨酒飘香，户户笑声朗，常常听到这样的歌：“九阡米酒香，九阡窖酒美。亲戚啊朋友，大家来干杯。欣喜来相会，我们共陶醉。”

鱼包韭菜

水族祭祖很特殊，主要表现在吃素。所谓吃素，是在老人过世而未入土安葬阶段的饮食禁忌。在盛大节日“端节”的头两餐祭祖时也吃素。这种吃素只忌食畜兽禽等动物油肉，不忌水产的

鱼虾，反而以鱼为主祭品。假若谁家治丧，亲戚往往尽最大努力去弄活鱼抬去作奠仪。谁抬去鲜活的大鱼谁就会受到格外的青睐。祭祖和治丧所供祭的鱼，要制成鱼包韭菜的传统珍肴。其制法是将鱼沿背破开，清除肠杂，铺洒料酒、花椒、大蒜、糟辣、生姜及生盐，而以韭菜、广菜、栗仁等填充鱼腹，用米草绑成五道、七道或九道，清炖或清蒸。供祭时，轻轻地用两只竹筷从两头穿挑米草绑环，提到大木盘里之后再摆到祭桌上。若逢端节，客人能吃上鱼包韭菜，才算是真正地过了端节。食用时，剪除米草，加上佐料即可。鱼包韭菜，鱼骨酥软，菜浸在鱼汁中，味道醇香。据传，当初水族远祖住地的南方多瘴疠，是仙人指点以九种药材填于鱼腹煮食治病，北迁到现今住地之后才以韭菜、广菜替代。其实，这是水族早期渔猎经济的遗风，人们附会了美好的传闻而已。在水族的诸多习俗中都有食鱼的习惯，如有开墓穴前用一条生鱼掷于土表祭穴神；盖新房和接亲时提鱼水罐进新居新房祝福人丁兴旺；举行“当幸”、“当惰”的原始宗教仪式时，用特制的干鱼“满工”敬鱼，祈求保佑；祭祖时，用米面和菜油挤捏成各种鱼、龟、虾、蟹上供；墓碑上刻着双鱼托葫芦的图案等等。而鱼包韭菜只不过是一种较为典型的食鱼习俗罢了。

肝胆酒

水族待上客通常要杀鸡鸭，而待上上客则往往要杀猪，并且有相应的肝胆礼节。

贵客到家，主人热情地待以烟茶，若是远道而来的客人还先备便餐招待，接着再杀猪办席接风。待客杀的猪大多为20公斤左右的小猪，若来宾多，有的也杀大猪。小猪要整条煮熟，大猪则煮猪头，然后置于大木盘中摆在正堂桌上敬祖。但是，不论杀小

猪或大猪，附着苦胆的那叶猪肝不能切下来炒吃，而要用火烧结胆管口，煮熟了一道供祭。宾主饮一杯敬祖席上的酒，说些祝吉的话之后，便做菜宴客。

水族有句谚语："纺车没油难转旋，人不喝酒难开言"。席间的欢乐气氛似乎全靠酒引出来的一样，宾主的情谊全部融汇在敬酒、劝酒、谢酒和饮酒的活动中。当酒过三巡，主人就取来那叶带苦胆的猪肝，饶有兴味地在席上晃一晃说："托祖宗保佑，这肝好胆好，我们的情谊深似海洋，长如江河！现在，我们来喝杯肝胆酒吧！"众人异口同声欣然响应。于是，主人剪开胆管口，把胆汁注入酒壶里，再给每位入席者斟上一杯黄澄澄的苦胆酒。水族人既然把肝胆酒看得如此贵重，那么先饮者无疑是主宾或德高望重的长者，然后再依次喝下。每当谁举杯痛饮时，众人就齐声呼着长长的祝酒腔——"耶　—"以表示祝贺。当客人开怀痛饮时，主人感到无限欣慰，认为来宾已领了情意。要是家中还有鲜鲤鱼，这时主人便把活蹦蹦的鱼儿掷在砧板上，一刀破肚除去肠杂，再横来几刀砍成两三截，投入火锅中。添了新菜，自然又是一番劝菜敬酒，酒越喝兴越浓，最后往往要联臂举杯喝交杯酒。

肝胆酒表示主人真心诚意待客，象征肝胆相照、苦乐与共。其实，苦胆还有清火明目、降低血压和帮助消化的功用，适量饮服肝胆酒对身体也有裨益。民俗意蕴与药用功效的结合，或许正是肝胆酒在水族地区盛行不衰的原因所在。

交杯酒

水族是个喜好饮酒的民族，待客以酒为贵，并且还有"客人不醉不罢休"的不成文的规矩。客人来了，家中若没鱼肉，炒碗黄豆也要打上一壶酒；几颗黄豆，一口米酒，无限心意溶在酒里

头。要是杀鸡鸭、宰小猪、打豆腐待客的话，表达情谊深厚的交杯酒总少不了。

水族的交杯酒不同于汉族二人手臂交叉互饮的形式，而是席间所有饮者联臂举杯形成个封闭圆圈的互饮形式。当酒饮至半酣时，主人把每人的杯子斟满酒，然后对大家寒暄道："我们水家人待客以酒为贵，诸位来了没啥菜招待，也该多喝杯酒。来！大家来喝交杯酒吧，让酒把我们的情谊浇得更深，引得更长！"入席者心领神会，于是右手端着自己酒杯向右侧的饮者伸去，而左手则接过左侧饮者递来的杯子，大家联臂举杯牵成个圆圈，因此，有的亦称之为转转酒、团圆酒。先饮者，往往要推让给贵宾或德高望重的长者，然后再逐次从右向左推移。但是，不论是谁饮了酒，众人都异口同声高呼"耶——"的长长拖腔以表示祝贺。众人联臂举杯的圆圈，直到逐次饮了一周之后才能撒开手臂，把杯子收回自己的面前。喝交杯酒时，如果进行顺利，在席边侍立的女主人只是微微一笑；倘若谁饮得不痛快，女主人就提着酒壶前来劝酒，往往是她唱一首歌就敬一杯酒，有着非把客人灌醉不可的势头。最后一杯交杯酒，总是由众人联臂举杯同时一饮而尽，接着高举空杯，又异口齐呼"耶——"的长长祝酒声。

交杯酒是水族宾主之间表示真挚情感的席间仪礼。在水族山乡，不论是逢年节的借端、借卯或春节，不论是接亲嫁女或修房屋的庆贺，也不论是贵宾的偶尔来到的接风，交杯酒总少不了。要是你听懂水歌，那就更能理解交杯酒的意蕴："流海业喂，流海育喂！（所有你的亲戚朋友喂，所有我的亲戚朋友喂！）欢乐的日子，我们才相会。端杯糯米酒，我们来交杯。莫辞酒味薄，欢乐共陶醉……"

干栏屋

“像凤凰羽毛般美丽的山乡”，是人们对水族居住环境和房屋建筑的赞誉之词。水族主要居住在龙江、都柳江上游的黔桂交界地带，由于溪流交错、山脉纵横、气候温和多雨，因此住房多为干栏式的建筑。水族是百越民族中僚人的后裔，史称僚人“依树积木，以居其上，名曰干栏。”到了唐代，干栏建筑已是“人楼居，梯而上”、“上以自处，下居鸡豚”的规模。水族的楼房，多取杉松为料，凿柱穿枋为架，以木板围装而成。其结构，古代多分为上下两层，先立下层作承重支架，再立上层作人居之所。正房多为三间，另搭两头拖厦共为五间。另外，也有走马转角的走廊楼房，还有傍山修建的半楼半平的房屋，近年来平房带楼房的住屋不断增加。村寨的地址，大多建筑在低丘谷地的溪沟旁或平坝边缘的山脚与山腰一带。村寨四周喜植竹木以环抱，过去还修建寨门，若逢战乱与灾病发生，全寨就在此举行防外侮、御瘟病灾祸的保寨撑门活动，祈求祖先及天地神灵的保佑。

水族中心地区的村寨，往往是血缘家族的团聚。这种聚族而居有同血缘、同宗谱、同姓氏的特点并且是连片居住。至于异姓、异血缘相居的村寨较少，且多分布在散居或边远山区一带。因此，男女的社交活动主要在节庆日及赶场（集）时进行。

水族是尚鱼的民族，村寨脚、村寨内喜修鱼塘，有的还在鱼塘之中立柱，上修禾仓，别具一格。翠竹婆娑，木楼倒映，波光弄景，加上古朴的舂米石碓声声，老牛的漫步摇曳，使水族村寨古风遗韵醉人。

过去，水族村寨都有公共墓地，植竹木环抱，尤以枫木为多。

水家婚俗

水族缔结婚姻，往往要恪守“同宗同血缘不娶，异族异血缘开亲”的古规。可是，青年人的婚姻多数要受父母亲的包办，即使是青年通过社交相好，也得按习惯的联姻方式来组合家庭。水族联姻大致要经历这样几个步骤：访亲、提亲、吃小酒定亲、吃大酒娶亲等。但是每个步骤又有不少的小环节。访亲是男方父母向邻里亲友查访相配的女子，一旦认为合适，即有意识地放出口风，以探听女方的反应。当时机有利时，男方便找善于言辞而对方又信赖的人，带新竹篼装着礼品去提亲。如果女方同意，招待媒人则较为盛情，反之则不同意；再者，女方不退回竹篼即表示应允，若过几天之后退还竹篼则拒亲。但是，有些女方家为考验男方的诚意，有的还故意退竹篼。若女方应允婚事，男方便择日提酒肉、公鸡、小猪、糖果等礼品去认亲，有的亦称为吃小酒定亲，以期得到社会的承认。经过互相考验之后，且男女青年已达婚龄，则由男方择吉日抬大肥猪、糯米及米酒等去吃大酒娶亲。男女两方各选一二名少女作伴娘接送新娘。很多古朴、冗繁的礼仪就出现在出阁与进门的阶段中。

出阁前，新娘在同伴或福禄双全的已婚女人协助下梳妆打扮。头饰，有的插银梳以布巾包裹或披搭，有的挽髻而插上银钗、银凤、银铃；服装，有的着银扣的短上装配百褶裙，有的着蓝色长衫配青裤。临行前，新娘要向父母叩拜，并在敬祖席上酹酒，表示向祖宗告别并祈求保佑。当吉时一到，新娘往往洒泪而别，出大门时，有的一步不沾地，全由同辈的兄弟背到新郎家门口；有的步行，但遇到过桥涉水或碰上另一新娘走过的路及抬过死人的路段，才由兄弟背着绕道避开，以防招致凶祸。新娘跨出娘家大

门，要用红纸伞罩头，有的是新娘自个儿打伞，有的则由其兄弟或姐妹为其撑伞，据说这是为了避雷、避邪。新娘出阁打雷，认为惹怒了至高无上的雷神，要改期出阁，或直走新郎家之后不吃不喝又返娘家，或者在新郎家住上十二三天，杀鸡祭雷神以求免灾。

进新郎家大门是新娘头疼的一件事，但无可回避。新郎家在新娘到之前，全家人掩门外出，待新娘进家后才能回去，以表示对新娘的尊重，寓意这个家从此以后由她来操持。但是进大门时，花样百出，有的在门外放一块柴片让新娘拿进屋内，有的要请年长而福禄双全的女辈端着洁净的泉水朝新娘的伞上、身上喷一口，有的则以长青的树叶向新娘撒去，有的则以一束芭茅草或长青树枝拂拭新娘之背，以求驱除可能危及其幸福的邪魔祟祸。都匀地区，还让一福禄双全的女辈提着盛有小鱼的水罐随着新娘进屋，把鱼罐置于堂中或新房中，之后再放生，以祝福新人如鱼得水，后裔隆昌。大门之内，有些人家还以竹片弯成半圆形的三道圈拦着，让新娘跨越而过以消除邪气。为了使新娘能进得来，留得住，有些人家还以田螺几枚抛于新床之下或压于草凳之下，希冀新娘像田螺一样蜷缩下来，不留恋娘家和外界。水族是南方百越民族的后裔，渔猎经济的遗风还很浓厚，尤其在接新娘时更显得突出。荔波县及三都县九阡地区的水族，派去接亲的队伍除了抬各色礼品之外，总少不了一串金刚藤叶和抓鱼的竹笼。若女方家看不到这两样古仪之物，是决不会同意发亲的。水族没有拜堂和新婚之夜闹房习俗，新娘一般第二天便回门，过两三天之后新郎再提小礼品去接回新娘，从此过上夫妻生活。

石棺墓

水族相信祖先的神灵存在，并能给后裔赐福，为此很重视丧葬礼仪，尽力办理隆重的吊丧活动“开控”，然后为亡人修墓碑。早期的墓碑为毛石板碑，后逐步发展为有简单人物图案的浅浮雕石棺墓，以三都县的荣耀村墓葬为代表，晚期则出现二层、三层有文字、有画图的精致石棺墓。此外，还有单面碑、三面碑、五面碑、八字门、楼阁碑等墓葬形式。

石棺墓亦称石板墓，水语称为“坟廷牌喜拢”。墓室用青石板垒砌成比棺木大的长方体，中空，大多分为三层或二层，底层埋入土中用来置棺木，二三层则露出土表，高约 1 米到 2.5 米，用来装饰或存放简单的殉葬谷类、衣物等。大多墓室的上中层都有石柱，支撑墓匣的石板。这种墓葬形式，是干栏式住屋在丧葬方面的移化。明清之际的荣耀村石棺墓，墓碑尚无铭文，只刻有人物及草木的浅浮雕，工艺较粗糙，但又比明代以前的毛石板石棺墓大有改进。此后，荔波县水浦、三都水族自治县的引朗、安塘、塘州、廷牌等地的石棺墓又向前大大地跨了一步。墓匣四壁青石板已打磨，再刻上骑马作战图、牧牛图、人物出行图和狮、麒麟、牛、羊、象、仙鹤及花草图案。这些石刻多为浅浮雕，想象丰富，构图精巧，形态入神。有的墓门还分内外两层，外层的石板还镂刻成石门洞及花草图案。在水族的墓碑造型艺术中，很注重鱼的形象，有的刻有双鱼对嘴托葫芦的图案，有的刻有游鱼图案，这既与鲤鱼托住洪荒神话中幸存于葫芦中的兄妹造人传说有关，也与水族早期渔业经济有关，更与繁衍后代、子孙发达的意愿有关。

舞　蹈

流传于水族中的民间舞蹈保留着原始古朴的韵味。铜鼓舞是水族的传统舞蹈之一。其演出多在节庆和红白喜事期间。舞蹈反映的内容有破土耕作、播种、栽秧、收割和欢庆等，其舞姿与相应的生产劳动接近。当铿锵而浑厚的铜鼓声、大革鼓声响起之后，舞者踏着雄健的步伐，应着鼓声，循着拍节，旋转跳跃，或联臂欢呼，或马步行进，或奔突冲刺，或漫步扬手，最后在急如骤雨的鼓点声中嘎然结束。

斗牛舞是庆丰收的舞蹈，有时也在丧葬活动中演出。其素材来源于生活中的斗牛、杀牛祭祖、驯牛耕田等方面。斗牛活动，主要以水牛为主，而拉览一带又以斗黄牛为趣。生活给民间艺人提供丰富多彩的素材，因此便以竹篾编成牛头，以布蒙体为牛身，既有驯牛的紧张场面，也有相互的角抵表演；伴奏的乐器有铜鼓、革鼓或芦笙等。现在，多以芦笙和莽筒伴奏。出场时以清脆的小芦笙领舞，其后相继为四把中大型芦笙，五支大莽筒，五个男扮女装的伴舞者。伴舞者戴着竹篾编的帽子，上插一束白鸡毛和一根雉尾，腰拴四襟的白鸡毛花裙子。他们应着笙调或甩腰、顶胯、旋转、抖肩、跳跃，动作扭动的幅度大，把水族人民的粗犷奔放和热情豪爽的性格表现无遗。

这些舞蹈都在露天坝中演出，既方便群众观赏，也容易接受群众的批评与改进的意见，所以，水族群众十分喜爱和珍惜这些文娱活动。

端　节

水族有句俗话："汉族节日数春节大，水族节日数端节大。"端节，也称瓜节，水语称为借端，意为吃端，起源于以血缘为纽带的部落联盟祭祀集庆活动，随着历史的推移，演化为水族大部分地区分批分期欢度的年节。

端节前，村村寨寨开鱼塘，家家户户酿米酒、打豆腐、备新衣、杀猪、清扫庭院，处处呈现一派欢快、忙碌的景象。

祭祀祖先是节日的重要内容，其活动安排在相似于春节的除夕与初一早餐。水族的祭祖很特殊，忌吃飞禽畜兽的油肉，不忌水产的鱼虾类，而以鱼虾类为珍贵的祭品，并且将鱼制成传统的祭祖佳肴——鱼包韭菜。阴历初一祭祖活动最为隆重，往往从子夜开始备办。古代多以簸箕设地席，近代多在正堂设高桌供祭。席上的祭品有鱼包韭菜、炕鱼、糯饭、米酒和瓜果等。祭席两侧，有的还摆上农具、谷穗、衣物及首饰，象征托祖上福气过着美好的日子，将靠劳动去拓展未来。初一上午要挨家逐户吃贺年饭，开席前常由水书先生念着端节由来的祝词和吉利语，大人围席而坐，品尝各种供馔，给尾随而来的小孩散发糖果、炕鱼和糯饭团等馔品。

跑马是节日重大的娱乐活动。跑马场俗称端坡，是先辈卜吉选择的公有娱乐场所。吃贺年饭之后，四方骑手，八方观众云集端坡。当德高望重的长者举行祭道仪式，率先策马拔掉祭标后，骑手们纵马驰骋，你追我赶，向坡头奔去。这天，有的还在端坡上吹芦笙、跳舞、唱歌，加上各类商贩兜售商品，端坡成为最热闹的场所。端节歌云："男骑马去看姑娘，女梳妆去相小郎。"端坡又是男女青年社交的重要地方，草坪上、树丛间，三五成群在喧

闹、对歌。

初一的贺年饭之后，便开荤宴客。

水族有自己的历法，端节就是选择在水历年底岁首，其时相当于阴历八月至十月。端节是按地域分批分期过，主要以亥日为主干来推算日期，期间也有在午、未、申日过节的。首批端节由传说中的大哥住地都匀市的王司开始，第二批是三都县的拉佑、水东，第三批是恒丰、天星，第四批是水潘，第五批是牛场，第六批是兰岭。地域广及都匀市、三都县、独山县、榕江县、雷山县、丹寨县等。因此，端节成为历时最长、范围最广、人数最多的水族节日。这期间，铜鼓声此伏彼起，马蹄声、铃铛声和悠扬的歌声和芦笙调，从早到晚飘逸在翠竹掩映的木楼里，散落在弯弯的山道上，水族山乡陶醉在欢快的节日里。

卯　节

卯节，水族称为借卯，意为吃卯。有人说，卯节是歌节，是青年人的节日，对歌的卯坡是青年人的媒娘。

水族的卯节歌云："第一卯是水利卯，第二卯是洞垤卯，第三卯是水扒、水浦卯，第四卯是九阡卯。"这就告诉人们，卯节分四批来过，头三批为贵州省荔波县境内的水利、洞垤、水扒、水浦等地过，最后一批为三都县的九阡地区过，而且数九阡卯节最隆重。节日在水历的九、十月间（相当于阴历五、六月），被喻为"绿色生命最旺盛"的时期。这时夏收夏种甫毕，人心欢畅，选择一个吉利的卯日为节，杀猪宰牛来祭祖，以缅怀祖先功德，并祈求其保佑，同时邀请亲属朋友来相聚，预祝年景丰收。

对歌是卯坡最有情趣的娱乐活动。第一天对歌是在先祖卜吉之地的正腊卯坡上进行，来自三都、荔波、榕江、独山等县的水

族青年，来看热闹和经商的人挤满了坡头。人们撑着各色伞，戴着草帽斗笠，像五彩的蕈朵散落在绿油油的草地上和灌木丛中。对歌前，往往由当地德高望重的长者，郑重地致祝词："午日没有忌，未日没有凶，古老就兴过卯节，让我们欢喜来相逢；是姑娘小伙的就来对歌，是媳妇的自家管束；让青年人在对歌中寻找幸福，大家对歌才人寿年丰！"老人话音刚落，遍山响起了"呜呼"的喧闹声。接着，对歌声便如潮而来。卯坡对歌打开了禁锢的闸门，让青年人自由对歌相恋，难怪有人称卯节为青年节，称卯坡为媒娘。这天，只要你相中谁，就可相邀对歌；如果对方走开，还可以拦阻截留，所以有"要捕鱼才下河，要对歌才上坡"之说。

第二天对歌的地址要移到卯坡对面的耀向井边。这天的对歌，往往是精英荟萃，是第一天那些难解难分的歌手的角逐。对歌双方如果情意相投，便可相互允婚而父母少有干涉。

相传水族远古来垦拓这地区后，庄稼遭受虫灾，是水书先生拱陆铎托梦叫人们扫下烟尘去灭虫。虫灾除掉了，人们相聚而歌，因之而成节。又说有位名叫耀向的仙女爱上后生阿腊，并为当地解除了旱象。天神为之震怒，把二人化为水井与山坡。后人为悼念他们而相袭成为卯节。神奇美妙的传说为青年男女提供了自由聚会，选择佳偶的好机会。

节日晚上，往往是待客的高潮，户户笑声朗，家家酒飘香。而比酒更醉人更吸引人的是姊妹歌。姊妹歌，是可以开亲的外寨青年歌手进村后，本村的异姓青年相邀在家中的对歌形式。三都、荔波两县交界地区，被誉为水族的歌乡，对歌自然技高一筹。对歌时，女歌手及两名帮腔的同伴，坐在房门半掩的房间里，男歌手及两名帮腔的同伴、观众坐在堂中。吟唱的内容，除了感谢主人家、喜相逢、开天辟地等之外，还有众多的情歌。要是旗鼓相当，对歌要持续一两昼夜。

苏宁喜

“苏宁喜”，水语音译，意为水历四月丑日节。节日源于供奉生母娘娘的原始宗教活动，现在以此为年节的有贵州省三都县和勇乡板孔村、吉勇村及独山县相邻的火寨，而其他水族村寨已简化为附属于除夕的祭祀活动了。

祭祀时往往要设两席，一敬生母神“尼杭”，也称“敬牙希登”；一敬野鬼“牙却”。生母神尼杭是神话传说中的牙花散、牙花离、牙花隆、牙花术等四位女仙。供祭品陈设在里屋的“希登”供桌上，鸡鸭、猪肉、豆腐、米酒、花糯饭、红鸡蛋等祭品要设法弄齐。壁头上要贴连串的彩色纸人，插上竹条，缠上彩纸须的“枚化”和用小竹竿装饰的小拱门“科泛”。此外，还用竹篼盛上妇幼的衣饰摆在一侧。牙却在水族传说中是凶神，常给人们带来奇祸怪病，尤其小孩受害更为严重。为防止牙却作祟，就用簸箕设地席，以鸡鸭鱼肉茶祭。主持祭仪者多为年长女性。过节期间，再凶恶的男人都收敛几分，不敢责骂妻子及子女，唯恐招祸。

节日期间，人们互相走访庆贺，而小孩们却有一番乐趣。他们提着特制的小竹篼，结队挨家逐户在本村寨讨吉利的年饭。每到一家，主人热情地接待他们，给每人散发花糯饭、肉块、豆腐干及红鸡蛋等。当小竹篼盛满了，他们就带回家存放，又继续讨下去，直至走遍全寨。欢乐的孩子们一边讨吉利年饭，一边喜爱唱欢心的歌：“苏宁喜，好时光，仙婆节，无忧伤。感谢牙花散，多谢牙花离，我们多幸福，我们来歌唱。”

据传，在很古的时候，幼儿遭病严重，死亡殆尽，人们的痛哭声惊动了尼杭。尼杭下凡作法剪纸人抬魂，使失去婴儿的母亲

都有了身孕，大多都在水历四月丑日这天生下可爱的小孩。为了感激尼杭为人们赐福添丁，人们普遍设席供祭，因此沿习成为“苏宁喜”节。由于水历四月相当于阴历十二月，不少地区则把祭祀并于除夕之夜。

●东乡族

东乡族人口为373,372人(1990年统计),主要聚居在甘肃省临夏回族自治州，少数散居于甘肃省兰州市、定西地区、宁夏回族自治区和新疆维吾尔自治区。

东乡族因原居住在河州（今临夏地区）东乡地区而得名，过去曾被称为“东乡回回”、“东乡蒙古”、“东乡土人”等。解放后，统称为东乡族。

东乡族有自己的语言，东乡语属阿尔泰语系蒙古语族；无本民族文字，通用汉文。

东乡族普遍信仰伊斯兰教。

织褐子与擀毡

织褐子与擀毡是东乡族传统的手工艺，至今经久不衰。

褐子是东乡族农民过去穿的一种用羊毛织成的外衣，颜色有黑、白、红三种，成品看似粗糙，但结实耐穿，价格便宜，今天在一些山区农民中还有穿褐子的。东乡族地区特别是山区，人们习惯养羊，家家户户几乎都积存有羊毛。东乡族称织褐子为“木碣他木”，专门从事这一行业者被称为褐匠。织褐子不需要作坊，在院子里或场沿上随便架起简便的织褐架即可。因此，褐匠们不仅可在自己家中织，也可以走村串乡，哪家请去哪家。织褐子的程序犹如北方农村织粗布，先捻线，再利用经线、纬线来织。东乡人织的红褐子不是用颜色染成，而是用红羊毛所织，天然浑成。今天，东乡族织褐的工艺愈来愈精细，不少都在上面织出一些美丽的花纹及其他图案，成为民族工艺品之一。

擀毡在东乡族中很盛行，这是因为东乡族地区多处大山深沟之中，海拔较高，毛毡使用极为普遍，且羊毛来源丰富。在东乡族地区，几乎每家的男人都会擀毡。擀毡时，先要将羊毛堆在地上，拌以细土，用沙柳条打，将羊毛上的油污尘垢去掉，然后用弹弓弹松；其次是洗毡，将帘子里卷着的羊毛用门板压薄，再

用绳子捆起来，放置木板上用开水洗刷，而后两人并排坐一凳上，一人抓住绳子的一头，用脚用劲踩。随着绳子的松开、拉紧，污水从毡上顺着门板流下去，白毡越来越净，越来越薄。经过这样许多次地洗刷蹬搓，然后放在案板上，用搓钩揉弄，笔直带棱的四条毡边终于齐整地出现了。

东乡族的毡匠手艺高超，有的出门干活，有的在自己家中擀毡，再拿到市场上出售。在经济发展较快的东乡族地区，擀毡已成为一项重要的手工业。

鸡尾宴

鸡尾宴又称“宰鸡娃”，它是东乡族人民招待贵客佳宾的一种佳肴，表现了东乡族人民热情好客的传统。

做鸡尾宴时，通常是把鸡宰杀、拔毛、燎洗，煮熟后，按鸡的部位分成十三块，也就是十三个等级，即：胯子、腿子、鸡胸、大腿、翅膀、肋巴各两个，鸡尖一个，鸡尖即鸡尾。当然，鸡尾宴上要宰的鸡不止一只。

客人赴宴时，须按自己的身份和辈份去食相应等级的部位。其中三大部位的分配是：阿訇、阿舅吃胯子，舅爷、阿伯吃大腿，姑夫、姨夫吃鸡胸，其他部位则依次序排列。但鸡尾必须由阿舅来吃。在东乡族的习俗中，阿舅是最有权威、最高贵的客人，外甥们有什么重大事情常请阿舅来裁判。若有两个鸡尾，才能让阿訇吃一个。

鸡尾宴是东乡族人民一种严格而崇敬的饮食习俗，其来源无从考证。为什么鸡尖如比贵重？民间说法有二，一是鸡尖油多好吃，是敬上的佳肴；二是穆斯林最高的待客规矩。也有人认为：鸡尖在宴席上属最尊贵、最有身份的客人食用，谁吃了鸡尖就等于

吃了全鸡。

民间流传，过去东乡地区曾因食鸡尖而发生过纠纷。清朝末年，有位财主请本村绅士和外村阿訇来家赴宴。吝啬的财主只宰了一只鸡，也就是宴席上只有一个鸡尖。本村绅士当仁不让地抢着吃了，在座的阿訇当即发怒离席。他认为自己是阿訇，又是从外村请来的贵客，鸡尖非己莫属。绅士如此失礼，是侮辱了自己的人格。阿訇回去后，便发动教下群众，要同绅士对垒械斗，以报“食鸡尖”之恨。后来，经人评理，绅士宰了一百只鸡，设了“百只鸡尾宴”，给阿訇赔礼道歉才算了事。

平　伙

“平伙”是东乡族的一种食肉习俗，它反映了东乡人热情好客、平均摊派、有福同享的思想意识。

每当秋后傍晚，羯羊膘满肉肥，东乡人便三五相约，选定东家，围坐在暖烘烘的炕上接受主人的热情款待。主人先要端来香味四溢的细瓷碗茶，不一会儿，端来嫩香可口的“发子面肠”。这种食品是把切碎的羊心、肝、肺等调放上葱等 佐料，裹在羊肚皮里煮成，味道鲜美，油而不腻。

随后，主人便将煮好的羊肉切成大块，按腿、肋、胛等部位搭配成堆，放在盘中摆在每个人面前。吃时多用手抓。大家吃一口蒜，吃一大块羊肉，兴味浓烈。人们边吃边聊，直至夜深尽兴才归。过后，大家也不算多少钱，只把羊价折成粮食，平均摊派给搭伙吃肉的每个人。

平伙也就是大伙一块吃肉，吃完平均摊派的意思。这种习俗最早源于游牧民族，今天在北方有些汉族地区也还有这种习俗。东乡族源于蒙古人、中亚人，这些民族都是游 牧出身，所以东乡人

平伙习俗也反映了这个民族源流的一些情况。

新婚砸枕头

东乡族的传统婚礼十分热闹，其中的砸枕头十分有趣。

婚礼当天，新娘被迎到新郎家，随之还带着陪嫁的嫁妆箱子。全村男女老幼都要来贺喜，人们一是要看新娘，二是要看新娘嫁妆箱子中的枕头。有的地方人们齐声喊唱："打开箱子看一看，新娘的针线活做的干散（好）不干散！"于是，就有专人打开箱子。箱子内新衣服、床上用品很多，但人们的注意力主要还是集中在枕头上。东乡族姑娘在出嫁前，一定要精心绣几副枕头，枕头上的绣花图案以及色彩是人们评价新娘心灵手巧的重要依据，也是小伙子们爱"鸡蛋里面挑骨头"的地方。当他们无法再挑剔时，就一起唱起了传统的宴席曲：

恭喜恭喜大恭喜，
东家门上来送喜。
打一个调儿唱一个曲，
娶了个好姑娘配女婿！

夜间，当婚礼宴席散后，新娘子进入洞房。邻居亲友们纷纷兴致勃勃地前来闹洞房，砸枕头也随之开始。

村中的小伙子们，特别是与新郎年龄相近的小伙子们，手持早已准备好的枕头，朝坐在炕角上的新娘子砸去。预先护卫新娘的女友们则组成了一道防线，将砸过来的枕头反砸过去。激烈时，小伙子们冲向炕沿，姑娘们则齐力推他们。枕头软，砸着也不会太疼。人们哄笑嬉闹，场面十分热烈。如此愈演愈烈，女方终于招架不住了，新娘也被枕头砸上了。按习惯，砸得越狠越吉利。这时，新娘起来拂去蒙面的彩巾放在炕上"亮相"，并打开嫁妆箱子

出示其他衣物。至此，双方偃旗息鼓，夜深兴尽而散。砸枕头在东乡族婚俗中表现了一种喜剧性的美，表达了全村男女老幼对新娘的欢迎。

唱“哈利”

东乡族婚礼十分热闹有趣，当新娘被迎到男家后，亲朋好友们要欢聚在一起唱“哈利”，众人（主要是青少年）和之，并按节拍击掌或拍手臂，腿弯曲成骑马的姿势，左右横行转圈，有时随呼声前进后退。唱词由宾客即兴编唱，内容多为祝贺、赞颂之词。其场面热烈壮观，引人入胜。东乡人为什么迎亲时唱“哈利”呢？这在民间有一个美好的传说。

很久以前，在东乡境内名叫玛鲁马的山上有一条大蟒。这条吃人害虫使当地老百姓无法安居乐业。老土司出榜招贤除大蟒，声称有人除掉害虫可把土司让给他。一般人都裹足不前，一位姓鲁的东乡女子却应招前往，决心为民除害。鲁姑娘胆大心细，一只脚穿白鞋，一只脚穿黑鞋，右手拿一块白布和红布，左手提一坛药酒，直奔蟒洞。乡亲们跟在她身后，手持弓箭、长矛、利斧等武器。鲁姑娘在洞口对大家说：“我喊哈利阿宏纳，你们就前进！我喊折回阿宏纳，你们就后退隐蔽！”

鲁姑娘进入蟒洞，大蟒见是一个漂亮的姑娘，问道：“你来干什么？”她答：“找女婿。”蟒说：“你就跟我成亲吧！”她说：“可以！请你先喝我带来的酒。”于是，大蟒将她带去的酒全部喝光，不一会儿就酩酊大醉。鲁姑娘在洞口高呼：“哈利阿宏纳！”众人听到呼声一齐向前。这时，大蟒睁开了醉眼，鲁姑娘又急呼：“折回阿宏纳！”人们又急忙后退隐蔽。如此反复三次，大蟒全醉了，众人一拥而上当场将它杀死。

事后，鲁姑娘就当了土司。人们为了纪念这位为民除害的东乡族女英雄，每逢婚礼喜庆都要唱“哈利”。

“订茶”与“麦海勒库和”

“订茶”和“麦海勒库和”为东乡族婚姻中不可缺少的环节，在民间很早就流传，沿袭至今。

东乡人的婚姻基本上是父母决定，直到结婚，男女青年很少谋面相谈。男方看上谁家的姑娘，先要请“找赤”（媒人）到女方家说亲。女方应允后，男方即要送订茶，一般是一两块砖茶和几件衣物，只送给女方本家。订茶实际是男女双方家长应允后男方送给女方家的一点礼物。东乡族人民喜好饮茶，所以礼物中一定要有砖茶。订茶名称也由此而来，它表明了两家结亲已迈出了第一步。

送订茶后，不久就要开始“麦海勒库和”。“麦海勒库和”在东乡语中是送彩礼的意思，这也是婚姻中的一个重要环节。届时，由男方的父亲或叔伯、媒人、女婿及陪客共同携礼物前往女家。彩礼分两大类：一是茶叶、糕点、红糖；一是经媒人事先议定的如衣服、现金及首饰等。此外，还要给女方的“亲家伍”（家族）专门送礼，给亲家伍每家送一份；若亲家伍过分庞大、分支细且相距较远，可用“总茶”代替。一份礼送给了亲家伍的甲家，则表示给每户亲家伍都送了礼。下次再遇喜事，乙家则代为受礼，以此类推。男方一行到女家后，即由女方的兄弟携礼亲自送到亲家伍家中，告知男方一行已到，以备宰牲设宴，招待佳客。进餐前，由亲家伍中的长者或长辈出面当场演讲，内容多为赞美姻缘、乡俗民情、宗教义理等，说理贴切，娓娓动听。言毕，即由女方叔伯招待客人入席。家族中的男女成员均前往帮灶待客。

在东乡山区某些地方，还有送馒头的习俗，也就是订茶的一种。订婚时，男家须将当年收成的麦面蒸成馒头，每个馒头用一至二公斤面，馒头圆顶上抹姜黄，用刀稍切开口。蒸好后，雪白的馒头顶部如同开花，使人垂涎欲滴。一般给女家送十个，给亲家伍每家送六个。馒头的含义是预祝来年丰收。

戏谑新郎和戏谑公公

东乡族婚礼十分热闹有趣，充满了喜剧性。戏谑新郎和戏谑公公就是其中之一。

新郎在娶亲队伍的簇拥下来到女家，这时新娘正在女友们的帮助下精心打扮。新郎进门后，随同陪客要将梳子和篦子等送到正忙于给新娘打扮的房中，给女眷们梳头钱以示谢意。之后，新郎还要前往厨房，向厨师、帮忙的姐妹、岳母等道“色俩目”（问好）。届时，有人会递上一碗满满的烩菜请他们品尝。新郎及陪客往往请厨师代吃，言称厨师辛苦而答谢之。这时，欢乐的戏谑随之开始。姑娘们趁机七手八脚地把锅黑往新郎及陪客脸上抹，人们戏谑哄笑，乐不可支。新郎及陪客们欢欣地承受。机灵的新郎，这时常常会乘人们喧闹不备之际，随手从厨房里“偷藏”一两件东西，如碗、筷、碟或茶杯、勺子，表示把姑娘的“茶饭”手艺偷来了，姑娘从此可以安心坐家过日子了。

在新娘家里，新娘的亲朋好友、邻居及青年们也要戏谑新郎及陪客一番。人们一会儿耍笑，一会儿用预先准备下的柳条象征性地抽打，使他们例行礼节后，在众人的哄笑中及早溜走，陪客们也十分尴尬，左右逢难，无所适从。他们有时不得不早点溜出，而无法与迎亲队伍同行。

戏谑公公是在新娘进入夫家后开始。通常，新娘临门，其兄

弟要将她从车上抱进院子。这时，热闹的气氛达到高潮。围观的人们照例要将新郎的父亲或伯父等长辈脸上抹锅黑，再翻羊皮袄，腰系铃铛，头顶破毡帽。有时人们还把他的手脚象征性地缚住，有时则让他倒骑毛驴或牛“亮相”。有时则经上述装扮后，被按坐在一个翻倒的四方桌内，由众人抬起，吆喝嬉戏示众。

戏谑新郎和戏谑公公的来源无从考证，从前回族中也有这类活动。被戏谑者心甘情愿，戏谑者哄笑大乐，在婚礼喜庆中又增添了一份欢乐。

耍火把与打秋千

农历正月是东乡族人民农闲娱乐的时期，耍火把和打秋千是主要活动之一。

正月十五是汉族传统的元宵节，东乡族人民在这一天也沉浸在热闹的气氛之中。夜幕刚刚降临，就可以看到村村寨寨的青少年手举点燃的用麦草扎成的火把，漫山遍野地奔跑。一个个大火把排成一字形的长龙，在茫茫夜色中，翻腾飞舞，异常壮观。东乡族耍火把，与南方有些少数民族的火把节有所不同，它没有歌舞聚会的场面，而是突出个“跑”字。青少年高擎火把，跑遍山头、地垄，因而具有一定的民间体育色彩。老年人及妇女则站在村头观望，人们怀着喜悦的心情，从满山遍野的火把中看火的颜色。据民间传说，火色红，则预示着当年的小麦与胡麻要大丰收。

在正月里，东乡族的青年妇女和姑娘们都喜欢打秋千。届时，她们那矫健灵巧的身影在空中飞来飘去，显示出了一种健美；妇女们头顶上那翠绿的绒盖头，在清风中呼啦啦拂舞，又充满了诗情画意。

打“咕咕杜”

打“咕咕杜”是东乡族青少年常举行的娱乐活动，多在正月里及农闲时节进行。

咕咕杜是一个像鸡蛋大小的椭圆形木球，用树枝削制而成，长约4厘米，粗约2厘米。打咕咕杜东乡人也称作打“别烈棍”。别烈棍指长约40厘米的木棍，手握的一头呈圆形，击球的一头略呈扁形。打咕咕杜时，分攻守两方，人数少时双方各一人，多则不限，双方相等即可。场地一般选在麦场靠墙处或靠山崖的平坦地方，在场地中画出一长方形的界限，俗称“岗沿”。开始时，守方居岗沿内将球击出，攻方自得球之地，无论远近，须尽力将球扔入岗沿内，入则换发球权；守方以棒迎击防守，击之愈远愈好，然后以棒量数，以数计分，先满百棒者为胜。输的一方须受“喝通”的处罚，即胜的一方以棒击球，输的一方从落球之地持球，口喊出声，不许换气，一口气跑入岗沿；否则，继续受罚，然后重新开始。

打咕咕杜这种体育活动，在东乡族山区较为普及。在空旷的场地里，小伙子们一个个生龙活虎，奔跑跳跃，手持木棒迎着流星似的小木球，挥舞不休。一旁观看的小伙伴们，口中不停地喊着节奏明快的童谣，呐喊助威，使这项体育活动更加妙趣横生。

●纳西族

纳西族人口为278,009人(1990年统计),主要聚居于云南省丽江纳西族自治县,在维西、中甸、宁蒗、德钦、永胜、鹤庆、剑川、兰坪等县和四川省的盐源、盐边、木里等县,西藏自治区的芒康县也有部分。

纳西族史称“摩沙”、“磨些”、“末些”、“么些”等;自称因地而异,丽江地区自称“纳西”,宁蒗、盐源等地多自称“纳”或“纳汝”、“纳日”。解放后,根据本民族人民的意愿,统称纳西族。

纳西族有自己的语言文字。纳西语属汉藏语系藏缅语族彝语支,分东、西两种方言。古代曾有过表意的象形文字,称东巴文,另一种是表音的音节文字,称哥巴文,但使用不普遍。1957年,创制了拉丁字母拼音文字方案。现纳西族人民多使用汉文。

纳西族普遍信仰东巴教,系多神教。天、地、山、水、风、火等自然现象和自然物均被视为有神灵。

七星披肩

云南省西北部丽江纳西族自治县及其附近的纳西族妇女除了穿宽腰大袖长及膝盖的上衣，下着长裤，外面系以百褶围裙以外，还披有叫作“永袄”的羊皮披肩。在古代，披肩上缀有九片用七色丝线刺绣而成的圆形“葩缪”。两肩上的稍大，每片直径约13厘米。左肩上的叫“湟美”（太阳），右肩上的叫“哼美”（月亮）。背上并列7片较小的、直径大约9厘米的圆片，叫作“史贺”，意即北斗七星。每片葩缪中央缀有两条用岩羊皮揉制成的细带，象征着日月星辰的光芒。这种服饰被称作“肩挑日月，背披七星”，象征着纳西族是一个勤劳智慧的民族。

据说这种叫作永袄的羊皮披肩，原来无论男女都是普遍披用的。后来男子改用披毡，永袄才成为妇女的专用服饰。到了清代末年，肩上两片较大的象征日月的图案已经省略，一般只留有背上的七星，成为只是“七星披肩”的服饰。但是在边远山区，还可以看到保留下来的肩挑日月、背缀七星的披肩，甚至还可以看到个别男子还穿着这样服饰。

纳西人有这样的披肩，在民间有着不同的传说。

一个传说是天帝的女儿衬红葆白命，不愿嫁给天神可乐可喜，

而要嫁给人间的英雄崇仁利恩。在从天上下凡时，知道天神可乐可喜必定会作法捣乱，就用巧手在披肩上预先绣好了日月七星，半路上可乐可喜果然追来，朝天张口吐出乌云黑雾，遮住九十九座山，七十七条谷，妄想劫持衬红葆白命，威胁成亲。但是衬红葆白命将披肩披在身上以后，上面的日月七星齐放光芒，照耀得可乐可喜晕头转向，衬红葆白命终于冲破黑暗，来到人间，与崇仁利恩结成了美满的婚姻。披肩长期流传下来，就成为传统的服装。

另一个传说是：现在的丽江坝子，原来是一个浩渺的大湖。有一年，有个残暴的旱魔，放出了九个太阳，晒得庄稼枯干，山泉枯竭。这时村中有一个叫英古的姑娘，拔下水鸟的羽毛，织成彩色的“顶阳衫”，披在肩上，到东海求见龙王。她在海边边走边唱，引起龙王三王子的注意，两人产生了爱情，英古要求先灭掉旱魔，再举行婚礼。于是三王子奉命携带万顷玉液来到英古家乡。但三王子不幸中计，坠落旱魔所设的陷洞之中。英古见状，苦战九天，也倒在地上，变成了“英古墩”，即丽江。此时居住在北时（即今白沙）的善神三东见到无辜的人遭受厄运，便用雪精制成一条巨龙，用嘴含天上的八个冷太阳，将七个吐到地上，第八个留在天空，成为夜里的月亮，又用身子将旱魔牢牢压住，变成为至今还躺在那里的玉龙雪山。龙王三王子也用力跳出陷洞，获得了自由。那个陷洞，化作一眼清泉，就是现称黑龙潭的玉泉，又叫象山灵泉。善神三东便将雪精白龙吐下的七个冷太阳，捏成七个光芒闪闪的星星，镶在英古的顶阳衫上，以表彰她的勤劳、智慧和勇敢。流传至今，就有了“七星披肩”的精美的服饰。

琵琶肉

云南省宁蒗县北部永宁一带的纳西族，以农业及畜牧业为生。

他们用整头猪腌制猪膘，因为形似琵琶，又称琵琶肉。它既是别有风味的物产，又是家庭财富的象征。这里的纳西族不少人家都用琵琶肉去兑换现金，换取粮食，过去还用它放高利贷，押入土地，这实际上起着交换中的等价物作用。

琵琶肉的制作有一套独特的方法。首先是选择膘肥体壮的猪，用削尖的小竹子从前腿腋下刺入心脏，待猪死后，刮毛剖开肚腹，除去内脏和脊骨，砍掉四脚，在肚内渍以盐和花椒，再用麻线或牛皮线缝合，压扁后在熏棚上烤干或晾干储藏，可保存数年至十几年不坏。

在永宁纳西族的生活习俗中，琵琶肉也起着十分重要的作用。少年到13周岁时，要举行穿裤子或穿裙子的成丁仪式，这时举行仪式的少年就要一脚踏在一袋大米上，另一脚踩着一个琵琶肉，象征未来生活的富足。有米有肉，是人生仪式中的必备礼品。琵琶肉在永宁纳西族日常生活中既是财富、货币，又是年节中的礼品。

怒族、傈僳族、普米族等也有制作琵琶肉的习俗。

千层饼——粑粑

丽江的纳西族过去早午两餐吃粑粑，晚上才吃米饭。他们的粑粑，制作讲究，风味独特，很负盛名，不仅为当地人所喜爱，而且也被外地人购买后作为馈赠亲朋好友的佳品。

制作粑粑，方法十分讲究。在大理石面板下要放一盆不很旺的栗木炭火使石板加温，然后以面粉为原料，用黑龙潭清泉水揉面。揉时，冬天要用温水，夏天则用凉水，揉成的面团不得粘糊。以碱或苏打发酵，然后将其整平，薄如牛皮纸一样，涂一层猪油，再铺以切细的火腿肉末、白米、葱花、花椒末等，然后再制成带馅的含有多层的薄饼，在炉中烤熟。它层次多，薄如纸，香脆爽

口，油而不腻，冷而不僵，享有千层饼的美名。它是一种色美味鲜，不易变质，耐久贮藏，随时可供食用的食物。

每当丽江纳西族结婚之日，新郎还喜欢用油炸的甜味粑粑来敬新娘，预示着两人今后生活甜蜜幸福。可口的丽江粑粑，在喜庆的婚礼中，又被看成了祝福的吉品，成为祈求生活美满的象征。

窖　酒

纳西族人民善于酿酒。他们酿制的黄酒、白酒、窖酒都各具特色。其中尤以窖酒远近驰名，并成为纳西族人民举行订婚、结婚仪式中所必备的礼酒。凡订婚和迎亲之日，男方都必须带两瓶色如琥珀，香气清淡，味道甘醇的窖酒作礼物，送去女家，作为表示敬意和夫妇爱情甘美醇和的象征。

窖酒的酿制比较严格。必须选用品质优良的大麦或小麦，加黑龙潭玉泉水，并拌以著名的丽江曲，加温煮成。在酿造的过程中，必须置于地窖密封储藏，经过较长时间，使其缓慢醇化，故名窖酒。窖酒颜色橙黄，度数较低，香甜可口，纳西语称“日松”，意即纯粹的酒。

将窖酒作为喜庆用酒，还有一段有趣的传说。明末清初时，有一个杨姓的浙江绍兴人，曾在南明桂王永历帝朱由榔的桂王府掌管酿酒事务。清顺治十六年（1659 年）桂王朱由榔被吴三桂逐出昆明，仓惶逃至下关，又遭尾追袭击，护从人员被冲散。杨某与随驾队伍失去联系，经鹤庆县进入丽江，定居于离丽江县城 10 多公里的荒僻山村——江洼村，以打短工度日。后来他与一个纳西族姑娘结识，产生爱情，约定腊月成婚。为了向纳西族姑娘和乡亲表示自己的心意，决心用在家乡酿造黄酒的手艺，利用这里盛产的大麦，以及山上可能作酒曲的药草，酿制一种与这里习惯酿

制的“日琪”（水泡甜酒）风味不同的好酒。到了成亲之日，他从窖里挑出几坛色香味俱佳的美酒斟入杯中一一敬客，博得了大家的赞赏，于是取名窖酒，并逐渐成为纳西族结婚时必备的喜酒。

三房一照壁与四屋一院落

纳西族的房屋建筑与他们的婚姻、家庭习俗有着紧密的关联。

丽江一带的纳西族居住的房屋，最早为纯木质结构。到明代开始出现瓦房，清初又发展为砖木混合构筑的瓦房。现在丽江纳西族的瓦房，多为“三房一照壁”，“四合五天井”的格局，即由较高的正房和两侧略低的配房，以及在正房对面建有照壁一座构成，看上去布局协调，主次分明。这种建筑的墙壁下半截用砖石或土基，上半截约三分之一用木板，墙身处理独具匠心，略微向内倾斜，增强了建筑的稳定性。房檐大多外伸，并在露出墙的横梁两端钉上裙板，既增加美观，又保木质部分不受日晒雨淋。房内多为两层，上面储粮，下面住人；门窗上雕饰花鸟龙凤；两侧山墙各有一条写实的鱼形图案“垂鱼”木板，保护横梁。这种建筑适于一夫一妻制家庭的居住，宽敞、安静，自成一个单元。整个建筑的主辅房屋和照壁，高低错落有致，纵横呼应，成为纳西族建筑的一大特色。

居住在宁蒗县永宁的纳西族的房屋建筑多采取“四屋一院落”格局，即由正房、经堂、双层楼房和畜厩四座木结构建筑组成的院落。由于房屋是以圆木或方木垒墙，以木板盖顶的建筑，所以称作“木楞子”。正房由主室、上室、下室、后室、仓库五大部分组成。主室是全家活动的中心，上方设中心火塘及锅桩石，火塘周围是木板地铺，为老年妇女及未成年儿童睡处，也是全家做饭、进食、议事、举行宗教活动及接待来客的地方。永宁纳西族

以右为大，所以妇女坐火塘右侧，座次按辈份大小排列。左侧为老年舅舅及其弟弟、外甥的座席，未成年儿童则坐于火塘的下方。双层楼房的楼下放置农具等物，楼上则隔成若干个约10平方米大小的房间。

纳西婚俗

云南丽江坝区，江边及大研镇一带的纳西族，青年男女通过说媒、算八字、打鸡骨卜、送酒米（表示“山盟”）与盐（表示“海誓”）等，订定婚约。结婚时，一般都先由男方选定吉日，请媒人去女方通知劝说，并送耳环、手镯、金领扣、女袄、纱帕、土布二件（给岳父母）、15公斤猪肉、八大碗酒席一桌等礼物。女方同意后，新娘要痛哭以示与父母惜别，然后朝南方洗头，梳发开脸后就不再去别家串门，意为今后只走男方家门之路。而男方则要在天井里搭凉棚，张灯结彩，在新房门上悬一红纸裱糊的筛子，上插一根用柳或桃树制作的箭，纸上要写“麒麟在此”，以防白虎进门，带来灾害。安置新床的当晚，要请一位祖父母与父母都健在的小男孩与新郎同宿在新床上，名叫“压床”，以求今后家庭人口兴旺，美满幸福。

第二天接亲，由男方多人备轿或乘马到女方迎接新娘。去时随带酒席二、四、六桌不等，女家须退回一桌，称作“回席”。接亲路上如遇其他迎亲队伍，则双方新郎都要迅速地脱下一只鞋扔出，以扔得高和远的为幸福、吉利。到男家时，男方大门紧闭，女方送亲人与男方所请东巴（巫师）在门内外一问一答对歌，大门才打开。新娘、新郎要跨过设在门槛上的一个用红纸裱糊的马鞍，进入大门。东巴同时开始念经，并在新娘额上点几滴酥油或泼清水，表示新娘从此是男家的人。新娘进门后，首先要向公婆各敬

送一双新鞋，以示礼貌。女方则将新娘送给新郎的鞋，丢到新床底下的深处，由新郎自己弯腰将鞋捡出，接着穿起，称作“换脚鞋”，以示从此有了自己的小家庭。

随后，新郎新娘共拜天地、祖先及公婆，新人也互相鞠躬。拜时，新娘手持一块菌形盐巴，新郎手端一小土罐清水或茶水，以示水盐交融。傍晚，一对新人由两三个小孩陪同在新房内，吃女家回席的酒席。男方在家设宴请亲友，青年们围着火塘唱“结婚调”。女方也在家请亲友吃饭共唱“嫁女调”。第二天由新娘认亲，按长幼次序一一拜见，进行“分大小”仪式，长辈要给新娘一点见面礼。第三天新婚夫妇要带米、糖、酒礼物到女方“回门”。过桥时，要在桥边买一点糖食吃，在岳父母家，新郎也要一一拜见长辈。第四天新娘由小姑等陪同上街，买一点鱼（表示鱼水之情）、松明（照亮前程）、葱（孩子聪明）等回家，表示新娘开始入厨房做饭，承担家务，成为男方家中的正式成员。如今的婚礼，已少见打卦、送礼之俗了。

纳西葬俗

纳西族古代通行火葬，到清代逐渐改为棺木土葬，但在宁蒗县永宁等地仍实行火葬，而且在有些土葬地区现在又有改为火葬的趋势。

丽江等地纳西族在病人断气以前，都要往嘴里放一些银末、茶叶和几粒米，认为这样死者才能去“神地”。如果死者已经成年，必须请东巴念经超度，并按祖先迁徙路线，送回祖先故地。也有请喇嘛或和尚超度亡灵的。如果死者是长辈，后辈都用一块长条白布包头，并称其为“孝”。相传这是古代东巴三久传留下来的葬俗。

据说在古代，孝顺父母的东巴三久死去了母亲。因为他的亡母变成一只蜻蜓，所以无法放入大棺材内，东巴三久就买了一口锅，用白布包好体僵的蜻蜓，放入锅内盖好，并背到金沙江边的塔城阿刷峰的岔口，用松、柏、栗树枝在锅旁烧一堆烟火。这时蜻蜓受热，慢慢醒来后就飞走了。东巴三久知道母亲已到天空自由飞翔，为了表示对她的怀念，就将包蜻蜓的白布包在头上作为纪念。村里的人知道后，都赞赏东巴三久的作法。以后凡遇长辈过世，在葬仪中的后辈与孝子，在头上也都包起了白布，以示对死者的哀悼。塔城的纳西人，还在阿刷峰的岩洞内塑起了东巴三久的神像，每年正月初十，老人们便带着孩子到那里的岔口平地上，用松杉、栗树枝烧起烟火，唱歌跳舞，祭奠东巴三久。

穿裤礼和穿裙礼

在云南宁蒗县永宁等地，纳西族少年到了13周岁时，男孩要举行“穿裤子”礼，女孩要经过“穿裙子”仪式，以此表示他们已进入成年人的行列。从此以后，要正式参加劳动生产，也有了参与男女交游活动的资格。

纳西族这种成年礼仪的由来，古老的传说称：在洪荒时代，天神阿色笃要规定动物和人类的生命年限，于是就通知说，在夜间我喊生命的寿岁，谁答应，就是谁的生命的年限。于是在一个万物入睡的晚上，天神喊60岁时，狗答应了，于是狗获得60岁寿命。人类却始终酣睡，直到喊13岁，才醒来答应。人感到13岁寿命太短，天神就命令与狗商量，以人照管狗的一生生活为条件，交换了彼此的生命年限。这样人才得到60岁的寿限。此后，纳西人每到满13周岁时，就要举行隆重的仪式，庆贺人的再生。

凡是有13岁孩子的家庭，每年的正月初一清晨要举行庄严的

穿裙子、穿裤子仪式。这时全家聚集在正房的火塘旁边，有亲属关系的村邻也赶来祝贺。火塘内燃起熊熊的火焰，火塘下方摆着祭品。在仪式中，男孩站在正房左边的男柱下，女孩则站在正房右边的女柱下，两脚分别踏在一袋大米和一个猪膘（琵琶肉）之上，手里拿着钱币，以示丰衣足食。参加仪式的孩子，平常都只穿麻布长衫，不穿裤子。而到这一天，女孩在母亲的帮助下开始脱去长衫，换成右衽短衣，下着百褶长裙，束花色腰带，冬天加披一块黑色羊皮，并用牦牛的尾毛，编成粗大的假辫，盘于头顶，在假辫外又缠上蓝黑二色的丝线，并将丝线垂及腰部；男孩则由舅父帮助，脱去长衫，改为上穿短衣，下着长裤，腰束麻布带的装束。然后，少年祭拜象征祖先的锅桩石，祈求祖先保佑健康成长。接着村子里的老“达巴”（巫师）用吉祥的语言为孩子祝福。之后，孩子向母亲、舅舅及长辈们叩头，受拜的长辈与村邻赠以礼物，并说一些吉利与祝福的话语。整个仪式的内容和情节，都充满了庄严肃穆的气氛。

东巴教

东巴教因纳西族语言称巫师为东巴而得名，是流行于以丽江纳西族自治县为中心的西部地区的一种原始宗教。东巴教有用象形文字（东巴文）或以标音文字（哥巴文）书写的东巴经，卷帙繁多，内容复杂，但是还没有系统的教义、专门的寺庙及统一的组织。

东巴教信奉神话人物丁巴什罗为始祖，在东巴经《什罗祖师传略》及《拯救什罗祖师经》中载有丁巴什罗的祖先开始有七代祖母，后来有九代祖父，用神话的形式反映了母系社会先于父系社会的历史现象。然后讲述丁巴什罗从母亲的左腋出生后的第三

天，就不幸被魔鬼捉去戴上手铐脚镣，投入八环大铜锅内，煮了三天三夜；但是他并未被煮死，却趁掀开锅盖之机，跑到十八层天上，在那里学经典和法事。后来人间出了个女魔，到处吃人，弄得人间混乱不堪。于是大家派白蝙蝠上天去请丁巴什罗。丁巴什罗就用牦牛驮了 99 部经书，带着 360 个弟子和千千万万神兵神将，设计将女魔杀死，拯救了人类，所以东巴教将他奉为祖师。东巴教崇拜多神，认为天、地、日、月、星、山、水、风、火、雨、雷、电、木、石等自然现象都有神灵，既可赐福，又能降祸。同时也崇拜人的灵魂和祖先。因为早自唐代以来，纳西族先民就与吐蕃的接触频繁，因此东巴教在形成与发展过程中，受西藏本教的影响较大，所奉的神灵与护法，与本教大体相同。过去，东巴教的活动涉及纳西族生活的各个方面，人们在祭天、祭祖、婚丧、命名、节庆、求寿、祈年、动土、卜算、治病、驱鬼等，都要请东巴念经作法。巫师东巴平时从事生产劳动，仅在祭礼活动时随主之意有微薄的报酬。只有少部分东巴由拜师授业而成，大多数系家族内世代相承。他们除了进行宗教活动外，还是纳西古文化，尤其是文学、舞蹈、绘画，以及生活习俗等民族遗产的继承者。

流行在宁蒗县永宁纳西族地区的达巴教，因那里的巫师叫达巴而得名，是东巴教的一个分支。但是达巴没有经书，全凭口头相传。达巴的口诵经可分 10 类，比较系统，完整的有 30 多种，因为 口传口诵，因地因人而异，所以差别较大。大致有《退口舌是非经》、《祭龙王经》、《祭风经》、《超荐经》、《祭祖经》、《祭女神经》等等。永宁纳西族的祭祖、丧葬、嫁娶、命名、祭神、驱鬼，少年男女的穿裙子、穿裤子仪式等等，都要通过达巴进行。这里的达巴教有时与藏传佛教互相渗透，互相影响，许多宗教活动中，达巴和喇嘛一起出场，互相配合。过去，有的达巴除了为群众送鬼请神外，还专为土司念诵家谱。

“猛本”和“祭三多”

纳西族每年要举行两次隆重的祭天活动，纳西语称作“猛本”。人们对它极为重视，看作是本民族的一个重大活动。

祭天以春节为大祭，七月十五为小祭。大祭日期各宗族支系间不完全一致，多在正月上中旬举行，有的长达十天左右。小祭系补充大祭的不足。也有的地方将小祭合并入大祭，都在正月举行。传说祭天是始祖崇仁利恩与衬红葆白命成婚后，久不生育，在天神父母指点下祭天以后，才生了三个儿子。但所生儿子又不会讲话，因此便再次祭天，三子才说出三种不同的话，从此变成了纳西、汉、藏三个民族。相沿成习，便有了祭天的风俗。凡有巫师东巴的地区，要东巴任祭司，仪式相当繁杂，保留有不少古老的传统。在没有东巴的地区，则由知晓本民族典故，能念诵经典的长者或族长任祭司，仪式较为简单。有的地方只允许男子参加。一般有固定的祭天场所，或轮流在各家族的围栅内以树枝搭棚进行。进入祭天棚后，有很多禁忌，日常语言中的一些词语不许使用。例如长刀要叫“蛇舌”，弩箭说是“蜂针刺”，勺子喊作“长杆”，狗谓之“翘尾”，逃跑说是“拍脚板”等等，都是一些避凶趋吉，祈求平安幸福的意思。

纳西人祭天时专用的器物，要求洁净，如祭台左右各栽一棵代表天、地的栗树，中间一棵代表人皇的柏树，前排两根代表始祖崇仁利恩夫妇的小栗树，都要派专人去高山岩头砍伐。祭天用的“神米”，要白净整齐，并经多次洗晒；祭天用的“神猪”也要专门喂养等。其他大甑、锅、秤、刀、钩、盆等也有专人保管，不得随便使用。此外，还要举行射箭仪式，目的在于祈求庄稼丰收，人畜平安。

过去每年二月初八和八月的第一个羊日，纳西族还要举行祭“三多”的活动，又称“北岳庙会”。因丽江纳西族自治县的玉龙雪山有北岳之称，山麓建有三多庙，故名。祭三多那天，人们用全羊为祭品，其信徒之多，香火之盛，为丽江当时所有寺庙之首。

干木古

宁蒗县泸沽湖畔的纳西族人，每年七月二十五要举行盛大的“干木古”活动。在纳西语中，“干”是祭祀的意思，“木古”则为泸沽湖畔狮子山上的女神名，又叫“狮格干木”。所以干木古也就是祭祀女神木古的节日活动。汉语称狮子山祭会或海坡会。

传说狮子山是木古女神的化身，它不仅护佑永宁的人畜庄稼，而且也是附近的众山之神，管辖着周围的男山神，并定于每年七月二十五为众山神去西藏的娱乐之日。为了求得木古女神的愉快和当地人万事如意，兴旺发达，附近一带的纳西族群众，尤其是青年男女都盛装前来举行规模壮观的干木古活动。泸沽湖畔各村要举行一年一度环行泸沽湖的“转海”活动，金沙江沿岸一带的各村，则要组织以村为单位的“转山”会。他们几家或几十家在一起，共燃一堆松枝，并洒上蜂蜜、糌粑、牛奶、茶、酥油及鲜花等，作为祭品谒山朝拜。礼毕后就地野餐，尽情欢乐。在返家途中，人们利用野餐、赛马、游山、露营的机会，用含蓄双关的语言，通过对歌，试探对方的态度，结交新的伴侣。男子唱道：“我是牛奶，你是泉水，水乳交融不能分。”女子回答：“我是盐，你是茶，水煮盐茶不能分。”如果双方同意结交，男的就唱：“高山藤子扭成绳，我俩像藤子扭在一起吧。”女的也唱：“天上的大雁对对飞，我俩像大雁一样飞翔吧。”利用生动形象的比喻，传达爱慕的信息。如果男求女方：“两朵花长在两棵树上，但采下来可

以插在一块。”遭到女子的拒绝时，女方就会唱：“金鸟与银鸟相配，虽在一块喝水，可是一个尾巴长，一个尾巴短。”表示二人不能相配。在湖光山色、幽美宁静的湖边，人们在祭祀女神的日子里，欢娱多日，流连忘返。

纳西火把节

每年农历六月二十四至二十六，纳西族人要按古规过三天火把节。每家在门前要连点三天如柱子般粗的高大火把，青少年们手持又细又长的小火把，在田埂、山路上边走边舞，直至深夜，气氛热烈。火把燃得愈旺愈久，越是表示吉利，人们就越高兴。

第一天，青年男女穿着节日盛装，到野外对歌谈情，采摘野花鲜果。成年人用又好又长的松木，劈成细条，中夹易燃的松明，捆扎成火把，家庭主妇则准备节日的盛餐。天色将晚，各家门前的火把就普遍点燃。夜间青年们举着火把到河畔篝边聚会玩耍。第二天亲友们互相拜会，媳妇们回娘家探望，青年们到野外会餐，成年人又准备比昨晚更高的火把。晚间农民在田间用火把照亮庄稼，以求消灭虫害，预祝丰收。第三天进入高潮，各家扎的火把更加高大，装饰美观。天黑前点燃火把照亮所有的角落，把蜘蛛网等不洁之物烧掉，以示驱邪保安。人们围着高大的火把，尽情欢跳，通宵达旦。青年男女浓情如蜜，节日的火把照耀着对对倩影，留下了终生难忘的印象。

纳西人火把节的起源，也有着自己的传说：长久闭关在天上的玉皇大帝，有一天忽然打开大门，发现人间青山绿水，百花争开，村庄田野，山歌悠扬，美满幸福竟胜过天堂，不禁大怒，令掌火的红面天官将人间统统烧光。掌火天官先在人间巡视一周，不忍心烧毁这美好的世界，就回天上向玉皇撒谎，说已将人间烧干

净。但不久玉皇又张望人间，发现人间世界不仅没有烧毁，反而更加繁荣昌盛，就下令将天官处死。此时，天官的一滴心血落到人间雪山脚下的一座庙前，被和尚捡到藏在殿里。到六月二十四傍晚，人们忽然见一小娃，原来就是天官心血变成的精灵，跑来向大家哭诉，说专横残暴的玉皇见人间比天宫美好，今晚要派天将下来焚烧，你们各家赶紧点燃火把，一连三晚，使玉皇误认为人间已经烧掉，才能躲过劫难。善良的人们依照小孩的嘱咐，互相传告，点起门前大火把，舞动手中小火把，烈焰冲天，造成人间已焚烧殆尽的假象，这样才免除了被毁灭的灾难。从此以后，每年六月二十四至二十六，纳西人都要欢度火把节，向掌火天官表示敬意。

麒麟舞

麒麟是纳西族人民理想中的吉祥动物。每逢新年，他们表演麒麟舞以祝全年风调雨顺、吉祥如意。麒麟舞是以麟与凤为主的各种动物组成的大型民间舞蹈剧目。

参加麒麟舞的人员都经过业余训练。道具是用竹子编织成的各种动物，糊纸以后，再在上面描画彩色图案和花纹。除夕之夜，锣鼓齐鸣，爆竹连声，观众围成一圈，中间置一方桌，四周点上各式花灯后进行麒麟舞的表演。舞剧的主要角色是一位贯串始终的阿普寿星，一个戴着假面具的有白须白发的仁慈老人，他以监管各种禽兽的身份出现，与传说中管天、地、日、月、星辰等自然现象的阿普相同。他手里提着一根神杖，可以驱恶助善，保护吉祥的动物。舞蹈开始，阿普寿星身披披风，在锣鼓声中登场，接着指挥锣鼓节奏，安排动物表演者出场，以保护演员在四方桌上演出高难动作的安全。全部舞蹈包括有花马并骑、鹿鹤同春、麟

凤呈祥、牦牛现瑞等内容。

花马并骑系由20个手提花灯的男女小孩为前导，以欢乐的动作绕场一周，然后是两个男孩分别乘象征性的红、蓝两马在场上奔跑，以示新年快乐，生活幸福。鹿鹤同春的白鹤、梅花鹿都由人扮演。鹤全身白色，颈长1米，可以伸缩和上下左右摆动，尾巴及翅膀镶以绿色绸布。从舞台边缘慢慢登上方桌，以灵巧的动作点头示意。梅花鹿只有一个制作的鹿头套在演员头上，身着花纹短衣，从桌上翻滚到地，然后又跳回桌上。情绪紧张热烈，充满欢乐气氛。麒麟则由两人合作，类似内地的狮子舞。前面的人手持麒麟头，有两只大眼，一对兽角，角上贴有“丰”字。颈下有一个大响铃不断晃动。麟身粗壮，背有花纹，腹下有黄色长尾，尾长约30厘米，全身用麻线缠绕，不使演员露出。两人配合默契，绕场一周后，跳上方桌，缩成一团，抬头仰天，称“麒麟望月”。凤凰全身贴有红纸，尾及翼部扎以绿色丝绸，颈长1米，也可收缩摆动。凤凰展翅在麒麟身旁，以示国泰民安，五谷丰登。最后一对牧民夫妇登台，表演整年在山上放牧后回家拜年，互相说喜庆吉祥如意的话，以示祝贺，并牵出一头母牦牛绕场一周，生下一头小牦牛，祈祝六畜兴旺。

从除夕之夜开始，一直欢乐到正月十五。到十六日是送麒麟的日子，要举行盛会，最后烧毁全部道具，表示送麟凤返回天上，等待明年新春再来与万民同乐。现在表演麒麟舞的习俗，又赋予了安定团结、欣欣向荣的新内容。

纳西古乐

丽江等地的纳西族人民，过去每遇婚丧、祝寿等大事时，都习惯演奏“丽江古乐”或“白沙细乐”套曲，以示庆贺。乐器有

笛子、芦管、琵琶、三弦、二簧、胡琴、音锣、小钹、小铃及摇铃等，是一支富有民族特色的交响乐队。

纳西古乐大约产生于明代汉族的佛教和道教音乐传入以后，来源于汉族的洞经音乐和皇经音乐；但现在保留下来的只有洞经音乐的部分。经过几百年的发展变化，在汉族丝竹乐风基础上，揉进了纳西族的民族风格，出现了跳跃性的装饰音和音程很大的滑音与颤音，冲淡了汉族原有的清秀、典雅的风格，显得粗犷有力，具有浓郁的民族色彩。它原来要配合汉语经文唱诵，只限于民族上层文人的演奏和欣赏。后来逐渐演变到不唱经文，成为单纯的器乐曲。在城乡普通居民中也有不少人能演奏和娱乐。整个乐曲原分“神的”、“华通”两大乐章，并根据内容的不同又分了50多个调，现在经常演奏的有“清河老人”、“万年欢”、“求龙吟”、“小白梅”、“吉祥”、“八卦”、“浪淘沙”、“十供养”、“到春来”、“到夏来”等20多个小调，在重大节日时经常演出和播放，深得群众的欢迎。

白沙细乐又名“白沙细梨”或“别时谢礼”。传说是元代忽必烈南征大理过丽江时，由于受到纳西酋长麦良的欢迎，并协助征服邻近地区，所以在临别时赠以部分乐队和乐章，作为纪念，流传至今。又一说是某代木天王想吞并西蕃人住地，设计以女嫁西蕃王子，又先后害死王子夫妇二人，故有“一封书”、“公主哭”等乐章记述其事。各乐章既有内在联系，又可以独立演奏，主题悲壮激烈，哀伤动人。其中有的乐章被专门选作办丧事时演奏，成为一种风俗音乐。

●景颇族

景颇族人口为119,209人(1990年统计),主要聚居于云南省德宏傣族景颇族自治州,少数居住在怒江傈僳族自治州的片马、古浪、岗房以及耿马、澜沧等县。

景颇族自称“景颇”、“载瓦”、“喇期”、“蒗莪”等。解放后,根据本民族人民的意愿,统称为景颇族。

景颇族有自己的语言文字。景颇语属汉藏语系藏缅语族景颇语支。解放前,使用拉丁字母形式的文字。解放后,在原有基础上进行了改革。

景颇族主要信奉万物有灵的原始多神教,与傣族毗邻的景颇人信仰小乘佛教。

跳新房

跳新房，景颇语叫“整戈”，即庆祝新屋落成的意思 。过去，景颇族的住宅基本上是干栏式的草顶竹楼，每隔三年左右就要更新草顶，房屋的支架 10 至 20 年也要换一次，一些人丁兴旺的人家，长子、次子婚后都要建新居另立家庭。因此，每个村社每年约有三分之一的人家要新建或整修房屋。

景颇族盖新房，平时由主人及少数亲友帮助备料和搭好屋架，准备就绪后，选定某一天，请全村社成员来盖顶及圈栏竹壁等。房屋主要工程完成，家庭长者从屋外引进火种，其他家庭成员背起日用生活必需品跟随进新居。这时，铜炮枪齐鸣、象脚鼓铿锣合奏，祝贺主人新居落成。老人点燃火塘，从此，火塘内的火就终年不灭。接着“董萨”（宗教师）举行宗教仪式，祈求主人家业兴旺等。如今，多由歌手来唱“贺新房”歌。

主人进入新居后，要热情地向同村社来帮助建房的人和来祝贺的客人进上一筒水酒和一撮草烟，答谢乡亲们的帮忙，然后以丰盛的饭菜招待亲友。夜间，全村男女老少在敲铿锣、击象脚鼓者的带领下，在新竹楼里边舞边歌。歌手们以固定的“木占”曲调带领大家唱“盖新房歌”。歌的开头是描绘盖新房的愉快欢乐场景，然后追述他们的先民是怎样学会建住宅的。说远古时，景颇

人没有房子住，人们白天进森林打猎，夜晚在露天燃起篝火取暖过夜，天长日久，祖先们从小鸟筑巢，虎豹住洞穴，水牛四足支撑，肋骨鼓起牛皮不会塌下等受到启示，于是用木料做支架，用竹篾捆扎，用草盖在竹椽上，又用竹片编笆围墙，为子孙后代创造了温暖、舒适的住屋。

歌手们歌颂祖先善于从周围事物中获取知识、发明创造的功绩，唱完一遍又一遍，一直到天明，因此跳新房的歌舞总是通宵达旦。

婚姻形式

过去，景颇族缔结婚姻的形式较多，有“迷奔”、“迷确”、“迷董”、“迷考”等。“迷奔”，景颇语，意为“好好送来的妻子”。男方父母为儿子选中对象后，先请董萨打卦，认定可以缔结姻缘时，便聘请一位“勒脚”（媒人）去向女家提亲，议定聘礼和婚期等，届时由“长桶”（在女方村寨聘请的媒人）、新娘的舅父及家族诸亲友把新娘送到男家。这是一种按一定仪礼达成的婚姻形式，多属富裕人家采用。

“迷确”，意为“拉来的妻子”。多数是男女双方相爱，由男方请“勒脚”向女方父母求婚，并在聘礼、结婚日期等方面达成协议，在举行婚礼前由“长桶”把姑娘引出，一群小伙子把她拉到新郎家。还有一种方法是，男方选中某家姑娘，并请董萨打卦确认相合，便放出话说某家的儿子要拉某家姑娘做媳妇。女方听到这些话后如果强烈反对则作罢，若没有反应则认为是默许，于是便选定日期，由“长桶”将姑娘引出，一群小伙子把她拉到媒人家隐藏起来，然后去和女方家长议婚，达成协议后，第二天即可举行婚礼。人们认为采用这种形式结婚，可祛除附于新娘身上的

鬼，可以子孙昌盛，而且节省费用。因此，家庭困难者多采用这种方式。

“迷董”，意为“要妻子”。男方欲娶某女，但因年幼，尚不能结婚，为了防止被别人娶去，在征得女方家长同意时，先向女家送一份定礼，一般是一头牛，实际上是订婚。办了这样手续后，别人不能再抢她或拉她去做妻子，否则要加倍赔偿定礼，处理不当还会引起纠纷。

“迷考”，意为“偷来的妻子”，男方欲娶某一女子为妻，请媒人求婚时被拒绝，姑娘家甚至将女儿隐藏起来。如果男子一心要娶这个姑娘，便在女方村社内请一“长桶”，设法找到姑娘，并将其偷偷领出藏起，然后去和女方父母议定聘礼、结婚日期等。这是一种不达目的决不罢休的婚姻形式。

如今，上述几种婚姻形式已不多见。

送魂仪式

景颇族不论男女老少死后，家人都要请董萨举行送魂仪式。由于死者的社会地位、年龄及死因等不同，送往的地方、所用祭品也有区别。

凡属正常死亡者，家人在埋葬死者后，还要举行一次送魂仪式。一般说来对德高望重的高寿老人辞世，家庭条件好的，要杀一头牛或一头猪，请董萨念送魂经：“你在世时教我们种谷点豆，教我们捻线织筒帕，你的名字像金子一样发光，子孙万代都会记住你，你没做完的事我们接着做。现在把你送回阿公阿祖在的地方，你要什么，给你什么，给你的东西你带去吧！”念完后，董萨要带上死者的几件遗物，象征性地沿着死者祖先迁徙路线，送出一两天或三五天路程，把死者遗物放下，然后请死者的祖先来把

新亡人的魂领去，董萨即返回。据调查，历史上景颇族对一些德高望重者的亡魂，要送出半月一月路程，越到后来送的路程越短。过去，给家里拥有奴隶的部落酋长（俗称山官）送魂，家人会指定一两个奴隶背上酋长遗物跟随董萨送魂。到目的地后，奴隶放下主人的遗物，然后董萨叫着死者祖先名，请他们来把新亡酋长的魂领去，并念着奴隶的名字说："生前是你的奴隶，现在你死了，回老家了，他们应当去侍奉你，把他们的魂带走吧！"然后让奴隶自寻出路，董萨沿原路返回。为奴隶主送过魂的奴隶，在景颇人的观念中是属于没有灵魂的人，社会地位特别低。

属于非正常死亡，如遭刀伤、枪杀、淹死等，景颇族称为"麦死"（亦称杀瓦）。这类人的魂不能送往祖先发祥地，只能送往阴森的山箐里作孤魂野鬼。董萨也不在死者家中念经，要到非常僻静的灌木丛林中，杀犬作祭品，在有刺灌木编织的篱笆下念经，先念刀枪死鬼的来历，然后告诉死者灵魂，跟着你的父母去吧！带上这条狗（男性用母狗，女性用公狗）去做你的妻子（或丈夫）成家吧！你不必再气恼，不要再向往人间，安安心心的去吧！说完便杀狗，用狗血拌饭，并用树叶包成九包，董萨再祈祷，要死者的魂远远离去，不能再到人间，并用竹叶、"什叶"枝、"梓敬刺"枝各一把蘸水洒向所有参加送魂的人，以示驱除一切不洁净的鬼。

妇女在妊娠期或生育时死亡，景颇语称"思单"，死者尸体火化时，奠一只鸡让她们安安心心地到"夜莫"鬼住的地方。子女多的死者，家人可杀牛为她祭献，请董萨破格地把魂送回已故祖先在的地方。

婴幼儿死亡，将他们的魂送往果树下，董萨要说：你已经死了，就像树上的果子落地了，不要哭，不必悲伤，送你到这里，以后你会重新开花，重新结果的。

如今，多数地区送魂习俗已淡化了，但在一些边远地区还能看到这类习俗。

丧葬舞

丧葬舞，景颇语为“戈本戈”，即为死者跳舞。因跳这种舞所用的伴奏乐器是两个发音不同的铿锣，铿锣发出“咚叮、咚叮”之声，人们又称之为跳“咚叮”。

村社里如有成年人正常死亡，到天黑后，本村社和附近村社的青年男女都要到死者家中跳“戈本戈”。人群在崩拉、崩塔（领舞者）带领下敲起声音雄浑、洪亮、深沉的两个大铿锣，翩翩起舞。领舞者手持一片削好的竹篾不停地摆动，人们踩着铿锣的节奏来回地跳。这种丧葬舞，共有60余个动作，共分为两套：第一套是象征纪念死者生前克服重重困难种植饭豆的过程。如准备下地用的东西、出发、下山、过河、上山、穿树林越过山岭等，接着是磨刀、砍倒灌木和杂草、烧地、犁地、种豆、薅草、插豆藤桩、打猴子、收获等。另一套动作是种棉花、薅棉地、摘棉花、轧棉花、捻线、织布、染色、织“筒帕”（挂包）等。

从这两套舞蹈内容看，一套是纪念男性死者的，一套是纪念女性死者的。到了近代，景颇族中不论死者是男是女都是两套一齐跳。两套舞的每一节的动作、反复次数都有规定，跳完一遍又一遍，往往要通宵达旦。若死者是高寿和有声望者，一般要连续三个晚上，其间家属们要给参加跳舞的人传几次水酒，家庭情况好的要煮夜宵招待跳舞者。人们边舞边唱“本阳阳”，追述死者功绩。目前景颇族老人辞世仍多采用“戈本戈”方式，但跳的时间及舞蹈过程则大大简化了。

春　菜

春菜又称竹筒菜，多用竹筒和春棒春制而成。景颇族地区，气候温暖，雨量充足，森林茂密，许多野生植物常年生长，为景颇人民提供了丰富的蔬菜、果品资源。

景颇人食用的蔬菜，除部分来源于自己种植的园地外，大部分靠采集野菜。有些地区除七八两月靠园地外，其他十个月多靠采集。他们常采集的野菜有四五十种，吃法通常是煮、焖、炒或凉拌等，其中最具有民族特色和风味的要算是春菜了。每天，妇女们下地劳动时，都要顺便在路边、地边采集一些野菜回家，她们把采集到的野菜洗净，有的稍加炮制，加上豆豉、生姜、辣椒、盐，在竹筒或杵臼内春细即成。若有牛干巴、麂子干巴，切一块用火烤脆后放入，味道就更美了。景颇男童外出，手不离竹弹弓，青壮年外出随身带上长刀、铜炮枪，当他们猎到小的鸟类时，便将其剥洗干净，在火炭上烤熟，加入准备好的春菜一起吃。

景颇人制作的春菜，除一些必不可少的配料，如豆豉、姜、辣椒、盐之外，其他则用所采集到的野生调料配制，味道鲜美独特，景颇人常常用它招待客人。

水酒敬客

景颇族的水酒，以大米、小红米、高粱等作原料，用四种野生植物晒干春细制成的酒曲发酵而成，即人们通常叫的甜酒。饮用时兑上冷开水或清凉泉水，酒精度一般在15度—20度左右，因此人们又赠它一个时髦的雅号叫“景颇啤酒”。

“酒能把两座山粘在一起，朋友的心也是用酒连接的。”这句

谚语，充分反映出酒在景颇人心目中的地位与作用。到了景颇山，不论到什么人家，他们都会热情地端出清香的水酒招待客人。在庆祝新房落成、结婚和送葬这些红白喜事中，更是离不开水酒。家中有老人辞世，在当天和第二三天夜里，附近村社及本村的青年男女要到死者家中跳“布滚戈”舞，褒扬死者在世时的功绩。主人家每晚要向歌舞者敬几次水酒。准备盖新房或结婚的人家，在他们办事前都要酿制数量可观的甜酒，近亲、女婿来祝贺时，几筒水酒是少不了的。主人家用这些水酒，一次又一次地敬奉客人，表示自己的一片敬意。景颇族每当把新娘迎接到“勒脚”（媒人）家休息时，两位“棒鲁”（招待人）要给新娘及陪伴者送四次酒。送酒人不必言语，但所有的人都能心领神会晓得每道酒的含义。第一道是：你们来了，欢迎！欢迎！快请坐下；第二道表示婚宴即将开始；第三道是请尝尝新郎家的饭菜；当第四道水酒送到时，新娘和陪伴的客人们便动身去新郎家。新娘进门时，“棒鲁”又斟给两杯酒，第一杯表示我们在此欢迎你们到来，第二杯表示新娘从此是这里的主人，以后敬客的酒就由新娘去斟了。

除了水酒，景颇族不论男女也很喜欢喝白酒。当他们有机会赶街、进城，妇女的背箩里，男子的筒帕（挂包）里，一定要把酒筒装进去，买一筒酒回去。过去路遇亲朋好友，多拿出草烟、芦子请对方嚼，而今则是取出酒筒倒一杯请对方喝，酒成了一种见面礼。

猎物分配

景颇山区，气候温和，雨量充沛，森林茂密，飞禽走兽资源丰富。景颇族曾长期以捕猎禽兽为生，他们的猎物分配采取见者有份的方式，很有特色。

每当十二月至第二年的五月，是狩猎旺季。景颇族男子常三五成群相约去狩猎，有时则是二三十人去围猎。集体围猎，主要是选定山坳，推选枪法好的人去山脚守口子，其他人则分为两部分，从左右山梁往箐子里抛石头、吼叫，以驱赶野兽，有的带上猎犬从箐头往下赶，让守口子的射击手猎取。

猎到野兽后，围猎者把它抬到附近有泉水的平地上，采摘些树叶垫在地上，先剥皮，然后由有分配经验的人把兽头和兽皮分给猎中者，过去，还要留下一条后腿给部落酋长，景颇语称“宁贯”（贡纳）。剩下的按参加围猎人数，一人一份分配（包括猎中者）。假如正在分配时，有人来到现场，也同样要给他一份，景颇人称为见者有份。

如果是一个人猎到了野兽，先用树枝将猎物盖好，然后找村里的人共同抬回去，并给邻居们分一份，让大家共同品尝。这种分配法是原始共产主义的残余，也有宗教因素。景颇族认为，独自把猎到的野兽吃掉，以后就再也猎不到野兽了，因此，见者有份的分配习俗长期保存下来。

传递信息的方式

景颇人在获取或传递信息时，除直接运用语言和歌谣外，还用实物作为信息“符号”。他们从某些植物的发芽、开花、落花，某些鸟的鸣叫或星宿运行的方位传递备耕、播种、停止播种的信息。还有一些约定俗成的信息传递方式，如邻里、亲友听到某家门前对空鸣的枪声，就知道是某家有人去世了，而且从枪声中识别出是男性或女性（男的枪声为双数，女的为单数），不用等人送消息，就会主动去帮助料理丧事。

景颇人有一种“植物书信”，是用植物传递信息的．或以植物

名称的谐音，或以某种实物的特征、属性表示某种意思。如男青年向姑娘求爱时，他可以托人捎给姑娘一封“实物信”，信封是不易破损的一片大叶子，里面包有烟丝、槟榔或沙桔、芦子、树根等。树根表示想念，正面相合的两片树叶，表示对姑娘一心一意，希望心贴心地一起生活。如果姑娘捎回给小伙子的“信”里有草烟、槟榔之类就表示愿意发展关系，若包有大蒜则表示要考虑考虑，如果里面有两片相背的叶子或木炭之类，则表示不合心意，各自另找对象。有火药、荆刺之类表示父母反对等。包扎“实物信”所用的线也颇为讲究，必须是两根红、白线并用，红线代表“良心好”，白线代表“洁白无瑕”。

对于住地相隔遥远的亲友，景颇人也利用家乡人往来机会，以“实物信”方式给亲友通报情况与传递问候信息。有人从遥远的国外托人捎给在国内的亲友一件包有草烟、芦子、米、树根、大蒜、谷子的实物信，那意思是：首先用景颇族的礼节向亲友表示问候，同时说明他在那里没有家产，生活困难，常常思念亲友们过着幸福的日子，但见不到亲友，心里难过。

直到解放，景颇族还使用“实物信”传递请亲友、盟友参战和向敌方宣战的信息。

这种原始的信息传播手段，在景颇族（主要是载瓦、琅峨、勒期支系）五六十岁的人中，曾普遍使用过，内容也很丰富；而解放后成长起来的年轻人，他们多数上过学，有文化，已用文字传递信息了，原始的信息传递手段很少再有人使用。

原始布告

景颇族社会在经历了漫长的公有共耕、平均分配之后，逐步过渡到村社土地、森林、草场公有，私人可以在或短或长的时间

内占有使用，而在用后所有权仍属村社公有，其他村社成员要使用时亦可占有使用。

在实现公有私用、体现同一村社社员间的平等权利时，又主要是通过“号”的办法。当某一社员选中某一块山地，需要用来种植农作物时，他要先从地里包一点土回家放在枕下，如在三日之内做了吉梦或不做梦，认为可以开垦，如做恶梦，必须放弃重选。通过神选认可的土地，社员必须及时在地边砍去部分草，或砍去一些小灌木尖，并在小树干的顶部破口，横夹些草或树枝，形如基督的十字架。这种标志，有如今日的公告，它向其他村社成员宣告，这块地已被人占有使用了，而其他人见到这些标志，心里亦明白，就不再考虑选这块地了，只有当原选用的社员用后抛荒，或选后三年还未使用时，习惯认为是原“号”者的权利自行失效后才能去选用。其他如选中某一棵树，或在野外森林中发现一群蜂而自己以后要来采集者，都要建立标志，告之他人。在景颇族中也出现一次公告长期有效的事，主要是在可开垦水田的地上，由于水田可以长期占有使用，所以社员“号”定的土地，也属长期有效，父辈无力开垦，子女亦有权继承和开垦。

50 年代中期，土地的选择使用当时全由合作社决定，代替了社员个人“号”地的程序，在贯彻家庭联产承包责任制后，对轮歇地的使用上仍保留着古老的“号”地和立原始公告标志的遗风。

拉事与讲事

景颇语称“拉事”为“鄂吉”，载瓦话叫“纳吉”，意为武装拉牛，是景颇族过去各部落（即山官辖区）或村社之间，因人命、杀伤、盗劫、婚姻、债务、土地等纠纷不能合理解决，特别在一些较大的事件中，当事者一方因不愿承担应承担的责任，甚至置

之不理，另一方比较气愤，不甘受侮辱，而借助部落、村社的力量去谋求解决问题的一种形式。

部落或村社成员要进行拉事，首先要找拉事头“拾热”（又称“找布”），拾热即去说服、鼓动部落酋长（俗称山官）。近代，常有不事生产的拉事头，借机扩大矛盾，挑起事端，从中牟利。因此他们在取得酋长的支持、认可后，便以保护部落或村社成员利益、为本部落争气等为由去进行组织发动，制造舆论，把青壮年组织起来；如果涉及全部落或全村社大事，则由部落首领和村社头人出面组织、号召。准备妥当后，经董萨打卦确定时间，先派出部分人员，携带武器（19 世纪末用的是刀、矛和野猪皮做的盾牌，20 世纪初用火线枪、长刀，抗日战争后又增添了步枪），由拉事头率领出其不意地到对方部落或村社拉几头牛，不论牛的主人是否为仇家，只要是该部落或村社成员的都行。牛拉到村寨外，砍下一条牛尾插在路上，并鸣枪示威。对方知道发生情况，便出来探明原因，当看到路上的牛尾巴时，就知道是拉事，一般不去追赶。主方把牛拉回到本部落，先宰杀一头庆祝、祭鬼，然后分食。如因泄密，对方有准备，去拉牛的一方受伏击，造成损失，拉事的主方就达不到目的。

发生拉事后，如被拉一方不希望事态扩大，即派人与对方联系和解（景颇语称“戛准埃”，当地汉族称为“讲事”）。选定日期后由双方部落酋长、“苏温”（村社头人）、有威望的家族长老，有的还邀请其他部落酋长，来共同协商解决。如果谈判成功，双方便偃旗息鼓，从火塘里取出一根正在燃烧的柴头，由部落酋长或董萨用竹筒水将火浇灭，表示这一事件已解决。理亏一方按协议向另一方进行赔偿。主方退还所拉之牛。如果谈判破裂，双方就会反复拉事，甚至进行武装械斗。在此情况下，双方为防止对方的突然袭击，时时处于戒备状态，到田地间劳动生产也要携带武

器，派人放哨。有的为防止遭袭击，被迫放弃与对方接壤的良田和牧场。

解放后各县党政部门和上级派往景颇族地区的民族工作队，十分重视这个问题，花了大量的精力帮助调解相互间的纠纷，使他们充分认识到拉事给民族部落和群众造成的危害。一些长期对立的部落终于抛弃前仇，共饮团结酒，决心在共产党领导下永远团结在一起，建设美好的社会主义家园。现在不论是本民族内部或民族间发生纠纷，都由干部及调解员、县政府的职能部门调解，都不用过去的拉事方式了。

祭“能尚”

祭“能尚”，当地汉语称祭“官庙”。“能尚”是一间建立于村寨外的很简陋的木架草顶房，四周无围栏，里面插着一排排象征天、地、太阳、风、雷、虹等自然鬼和部分英雄人物的鬼魂标记。董萨认为，其中的一些鬼魂给人以衣食和幸福，人们要感激它；另一部分鬼魂有一种事实上的破坏力，会给人们带来灾难，人们祈求它，为的是消灾免难；还有一部分是酋长家特有的、为保护部落和村社建立了功绩的人的魂。

过去，景颇族在下种和秋收前都要祭能尚。集体选地砍地的部落或村社，一年要祭三次，即开地、播种、秋收前举行。每年春耕到来之前，“纳破”（专管农业祭者）和“恩道”（负责公共事务的长者）就要安排人力整修官庙，请董萨重新制作绘有小米、高粱、谷穗、犁、耙、小鱼、牛、螃蟹、瓜、辣子等象征农业、畜牧业丰收的木牌两块，竖于官庙前，然后请董萨打卦择定吉日进行祭祀。届时，各户主都要到祭祀地点，董萨摆出干鱼、鸡蛋等祭品，向地鬼天鬼风雷诸鬼祈祷：“度过旧年，换了新年，过了春

节，砍了柴，织花裙，盖新房，人已经累了，但是肚子告诉我们，不种粮食是不行的，身体告诉我们，不种棉做衣服也是不行的。小伙子听见布谷鸟叫了，小姑娘听见田鸡叫了，凹子里的青蛙在叫，看着河里是石头，看着河头是云雾，下种的时间到了，人们着急了，我们要到这里砍地（或下种），请土地鬼不要怪罪于我们，并保护全寨砍地（或下种）顺利，人不要被树打伤，庄稼出苗整齐，长得肥壮，不受灾害，粮食成熟时不要让野兽和雀鸟来吃，要让它全数归主人所有”等。秋收前的一次祭祀，主要是庆丰收，感谢地鬼、自然鬼的庇佑，才使粮食丰收，希望明年再多给一些。

头两次祭祀，祭品比较简单，多用干鱼、鸡蛋之类，最后一次祭祀，要用猪、牛、鸡、干鱼等，但每一次具体用什么，全由董萨打卦决定。凡杀牛、猪祭祀的，各户再出一只鸡，祭毕后会餐。如今只在一些偏远地区的部分农户中，还有这种祭祀仪式，但不再进行集体祭献了。

叫谷魂

景颇族信仰万物有灵的原始宗教，有“叫谷魂”的习俗，基诺族也有类似的“叫谷魂”习俗。他们认为谷子也是有灵魂的，打谷子会把谷魂吓跑；如果运谷子回家时不喊谷魂回来，这年的谷子就很容易被吃完。如果谷子在地里被牛吃或被盗窃，也要叫谷魂。叫谷魂时，要在地边打谷场上铺一块用各色毛线织成、并织着鬼花（这种花纹专供祭鬼用，严禁在服装及装饰品上绘制）的祭祀毯，上边放两包糯米饭，每包饭旁还要放两个熟鸡蛋和一个里边装有糯米粉并在火上烤熟了的竹筒。

一切齐备，董萨或主人就大声喊：山坡上、凹子里，栽种的各种粮食作物，所有栽种着的庄稼啊！所有的谷子、豆子、小米、

芋头……你们到哪里去了？快转回来到××家，去把他家谷仓、囤箩装满。凹子里、山坡上的庄稼啊！树脚、水边的庄稼啊！请你们都快到××家，走吧！走吧！在路上不要耽搁，不要停留，不要拐弯，不要在桥上停留，不要走错路，紧紧跟着主人家背着的谷子走吧！

当谷子运抵家门时，又说：路上有鬼桩你不用怕，那是我们献鬼用的，鸡叫、狗咬你不用怕，那是我家养的，什么你也不用怕，好好地在背箩里吧！谷子背进门后，算是把谷魂叫到家了。现在只在一些偏远地区的景颇族仍有叫谷魂的。

目脑纵歌

景颇语称“目脑”，载瓦、浪哦、勒期等支系叫“纵歌”，统称为“目脑纵歌”。这是景颇族历史悠久的大型歌舞盛会，于每年农历的正月十五、十六举行。

相传，在远古时代，只有太阳的子女才会跳目脑纵歌。有一次太阳王派使者到地上邀请万物参加目脑纵歌，地上派百鸟前往。盛会结束，百鸟告别太阳王返回到茫茫的原始森林，在一棵结满了果子的大树上憩息时，公推孔雀为“脑双”（领舞），带领百鸟学着太阳宫里举行盛会的样子，边吃边跳，十分欢乐。景颇族的祖先、神通广大的英雄宁官娃，听到雀鸟举行目脑纵歌的消息，赶去观看，顿时被百鸟热烈优美的歌舞所陶醉，决心把它移植人间。他在祖先发祥地的雌雄山麓，指划出平坦宽阔的“祥信央坝”（歌舞场地），并邀请了数百里山乡的居民参加，人们穿着节日盛装，尽情歌舞，祝福人们吉祥如意。从此景颇族便有了目脑纵歌。

随着历史的发展，景颇族社会内部分化为世袭贵族、百姓（自由民）和奴隶三个等级。世袭部落酋长（俗称山官）出于自己

特权利益，把本来是同欢乐、庆丰收的目脑纵歌，变成祭祀部落酋长时的活动，并增添了许多宗教神秘色彩。

而今，景颇人民当家作主，恢复了它驱恶扬善、预祝吉祥幸福、欢庆胜利的宗旨。景颇人民把目脑纵歌变为促进民族进步，沟通民族感情，增强民族团结的尽情欢乐的歌舞盛会。

打“汤碟”

打“汤碟”，意为打靶，主要在节日期间和人比较集中的场合进行。

农历大年初一，村寨中的青年们在家吃过团圆饭后，便集中去向村社里的长老们拜年，随后就去参加打汤碟活动。参加活动的年轻姑娘们，用彩布做几个约15厘米见方的包，包内装有食品或姑娘们做的纪念品，这是给胜利者的礼品。打汤碟时，用一根长长的线或竹篾将包悬持于一株高10多米的大龙竹尖上，先请村里有威望的长老来主持仪式。当主持人在欢乐的象脚鼓和铿锣声中宣布射击开始时，小伙子们便将铜炮枪瞄准挂包的线射击，谁击中掉下的包就归谁所有。这种打靶活动在景颇族中已有悠久的历史，不过在使用铜炮枪之前是用箭射击的。打汤碟需要有过硬本领，在一定距离之内要射断一根细而结实的线或竹篾，不是轻易的事，因此一个靶常招引来成百上千的枪声。有的人家在结婚办喜事，或为老人送葬时，为了增添气氛，也用芭蕉叶包上1公斤多牛肉悬挂于细细的竹梢上，供村里的和外来宾客射击。一块牛肉值不了多少钱，但景颇族男子都乐意争先恐后地去射击，目的是显示自己的枪法。当有人射中，获得奖品时，其他的人会以赞赏的语言向他祝贺或投以羡慕的目光，到冬春季节围猎时，大伙会优先推选他当射手，他还可以获得年轻姑娘的爱慕之情。

●柯尔克孜族

柯尔克孜族人口为141,549人(1990年统计),主要分布于新疆克孜勒苏柯尔克孜族自治州，少数散居在新疆各县，另有数百人居住在黑龙江省富裕县。

柯尔克孜族先民，史称“鬲昆”、“坚昆”、“纥骨”、“契骨”、“黠戛斯”、“辖戛斯”、“乞尔吉思”、“布鲁特”等。解放后，统称为柯尔克孜族。

柯尔克孜族有自己的语言文字。柯尔克孜语属阿尔泰语系突厥语族；文字是以阿拉伯字母为基础的拼音文字。

柯尔克孜族主要信仰伊斯兰教。

“阿克卡勒帕克”帽

“阿克卡勒帕克”是柯尔克孜语，意为白毡帽，是柯尔克孜族男子春夏秋三季经常戴的一种帽子。

柯尔克孜族非常注意礼貌，外出时总要戴上帽子。他们把头上戴的白毡帽视为最心爱的物品，常常把它作为赠送客人的贵重礼物。如今，白毡帽已成了代表柯尔克孜族的一种标志。无论是参加会议还是外出参观，柯尔克孜族的代表都要戴上自己的白毡帽，明显地表现出了民族特点。

白毡帽形状为下圆顶略平，很像古代勇士的头盔。它是用雪白的细毡剪成上尖下宽的四个瓣儿，再缝制而成的。在白毡帽的底部，从里面又镶以黑绒宽边。把黑绒翻卷过来，便成了黑绒帽沿的白毡帽了。有的青年牧民喜欢在白毡帽顶上系上带有珠子的缨子，戴上这种白毡帽，使青年牧民显得更加英俊。因地区的不同，帽子有帽沿开口与不开口的两种。

过去，白毡帽只是家庭制作的手工艺品，制作白毡帽也是妇女们家务劳动中的一项。现在随着商品经济的发展，在不少柯尔克孜族地区已建立了生产白毡帽的作坊，并大批投入生产，市场上销售的白毡帽赢得了各族人民的喜爱。

“什尔达克”花毡

“什尔达克”是柯尔克孜语，它是柯尔克孜族家家户户铺炕、铺地用的一种精制的贵重花毡。

花毡有大有小，一般多为2.5米长1.5米宽，分成两层，底层是棕色毡子，上面再缝上剪成鹰、羚羊角、小山等形状的彩毡

和花边，构成一幅五彩缤纷的图案，鲜艳夺目，非常美丽。制作花毡，最难的工艺是把染成各种颜色的毡子剪成各种图形，并把这些各种形状的毡片用毛线缝制到棕色的底层毡子上。柯尔克孜族妇女个个心灵手巧。她们每当冬闲时，往往几个人聚在一起，边唱歌，边制作花毡。有的灵巧地剪图形，有的往底毡上缝，大家分工合作，相互配合，不几天就把一条精制、美丽的花毡做成了。通过柯尔克孜族妇女制作花毡，也可以看到这个民族勤劳、和睦、喜爱协作的美德。

由于花毡是精心制作的，柯尔克孜族人常把它当作馈赠尊贵客人的礼物。他们常常喜欢把花毡赠送给政府派去慰问他们的访问团当作纪念品，或献给博物馆当作陈列品供人们参观。在新疆历史博物馆和中央民族大学民族博物馆中，都陈列着柯尔克孜族的花毡。

包糟酒

柯尔克孜族酿酒的历史非常悠久，早在唐代的汉文史料中就有记载。“包糟”酒就是广为柯尔克孜族人民所喜爱的一种健身饮料。

包糟酒是用小麦、糜子、包谷、燕麦、青稞等纯粮食作物酿制而成的一种粥状、略带酸辣味的饮料，酒度不高，约为10度。

一年四季，不论春夏秋冬，柯尔克孜族人民都很喜欢喝包糟酒。包糟酒也是招待客人的常见饮料。喝了它，能舒筋活血，消食顺气，祛寒生津，有健身作用。柯尔克孜族人民，不论男女老少，都是满面红润的，这很可能是与经常喝包糟酒有关。包糟酒还可当粥喝，也可充饥。

包糟酒的做法是，先把小麦浸泡使之发芽，再将它磨成麦芽

粉。用一成的麦芽粉兑上四成的青稞面或包谷面等，再倒进温水搅拌，并加进适量的发酵剂，盖上棉被促其发酵。待闻到酒味时，把发了酵的稀状面粥倒入一块大的棉纱布上，加水使之过滤，把滤出的汁液放进大铁锅里用文火慢慢煮沸，再取出凉一会儿，便制成了包糟酒。

随着商品经济的发展，在一些城镇里早就出现了专门经营包糟酒的小作坊。这里，经常有人来喝包糟酒，还有人为喝包糟酒的人们弹奏“考姆孜”（三弦琴），使喝酒的人既得到休息，又欣赏了柯尔克孜族独有的民间乐曲，达到了娱乐的目的。这些地方很像内地的茶馆。

“阿依勒”的变迁

“阿依勒”为柯尔克孜语，原为在柯尔克孜族中有血缘关系的几户人家组成的部落基层组织。他们在草原上居住在一起，几户人家的白毡房共同组成了一个小小的临时村落。随着季节气候的变化，他们再迁移到另一个地方，大家仍居住在一起。后来，随着社会的发展，阿依勒里也有了来自不同部落的人家，同一个阿依勒就不再是完全以血缘为基础的部落基层组织了，而是逐渐成了结合着地缘关系的居民点了，习惯上汉译成“牧村”。

历史上，一个阿依勒里的牧民往往在生产、生活上互相帮助，被称作“氏族互助”。这种互助对生产力水平较低的边远牧区，在过去曾起过有利于发展生产的作用。但是，阿依勒里的牧主却往往以氏族互助的名义，让贫苦的牧民无偿地或低报酬地为其劳动，实际上是对贫苦牧民进行剥削。随着部落组织的逐渐解体，部落、氏族观念的淡化，特别是解放后社会的巨大变化，阿依勒里的成员之间的关系也发生了不小的变化，又加上在牧区大都实现了定

居放牧，一个阿依勒里的人家也增多了。这样，阿依勒也逐渐变成牧区里相当于村一级的行政单位了。

但是，迄今为止，从一些阿依勒的名字，还能看出历史的遗迹。不少阿依勒的名字仍是用部落、氏族或过去的“阿依勒”长的名字命名的，当然，也有不少是以地名为名的。

叼羊传说来自叼狼

叼羊是柯尔克孜族人民最喜爱的一种体育活动。关于叼羊，民间流传着这样一个传说：

在遥远的古代，柯尔克孜族人民过着逐水草而居的游牧生活。牧民们白天放羊，夜晚把羊群圈在毡房旁，并派人唱着《守羊圈歌》守夜，生怕有狼窜来把羊吃掉。那时，草原上狼很多，就是有专人守夜，有时仍不免有狼窜来把羊吃掉。牧民的财产主要是牲畜，所以他们把吃羊的狼视作最凶狠的敌人。牧民们为了保护牲畜，便想出许多办法来打狼。当牧民打到一只狼后，为了庆祝胜利，便召集附近的小伙子们骑马跑来做一种叼狼的游戏。游戏开始了，一个骑着马的小伙子把打死的狼压在自己的大腿下奔跑。人们追上后，你抢我拽，把狼撕个稀烂，以表达牧民对狼的痛恨。后来，随着习俗的演变，人们用羊代替了狼，每逢喜庆佳节，小伙子们便举行叼羊的游戏，并把参加的人分为两队进行比赛，久而久之，变成了牧民喜爱的一种体育活动。

草原上举行婚礼时，新郎一方的一群小伙子带着刚宰过的一只羊，朝着新娘的牧村，纵马飞奔而来。新娘一方的一群小伙子跨马迎战，不让对方把羊带进自己的牧村。但新郎方面的小伙子们也不示弱，他们或者内部互相传递，不让对方抢去，或者绕开前来阻拦去路的对方马队，伺机冲进对方的牧村。经过多次抢夺、

阻挡，最后还是被新郎一方的小伙子们把羊扔到了新娘的家门前。这时，双方骑手下马欢呼，祝贺婚礼。由新娘家的主人分赠礼物以示答谢。

近些年来，我国举行的少数民族运动会中，都有叼羊比赛的项目，并且新制定了比赛规则。规定了时间和场地，在场地中心画有一个白色圆圈，双方骑手把羊扔进白色圆圈中即得分，视得分的多少决定胜负。这是叼羊运动的新发展。

“诺鲁孜”节

柯尔克孜族人民把每年阳历3月22日，即大约相当于汉族春分的这一天，作为新年来庆贺。这一天被称为诺鲁孜，该词原为波斯语，意为元旦。柯尔克孜族人民每年欢度的诺鲁孜节就是他们的新年。哈萨克族也过这一节日。

节日那天，家家户户都根据自己的经济情况尽量把饭菜做得丰盛些，有的人家还要宰羊。宰了羊，往往有一位老年妇女提着刚掏出来的羊肺往小孩们的头上拍打，以示祝福、去灾，还要用一根松树枝往四处摇晃，也是消灾免难的意思。这天傍晚，在家家房前用笈笈草和树枝燃 一堆火。当畜群归来时，人和畜都要从这堆火上跳跃过去，这是预祝新的一年里人畜两旺。在古代，还要在这时朝天鸣枪，也是为了消灾克难。人们围在火堆的四周，唱起诺鲁孜歌。

诺鲁孜节这一天，家家都要做一种叫作“阔确”的粥，这是用小麦、青稞等七种以上的粮食煮成的粘粥，相当于汉族人民的腊八粥。据说做这种粥喝，也是为祝愿一年五谷丰收。

柯尔克孜人民的这一传统节日一直保留到今天。离开家乡来到外地工作、学习的柯尔克孜族人同样每年欢度这个节日。

三弦琴“考姆孜”

“考姆孜”是流行于新疆柯尔克孜族地区的一种三弦弹拨乐器。关于这种乐器，流传着这样一个动人的故事：

相传在遥远的古代，柯尔克孜族中有一个名叫康马尔的汗王。他家有一个独生女，长得非常漂亮。康马尔汗王家里缺人干活，便招来了一个孤儿帮忙。这个小伙子不但长得英俊，而且心地善良。康马尔汗王的独生女天天与来她家干活的小伙子一起，逐渐产生了感情。她非常爱这个孤儿，并愿与他成亲。可是康马尔汗王不愿把独生女嫁给这个贫穷的孤儿，便严词驳回了女儿的要求。女儿看到汗王冷酷无情，便与小伙子偷偷地跑到了一个遥远的地方。那里，到处是深山老林，四周没有人家。小伙子便靠打猎为生，他俩过得美满幸福。时间久了，汗王的独生女，感到在深山老林里非常寂寞，常常伤心难过，一天，小伙子又出外打猎，忽然听到传来了阵阵悦耳的声音，他顺着声音找去，发现在两根树枝中间架着一根晒干的肠衣，风一吹来，那晒干的肠衣就发出动听的声音。小伙子心想，如能用一块木头挖制一下，再系上肠衣，用手指一弹，不也会发出动听的声音吗？为了解除汗王独生女内心的忧愁，他便制作了一把琴，天天弹给汗王女儿听，使汗王女儿又高兴了起来。汗王女儿赞美说：“这声音真美呀！”“美”在柯

尔克孜语中读作“考奥孜”，据说“考姆孜”就是由“考奥孜”演变来的。那位汗王的女儿后来因患重病去世了，小伙子心中非常悲恸，便弹出了《康马尔汗》这首曲子来怀念他的妻子。迄今为止，各地的柯尔克孜人民都把《康马尔汗》这支曲子作考姆孜琴的最古老的一支名曲。

考姆孜琴很像哈萨克族的冬布拉琴，但比冬布拉琴多一根弦。考姆孜琴身是木制的，琴箱多用杏木挖空，上盖薄薄的松木面板，琴马多用梨木，琴杆儿细长，琴身上部有一圆形音孔。用手弹拨丝弦，声音通过圆形音孔进入音箱，构成共鸣，乐声和谐动听。它能独奏，亦能合奏，并能伴奏，是柯尔克孜族人民非常喜爱的一种万能乐器，几乎能演奏各种乐曲。当远方的客人进入牧民们的毡房，主人常常演奏动听的考姆孜乐曲来表示欢迎。现在，草原上经常举办考姆孜演奏比赛，以丰富柯尔克孜人民的文化生活。我国著名的柯尔克孜族考姆孜演奏家玛木别特·托略米什还多次出国演出，在国际比赛中为祖国赢得了荣誉。

●土　族

土族人口为191,624人(1990年统计),主要聚居在青海省互助土族自治县及民和、大通、同仁、乐都、门源等县，少部分居住于甘肃省天祝藏族自治县和永登县。

各地土族曾有多种自称，青海互助、大通、甘肃天祝一带自称“蒙古尔”(蒙古人)、“察罕蒙古尔”(白蒙古)，青海民和地区的自称“土昆”(意为土人)，其他地区的自称“土户家”。解放后，根据本民族人民的意愿，统称为土族。

土族有自己的语言，土族语属阿尔泰语系蒙古语族，分互助和民和两种方言。1980年，创制了拉丁字母拼音文字方案。

土族主要信仰藏传佛教。

彩虹花袖衫

土族人的服饰，具有独特的结构和款式，其中青壮年妇女的服饰更是别具风格。一般头戴织锦镶边的“拉金锁”卷边的毡帽，身穿高领或翻领的斜襟长衫，长衫上面套着黑色、紫色或镶边的蓝色坎肩，其右襟上方镶着15厘米见方的绣花、盘线、挑线衣兜。腰勒4米长的彩带，彩带两头镶着绣花、盘线的花纹图案有“八瓣莲花”、“孔雀牡丹”、“秋菊斗霜”、“神仙馈子”、“富贵不断头”等。图案勾勒流畅，线条鲜明，栩栩如生，勒在腰间，全身生辉。下穿镶有白边的绯红百褶裙，裤子膝下部分镶着一节黑色或蓝色的裤筒，土语叫做“帖弯”。帖弯和裤子相接处，以3厘米宽的白布条相隔，使之泾渭分明，上下协调。脚穿拉线、绣花长腰鞋。

然而，最有特色的还要数花袖衫。花袖衫是青海省互助土族自治县土族妇女穿的一种非常独特的服装。因长衫的两袖套着红、黄、绿、紫、蓝五种彩布条或彩绸拼制成的套袖——花袖子而得名。土族人称之为“阿拉肖梢”。肖梢有两种：以红崖子沟为中心，包括五十地区、松多地区和乐都县的达拉乡等地的肖梢，袖口部分的布条约3厘米宽，依次加宽，到袖根部约6厘米宽；以东沟为中心，包括东山、丹麻及威远镇周围等地的肖梢，分夹缝和堂子两部分，夹缝较窄，堂子较宽。具体做法是，先在肩部以黄、紫、绿、蓝为序夹4条宽约6厘米的夹缝，然后拼一条宽约15厘米的红堂子，中间夹宽约5厘米的4条夹缝，再拼一条宽约12厘米的绿堂子，袖口再夹宽约3厘米的4条夹缝。这样有宽有窄，宽窄结合，非常别致。据说，它是依据彩虹的色彩调色拼制的。

依据土族人的习俗，在举行婚礼时，新娘必穿花袖衫，否则

神会不高兴，祖先不喜欢。平时新婚妇女亦必穿花袖衫，不穿不得见长辈。逢年过节或参加庙会时，妇女们也把最新、最美丽的花袖衫穿上。年过50或公婆已过世或已娶了儿媳妇，自己当了婆婆可不穿。

拉线果日玛腰鞋

拉线“果日玛”腰鞋，是土族青年妇女盛装的一部分。土族妇女穿多种绣花鞋：盘线云子鞋、拉线果日玛鞋、挂线棋花鞋、绣花嵌鞋等。其中拉线果日玛鞋最为华丽，最有名气。其做工精细，色彩艳丽，别致美观，富有土族特色。但制作也最费功夫，最费线。

拉线果日玛腰鞋制做方法：把单色丝线穿在绣针上，沿着鞋边缘，从外到里绣制。绣线向前缝一针，又返回原处再向前缝。这样左一针，右一针，循序向前。所拉线条好像三股线纺织一样。拉完第一行，再换丝线调色，拉第二行、第三行，以若干行色彩不同的线条，组成一个彩色图案。由于是依彩虹的色彩调色，所以看起来五彩缤纷，由浓到淡，由浅到深，既自然又和谐。

拉线果日玛鞋，有整“果日玛”和半“果日玛”两种。整果日玛的全部鞋面都拉上线条。鞋尖部位还绣上挂线棱形块状图案，不见底料布。半果日玛只拉边缘部分的一半，中间空一部分。

拉线果日玛鞋的腰长过膝盖，并用棉线绳子或毛线绳子牢牢地绑在腿上。穿上它走起路来大脚大步，非常干练。

扭　达

“扭达”是青海省互助土族对土族妇女头饰的统称。过去土族

妇女的头饰非常复杂，各地佩戴各不相同。仅互助土族的扭达就有："托欢扭达"，形似圆饼，也有人叫干粮头；"那仁扭达"，形似三支箭，有人亦叫三叉头；"加斯扭达"，形似铧尖，分大加斯和小加斯两种，有人分别又叫铧尖头、马鞍鞒；"适格扭达"，形似簸箕，也叫簸箕头；"哈雪扭达"，和适格扭达基本相似。在这些扭达中，托欢扭达的佩戴地区范围较小，仅红崖子沟地区土观等几个村庄佩戴，但其地位较高，在某种意义上可谓是贵族头饰。习惯相传，土观村的姑娘嫁到别处，仍戴自己村庄的扭达，但其他村庄的姑娘嫁到土观村，必须佩戴托欢扭达。适格扭达佩戴地区较广。

适格扭达是用当地一种柔软而有弹性的茜茇草做成内型，再用硬纸和粗布粘糊而成。其正面贴上专做扭达用的金银箔纸和数道折叠的五色彩布条，周围镶一圈约3厘米见方的云母片（土语叫"它那"），边沿吊着两层红黄小丝穗。扭达背面密插数百枚闪光的钢针，缀以铜制金色"藏日"，金银两色交辉相映，好似古代女将的头盔。

佩戴扭达还有几个附件。在佩戴前，将两块12厘米长、6厘米宽的长方形铜片（土语叫"那言"），用丝线连接在一起，卡在两鬓间。将一个用牛尾或长发做的半圆形"苏吉日格"固定在脑后。然后戴上扭达，扣上银制碗状的"向斗"，用一筷状银簪把向斗、扭达、发髻紧紧

地别在一起。背后挂一束红棉线绳子。戴着镶有红珊瑚、绿宝石的银制大耳环和长穗“上七下九”（即上七个穗，下九个穗）的银耳坠，用数串五色瓷珠子把耳环连在一起，珠串长长地吊在胸前，好像带着数串项链。颈部佩戴着镶有20多枚海螺圆片的“索尔项圈”。

加斯扭达大都以铜、银、铁等金属组成，形状又似箭状铧尖式，因此，有人考证说它是由古代女将的头盔演化而来，认为古代土族人不仅全民皆兵，而且男女都是全副武装的骑士。

土族妇女的头饰，过去与现在差别较大。现在大部分妇女梳两条长辫子，部分已婚妇女把头发绾在两鬓间，辫梢翻上系在头顶，戴织锦镶边的“拉金锁”毡帽（一般青年人以红色织金镶边，中年人以黄色织锦镶边）。未婚姑娘，则两鬓各梳一条小辫子，中间梳一条大辫子，然后把三条辫子合辫在后面，用绯红头绳扎在一起，系一枚海螺。一般盖红、绿色头巾，很少戴帽子。民和县三川地区的土族妇女，脑后绾起高高的发髻，上盖头巾，戴着镶有珊瑚、宝石的银制首饰，额前密吊小丝穗，戴着银制大耳环和有穗的耳坠。当地称这种头饰为“凤凰头”。大通县土族妇女戴“鹰嘴啄食”的毡帽，帽沿镶黑边，后方盘着金线“神仙馈子”，两条发辫各套镶有绣花、盘线图案的辫套。

阿拉普色

“阿拉普色”即绣花腰带。它是一条长约4米，宽约40厘米的绿布带子，两头镶着绣花、盘线图案。以所镶图案的多少，可分为三口、四口、五口普色，如三口普色每头各镶3个图案，五口普色每头各镶5个图案，共10个图案组成。

由于所镶图案品种不同，又分为盘线普色（其图案均以盘线

品组成)，绣花普色（其图案均以刺绣品组成)，综合普色（其图案以盘线、绣花、挂线等各种图案组成)。还有少数普色由纯挂线图案组成或盘线缀以刺绣组成。

所镶图案名称也有所规定，如盘线图案多以“神仙馈子”、“富贵不断头”、“八瓣莲花”、“彩云”等为主；绣花图案多以“孔雀戏牡丹”、“秋菊斗霜”、“狮子滚绣球”、“彩蝶扑莲”、“双石榴”等为主。

这些图案之间以拉线、挂线、挑线或以五彩布条做夹缝相隔。这样把图案装饰得色彩鲜艳、美观大方，富有土族特色。

阿拉普色是青年妇女盛装的重要组成部分。如果没有它，就不成其为盛装。只有穿上花袖衫，勒上阿拉普色，蹬上果日玛拉线鞋，才能显示土族妇女盛装的特色。

酩馏酒

土族人自酿一种青稞酒，名叫“酩馏酒”，亦叫“明流子”，其味醇香可口，清爽甘甜，度数高低不一，它是招待宾客必需的高级饮料。

土族人家来了客人，在请客人吃馍喝茶的同时，已经把酒倒在壶里热上了。喝茶毕，就向来客敬上满满三杯酒，然后边唱赞歌边饮酒。俗话说：“山里的兔子狗撵了，心里的歌儿酒撵了”。若没有酒，赞歌就唱不起来，令人感到冷冷清清。所以，酒是土族人待客不可缺少之物。正因为如此，临近春节，土族家家户户都酿酩馏酒。其酿造方法是先将青稞晒干，筛簸干净，入锅煮熟，然后摊在案板上降温，合匀“醅曲”，装入盆内，放在热炕上发酵。3 天后打开盆口时，已是香气喷鼻。这叫做“酒醅”或“甜醅”，吃起来绵软爽口。酒醅中再合曲子，一般 10 公斤青稞合 1 公斤曲子，

装入瓷缸内，密封缸口，放在热炕上，经过21天的发酵后，就可以露酒了。酒曲有自做的，亦有购买的。它是在青稞粗面中合上羌活、党参、黄芪等十多种中药材和曲苗等搅拌成团，然后捏成椭圆形空心面团发酵而成。

露酒采用蒸馏法。先把凉水倒入锅内，再放入适量酒醅搅匀，密封锅盖。锅盖上有一直径约6厘米的孔，将一直径约6厘米的管子一头接孔上，另一头接在特制的露酒缸上。露酒缸分内外两层，中间是空的，内层装凉水或冰块，外层有大小两个孔，大孔用管子接在锅盖上，小孔是往外流酒的。露酒时必须文火烧锅，让酒醅慢慢提高温度，使酒气通过管子到露酒缸空心，遇冷后凝成酒流出来。

先流出来的头道酒叫“昂确”，是专门敬神祭祖用的，度数较高；二道酒给人喝，一般在40--60度左右。

土族人自酿的酒都自用，除敬神祭祖外，春节拜年时用作诸如女婿赠岳父、外甥赠阿舅的礼品。此外，凡来宾客必须敬酒。

互助大曲

互助大曲原名威远烧酒，因产地在威远堡（今青海省互助土族自治县首府威远镇）而得名。勤劳智慧、憨厚好客的土族人民向来有酿造青稞“酪馏酒”的传统，其味甜润、度数低。约在明末清初，山西客户来青海经商，把杏花村的酿酒技术带到土乡，以当地质地优良的黑青稞作主要原料，配以黑燕麦、豌豆等酿造出别具风味的威远烧酒，迄今已有300多年的历史。产品不仅受到青海各族群众的欢迎，而且远销西北五省区及香港地区和澳大利亚等国。

说起威远烧酒的来源，有一神话传说。传说八仙到昆仑瑶池

西王母那里赴蟠桃宴回府途中，路过威远堡，一时口渴难忍。这时，看见一老奶奶顶着烈日在一古井边设摊施茶，过往的行人纳凉品茶赞不绝口。吕洞宾睁眼一看，原来此井与土乡“神仙”——龙王山下的黑成泉相通，其水清冽甘醇，沏的茶格外好喝。八仙畅饮了老奶奶的茶没钱酬谢，铁拐李便 打开宝葫芦，将瑶池仙酿倒入井里，对老奶奶说，取此水煮酒可扬名四海、富甲天下。老奶奶将信将疑，从井里打了水来一尝，当真酒香扑鼻，甘醇可口。后来烧坊专用这口井水酿酒，果然透明清澈，醇厚甘甜，入口软绵，一举成名。说来也巧，现在互助酒厂所用之水正是一口古井水。据化验，此井之水属于碳酸盐类钙Ⅱ型，软硬适中，含矿物质少，无污染，真是天赠的酿酒好水。

威远烧酒的采曲、制坯和酿造技术，经历代“酒大工”和“曲大工”们不断总结完善，自成体系。像“见气三分酒”、“白霜满天星”、“冬加曲子夏加凉（水）”和装锅“稳、准、细、净”等一系列操作工艺和秘诀保留至今。老师傅用手在曲房的窗户纸上一摸，便知此时的温度和湿度；鼻子一嗅，就可掌握曲子的发酵程度；舌头一舐，便能品味出酒的质量，其经验真可谓达到了炉火纯青的地步。

近几年，除了原有的清香型互助大曲外，还开发了浓香型的互助特曲、清香型的互助头曲以及互助二曲、互助白酒等新品种。

土族风味食品

土族风味食品有“哈力海”、“哈流”、“沓呼日”、“薄适佐”等。

哈力海的做法是，把嫩荨麻叶晒干，研成细末，放入开水锅里煮，待水煮成深绿色，撒上青稞面搅拌成糊状；待煮熟后再加清油、葱花、蒜泥等佐料，匀摊在用清油煎的薄煎饼上，然后卷

紧切成两节即可。其味清香可口，是待客的上好食品。

哈流的做法是，把清油倒入加有适量开水的锅中，加热翻滚若干次，然后把炒得半熟的麦面倒进锅里，轻轻摊平，用面杖捅若干个孔，接着以文火烤熟，搅拌成油面团即可。它是招待修筑院墙、盖房子、拉运麦捆等干重活的人的上好食品。土族人认为吃了它不易饿、力气大。

沓呼日的做法是，麦面中加上清油、盐水、白矾等佐料和匀，待面发好后，做成圆饼，放入烤热的灶堂内，密封灶口，让其烤熟。烤熟的沓呼日馍，表面焦黄，里面酥得像蜂窝一样，吃起来酥脆可口，是馈赠亲友的佳品。

薄适佐的做法是，把发面擀成薄片后，切成长约 20 厘米、宽约 6 厘米的长方形面条，中间刺了道长口，再将一头从中间口中翻过来，使平面条变为拧状花条，然后投入油锅中炸熟。吃起来酥脆可口，是过春节或举行婚礼时招待客人的佳品。

土族葬俗

土族人家殁了人，一般在三至七天内送葬，不论贫富均要举行丧葬仪式。人殁后的当天晚上，请同宗亲房的长辈研究治丧事宜，选两位长者为丧官，主持丧事。第二天由一位丧官携带哈达前往亡人舅家报丧（已嫁妇女死亡向娘家报丧），娘舅家对亡人的丧礼提出具体要求，这些要求在一般情况下都必须照办。在举行丧礼那天，还得向娘舅家来人作认真汇报。

在过去，举行丧礼要请喇嘛 3 至 5 人，念 3 至 5 天经，以超度亡灵。还请村里老人朗诵嘛呢经。在送葬的前一天，远亲近友来亡人灵前烧纸、吊唁、献馒头和清油煎饼。丧主家以油条、油包子、米饭、酥油炒面等丰盛茶饭招待前来吊唁的客人，临走时

还要送 2 个馒头、4 个“薄适佐”。经济条件较好的人家还送 30 厘米白布，一块茯茶（250 克至 500 克），若干钱，给已出嫁的姑娘每人送一件衣料。

土族大多实行火葬（民和三川地区行土葬）。人殁后先脱去原穿衣服，使其成蹲坐状，双手合掌，两拇指撑于下颌骨。用 15 厘米宽白布条缚住，在每一骨节处绾一个扣子，一般要绾 13 个。然后上穿斗篷“布日拉”，下围布裙，老人用黄布做，年轻人用白布做。之后入殓在木制灵轿之内，置于主房堂间，子孙坐草铺昼夜守灵，一直到送葬为止。

老人的灵轿做得比较精致，大小以刚能蹲一人为宜，式样像一座“一间转三”的庙宇。四角翘起，前面有精心雕刻的“悬梁吊柱”和花卉图案。轿子顶端插有日月模型，并着色油画，装饰得非常华丽。

在火葬的前一天下午，选村外僻静处，用 120 片土坯，砌一钟形火炉，下设 4 个风门火口，上有烟囱，下部装有干木柴的火葬炉子。

火葬当天早晨，亡者子孙抬灵轿，亲戚朋友都送灵轿至火化现场。经向亡人烧纸、祭酒茶之后，将死者面向西方放入火炉之内，用柏树枝燃起火苗，四方火口同时点燃，将灵轿破碎，投入炉内，直到焚烧净为止。

这时喇嘛到现场念经，向死者身上投放五色粮食，浇酥油汁，加大火力。丧家给前来参加葬礼的每个人散发零钱，并请他们到家里喝茶、吃饭。

一般火化后的第三天，亲属们把火炉打开，首先由长子、然后其他人轮流以特制的木筷子拣骨灰，装入 30 厘米长的柏木棺材（骨灰盒子）或瓷坛之内，用红布包裹，红丝线扎紧，暂埋在临时选定的地方，待来年清明节，转葬于祖坟地。一般夫妻埋葬在一

起。

亡人送葬后，子孙服孝，一般为七七四十九天。服孝期间不穿戴色彩鲜艳的衣帽，都穿素服；不到别人家里去；当年春节不贴春联；不走亲访友。

土族村落

在湟水以北，互助、大通、乐都等地的土族村庄，一般坐落在依山傍水的地方。其显著标志是，附近山顶有“鄂博”（山神标记），山壑上挂有以五色布做的“加达尔”（小旗）。村前村后的山视为神山，一年四季被封，山坡栽有松树和杨树，若其中有古老大树，便是神树，让其枝条自然生长，不得砍伐或修枝。村中有“一间转三”的“本杭”（十万佛塔），老人们在那里煨桑、叩头、转圈。村旁有“东本”（以十万块白石堆成），上插系有白羊毛的枝条。还有三角土墩，为镇邪魔之地。寺庙坐落于村庄的最高点，红墙蓝瓦，树林环抱，桑烟缭绕，为供奉护法神、二郎神的场所，是全村宗教活动的中心。在这些地方禁止动土和大小便。此外，土族人把水泉视为神泉，严禁在泉边洗东西和大小便。

民和三川的土族多居住于川水地区，该地土地肥沃，气候温和，适合种植各种农作物和发展园艺业。据《秦边纪略》、《西宁府续志》等史书记载，该地很早以前即为“枣梨成林，膏腴相望”的富庶之地。古人曾赋诗赞美该地的美景道：

曾将烂漫照三川，
活色生香谁与怜？
柳外青帘堪问酒，
水旁红雨自成泉。
千家门巷皆铺锦，

十里园林尽罩烟。

岂是中州文杏好，

移来还待探怀贤。

现在的三川地区比之诗人生活的年代更上一层楼。枣梨杏林中又增添了蜜桃、苹果和核桃等，尤以核桃壳薄仁厚而享盛名。

土族庭院

土族人的住宅大部建在靠山向阳的地方。过去，同宗同姓者聚居于一个地域，一般一家住一个庭院，即独门独户。俗话说："一院不住两家，隔壁不做亲家"。宅基面积约300至500平方米，庭院围墙（当地叫庄廓）修得较高，一般约7米多，分为上下两部分。下部以木板做档，以土夯筑而成，板花痕迹明显；上部以土坯砌齐，以白土麦草合泥抹光。墙中间有白卵石镶嵌的宝山图案，墙头四角安圆柱形白石四块。庭院大门上刻有各种花卉图案，门框顶部挂有五色彩布条，门前砌有照壁墙或栽有照壁树。

院内是土木结构的小平房组成的"四合院"，一般为四间正房，四间角房。正房三间为一个单元，角房两间为一个单元。均用木板隔成三间，中间为堂，左右两间盘有火炕，是住人的地方。在正房之中与院门相对者为主房，由老人居住或为客房，其他正房为晚辈的居室。角房一般为两间，做为厨房、仓库、畜圈等。富裕人家还修有"二加七檩"的大房和前后出檐的过亭组成的一进两院式庭院，并建有门楼、角楼和正楼。房屋木件画栋雕梁，屋顶展平光滑，正如当地人所说："青海有三宝，房上能赛跑"。

堂屋内，摆着大红油漆的面柜，摆放各种摆设和供品，堂屋左右间火坑上置火盆和炕桌，若来客人就在这里招待。有的人家在正房左间设佛堂，供奉祖神。

院子正中有一圆槽，圆槽中间立着高高的嘛呢旗杆，上面挂着印有经文的蓝、白布经幡，随风飘荡。土族人认为它能驱邪消灾，保佑全家四季平安，吉祥如意。圆槽周围拴着牲口，如舞歌中所唱："进去大门圆槽圆，嘛呢杆杆当中显，犏牛骡马扎一圈。"随着时代的发展，圆槽已逐渐变为花坛，其内种植了牡丹、芍药、大丽花等各种花卉。

土族婚俗

土族人把迎娶新娘的人叫"纳信"，纳信携带的作为礼物的羊肉叫"纳信妥偌"。

依土族的习俗，当纳信的人是新郎的姐夫和妹夫。但当纳信的人是有条件的：一是结发妻子健在；二是他的生肖必须同新娘相和；三是能歌善舞，精通土族婚俗。姐夫和妹夫若不具备上述条件，就得另外聘请符合条件的两位青壮年充当纳信。

纳信的着装有规定：头戴织锦镶边的"拉金锁"白毡帽，身穿蓝、黑色长袍，腰系绣花绿布腰带，外套白羊毛制成的长褐衫，使人一看着装就知道是纳信。

在婚日前的下午，男家派两位纳信前往女方家迎娶新娘。纳信出发时要带上新娘上马时穿的长衫、红裙、首饰、绯红包头、木梳以及其他妆盒，还要牵一只白色母羊，驮一块完整的羊肉，拉上新娘骑的"坐马"，赶上驮嫁妆箱子的毛驴，偕同新郎一起出发，傍晚到达女方家。这时女方家的姑娘们，穿着五彩缤纷的花袖衫，已等待在门前。当纳信走到离女方家不到百米之处，她们就蜂拥跑上前去，把驮在驴背上的羊肉抢夺在手，握住羊的四肢而翩翩起舞，放声歌唱。这时的羊肉已不是什么礼物，而成了配合歌舞的特殊道具。所唱歌词内容幽默而风趣，如："驴背上驮的啥东西？

驴背上驮的干羊肉，春天的羊肉吹干了，这样的羊肉我不要，拿去给你家猫儿吃。”逗得人们捧腹大笑。

当女方家的宾客们作揖行礼，帮助纳信牵马、拉羊之际，狂欢的姑娘们又跑到家里关上大门。她们在门内唱《唐德格玛》歌，让纳信回答，若答对了，才让纳信进门，否则就不让进庭院。进门时，纳信须提防从门上突然泼下来的凉水，如果稍不注意，一勺凉水就会泼在身上，让你啼笑皆非。

当迎亲的纳信坐在炕上刚端起饭碗，那优美动听的“纳信斯果”歌便隔窗唱起来。所谓“纳信斯果”，直译是咒骂迎亲人，实际上是揶揄逗笑纳信。其词都是些玩笑的内容，而曲调却娓娓动听。“纳信斯果”歌有三首，第一首是《尖加玛什则》：

纳信姑爷真难看，
走路像个老母猪，
坐下像捆豌豆草，
站着像棵歪腰树。

此歌以风趣、活泼的曲调唱，逗得室内外男女老少捧腹大笑。迎亲的纳信听了，不仅不反感而且要赞扬姑娘们唱得好。

第二首是《从哪里来的人》：

从哪里来的人，
头好像破背篼，
嘴好像破庄廓，
鼻疙瘩像麻杓，
耳朵像木盘子，
眼睛像酒盅子。

歌曲从头到尾运用比喻，形象、生动。这时爱凑热闹的男人故意逗笑说：“姑娘们哪！你们隔窗没看清楚，我看纳信姑爷的鼻子不像麻杓，石山的高峰么像哩！眼睛不像酒盅子，两颗明星么

像哩!”使气氛更加热闹。

第三首是《你们拿来了个啥?》

姑娘们在这首歌里把纳信所拿来的衣服、裙子、首饰、妆盒都贬低一番。他们把长衫比喻为口袋，把包头比喻为抹布，把腰带比喻为肠子，如此等等。还在每组歌最后加上一句“没羞的某家人，臊坏了某家人!”

唱“纳信斯果”歌是土族婚礼中最热闹、最活跃的一个场面。它充分显示了土族人爽朗的性格，反映了土族人独特的婚俗。

桑嗯专

土族好客，家中来了客人必敬“嗯专”或“桑嗯专”。如是寻常客人，敬大肉“嗯专”，即一块重约5公斤的长方形肉块，连皮带骨下锅煮熟，盛在木制长方形盘中，上插一把刀子，让客人自己动手割肉吃，或由主人动手，割成薄片敬给客人。若是贵宾光临，就要敬“桑嗯专”，即全羊席。这是土族人待客的最高礼节。其做法是：把羊宰杀后剥皮，取出内脏，清洗干净，由厨师按照习惯，提前划好肢解痕迹，放进锅里煮熟后，盛在特制的撑盘中进行修整，使其四肢伸展，尾巴翘起。然后插上几把刀子，敬给宾客。同时，将肝、肺、血、肠等盛在盘中敬上。

敬“桑嗯专”的仪式比较繁缛，不仅要按规定敬给每个人，而且每敬一个人必诵赞词。如“桑拉”应敬给阿舅，“乌拉”应敬给喇嘛，“索萨”应敬给新郎，敬错了便属失礼。敬什么部位就得诵什么赞词。如敬“索萨”词大意为：“索萨上部突起，是德高望重的象征；索萨正面崛起，是土地广阔的象征；索萨反面展平，是光明磊落的象征。”

迎送客人三杯酒

酒是土族人招待宾客的最佳饮料。主人知道宾客要光临，就执酒壶、酒杯等在大门口。当客人下马或下车，便将热气腾腾的三杯酒敬给客人，以示热烈欢迎。这叫做“临门三杯酒”或“安门盅”。然后将客人请到家里，待客人脱鞋上炕盘腿坐在绵毡上，喝完第一道茶后，又向客人敬三杯酒，叫做“吉祥如意三杯酒”。而且，主人敬毕主妇敬，长辈敬毕晚辈敬，实际上不止三杯。那些不能喝酒的客人，可用无名指蘸酒对空弹三下，也能应付过去。但能喝酒的人不得假装不能喝酒，否则主人知道了要换大杯敬。敬酒后，边饮酒，边唱赞歌。每唱完一首赞歌，被赞者又要喝三杯。当客人准备起程时，主妇端来长面条或面片，叫做“启发面”，请客人吃。吃完，主人又托酒壶、酒杯等候在大门口，向出门的客人敬上三杯酒，叫做“上马三杯酒”。另外，如果是尊贵的客人来家，主人还托杯远迎，所谓“十里路上羊特呼”、“五里路上箭特呼”，路虽没有十里、五里那么远，但途中敬酒两次是少不了的。这表示对客人最隆重的接待。

对每次敬酒总是三杯的缘故，有不同的说法。有人认为“三”数为大，是吉祥的数字；有人认为“三”代表佛、法、僧三宝；有人认为日、月、星是三光，天、地、人是三才，均为吉祥之物，故敬三杯酒以示吉祥如意，万事吉利。

爷爷骑牛祝满月

土族老人久盼孙子而不得时，就买上好多包针，穿上红丝线，凡遇到青壮年妇女就赠送若干，认为这样会得孙子。妇女们接了

针线后就祝愿说："多谢阿爹，让菩萨保佑你，明年就会得孙子！"男人们看见老人送针线也很同情，往往说些吉祥的话来宽慰。

老人若有幸得了孙子，是全家的特大喜事，乡亲们也要祝贺一番。这种祝贺仪式非常独特，叫做爷爷骑牛祝满月，俗称"绑老犍牛"。其具体程序是：拉一头膘肥体壮的犍牛，备上高级马鞍，戴上辔头，同时，把老人也化装一番，让他戴上"多罗索"官帽，帽上缀牛尾红缨，以茜芨草做成两个圈，缠上棉花，当做眼镜，并用萝卜削一个蒜头大的烟斗嘴子，蒜窝大的锅，安上一米长的烟斗杆子，让他拿上。有时甚至让其翻穿皮袄，在众乡亲的护拥下把他扶上牛背。人们有的牵牛，有的扶人，从村头游至村尾，村民们纷纷相随，围观场面十分热闹。老人被折腾得实在受不了了，就求饶许愿："宰上八十斤（一斤等于1.5公斤）的肥猪，熬上八坛子酪馏酒，好好招待各位！"过后，乡亲们凑钱买来镌有"长命富贵"字的银锁及银链，给新生儿戴上，以示把他锁住了，鬼怪也不能勾走他的魂。被祝贺的老人也以丰盛的酒肉招待众乡亲们。人们认为这样祝满月，可以避邪驱魔，消灾延寿，使孩子健康长寿。

婴儿洗三礼

土族婴儿出生三天，要举行隆重的"洗三礼"。宗族尊长、亲戚六眷都来参加。午时，房上"别列"（即海螺）吹了三声，堂屋磬儿（似钟而小，口朝上）敲上三响，母亲将婴儿从襁褓中托出，接生婆小心翼翼地将他放在精致的洗三盆（一种专用澡盆）里，用清清的泉水濯洗。洗到三遍，祖母从怀里取出翠绿的松柏枝条，在婴儿的头上绕三绕，祝愿小孙孙像松柏一样万年长青，长在山乡最高的山岭；外婆从花袖筒里取出一块晶莹的玉石，在婴儿的身

上绕三绕，祝愿小外孙永远像金玉一样光华灿烂，给家人带来更多的财宝；阿爹拿出红枣、核桃，向亲友身上撒去："托众乡亲的福气，愿我家的金童玉女像核桃、枣儿满屋子滚。"这时，参加洗三礼的亲朋们，各自拿出寓意深长的礼物，向婴儿祝福。有的向洗三盆里丢几枚铜钱，祝孩子永远富足；有的放一根青葱，祝孩子百病不得；有的置一束香草，愿孩子芬芳不老；有的放一疙瘩酵面，祝孩子越长越欢（即越长越胖，雪白粉嫩）；有的撒一把种子，祝孩子从此扎下幸福的根子……如果婴儿是个女孩，在场的姑娘们就把一枝水灵灵的牡丹（或是月季花等）插在洗三盆里，而后手牵着手，围着婴儿说祝福的歌词"阳格喽"：

土人家如花似玉的好妹妹呵，
愿你像这枝盛开的牡丹；
你的容光照耀金岭银川，
你的人品盖过前山后山。
土人家如花似玉的好妹妹呵，
愿你像这枝盛开的牡丹；
你的心灵如同花蕊一样甜美，
你的巧手织就锦绣河山。

蓄发仪式

土族人生了男孩，一般须在周岁生日那天，把头发剃掉，盘成一个圆球，缝在外衣背上。但得子较迟或曾经生子夭折后再生男孩，就要请护法神、仙女娘娘、四海龙王来保佑，从而名字也叫护法保、娘娘保、龙王保，并扎上耳孔，戴上银耳坠，有的还蓄长发到5至7岁才能剃掉。

蓄发仪式比较隆重。请神来家后，要献上13个大馒头，煨上

香桑，点上油灯，请神传喻，祈求保佑。请什么神保佑孩子就叫什么名字。有的人家还请喇嘛念“长命经”、“祭神经”。一些地区还杀猪宰羊祭祀。祭祀仪式很隆重，如献羊，就把羊拉到神前，头上浇牛奶水，待羊甩头时，认为神喜欢了，然后宰杀。肉煮熟后，将各部位及下水都切上一部分，分别盛在6个碗里，舀满肉汤，献在神前。稍后认为神已经领受了，于是把羊肉分给所有在场的人吃。人们吃喝满足了，神也就喜欢了。人们认为蓄发扎耳孔，孩子如有病痛灾难，其保护神可以为他消灾避难，平安地度过少年时代。

纳顿会

“纳顿”是青海省民和县三川地区土族人为庆祝丰收而举行的大型舞会。每年农历七月十二至九月十五，在20余个较大的村庄轮流举行，历时63天。因此，在这一期间，居住在三川地区的土族人，每隔三五日就能参加一次纳顿会。每逢某村举行纳顿会，土族人便身着节日盛装，带上特大的麦面馒头、整缸的酒，前往赶会。从馒头的大小，酒的多少，可衡量土乡当年的收成情况。

纳顿会上表演的节目，由五个部分组成。

首先表演由白发长须老人、青壮年男子和十来岁小孩组成的上百人以至数百人的“会手”舞。届时，每个村子组成自己的会手（少到二三十，多到四五十人）。当外村前来庆贺的会手将要来到时，会手们按照老、中、青年龄顺序排列成队，由身穿长袍、手擎彩旗和扇子的老人们带领，鼓手和锣手、擎着旗子或持着柳条的青年们紧随其后，到村外几百米处恭候，以示隆重。双方会手相遇后，大伙便按照锣鼓的节奏，各自起舞，来回旋转三次，高喊“大好”，声音愉快而高昂。同时，本村的几位长者在外村会手

前焚香、敬酒。然后，双方会手汇合一处，互相握手，兴高采烈地再呼“大好”！这时，打击乐器的声音一阵比一阵急骤，充分表达出庄稼人的欢乐心情。接着，本村会手闪向两旁，让出道路，请外村会手通过以后，再随之进人会场。

其次表演哑剧《庄稼其》，即农夫舞，它表现一位老农教儿子驾犁耕地的故事，艺术地再现了农业生产活动的细节。其舞蹈情节完整，人物的性格鲜明。演员的服装、道具完全就地取材，是地地道道的庄稼汉角色，充满了泥土气息。舞蹈中儿子错把担架当犁架，父亲过来教训儿子，动作幽默诙谐又充满了教益。

再次表演三国故事《三将》、《五将》。三将为刘、关、张桃园三结义；五将为三英战吕布，再加曹操。他们随着铿锵的锣鼓声，手舞足蹈，舞姿雄健有力。

最后表演较原始而粗犷的面具舞《杀虎将》。杀虎将的扮演者身着战袍，挥舞长剑，威风凛凛。先是虎与牛斗，然后人与虎斗，表现了土族人的祖先从事畜牧业生产时的艰辛生活。

从纳顿的传统舞蹈《杀虎将》所表演的内容来看，这个群众性的娱乐集会，可能早在土族的祖先从事畜牧业生产的时候便已经开始了。

旧时，纳顿的宗教迷信色彩很重。人们总是在丰收之年向神灵感恩戴德，又在荒歉之年向神佛叩头求告。那时，每逢农历五月初五到十五之间，各村都得选出108个精壮小伙子，在喇嘛的带领下，背上寺院的经文，绕山朝拜。后来，有人从四川灌县二郎神庙，请来了木雕的二郎神像 。此后，民和土族地区便逐渐发展到村村设祠立庙供奉起这位“护国崇宁真君川蜀大帝威灵显化天尊”来。一旦年景稍好，庄稼人就把功劳归于李二郎，抬起安放着二郎神像的八抬大轿，村村游转。神像所过之处，杀鸡宰羊，挂线披彩，锣鼓喧天，鞭炮齐鸣，香烟缭绕，锦旗招展，人们纷

纷伏地跪拜，双手合十，三呼神恩。

现在的纳顿活动，虽然多少还保留着某些宗教敬神的形式，但从内容上看，已纯属欢庆丰收的娱乐活动。

土族刺绣艺术

土族民间刺绣艺术品种多样，内容丰富，图案结构匀称饱满，线条疏密相间，造型优美，色彩鲜艳协调，给人以秀丽柔和质朴的感觉。

土族民间绣制艺术分为两大类：一是刺绣；二是堆绣。刺绣又分为绣、盘、拉等方式。绣花又叫扎花。它是运用五彩丝线，依据剪纸底样绣制的一种艺术。图案有山川、花卉、鸟兽等。所绣内容富有情趣，寓意深刻，有孔雀戏牡丹、粉蝶扑莲花、狮子滚绣球、老鼠拉葡萄、蜜蜂采花、金鱼穿莲、干枝梅儿、云雀探梅、双鹿衔草、喜鹊登枝、白鸽啄食、白兔吃菜等传统的内容。

各织物的绣花题材和内容有一定的格式和规定，并非任意乱绣，如老鼠拉葡萄多绣在坎肩衣兜上，鸳鸯戏水绣在年轻人的枕头上，松鹤延年绣在老年人的枕头上，牡丹、莲花、菊花绣在青年妇女的腰带上和青年男子的围肚上。

盘线，是土族妇女独创的一种艺术。它的制作方法是：将原来的双股线拆成单股，再把三条单线紧搓在一起，穿上针别在胸前衣服上，另用条单线穿针，将搓线绾一环，用单线压一环。如此，以数环或数十环相接，组成一个单色图案。而后变换丝线色彩，进行调色，组成彩色图案。有的还配有多丝线，可收到锦上添花的效果。盘线图案有：富贵不断头、八瓣莲花、八辐天轮、彩云、太极图、圆铜钱、方格子等，而最常见的为八瓣莲花、神仙馈子和彩云。这是因为这三种图案最适合盘在绣花彩带和“叶日

扭”（镶在胸前的一种 12 厘米见方的图案）上，是青年男子必有之物。

拉线，是把单色线穿在针上，在布料上绣。其针法是：左一返针，右一返针，循序向前。拉完一行，再换丝线色彩拉第二行，数行色彩不同的线条，组成一个彩色图案。由于它依彩虹的色彩调色，所以看起来五彩缤纷，由浓到淡，由浅到深，自然和谐。拉线制品除长腰带为独立制品外，一般作为其他图案的附属装饰品。如拉在绣花、盘线图案的四周边缘，或图案与图案的连接处，拉线没有剪纸底样，完全按制品的自然形状绣制。

土族刺绣没有专业艺人，全仗母女相传，邻里相授，姐妹互教。但尽管如此，它仍能继承、丰富和发展，这与土族的风俗习惯有关。按照习俗，土族姑娘人人都要学习刺绣手艺。因这是男方选妻的主要条件之一。过去土族姑娘在出嫁前，必须花几年的功夫专修两门课：一是哭嫁词，它是评价姑娘智慧的标志；二是刺绣技艺，它是评价姑娘针线手艺的标志。在出嫁前的几年内，需要准备一系列的嫁妆绣品。首先要为自己准备一整套做新娘时佩戴的装饰品，如绣花高领、盘线高领数十条，绣花彩带更不可少。还要为新郎准备一整套装饰品，如绣花腰带、绣花围肚、绣花裤带、盘线“叶日扭”、绣花盘线衣兜、云子鞋等。同时为婆家长者准备礼品，如为爷爷、奶奶、公公准备花枕头，为婆婆、婶婶、嫂子准备花鞋等等。

五屯艺术

闻名遐迩的五屯艺术，出自青海省黄南州同仁县五屯地区土族艺人之手。它是佛教艺术领域中一个独特的流派，是我国艺术宝库中的一颗璀璨明珠。

五屯坐落在风景秀丽的隆务河畔。这里聚居着大批从事艺术活动的土族艺人。他们世代相传，以绘画、堆绣、雕塑为业。

五屯艺术的产生和发展，与佛教在这个地区的盛行有密切的关系。14 世纪初，藏传佛教在该地迅速兴起，寺院大量涌现，需要较多的艺人为这些新建的寺院绘画、雕塑佛像，这是五屯艺术发展的客观条件。此外，五屯土族群众中本来就有一些绘画艺人，这是五屯艺术得以发展的主观条件。17 世纪中叶，五屯土族地区两座寺院作出了一条特殊的规定，凡五屯地区的男孩，从 8 岁开始必须入寺院，一面学习藏文，一面学习绘画、雕塑技艺。到 15 岁以后，愿当喇嘛者继续留在寺院当喇嘛，不愿当喇嘛者可以还俗当专业艺人。自入寺院到 15 岁，他们经过 10 年左右的学习，基本掌握了绘画、雕塑技艺。除部分留在寺院当喇嘛外，大部分人成为专业艺人。长年累月在外地搞绘画、雕塑，足迹遍布青海、西藏、甘肃、四川、新疆和内蒙古等信仰佛教的地区，有的著名艺人还出国到印度、缅甸、尼泊尔等佛教国家绘画、传艺，成为国内外享有盛名的艺术大师。

五屯土族艺人，在长期外出绘画、雕塑的实践过程中，还有机会接触到印度、缅甸等国家的佛教艺术和西藏的绘画雕塑、甘孜木刻、敦煌壁画以及其他兄弟民族的绘画艺术，开阔了视野，从中吸取了丰富的艺术养料，经过综合、提炼，创造出独具特色的五屯艺术。

五屯艺术的种类丰富多彩，有彩绘、彩雕、木刻、木雕、堆绣、装饰图案、建筑图案等等。而绘画中又有壁画、卷轴画（唐卡）等，其特点是重彩工笔，设色匀称，画工精致，线描勾勒流畅，如保存到今的《六臂护法大黑天》、《玛久拉卓仙女》、《文成公主进藏》、《长寿五仙女》等是五屯艺术的代表作。

在雕塑艺术中，以泥塑为主，木雕、木刻为辅。主要以释迦

牟尼、菩萨、护法神等神像或佛经故事为题材，造型生动，神采飞扬，富有装饰性，如《白度母》、《金刚手菩萨》为其代表作。

图案艺术也别具风格，表现在寺院建筑上，从墙裙、藻井、横梁、柱头到塑绘人物服饰等，光采夺目，色彩对比强烈而又匀称协调。

安召舞

土族擅长歌舞，“安召”是土族人最喜爱的传统舞，无论男女老少几乎都会跳。安召在土族舞中，属于喜庆、欢乐、吉祥之舞，类似于藏族的“锅庄舞”，但舞法不同。

每当年节、举行婚礼或其他喜事，土族人就围绕庭院中间的圆槽、花坛或场院，尽情欢舞。舞时，由一位或两位能歌善舞的男人带领，男在前，女跟后，围成一个半圆翩翩起舞。领头人唱前半句，其余众人边舞边和出下半句。这样，一领众和，连续不断地进行。

安召的舞姿是，先向下弯腰，两臂左右摆动数次，然后向前跳一步向右转一圈。转圈时两臂举上，其舞步舞姿既轻盈又柔美。尤其那些身穿五彩花袖衫的妇女，双臂舞动时，就好似无数彩虹在熠熠生辉。

安召歌的曲词，高吭、嘹亮、音域开阔、婉转优美，基本上用民间“五声音阶”组成，采用四三拍节奏。由于它紧密配合舞步，故其节奏性强。随着歌词内容的变化，不断变换曲调，有时唱《幸中布索》，有时唱《安召索罗罗》、《什则因什则》、《拉热烈》、《谢玛洛》等，约有八九种。

安召的歌词，每首都是独立的，一般一首为三段，每段为三句，每句为七八字（音节）。歌词内容主要是祝福、祈求吉祥如意

(不祥之词是禁忌的)，如人口平安、五谷丰登、六畜兴旺、全村平安等等。一般开头词为：

蒙古勒汗的好儿女，
唱支祖传蒙古勒歌，
欢舞安召索罗罗。

由于安召舞是祭礼舞转化而来，所以其宗教色彩较浓。如下词：

赤列石山上台上，
白色骏马在欢腾，
祝愿为此吉祥来。
赤列石山中台上，
白色牦牛在欢腾，
祝愿为此吉祥来。
赤列石山下台上，
白色绵羊在欢腾，
祝愿为此吉祥来。

轮子秋

每逢春节，土族人都要举行一项新颖别致的活动——轮子秋。

说起轮子秋，有个传说：有一年风调雨顺，庄稼获得特大丰收，车拉马驮了好多天。当人们把最后一车庄稼捆好运上场时车子翻了，朝天的那扇车轱辘转个不停。蓦地，只见两个孩子在车轮上飞舞，口唱庆丰收的家曲。从此，每年正月碾完场，土族人都要把大板车的车棚卸下来，将车轴连同轱辘竖起，底扇压上碌碡，顶扇绑一横竿，横杆两头拴以皮绳绾的圈，打秋人各坐在一头绳圈里，其他人推动横杆，车轮就旋转起来，围观人群在旁歌

唱助兴。

据老人们说，打了轮子秋可消灾避邪、财运亨通、吉祥如意、五谷丰收，而且一年里腰不疼、腿不酸、神清体健。所以轮子秋架起来后，庄子上的男女老幼都要上去转几转，尤其是年轻的姑娘们最喜欢转轮子秋。她们在一阵阵土族乐曲声中，身着艳丽的民族服装，轮流登上轮子秋架，在轮子秋上飞速旋转，多彩的服装在阳光下闪烁飘扬，像七彩花环。她们时而端坐，时而双手抓绳悬空。技艺高超的能手还在上面做“云雀探梅”、“燕子飞舞”、“猛虎下山”等各种优美的动作，下秋后头不晕，眼不花，继续歌舞。

由于轮子秋不受场地的限制，简便易行，所以在土族地区流传甚广。

土族人的姓氏

土族人的姓氏中，有些是由古代部族的名称演化来的，如“霍尔吉”是古代的“霍尔人”，“托欢”是古代的“吐谷浑人”，“苏胡”是蒙古人。有些是地域名称，如“群萨”、“熊哇”是地名，“拉日”、“拉东”等本来是放牧牛羊的地方。有些姓氏，如“藏仁”、“麻石君”、“沙日哇”的来历尚待进一步考证。

随着时代的变迁，由于政治、经济、文化诸方面的原因，土族人的古姓氏也开始向汉族姓氏演化。

土族人的姓氏向汉族姓氏演化形式多种多样：

第一，从古姓氏中取一个字（因古姓氏一般两个字）做为姓，如“苏胡”二字演化为两个姓，即采用“苏”字的成为苏姓，采用“胡”字的成为胡姓。“苏胡”又叫“索布”，因此，有的演化为“索家”，有的演化为“卜家”。再如“群萨”，意为“有鹏鸟的

地方”，鹏鸟当地汉语叫大鹏雕，可是在《百家姓》上没“雕”字而有“刁”字，故演化为刁姓。如“藏仁”本为好的意思，但在《百家姓》上没有“好”字，而“何”与“好”谐音，故演化为何姓。“沙日哇”第一个字是“沙”，便演化为沙姓，而沙与石头只有大小之分，故有的又演化为石姓。“霍尔人”演化为贺姓。

第二，随土司姓。土司不一定是土族人，但在明、清两代，他既是土族人的统治者，又以土族人的代表出现。因此，不少土族人都随土司姓。土族地区有十六家土司，其中祁、李二姓土司势力最强，故土族中祁姓、李姓最多。

第三，村庄名称演化为姓氏。比如“拉东”村人采用 村名的一个字，便演化为东家。“熊哇”村的人迁到别地，人们就称他“熊哇家”，久而久之便成了熊家。有村名叫“巴颜”，土语意为“富裕”，富与傅字同音，从而便演化为傅姓。“吉桑人”演化为吉姓等。

第四，从父亲的名字中采用一个字，演化为子孙的姓。

第五，汉族与土族通婚，逐步变为土族，但仍保留汉族姓氏。

由于以上情况，决定了大部分土族人同姓者并非同祖，同祖者并非同姓。因此，同姓者可以通婚，因他们无血缘关系；而异姓者有时反不能通婚，因他们有血缘关系。这是土族姓氏的一个特点。

土族人的名字

土族人的名字比较复杂，包括本民族语言名字、汉语言名字、藏语言名字，以及奶名、大号、外号等。

一、奶名：

1. 用本民族语言起的名字。如巴特尔（英雄）、达勒（大海）、

吉然（六十长命）、达兰（七十长命）、那颜（八十长命）、巴克尔（好汉）、阿利玛（果子或梨）、其吉（花朵）。这些为地地道道的土语名字。

2. 土藏语言混合名字。如男子名有吉然才让（意为六十长命才让）、达兰才让（意为七十长命才让）等。这种名字前两字为土语，后两字为藏语。女子名有吉然索、达兰索、好颜索、吉然吉、达兰姬、那颜姬等。这种名字前两字也是土语，后一字为藏语，“索”为藏语“措”（海）的变音，“姬”是平安的意思。

3. 汉藏语混合名字。如女子名字有正月索、五月索、腊月索，这种名字前两字为汉语，后一字为藏语。其意为正月海、五月海、腊月海。

4. 纯汉语名字。男多为神保，如龙王保、财神保、富神保、金山保、护法保、娘娘保、三神保。哪个“神”为他起名字，就叫什么神保，即由神保佑的意思。亦有按出生月份起的名字。如正月保、三月保、腊月保。还有按爷爷、奶奶的年龄起的名字，如四十五、六十六、七十四、八十五等等。女子名字，若请“神”起的，则叫龙神姐、山神姐、金山姐，或叫富神花、财神花。若按出生月份起名，则叫五月姐、八月姐或正月花、九月花。此外，还有同汉族完全相同的名字。值得一提的是，女子名字中叫金花、银花的特别多，一个不大的村庄，可找到十几个，甚至一个家里，母亲叫银花而女儿亦叫银花，婆婆叫金花，儿媳也叫金花，有的两个儿媳妇都叫金花，为了区分起见就叫大金花、尕金花。

5. 纯藏语名字（亦叫经名），实际上是菩萨的名字。如女子名叫卓玛措（度母菩萨）、桑吉措（菩萨海）、多吉措（金刚菩萨）；男子名则叫卓玛才让、桑吉才让、多吉才让或叫卓玛加、多吉加、桑吉加。其中“才让”为“长命”，“加”为“保”的意思。另一种是护法神起的名字，则叫巴哈才让（五台护法神保佑）、尼达才

让（地方护法神保佑）、丹尖才让（羊头法神保佑）、拉莫才让（骡子天王神保佑）。以上四位神是土族寺院佑宁寺所供奉的四大护法神。

二、大号：

土族人的大号，即正名是用汉文起的，主要是为了书写，即在造花名册、证明书或上榜公布时才用，平时叫正名者很少。

三、外号：

土族不论男女，大都有外号。起外号的依据，有以下几种：按其职业，如工匠就叫尕木匠、大毡匠、老褐匠等，或将其古姓氏和职业相联系，如格斯格褐匠、苏胡银匠等；按生理特点，如高鼻子、大眼睛、歪嘴巴、大汉、小尕儿等，这种外号只在背后叫而不当面叫；按其生肖，如属牛的叫老牛，属猪的叫老猪，属兔的叫“托勒”（土语）等；按其特性，如爱探听消息就叫“探匠”，说话夸夸其谈就叫“赞匠”，没精打采就叫“瞌睡保”，说话颠三倒四就叫“醉头”、“颠狂”、“高慌”等。

●达斡尔族

达斡尔族人口为121,357人(1990年统计),主要分布于内蒙古自治区莫力达瓦达斡尔族自治旗、鄂温克族自治旗和黑龙江省齐齐哈尔市梅里斯达斡尔族区、富拉尔基区。少数居住在新疆维吾尔自治区塔城地区。

达斡尔族史称“打虎儿”、“达胡尔”、“打虎里”、“达呼儿”、“达乌尔”等。解放后,根据本民族人民的意愿,统称为达斡尔族。

达斡尔族有自己的语言,达斡尔语属阿尔泰语系蒙古语族;无本民族文字,多数达斡尔人使用汉文。

达斡尔族过去主要信仰萨满教。

从小学刺绣

达斡尔族姑娘从十三四岁起，就在母亲的指导下，学习针线活儿和刺绣技艺。她们大都以绣绿叶为起点，左手拿着绷好手绢的绣花绷子，右手捏着绣花针，穿上扎下，绣出一片绿的叶子来。从此，她们就会迷上刺绣技艺，一有空儿就去找花样，描图案，买绣线，坐在家里飞针走线。因此，达斡尔族姑娘几乎都有一手刺绣的好技艺。

按照达斡尔族婚俗，新娘出嫁时，要将自己绣的花鞋、烟荷包和枕头套等刺绣工艺品带到婆家。在婚礼上，从造型、构图、配色、针脚等方面受到婆婆、姑嫂和妇女们的一番品评。如果绣得好，就会当场受到称赞，被誉为刺绣能手；倘若绣得差，则会受到各种贬词的讥笑。这种习俗，促进了达斡尔族刺绣艺术的发展。

达斡尔族姑娘的刺绣种类较多，除上面提到的以外，还有手套、手绢、头巾、衣袖、开襟等。刺绣图案大多取材于山禽野兽、水族花卉、山石树木、小桥流水、亭台楼阁、日月虹霞等。这些刺绣大都运用了平绣、锁绣、结绣、嵌绣、折叠绣（把绸缎折叠成各种物象后，绣其主要连接部位，如折叠花瓣绣其蕊）和贴补绣（也称补花绣）等技巧。其中折叠绣达到了较高的水平，把物象质感表现得很强。纹样有对称性、辐射性，以云卷纹和几何形多层次纹样为主。色调采用强烈对比的手法，使画面明快生动，自然朴实，层次清晰。

在所绣图案中，尤为别致的是枕头顶和烟荷包。其取材主要是《三国演义》、《西厢记》、《红楼梦》等我国古典文学作品中的某些故事情节、人物造型等，构图简炼，形象栩栩如生。再辅以日月、双蝶、鸳鸯、宝葫芦、奇鸟异兽和名花珍草等形象，更是

色彩绚丽，生动明快。

胛骨饭和柳花芽菜

达斡尔人的主副食种类繁多，风味各异，其中较有特色的是胛骨饭和柳花芽菜。胛骨饭即荞面饸饹，它是用木制饸饹床子压出的又细又长的面条，浇拌喷香扑鼻的飞龙、沙鸡、野鸡、狍子肉等野味，非常鲜美可口，是达斡尔人的上等主食。达斡尔人将荞面饸饹称做“胛骨饭”，与荞面饸饹的来历有关。达斡尔人吃荞面饸饹的历史悠久，大约从辽代初学农耕时就开始了。当时尚未创造出木制饸饹床子，而是用牛肩胛骨压饸饹。方法是先将一根筷子般粗细的铁棍烧红，然后用烧红的铁棍在牛肩胛骨上烧穿出密密麻麻的窟窿，把和好的荞面攥在手里，放在有孔眼的牛肩胛骨上用力压，孔眼下面就漏出荞面条，拿到锅里煮熟就可以拌肉汤吃。当时称“达勒巴达”（肩胛骨饭）。

柳花芽菜，达斡尔语称“坤比勒”或“库木勒”，是达斡尔人自古以来最爱吃的野菜。采回来洗净放进锅里氽，使之嫩软，去苦涩味，然后捞出，挤干苦水，切碎，放入快煮熟的大块猪肉或牛肉、肥肠、大芸豆的锅里一起炖；如果没有肉，也可以多放些荤油和土豆，或者和肥鲶鱼等大鱼肉块一起炖。柳花芽香味浓郁，不仅是可口的野菜，而且还是一味中草药，可解毒、消暑、去火、防癌。

多窗结构的房子

达斡尔人为了使室内空气新鲜，光照充足，除了房子盖得高大外，还讲究多窗结构。不但有北窗、南窗，而且还有西窗、东

窗。一所三间正房，其窗可多达13扇。为了使窗户透亮、结实，窗纸选用质地优良的高丽纸，并把盐水豆油搅匀后喷在纸上。现在，家家户户基本上都以玻璃窗取代了纸窗。

达斡尔人开西窗的习俗，源于祖先契丹。据《契丹国志》记载，契丹在“临潢府一带和上京及其附近的房舍都是向东的。”当时座西朝东的房屋，其窗只能开在朝东朝南的两面墙上。后来逐渐把东向习惯改为南向，正房随着座北朝南，原来的东窗随着变为南窗，南窗自然变为西窗。达斡尔人习惯于在西窗外培植花圃。每到春天，姑娘、媳妇们栽种各类花卉；夏天打开西窗，便可看到悦目的鲜花，闻到袭人的花香。

流放木排

黑龙江省齐齐哈尔市是我国东北的大城市。它始建于清代康熙三十一年（公元1692年）。当时建造此城所需木材，主要靠达斡尔人流放的木排。因此，这座美丽的城市，渗透了达斡尔人劳动的汗水。

达斡尔人流放的木排以松木为主，主要发自嫩江支流——诺敏河、甘河上游的大兴安岭林区。每年春季江河一解冻，就由七八个人组成一组（达斡尔语称“阿纳格”），择好吉日，前往流放地点。临行前，众人聚到一起吃顿好饭；出发时，邻居们都聚在门前送行，由村里长老率先同远行人逐个喝一口送行酒，然后，套上马车，装上绳索、斧、锯、凿、锛等工具，以及粮食、油盐等，奔赴采伐地点。一路上，由事先选出的富有放排经验的长辈（达斡尔语称“口耶”）充当指挥，并由年纪最轻的担当伙夫（达斡尔语称“图嘎钦”）。途中遇见敖包时，一齐跪下叩头，祈求平安。到了伐木现场，先安营扎寨，然后选好伐场。

采伐前，先选一棵古树，用斧砍去一块树皮，上面刻画长须老人像，做为“白那查”（山神）祭拜。拜毕，在一片斧锯声中，高大茁壮的松树纷纷倒下来。人们把锯成等长的松木，吊在事先改装好的长辕车轴下，运往河边浅水处集中，然后用凿子在松木两端各凿一眼，并用桦木将十数根凿了眼的松木横串成一节木筏，再把3至4节木筏缚结成长长的木排，末尾一节木筏上安上一个长桨。驾驶木排的人们把木排推入深水，由“口耶”领航，顺流而下。途中如遇险情，就祭河神——“毕日给巴日肯”，祈求保佑。木排流至齐齐哈尔城址附近的江面时，就让木排搁浅，之后再捞上岸。

猎　貂

貂是一种比黄鼠狼稍大的小兽。体虽小，皮毛却十分贵重，无论是紫貂还是黑貂，其毛柔软而不绒，纤细而不粘，色泽美而光亮。因此，貂皮的实用价值很高。用貂皮做成袍子毛朝里穿，使人感到既轻盈，又温暖。如果做成马褂毛朝外穿，遇到下雪天落一层雪花，一抖落就会滑下去。如果做成帽子戴，嘴里哈出的热气，不会在貂毛上挂冰霜。如果将貂尾缀在毡帽后面，则是一种非常考究的帽饰。

猎貂是一项非常艰苦的劳动。寻貂难，猎捕到1只皮毛完好无损的貂更难。皮毛倘若有破损，就等于徒劳了。《黑龙江志稿》里有一首竹枝词，描写了当年的捕貂情景：“犬侦貂穴在深蒿，伺穴噙来更不劳；貂惜毛戕甘齿齿，犬防齿重不伤毛。”猎人到了猎貂现场，先停在深蒿边缘等待，而那富有捕貂经验的长毛猎犬，则迫不及待地从主人身边冲进蒿丛搜寻。当它一声不响地停嗅在深草间时，主人便知它觅到了貂穴。待猎犬伺机将貂擒住后，主人

才跑过去，轻易地将貂取下装入皮囊。如果碰到狡猾的貂，捕捉起来就要费一番周折了。它趁猎犬稍一走神，就从穴里闪电般地蹿到树顶，主人只得随猎犬追至树下，待貂下树时再去捕取。达斡尔人为捉到一只貂，往往要在冰天雪地里静候多时。

冰上捕鱼

每到冬季，达斡尔人喜欢在冰面上捕鱼。小伙子们手持一杆鱼叉，在冰面上快速地溜着冰，目不转睛地盯着冰下飞快游窜的大鱼，紧追不舍；时而溜向东，时而溜向西，像旋风似地在冰上打转。刚结二指厚的薄冰，在他脚下发出似裂似塌的“卡拉拉”响声，可勇敢的小伙子们却一点儿都不在乎。当鱼挨近冰层游窜时，只听“咔嚓”一声，鱼就被叉出冰层来了。

凿冰叉鱼不如溜冰叉鱼紧张，但是艰苦。捕鱼者先把冰层刨开一条直线，一直刨到岸上。把柳笆插进刨出的冰缝里挡鱼。柳笆梁子中部留下的缺口正对准冰面的窟窿。夜间，在冰窟上面点燃一个火把，鱼就冲火光游向冰窟，这时叉鱼者手持长杆鱼叉，一叉一条，倾刻间叉获许多鱼。

琥珀色的烟叶

达斡尔族妇女生产的琥珀色烟叶，以其质优、味香而闻名遐迩。它既是招待宾朋的佳品，又是馈赠亲友的嘉礼。据《黑龙江外纪》记载："人家隙地，种烟草，达呼尔则一岁之生计也。自插秧至晒叶，胼胝之劳，妇女任之。皆自鬻于城市，富者坐牛车，贫者披裘放帽，踞地上，晓出暮归，不问风雪。""达呼尔以绳贯烟叶，压而扁之。绳长约五尺，故其烟以庹计。流人改一庹为数束零售，谓之把儿烟。店肆复有所谓台片者，淡于达呼尔烟。"生动地记述了清代同治年间达斡尔族妇女经营烟叶的境况。

达斡尔妇女很早就掌握了烟叶的育秧技术。每至立夏，便挖一长方形畦子育秧。先在畦子底部施一层沤好的马粪，再铺一层鼹鼠倒出的松土，然后浇水撒籽，种籽上筛盖薄薄一层细土，最后用小卵石遍盖畦子。如果天不下雨，每晚都要浇透水。待绿油油的秧苗从卵石缝隙长出6厘米高时，浇透一次水后，就可以把秧苗移植到园田垅台上。以后，还要坚持每天傍晚浇水，直至秧苗成活为止。

烟秧生长1个多月时，一边打其底叶，一边给秧根培土。茎上长出10来片翠绿的烟叶后，要掐其尖，打其叉，使其长得更茁壮；临近白露时，烟叶呈现蛤蟆纹，这时便可分4次摘收烟叶了。第1次收茎端两片小叶以下至茎干中部的叶子，第2次收茎干中部至茎根的叶子，第3次收已经长大的茎端那两片叶子，最后收茎叉上的小叶子。4种烟叶中以第1次收的为最佳，叶长45厘米，宽22厘米。

刚收下的4种烟叶都是翠绿的。达斡尔妇女把它们分别铺在离地面15厘米多高的篱下苫房草上，排出整齐的行列，上面盖上

艾蒿；待烟叶沤成金黄色时，就用约18厘米长的扁针，把烟叶用麻线穿在一起，然后绑在椽子上，在院中搭起的横架上晾晒。每晚都要把烟叶椽子拢到一起，上边盖上苫房草防霜冻。待烟叶晾干后，从椽子上取下，剪成30厘米长的方块，装进大筐，在大锅上蒸；蒸好的烟叶理顺后，叠放在板制的模子里，压成30厘米宽3厘米厚的扁块，这时就变成了琥珀色的优质烟叶。

除夕的烟火

除夕，达斡尔语称“布图”。布图有两层意思，一为“封闭”，二为“完成”。一年过完了，三十夜里就封闭了，这一年的事情在最后一天也就全部完成了。

除夕这天，家家户户都要在大门外的正前方处，堆起干牛马粪，以备傍晚点燃烟火，驱散不祥之云，祈求吉祥和兴旺。除夕的高潮，是从傍晚到深夜。傍晚，全家人坐在一起，吃猪尻背手扒肉。餐毕，各家各户纷纷点燃大门外的粪堆，整个屯子笼罩在升腾缭绕的烟雾之中，呈现出一片和睦吉祥的节日气氛。各户长者把肉食、饽饽、饺子以及各种香甜可口的美味佳肴抛进烟火堆里，嘴里念念有词，祷告新的一年里人畜安康，五谷丰登。达斡尔人认为烟火越旺越好，所以尽量把自家粪堆堆得大大的、高高的，让它连续燃烧几天。

入夜，各家屋里灯火通明，香烟缭绕。长者代表家族，给诸神供奉祭品，点蜡焚香叩拜；接着出屋，到房子西侧雪地上插香，朝西叩拜，表达缅怀祖先之情。

待长者回屋坐定后，全家人跪在地上，向长者叩头祝寿；长者也对晚辈祝福；然后按辈份依次拜年。家里拜完毕，同血缘氏族的“莫昆”内部进行团拜，各家老少男子集合，由一长者带领，

先到氏族内最高辈分者家中拜，然后挨家拜。主妇们则留在各自的家里，忙着包饺子。

子时（夜 11 点到 1 点），团拜的男子们都回家来了，晚辈们再一次向自家长辈敬酒叩头。之后，家家户户燃放爆竹，灯火通宵达旦。

黑日抹灰脸

达斡尔语称正月十六为“哈日武都日”（黑日）或“阔武都日”（锅灰日）。因为这一天，达斡尔人有用锅底灰抹脸的习俗。

黎明时分，人们尤其是活跃的青年男女早早起床，先用锅底灰把自己的脸抹黑，然后手里攥上一把灰，跑到起得晚的人家，把睡懒觉的人堵在被窝里，用灰将他们的脸抹得黑糊糊的。那些避之不及的姑娘、媳妇们，被抹得羞愧难言。

这种抹黑灰的传统习俗，看似互相取笑逗乐，其实包含勉励进取的内含，具有预祝新的一年里吉祥如意、消病免灾的意义。据说，谁若是在这一天不抹黑，谁就在新的一年里不吉利。因此，即使是花朵一般美貌的姑娘被抹得黑黑的，也不准生气，更不能动怒骂人，只能面带羞色地表示欢迎。

鲁日格勒

“鲁日格勒”是达斡尔族妇女跳的双人舞，其特点是两个人面对面绕着场子跳。

根据“鲁日格勒”一词所含的“燃烧”之意和鲁日格勒舞词中大量的狩猎生活内容来看，鲁日格勒舞约产生于以狩猎经济为主的远古时代。人们狩猎归来后，或为解除一天的疲劳，或为庆

祝狩猎丰收，就自发地围绕烧旺的篝火，手舞足蹈地跳起来。

鲁日格勒的舞蹈动作极为丰富，仅上身舞姿就有20多种。如担水、摇辘轳、采集柳花芽、野兽斗架、鹰飞等动作。跳时，时而双臂一上一下，带动手腕左右轻柔地摆动，脚滑着地面轻快地来回走动；时而倒背一只手，另一只手从下面划着半圆形举到上面，从眼睛前面摆过去绕到背后；时而拍手，两臂交错上下举动，两个人互相抓住手，一转身从手臂中间翻转出来等，姿态轻盈、舒缓、多变、富于表现力。

哈聂卡

“哈聂卡”，达斡尔语，指达斡尔族少女普遍喜爱的玩偶。它是模拟生活中男女老少的形象而制作的。

制作哈聂卡的方法有3种：一是先用纸剪出头形，或用碎布片做成头形，然后画上脸谱，再用纸糊成锥形人体及衣服。这种哈聂卡高约15厘米左右。二是用纸叠成人形后加以彩绘即可。制作时，要根据哈聂卡的性别、年龄和身分，有的在深色纸上套上长短坎肩、马褂，有的在领口、大襟、下摆、袖口上装饰花边。三是做较大的哈聂卡，身体用桦树皮，头用鸡蛋壳，在雪白的蛋壳上素绘出形象各异的五官，生动逼真，维妙维肖。这种哈聂卡高有30多厘米。

到了近代，有些地方制作哈聂卡工艺更趋精致，用白布或白绫绸裹棉花做头，用五色蜡光纸做衣裳。头发不用毛笔涂，而用劈开的黑丝线缕粘上去。头上盘的发髻式样依人物的不同年龄而有所区别。有的还为新娘子插上头饰和花朵，为男子汉制作各式帽冠。这种哈聂卡只有三四厘米高，小巧玲珑，造型美观，衣饰颜色鲜艳，立体感强。

此外，还用五彩纸或小画片为哈聂卡做被褥，用火柴盒及各种小纸盒糊炕柜、炕琴、桌子、板凳。做这些家具时也很精心，就连柜子下边的金边，也都用细条黄纸认真镶贴。

达斡尔族姑娘们都很喜欢制作哈聂卡，几乎每个姑娘都拥有几十个、上百个哈聂卡。玩哈聂卡的方法类似汉族姑娘的摆家家。玩时需两个人以上参加。先用纸盒或硬纸片做成庭院，然后让各种身份的哈聂卡各就其位，组成一个家庭。她们在游戏中，还给每个哈聂卡赋予不同的性格，安排丰富多彩的活动内容。如让两家或三家哈聂卡相互串门做客；让哈聂卡种菜园，挤牛奶，采蘑菇木耳等。有时还让哈聂卡在家庭内部或邻里间闹纠纷，然后按达斡尔族习惯法明断事端。这种游戏给达斡尔族少女们带来了极大的乐趣。

鹿　棋

达斡尔族鹿棋的玩法是 24 个猎手围困两只鹿。

下鹿棋，达斡尔语称为“宝格泰勒贝”。棋具除棋盘外，棋子有两只鹿（通常用削制的小木片或古铜钱代替）和 24 个猎手。两个人对弈，一人执鹿，一人执猎手。开棋前，鹿摆在大小两座山口，8 个猎手摆在棋盘中心的正方形 8 个点上。开棋后鹿先走，为了生存，尽量设法吃猎手；执猎手的人为了设法围困鹿，逐次把手中的 16 个猎手下完后，每次可以将棋盘上的任何一个猎手走动一格。鹿吃猎手的机会是，在同一直线上越过猎手跳两个格，将被跨越的猎手吃掉；猎手困鹿的方法是，在防止被鹿吃掉的同时，在每一可跳的直线上都要用两个猎手重重围堵鹿，使得两只鹿的出路全被堵死。即使鹿吃掉了 7 个猎手，剩下的 17 个猎手，只要把关键的中心点和两个山口占领住，还是能够把鹿围困死的。

达斡尔人的鹿棋，以其鲜明的民族特点反映了达斡尔人古代的狩猎生活。鹿棋在达斡尔族群众中流行很广，男女老幼在闲暇时均喜欢下着玩。

曲棍球

曲棍球是达斡尔族特别擅长而又具有悠久历史的传统体育项目。从达斡尔族祖先契丹人建立的辽国开始算起，经历了千百年也不衰落。历史上，组织曲棍球赛曾被列为莫昆组织的职责之一。

曲棍球，达斡尔语称为“普沃列”，其棍称为“宝依括”。球多用杏树根或畜毛团、毛毡做成，大小与网球相似；球棍下端弯曲，柄长约1米，多用根部弯曲的幼柞木做成。

每年的正月和二月，是打曲棍球的盛季，从10岁左右的少年到中年男子都争着参加。最简单的打法是，按屯子里居住的区域，以东西街或南北街将人员分成两队，每队至少四、五人，多则十几个人，只要双方人数相等即可。开球前，在球场中间划一条界线；开球后，只要把球打入对方界内者就算取胜。

较为正规的打法是，在相距200米的场地两头各设一个营门，达斡尔语称为“阿纳格”或“耶热”。每队设守门员1人，其余的人皆为前锋和后卫。在场地中心线上开球，将球击进对方营门多者为胜。这种较正规的曲棍球赛，多在哈勒或莫昆的重大集会时进行。

在长期的曲棍球运动中，形成了一套不成文的球场规则，如在比赛中球棍一律从右侧击出，不得从左侧击球，以防互相击伤；除守门员以外，任何人不得用手抓球或用脚踢球；不得抛球棍击球；不得用球棍打人、绊人等等。这些球规主要靠每个人自觉遵守，还靠舆论来维持。一般性的球赛，没有专任的裁判。

曲棍球还可在春夜进行比赛。若用木质球，则将球心抠空，涂进松明等点燃，或用桦树上长的硬化的白菌疙瘩制球，球上穿几个小孔，填松明点燃。还可用毛毡球浸沾易燃物直接点燃。点燃的球在夜幕中往来穿梭，形成一道道划破夜空的美丽的火线。打夜球的兴趣不在射门，而在互相争夺，使球来回滚动或飞离地面。

●仫佬族

仫佬族人口为159,328人(1990年统计),主要聚居于广西壮族自治区罗城仫佬族自治县,部分分布于宜山、柳城、忻城、柳江、都安、河池、环江、柳州、融安、融水、南丹等县、市。

仫佬族自称“伶”、“谨”。解放后,统称为仫佬族。仫佬族有自己的语言,仫佬语属汉藏语系壮侗语族侗水语支。无本民族文字,使用汉文。

仫佬族以信奉道教为主,也信仰佛教。

走　坡

每年春节和中秋节前后，仫佬族村村寨寨的男女青年，穿上节日盛装，聚会到山青水秀、风景优美的山坡上或垌场里，以优美动听的山歌尽情歌唱自己的劳动、生活和爱情。这就是“走坡”。走坡场往往设在各村寨之间的交界处，大的可容纳几千人，小的约容百余人，一对对情人在这里彼此相见，倾吐爱慕之情，无数男女青年在这里寻找自己的意中人。悠扬动听、情意切切的山歌响彻坡场，回荡山谷。

一个男青年看上自己的意中人，便走到女方面前，先唱《邀唱歌》，而女方故作娇媚，欲言无语，笑而不答。等男方唱出很多赞美、挑逗的歌后，才接声答唱。然后，双方互诉真情，先后唱《遇逢歌》、《问村歌》、《算日歌》、《取定歌》、《分离歌》、《守等歌》、《结双歌》、《思双歌》、《赞花歌》、《同家住歌》等。歌的形式多种多样，有三句、五句、七句、九句腔；十一字、二十四字、三十字……一百二十字腔等。男女青年在走坡活动中，以山歌相识，结交朋友，传佳话，叙恋情，然后请媒托言，结为连理。

仫佬族聚居的广西罗城仫佬族自治县成立以后，为了继承和发扬民族文化，1984 年，自治县人民政府将农历八月十五定为仫佬族每年的走坡节。

同年鞋

仫佬族男女青年走坡时，对歌情深，到了定情阶段就要互赠信物。男方送姑娘一条崭新的印花白手巾来表达自己的爱慕之情；女方送小伙子一双自己亲手制作的白底黑面布鞋，用以表示“赤

绳系足”之意。这双用作定情珍品的布鞋民间称为“同年鞋”。在交换信物时，男方唱道：“送妹一条白手巾，略表情哥一片心，妹若有情打开看，一对鸳鸯上面行。”女方唱道：“送哥一双黑面鞋，千针万线细思量，哥若有心仔细看，行行都像并蒂莲。”以后，每年到了中秋节，女方继续给男方送同年鞋，男方则买月饼、丝线相送，男方唱：“八月十五同赶街，哥送月饼妹送鞋，哥的月饼花钱买，妹的鞋子手上来；鞋儿尖尖鞋儿长，鞋底扎实鞋面光，千针万线情不尽，朝思暮想我同年。”女方唱：“八月十五同赶街，哥送月饼妹送鞋，花钱买饼情义重，粗手送对同年鞋；饼儿方方饼儿圆，饼面光光饼心甜，见月怀人谢哥意，饼甜不如哥心甜。”

同年鞋用白布做底，黑布做面。制作时，先将几十层白布剪成鞋的底样后，用浆糊一层层粘起来，再用白棉线一针一线缝牢。缝鞋底要横直成行，针口大小一样。然后用自染的黑布制作鞋面，上好鞋底。最后放进蒸笼蒸煮十几分钟取出翻底晾干。同年鞋穿在脚上十分柔软舒适，美观大方。

仫佬族女孩子，十来岁就开始学习做同年鞋，因为它是仫佬族姑娘智慧的结晶，也是选择对象的一个重要条件之一。如果同年鞋做的工艺精巧出众，即使面貌长相差一点，这个姑娘也会得到小伙子的欢心。因此，姑娘们一步入妙龄，就一个劲地在灯光或月光下，练习做同年鞋。

送嫁十姐妹

仫佬族男女青年结婚，择定良辰吉日后，男方就派“人姑”（少女）、“担茶”（少男）、红娘四人或六人（只能双数，不能单数），到女家接亲。接亲时，要带去很多封包和彩礼。封包有：山盟（茶叶）、海誓（盐巴）、盼金（纸票）、袜底（压脚钱）、移步

（辛苦钱）等等；彩礼有：大米、布匹、猪肉、米酒等等。“担茶”的少男，一人用两只黑布口袋挑封包，一人用一对箩筐挑彩礼。“人姑”走在最前面，跟着是“担茶”、红娘，一直走到新娘家，先后次序不得搞乱。

姑娘要出嫁了，离家别乡，同村的姑娘依依不舍。出嫁前一个月内，村上同一辈的姐妹中最亲近的十位姑娘自愿来到新娘家里，日夜陪伴将要出嫁的姑娘，帮她做鞋子，缝衣服，办嫁妆。出嫁那天还要伴送新娘到夫家，这就是民间称作的“送嫁十姐妹”。

山里的姑娘羞羞答答，当新娘却不愿让别人认出她。所以，送嫁十姐妹和新娘同样打扮，脚上穿着同样的同年鞋，身上穿着同样的送嫁衣，头上撑着同样的姐妹伞，头发剪得同样短，头绳结得同样长，甚至走路的脚步、姿态也一模一样。这样，一路上，谁也猜不透哪一位是新娘。

到了新郎家里，本来应该是新娘首先踏进门坎，但姐妹们故意一拥而进。这时，除了主家，客人们都分辨不出谁是新娘。在20世纪40年代前，婚姻由父母包办，新郎也是进到洞房以后才认识自己的妻子。到了80年代，情况虽然大不相同了，但如果新郎稍不留心，偶尔之间也还会闹出认错人的笑话来。所以在当地流传着这样一首歌谣：“送嫁姐妹实难辨，一色衣来一色鞋，十个姐妹一个样，不知哪个是新娘。送嫁姐妹实难辨，一样打扮入洞房，神仙来点鸳鸯谱，李代桃僵也不知。”

闹　堂

仫佬族婚娶时，新娘到夫家后，先拜堂，由村子里最有威望的一位长者主持，随着长者的口令，新郎新娘一拜祖先，奉献一颗尊崇之心；二拜父母，感谢双亲养育之情；三夫妻相拜，表示

相亲相爱，白头偕老，用辛勤的双手创造幸福生活。拜堂毕，新娘和女伴步入洞房，洞房里不铺床，只放一张桌子和几个板凳。桌子上面放一盘白米，中央点一盏油灯。新娘、女伴聚集在洞房内，新郎和男青年汇集在堂屋中，双方对唱山歌，民间称为“闹堂”。双方以歌取乐，比才斗智，通宵达旦。

闹堂先唱《入门歌》作为引子，然后唱《婚礼歌》，分别祝贺家公、家婆、新郎、新娘、媒人和亲友，由男方单独唱。接着唱《盘歌》、《古条歌》。《盘歌》和《古条歌》有固定格式，男问女答，如问姓、问名、问村、猜谜，唱梁山伯与祝英台、薛仁贵征东、罗通扫北和八寨赵金龙等等。唱完《盘歌》、《古条歌》，转唱《散歌》。《散歌》没有一定的格式，内容丰富多彩，包罗万象，风花雪月、草木禽兽、天文地理等均可入歌，而且随编随唱，随问随答，全靠歌手即兴创作的过硬本领。唱《散歌》的时候，就不一定是男问女答，也可以女问男答。歌声此起彼落，从不间断，到了下半夜，老人小孩渐渐入睡，剩下来的都是男女青年，这时他们便唱起了《赞花歌》（即情歌），互相吐露爱慕之情。

在整个闹堂中，新郎不得随意到洞房看新娘。天亮时，新娘告辞公婆，跟姐妹们回娘家去了。待到二月社或八月社，新郎才亲往岳父母家接回新娘，欢度新婚之夜，同享全家欢聚的天伦之乐。现在已有改变，婚礼三朝过后，新郎就可以接新娘回来同住了。

婆王和社王

仫佬族民间传说：“婆王”管生育，“社王”管平安。生男育女由“婆王”恩赐，而子女生下来以后，能否长大成人则靠“社王”保平安。

农历三月初三是婆王生日，要敬婆王；二月社、八月社是社王节，要向社王报人丁。

敬婆王既是一次全村性的祭拜活动，又是普查全村人口增减情况的一次仪式。由“冬头”（即族头）向婆王报告一家一户的人口情况，感谢婆王恩德。冬头还利用一年一度的聚会，向全族进行生儿育女的知识教育，遵守法规、族规教育以及尊重老人、孝敬父母的教育。这天，全族人一齐出动，杀猪宰牛，全族会餐，以示人丁兴旺。

新婚夫妇结婚时，要到婆王庙去许愿，希望婆王早赐贵子。婚后生了孩子又要到婆王庙去还愿，即拿酒肉和一篮煮熟染红的鸡蛋去供，回来后挨家挨户去送红蛋。别人得了红蛋就知道你的家里添了人丁，上门贺喜。

每年农历社节，谁家生了孩子，赶紧上街买回一个猪头和其他祭品，点三支香，到社王庙去报人丁（有的地方生男孩才报人丁，生女孩不报人丁），同时要唱“婆王给我送太子，我请社王保平安，孩儿长大承祖业，万代香火有人传”一类的歌。

防老衣

仫佬族中过了50岁的人要做“防老衣”，用自己织染的布料缝制，择吉日请有名望的老裁缝主持开剪仪式。

仫佬山村，家家自种棉花，自织土布，自备染缸，自染衣服。土布织好后，放进蓝靛染缸染色后，用米汤、薯莨、牛皮胶糊面，晾干后用石磙滚压或棒槌捶打，制成防老衣布料。择定吉日清晨，主人先拿一个猪头、一只鸡和一匹布祭祖先。老裁缝进屋后，把一枚用银纸做成的“花红”插到香火炉上，表示主人已到了寿年，然后把做防老衣的布料剪下一小块贴在花红上，这就是开剪仪式。

防老衣全部用手工缝制，非常结实，主人主动比市价多付钱给裁缝师傅，表示防老衣比别的衣服珍贵。与此同时，男人还要做一条4米长的黑布包头巾；女人做一条绣花围裙，围裙系带织有各种花纹图案，围裙下边结有各种网状图形；做一双绣花船形“防老鞋”，鞋子白布做底，黑布做面，前头尖并往上卷曲，上面用丝线绣各种花草，形似龙舟比赛时的小船。

防老衣平时不穿，藏在箱底，到送终时才穿。50岁开始缝防老衣，以后每过10年，都要缝一套同样的防老衣，又称增寿衣。50岁后如果生病，病情较重，随时缝一套防老衣来“充寿”。

在缝制防老衣的同时，还要准备一副棺材。棺材用土朱全部涂红，再涂一层桐油，既光亮，又耐用。棺材前面刻一个“寿”字，后面刻一个“福”字。民间认为早一点准备棺材也可以“充寿”。但是，如果父母还健在，儿子先去世，不管他的寿命有多长，即使活到八九十岁也不能用涂红的棺材，而要把原来的棺材全部改涂黑色，用黑棺材送终。

麦秆帽

清人刘锡蕃在《岭表纪蛮》中说，仫佬人“编麦秆为帽”。这种习俗至今流行。

春夏之夜，在绿荫如盖的庭院内，在垂柳夹岸的小溪旁，在婆娑多姿的竹林里，或在月光如洗的晒场，青灯照壁的家中，到处都可以看到工余饭后的仫佬族妇女，三五成群地汇集在一起，一边谈笑风生，一边做“手头活”，一条条长长的白色带子从她们的手中流向身边，这是她们在编麦秆帽呢！

民间传说，仫佬人祖祖辈辈挖煤为生，女孩子也要下到很深的“老鼠洞”里去干活。天长日久，脸上结了一层层煤粉，一个

个雪白的脸都变成了煤黑子，长大了上街被人嫌，出嫁没人要。姐妹们中间有个名叫“勒乜”的姑娘，从煤山回家，看见一位官人骑着一匹大白马，头戴一顶白帽，鼻子上架着一副黑框眼镜，远远望去，黑白相间，十分协调。她想，要是姐妹也能戴上一顶白帽子多好啊！当时正是麦收时节，勒乜用麦秆编帽，多次失败也不灰心。编成后帽子不够白，她用石灰水煮一次。最后终于成功了。勒乜编麦秆帽的消息一传十，十传百，在十里八方传开了。远远近近的仫佬族姑娘都跑来跟勒乜学习编帽子。后来逐步形成了一条规矩，仫佬族姑娘不会编麦秆帽，不准出嫁。从那以后，仫佬族 妇女从大人到小孩，人人都会编麦秆帽。仫佬族姑娘椭圆形的瓜子脸，戴上一顶雪白的麦秆帽，显得格外美丽可爱，不仅吸引了仫佬族小伙子，也吸引了许多外族青年。仫佬族妇女和外族通婚就是从那时开始的。

盛夏街日，在仫佬山乡又是另外一番情景。一群群男女青年，从四面八方的乡间小道上涌向街镇，头上戴一顶顶麦秆帽，手上提一串串和肩上挑一担担麦秆帽，犹如一朵朵盛开的茉莉花，遍布山坡垌场。集市上也是“麦秆帽行”占据的地盘最宽。各种大小规格，花色品种，应有尽有，让人选购。

也有一些姑娘，将自己亲手精编的麦秆帽送给情人，以表示自己的敬意和让对方欣赏自己的手艺。男青年得到麦秆帽后，情不自禁地唱起了赞美的山歌：“麦秆白白麦帽圆，走龙飞凤妹手编，此帽不是无情物，戴在头上暖心间。”

掘地为炉

寒冬腊月，北风呼啸，路上行人冷得直打哆嗦，可是一进入仫佬人家，就像走进了一个大蒸笼。原来是藏在大门边底下的地

炉把整个房子烤得热烘烘的。挖地炉烧火是仫佬族的古老习惯。早在明朝嘉靖年间，田汝成著的《炎徼纪闻》中，就有仫佬人掘地为炉，燃烧白炭的记载。这种习俗一直延续到现在。

在仫佬山村，家家挖有一个地炉。地炉制作简单，使用方便。在室内选择大门的左边或右边挖一个大坑，用砖头砌好炉底，架上炉桥。再砌炉膛，以27厘米到50厘米为宜。炉口一般12厘米到20厘米。然后在炉子旁边的地下安装一个水坛储水用，坛口露出地面与炉口平。再在炉前砌一个煤灰坑，上面盖以活动板，最后用泥土把炉周围填平，表面打上三合土即成。

烧地炉既方便家庭生活，又可以充分利用热量。地炉一天到晚有火，随时可以煮饭、炒菜。晚上睡觉前，摆上一只大锅，放好猪菜，不用看火添煤。第二天早上，满满一锅猪潲就煮好了。炉火同时把旁边水坛里的水加热，一年四季都有热水使用。炉火还通过地面传播热量，增加室内温度。春天保持室内干燥，东西不致霉烂。入夏，雨水多，收回的湿谷放在堂屋中或竹楼上，很快就干了。秋季又可以烤红薯、萝卜干。冬天，天气渐渐冷了，把房门一关，整个房子就成了温室，不管室外狂风大雨，在家里也不用穿棉衣。过年过节，亲友济济一堂，围坐在地炉边吃火锅，叙友情，充满了生活情趣。

挑新水

农历正月初一，雄鸡刚刚叫过头遍，星星还眨巴着眼睛，在仫佬山乡，点火把的、打灯笼的，一条条火龙蜿蜒在乡间小路上，又渐渐汇集到河边、溪旁。接着，欢笑声、水桶的碰撞声不断传来……这就是仫佬族一年一度的“挑新水”活动。

家庭主妇通宵守岁，雄鸡一啼，立即点上一束束香火和火把，

挑着水桶出门，向挑水码头和塘边跑去。她们来到平时打水的地方后，首先把带来的一束香插上，然后往水里丢几枚硬币给水神爷，便把水挑回家。这时，家里的大人小孩早已等候在大门口。一进门，每人抢着喝一口“新水”，方去睡觉。民间认为，人喝了新水，人丁兴旺；牛喝了新水，牛健壮；猪喝了新水，猪快长。新水染布，布发亮；新水洗米，煮饭香；新水熬酒，酒不酸。如果谁第一个先挑到新水，比别人更吉利，人畜兴旺，五谷丰登。所以人们都连夜点火把、打灯笼去挑新水。

依饭节

传说有一年，野猪、野牛、野马、老虎、豺狼、狮子等等都跑出来伤害人畜，损坏庄稼。其中一头神狮凶猛异常，见人就咬，碰到庄稼就吃，逼得人们没法活下去。这时来了一位白马姑娘。神狮扑向她，她嗖的一箭，射进神狮的嘴巴，箭从屁股穿出来。男女老幼见白马姑娘射死神狮，都说她是天上派来为民除害的仙姑，设宴招待她。白马姑娘叫人煮狮肉共进晚餐。席间，白马姑娘和大家一起载歌载舞共庆胜利，还把从神狮嘴里夺来的几串谷穗送给仫佬人，使他们不绝谷种。仫佬人没有耕牛，白马姑娘又用芋头、红薯造水牛和黄牛送给他们。从此，仫佬人有了牛耕田犁地。后来她又教村上和附近九峒十八寨的仫佬族青年练武，把危害人畜和庄稼的野兽消灭干净。从那以后，仫佬山乡年年五谷丰登，六畜兴旺。为了纪念白马姑娘的丰功伟绩，祈求来年风调雨顺，每隔几年，仫佬族民众便以“冬”为单位（仫佬族以血缘聚居，同姓为一家族，族内分“冬”），轮流举办依饭节盛会。

这一天，除杀猪、宰鸡、包粽粑外，还请师公作法事，以歌舞祭神。大家选出最长最饱满的谷穗，用彩带系起来，挂在神堂

墙上。中间摆一张大桌子，摆满用芋头和红薯做成的水牛和黄牛，还摆一盘五色糯米饭，饭盘的周围一圈一圈地摆上花生、芝麻、黄豆、胡椒、沙姜、八角等12种农产品和猪心、猪肝、猪肺、猪腰、猪肠、鸡、鸭、鱼、蛋等12种肉食祭品。两个法师一个身穿红法衣，一个穿便服，脚踏草鞋，头戴神的面具。穿红法衣的做请神敬神的舞蹈动作，穿便服的唱经书。

依饭节在祠堂举行。程序有：一、安坛，即点名拜请参加依饭节盛会的众神仙。二、引光。“引光”是一位神，他负责联络众神仙，所以法事中先把引光神请来。三、清筵，即素供。由引光去请鲁班来，修路架桥给其他神仙通过。四、浊筵，即荤供。鲁班架桥后，引光又请来36位乐于为人间做好事的神仙。五、唱牛歌。六、收兵，即散坛。依饭节从头到尾都是祭神法事与娱神歌舞相结合，边歌边舞。

同族兄弟和远方回来参加依饭节的亲友，济济一堂，同贺当年农作物丰收，共祈来年风调雨顺。最后，将谷穗和红薯芋头做的牛分给各家各户。全村男女老少满怀希望地开始新的耕作。

斗鸡会

仫佬族多在秋后或春节期间进行斗鸡会。斗鸡场设在空旷、宽敞的地方，用竹子编成竹栅，在地上围一个直径三至五米的斗笼。斗笼外边放一张桌子记分，放一只木桶或铁桶装水，下面放一只有刻度的玻璃瓶或较大的玻璃杯接水。另外还有一只水桶盛水，桶里放一个竹筒，竹筒下面穿一个小孔，准备在斗鸡时“计水”（以水计时）用。

斗鸡那天，锣鼓喧天，彩旗如林。人们提的提，挑的挑，有的还用自行车运鸡，从四面八方云集而来。斗鸡时，要选出四个

裁判员，一个记“积分水”和“横身水”，一个记“游笼水”，一个记分，另一个报斗情。比赛的规则是：斗鸡的顺序从小到大，按鸡的重量排列。斗鸡开始时，让水慢慢滴进玻璃瓶里。如果两鸡相斗而一只先退，双方不再相斗，就算“违例”，放“横身水”，但还不能马上断定输赢，两次放“横身水”，就取消其比赛资格。如果两鸡相斗而一只先退，另一只继续追斗，就抽“游笼水”，即用竹筒打水让水从小孔流出直到流完为止，连续抽两筒“游笼水”，如退走者再不还击，就算败笼。把败笼的那只鸡拿走，留下胜笼的一只与下一只公鸡继续相斗。每斗完一局，计一次“水”，到最后以得“水”最多者为胜。共奖励六名，即头笼、二笼、三笼、四笼、五笼和结笼。结笼是最后取得胜利的那一只，不管得“水”多少同样获奖。

仫佬族好养鸡、爱斗鸡有着比较悠久的历史和传统。如果谁家的鸡斗赢了，得到奖励，尤其是得了头笼奖，被看作全村的光荣。人们敲锣打鼓放鞭炮上门祝贺。

舞草龙

舞草龙是仫佬族的一种游戏习俗。草龙用禾秆草编成。先编织一条长长的草帘，编到最后分三个叉略往上翘起，象征龙尾。把草帘的另一头反折一层做两个弯角翘起，形似龙头。中间每隔约两米扎一小捆椭圆形禾草，串上一根竹子做“龙中”。龙头前面单独做一个圆形草团作为“龙宝”。再进行一些装饰，在龙头、龙身、龙尾挂上一些彩纸，成为一条草龙，可以在村头村尾舞起来了。

春节期间，布龙、草龙同时舞。晚上，舞草龙游村，每到一家门口拜年，主人拿出一把点燃的香火插到草龙身上，使草龙变成了火龙。过完春节，将草龙拿到河边烧掉，以示送龙回归龙宫。

平时，如果村子里遇到什么灾害，或者久旱不下雨，也扎草龙去河边烧，祈求龙王消灾、降福或降雨。

凤凰护蛋

仫佬族民间传说：广西罗城仫佬族自治县县城附近有座凤凰山。古代，凤凰山下飞来一只金凤凰，生下一个蛋。从此，仫佬人生活一年比一年好。天神不让仫佬人超过天宫，派天兵天将来捕捉那只金凤凰。金凤凰与天兵天将进行了殊死的搏斗，把天兵天将打得七零八落。天将下令捣毁凤凰窝，夺走凤凰蛋，让金凤凰断子绝孙。金凤凰在护蛋中，不幸被暗箭射死，变成了现在的凤凰山，那个凤凰蛋变成凤凰山前的哆啰岭。

为了纪念金凤凰，仫佬山乡的儿童创造了一种“凤凰护蛋”的游戏活动。活动在晒场上或较宽的房子里进行。地上画一个圆圈做凤凰窝，中间放三到五块小石头做凤凰蛋。参加游戏的每组六个人，一人扮母凤凰，其余扮天兵天将。母凤凰双手撑地护蛋，左脚着地成俯卧姿势。天兵天将取蛋时，只要被母凤凰的右脚触着，就被取消夺蛋资格。五分钟内，以能否夺完所有的凤凰蛋而判定胜负。

●羌　族

羌族人口为198,252人(1990年统计),主要分布在四川省阿坝藏族羌族自治州的茂汶羌族自治县和汶川、理县、北川等县。

羌族自称“尔玛”或“尔咩”,意为“本地人”。羌族有自己的语言,羌语属汉藏语系藏缅语族羌语支(一说为藏语支),分南、北两种方言;无本民族文字,很多人使用汉文。

羌族信仰原始宗教,一部分邻近藏区的羌族信仰藏传佛教。

麻布衫与女儿麻

麻布衫是羌族的主要服装之一，它是用自织的麻布缝制成的，有较复杂的工序。首先将收获的麻杆放在雨水中淋沤一两天，然后采下麻皮，将其一绺绺地绾成；在春播背粪的路上或休息时间绩麻吊线，每次取一绺，用嘴和手撕成细丝吊捻。然后把捻好的麻线在碱灰水里煎煮一两小时，经清水漂洗，洁白柔软的麻线就制成了。麻布是用自制的织布机织的，麻线前端系在固定的横木上，尾端架在腰际作为经线；一般用手工织梭在上面往来穿梭，编织纬线。所织成的麻布，纹路有斜纹（“单把子”）和人字纹（“双把子”）。有人字纹的麻布，花纹美观，工艺较复杂，更为人们喜爱。用麻布缝制成的麻布衫具有结实耐磨、冬暖夏凉、洁白美观的特点，所以羌族男女老幼都喜欢穿它。羌族的麻布男服一般长至膝下，右襟左衽；女衫后摆长至脚胫，前面多为短对开补救，补救沿和领口用黑布镶边，上用白线绣上四瓣梅花形图案，黑白相衬，显出浓郁的民族特色。纺织、裁剪、缝制是羌族妇女在婚前必须掌握的技能，否则会被外人看不起。为了检验妇女这套必学的本领及独立生活的能力，定婚待嫁的年轻女子，要在未嫁时亲手垦荒种麻，从撒种、收获、纺织到裁剪、缝制麻衣的全过程，都需独立完成，就是父母、姊妹、兄弟都不得过问相助；否则，对方会认为是对爱情不够忠贞和对父母不尊敬，这就是羌族过去种植“女儿麻”习俗的由来。在汶川地区羌族种植的女儿麻，多纺成线，织成布，然后做成衣服作为陪嫁的妆奁带到婆家备用，有的还将成衣敬献给生身父母以表示养育之恩，称为“离娘衣”。理县薛城等地的羌族则把女儿麻织成腰带，等到新婚之夜，新娘将腰带束上七条，由新郎亲手解，谓之“解腰带”。女方如对新郎

有情腰带则易解，反之，腰带束得理不清头绪，难以解开，使新郎十分尴尬。从种麻到织麻布最后制成麻布衫，这在羌族中已有悠久的历史。种植女儿麻的习俗，在一定程度上反映了羌族对女性的审美观和注重妇女能干手巧的择偶标准。由于现代纺织业的发达，流行在羌族地区的麻布衫已越来越少了。

云云鞋

云云鞋是羌族别具一格的布鞋。它以白布或黄布作鞋帮，鞋帮上剪贴上卷云状黑布，黑布边沿用白线将其绣在鞋帮上，有的在鞋帮上还绣上“寿”字图案。云云鞋是羌族男式鞋，也有的地方男女都穿。云云鞋是羌族姑娘真挚情感的信物，若一位姑娘看中某个小伙子，为了表达自己对意中人的爱慕之心，便亲手精心缝制一双绘有美丽花纹图案的云云鞋，在约会时送给对方，期望自己的情郎穿着走起路来，轻捷如行云流水。云云鞋便由此而得名。因此，很受羌族青年男子的欢迎和珍爱。这种鞋只在婚礼或逢年过节时穿。民间相传有这样一个故事：一位牧羊少年，无依无靠，赤脚亮膊在山上放羊。山上有一个海子（高山湖泊），周围长满羊角花。少年赶羊饮水到海子边，见海中一条大鲤鱼跃出水面吃羊角花瓣，一连几天都是这样。少年便投钩钓起鲤鱼，鲤鱼变成了美丽的姑娘。原来姑娘是为了善良的少年才有意离开水晶宫的。两情相投，姑娘摘来海子边的羊角花为牧羊少年做了一双云云鞋，做为纪念。一种传说，是姑娘摘来天上的云彩，绣成云云鞋。从此，在羌族地区就流行年轻女子送云云鞋给情郎的习俗。一双云云鞋不知成全了多少情意相投的美满婚姻。

碉　房

碉房是羌族的石砌民居，一般高达三四层，鳞次栉比的石砌建筑构成堡垒式风格的村寨。羌寨多建在山腰坡地的平台，也有的在高山或河坝。选择地形上既要靠山，又要避开泥石流的威胁；既要临水，又要没有洪水险患；既要干燥，又要忌讳风口。更重要的是经济环境，附近要有足够的田地供衣食；另外还要从战争防御上考虑，有关隘可凭。寨中每一住宅均为石砌平顶楼房，左右比邻，前后相依，少则一二十户，多则七八十户。由于受山势河流地域的制约，各户大门的向背不一致。民宅几乎为正方形或长方形，各自布局略有不同。修房时选好地形，择吉日破土奠基，立柱上梁，然后砌围墙。砌毕，在大梁上铺圆木条，其上编竹笆子，竹笆子上再铺荆棘竹叶之类，敷上稀泥、干土打紧即为平顶。日后再筑成三合土。主要供晒粮食。住房内部自下而上分别是：一进大门底层为畜圈。拾阶而上第二层是居室、堂屋、锅什等主要活动区和供诸神位。沿木梯再上第三层就是大房背（平顶）。约占其面积四分之一的一侧修到四层，谓之小房背，其下可收藏粮草，其上亦可晒粮。最高层墙沿正中砌有“凸”形小塔，这就是供白石神的“勒夏”，家庭许愿常在此举行。每一层上下的途径是古老的独木梯，它是用直径约30厘米的木头斧凿成阶梯，形如锯齿，现逐步改为扶手木梯。羌族的住房采光和排烟较差，但有冬暖夏凉的特点。长期烟熏使内部木质免受虫蛀，经数百年不坏。整个房子充分利用空间，显得紧凑。关于羌族村落的民居风格，章松涛的《羌民的建筑》云：“在一座巍峨高山的山腰台地上，满种着玉蜀黍或是荞麦，一条条山沟的附近丛生着灌木，或是常绿的乔木，而在这些山沟的附近，玉米田中矗立着孤立的碉堡，排立着

层层密密的堡垒式的建筑。黄色的墙衬着翠绿的背景，再加上蔚蓝的苍空，色彩是如何的鲜明而调和，如果在山野遍开着粉红色的荞花的时候，这样的境界也许就成为诗的或是童话的境界了。”羌寨带着一种古朴生机、田园野趣的乡村之美。

火　葬

历史上羌族曾普遍实行火葬。《庄子》说“羌人死，燔而扬其灰。”《后汉书》说“羌人死则烧其尸。”解放前，茂县以北的一些地区仍行火葬。羌区各地都存有火葬场遗址，有的地方还有完整的存放骨灰的小木屋。古代羌人聚族而居，一个村寨就是一个氏族，有一个火坟。有几个姓氏的寨子就有几个火坟。每个火葬场分设两坑，分别存放祖先和非正常死亡者的骨灰。大约两百多年前，经清王朝的改土归流和汉羌文化习俗的相互交融，羌族的葬俗有所改变：寿终正寝者改为汉式土葬，非正常死亡者保留火葬习俗。不过，即使火葬，也改为将骨灰埋入坟中，不再存放，是先火葬后土葬的复合葬式。现在羌族的火葬大致是：人死后请端公（巫师）念经，然后入殓，把棺材抬到火葬场，置于准备好的柴薪之上，用斧头砍开“脚回”（棺材脚方挡板）下部和“头回”（棺材头方挡板）上部，将纸钱从脚方的开口处点燃，火舌渐入棺材中，烟火从头部开口处吐出。烧至近一小时，将棺材撑立起来，于是火焰熊熊，顷刻之间整个棺材烧垮。最终，木成炭灰，尸成碎骨，众人乃回家度夜。第二天，孝子们前往火葬场将碎骨捡入瓮中，埋入地下，略垒新坟。

祭山会

祭山会又称山神会、山王会、祭天会，是羌族祈求山神和天神保佑人畜兴旺、五谷丰登、森林茂盛、地方太平的大典。祭山会以村寨为单位举行，由每户的男丁参加（丧家和家有产妇的不准参加）。12 岁以上的男孩第一次参加祭山会时，需带烟、刀头、馍馍等祭品敬神。由于羌族各地地理环境、气候和农事季节不同，或因古代属于不同的部落，因此祭祀山神的日期也不相同。祭山都与农业生产紧密相关，上半年祭拜山神主要是祈求神灵别降灾害，希望庄稼获得丰收；下半年丰收后祭山神主要是酬神还愿。因此，祭山实际上是向神灵或祈年或还愿的活动。祭山会由各寨会首筹备，仪式由端公主持，会首由每家轮流担任。届时，全寨男子穿上新衣，带上刀头、酒、三叉形或新月形馍馍赴会。端公头戴猴皮帽，手敲羊皮鼓，走在队伍最前头。进入会场，端公用祭品敬神，先唱开坛词，迎神祭神，后唱还愿词，通告神灵，表示祭山会正式开始。然后，唱抖水词，嘱咐鸡羊，把身洗干净，等待山神领受。接着，唱消灾免祸经，开天辟地词和赞颂山神史诗。唱完史诗，再唱以羊替罪词，边唱边用青稞籽从羊头抹到羊尾，将青稞籽灌进羊耳，向羊和鸡身上浇三次水。此时众人大声呼叫，鸡羊着水后颤抖三次便象征神已领受，随即杀羊和放鸡归山。羊肉当场煮熟分给每户。接下来，端公唱长寿永生词、丰收词，随即向神求籽种，托神的旨意，宣布乡规民约。又唱请鸟兽吃祭品词，通告神灵，说今年愿已还，明年照旧还愿。

羌族在祭山过程中，还要为寨中青年人举行成年冠礼。然后，端公唱赞会首和寨民：大家辛苦了，如今敬了神还了愿，清洁平安、太平吉祥。这时，众人席地而坐，每家请端公吃点肉和一杯

酒。于是大家边唱边喝，欢唱酒歌。最后，端公唱结束词，宣告祭山会结束。这时，开始“转山”，由端公带头，众人绕石塔载歌载舞，绕三周后回寨。如今登山活动仍可见到，但迷信色彩已大大减少。

白石崇拜

羌族普遍保留着比较原始的多神信仰，崇拜的神灵一般都没有固定的偶像，而以白石为诸神的象征；分别供于屋顶塔子上、屋角神龛上、村外田地里、山头神林中，代表天神、祖先神、土地神、山神等。羌族将白石看作能理解自己和帮助自己的神灵，相信供奉即可得到白石所代表的各种神灵的庇护。

羌族崇拜白石，与崇尚白色，一切以白为上的习俗密切相关。直到今天，许多羌民仍保留着穿白衣服、缠白头巾、裹白绑腿的风俗。其尚白习俗不仅体现在物质生活方面，而且还体现在白色所具有的象征意义上。在羌人的思想意识中，白色有善、美好、合理等含意；黑色代表恶、丑、邪僻等。羌人的尚白习俗与其特定的地理环境相关。羌族世居高山地区，许多地方终年积雪，雪山滋润农场，灌溉农田，为人们的生产、生活提供了丰富的水源。因此，羌族崇尚雪的颜色——白色。这种崇尚白色与羌人固有的石头崇拜相结合，便产生了独特的白石崇拜。

羌人自古还有高山崇拜，在《羌戈大战》的史诗中便有木姐珠（天仙女）投下三块白石变成三座大雪山挡住魔兵的情节。直到今天，羌人仍以最隆重的仪式祭祀山神。汶川绵池一带的羌人将位于汶川、理县和小金三县交界处的雪龙包山视为圣地，顶礼膜拜。由于高山离天庭最近，所以成为神仙下凡和上天的居留之地。白石崇拜与高山（雪山）崇拜相沟通，使白石成了诸神的象

征。

木姐珠

“木姐珠”，羌语，意为天仙女，乃天神阿爸木比塔的三女儿，人们敬奉的始祖母。传说是她制定了人间的一切礼仪规章，诸如婚丧嫁娶、升斗尺寸等。其事迹被编为经典，世代传唱。羌人凡遇谢天谢地、许愿还愿以及重大节日礼仪，必请端公演唱《木姐珠》，借以追述本民族的历史，教育后代，增强民族意识。

在古老的年代，人神共居世间，神住喀尔克别山上，人住喀尔克别山下。天神阿爸木比塔的三女儿木姐珠，对天庭清冷森严的生活感到厌烦，向往人间的森林草原和温暖生活。一天，她赶着神羊来到人间龙池边，唱起歌儿，捻起羊毛线。当时人间男子斗安珠正放牧着羊群，吉祥鸟儿向他声声叫唤，将他引到了龙池前。木姐珠和斗安珠一见钟情，双方互相打听、攀谈，渐渐萌生爱慕之心，忍不住牵起手跳起舞来。后来，斗安珠随木姐珠上天庭向天庭求婚，天庭起先坚决不同意，后来答应用难题来考斗安珠。斗安珠在木姐珠和山神的帮助下，顺利通过了砍树、烧山、播种、找菜籽等难题的考验，终于得到天神允许，与木姐珠结为夫妻并一同返回了大地。离开天庭时，天神赠给了他们五谷和树木种子，还有各种禽兽。路上，木姐珠生起思乡念头，回头朝天庭望了一眼。这一望，将跟在身后的许多禽兽一个个惊散，只有牛、猪、狗等八种动物跟在后面。至今羌人结婚时新娘走出家门后不能回头看的习俗，即源于此。木姐珠和斗安珠回到人间后，砌房种地，养牲畜唱山歌，过着幸福的生活。庄稼丰收后，他们唱起歌，跳起舞，敲起羊皮鼓，在白石前敬上果实和美酒，向空中抛撒麦子和青稞，遥遥祝福天上的父母。这一天正是十月初一，从

此岁岁相沿成习，每年羌族祭祖先、祭天神、还大愿，都要撒青稞和麦子。

在史诗《羌戈大战》中，木姐珠是羌族先民的保护神。这部史诗叙述了羌族先民迁徙过程中与魔兵和戈基人发生战争的故事。当羌人遭到魔兵围追，处境十分艰险时，木姐珠从天上投下三块白石变成三座大雪山，挡住了魔兵，使羌人脱险。

阿爸木比塔

“木比塔”，羌语，意为天神，是羌人奉祀的诸神中之至高无上者，是天上管众神之神，还被奉为太阳神和农业神。传说人间的粮食种子是他赠给三女儿木姐珠带到地上的。羌人逢年过节、许愿还愿、招魂解秽等，都要祭拜天神，祈求保佑，感谢赐福。

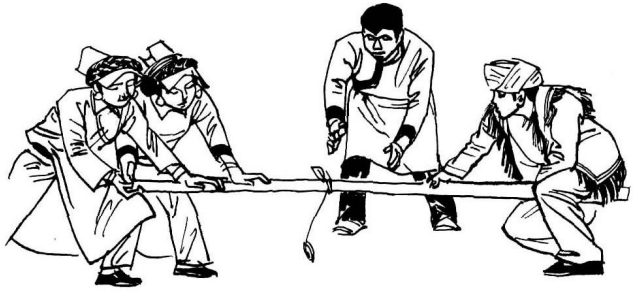
传说远古时候，宇宙昏黑，天地不分，没有万物、光亮、颜色和声音。后来宇宙间有了天神木比塔，他觉得十分寂寞，有一天竟大哭起来，泪水淹没了整个宇宙，到处都充满了水。过了很久，水里冒气，有的气变成云、癞哈蟆。木比塔用九朵云创造了天，用癞哈蟆的皮创造了地。癞哈蟆的皮不断翘拱，他就用棒捶打；打不动，就用木块砍。这样，捶到的地方就变成平坝，砍到的地方就成山沟，没有捶到和砍到的地方变成高山。

又传说，天地开辟之后，木比塔看到大地上很平静，便开始造人。木比塔用羊角花树干照着自己的模样，用宝刀刻削成九对小木人放到地坑里，盖上石板。每天，木比塔轻轻地揭开石板观看，第一个戊日，小木人眨眼睛；第二个戊日，小木人摆头甩手；第三个戊日，地坑里有响动和说话声。木比塔揭开石板，小木人跑出来，见风即长，一下长成大人，漫山遍野跑动。从此，地上有了人种。羌族有逢戊日不动土的习俗，据说即来源于此。不久，

地上的人越来越多，木比塔看到人类乱配，很生气，便叫女神俄巴巴西掌管凡人婚配，俄巴巴西住进人神交界的喀尔克别山上的羊角花丛中，让每一个到凡间投生的人采一束羊角花到人间投生，为他们配好对。直到今天，羌族青年男女订婚互赠羊角花后，男青年要捧回羊角花，摆在屋顶塔子前，向天神阿爸木比塔谢恩。

推　杆

推杆是羌族人民异常喜爱的一项传统体育活动。杆长约 3 米，直径约 8 厘米。一般是两人各为攻方和守方，相对而立，守方紧握木杆一端，并可用双腿夹住木杆；攻方双手抓住木杆的另一端向前推。若在击五次掌的时间内将木杆推过 50 厘米的一条线，即攻方获胜，否则为守方取胜。推杆的比赛规则要求双方将木杆保持平衡，不得抬高，也不准左右摆动。由于守方比较省力，有时比赛中双方人数可以适当增加，比赛时间亦相应延长。有时守方是一位小伙子，攻方是几位姑娘。他们的强烈竞争，常常吸引许多观众。



羌族推杆的产生，有一个传说。相传很久以前，羌族受到外敌的侵犯，他们为了抵御外敌，组织了一支手持长矛的军队。这支军队英勇杀敌，终于取得了胜利。在庆功大会上，武士们都不愿表白自己的战功。为了确认谁是英雄，有人出主意，将长矛的

矛头取下，以推杆的方式来进行比赛，结果终于把力气最大的武士选择出来。人们尊他为英雄，纷纷给他敬酒。从此，这种推杆比赛便世代流传下来，成为羌族人民传统的体育项目。

五月五

羌族是一个能歌善舞的民族，无论婚丧嫁娶或其他节日，都要载歌载舞，气氛极为热烈，直至尽兴而散。羌族中群众性的舞蹈要数莎朗舞。

关于莎朗的来历，羌族人有一个动人的传说：莎朗原是天上一位美丽的女神，能歌善舞，每当红日东升、朝霞满天时，莎朗女神就在天庭唱歌跳舞。有一天，她正在歌舞，低头看见辛勤劳动的羌族男女，他们休息时只是低头叹气，没有欢乐。女神想，我何不教他们学会唱歌跳舞，让他们在劳动之余或节假日里能欢乐高兴呢？于是，莎朗女神在五月初五这天降到了人间。她围着美丽的海子唱起歌，跳起舞。女神清亮的歌声和优美的舞姿引来无数羌民，使他们陶醉了，大家情不自禁地跟着她唱，跟着她跳。很快，羌民们便学会了很多歌舞。从此，每年五月初五，羌民们都要聚集在海子周围，等待莎郎女神来教他们唱歌跳舞。这样，一代又一代，羌族就成了能歌善舞的民族。每年五月初五，羌寨一片欢腾，人们载歌载舞，一唱一答，不时变换队形，通宵达旦，其乐无穷。

羌　笛

羌笛是羌族民间的一种竹管吹奏乐器，它是秦汉时期由在西北游牧的古羌人所发明。羌笛最初是以羊足骨或天鹅足骨做成，兼

作牧鞭和哨子用。到了隋唐时期，羌笛在原三四音孔的基础上增加为五孔，基本定型成能演奏曲调的乐器。马融所写的《长笛赋》，比较详细地记述了羌笛的演变过程。唐代，羌笛几乎成了西部最流行的乐器，羌笛在唐诗中频频出现，如王之涣的“羌笛何须怨杨柳？春风不度玉门关”。

流传至现在的羌笛，在原来基础上又增加一音孔，成为六声阶双筮双管竖笛，笛长约15至20厘米，笛管用岷江上游的油竹制成，筷形方体，粗如小指，两管相并用丝线缠紧，再漆上土漆，使之美观而不易干裂。训练有素的演奏者常以“鼓腮换气法”吹奏，一曲未终，乐音不绝。笛声柔和纤细，悠扬婉转，既适宜于平时抒情，也能登台独奏。

●布朗族

布朗族人口为82,280人（1990年统计），主要分布在云南省西双版纳傣族自治州勐海、景洪及临沧地区的双江、永德、云县、耿马等县。

布朗族自称因地而异，居住在西双版纳的自称“布朗”，双江、云县、耿马的自称“阿氏”、“瓦”等。解放后，根据本民族人民的意愿，统称为布朗族。

布朗族有自己的语言，布朗语属南亚语系孟高棉语族瓦德昂语支；无本民族文字，部分人使用汉文、傣文。

布朗族主要信仰多神，崇拜祖先，西双版纳等地的布朗族信仰小乘佛教。

三尾螺头饰

布朗族妇女一般都头挽发髻，发髻上通常戴各种饰品，尤其喜欢别一枚名叫“戛丝戛中”的银簪，银簪上铸有精美的“三尾螺”图案。有些妇女平时头扎包头，其式样是用白布帕巾缠绕成三尾螺的样子。布朗族妇女头饰与三尾螺的关系，有一段美丽动人的故事。相传在云南省景洪地方的回桑寨，有一位娟秀活泼的布朗姑娘名叫亿英。一天，伙伴们和她一起在寨边的南木河中击水嬉戏，捡到一枚洁白晶莹而又少见的三尾螺壳，随手将它别在亿英的发髻上，从此，她的容貌每天三变。早上，脸庞白嫩娇美，像含露的玉兰；中午，脸庞红润甜美，像熟透的红果；晚上，脸庞淡绿秀美，像染绿的银盘。乡亲们都喜爱地称她为“朗三飘”（意为一日三变的姑娘）。不久，“朗三飘”的美称传遍远近山寨，也引起了傣族领主“召片领”叭罕的注意。叭罕施展计谋和淫威，将亿英霸占为妾，叭罕的正妻嫉妒亿英美貌得宠，处心积虑加以陷害。一天，正妻派侍从探得“朗三飘”之所以一日三变容貌，博得叭罕欢心，是因为她的发髻上别有三尾螺壳的装饰品，于是设计将亿英骗到后宫，乘她去洗澡的工夫，将拔下的三尾螺壳饰品抢到手将之砸碎。“朗三飘”亿英从此失去三尾螺，美色顿减，叭罕对其渐生厌倦，将她赶回山寨，原说免除回桑寨地方的赋税徭役又恢复起来，加重了布朗人的负担。布朗人不堪重负，举寨迁徙，奋起反抗，途中亿英遇上官兵罹难，一腔热血洒在故乡土地上。后来，布朗族为了纪念这位美丽不幸的姑娘，将她的事迹编成故事流传。布朗族妇女为了纪念她，便把铸有三尾螺图案的银簪别在发髻上，期望她的遭遇和不幸永远不再出现，幸福美满的婚姻能降临在每个普通人身上。

剁　生

布朗族的饮食，品类繁多，风味独特。除喜食酸、辣、香、凉的食品外，食生也是他们饮食的一种习惯。其中，他们最喜欢吃的风味佳肴有一种叫做“剁生”。

剁生的制法是：将选好的猪的里脊肉剁成碎末，再拌以经过淘米水加工处理祛其涩味的猪血，随后放酸木瓜水使肉浸透，再撒上盐巴、生姜末、辣椒粉、花椒粉、大蒜泥、香菜等佐料拌匀，腌渍一会儿，待佐料浸入肉中，即可食用。

剁生食品肉鲜色美，香、酸、麻、辣、凉五味俱全，备受布朗族人民的欢迎。但由于选肉严格，制作手续复杂费工，所以，平时人们很少吃，只有在杀猪、宰牛、过年、过节、猎获到野兽或接待贵宾时，才制作剁生，故剁生又是布朗族人民待客的最好菜肴。这种菜肴据说早在14世纪60年代时（即明朝期间），在布朗族地区就已经出现。经过数百年传承延续，发展至今，吃法上又有了新的变化。除生吃外，现在还有的布朗族家庭将剁碎的里脊肉烤熟或炒熟后，放上佐料食用，味道更为鲜美，并成为逢年过节待客时的一道名菜。

此外，布朗族还生食小鱼、小虾、螃蟹等，生吃鱼虾时，一定要在佐料中加上大蒜，以去其腥味。

酸　茶

云南布朗族嗜好酸性饮食。他们常用酸鱼、酸肉、酸笋、酸菜等食品做为平时待客的佳肴。而酸茶则是他们保持了多年的一种具有民族特色和地区特色的特殊饮料。

布朗族聚居的西双版纳勐海县布朗山地区，是驰名中外的普洱茶主要产地。这里的布朗族酷爱种茶，善于制茶。每当茶树抽出嫩芽，山坡一片碧绿，灵巧的布朗族姑娘即走进茶园，采撷茶叶，然后经过土法加工，制成散茶（或称大叶子茶）、竹筒茶和酸茶等。

酸茶的制法是：先将采下的鲜茶叶煮熟，放在洁净的阴凉处，几天后，待茶叶发酵变酸后，将其装入事先准备好的竹节筒（用粗竹砍制成的）内，至大半筒时，用塞子塞紧，再用竹笋叶将整个竹筒包好，藤条绑紧扎牢，埋在土中，三四个月后取出，即成酸茶。

酸茶，味清香且酸，有止渴生津解暑之效。布朗族居住区大多在海拔 1500 米到 2300 米之间的崇山峻岭之中，气候湿热，即使是冬天，气温也高达 30℃ 左右。在这种炎热天气中生活，群众劳累一天，疲惫不堪，回家喝上一碗酸茶，既能润口解渴，又能解乏提神，还能促进食欲，帮助消化。当远方的客人踏进布朗山寨的茅屋或竹楼时，热情好客的布朗人，常常双手捧上一碗浓郁醇香、味酸可口的酸茶送进客人口中，客人会感到主人待客亲切热情。

酸茶不仅是上好的饮料，还是青年男女成婚定情不可缺少的馈赠礼品。在举行成年礼进入恋爱期后，不管男女双方感情如何纯真笃厚，如果男方不向女方送酸茶或者女方不接受男家送来的酸茶等礼品时，即不能算有正常的婚姻关系。布朗族还有这样的习惯：未送酸茶而男女同居谓之私通，这样的男女青年所生子女为私生子，他们不能在母亲出嫁后随其加入父亲或继父的氏族，只能留在母亲原来的氏族内等长大成人后继承舅父母的财产。如果母亲出嫁将私生子带到夫家，这个私生子不能算作父亲氏族的成员。可见，酸茶在过去构成布朗族男女婚姻家庭关系上有着举足

轻重的作用。

从妻居

居住在云南省西双版纳布朗山和澜沧县的布朗族，几十年前在婚姻形态上还保留着“从妻居”特点。

从妻居，布朗语称作“应墨客”，意思是男子到女家去过婚姻生活。这种从妻居的婚俗，可能是远古时期母权制婚姻留下来的残余，与其他民族的从妻居婚俗相比，尚有许多不同处。

布朗族男女青年的婚姻，从寻找情侣到最后完婚，分为“甘伯”（订婚）、“甘内木”（结婚）和“甘教特”（由从妻居转为从夫居）三个阶段。“甘伯”和“甘内木”期间，是男子履行访问妻子的从妻居阶段；“甘教特”是丈夫将妻子及子女接回自己家里，由从妻居转入从夫居阶段。

一般男女青年，在举行过做“节”的成年礼之后，即开始自由恋爱。当彼此产生爱慕之情，姑娘愿意许配终身时，男方便请媒人带着酸茶叶、草烟、猪肉等物品到女家说亲。如果女方父母同意，便收下礼品，并请亲友及本“嘎滚”（意为“家族”）内的各户来喝酸茶，吃草烟，这就算订婚了。以后，未婚夫便可以在女家与其未婚妻同房，布朗语叫做“都尔苦戛”。从此，男子即开始了从妻居的生活。也有另一种情况，就是男子在晚上去女家访问的时候，很多伙伴们离去，房中只剩下主人家的姑娘和一男子谈情说爱，这时父母听到，并且也喜欢这个青年，姑娘的父母即不要任何礼品，留下这个男子同姑娘同居。事后，男青年回家告诉其父母，再托人往女家去说亲，履行一下订婚的仪式。

从妻居的形式有三种：一是男女双方事先商定好，丈夫结婚后，终生生活在妻家，算作妻家的家族成员；二是男子从妻居须

持续三年，三年期间，吃、住、劳动、生活在妻家，算作女家成员，三年从妻居期满后，带着妻（有子女的带着子女）返回自己家中，仍为父系家庭成员；三是男子在从妻居的三年期间，白天吃、住、劳动、生活均在自己父亲家中，只有晚上才回到妻家去住，这种情况男子不算妻家的家庭成员。

男子从妻居后，根据布朗族的风俗习惯，要举行两次婚礼，才能结束从妻居的婚姻阶段。第一次婚礼，在从妻居一年后举行。结婚典礼完毕，丈夫仍然过着从妻居的生活。待三年从妻居期满后，男方才有权同女方商议，选定吉日，举行第二次婚礼，将妻子和从妻居期间所生子女接回自己家中共同生活。在妻子未接走之前，女家父母必须置办好嫁妆，诸如篾衣柜、锄头、镰刀、篾凳、桌子及茶叶、竹蓬、铁锅、土衣、衣饰、猪、鸡等。届时，随着送亲队伍一起抬到男家。男家这时也备好聘金等礼物，迎亲时交给亲家作为酬谢。妻子到了夫家，婆婆等候在楼梯口，递给她一条新筒裙，新娘接过去，与第一次婚礼时母亲送给新郎的上衣叠在一起。送亲的女伴和迎亲的男伴各持二对蜡条，代表新婚夫妇互相交换后，再转交新娘和新郎。接着，请村寨中德高望重的老人给夫妻两人拴线（带来的子女也要举行拴线仪式），“布占”（祭司）念诵祝词。仪式结束，宴请亲友，这才算正式完婚。

婚后三天，新郎和新娘带着孕布、一对蜡条、一斤肉、一壶热水到证婚老人家里磕头致谢。从此，妻子便在丈夫家长期居住下来，正式成为丈夫家族中的一个成员。

布朗族从妻居的婚俗，各地不尽相同，在个别地方，也有终身不举行结婚礼仪的，一直过着从妻居的生活。这种男子，只能算作女方家族成员，不能参加自己父亲的家族。以后，自己也不能再成立“嘎滚”。

爬竿取包

布朗族青年在其“梅果”（女友）或“负果”（男友）中选定终身伴侣后，要举行正式结婚典礼。届时，按照布朗族的婚俗，男女双方两个家族的亲友要进行爬竿摘囊比赛。其场面妙趣横生，热闹非凡，给婚礼增加了极为欢快的喜庆气氛。

这种婚仪，早在清雍正年间就曾在《顺宁府志》上有过记载，民国时，《五福县志稿》也有较生动的描述。迎娶新娘时，要“植竿系彩球于端，使两姓亲友争而取之，得者为荣”。直到现代，在勐海县布朗族地区仍保持着这一婚俗。在婚礼的前夕，父母首先将姑娘头顶周围的头发削去，只留一小撮发髻，以示姑娘与媳妇的区别。待一切准备就绪，即开始举行婚礼。

婚礼由村寨头人“召曼”主持。先在寨桩处举行宗教仪式。寨桩用“阿曼”树做成，中间立一大棵，周围立七小棵，是寨子的象征物。仪式开始前，将一瓶酒、一碗饭和一碗菜放在寨桩处。举行礼仪时，只允许已婚男子参加，女的不能参加。当新郎被引到指定的地方站定后，召曼即开始祭祀。之后，全寨男女老少，在芦笙声中跳起孔雀舞，并把新娘迎接到男家。与此同时，在男家庭院前竖起一根高而粗的竹竿，竿周围围拥着新婚男女两家的亲友和一些风华正茂的青年男子。大家的眼睛都瞄射着竹竿顶端吊挂着的新娘精心绣制的“棉包锦囊”（内装有五谷、银器），心中琢磨着如何在爬竿比赛中取胜，以获取这一吉祥之物。当比赛开始后，一些年轻后生争先恐后抢着爬竿。由于竹竿上涂了油蜡，后生们有的刚爬了一点，有的爬到半截，有的则几乎爬到了顶端，又都滑了下来。他们中有的摔得仰面躺在地上，有的被摔得直喊叫，有的则蜷缩着抱竿而下，真是洋相百出，惹得在场的人们笑得前

仰后合，喧闹不已。最后，在一片助威声中，机智的强者爬到竿顶，摘下锦囊，比赛告捷。锦囊赠于获胜者，婚礼在异常热闹的气氛中结束。

养　子

在布朗族的社会生活中，仍保存着从妻居时期传下来的收养养子的习俗。这种习俗，对每个民族的家庭来说，是一种应尽的社会义务，因为养子绝大多数是孤儿或家境比较贫寒而养育不起的孩子。收养养子是布朗族传统美德，受到社会舆论的赞扬。

一对夫妇没有生育子女，或一生过着“恩克衣冠”（未婚女子）和“沙拉冠”（未婚男子）生活的男女，他们往往要收养养子。收养养子一般是先由氏族长召开氏族会议，征询本氏族内成员的意见，若当场没有人反对，氏族长即把小孩送交给愿意抚养者的家中。

养子分“滚格”、“滚赕钵”、“鲁林”三种不同的情况。

“滚格”为不同家族或亲友的孩子，因父母双亡，孤苦伶仃无人抚养，主动投靠并被接收为养子者。接纳“滚格”时，如果养父母高兴，还会邀请氏族成员到家中吃饭，由家族长替养子举行拴线、滴水仪式，以示同意该养子被吸收为本氏族成员。养子长大成人后，可另立门户，也可同养父母同居一室。养子有继承养父母财产的权利，也有赡养养父母的义务。

“滚赕钵”为男女婚后长期不育，从别的氏族或亲友那里抱养过来的孩子。抱养时，往往先经过双方协商，请管理本村寨宗教祭祀的“布占”卜卦请示神灵；一俟神灵同意，再由布占择定吉日，两边父母为养子举行送迎仪式。养父母向其亲生父母赠送衣物，作为酬谢，并用三对蜡条请布占主持向家族神灵祈祷，经给

养子拴线后，更改名字，即成为养父所在氏族的成员。这种养子，一般都按亲子女对待，在养父母家享受一切子女应享受的权利。

“鲁林”多为无家可归的孤儿或者因父母家贫欠债、无力偿还而用来抵债的子女。这类养子，在养父母家中的待遇与前两种大不相同。收养后，不能更换名字，也没有财产继承权，在养父母家，享受不到子女应得的照应，还要从事家务劳动和田间劳动，常常挨打受骂遭虐待，实际处于家奴的地位。

以上三种，尽管情况不同，待遇不一，但他们却很少在中途被养父母所遗弃。收养养子的习惯至今在布朗族社会中仍有流行。

做“节”

云南西双版纳布朗族少年男女到了十四五岁，在举行做“节”的成年礼仪之后，才被社会承认是成年人，并获得参加村寨社交活动的权利，可以恋爱择偶。

所谓做“节”，实则是一群未婚男女在一起互相染牙齿（也称“漆齿”）的聚会。染牙齿是古代布朗族先民留下的遗俗。

过去，布朗族男孩子长到 9 岁，父母即要把他送到佛寺去当“帕囡”（小和尚）。到 15 岁时，已进入成年，他们还俗返家，开始学习弹琴、唱情歌。女孩子进入成年时，则由父亲给她编个小篾板凳和一个小竹箩，造一架纺车，准备一套新衣裙，及一块供染牙齿用的铁锅片，以等待着举行做“节”仪式。

做“节”仪式，不规定具体时间，而根据寨中男女青年成长的情况来决定，一般每两三年举行一次，通常选在 12 月某天的傍晚开始。

过去做“节”，往往是一群进入成年的男孩，相约到某一进入成年女孩家中，与在那里等候的女伴们聚集，并为她们染牙齿。之

后，染黑牙齿的姑娘们再在佛寺里为男伴们染牙齿。

现在，有的地方已经有所改变。当日落西山，晚霞射进布朗人的竹楼时，身穿洁白短衫和绚丽筒裙的姑娘，三五成群走下竹楼，聚集在楼外空场上，边说笑，边做女红。夜幕降临，她们燃起篝火，等着男青年的到来。当一群身着新装，腰挎长刀，身背“筒帕”，手拿竹笛或二胡的小伙子，高兴地来到姑娘们面前时，她们马上让座，并接过他们送的草烟、槟榔叶、石灰等礼物。随后，大家就用红毛树的树枝，在铁锅片上烧取黑烟，开始互相染牙齿。染牙齿时，一般是男青年按照年龄大小依次帮女青年染完后，姑娘们再依同样的顺序给小伙子们染牙齿。经过染齿，姑娘们变为“拜恩连西”，小伙子们则成为“沙来因”，即成年男女的意思。

在染齿过程中，若有一对青年男女互送秋波，并被同伴们发现，大家便自觉地离开现场；也有的男女二人趁大家玩兴正浓之际，悄然离去，找个僻静的地方，开始谈情说爱。但这种现象只是少数，多数均是在举行成年礼做“节”后，男青年晚上成群地相伴去某姑娘家，与在那里的女青年们进行集体访问，叫“串姑娘”，通过访问互相了解，选择对象。姑娘们对前来访问的小伙子们，一般不能拒绝，即使有的有了意中人或未婚夫，在正式结婚前也不能回绝或冷落来访者。有时其未婚夫在场，也不能表现出不耐烦，这是先辈人留下来的规矩。不过当他们发现对方已有中意恋人时，都能够采取互让的态度，绝不会因此伤害彼此的友好感情。这是做“节”后青年男女“串姑娘”时共同信守的习惯和美德。

布朗族葬俗

布朗族人死后，实行土葬，也有实行火葬的。葬时，多用竹

篾编织的藤棺，也有用木棺的。但埋葬的方式，仍保留着古老的台葬和叠葬习俗。

在西双版纳布朗族地区，人死后要举行葬礼，即经过亲朋好友吊唁，请大佛爷念经，超度亡魂后方可入殓。入殓时，要取茶叶、芭蕉、饭团、蜡条等物放在死者的手上，再用白线一头拴住死者的大拇指，另一头拉出棺外，然后封棺。待起棺时，将白线用刀砍断，其用意是：死人有魂，线不断，鬼魂不离家，线断即意味着人的躯体走了，其灵魂也随着与家庭脱离了关系。这一仪式结束后，才由村寨头人“召曼”手执火把作前导，组织众人把棺材抬出家门，送往墓地。接着举行祈祷仪式，再将尸体从棺内抬出，头朝东脚朝西放入墓坑，盖土掩埋。最后，众人把棺材连同抬棺用的竹竿一起砍烂盖在掩尸的土上，并一一向死者辞别。返回时，众人在前，“召曼”在后，沿途还要念经叫魂，边走边撒树叶，以示死者鬼魂留下，活人的灵魂要回村寨，与死者彻底分离。

在双江地区的布朗族，葬式又有不同。人死后不土葬而实行火葬。葬前，先将白布从棺木内一直拉出门外广场，象征性给死者搭桥渡河，随后才将棺材抬到墓地，棺尸一起火化。次日，死者家属再用白布将骨灰包好放在墓穴内，用土掩埋堆成墓状。

西双版纳布朗族的墓地为公共所有，设在本寨的落日方向，每个村寨都有一座。墓地分有四台，按死者年龄的长幼依次分台下葬。七八十岁的老人葬在最上一台；五六十岁的人葬在其次一台；三四十岁的葬在再下一台；三十岁以下包括儿童在内葬在山脚最下一台。这种埋葬方式，通常称为台葬。

保山地区的布朗族，人死后是根据辈份，由上而下，或由下而上，即第一代为第一排，第二代为第二排，第三代、第四代依次排列下葬。而有的地方也是按辈份下葬，但不是排成横排，而是不分男女性别，均在同一墓坑内重叠而葬，自然形成叠葬的形

式。这种葬法，在我国还是很特殊的。

至于属于非正常死亡者，诸如自杀、他杀等凶死者，则不能与正常死亡者同葬在公共墓地上，只能远埋在他处。埋葬时，墓坑较浅，尸体头朝西脚朝东，仰面直葬，不留痕迹，不举行葬礼。

代袜么和代袜那

西双版纳布朗族每个村寨都有寨心神，其标志有的是在村寨的中心处竖一木柱，周围垒上一些石头，有的则在寨中心立五根木桩，中间一根削尖作为标记。

寨心神有两个，即“代袜么”和“代袜那”。“代袜么”是女性，“代袜那”是男性。据说很久以前，他们都是布朗族的祖先，是古老的氏族长。直到现代，人们仍然认为：今天的一切，诸如美味佳肴、艳丽的服饰、舒适的住宅、本民族具备的文化等等都是祖宗所赐，所以对祖先的神灵特别尊敬崇拜。供奉寨心神的神台是神圣不可侵犯的地方，如果有猪、鸡跳进寨心神神台上，便被认为“召曼”没有负起责任，不称职，不能再任职，必须选新人接替。不仅如此，人们还认为寨心神是全村寨成员吉凶祸福的主宰者，因此，事事必须乞求它保佑。平时，每逢喜庆节日，或者遇到村寨中有人家举办婚丧大事、建屋造房，须送两对蜡条给“召曼”，请其代向寨心神祈祷许愿，以求祖神保佑；村社接纳新社员，不能随便吸收，必须由本人先持蜡条亲自到“召曼”家，求其向寨心神致祭，祭礼毕，才能算为本村社正式社员，否则，就不能得到寨心神的保佑。

布朗族由母系社会步入父系社会，母系祖先和父系祖先都同时被列为他们崇拜的对象。到农村公社时，“代袜么”、“代袜那”两个祖先逐渐变为村社共同敬仰的偶像，并作为寨心神（有的村

寨称为“得那曼”）供奉着。在布朗族地区，每年阳历2月及7月要举行三天的祭寨心神活动。

祭祀寨心神要由“召曼”主持，先杀鸡一只，围村寨四周绕祭，然后，再带领出祭群众到寨中央祭寨心神。此刻，全寨氏族成员停止生产，在外边做工的及在田间劳动的，也要按规定回到寨内参加祭祀活动。这一天，寨门外挂起木刻、篾盘等器物，作为禁止外人进入寨内的标志。如果来人违反了这一规矩，则毫不客气地罚猪一口，以作祭祀之用。即使本寨成员，在祭祀活动期间，也要遵守各种村规，不磨刀，不背水，不出入寨门，不吵架斗殴。待祭祀活动结束后，才开禁允许自由活动。

宋坎节

“宋坎节”是布朗族的盛大节日，在每年清明节后7天举行。节日的主要活动是泼水以迎接太阳。

这个节日来源于神人顾米亚的传说。相传神人顾米亚为了开辟天地，为人们造福，费了很多周折，射死了与他作对的八个太阳和九个月亮，剩下一个太阳和一个月亮害怕再被顾米亚射死，躲藏了起来，于是宇宙间顿时失去了光明和温暖，大地上变得一片黑暗，气候寒冷，冻得人们终日发抖打战。顾米亚为了拯救人类，使大地重现光明，设法去请太阳和月亮出来，最后，由公鸡作保并议定，每天早上公鸡叫太阳出。从此，天地间，万物才又恢复了光明和生机。顾米亚则成了开天辟地造福于人类的神人。为了纪念这一传说中的人物，每到宋坎节时，布朗人都要早早起来，走出寨子迎接太阳出来。在西双版纳布朗族地区，迎接太阳的地点，设在村寨的东边地头。节前，布朗族群众在这里搭起彩棚，到了节日这天黎明，人们一听到公鸡叫声，立即起来着好盛装，带上

篮、竹盒（内装有糯米饭、紫米粑粑、鱼、肉、鸡、瓜果等食品），举着旗幡，扶老携幼，随着铿锣的节奏，模仿着动物动作，边唱边舞，走向迎太阳的场地。

当东方破晓时，人们便走进彩棚，将带来的食品放在铺在地上的红布上，献给太阳神。然后各就各位，老人坐在红布旁边，小孩坐在离红布较远的地方。坐定后，在村寨头人“召曼”的主持下，迎接太阳的仪式开始。这时，棚内由“佛爷”（小乘佛教中比和尚高的僧侣）念颂扬太阳的吉祥词，棚外随着旭日缓缓东升人们放起“高升”（土造烟火），并迎着太阳射出的万道霞光，尽情跳舞唱歌。接着，男女青年互相泼水，以祝愿新的一年风调雨顺，人畜两旺，万事如意，一直欢跳到太阳转向西方，人们才在佛爷的带领下返回村寨，意味着把太阳迎回自己的家中。

居住在临沧地区的布朗族，在宋坎节这一天早上，大家穿上新衣，带上事先炸好的“考嘭”（米花）、红糖糯米糕，聚集在佛寺前的菩提树下堆沙成塔状，然后，把花枝插在沙塔上，再把所带米花、糯米糕等食品献给佛爷。随之，老人进佛堂赕佛，男女青年聚在一起，进行丢包、对唱情歌等活动。当太阳转向西方时，即开始表演“走阵势”（各种队列），男子们则进行对打游戏。次日，青壮年集体去“撵山”（狩猎），妇女们在家中准备饭菜，老人们则互相请吃酒宴，席间畅谈古今，热闹异常。

现在，宋坎节的内容比过去有很多改变，除以往的传统活动外，又增加了现代文娱节目的表演和体育比赛，更为广大群众所欢迎。

●撒拉族

撒拉族人口为87,697人（1990年统计），主要聚居在青海省循化撒拉族自治县，以及与其毗邻的化隆回族自治县和甘肃省积石山保安族东乡族撒拉族自治县。

撒拉族史称“撒喇儿”、“撒喇族”、“撒拉回”等，自称“撒拉尔”。解放后，统称为撒拉族。

撒拉族有自己的语言，撒拉语属阿尔泰语系突厥语族西匈语支。无本民族文字，通用汉文。

撒拉族信仰伊斯兰教。

吾热合苏斯

“吾热合苏斯”系撒拉语，意为“亲家之言”。按照撒拉族的婚俗，姑娘出嫁至男家时，要由女方送亲的长辈（或请民间艺人），在宴席前向男方亲家说嘱托词，称之为“吾热合苏斯”。

“吾热合苏斯”的内容广泛，反映的社会生活面很广。说者以优美的语言和形象的比喻，先赞美受人尊敬的阿訇、老人、阿舅、媒人以及全体莅临的人们；然后说古道今，谈论人生，赞扬婚事，表达情意，祝贺新婚之喜，祝愿新郎新娘夫妻相亲相爱，白头偕老；希望亲家和睦，长期往来；并嘱托亲家对年轻无知的新娘要多加爱护，言传身教……俗话说，话是开心的钥匙，这一串句句在理、动人心弦的话语，犹如甘甜雨露，洒落在人们的心田，使其积怨化恩，亲更亲。一支好的“吾热合苏斯”的力量是出人意料的，以后每当两亲家之间发生矛盾，或偶结冤仇，调解者便以当年婚礼上讲的“吾热合苏斯”的有关内容，解开他们心中的疙瘩。所以，撒拉族婚礼上讲究说“吾热合苏斯”，就成为一种传统习俗。

婚礼上的挤门

在撒拉族的婚礼上，当盛装的新娘在亲朋好友的簇拥下来到新郎家时，在新郎家的大门口，同村的小伙子正准备“挤门”——阻挡新娘入门。

对于送亲一方来说，他们认为这一天是新娘一生中最宝贵的日子，应该足不沾尘，由长辈直接抱入洞房；迎亲的一方却认为这样过于贬低了新郎的身价，硬要新娘下马步行。于是你冲我堵，

互不相让。挤门的结果，如男方胜利了，新娘就得毫无怨言地下马步行入门，反之则由长辈抱入室内。有时候，挤门的双方甚至会发生一场有趣的“战斗”，致使有送亲人把新娘带回的举动。但这不用耽心，经长者对本村青年严厉训斥，对送亲者和颜悦色地赔个不是，苦苦央告一番后，客人们还会一一返回。这种充满趣味而别致的习俗，经长期流传后，其娱乐性超过它原来的内涵。挤门时愉快的呼喊，热闹的场面，把婚礼推向高潮。

赫撒斯

撒拉族姑娘出嫁前夕，有哭唱习俗。她们哭唱的曲调，撒拉语称作“赫撒斯”，意思是“解开辫子变发型”。这也是撒拉族迎亲的重要仪式。

届时，至亲好友和“金兰姐妹”们前来姑娘的闺房中，一边看长辈为嫁女改变发式，梳妆打扮，一边倾听姑娘“哭嫁”。哭嫁歌的内容多种多样，由于每个姑娘的处境不同，婚姻状况各异，所以吟唱的内容也不一样。习惯上允许歌者以基本的歌调，即兴编词，创作出与众不同的赫撒斯。现代撒拉族姑娘哭嫁，多为离别父母、告别亲人而哭，但在旧时代，哭嫁歌中则包含着姑娘们对早婚的不满，对封建买卖婚姻的痛恨。如一首传统的哭嫁歌中唱道：

哭呀哭呀，哭赫撒斯……
黑骡子拉到大门口，
逼着要我上乘骑；
骨架还嫩血未稠，
头发未长全就送我出大门。
你把金子般的女儿，

当成了瓦片一块；
你把富家的财礼，
当成了富贵荣华……

梳妆打扮后，新娘在女方长辈们的搀扶下，被众人簇护着，一边低声吟唱赫撒斯，一边缓步退出大门。大门外，前来迎亲的骡马早已准备停当，等新娘绕坐骑一周，向父母姐妹们告别后，便上马启程。浩浩荡荡的人群马队，拥着盛装打扮的新娘，向男家进发。

撒拉曲

撒拉曲是撒拉族人民用本民族语言（也有用汉语）演唱的一种长篇抒情诗。它是由若干段短体小诗组成，这些短诗围绕着主题叙述一个完整的故事，或抒发某种情感。每首撒拉曲都有一套固定的曲调，并切合主题，表达喜怒哀乐。从内容上看，撒拉曲大多数属于抒发男女恋情的情歌。撒拉曲以其优美的曲调，明快的节奏，丰富的内容而为撒拉族人民所喜爱，并在群众中广为流传。

骆驼戏

骆驼戏，撒拉语称“对委奥依纳”。它是撒拉族在结婚时举行的一种特有表演。

新婚之夜，皓月当空。撒拉族男女老幼围坐成圈，观看骆驼戏表演。骆驼戏由四人表演，其中两人翻穿皮袄扮骆驼，一人身穿长袍，头缠“太斯达尔”（头巾），扮演撒拉族先民的首领尕勒莽阿訇，另一人扮演当地的蒙古人。表演在一阵悠扬悦耳的驼铃声中开始。整个表演分为两个部分，前半部分以人物对白的形式，

追述尕勒莽率领的撒拉族先民一行，从中亚撒马尔罕迁徙到青海循化街子地方的全部历程；后半部分是撒拉族先民用撒拉族韵文朗诵的诗句。演出时，台上的演员与台下的观众互相呼应，群情沸腾。尤其在演完主要情节之后，口齿伶俐的演员往往要即兴添加对白，或“要挟”婆家出钱招待，或指出办婚事“不周到”之处。此时，观众与表演者融为一体，气氛达到高潮。

骆驼戏的表演，一方面给婚礼增添了欢乐，同时也重温了本民族的历史。“对委奥依纳”和热烈的婚礼结合起来，使婚礼变成一堂民族史教育课。所以，至今撒拉族仍把结婚叫做“对委”。

的格乃奥依娜

撒拉族人民能歌善舞，无论婚嫁喜日，还是劳动间隙，都是曲不离口，舞不离身。他们在长期的劳动生活中，以自己的聪明才智，创造了一个个优美动人的“的格乃奥依娜”（“的格乃”意为跳，“奥依娜”意为玩或演）。

《阿里玛》一般是在婚嫁喜庆的夜晚所表演的舞蹈，但在田间地头也常能见到。“阿里玛”即海棠，是撒拉族小伙子对俊俏的撒拉姑娘的热情赞美。《依秀儿玛秀儿》是全由男子表演的舞蹈，主要流行于循化孟达地区。“依秀儿玛秀儿”的意思是“瞧呀，全向

我身上瞧呀”，主要是炫耀撒拉青年男子的英俊、精干、勇敢和强悍。除上述舞蹈外，还有《骆驼舞》、《拔草舞》、《打碾舞》、《打墙舞》、《伐木舞》、《打猎舞》等，劳动生活气息浓郁，新颖别致。

撒拉族的舞蹈虽说舞姿简单，又没什么乐器伴奏，但却具有浓郁的乡土气息和强烈的民族特色，深受撒拉族人民所喜爱。

打“蚂蚱”

打“蚂蚱”是撒拉族的一项体育项目，比赛方法大致和门球相似。“蚂蚱”两头削尖，呈枣核状，拍板做成大刀状。比赛时，攻守双方先由二人以上组队，人数相等，再在地上划一圆圈为雷区。确定击板权后，由一方开始进攻，轮流将“蚂蚱”放在圈内最佳处，然后用木板刃轻轻向“蚂蚱”一端一砍，“蚂蚱”必然腾空而起，攻手立刻再跟上一板，将空中的“蚂蚱”击向远处。防守人员迅速跳动，竭力去接“蚂蚱”。若是接着了，这位攻手就被“杀死”了；若没接住，就在原地将“蚂蚱”掷向雷区，若投中，攻手也被“杀死”，若没中，攻手就地再拍板砍而挥击“蚂蚱”，且用板子丈量“蚂蚱”从落地处到雷区的距离，累计数字为成绩。接着轮到另一方进攻，若是成绩不如对方，便告失败，受对方惩罚。

打“蚂蚱”这一活动妙趣横生，别开生面，深受撒拉族青年的喜爱。

拔　腰

拔腰是撒拉族传统的体育项目。这一活动是在两人之间进行的，不用器械，又不受场地的限制。比赛双方弓腰反臂抱住对方的腰部，当裁判下令后，两人尽力想法将对方拔离地面。这就要

求双方牢牢站稳脚跟，一条腿伸向对方裆下，取半蹲姿势。当对方提自己时，尽力下蹲，同时要伺机提起对方。当对抗到相持不下时，必须不失时机，一鼓作气地将对方提起来，以取得最后胜利。

拔腰是一种极需毅力和耐力的运动，一般竞赛需要三拔两胜才能确定最后的结果，所以它也最能表现撒拉族青年坚韧不拔的性格，因而受到撒拉族青年的普遍喜爱。

宰　靠

和回族一样，撒拉族人民也喜欢吹弹“口弦”，妇女们更是爱不释手。那如泣如诉、扣人心弦的乐音，已成为青年男女倾吐爱情的绝好媒介了。

“宰靠”（笛子），有的地方叫“敲尔”，是撒拉族又一种风格别致的民间乐器，用粘性较强的泥土做成。制作方法很简单，先将泥土捏成两块喇叭花状的凹片，粘在一起，然后在合缝处掏一个小孔供吹气用，两边各掏几个按指音符的小眼，晾干即可吹奏。

“宰靠”体积虽小，音量却很大，不低于竹笛，声音高亢、嘹亮、悠扬、清脆，能把人的思绪引到遥远的旷野草滩。所以，撒拉族青少年在牧羊或野外劳动时，经常吹奏，借以消除寂寞。

●毛南族

毛南族人口为71,968人（1990年统计），主要分布于广西壮族自治区的环江毛南族自治县及河池、南丹、宜山、都安等地。

毛南族自称“阿南”，意为“这个地方的人”。旧称“毛难族”，1986年改为毛南族。

毛南族有自己的语言，毛南语属汉藏语系壮侗语族侗水语支；无本民族文字，通用汉文。

毛南族信仰道教，崇拜多神

花竹帽

花竹帽是毛南族服饰习俗。用毛南山乡盛产的金竹与墨竹破细篾编织而成。它分为表里两层，直径50至60厘米。里层金竹篾子较粗，由16根主篾组成，每根主篾两端均分成15片分篾，加上20至30片横栅交叉编织，沿边用金竹篾与墨竹篾织成多层边花。表层由15片约半厘米宽的金竹主篾组成，每片主篾两端均分成24片分篾，加上60至80片横栅交叉编织。在帽顶上，主篾编成像蜂窝眼一样大的洞眼，沿边用墨竹作横栅，编织成以后，金黄的帽身边沿有一环黑圈。表里两层和顶部分别编好后，先在里层上覆2至3层莎皮纸，后在顶部覆一块花布和一块深蓝布，将表层盖上，再用长篾将两层就着边沿串紧，表层顶部用鹅羽根部破成片，顺着主篾编织的脉络覆上，花竹帽便制成了。对花竹帽，毛南人中流传着一则传说：古代，一位汉族后生从北方流浪到毛南山乡，编制了竹帽。一天，他在山上和一位毛南姑娘突然遇雨，同躲雨于帽下。雨停，姑娘仰望竹帽，发现帽底有精美的花纹，赞叹说："顶卡花!"（毛南语，即帽底有花）后两人结为夫妇，"顶卡花"也流传于毛南山乡。古往今来，毛南族青年男女在行歌坐夜中，每到歌浓情深，男方就赠与女方花竹帽，女方则回赠花针鞋，作为定情信物。毛南姑娘出嫁时，所置备的嫁妆中也必有此帽，有歌云："哪个姑娘要出嫁，买顶花竹帽最要紧"；"新娘少顶花竹帽，伴娘也觉丑三分"。此外，妇女们参加亲友的婚礼，以至走亲访友，出门赶圩，也都必戴花竹帽。

毛南三酸

毛南三酸是毛南族饮食习俗。毛南三酸即三种酸味食品“罗番”、“腩腥”和“瓮煨”。“罗番”为螺蛳酸汤，以山溪所产大钉螺、田螺（只用其壳）为原料。“罗番”的制作过程是，先将浓浓的第一道洗米水倒入陶坛，再把洗净的大钉螺、田螺壳用猪油干炒，透熟发香后趁热倒入坛里，同时把烤香滴油的猪骨头放进去，再加适量生糯米粒，密封三个月后即可开坛食用。吃时，舀出汤水要加盖，汤水少了及时补进洗米水；螺蛳化尽了及时添补新螺蛳。“罗番”的功效在于助消化、解热去痧、防中暑。平时用“罗番”汤调以葱、韭、番茄、青椒、食盐，烧滚成汤。

“腩腥”为酸肉。其制作方法是，将猪、牛肉切成薄片，加拌细盐，放在簸箕里盖上木板，压上石头，两三天后水分挤干了，再拌上糯米饭，放在陶坛里压紧，密封两个月后即可开坛蒸熟食用。久储，酸味更可口。有歌赞曰：“一餐吃腩腥，三天嘴还香；一家吃腩腥，九家软肚肠。”一户人家有无常备的腩腥，是衡量是否富裕的标准。待客有无腩腥，往往被视为对客人是否热情。

“瓮煨”为盐水坛。其制作方法为，将生盐用水煮开熔化，冷却后滤渣倒入陶坛，加入茭头、青椒，密封一个月后便成。可浸腌刀豆、黄瓜、萝卜、番茄、青椒、茭头、豆角和嫩姜等蔬菜，也可浸腌煮熟的猪头肉、猪蹄和肥肉，使腌品变酸、脆化和发香。

毛南菜牛

饲养菜牛，是毛南族传统习俗。毛南人养菜牛采用“圈养法”。将小牛犊圈养喂大，或从外地采购老牛、瘦牛圈养喂肥。菜

牛用竹叶草、莎树叶、浓索、芭芒草等营养丰富的野生青饲料和玉米杆、红薯藤等植物杆喂养，还加喂生盐、米糠、玉米粉、黄豆粉等精饲料。小牛犊喂三年，老牛、瘦牛喂八个月，即成膘壮肉嫩的上等菜牛。民间传说：毛南人信奉的神仙三界公爷为饲养菜牛的创始人。三界公爷每天赶牛到草场后，用赶牛鞭“圈地为栏”，便上山砍柴。一天在山上见八个仙人下棋，他看棋入迷。傍晚，八个人分蟠桃作晚餐，连破八个蟠桃都破八成九，于是发现三界，分桃给他吃，封他为“九仙”，带他上仙山去。走到半路，见清清的山涧水，三界不禁赞叹：“清清的水啊，好洗牛肚打边炉。”众仙人认为他凡念未消，让他仍归凡间。回到草场，牛已繁殖成一大群，他发现这里莎树叶、竹叶草很多，从此便采集它们作为饲料，并改放牧为圈养以避开虎狼。毛南菜牛肉呈粉红色，肉质鲜嫩，油而不腻。毛南人吃菜牛肉，有炖有炒，但最爱打边炉，即将牛肉切成薄片，调以佐料，在滚热的汤里边涮边吃，其风味胜似北京涮羊肉。毛南菜牛畅销两广及港澳市场，深受欢迎。

订亲三步曲

过去，毛南族的婚姻基本属于“父母之命，媒妁之言”的封建婚姻。青年男女订婚，一般分为三个步骤：即“送典”、“穿耳”和“纱结”。首先，男女青年或他们的父母托媒人在双方之间穿针引线，并将双方八字交给法师推算，相合后，由媒人约双方相亲。男女青年在赶圩、赴庙节或在亲友喜宴上会面后，媒人向双方同时伸出手掌征询意见，说：“中意不中意？中意就‘送典’（毛南语，即‘放表态钱’）来！”于是双方就当着父母的面将表态钱放在媒人手掌心。如果钱放得多而且顺当，即表示情投意合，如果双方或一方放得少而且别扭，甚至不放，就表示不合心意。放

表态钱后，男方给女方过财礼，称“穿耳”（毛南语，即“订亲”）。男方财礼越多，女方陪嫁也越多。订亲后，通常在当年冬季或明年春季迎亲。如果因男家准备不及或双方过于年幼而推迟婚期，就先行“纱结”（毛南语，即“踩门”）。女方由姑嫂、女伴陪同到未婚夫家认亲。未婚夫家置办酒席，宴请女方及其亲友，并送见面礼，称“哄媳妇”。女方在男家住一夜，第二天回娘家，从此开始改姑娘的称呼为“媳妇”。

婚礼歌

毛南族青年男女订婚后，男方要请法师选择结婚吉日。女家在婚期前半个月，便约新娘的同辈组建几人至几十人做伴娘，练习唱民歌，并请一两对女歌师作伴。结婚当日，男方接亲队伍到女家后，新娘的母亲端来盛满红蛋、果品等的铜盆和锡壶，在院内举行“折被”仪式。每床被放上一样象征吉祥的果品，并由丈夫子女双全的姑嫂、婶娘折被，歌师唱《折被歌》，每折一床唱一首，歌词如：“折起新被第一床，红蛋香粽里面放；芝麻肉粽香喷喷，艳艳红蛋尽双黄；床床新被阿妈亲手织，婿女睡来暖心房；新被床床含妈心意，但愿来年桃李满园香。”折被结束，歌师代表母亲唱《叮嘱歌》：“媒婆前面带路妹就跟，出了家门莫要回头望；低头走过三重坳，娘伴陪送妹莫慌。”新娘出门下阶时，法师作“送魂”仪式，新娘唱《出门下阶歌》：“栏下牛仔要分槽，河里小鱼要下滩；翻山过坳去婆家，离别父母好心酸。”新娘步行到男家，法师作“招魂”、“敬屯神”、“踢竹桥”等仪式。由丈夫子女双全的妇女牵着新娘的手进屋。厅堂正中设敬神宴席，席中放一个大猪头。女歌师唱《吉日敬神歌》：“今日办喜酒，堂前灯花开；新媳登阶进新房，八方神祇都请来。”请众神饮酒同庆。接着唱《祝

贺歌》："公像葫芦藤，攀满金竹架；奶像山蜜柑，红果满枝挂。"然后转入较自由的演唱，所唱内容有《创世歌》、《盘古歌》、《天地歌》、《龙女汉鹏》等。夜深后，开始转入男女歌师的"盘歌"，谁在盘歌中获胜，主家便将敬神的大猪头奖给谁。伴嫁姑娘中不是主唱歌师的，便被小伙子们请到院外、村边、山坡上开辟新歌场。屋内、屋外对歌通宵。新郎新娘不同房，亲友们也不闹洞房。第二天，新郎的母舅在男家厅堂主持开被仪式，由丈夫子女双全的姑嫂、婶娘打开新被，打开一床，男女歌师就对唱一首《开被歌》。(男)"打开棉被第三床，棉花闪闪满屋堂；一生辛劳难忘记，喜得今日赏花香。"(女)"虽说棉被送一岗，粗里杂面不好看；外婆手笨衣袖短，薄布土纱又小张。"开被完毕，新娘的母亲唱（或歌师代唱）《嘱咐歌》，内容是叮嘱花婆继续关照女儿，家公、家婆要把媳妇当女儿，女婿要体贴妻子，以及女儿要手勤脚快，好好服侍公婆、丈夫等。唱罢，吃送别餐。然后，新娘由伴娘陪同，唱着《暂别歌》回娘家。

卖猫月

"卖猫月"即妇女产后第一次带婴儿串门。毛南族习俗：新生婴儿出世后第12天或20天，请法师选择吉日，为婴儿第一次剃头。妇女产后第22天，第一次洗头发。产后第33天，才能"卖猫月"。要串哪一家，要先向对方预告，让对方有所准备。串门时带一些礼品，对方也回赠一些礼品（至少回赠一个鸡蛋）。据说，有礼品回赠，以后婴儿才不咬衣角和手指。"卖猫月"后选个吉日第一次带小孩子去外婆家，称"去外婆家卖月"。去时，背带上插银针、银禾剪以驱邪，并给外婆送一只鸡、一斤猪肉、一捆面条、一斤酒，外婆则给外孙送米粮、鸡蛋和被单等物。

肥　谱

“肥谱”，毛南语，即丧礼中请祖先回来赴筵和护送亡灵到阴间的法事。法事由道士主持。届时在香火堂下，摆一祭桌，桌上置亡者灵位牌。亡者的儿子执幡跪在席子上，女儿、女婿、小辈则蹲在周围，邻居亲友们围在外面。道士坐在桌边念《启谟》、唱《接召三祖歌》，请亡灵，并代表子女唱《敬献十杯酒歌》，如悼亡母之灵，就唱：“娘身怀我九月整，受苦受累数不尽；寒冬冷天泉边洗尿布，出门做工把我背随身；今日离开人间无记忆，儿负母恩未还清；初杯酒啊献亡灵，哀纳受，初杯献亡灵！”连唱10段，表达深情的悼念，并由子女献上十杯酒。“肥谱”法事依停尸天数而定，最少一晚，一般三晚，最多七晚。其费用由亡者的儿子和女婿分担，谁负担哪一晚的费用，道士便代表谁唱《敬献十杯酒歌》，歌词即兴而编，并符合追悼者与亡灵的关系，表达深情的悼念。

肥　套

“肥套”为毛南族信仰习俗。毛南族群众认为：人本是花王圣母（又称“花婆”、“万岁娘娘”）所管理的花山上的花。她赐花给谁家，谁家便生儿育女。如赐红花、金花，便生男孩；如赐白花、银花，便生女孩。小孩多病，是因花生虫、缺水、缺肥。花婆将一株红花与一株白花移栽一处，男女便结成姻缘。人去世后，要回归花山还原为花。“肥套”便是毛南人向花王圣母求子而得子后的还愿及向其他神灵祈求人畜平安、钱财旺盛的法事。法事由五六个至十多个师公进行。所祀神灵有花王圣母、三元、三光、社

王、土地、灶王、鲁班、陆桥、瑶王、太师六官、三界公爷等道教中的神仙，以及毛南族民间宗教中的神，壮族、瑶族民间宗教的神和毛南族祖灵等。做法事时，师公戴诸神面具，穿法衣、念经、歌舞，连续进行三天两夜。

放鸟飞

“放鸟飞”为毛南族春节时的祈福习俗，流行于广西环江毛南族自治县。每年春节将临，人们要上山采集菖蒲叶。夜间，各家父母便在灯前用菖蒲叶精心编织百鸟。除夕清早，各家主妇给百鸟灌上香糯米，有的还拌上饭豆或加芝麻馅心。煮熟后，给家里的小孩每人分一只，再将十数只至几十只用麻绳系上，用一根甘蔗把它们的提耳穿上，间隔均匀地摆开，横挂在香火堂前，让百鸟尾朝板壁，面向大门，这叫“槽鸟”。还在香火堂上摆着一些齐整的带有一两片绿叶的广柑、橙子等鲜果。两边各放一碗红糯米饭，各垒一堆锥形体的粽子塔，塔上点清油灯。百鸟形状甚多，有滚肥大肚的鹧鸪、轻盈敏捷的春燕、长颈秃尾的鸬鹚、细头长尾的山鸡……灯光熠熠，衬着桌上的各色供品和空中的各式鸟群，宛如民间艺术展览。这些供品各有寓意：槽鸟，表示百鸟归巢，六畜兴旺；鲜果、红糯饭象征新的一年瓜果累累，五谷丰登；粽塔喻意谷垛如山，财源不断。槽鸟摆

毕，鸣炮辞旧，全家共进团年饭。初生小孩的年轻母亲，要在除夕这天回娘家为小孩领鸟和年粽，一定要在鸣炮前回到夫家同吃团年饭，同领新年的“新魂”。槽鸟有传说：古代一个毛南族后生和一位老法师的女儿相恋，共同编织百鸟，一起坐夜对歌。老法师考验后生，后生在姑娘帮助下，和老法师斗法，一一胜利。除夕，老法师要后生砍伐树木杂草、烧山、撒糯谷种子，后生在姑娘帮助下又一一做到。老法师说：山上应撒小米种子，错撒糯谷种子了，要他捡回来，后生这时傻了眼，姑娘搬出平时所编百鸟，吹口气，飞上山去将糯谷种一一拾齐。老法师无法最后只好同意他俩正月十五完婚。因此，后来毛南人除夕槽鸟，到正月十五熄灭清油灯，搬出糯粽塔，剥好红果品，重蒸红糯饭，砍断甜甘蔗，再煮百鸟群，就形成了传统习俗。每年到年节时，全家同进最后一次盛餐，用百鸟当饭，果蔗解腻，这就是放鸟飞。

同填与同顶

“同填”和“同顶”是毛南族的两种两人对抗比赛。“同填”不需体育器材。比赛时在地上画一个直径约 3 米的圆圈，中间划一直线。甲、乙两人各站中线两边，前臂屈回胸前，双手握肘关节部位，双脚叉开约 50 厘米，上身前倾。待裁判员哨声一响，双方用力冲拱，不受中线限制。冲拱时只许肩膀拱肩膀。如冲拱对方其他部位，或用手推人，用脚踢人，都算作犯规。最后，被拱倒或拱出圈外者为输，自动退出圈外者也算输。“同顶”用一根 2 米长、直径 8 厘米、正中系一红布条的木杠为体育器材。场地宽 2 米、长 6 米，中间划一条中线。比赛时，运动员腰间扎一腰带或用几层布垫腹部。参赛双方面对面各站离中线一米，木杠正中所系红布条对准中线。裁判员提起木杠，运动员各用双手握木杠一端，贴

在腰带或垫布上，分开双脚前弓后弯。哨声一响，双方同时用力对顶，被顶倒或被顶出线外者为输。对顶时，不许一方突然放下木杠，如放下便算作犯规，也算输。节日或冬闲，青年们十分喜爱“同填”、“同顶”，既可赛体力，又可娱乐。

审老虎

审老虎是毛南族狩猎古俗。在古代，毛南人猎获猛虎后，便抬回村中，鸣枪聚众庆贺，由老猎手主持审虎仪式。仪式开始，一位彪形大汉头缠红巾，面戴老虎面具，身披虎皮（或黄布单），脚打黄布绑腿扮作虎魂，在众猎手刀枪押送下，走近死虎旁，陪着死虎伏卧。围观的人群屏声怒视虎魂。坐镇高台的老猎手拍案斥问：“你是什么东西？敢如此无理！”虎魂答：“我是山林之主。”老猎手又问：“雷劈火起，烧山毁林，你为什么不救火，反倒逃走？”虎魂答：“那是三界公爷降灾，敢不逃命。”老猎手说：“我们百姓谁不去扑灭山火，我们才是山林之主。”虎魂说：“我是百兽之王。”老猎手责问：“为什么不爱百兽，天天伤害百兽性命？”审问再三，直到虎魂无言对答，老猎手才下令将猛虎处置。这时猎手们对空连放三次排枪，锣鼓齐鸣，大声呐喊。扮虎魂的大汉起身甩掉虎皮、面具、头巾、翻身一滚，回到人群之中。青年猎手开始动手将真死虎掀翻，开膛破肚，取出虎胆，冲一大碗虎胆酒，先敬老猎手，再敬打中老虎立头功者，然后大家轮流喝酒壮胆。同时，点火烧肉，全村群众共吃虎肉。如今毛南山乡不再有虎，审虎习俗也只成为人们口语传承的故事。

●仡佬族

仡佬族人口为437,997人(1990年统计),大部分散居在贵州省的遵义、仁怀、安顺、镇宁等20多个市、县,少数分布在广西壮族自治区隆林各族自治县及云南省的广南、文山、富宁、马关等县。

“仡佬”一名最早见于南宋,这以前的唐代,史书上曾出现“葛僚”、“仡僚”、“佶僚”等名称。

仡佬族有自己的语言,仡佬语属汉藏语系,语族、语支未定;本民族无文字,通用汉文。

仡佬族以信奉道教为主,也信仰佛教。

丢布娶亲

贵州省镇宁地区的仡佬族，流行着一种丢布娶亲的奇特风俗。

山头村边的大榕树下，是仡佬族未婚男女青年谈情说爱的好地方。小伙子和姑娘由相识而相爱后，姑娘便摘下几片厚实的榕树叶，用角帕包着向对方打去，表示自己的爱像榕树一样深厚，万古常青，同时暗示小伙子可以上门求婚了。小伙子心领神会，便用红纸包上一双筷子，到姑娘家求婚。小伙子来到姑娘家，把红纸包着的筷子放在桌子上，姑娘的亲属们便知道了他的来意：我愿和你家姑娘成对成双。

婚姻关系就这样定下来了。但是从定婚到结婚，还要过两年时间，经过种种曲折和考验。第二年的定婚日这天，小伙子要提着一壶酒到姑娘家。姑娘家便邀左邻右舍来喝酒，并进行“盘郎”。所谓“盘郎”，就是在宴席上众人对小伙子进行盘问，以考察未来新郎的聪明和才智。这时，姑娘一般都躲在堂屋的门后，悄悄观察自己未来夫婿的对答情况，有时还很为小伙子着急呢！

第三年的完婚日到了，小伙子就要来丢布娶亲了。丢布前晚，姑娘的女友们来陪伴“坐夜”，唱歌吹箫，以示祝贺，等待着第二天新郎的到来。翌日清晨，小伙子打扮一新，手里捧着十二方（约4米）冬瓜蓝包布，由七个好友陪着，到姑娘家去接亲。新娘便由女友充当的“伴娘”陪同走出屋来，向父母及长辈告别，有的还要唱“哭嫁歌”。这时，跟随新郎来迎亲的男友们，替他把十二方蓝布散开，让新郎提着布的一端，将另一端向新娘丢去，这就是“丢布”。新娘接住后，女友们便急忙帮她把布拴在腰上，新郎拉着就走，一直把新娘牵到自己家里，这美满的婚礼便告完成。

“追”姑娘

姑娘出嫁，在黔东北一带的仡佬族中有不同的称呼，如“分”、“打发”、“交待”和“揭㪷”等。

姑娘出嫁后，离开娘家到婆家去，成为另一个家庭的成员，确实是被“分”出去了。而“打发”、“交待”、“揭㪷”，也都有近似“分发”、“安排”之意。可是，在贵州省务川县的三坑、青坪等地的仡佬族，对姑娘出嫁，却有一种特殊的称呼，即“追”，而且在婚仪中有其特定的程序。

那里的仡佬族姑娘在出嫁前数日即开始“号哭”——唱“哭嫁歌”。临上轿前，乘周围人们“不备”，姑娘抽身“出逃”，跑到村里别人家去“躲避”。这时，早已作好准备的婶娘和嫂子等人(母亲和姐妹不参加)，立即打着灯笼火把四出“追寻”，满村风雨地闹腾一阵之后，自然会把姑娘找到，把她“强拉”回来，到堂屋“拜别”祖宗，塞进姑娘的叔叔、哥哥、弟弟等人从男方家抬轿人手中接过的轿子，抬进自家大门；之后由姑娘的父亲给姑娘解开衣领边的扣袢，叔叔、哥哥、弟弟又贴上“轿封”，将轿子倒退着抬出大门，然后掉头，一直抬出村子，才让男方家派来的迎亲者将轿子抬走。当地把姑娘出嫁称之为“追”，便是因此而得名。

拜　堂

在仡佬族的婚仪中，一般是不兴拜堂的。但在黔西、织金一带仡佬族雅伊支系的婚仪中，却要举行拜堂仪式，而且作法异乎寻常。

仡佬族雅伊支系的拜堂仪式，不是新娘和新郎一起拜堂，而

是新娘的弟弟去跟新郎一起拜堂。新娘被牵进门之后，在新郎家堂屋大门背向墙壁而立，低头盯着脚尖前一盏搁在盛有少许清水的脚盆里的七星灯。“拜堂”时，新郎和新娘的弟弟也要吃“交杯酒”，同时举杯相敬，但并不交换饮下，而是各自反手倒掉。待到拜堂完毕，夫妻双双进入洞房后，再次吃交杯酒时，才交相饮下。

踩堂舞

居住在黔北一带的仡佬族，对于死亡的亲人的哀悼和怀念，有一种特殊的表达方式，这就是“踩堂舞”。每当亲人辞世，人们便把死者停放在堂屋中，然后在遗体前跳起踩堂舞。舞时三人为一组，一人吹芦笙，一人打钱杆，一人舞丝刀，边舞边唱挽歌。挽歌的内容大多为叙述死者生平和祝福他早升天堂之类。跳舞时舞者身体微屈，来回跳跃，右足落地稍重，像有点跛的样子。踩堂舞人数的多少不固定，依堂屋的大小而定；舞蹈时间一般约一小时，也有至四五小时的。

仡佬族踩堂舞的风俗，据说远在唐代就已经开始了。关于它的起源，流传着这样的故事：很久以前，仡佬族人民繁衍生息在贵州高原，过着兴旺富庶的生活。封建统治者对少数民族的不断镇压和掠夺，使仡佬族人民被迫背井离乡，纷纷逃向荒凉的高山。有一家八口的仡佬人家，逃到了气候恶劣、荆棘丛生的山脊，七十多岁的家长因长途跋涉、旅途劳顿而不幸死亡。全家人悲痛之极，聚在老人的坟前痛哭不止。这时，发现许多蚂蚁爬来爬去，为怕蚂蚁损坏坟穴，人们便一边唱着挽歌，一边用脚去踏蚂蚁，就像跳舞一样。相沿成习，便成了仡佬族风行的丧葬仪式——踩堂舞。踩堂舞最初是在坟前跳的，后因受地形环境限制，才改在堂屋，所以叫做踩堂舞。

祭神树

居住在贵州、广西、云南的仡佬族，都十分崇敬自己的祖先，他们除了在家中奉祀祖先神位外，寨前寨后的山林中，常常都有全寨人共同敬拜的“神树”。

据仡佬族的传说，其祖先原居住在没有水、没有树的地方，因此，生活穷苦，人丁不旺。为了生存，他们便在族长的带领下迁徙。经过长途的艰难跋涉，一天他们来到一棵几人合抱的冬青树下歇息。由于长途跋涉的疲劳，年老的族长终于生病死去。临死前，他指着大树说：“愿我们的后代像它那样杆大枝粗，万古常青。”人们把族长安葬在冬青树下，并念着“子孙后代，杆大枝粗，万古常绿”。在族长遗嘱的鼓舞下，他们终于找到了安居乐业的地方。这大概就是祭神树的缘起。

仡佬族祭神树活动，通常在农历三月三、六月六、八月十五等，各地日期不尽相同。祭神树的准备工作早在半月前就开始了。全寨人要选出六户为领头人，筹备祭祀 事务。领头老人要每晚午夜 12 时前，点着灯在寨前路口用仡佬语喊话，请在外的祖公回来接受祭祀。祭树日到了，一清早，六户为首的便牵着猪、提着鸡（雄鸡要刚开始鸣叫的，母鸡要没下蛋的）、担着水、扛着锅，往神树处先作准备。接着，全寨老少也纷纷赶到。但所有妇女这时都不准出门，据说这时碰见妇人会“不吉利”，祖公要生气的。

祭祀仪式开始，先摆好供品，有五谷合煮的饭，猪、鸡的头、蹄和内脏，酒和茶等，然后点香烛，焚纸钱，放鞭炮。主祭老人主持仪式，并用仡佬语念诵祭词，内容一般是祈求祖公和神树保佑全寨人畜兴旺，岁岁五谷丰登，免除一切天灾人祸。其他人亦跟着祝祷。

祭祀完毕后，太阳已快下山了，人们便几人一伙，席地而坐，摆上各自带来的酒、菜及各种供品，开怀畅饮，并互相祝福。这时，一片人声喧哗，气氛极其热烈。吃喝过后，还要把剩下的肉菜平分每人一份，带回家中，阖家人同享。60岁以上的老人，还要最后向神树揖跪告别。

吃虫节

每年农历六月初二，是仡佬族的吃虫节。

这一天，家家的饭桌上都摆着几碟别有风味的菜——油炸蝗虫、腌酸蚂蚱、甜炒蝶蛹、烧炒蚜米泥鳅等。全家人团团围坐，家长说一声："吃，嚼它个粉身碎骨，吃它个断子绝孙"。随即一家人一齐举筷，痛痛快快地吃起来。这就是仡佬族过吃虫节时用餐的情景。吃过节日饭后，全村男女老少都聚集在吃虫庙，唱歌跳舞；然后排成长龙似的队伍，敲锣打鼓，在田垌里游行、捉虫，还要插上洒有鸡血的小白旗，表示整治害虫的愿望和喜悦。村寨的妇女这天还都要回娘家过节，并且一路走一路捉虫。

关于吃虫节的来历，流传着一个生动的故事：古时候，仡佬山乡虫灾连年，五谷歉收。寨上的人们在万般无奈之下，贴出悬赏告示：凡能除掉虫害者，赏肥猪三头。先后揭榜的有公鸡、鸭子和道士，但都制服不了虫害。眼看这一年的收成又要被害虫白白吃掉，人们真是心急如焚。这时，发生了一件意外的事。有一个叫甲娘的妇女带着几个孩子从外乡回娘家，因为贫穷，没有礼物带给父母，很是难过。正愁得没有办法时，几个孩子从田垌里提了几大包蝗虫回来，她灵机一动，就把虫子带回家炒给大家吃。这清香可口的菜肴一下子传开，人们便也都争相去捉虫。这样一来，害虫大减，这一年便获得丰收。寨上人为报答甲娘的治虫之

功，便赏给三头肥猪，甲娘把猪杀了回敬乡亲父老。后来，甲娘死了，人们在田垌中间立庙纪念她。这庙就叫吃虫庙。因为甲娘捉虫的日子是六月初二，所以，以后每逢这一天，仡佬族各村寨都要杀猪过吃虫节。

●锡伯族

锡伯族人口为172,847人(1990年统计),主要聚居在新疆维吾尔自治区察布查尔锡伯族自治县及伊宁市、乌鲁木齐市等地,一部分分布于辽宁、吉林、黑龙江等地。

“锡伯”为锡伯族的自称。汉文则有“犀毗”、“师比”、“鲜卑”、“矢比”、“席百”、“席比”等称呼。

锡伯族有自己的语言文字。锡伯语属阿尔泰语系满-通古斯语族满语支。文字是1947年在满文的基础上略加改动而形成的。

锡伯族的宗教信仰早期属于原始宗教的自然崇拜,后来信仰萨满教或佛教,但主要是祭祀祖先。

迎亲婚俗

在锡伯族民间流行着这样一句谚语："春天的清风和煦，秋天的婚礼热闹。"锡伯族的婚礼一般都在每年的深秋或初冬农闲时举行。举办婚礼时，男女双方都大摆宴席，女家两天，男家三天。

婚礼的迎亲场面十分热闹。在未迎娶之前，先由男家请媒人携酒去女方家里"请命"，说明男方今年打算迎亲，以了儿女终身大事。经过女家父母允许后，双方择吉确定迎娶日子，家中即开始婚前的各种准备。

请命择定迎亲吉日，是男家的大宴日，男女双方都摆设宴席。这天，先由男家聘请"迎亲父"（由夫妻双全的青壮年男子充当）、"迎亲母"（由夫妻双全而多子女的中年女子充当）和媒人一起赶着车前挂铜镜，后悬八卦，辕马头系大红布条的"喜篷车"，将彩礼送到女家；并由男方一长者另驾一车带上猪、羊、米、面等宴席用礼品一同送去。女家的至亲长者验收礼品后便杀猪宰羊，款待来客，这就是女家的小宴日。第二天是女家的大宴日，同天男家也要杀猪宰羊设小宴，准备第三天迎亲的大宴。

女家的大宴日，新娘不露面，而由盛装的新郎在女家招待客人，新郎在岳父（母）带领下一一给来宾敬喜酒，叫做"认女婿"。宾客们频频举杯恭贺新人。这一天，由女方兄嫂把陪送的嫁妆送到男家。新郎的父母提前做好迎接准备，嫁妆车驰来时新郎父母主动迎上前去向客人敬酒。客人们喝完酒将嫁妆抬到新房门口，由新娘的嫂子打开箱锁，新郎的母亲便往箱子里塞一些钱，祝愿新人金银满柜、富裕幸福。然后，新娘的嫂子将箱子锁好，把钥匙交给新郎母亲，以示大权交给婆家，从此由婆家来管教新娘。新娘的兄嫂把新房摆设一一过目后才离去。

晚上，男方的“迎亲父”、“迎亲母”还要率“丁把”（由能歌善舞、滑稽活泼的青年男女组成）队伍，带着乐器前往新娘家贺喜，这叫做“打丁把”。“丁把”同女方对歌对舞，不能认输，所以他们总是互相配合，积极主动，争取压倒对方。

第三天，是迎接新娘，举行结婚仪式的日子。由“迎亲父”、“迎亲母”带着“时辰书”到女家迎亲。“迎亲母”到达后，先向女方家长宣读“时辰书”。这时，姑娘的父母、姑舅、兄弟、姐妹等，为了活跃气氛和提高姑娘的身价，常常故意做难，将“时辰书”藏起来，要求“迎亲母”再读“时辰书”的内容。而“迎亲母”拿不出来，就得亲自唱歌跳舞。经过一番精彩表演后，找到了“时辰书”，又在新娘上车前宣读几遍，才允许把新娘接走。

新娘上车前，众表姐妹或嫂嫂，按着祖先留下的习俗，用一条丝线精心地为她修面，给她佩戴精美的银质首饰，穿颜色鲜艳的绸子婚礼服和图案美丽的绣花鞋，把新娘打扮得非常漂亮。这时，新娘将“五谷”分撒在自己住屋的四角，剩下一部分留给兄弟，表示把福祺留给娘家，并哭啼拜别家人。然后由其兄弟用褥子抬上车，由“迎亲父”、“迎亲母”和女家伴娘（未婚女子）同车陪送。

喜篷车到新郎家大门口，由伴娘扶着新娘下车和新郎并肩踩着红毡，走到正屋门前，在这里新郎新娘参拜天地。喇嘛在屋内念经，然后新郎先入门，与门外的新娘对跪，新郎用手中的马鞭挑去蒙在新娘头上的大红巾。这是新娘初次露面。然后新郎新娘并肩到锅灶前对跪，用哈达将羊尾巴油片投入灶火中，宣誓白头，再到堂屋跪拜男方的父母。之后，新娘入洞房上炕坐在帐内，直到晚上喝完合欢酒，新娘才可下炕给公婆装烟敬酒，整个迎亲婚礼才算告一段落。

莫昆墓地

莫昆墓地是锡伯族丧葬习俗中规定的一种安葬形式。“莫昆”即家族。锡伯族对死者按家族的辈份由上向下在固定的墓地排列安葬，在锡伯族民间把它称为莫昆墓地。

莫昆墓地派生于哈拉墓地。“哈拉”即姓氏。锡伯族凡同一个姓氏的人都属于同一个哈拉。莫昆是哈拉的分支，每一个哈拉都有一个族谱，凡本哈拉男性成员的名字都记入族谱。名字的排列顺序是按辈份由上往下，一代一代地依次排列下去，形成一个金字塔形图案，只要人们看到锡伯族某一哈拉的族谱，就可以清楚地看出该哈拉的世代发展情况。随着后代的不断繁衍，莫昆便从哈拉中逐渐分离出来，莫昆成员较之同哈拉成员之间的血缘关系要更为直接，因而，在日常生活中他们之间的关系也更为密切和亲近。随着同一哈拉的人们之间关系的逐渐松弛以及同一莫昆的人们之间关系的更加密切，于是莫昆墓地便相继从哈拉墓地中独立出来。每一莫昆的后代，均将本莫昆祖先的遗骨从哈拉墓地中取出火化后，再将各代祖先每对夫妇的骨灰分别装入两个瓦罐内，仍按原来排列的顺序移葬在新选的墓地，这样一个独立的莫昆墓地就建立起来了。

锡伯族实行土棺葬，幼童夭亡置于野外，意为让飞禽走兽食之，让其灵魂尽快升天转世回生。未成年的青年去世，不管是男是女其棺材都是有盖无底。萨满、尔奇、道奇（均系男巫）、相童（女巫）以及特殊原因凶死者要进行火葬，火葬者的配偶死后也要进行火葬。

锡伯族实行夫妻合葬，即夫妻死后将两个棺材埋入同一墓穴，不管其死亡先后，都要异棺同穴，以男左女右为排列顺序，夫棺

略高于妻棺。尸体放置的姿式，男为仰身直肢，女为左卧屈肢，正好面向丈夫。合葬时夫棺的右侧棺墙、妻棺的左侧棺墙各凿一小孔，寓意为让两个灵魂相互往来。

在新疆察布查尔锡伯族自治县的锡伯族莫昆墓地至今保存得还比较完整。莫昆墓地可说是父权制氏族阶段父系氏族墓地和父系家族墓地共存的一种遗风在锡伯族丧葬习俗方面的一个反映。

海尔堪神

“海尔堪”全称为“海尔堪玛法”，即保护牲畜兴旺的祖神或神灵，因而又称之为“马神”。在古代锡伯族的经济生活中，畜牧业占据着相当重要的地位，他们对牲畜的繁殖和安全非常关心，所以，锡伯族家家都供奉“海尔堪玛法”。

“海尔堪玛法”供在屋外西南墙的房檐下。在墙内掏一个深约50厘米、高40厘米、宽20厘米的洞，里边放个木匣子，匣子里装有木雕或泥塑、纸画的男人坐像，以代这一家的男祖宗。因为男子经常在外放牧、狩猎，故将其神位供在室外。每逢年节，全家人都要烧香磕头，祈求保佑牲畜兴旺。春季青草露出地面时，同一个家族的老人通知各家，于某日祭“马神”。届时近亲远戚也都派人来参加。当天杀一口猪，在“海尔堪玛法”供位前领牲祝酒，由族长献上祭品，焚香磕头，其他人也都随着跪拜。主人还要把自己最喜爱的骏马献给“海尔堪玛法”，马身十字披红，将羽毛或红布条系在马尾上。把马牵到神位前，举行隆重的献马仪式，由萨满唱起赞扬“马神”功绩的赞歌并代替主人向“马神”祈祷。唱完后，萨满端起一碗米酒，对马说：“今后该你当班了，要好好伺候马神爷，帮他照顾好马群，请你喝下这杯酒。”说罢，即给马灌酒。灌毕，拍着马的脑门儿说：“你回去吧，今后要听‘海尔堪玛

法’的话。”然后将这匹马送到特备的单槽前歇息。此后，这匹马被称为“神马”。神马不干活、不剪鬃、不修尾，用细草精料单喂，除主人外，别人不能骑用。如有擅自骑神马者，不但要遭到主人及族中人的谴责，还得亲自给神马洗澡、挂红。随着时代的前进，锡伯族逐步从牧业转向以农业为主的经济生活，供奉“海尔堪玛法”的习俗已不多见，但崇拜祖先的传统一直保存。

喜利妈妈

“喜利妈妈”是锡伯族崇拜的女始祖。“喜利”，意为“延续”，锡伯族供奉喜利妈妈意思是在女始祖的保护下，子子孙孙不断地繁衍生息，代代相传，寄望自己的家庭平安、人丁兴旺。

喜利妈妈的象征物是在九股丝线打成的“索绳”上系有小型的（约10厘米）弓箭、扳指、箭筒、小摇车、红绿布条、靴子、“嘎拉哈”（猪、羊骨头）等物件。生男孩时拴弓箭，生女孩拴布条，娶媳妇拴小摇车。每一代长子出生除拴一弓箭外，再拴一“嘎拉哈”，表示家族中又有一辈新人。既带有结绳记事的遗意，也是家族宗室繁衍的标记，可以说是锡伯族人没有文字时代的家谱。有了文字之后，家谱用文字记录，而喜利妈妈则被锡伯族人视为保佑子孙后代的神灵而保存下来。平时拢在一起，用毛头纸（一种纤维较粗、质地松软的白纸）包好挂在室内西北角供位上（即在室内西北角北墙上方贴一张白毛头纸，纸下有一供板，供摆香、烛、供品等用，供板上贴白挂钱），每年除夕，由家中男主人将喜利妈妈请下，将丝索绳拉开，从屋内西北角扯到东南角，两端挂在房椽子上，供上香、烛等供品，按时叩拜。到二月初二再将喜利妈妈拢在一起，包好放回原处。

喜利妈妈的制作很有讲究，必须请两位儿女双全、家中人口

兴旺的老太太来做，九股丝绳从中间分开往两头搓。绳上拴的 9 至 12 件象征物品，都有其代表意义。弓上搭一支箭及箭筒和扳指，象征着锡伯族男儿箭法娴熟，成为好猎手或好武将。每娶一个媳妇，就拴上一个小摇车，表示希望多生孩子，使本族家门人丁兴旺。靴子、缨帽、铜钱等是希望后代升官发财。生女孩挂红、绿布条，希望女子能够主持家务，有一手好女红。女儿长大出嫁，就把布条摘掉。

立喜利妈妈，要举行隆重的仪式，杀猪、宰羊，请全族人举行祭祀仪式后，摆设酒宴款待。不分居的大家族，则是一辈的长房长子三岁时换一次，换时同样举行隆重的仪式。

供奉喜利妈妈这一传统的民族习俗，在锡伯族聚居区，特别在新疆察布查尔锡伯族自治县许多锡伯族家庭中一直延续下来，是我国西北民族中别具一格的祭祖习俗。

“杜因拜专扎坤”节

“杜因拜专扎坤”节，是锡伯族人民的传统节日，也叫“四·一八”节，来源于锡伯族历史上的西迁。17 世纪中叶以前，锡伯族居住在我国大兴安岭、嫩江流域、呼伦贝尔草原、松花江流域的扶余、前郭尔罗斯等地，是东北地区的少数民族之一。为了加

强西北边境驻防力量和大规模开垦边疆，1764 年（清乾隆二十九年），清朝政府从盛京（今沈阳）所属的辽阳、开原、义州、凤城、熊岳、复州、岫岩、兴京、广宁、盖州、锦州、金州、牛庄、海城、松岭子、抚顺等 17 处，选调锡伯族擅长骑术、射猎的官兵共 1020 名，连同眷属共计 3275 人，于农历四月十八与留居东北故乡的锡伯族男女老少，聚集在盛京的锡伯家庙——太平寺，同祭祖先、共进野餐。亲友们相互祝愿，依依话别。第二天，被选调的官兵扶老携幼，赶着牛车从盛京启程，出彰武台边门，经克鲁伦路和蒙古路，过乌里雅苏台等地，历经千辛万苦，长途跋涉，从祖国的东北边疆来到西北边疆。以惊人的毅力，战胜饥饿、干旱、疾病等种种困难，于 1765 年秋到达伊犁地区“屯垦戍边”。

锡伯族人民为怀念先民，后来把西迁出发前一天的聚会做为自己的节日，至今已有二百多年的历史。每逢农历四月十八，锡伯族人民按村屯城镇聚集一起，讲述先民西迁的故事，宰羊、煮羊肉汤和高粱米饭，共进野餐，回忆当年分别时的情景。这天，年轻小伙子均骑着马出外野游，其余人也到野外踏青、野餐。这一天家家都吃鲜鱼，做蒸肉，并举行唱歌、赛马、叼羊、射箭、摔跤等文体活动来欢庆自己的传统节日。

射　箭

射箭，是锡伯族传统的体育活动。锡伯族人世代以渔猎为生，练就了一身射猎的好本领，弓箭成了锡伯族的生产工具和自卫的武器。18 世纪后，英勇善战的锡伯族官兵驻防新疆，在当地屯垦戍守，骑射又成了锡伯族人军事训练的主要科目。

根据传统习俗，锡伯族男儿落地，就在房门上悬起一架精巧的小弓箭，并在供奉的“喜利妈妈”上也挂起一副小弓箭，预示

孩儿长大以后成为一名神箭手。长到五六岁时，父兄便教他骑马射箭，参加狩猎活动，在实践中提高他的射箭技术。到18岁时，经考试合格后即可当骑兵。在新疆伊犁地区的锡伯族，随着新式武器的运用，射箭逐渐由军事项目转变为体育运动项目。锡伯族人经常进行射箭比赛。在街头竖两根木椽，中间挂起毡子或麻布，上缝各色布圈作为靶环，也有扎草人作箭靶的。这种即兴比赛，老年人、中青年人都可参加，人数多少不限。立射、骑射姿势均有，但参赛双方必须人数相等。均以牛或羊为彩头。逢年过节，特别是传统的“四·一八”节都要举行隆重的射箭比赛，赛后载歌载舞，即兴欢宴。在联欢会上，由长老讲话，勉励大家继续努力，争取更好的成绩，并向优秀射手发弓箭等奖品。被誉为神箭手的人，很受锡伯族人们的尊敬，被人们看作是本民族的光荣和骄傲。至今，射箭这一传统的民族体育运动，在新疆的锡伯族中间仍广泛流行。

●阿昌族

阿昌族人口为27,708人（1990年统计），主要分布在云南省德宏傣族景颇族自治州的陇川、梁河等县，少数居住在盈江、潞西、瑞丽，保山地区的龙陵、腾冲等县。

阿昌族在汉文史籍中有“峨昌”、“莪昌”、“俄昌”等称谓，自称因地而异，有“蒙撒”、“勐撒掸”、“村撒”、“汉撒”、“峨昌”等。解放后，根据本民族人民的意愿，统称为阿昌族。阿昌族有自己的语言，阿昌语属汉藏语系藏缅语族缅语支，分梁河、陇川、潞西3种方言，无本民族文字，大多使用汉文。

阿昌族因居住地区不同，分别信仰原始宗教，崇拜祖先及信仰小乘佛教。

烟盒订情

阿昌族青年男女恋爱过程可分为四个阶段，而烟盒是恋爱初期的桥梁。

相送，如某个小伙子在对歌中选中了某个姑娘，或某个姑娘看中某个小伙子，就用递烟盒的方式，请对方收下烟盒。

女方收下了烟盒，过十天半月后，就用自己绣有蚂蚱花的“绡迈”（特制的布披巾），再加上一包香烟和一盒火柴等，用纸包裹好，再用彩色丝线扎好，如对男方有好感，则结活扣，回送小伙子，表示心目中有爱慕之情。如果不中意就结个死扣，以示不愿与对方继续往来。

男方收到女方含有爱慕之情的回礼，就把自己亲手雕刻的银簪或其他精心制作的手工艺品，拴上两朵串有闪闪发光的五彩珠子的蚂蚱花，或用手镯、银链、银扣子，加几颗水果糖包裹好，请人送给姑娘，表示自己真心爱上姑娘。

姑娘如真有心和小伙子结成终身伴侣，就用自己纺织的“阿昌布”，做成对襟衣送给小伙子。姑娘如不愿跟小伙子成亲，则用一个枕头相送，表示请对方另择对象，并含有赔礼道歉之意。

经过你来我往的手工制作品的交换，相互了解对方是否真情实意，是否品行端正，是否心灵手巧等，并由此最后定夺终身。

天明进夫家

云南梁河一带的阿昌族，过去婚姻多为父母作主，父母为儿女选择的对象，儿女如不满意，父母多进行说服或压服，若有不从要受封建礼教的惩处。社会上对互相爱慕，因受父母干涉而逃

婚的，认为是“大路不走走小路”，很难得到同情与支持。如今也有的地区，男女青年婚前恋爱较自由，经过自由恋爱，双方建立了感情，愿意结为终身伴侣的，男方便请媒人去征求女方父母意见，如女方父母同意便可订婚，若女方父母反对，两人又不愿分离时，由男子邀约朋友约定时间把女方接去隐藏起来，再请媒人去商议聘礼，采取先斩后奏用既成事实的办法逼女方父母同意。

阿昌族的婚礼比较独特。经媒人与双方约定迎亲时间后，男方的迎亲人须按时前往。届时女家故意将大门紧闭，用对歌形式盘问迎亲人的根底，直到男方歌手对女方歌手提出的问题回答得十分圆满后，女方才敞开大门接待迎亲的人。但必须等到鸡鸣时，娘家才肯把女儿送出大门给迎亲的人，由男方家陪娘牵着新娘到夫家，不管路途远近，必须在天明时进夫家大门。因为天亮象征着新婚夫妇日后的生活光明、吉利、百年偕老等。

新娘进夫家大门时，由两位夫妇双全、多子多孙的妇女端出筛盘。筛盘放着盛灯油的锣锅盖或大瓷碗，中间燃着七根红棉纸灯芯的“土星灯”。筛盘须在新娘头顶上绕三圈，然后媒人在地上铺草席让新娘从上面走过，新郎用一条手巾牵着新娘入新房，进房后待新娘换上专门的结婚礼服，再举行结婚仪式。婚后第三天，新郎陪新娘回娘家，称为“回门”。届时，男方请若干亲戚朋友将原先议定的彩礼送往女家，女方也将嫁妆送往男方。

送饭盒

送饭盒是阿昌族婚礼中一种习俗。当婚礼仪式结束，男方宴请的宾客将散尽时，女家把一只装有熟鸡和米饭的饭盒送进男家。同时，新娘的女友也要送“大饭盒”，里面装的也是鸡肉和米饭。阿昌未婚青年男女都有自己的组织，并各选有首领。凡结婚成家

的即告别这个组织，新成年的必须加入。这个未婚青年组织对其成员出嫁，要表示祝贺，也送饭给小两口吃，祝愿他们同甘共苦，白头到老。女友们送饭盒时，走到离新郎家约一公里路时便驻足等待新娘新郎来迎接。新娘先出面迎接，向姐妹们“道辛苦”，并邀请她们到家里去坐。送饭的姐妹们俏皮地说：“你倒好意思说，姐夫不请我们，你家在哪里我们都不知道，哪好意思去呀。”随后村里的男青年们簇拥着新郎赶来。小伙子们先开口：“请姐妹们到家里坐！”姑娘们说：“姐夫不叫，你们叫有什么用！”这时，新郎出来作揖行礼，邀请新娘的姊妹们。姑娘们走一阵后又不走了，新郎又得作揖行礼，再次邀请，就这样走走停停折腾十多次后才到达新郎家。然后，新娘姐妹的首领把鸡肉、米饭取出，让新郎新娘吃，众姊妹也陪同进餐。吃至中途，新郎的伙伴们要把中堂门关闭，端着饭菜，唱着民歌，请姑娘们再吃一碗。姑娘们快吃完时，小伙子们便唱：“红米糙饭格是不合口？腌菜素汤格是不合心？一碗红米糙饭吃不完，一杯淡酒喝不干！”姑娘们回答：“红漆桌子漆四边，八碗九碟摆中间，我们一人吃了半斗米，淡酒当作浓酒饭。”如此反复对歌直至半夜，小伙子们才让姑娘们离席，并把她们送回去。

婚后的第三天，女家又要给男家送“大饭盒”（特大糯米饭团），还用骡马驮上四箩谷子，送给小两口做谷种，让他们种好庄稼，日后吃穿不愁。

火烧猪肉凉米线

每年农历六月二十四（有的地区为二十五），阿昌族和彝、白等民族一样过火把节。

这一天，梁河县的阿昌族各户派出一男子，捉一只活公鸡去

庙里敬谷神。杀鸡时把鸡血洒在事先准备好的竹片上，再拔几根鸡毛粘在竹片上，然后把竹片插到田里，祈求谷神守好谷田，让早稻晚稻丰收，荞麦、黑豆连根结，并祈求谷神惩罚来偷吃谷子的老鼠、蝗虫、麻雀等。入夜，各家点燃火把，屋里屋外薰一遍，口中念念有词：蚊虫、跳蚤、疟疾、痢疾、瘟疫湿气，不吉不利，统统薰到远远的地方去。边念边往外送。然后男女老少举火把在村里聚会娱乐。

节日里，除举行一定的仪式或游艺体育活动外，还要食用具有民族和地区特色的食品，而“火烧猪肉凉米线”是必备的佳肴。节前各村各寨都要杀猪，猪杀死后，先用麦秆或草初燎一遍，然后刮去毛，再用草灰泥涂满猪身，继续用麦秆或草烧，待表皮烧糊刮去表层灰泥，肉皮便呈焦黄色，然后切碎剁细，拌上醋、酱油、蒜末、葱、姜、辣椒等佐料，再将准备好的鲜米线拌入。此菜酸辣适度，味鲜爽口。制作火烧猪肉凉米线，既要掌握燎猪皮的火候，又要注意配加佐料的适当，颇有讲究。因此，常常成为各家各户比试手艺的好机会。

大年初一开财门

开财门、耍狮灯系云南梁河县境内的阿昌族的年节礼俗。每年农历的腊月三十，要祭村社庙里供奉的土地、山神和孤寡仙人，然后回家祭家堂鬼。夜间老人守岁，期待新年的到来。大年初一，各村各寨都有一对事前经过训练的童男童女，挨家挨户去开财门，讲吉利话，祝愿各家各户在新的一年里老幼身体健康，五谷丰登，六畜兴旺，求名名成，求利利就，金银财宝滚进门等。当天，全村吃素食，斋戒。

次日大年初二，开始耍狮灯。在一个区域内，不论哪个村社

耍狮灯，其他村社都要到附近村寨祝贺，每晚庆贺一个村。狮灯队伍里除了耍狮子、抬灯笼、敲锣打鼓吹唢呐等职事人员外，还有专门讲吉利话的先生。吉利话多用古诗形式，或四句，或八句，又称为“四言八句”。被贺的主人须给红包（赏钱）。

正月十六送狮子神。职事人员从庆贺所得的收入中提取部分会餐。晚上把狮子头、皮送往村外烧毁，祈求狮子神“远离本寨，到快乐处去。”至此，耍狮灯的活动遂告结束。

洒花水

居住在德宏傣族景颇族自治州陇川县户撒阿昌族乡的阿昌族，信仰小乘佛教，每年于公历4月中旬举行“洒花水”节，即用槌栗花枝蘸水互洒，以示祝福。

传说，阿昌族崇拜的天公遮帕麻和地母遮米麻，创造了一个人丁兴旺、五谷丰盈、猪鸡鹅鸭成群的世界。传至九百九十代，在阿昌族中出现一个怪人，他长有三张嘴，一嘴吃天，一嘴吃地，一嘴吃人。长到20岁时，一顿饭要吃十箩米，冬天还没有过完，他已把人们的粮食、猪鸡牛羊吃个精光，并开始吃人，很多人家的孩子遂相继失踪。一天，三嘴怪正要抓小孩吃，被人发现。爬上树的小伙子腊亮，用弹弓射中了三嘴怪的双眼。三嘴怪捂着眼边叫边逃，大伙儿把他撵到九十九重山之外。后来腊亮又遇到一位长须及地的男长者和发白如棉的女长者，他们拿出一个装满水的葫芦和采了一枝开满白花的“赏建”（槌栗）枝插在腊亮胸前，并告诉他：“水是圣水，花是神花，赏建树是降魔棍。无论什么恶魔灾难，只要用赏建花蘸圣水洒去就可以免除。”腊亮回到寨子，听不见鸡叫狗咬，也见不到人影，原来是三嘴怪又回来洒黑灰作怪，使全村人都染上瘟疫。腊亮就用葫芦里的水蘸在槌栗花上顺着村

寨洒，使阿昌人死里逃生。这就是洒花节的来历。

阿昌族认为，用赏建花蘸水互洒，可以驱魔除瘟，除凶化吉，洒花水期间，家家供桌上的花瓶里都插满赏建鲜花，且每人皆戴一束在身上，男青年别在胸前，姑娘们插在头上，老年人插在包头上。

节日期间，除洒花水外，还有许多民间活动：和尚要念经，老年人要拜佛，青壮年举行耍狮子、耍白象、耍龙等群众性的娱乐活动。未婚男女青年就更有情趣了。节日清晨，姑娘们集中隐藏在某一人家中，小伙子们则端着盛满清水的盆，拿着赏建花枝到处寻找姑娘。找到后，小伙子们可以越墙翻窗而入，姑娘们遂用准备好的水和鲜花与男青年互相洒水祝福和取乐。双方边洒边开玩笑，情投意合者便双双走向河边、草地或山坡去对唱山歌，彼此倾吐爱慕之心，有的更进一步山盟海誓，定下终身。

会街节

“会街”，阿昌语称“熬露”。传说起源于小乘佛教。小乘佛教徒们认为，每到雨季来临时，大佛哥达玛的灵魂要到天界去念三天经。天上三日，人间三月，农历的九月十五即是哥达玛返回人间的日子。届时，人们便扎白象、青龙，敲铿锣击鼓载歌载舞迎接归来的哥达玛的灵魂。接着要赶“朵摆”、“塔摆”，即集会拜佛十余日。

会街期间，一些身强力壮的小伙子，抬着白象、青龙，在穿着节日盛装的男女老少前后簇拥下，到佛寺前或塔周围的场地上表演。白象甩动长鼻，青龙摇头摆尾，观众不时发出“哦——会会”的欢呼声，在欢乐的象脚鼓声和铿锣声的伴奏下，人们排成长队，围绕象征吉祥、幸福的白象、青龙翩翩起舞，尽情欢乐。晚

上，小伙子和姑娘们到各家收斋米，做斋饭，鸡叫时送去佛寺供斋，男女老少向佛祖请求赎罪祈求降福。

鉴于传统会街与稻谷收割相冲突，现在将会期推后到农历十月二十六。这时稻谷基本收完，人们可以毫无后顾之忧地尽情欢乐。延长几天节期，以庆丰收。

●普米族

普米族人口为29,657人（1990年统计），主要分布在云南省的兰坪、丽江、维西、永胜等县和宁蒗彝族自治县，少数散居在四川省木里藏族自治县和盐源县。

普米族史称“西番”、“巴苴”；自称因地而异，兰坪、丽江、永胜的自称“普英米”，宁蒗的自称“普日米”、“培米”。解放后，根据本民族人民的意愿，统称为普米族。

普米族有自己的语言，普米语属汉藏语系藏缅语族，语支未定；木里和宁蒗的普米族曾使用过一种用藏文拼写的文字，但流行不广。现大多使用汉文。

普米族信仰多神，崇拜祖先，也有信仰藏传佛教的。

木楞房

木楞房亦称木垒子，普米族的住房。普米族主要住在山腰，村落多分布在半山缓坡地带。房屋多纯木结构，墙壁用圆木重叠垛成，屋顶用木板铺成双斜式样，当地俗称“木楞房子”。房屋一般长6米多，宽3米多，四角有大柱，中央立一方柱，称为“擎天柱”，是神灵所在的地方。房屋分为上下两层，楼上住人，楼下关牲口。门朝东开，进门为正房，靠门右方为锅庄（火塘），系由木架围成的土台。火塘上立铁三脚架，火塘周围设卧铺，左为男铺，右为女铺，互不逾越。平时在火塘上煮饭、做菜，并靠火塘取暖。人们常在火塘边烤火、睡觉，火塘成为全家活动的中心。火塘后方安有神龛，这里又是进行宗教活动和接待客人的地方。但室内陈设简陋，无窗户，光线十分暗淡，但日间可从屋顶挑开两块活动木板采光和透炊烟。正房左边是灶房，供煮猪食用。灶房后面又隔成若干小间，为贮藏室，有时又兼作妇女产房。整个房屋建筑牢固。室外挂有牛羊头骨，为避邪之物，室内挂猪下颚骨，象征财富，室内还悬猪尿泡，以为有防火之效。

建盖新房屋，要先向山神和土地神祭献。砍伐中梁柱，要由巫师举行祈祷仪式，然后由主人举斧砍倒第一棵树，其他人才陆续砍伐。从砍伐木材到锯木板，平地基，盖房子，整个劳动过程都有亲友帮忙，主人则以甜酒和猪膘肉等佳肴款待，不另付报酬。

猜钥匙

猜钥匙是普米族婚礼中的一个习俗，复杂而又充满情趣。在兰坪的普米族最为盛行。新娘出嫁的头一天晚上，娘家要举行

“嫁女送礼仪式”。阿爸阿妈给女儿的出嫁礼物，亲朋好友赠送的临别礼物，姑娘自己多年积攒的衣料鞋袜等等，都要当众装入两只印有“喜”字的红漆木箱。所有的礼物装箱之后，在“卡嚓”的上锁声中，两只箱子的钥匙顿时不翼而飞。钥匙到底落入谁的手中，大家都不得而知。

举行婚礼的那天，新娘被接到新郎家。晚上，屋内火塘熊熊燃烧，室内气氛极其热烈。送亲和迎亲的人们以火塘为界，分为两排，庄重地席地而坐。

前来参加婚礼的宾客，都想看看新娘的嫁妆。尤其是那些未婚的男女青年，更想一饱眼福，学习一点经验。宾客们的心，都望着两只嫁箱，可是，嫁箱的钥匙在哪里呢？人们默默地寻觅着。

新郎的舅舅终于憋不住了，抢先唱起普米曲调：“大红箱子装黄金，没有钥匙打不开。千金压在箱底下，打开箱子才能见。哪位亲家有钥匙，借我把这箱子开！”他边唱边将黄酒献给新娘的姑母。姑母随即起身，欣喜地接过黄酒，品尝一口，然后亮开嗓子唱道：“开门，开门！打开箱子迎来福。左边开来早生子，右边开来壮女郎。可实在抱歉，我没有看见那钥匙。”

姑母的唱词引来一阵欢笑。在欢声笑语中，新郎一方的小伙子又向送亲队伍中的姑娘送去一碗酒，并逗趣地唱起：“姑娘生来眼明快，也许钥匙就在你手里。但愿你伸出热情的手，帮助我把箱门开！”

小伙子唱音犹存，姑娘的歌声就响起了：“人逢喜事精神爽，眼花缭乱不留心。箱子钥匙在哪方，我的心里没有底……”姑娘为之保守秘密，不愿透露丝毫谜底。为了应酬对方，平素不爱喝酒的普米姑娘，此刻都能“咕噜咕噜”地一饮而干。

在普米族的传统习俗中，新郎一方的亲友伙伴谁“猜中钥匙”，谁就能招来福气，就是个有福气的人，并受到人们的称赞。

因此，人们都争先恐后地起身对唱，机敏地寻找窍门，思考着对方的破绽。人们互相敬酒并致祝词。然而，猜钥匙的中心仍不改变。“一把钥匙挂两边，你们锁来我们开。出嫁姑娘衣物多，大家都想看一看。哪位亲家有钥匙，请帮我们解解愁！”“打开箱子看嫁妆，哪个不是这样想。只因我们视力差，不见钥匙落哪方！”屋内歌声飘荡，舞步飞旋，热烈气氛有增无减。

火塘里，粗大的栗木添了一根又一根，火塘边，新酿的黄酒开了一罐又一罐，猜钥匙的人起来一批又一批，找钥匙的歌唱了一首又一首，一直要到午夜时分，新郎新娘和亲朋好友们都十分着急。

此时，喧哗的会场顿时鸦雀无声，藏钥匙的人起身接过对方敬上的黄酒，先用手指轻轻蘸一下，然后举手连弹两下，随即一饮而尽。他欣喜得意地对着宾客欢唱：“今天开门大吉昌，从此富贵保安康，开门开门快开门，打开箱门亮嫁妆。大家看个够，大家赏个饱，喔……哈哈！”忽然，钥匙出现在他手上，爽快地献给郎方。郎方亲友起身致意，新郎新娘向持钥匙者行跪拜礼。

新娘的嫁箱一打开，喝彩声，欢笑声，歌唱声，赞叹声顿时响成一片。宾客们欣赏着嫁品狂呼赞叹，新郎新娘激动得饮泪含笑。在狂欢声中，人们向新郎新娘表示祝贺。

给羊子

“给羊子”普米语称“让比”，意为由纯洁的白羊将死者带回故土与氏族祖先团聚。给羊子仪式实际上就是为死者指路的一种宗教仪式。这种仪式耗费很大，比较隆重。它一般是同一氏族中辈分相同的老人全部去世后才举行，或者是夫妻双亡后合并举行。谁家举行给羊子仪式，远近的亲友全要邀请。其中舅舅是最受尊

重的上宾，缺少他就办不成。晚上，舅甥共聚火塘边对唱“喀修差——理根根”，回顾祖先的游牧生活。给羊子须用纯白绵羊，仪式由“韩规”（巫师）主持。届时，孝子们先向白羊叩头，然后韩规边念经边用酒擦羊身，如羊身颤栗，就象征死者领受了孝子们的心意。又在羊耳上撒点酒和糌粑，如果羊摇头，即表示死者喜欢，全家吉利。这时，死者家属要跪在地上向羊磕头，请羊喝酒。有的还要抢着从羊身上拔下毛，交韩规捻成线给人们拴在脖上，视之为吉祥之物。然后由巫师把羊杀死，用羊心祭祀，并为死者念“开路经”：“现在鸡叫了，东方发白了，快从床上起来吧！快收拾行装吧，由这只白羊为你领路，回到我们祖先居住的北方。那里有厚厚的白雪，有祖先安息的崩崩木里瓦山。这只白羊是祖先猎获的野羊的后代，它对你一定忠诚，听你的话，把你带回老家。”

然后对死者说：“每一个人都会死的。普米族英雄的祖先，在千军万马中杀出杀进，结果也会死去……不要再贪恋生前的快乐了，不要再想活转过来了，只有北方才是安乐的故土。快快活活地去吧，跳跳蹦蹦地去吧，唱唱笑笑地去吧。”

然后又具体指点死者应走的路线：

“先去亲族放骨灰的地方告别，再去大岩洞休息一晚，然后一直朝前，过浪放，经左所，绕泸沽湖，到永宁坝子的拖七别七，在那里的大核桃树下住宿一晚，然后骑上骏马，驰过草原，跑过木里……往北去转过岩石，到了波浪卷着波浪的大江边，你就骑着皮囊渡过去，再往前走就是普米族祖先居住的地方。”

给羊子仪式是普米族游牧生活的遗留；“开路经”对于研究普米族的历史和风俗都有一定价值，现在这种仪式已很少见到。

祭山神

在普米族的观念中，凡是地面凸出的高山小梁，都是山神。因而普米族的山神没有具体范围，但最大的山神是“甲双古拉”，大致指青藏高原西南部的喜马拉雅山，最小的山神即是祖先指示过的那些山。

普米族的祭山神活动规模较大，每逢农历十五都可以进行，但一年中比较重要的只有三次。七月十五的祭山神是最重要的一次。

祭山神活动多由“韩规”（巫师）主持。首先由韩规通知全村人员出发时间，然后集体上山。韩规带上经书和一些祭礼用品，其他人员带足食物和饮料。携带的食物比较昂贵，以表现隆重气氛。不能带鸡肉猪肉，因为鸡猪会吃屎，属于不干净的动物。途中要选择一个较好的环境“过水”和“过烟”。“过水”即用清澈的泉水洗脸漱口，还可喝点清泉水。“过烟”即燃起清香扫拭全身，去掉污物。到了山顶，人们把途中折来的松枝或紫油树枝堆放在祭坛上，引火燃香。这时韩规开始祈祷：“祝天更高，祝地更阔，祝人们的寿命像水一样长流，祝人们的心肝像铁一样坚硬，祝人们的日子像山神一样好过。”

韩规祈祷时，人们便将祭文挂在祭坛周围的树枝上，然后跟随一位老人围着祭坛逆时针方向走，此时，老人口中念念有词，低声祈祷。绕祭坛三圈后，无论老少长幼，都停步磕头四到六次，然后又继续走三圈。走前三圈时要向内泼撒祭食，如小麦、玉米和谷子等等，意思是请山神代为保管，等到人死后入九泉时食用。走后三圈时要敬奉祭食，让山神同享人间欢乐。

祈祷仪式结束，韩规便把人们带来的食品集中，先敬给山神，然后平均分给参加祭礼的人。参祭者不能把食物吃完，要留一部

分带回家，分给家中的人吃。据说这是山神留给人们吃的，吃了神饭，大人不会受风寒，不会得病痛，娃娃能长得聪明健壮。

最后还要举行驱除魔鬼“由三格塞呀”的仪式。驱赶之前，韩规用祭面做一个“由三格塞呀”的模型，放在一块木板上，然后进行驱逐，并念咒语。念完驱逐词，参加者每人向“由三格塞呀”吐一口痰，最后由韩规把它扔在半山腰的松树脚下，表示魔鬼已被赶走。这样，人们才高高兴兴地喊着“拉机罗”（告辞之意），欢欢喜喜地离开山神，带着无限的希望向村寨走去。如今这种祭山神的活动随着社会的发展逐渐消失。

巴丁拉木

巴丁拉木的“巴”是普米族族称，“丁”为土地，“拉木”是母虎，意为“普米土地上的母虎神”。母虎神是普米族崇拜的“白额虎”的化身，是泸沽湖地区普米族信奉的最高神祇。传说她是一位美丽能干的女神，身穿白衣白裙，骑着白骡，只饮清泉水和牛羊奶，不食五谷。这无疑是母系时代游牧生活的象征。普米族古代丁巴教的巫师，都是由妇女担任。巫师丁巴为巴丁拉木的继承人。巴丁拉木的偶像是一尊天然石像，位于木里县乌角区刺孜山腰的岩洞里。每年冬季，人们成群结队到刺孜山朝拜巴丁拉木，祈求保佑人畜平安，解除病痛和灾难。有的人则为久不生育而请求帮助，甚至家庭不和睦，婚姻不顺利等等，都要乞灵于巴丁拉木。朝拜巴丁拉木是妇女们的事，有的虽有男子结伴而行，但仅仅做些照顾性辅助性的事情。男子不能进入岩洞朝拜，女神只享受女性的祭祀。巴丁拉木是名副其实的女性保护神。

转山会

转山会是云南永宁、宁蒗普米族在端午节举行的盛会。每年农历五月初五，人们就携带着食品，穿上节日盛装，热热闹闹地来到泸沽湖畔的狮子山下，唱歌跳舞，骑马打枪。不相识的人互相祝愿，青年们趁此机会结识情侣，男人们还要持枪纵犬骑马赛跑，妇女们祈祷山神，希望多子多孙。所有的人还要去瀑布洗澡，祈求四季平安，万事如意。人们还要到山洞里聚餐歌舞，老年人喜用野杜鹃树枝点烟火薰鬼邪。因此，转山会又叫“绕灵洞”，是预示吉祥的盛会。

转山会在狮子山下举行，是因为普米族和当地的纳西族一样，把它当作一位女神，而且是人间最高的保护神。

这位女神的名字叫“干木”。远远望去，狮子山顶上层层的岩石就像妇女的包头；岩石上的几棵青松，就像包头上的挂珠；山脚下一条条垂直的峡谷，就像普米族妇女的百褶裙。普米族特别尊敬干木，在民间广泛流传着干木的神话。

很古的时候，永宁坝子是一片肥美的草场，草场中央秀丽的湖泊，引起了神仙们的向往。有一位干木女神，不辞辛苦地迁来湖泊的北岸居住；有一位哈瓦男神，千里迢迢地赶到湖泊的南岸居住。虽然他俩都是神仙，却也像凡人一样结成情侣，彼此定期在湖中约会，有时也在岸边叙情。他们饿了同吃野果，渴了共饮湖水，过着穴居野处的生活。他们为了躲避日神的惩罚，便约定夜夜相会。可是，有一次干木来晚了，当她跑到哈瓦身边，东方已经发白，公鸡叫了数遍。她终于被日神发现，于是日神勒令他们“永远留在人间，不许回到天上”。从此，干木变成一座山，站在泸沽湖的北岸；哈瓦变成一座山，站在泸沽湖的南岸。

干木的遭遇，引起了人们的同情和崇敬。每当聚会的人们在这里燃起堆堆山火，让缕缕白烟飘上天际，年轻的姑娘们就向她敬献鲜花和果品，满怀虔诚地向她叩头。因为她们相信，这样干木就会看见她们，而“干木山望到哪里，哪里的姑娘就最漂亮，最能干”。人们还彼此相约绕干木一周（转山一周），既祭祀干木，又仿效干木。他们白天唱歌跳舞，晚上就地露宿。在月明星稀的夜晚，年轻的姑娘和小伙子往往就结成新的伴侣，他们感到这是干木女神的赐予。

干木女神不仅是普米族的最高保护神，人们还认为她能主宰繁衍生育。每当孩子降生，人们便到山下祭祀女神，在巫师的主持下向女神叩头，感谢她带来了人丁兴旺，并请她享用酒肉、鸡蛋、炒面、花果等供品。祭祀完毕，男青年们还要举行赛跑，优胜者能痛饮祭神的美酒。如果某个家族人丁不旺，也要去祭祀干木，祈求降福。

转海会

每年农历三月十五，泸沽湖畔的普米族，都要以村寨为单位，祭祀“格姆”（女神）山。他们绕泸沽湖一圈，烧香磕头跪拜，祈求山神保佑人间太平，五谷丰登，六畜兴旺，俗称转海会。

转海分划船绕湖和步行沿岸绕湖两种，活动隆重庄严，气氛极其热烈。划船绕湖的人，各家各户自备一只小船，在船头安置香炉，准备若干松枝和祭品。届时，人们依次上船，由长者或舅父将松枝放入船头的香炉，又把祭面撒在松枝上，然后用一枝松针蘸一点清亮的湖水，均匀地洒在松枝和祭品上。随着一阵高亢的海螺声，所有的船头同时升起香烟。烟火一起，长者或舅父便大声祈祝：“今天的阳光多么温暖，今天的日子多么吉祥。太平的

世间给我们安乐，丰收的年景使我们幸福。在这美好吉祥的时刻，衷心祝福我们永远安乐、幸福。”祝祷完毕，小船并排由西向东划行，船上的人欢歌笑语，相互对歌、打趣，以减少疲劳。

步行绕湖的人们，在离船群不远的湖岸上，集合转海队伍。他们也随着海螺声点烧香火，对天祈祷，祷毕便整装待发。步行沿岸绕湖的队伍，主要由儿童和青年男女组成。他们身着盛装，仪态庄严。队伍出发了，走在最前面的是三个小伙子。他们每人身挎一支火药枪，每到一个烧香祈祷的路口，都要鸣枪三响，以之助威。跟在鸣枪手后面的是各家各户少年，扛着神旗。神旗一般要备十多面，但只能是单数，不能是双数。他们每到一个烧香祈祷的路口，都要插上一只小神旗，表示对山神的敬意。转海队伍的后面，是背负食物和组织午餐的人员。中午他们就近选择一块避风而又宽敞的场地，把各家各户带来的食物拿来，就地生火做饭。他们为沿岸转海的人斟酒倒茶，提供香甜可口的饭菜。那些不负责任何事务的转海人员，只管跟着队伍走，以尽祭山之情。一路上，他们可以尽情地玩乐，但烧香磕头跪拜山神时必须参加。

中午时分，划船转海的人们也按以往的习惯，找一个平静的湖湾停下来吃午饭。船靠岸之后，湖滩热闹非凡。有的唱山歌，有的跳“锅庄”。等到饭菜摆好，大家便围成圆圈，品尝野味，开怀畅饮。但是，这一顿午餐的食物不能全部吃完，要省下一点带回家去给没有出来转海的人吃。因为这些食物是山神恩赐的，家人吃了不会生病。

直到太阳偏西，转海的人们才收起剩下的猪膘肉、香肠、油炸粑粑等食品，按照出发时的阵容和顺序向村寨行进。人们必须在太阳落山之前进入村寨，准备晚上的篝火晚会。

夜幕中，村村寨寨的场地中都燃烧着熊熊篝火。人们汇集在篝火旁，随着悠扬的旋律翩翩起舞，尽情欢唱。

●塔吉克族

塔吉克族人口为33,538人（1990年统计），主要分布在新疆维吾尔自治区塔什库尔干塔吉克自治县，少数散居在莎车、泽普、叶城、皮山等地。

“塔吉克”为本民族自称，据民间传说，意为“王冠”。解放后，以此名作为族称。塔吉克族有自己的语言，塔吉克语属印欧语系伊朗语族帕米尔语支；无本民族文字，使用维吾尔文。

塔吉克族信仰伊斯兰教。

绣花棉帽

塔吉克族的传统服装以棉衣和夹衣为主，没有明显的四季更替服装。妇女的服装比男子更美观一些。在塔吉克人富有民族特色的服装中，帽子更具鲜明特点。

男子的帽子多是羊羔皮黑绒布棉帽。帽子用黑羊羔皮缝制，帽下沿向外卷出一道皮毛边，外罩黑色条绒布面。帽面上与帽沿平行绣有两三道红色或黄色花边。这种帽子既美观大方，又保暖御寒，十分适应寒冷的高原气候。

妇女的帽子更为讲究。塔吉克妇女一般无论老少都戴一种绣花棉帽。棉帽呈圆筒形，圆顶。帽顶、帽圈绣花，其下又有呈大半圆形的耳围，上面也绣着花。妇女的这种绣花棉帽是塔吉克人重要的传统工艺品。绣花图案种类繁多，是塔吉克妇女通过世代相传，不断摸索积累，自己设计出来的。图案用各色细毛线或丝线绣制。先在做底的白布上勾划出图案草图，然后用各色线一针一线地以各种不同针法绣制。绣一顶精致的花帽有时需一个多月。塔吉克姑娘出嫁之前，一般都亲手绣几顶最为精致的花帽，作为陪嫁品，向丈夫的家人亲友展现心灵手巧的智慧才能。

塔吉克妇女绣花棉帽因使用者年龄、地位不同有些差异。一般说来，儿童和少年的花帽图案少而简单。中老年妇女的棉帽图案色彩较沉着，显得稳重端庄。青年妇女的花帽图案色彩艳丽，图案醒目，且形状复杂，几乎整个帽子外围都用各色图案装点起来，既俏丽又大方。

辫　饰

塔吉克妇女无论老幼都蓄梳发辫，但是不同年龄和不同身份的辫子梳法和辫饰也有所不同。老年妇女蓄一条发辫。发辫上一般不佩戴饰物。中年妇女留鬓发，长度与耳垂相齐，也只梳一条长发辫。青年已婚妇女梳四条长发辫，梳发辫时还要加编入很长的黑色辫饰。辫饰用黑线编制而成，底端留有整齐的缨穗，这使得四条长辫看起来又粗又黑。节日和重要喜庆活动时，在长辫上再加佩一批白色钮扣，家庭富裕者在钮扣之间加上银元等饰物，形成黑白相间的四条美丽发辫。为活动方便，四条发辫又用小铜链等物相互并结在一起。这种漂亮的白色辫饰是已婚妇女的身份标志之一。未婚姑娘不留鬓发，梳四条发辫，除黑色辫饰外，不加其它饰物，仅用小铜链连结四根发辫。这种用发辫标明女子身份的办法，是一种巧妙的文化符号，使熟悉塔吉克文化的人们一目了然。

塔吉克妇女除辫饰外，还佩戴其他饰品，如胸饰、项链、耳环、帽饰等。一般说来，未婚者首饰较少，也比较简单。已婚妇女首饰较多。青年妇女首饰色彩鲜艳，式样花哨。中老年妇女首饰色彩较为沉着，式样也比较典雅，与她们的年龄相适应，稳重得体。这些有区别的首饰又与辫饰相配合，加强了文化符号的标识性。

三世同堂的大房子

塔吉克族是一个农牧业兼营的民族，除了夏季游牧时住毡房外，其余季节都有固定住所。住宅有多种形式，大房子是其中最

常见最有代表性的一种。

大房子多建在村落里。一般位于平坦、向阳、背风之处。系用石块、土砖垒砌而成，外涂泥皮，屋顶有两根横梁，再加上檩条和覆盖物，最后覆一层草泥。房屋建成架横梁时，须将绵羊牵上屋墙，按在屋墙上的房梁端头处宰杀，以祈求平安。房屋呈四方形，平顶。屋门通常开于东墙偏左一侧，房屋正中修建有既用于烧饭又可取暖的炊灶——馕坑。正对着馕坑，在屋顶的正中开设天窗。天窗多用木制材料蓬起，防止雨雪落入屋内。天窗形式可根据建造者的喜好设计成正方形、菱形等高低不同的式样。馕坑后面是厨房，中间用矮墙隔开。

塔吉克人传统上多是大家庭合居，无分家习惯，常是两三代同居一室。大房子中通常建有三个土炕。屋门左侧的炕面积较小，供家中老年人睡。屋中右侧的土炕面积最大，供中年人或第二辈人居住。另外一张炕在屋门右侧，供第三辈人居住。家庭中的重要活动均在这间大房子中进行，可以说是家庭活动议事的中心。

除了大房子外，根据家庭人口和经济情况，建有客房、小屋等住房和草棚、凉亭等，外修院墙，构成一个别致的院落。

纯情的婚礼

塔吉克族选择配偶，以品德为重，其次才是血缘关系、相貌和财产。缔结婚姻的第一步是“说亲”。男方请当地有影响的人士和一位年龄较大而有威望的妇女，携带一只羊和其他礼品前往女家提亲。在亲切气氛中，男方代表巧言提出缔结姻缘的意思，以诸如“金银戒指要镶上宝石才更美丽”、“一条链子应该紧紧结在一起”等隐喻。女方由年龄较大、有威望的亲戚出面应承亲事。如果同意，男方的女代表给躲在一边的未来新娘戴上大红头巾和戒

指或耳环，然后商定婚期，开始紧张的准备工作。

婚礼前三天，男女双方各自把村里那些近期死了人或发生过不幸的家庭的人请来，劝慰他们节哀宽心，并请这些客人敲响手鼓，共享喜庆时的快乐。

婚礼之日，男女方家中要举行大婚仪式和唱歌、跳舞、赛马、叼羊等活动。新郎的婚礼服饰最令人注目的是缠在帽子上的红白两色布条，象征吉祥幸福，这是新郎的特殊标志。新郎骑马由亲友簇拥着前往女家接亲。抵达新娘家之后，新娘亲友端来加入酥油的牛奶，新郎和其亲友喝下，以示祝福。新娘家牵出一只特意准备的山羊，由女方几位亲友和男方展开“争夺”。在经过一番真真假假的抢夺之后，男方抢到并将羊宰杀，用它进行婚礼活动中的重要节目——叼羊。

到达新娘家门口的迎亲队伍必须先交上开门礼品，经过一番交涉，迎新者将彩礼送进屋内，让女方亲友过目，然后，骑在马背上等待的新郎才被允许下马进屋。

婚礼在宗教人士主持下进行。宗教人士在念经后，询问站在面前的新郎、新娘，是否同意缔结良缘，得到肯定的答复后，再让新人同喝盛在一只碗中的盐水，或同吃一块蘸盐的肉，向他们表示祝福。然后新郎新娘互换系有红白两色绸布条的戒指。

新娘被接到新郎家门前时，要在门口铺上一块白绸子，新人踩着白绸子进入屋内。新人和亲友围坐在炕上，婚礼主持人（被称为“帕德尔汗”）在屋内将戒指等物蘸上羊血，夹在烤馕之中，扔出天窗之外。接着，又是盛大、热烈的歌舞、叼羊、赛马活动。然后开始以羊肉、抓饭为主的喜宴。

婚后第三天，亲友们又重到新郎家中贺喜，主持人用擀面杖揭开新娘的面纱。在主持人妻子的帮助下，新娘洗手做进入新家后的第一顿饭，从此开始在大家庭中的新生活。

骆驼送葬

塔吉克族死了人，按照传统习俗须举行哭悼仪式。塔吉克人崇尚土葬，但墓穴不能在星期三挖，据说这一天不吉利，如挖墓穴则当年死者必多。因此星期二有人去世，必须赶在当天挖墓穴；如星期三死人，须推迟到次日再挖墓穴。

人死后，一般停尸两三天，尸体用白布裹缠，请海力派（宗教人士）念诵《古兰经》，然后送葬。女子一般不参加送葬。墓地离家极近者就用抬尸床将尸体抬到墓地。一般应该用骆驼来驮运。

塔吉克人认为骆驼是来自天堂的牲畜，且善于远途跋涉，行走稳重，而又能保持一定速度，体态庄重，较为驯服，负重力强，故选择骆驼做运尸工具。运尸体的骆驼身上要覆以彩色图案的羊毛毯子（也有用绸缎和布匹作覆盖物的），头上披绸缎。若死者是青年妇女，骆驼头上还要戴项链、珠饰等装饰品。

尸体埋葬后，还要专门为送葬骆驼宰杀一只羊，然后趁热取出新鲜羊肺，用它敲击骆驼全身。据说这样可以消灾除病。红色的血在塔吉克人看来有除避灾祸的功能。骆驼用羊肺敲过之后，就不会染上疾病。送葬时全村男子不做其他事务，跟随骆驼驮载尸体的送葬队伍，一直送葬到墓地。

墓上建筑“麦克布拉”

塔吉克人的墓地，有一种独特的建筑——“麦克布拉”，那是塔吉克人追悼亡人的纪念物。

塔吉克人信奉伊斯兰教，普遍实行土葬。在死者入葬之后，形成土堆墓丘。第三天之后，用泥土修砌墓丘。墓丘有的是长方形

上加马鞍形饰物，也有椭圆状中有隆起的船底形等不同形式。40天后，再用石灰水将墓丘刷成白色。

除墓丘之外，有些家族将墓地用土坯花墙围起来，只留很小的出入口。更高级的地面墓宇叫“巩拜孜”。这是按伊斯兰风格建筑的。正方形的墓室之上有半球形穹顶，顶上竖象征星月的饰物。塔什库尔干的巩拜孜多用土坯或石块修砌，泥抹内外墙。一般较有影响且家境较好者死后才建这种巩拜孜。历史上最为显赫的塔吉克领袖有的享用高级宫殿式墓室，在整个塔什库尔干仅有少数几座宫殿式墓室。

塔吉克人墓上建筑的另一种形式，也是最普遍的形式是麦克布拉。麦克布拉是平顶建筑，三面筑墙，呈冂型，内呈正方形或近长方形空间。家庭经济条件稍好，死者有一定地位，都可以修建这种墓室。和巩拜孜一样，一座麦克布拉内可以有二个以上的墓丘（多为两、三个）。墓室前面一般是敞开的，也有的修建了小门和木制花格窗，形成近乎封闭式的结构。建筑时以土块或石块砌墙，外裹泥墙面，有的还刷成白色。用木檩、木板搭顶，蓬盖物上盖泥顶。麦克布拉内壁为泥墙，用白石灰水画上图案，若已刷为白色，则可以用彩色颜料作画。麦克布拉的内壁壁画是塔吉克族墓葬、乃至民族文化中最鲜明的绘画之一。一般信奉伊斯兰教的民族平日忌有生命之物的图画，和死者相关的墓室等处最为华贵和讲究的装饰也不过是花草纹样图案和书写美丽的伊斯兰教经典章句。但是，在塔吉克人的麦克布拉壁画中，有枪、马、盘羊、骆驼、牛、日用器皿、衣服、花、树木等图形，甚至有武士和猎人形象出现。一般根据死者生前的爱好来画，若死者生前喜爱打猎，就画上枪和黄羊等野兽。颜料多用红土调制，也可用其他矿物和植物调配。麦克布拉顶棚木板上饰以红黄条纹图案。只要修建麦克布拉，就要描绘各种壁画。壁画和麦克布拉建筑表现

了人们对于亡者的追思。

出生礼

生活在帕米尔高原的塔吉克人非常重视婴儿的出生和成长，这可以从出生后的一系列繁琐的礼仪中表现出来。

在孩子出生后，如果是男孩，孩子的父亲就拿起猎枪，朝天窗外放三枪，意在希望孩子长大后成为英雄、好猎手。倘若生了女孩，将各种厨具或其他家庭用具放在床前，盼她成为理家能手。

婴儿出生后，家中还要杀羊为产妇补养身体，并寓有祝贺婴儿平安出生之意。亲友、邻居都来祝贺，女亲友还帮助日夜护理产妇和婴儿。婴儿出生 24 小时后，举行开嘴仪式，用调入酥油的奶抹在婴儿嘴上，称为“开嘴”。并且由长者主持，祝婴儿诞生，给婴儿命名。仪式之后，母亲沐浴，然后给婴儿喂奶。三天以后，村里其他人和亲友们带着馕、羊羔、糖、布等礼品，纷纷前来祝贺。

待客礼节

塔吉克人待客十分热情周到。每当客人骑马到塔吉克人家时，主人总是上前迎接，扶客下马，然后接过客人的马鞭，替客人把马拴好。在行过见面礼和互致问候之后，请客人进屋。这时女主人则在屋里铺好褥子，请客人在炕上就坐，并在客人身后垫上枕头，替女性客人解开头巾和腰带。随后，铺开餐布，端上奶制品、奶茶和馕，请客人享用。如果客人停留时间较长，主人还要宰羊，请客人吃手抓羊肉和其他饭食。

塔吉克人吃手抓羊肉有很多讲究。主人先将准备宰杀的羊牵

到客人面前，请客人过目。客人一般都要向主人表示祝福和谢意。就餐时，男女分席，围坐在餐布周围洗手之后，端上手抓肉。款待客人吃肉时的第一道菜是切成薄片的羊肝和羊尾巴油。这道红白相间的菜肴寓意着吉祥、幸福。主人敬奉给最尊贵或最年长的客人一只羊头，客人割下一块肉吃了，再将羊头双手送还主人。然后，主人根据客人的不同身分、年龄，把不同部位的肉分给客人食用。吃完之后，按照伊斯兰教传统，主客一起举起双手做祈祷。最后，主人收拾残肴，撤走餐布，客人向主人道谢，才能离开餐席。

客人如需留宿，女主人要为客人铺好被褥，为客人脱靴，请客人休息。客人离开时，主人将马牵来，扶客上马，把马鞭递还给客人。若客人远行，主人还要给他送羊胸脯肉、干奶酪等食物，向客人道别，祝客人一路平安。

以吻会亲友

塔吉克族的见面礼节在中国少数民族中算是很有特色的。吻，是其中最常用的礼节。

塔吉克族平辈男子相见，互相握手，然后俯身互吻向上举起互握着的对方手背，或者互相拥抱；长幼异辈男子相见，长辈吻幼辈的额头，幼辈则吻长辈的手心。同辈女子相见，一般双方靠近，互吻面额，至亲者则互吻嘴唇；长幼异辈女子相见，长辈吻幼辈的眼睛或前额，幼辈则吻长辈的手心。男女异性相见，一般行握手礼。女子见到亲近的男性长辈，则吻长辈手心；有时，男性长辈在接受幼辈女子问候之后，用手轻摸女子头顶，以示问候。有些幼辈男女见到异性长辈则稍稍欠身，低头问候。

亲友久别重逢，除上述礼节外，还互致许多问候语。互相询

问和了解对方的身体、家庭、牧畜、庄稼等情况，互相祝愿身体健康、家庭和睦、家中老少平安、牲畜兴旺、庄稼长势旺盛和粮食丰收等等。

引水节和播种节

每年春天，农牧兼营的塔吉克人要欢度两个与农业有关的特殊节日——引水节和播种节。

引水节视水情而定，一般在3月25日之后。节前，各家都要烤制三个大馕，其中一个馕留播种节食用。引水节这天，附近各村的人要汇集到由雪山冰川及山地积雪融化而流下的溪流边，携带工具，修整水渠，并相互泼水祝贺。劳动之余，大家聚在一处，互相吃各家带到引水口的两个大馕。负责管理水渠的人要提供羊，以热烈的叼羊活动来庆祝这个节日。

播种节也根据各地自然气候状况而定，在引水节之后进行。在播种节那天，家庭成员及附近邻居相互祝贺丰收，互赠茶叶、馕等礼品，主人则把农作物种子回赠给客人。各家将耕牛牵到田里套上犁铧。人们要给耕牛喂面疙瘩，别具匠心的农民还将面做成牛、犁等不同形状，让耕牛吃，以祈求当年获得好收成。在犁地和播种仪式之后，引水入田，互相泼水，祝贺春天的来临，预祝新的丰收。

切脱恰特尔节

塔吉克人在每年春分时节，度过他们最热闹而又最有民族特色的节日——切脱恰特尔节。此节日又称肖宫巴哈尔节，在文学语言中，称为那吾鲁孜，类似汉族的春节。

春分之前，各家族的切脱恰特尔节的主持人“肖宫尼”为各家扎制芨芨草扫帚，并分送给各家。春分前一天，各家都要彻底打扫卫生，再由主妇或请来的妇女用白色面粉在屋里的墙上撒出显有五指痕迹的面粉印，或者用白色面粉调成浆，在室内墙壁上整齐地画数行Y型图案。这是迎接新春、迎接吉祥的象征，祈求在新的一年里幸福美满。

春分那天早晨，由男孩牵耕牛或绵羊进屋转一圈，主人向它身上撒些面粉或喂馕后再牵出去。肖宫尼到各家祝贺。其后男子们走家串户，开始互相拜年；主妇们则在家里负责招待客人。主妇们要向来客右肩撒上洁白的面粉，祝贺新年吉祥。来客也向主人致以衷心的问候：“千事万事都已过去，现在祝贺我们的新年！撒下种子，一粒成千，千粒成万！”主人也对客人回敬新年幸福。次日，女子也加入拜年的行列，走亲访友，互相祝贺。节日过后，各家即开始春季生产的各项准备工作。

巴罗提节

在伊斯兰教历巴罗提月中旬，塔吉克人要过一个特殊的节日，这就是寄托哀思、祈望光明的巴罗提节。

伊斯兰教历巴罗提月（回历八月）14日晚上，塔吉克人全家围坐在一起，由年长者将自制的草烛（用一种叫作“卡乌热”的干草，裹棉花蘸羊油制成）插在盛着砂子的盘中。一边呼叫家庭中每个成员的名字，一边为每个人插两支草烛。然后，将盛有饭食的碗摆在草烛盘前，点燃草烛。主持者诵念祝词，每人用手向自己脸上拜捧三下烛火，祈愿得到光明之神的庇护和保佑，生活美满，粮食丰收，牲畜繁盛。人们把自己家做的节日饭送给邻居，相互祝福节日。

次日下午，巴罗提节的仪式转到墓地举行。人们将食物和为死去的亲友准备的草烛带到那里去，举行追思亲人的悼念活动，扫除墓边的尘土，哭悼亲人。然后，各家在墓地围坐，吃带来的食物。饭后，赶在日落之前，在死者坟头点燃三根较短的草烛，祈望死者安息。最后，将一些食物、糖果等留在墓丘上，才离开坟地。

晚间，各家要点燃特制的油火把，插在屋顶上，召唤吉祥。当晚，村里的空旷处，到处都烛火通明，小伙子们围火欢歌起舞，欢度节日之夜。

高原乐器鹰笛

鹰笛是塔吉克人特有的乐器。塔吉克人猎取山鹰后，将未受伤的鹰翅骨取出，剔除杂物，截取内径1厘米多、长约20厘米的一段，将管内削刮干净，即成鹰笛的原坯。然后，在笛的下端刻出六个发音圆孔，笛的外壁雕刻出漂亮的花纹。这样，一支鹰笛就制成了。

鹰笛没有哨嘴，也没有簧片。吹奏时用嘴含住笛口的一半，嘴吹口哨，贯入笛中，使其音量扩大，加以手指摁压或抬起的变化，使得3个孔开闭相间配合，吹奏出各种优美动人的曲调。鹰笛是塔吉克人最喜爱的乐器，又是最常见的乐器。有时用两支鹰笛重奏，曲调变化更为丰富。再加上塔吉克人的手鼓、热瓦甫（一种六弦的弹拨乐器）的配合，更是相得益彰，富有高原特色。在许多节日、喜庆场合都少不了演奏鹰笛。鹰笛的演奏声音高亢，在帕米尔高原山谷中据说可以传到几公里远。

●怒　族

怒族人口为27,123人（1990年统计），主要分布在云南省怒江傈僳族自治州和迪庆藏族自治州。

怒族自称因地而异，有“怒苏”、“阿怒”、“阿龙”等。解放后，根据本民族人民的意愿，统称为怒族。

怒族有自己的语言，怒语属汉藏语系藏缅语族，各地方言差异较大；无本民族文字，大多使用汉文。

怒族主要信奉原始宗教，崇拜自然和各种神灵，与藏族相邻的部分怒族信奉藏传佛教，也有一些信奉天主教、基督教。

传情物——羊毛袜

在贡山县丙仲洛区和察隅县察瓦龙区，怒家妇女无论是背柴，赶闹市，去田间，或聚会时，总要挎着一个小“搭弓”（怒语，意为小篓），两只手不停地捻着羊毛线，并经过精心巧手，编出一双双羊毛袜子。她们抽捻出的无尽的均匀细线，充满怒家姑娘和妇女的千缕情思。羊毛袜子就是怒族男女的传情物！

所以，当你在路上碰到未婚的小姑娘，问到阿妹织的袜子准备给谁时，腼腆的姑娘会把头扭过去，发出格格的笑声，羞羞答答的拒不回答。而问到年轻的已婚妇女时，她就会骄傲而又坦爽地对你说：“除了娜哥（怒语，意谓娃娃）的阿爸，我还要送谁?!”

在怒家人的爱情与家庭生活中，羊毛袜子是妇女给自己恋人的传情物。这有个充满浪漫的传说。传说在许久许久以前，有一个俊俏的叫阿贝的姑娘，悄悄地爱上一个叫阿嘎的青年小伙子。对阿嘎的爱恋，苦苦缠着阿贝的心，每当阿贝思恋阿嘎时，就情不自禁地捻起手中的羊毛团，捻出无穷尽的线，又编出精细美丽的羊毛袜。入冬之季，在休工回来的路上，阿贝把袜子送给赤足的阿嘎。阿嘎接过袜子，暖在脚上，热在心头，于是根根毛线，把阿贝和阿嘎的情意联在一起，他们结成了一对终身情侣。从此，羊毛袜子就成为怒家青年恋人的牵线传情物，有了它，怒家青年就可不顾传统礼俗的束缚，自由地追求自己的心上人。在怒族的传统习俗里，女孩到了七八岁时，就要向阿妈学习捻毛线，织羊毛袜。到十七八岁时，就能捻出细长而又均匀的羊毛线，织出质朴大方而又松软的羊毛袜子。怒族姑娘到了情窦初开时，只要心里爱上哪个小伙子，就可把织好的羊毛袜子送给他，只要小伙子收下毛袜子，也就表示自己接受了姑娘的爱情。只要哪个小伙子穿

上羊毛袜子，人们就会私下讲他已有对象，而姑娘也就不会去找他了。而男子在外，不管离家多远，岁月多长，羊毛袜也会牵动心肠，使他不忘妻子儿女和家乡。

吹竹号报丧

吹竹号怒语称为“剥利”。

怒族男人死后要吹竹号报丧，通知亲友奔丧，增加哀悼气氛。

吹竹号有具体规定，但各村不完全统一。一般吹竹号的数目按死者的身份而定，未婚吹一个，已婚吹两个，已婚有子女的吹三个，巫师吹四个或五个，老人和族长吹五个或六个。号声一响，全村的人都赶来吊丧，和死者吃“离别酒”，由巫师灌死者一杯，在场的亲友各饮一杯。但如果死者是妇女，无论成年与否，都不能吹号，也不能享受亲友的隆重吊唁。

有的村寨成年男性死亡一直到出殡，每天吹竹号三次，全村皆停止生产劳动，以示哀悼。送葬时要吹竹号，一般哭者多时不吹，哭者少时便大吹特吹。送葬时吹竹号是为了送死者灵魂，魂要送过碧罗雪山（怒山）、兰坪的拉井、云龙的石门、剑川的乔后等地。据说碧江果科乡怒族的祖先是从这些地方迁徙到怒江的。

奔丧的亲友要自带猪羊等祭品来祭奠死者的灵魂，但不能带鸡。带鸡奔丧会被认为是对死者不尊重，人们还会视其为吝啬鬼。

祭奠死者时巫师要唱祭词。为悼念死者，亲友们聚集后要唱哀歌，跳祭祀舞。舞毕，人们手拉手围成一圈，由巫师卜刀卦，唱《离别歌》。有些地区由氏族长老唱《送魂词》。长老手拄一根竹竿，直挺挺地站在死者的门口吟唱《送魂词》，唱完之后便为死者指点去路，最后长老要将手中的竹竿压断。此时，早已备好长刀和竹片的三个成年男子高举长刀竹片，放声高喊“嘹——！嘹——！嘹

——！”边喊边飞速绕死者家三周，前边的一个男子举刀高喊，后面两个男子举竹片清扫死者家的外墙，并应和着前者的叫喊声飞速前进，表示已送走死者的亡灵。

三个成年男子绕死者家三周后，便放慢脚步，护送死者到葬地。他们高举长刀和竹片缓缓地走在队伍的最前列，抬送死者的八个男子紧跟护送者，后面是两名吹竹号的男子，竹号手后面是死者的亲属和朋友。到了葬地，护送者要举起长刀和竹片，放声高喊“嘹——！嘹——！嘹——！”飞速绕火葬场三周。竹号手要大吹竹号，飞速绕火葬场三周。然后将死者和殉葬品一道抛入火中，直到一切都化为灰烬，参加葬礼的人才返回死者家中吃晚餐。

怒族自古以来都行火葬，但目前普遍流行土葬，其礼俗已发生了很大变化，仅吹竹号还保持原貌。由于怒族相信人死后灵魂不灭，死者能像生前一样生产和生活，因而，男子死后，家人要把其生前所用的弩弓、刀箭、兽皮、箭包等挂在土葬之墓旁；妇女死后，家人也要把她生前所用的煮饭用具、织麻织布的工具挂在土葬墓旁。但铁器禁止埋入坟中。

侠　拉

“侠”怒语是肉的意思，“拉”是“阿拉”的简称，即酒的意思，合称意为炒肉酒。这是怒江上游，贡山丙仲洛地区怒家人的一种别具民族和地方风味的小吃。制作的办法是：先把野鸡肉剁碎，然后把菜籽油或酥油放入锅中，待油热后，便把肉放入热油中炒，直到把肉炒到发黄后，再倒入自制的酒，略加翻动，焖十分钟左右，便起锅上桌。这种菜吃起来，又辣又香，别有风味，不但香味可口，而且具有食疗作用。可以滋身补气，强健筋骨，并是医治妇科疾病的良药和补品，更可帮助来自远方的客人，解除

长途跋涉的疲劳。

怒族过新年

新年期间，家家户户团圆，吃年饭，邀约乡里亲友欢聚饮酒。人们载歌载舞，即兴作歌对唱，射箭打靶荡秋千，处处充满节日的欢乐。

每年到腊月二十几，家家户户开始清扫庭院，收拾碗柜，除去火塘中的陈灰，洗净房顶上墙壁上的污渍，以示把旧岁月不吉利的一切送出门，把吉祥和新的一年迎进门。

除夕之日，大家都要出动，上山采松枝装饰门面。屋内的大梁和中柱上，必须插上松枝，以象征吉祥。室内地上，炊具上，盆盘碗盏上也要撒上一层松毛，以增加节日的新鲜感。亲朋好友互赠食物和给长辈拜年的礼物都要包上一些松毛，表示把吉祥献给对方。

初一凌晨，寨中的雄鸡初叫，小孩们就纷纷背上竹桶或挑起木桶，打着火把或手电去舀寨中各个水井里的水。他们把万泉水背回家，作为岁首的吉祥物。据说这一天凌晨，天神会送来一些酥油，酥油飘浮在水面上，哪一家舀到的酥油水越多，哪一家的庄稼就长得越茁壮。

初一上午，怒家人要给长辈拜年，行半跪礼，并送上一竹桶水酒和一竹盒油条。长者回赠一些小礼品给拜年的人，以油条麻花招待客人。同时，人们还要给家中的牛和狗拜年，并送上油煎饼和肉汤。牛不吃荤，不肯开口，人们只得掰开它的嘴喂进去。狗立即张开大嘴，边摇尾巴边吃东西，喜出望外。怒族人民很重感情，他们认为牛一年到头耕田踩肥料，母牛还无私地贡献洁白的乳汁，狗成天撵山狩猎，看护家院，极为辛苦，过年理应回报。

节日期间，小伙子们的“都巴洛”很有特色。“都巴洛”意为打石头靶子。方法是人群分为两组，人数相等。各组在30米外竖立三块大小不等的石头靶子，然后用石丸击它，击中者以单脚跳跃前进，目标为对方石靶。跳跃标准有三：击中大靶者跳一步，击中中靶者跳两步，击中小靶者跳三步。以先跳到对方靶下的为胜。比赛一般三打两胜，也可五打三胜。这种游戏，一是练习打得准，二是练习跳得远，既锻炼眼力手力，又锻炼弹跳能力。这一活动，乐意参加者极多，热闹非常。

再一项目就是荡秋千。秋千多为自制，人们常以坚实牢固的藤子扭成粗绳，粗绳拴在高大的核桃树上，姑娘小伙子们身着艳装，争先恐后地爬上秋千，尽情地摇荡。有单人荡也有双人同荡，有时像云雀展翅飞向蓝天，有时如一朵彩云飘落人间。观众们时而提心吊胆，时而鼓掌喝采。

捕　鱼

产于怒江激流中的无鳞鱼，对于怒族人来说，是一种美味食品。在奔腾的怒江激流里，怒族人靠驶独木舟和用夹竿与鱼叉来捕鱼。独木舟系用整木干剖出，小巧灵活。夹网是两根各约六七米长的竹竿，粗的一头，以手能握为准，直径不超过3厘米；另一头的细梢部，直径0.5厘米以上，以求能挑起一定的重量。然后用麻线编织成一块等腰三角形的网，高一米左右，两底宽70—80厘米。将网的顶尖同两根竿的梢部绑在一起，再把网的两腰各同两竿绑在一起，要使网边同竹竿完全联起，成一个三角网。取一些鲜猪血将网浸泡，这样网下水后，经久耐用，并有血腥味，起诱饵的作用。鱼叉是在一根直径约3厘米，长在5米左右的木竿头部嵌入有四个倒刺的铁尖；杆头四周同倒刺相对的位置上，则

嵌有四个可以上下张合的铁钩，钩上有细线，可拉起铁钩，线长要及竿的手握的柄部。这些渔具很有特色。相信万物有灵的怒族人，在大规模的捕鱼时，认为风有风鬼，水有水鬼，鱼和小舟都有一定的灵怪，捕鱼时，要举行简单的祈祷仪式。在人把独木舟驶入江心时，他们会不断地用手拍动船帮，口中念念有辞，叨念水鬼水鬼别近船，风鬼风鬼别来作浪等咒语，以求风平浪静；还要叨念：鱼灵怪鱼灵怪，让鱼儿随我来，认为这样会很容易地捕到鱼。

秋天农忙之后，是怒江上游察瓦龙的怒族人捕鱼的季节。村中的男女老幼聚集在江边的河滩上，年轻人拿着渔具或船桨纷纷登上独木舟，老年或体弱者则提着酒及食品，吸着烟，饮着酒；儿童则来回追逐，嬉笑与欢乐充满于河湾滩头，以等候捕鱼的人群胜利归来。当捕鱼人胜利登岸后，顿时一片歌舞声。村中每人都会分到一份大小等量的鱼。而卧病在床的人和老人及不能出门的产妇，会有人把一份很好的鱼送去，让他们共享捕猎的果实。

刻木结绳

直到解放时，怒族还没有进入使用文字的阶段。但是他们日常彼此传递信息，相互借债记述事情时，也有一套自己的办法，那就是用打绳结、刻木头以记事。

通常是，一件事结一个麻绳结。如人们相约在三天后会面，或五天之后到谁家去帮工，就取条麻绳，各结上三个或五个绳子结，双方各持一条，过一天解去一个结，待解完绳结后，就是相见或聚会的时间了。在传递信息和借债时，则多用刻木的办法。木头条板通常是 70—80 厘米长，选用松木，既有松柏长在之意，又容易砍削。在木条上刻一道代表一个单位数字，刻一个“×”代表

十个单位或数字。刻在一个方向，则代表一个方面的各自数字；刻痕靠近，距离又相等，则代表一个组合数字，如三个相近的刻道，就代表三，四个相近的刻道，就代表四。而各刻道或刻道群间有相当的间距，一般是拇指的第一个骨结长的间距，那就代表各自不同的单位数字。如是涉及一方对另一方的单纯通知，就在一条木板上面刻划即可。有时也加附加物品，如在发生战事，甲方向乙方、丙方……各村或各家族传达通知，需各方火速来援时，就在木上刻上刻道，通知涉及全部五个村子，就刻上五道。上面绑上鸡毛、木炭、辣椒，表示像火那样急，像辣椒那样辣，像鸡毛那样飞速传递。传到一方后，一方即削去一刻道，表示已得信息，并把刻木下传，直到传完为止。刻木只能是对人起一种提醒作用，至于每一痕代表什么，只能靠当事人猜测了。

立石为界

怒族人质朴而又重信义，他们绝不去侵犯不属于自己的土地、财产。当来到察瓦龙的怒族居住区，不时会在那左右交叉的地界水渠中，发现一些横放的长石，那是怒家人自己摆放的界石。尽管石头只是摆放的，并没埋入土中，但是只要放在那里，就绝对不会被两边土地的主人所挪动。原来他们摆放石头时，就有近似立誓的仪式，在地界中间放上石头时，双方都有一个誓念，那就是，两地分界，有石为证。村寨之间，有事相约或为了抵御外侮，需要立誓结盟，也用石头来做盟证，做誓言的证人。盟誓时，双方成员到场选一块长条石头（一般是用板岩），放在中间。然后主持人宣布盟誓意图和缘由，问大家有无异议，有石头在场，有异议者可当着石头讲，无异议者也有石头为证；大家同意了，就对着石头盟誓，并在石头上刻下自己的记号。男人用刀，在石头上

各砍一刀，妇女则用牙啃一口。盟誓是双方，就各砍一侧；是四方则各砍或啃一条边角。誓石的周围还要围上一圈石头。接着双方各自就位，取出酒食，共同餐宴，以示庆祝。在酒兴渐浓后，便唱盟誓歌，跳起舞来，直到尽兴而散。

立石为界，砍石为誓，尽管石头不会说话，但在这里就可以起到文明社会里法官和公证人所起不到的作用。

迎客宴

当熟友远客到家时，怒族人会按着一整套传统的待客礼俗，为你摆出迎客喜宴。

客人进门后，主人先把用新玉米蒸好的玉米粑粑和玉米糕献上来，这是给客人的见面点心。然后把家中的腊獐肉、猪肉集到一起，再到寨上去筹集各种野味。怒家人素有团结和睦和好客的习俗，他们一向把一家的客人，视为全寨的客人。大家得讯后，都会把自家的猎品、野味和各种可待客的食品送来。主人选取一些腊肉，架在火上烤，把肉皮烤黄，然后捣碎，掺进糯米饭中，这是主食。备上自酿的酒，一般有“处酒”和烧酒两种，是用新鲜的籼米、小麦、或玉米酿制，酒味馨香诱人。

用餐时，主人把糯米饭、酒摆在桌上。开始时主人或客人都不太讲话，随着酒量的增加，话就多了。怒家人有句俗话是：野味在山里，需用猎狗撵才能出来；知心话藏在肚里，得靠美酒才能引出来。所以在饭吃得差不多时，主人就会拿起竹酒桶，敬到客人面前说：你像天上的星星，从远方到寨上来，你在我们的心里，将永远不会消失，愿我们的友情，像滔滔不绝的怒江水，流也流不完。然后共饮“双杯打”，即主客双方嘴并嘴，同时喝一桶酒。如果谁头抬的高，酒就会流入对方的口中。好客的怒家人，会

尽量把客人的头压低，以使酒都流到客人口中，使客人能喝到更多的酒。随着主客双方都有几分醉意后，对歌就开始了。“不醉唱不得歌”，只有醉酒才会有歌唱；随之唱起：高黎贡山高啊，也没有主人的情意高；怒江的水长啊，也没有怒家人的友情长。歌声，舞影，一直延续到深夜，使客人早已忘却旅途之苦和异乡的寂寞。

敲犁头祈雨

敲犁头，怒语称“夸白”，是向天神求平安向雨神求降雨的祭祀活动，是怒族“拉五起”和“拉甲约”两个古老氏族的宗教节日。

敲犁头于每年农历除夕举行。届时，寨中每户凑一盅酒和一把碎包谷，多凑者不限数量，但再穷的人家也得凑一把包谷。寡妇不必凑酒。酒和包谷由祭司派两名小伙子挨家挨户去收，酒用竹筒去接，包谷用麻袋装。

祭祈日，当太阳出山，人们便自行走向祭场，向神灵祈求平安。怒语称之为“汝米起”。祭司主持，先杀鸡一只，将鸡血倒在竹筒里，然后用带有十字头的小木棍去搅拌，边搅边念祈祷词，其大意是：我们拉甲约、拉五起的子孙，太阳一出就来到这里，我们向神灵祈求保佑，祈求巨石不要砸伤我们的人，毒箭不要射中我们的人，野兽不要咬伤我们的人，疾病不要降临到我们的村寨，愿天神保佑我们平安，愿雨神保佑万物滋润。

祭祈结束，大家便开始吃饭喝酒。饭与酒肉等仍然要置于簸箕中搅拌，拌匀后大家抓食。饭后，人们将各户凑来的碎包谷掺在一起，然后重新分配。分配原则是按户平均，每户一份。分好的碎包谷仍由负责收集的两个小伙子挨家挨户送去。这包谷能使五谷丰登，六畜兴旺。用于祭祀的鸡，只能分给村里的寡妇，因

寡妇家无人打猎。

酒宴间，祭司祝大家平安，并敲犁头以求雨神降雨。接着，人们纷纷起身去敲犁头，以求天神保佑。如果当天晚上落了雨点，就意味着来年风调雨顺，农作物将获得丰收。如果次日清晨牛在圈中站立，也预示着人畜平安，作物丰收。

祭谷神

祭谷神怒语称“汝为”、“作让为”，可直译为“买粮魂”。祭谷神是怒族拉五起和拉甲约两个古老的氏族的宗教节日，流行于怒江格甲邓、俄拉、普乐等几个村寨。

祭谷神仪式于除夕的前一天举行。参加祭祀活动的都是成年男子，妇女一律回避。

祭祀由主祭司和助祭两人主持。早晨鸡叫第一遍，主祭司就起来围着村子大声喊叫：“豆五冲，达五冲，神灵回到这里来！豆五冲，达五冲，人们快聚集到这里来！……”。“豆”“达”在怒语中是“上”、“下”的意思，即“上五冲”，“下五冲”。它们是地名，位于果科乡托各村下来的路边。传说那是拉五起和拉甲约二氏族祖先的诞生地和祭祀圣地。

当人们聚集到一起时，主祭司又大声喊道：“太阳出来了，我即从太阳升起的地方来！”祭祀开始，主祭司和助祭两人先喝一碗酒，然后主祭司手执一根有十字头的小木棍搅拌竹筒里的米酒，一面搅拌，一面念祈祷词，祈求谷神赐福，使本氏族五谷丰收，米酒丰盈。接着又向猎神祈求，希望每次出猎，都能满载而归！

祈祷结束，开始酒宴。人们将准备好的肥猪、煮好的荞米白酒抬上祭坛。参祭者们带来的包谷、大米、旱谷等粮食，混合在一起煮熟。这时主祭司派出三人，砍金竹、芦苇、青冈栋各一棵，

插于祭台上。助祭手执一根用樱桃木削制的“阿的的”，象征男性生殖器。祭祀时，“阿的的”插在锅灶旁，饭熟后便用其搅拌。搅拌混合饭时，助祭还要对“阿的的”说：“你先吃一点吧！”以示敬重。

宴席上，必须留一簸箕饭，由祭司用“阿的的”搅拌。搅拌之后留给未参加祭祀的妇女吃。祭司搅拌时口中还念念有词：走！走！走！“皮康米”快走！我们虽然没有让妇女和我们一起吃饭，但请你在我们吃饭时，不要害我们，不要让我们生病。据说“皮康米”是一女妖，她专门惩罚吃独食的人，使独食者们肚子胀疼。在怒族的观念中，只有用“阿的的”这根神棒才能对付她。

吃饭时，男人们先将所有的饭和剁碎的肉置于簸箕中拌匀，然后用手抓食。怒语称之为“其考一”。饭后，每人包上一份祭司用“阿的的”搅拌过的混合饭，带回家中给妇女吃。但是近年来妇女们都不大愿意吃这种饭。

嗒　标

嗒标是怒族喜爱弹拨的乐器，形状略似琵琶。它由人工精心制作，全长 60 厘米左右，有琴弦 4 根，用右手拇指和食指拨弦，左手四指按弦。琴声优美动听，可用于歌舞伴奏。

怒族无论老幼都爱弹嗒标，几乎家家有琴，人人会弹。男子 10 岁就开始学习弹奏，由家中大人指点。

每当夜深人静，老年人喜欢躺在火塘边，取琴贴于胸上弹“劳爪五”。“劳爪五”意为“过去的事情”，他们用音乐叙说祖先的业绩，从中得到感情上的慰藉。嗒标对于男青年来说是选择理想配偶的得力助手。每当夜幕降临，他们就来到姑娘家门前弹奏，琴声一起，必是求爱曲。姑娘听到琴声，便知道弹奏人的意思，她

会悄悄溜出家门，来到情侣身边，陪伴情侣用琴声抒发感情。求爱曲含蓄幽默，姑娘们都很喜欢。小伙子还边弹边唱："星星和月亮在一起，一人弹琴心不欢喜，今夜月明好相会，我在这里等得焦急……"姑娘们受到感动，即掏出口弦弹"谷冈"调，有时也轻声回复对方："嗒标口弦是一家，独我在家心不欢，怒江岸上一枝花，蜂来采蜜花更鲜……"男女一对一答，曲调多次反复，内容不断加深。若双方互有好感，愿意深化感情，那男方就改弹相爱曲。此后，每逢农闲或年节，他们便一起邀约众多的男女青年，在嗒标的伴奏下欢跳相爱舞。跳舞时，男方左手搭于女方肩上，右手抱琴，女方右手又扶在男方背上，左手扶琴杆并按琴弦。一对对情侣围成圆圈，脚对脚，背靠背地跳个不停，乐曲节奏缓慢刚劲，青年舞步粗犷豪爽，充分显示出怒族人民对美好生活的追求和向往。

●乌孜别克族

乌孜别克族人口为14,502人（1990年统计），主要分布在新疆维吾尔自治区的伊宁、塔城、喀什、乌鲁木齐、莎车、叶城等地。

乌孜别克族有自己的语言，乌孜别克语属阿尔泰语系突厥语族西匈语支；无本民族文字，多使用维吾尔文。

乌孜别克族信仰伊斯兰教

花帽和皮帽

乌孜别克族男女在春夏秋三季，一般都喜欢戴花帽，乌孜别克语称为“朵皮”。一般分为花、素两种。花“朵皮”都是以优质丝绒为底，用色彩艳丽的五彩线精心绣制而成的，图案别致，纹样精巧。常见的图案、纹样有：忍冬藤纹、波斯菊纹、巴达木纹、鸟纹、羊纹、锯齿纹等等。乌孜别克族男女青年戴上这种美丽鲜艳的花“朵皮”，更显得生机勃勃，俊美秀丽。素“朵皮”一般以墨绿或黑色金丝线为底料，加小珠、亮片绣出简朴大方的花纹图案。老年男女喜欢戴这种古朴典雅，凝重端庄的素“朵皮”。青年女子戴上花“朵皮”之后，往往罩上一条明丽鲜艳的花头巾，就更显得秀灵无比，婀娜多姿了。老年妇女戴上素“朵皮”之后，常常罩上一条洁白素雅的面纱，庄重雅洁，落落大方。

到了大雪纷飞、寒风怒吼的严冬，乌孜别克人往往戴能够抵御风寒的皮帽，乌孜别克语称为“秋拉克勒”。有的人也戴一种称为“恰勒帕格”的毡帽。生活在塔城一带的乌孜别克人，冬天戴一种“三叶”皮帽。生活在莎车、叶城等地的乌孜别克人，也戴当地的维吾尔人冬天经常戴用的称为“吐玛克”的无舌卷边的圆顶皮帽。现在，乌孜别克族有的男人还戴礼帽、鸭舌帽、制服帽、遮阳帽等，但是大多数人经常戴的还是美观大方的“朵皮”和“秋拉克勒”。

喜穿艾提克

乌孜别克人无论男女老幼，一年四季都喜欢穿高筒皮靴，乌孜别克语称为“艾提克”。艾提克有夹、棉、毛三种。春夏秋三季

一般穿用夹靴；冬季穿里面衬有棉或毛里的皮靴。皮“艾提克”一般用牛、羊皮制成，颜色多为黑色，也有红色的。在穿皮“艾提克”时，先要用包脚布把脚包好，这样可防止靴子磨脚，提高御寒能力，走起路来灵便轻松。在穿上皮“艾提克”之后，往往还要穿上橡胶做的套鞋。乌孜别克族的青年女子除了穿皮“艾提克”外，还穿用一种自制的绣花高腰丝绒靴，乌孜别克人也称为“艾提克”，有夹、棉两种。花纹活泼，图案美观。常见纹样图案有：西蕃莲、波斯菊、忍冬藤、巴达木等花、叶纹饰，色彩缤纷，玲珑剔透。乌孜别克人春夏秋三季，也喜欢穿长、短腰皮鞋，皮软靴、布鞋、胶鞋；在家中还使用拖鞋；在热天无论男女都穿用凉鞋。居住在伊犁、塔城的乌孜别克人到冬季也穿用一种暖和结实的毡靴，有的还要穿上皮袜子再穿毡靴。

别具风味的纳仁

“纳仁”是乌孜别克人平日喜欢食用的主食之一。

制做纳仁是每个乌孜别克家庭主妇娴熟拿手的烹饪技艺。所使用的原料有：肥牛肉、羊肉、风干的马肠或熟肉干、葱头、盐、胡椒粉、味精、面粉、鸡蛋等。制做的方法是：首先用清水把肥牛羊肉放在锅内煮熟。煮肉时，先在锅内放少量的盐；接着把煮熟的肉、风干马肠或熟肉干切成玉米粒大小的块，放在菜盆内备用；把葱头洗净，切成薄片，放在煮肉锅内，用肉汤将葱头片煮烂，取出放在肉丁盆内；然后将适量的盐、胡椒粉、味精撒在肉丁盆中，盛出适量的煮肉汤中的油汤浇在肉丁上，用勺子搅拌均匀。这样纳仁的卤就算做好了。接着，将适量的面粉舀在干净盆内，再将鲜鸡蛋放在碗内用筷子打散搅匀，放入适量的盐和清水调匀；接着用鸡蛋盐水和面；面和好后，搁置20分钟，然后，放

在案板上擀成薄片，用刀切成细条。锅中放清水，烧开后，再将切好的面条放在锅中煮熟，捞在盘子中，浇上卤，至此，别具风味、香美可口的纳仁就做好了。纳仁洁白如玉，菜卤鲜红，红白相间，交相辉映，令人赏心悦目。肉香、面香和菜香四溢，引人食欲。新疆冬季，大雪纷飞，寒风怒吼，滴水成冰，能吃上热乎乎、辣丝丝、香喷喷的纳仁，算得上是绝美的享受。在秋冬春三季，家里来了贵客嘉宾，热情好客的乌孜别克家庭主妇，除了用抓饭、馕、手扒羊肉等款待客人外，总要做纳仁招待客人。吃完纳仁之后，主人要端出瓜果和红茶请客人享用。

海勒哇

“海勒哇”是乌孜别克人一年四季均要食用、十分普及的老幼咸宜的食品。制做海勒哇所用的原料有：羊油、面粉和白糖。做法是将羊油放在锅内用文火烧热后，将面粉倒入油锅中，用勺子反复搅拌，待调成糊状，面粉变黄直至熟了的时候，再把事先准备好的白糖水掺入调匀。这样，色、香、味俱全的民族风味食品海勒哇就算做好了。海勒哇色泽嫩黄，香气扑鼻，味甜如蜜，油而不腻，营养丰富，独具特色。

乌孜别克人吃早餐时，餐桌上总要摆放一盘海勒哇。人们口里喝着浓香四溢的奶茶，再吃上一个抹上海勒哇和黄油的松软可口的面包，或用金黄悦目的馕沾上海勒哇，吃起来酥脆香甜，颊齿留香，别具情趣。

如果遇到贵客来临，高朋满座的时候，热情好客的乌孜别克人，必定用美味佳肴殷勤款待嘉宾。在摆满民族风味食品和各种珍馐佳酿的餐桌上，也绝不会忘掉放上一盘海勒哇。在欢声笑语和觥筹交错中，海勒哇倍受贵宾青睐。

居室装饰

乌孜别克族的居室具有典型的中亚风格。他们的住房建筑多为庭院式，分为楼房和平房两种。乌孜别克人多喜欢在屋顶上用木板或席子、泥土修建一个独具特色的尖顶圆形拱拜式顶楼。

平房一般为长方形土木结构的土房或砖房。房屋的墙壁非常厚，具有冬暖夏凉的特点。房顶留有天窗，用于采光。室内木梁上和走廊的木柱和木梁上都描绘或雕刻上各种各样的美丽多彩的花纹图案。室内墙壁砌有壁炉，供冬天生火取暖用。炕很大，上面铺上比较考究的花毡。炕上摆放有被褥，各式绣花枕头整齐地摆放在被褥之上，起着美化装饰作用。在土炕旁边的墙壁上都砌有拱形的壁龛。壁龛周围镶有异常精美的花纹图案。常见的花纹图案有植物纹样、动物纹样、自然景物纹样和几何图形纹样，图案纹样种类繁多，细部精致，整体协调，充分显示了乌孜别克族人民的聪明才智和艺术创造才能。这些壁龛周围的图案、花纹，有的是工笔重彩精工描绘的，有的是用石膏铸塑，有的是用土、木雕刻后镶嵌上去的。壁龛里一般用来摆放被褥、衣服等。乌孜别克人居住的室内地上大都铺有地毯，墙上挂有壁毯，既有整体美，又有局部美，显得宽敞、明亮、大方、美观。

乌孜别克婚俗

解放前，多是包办婚姻；解放后，多为自由恋爱婚姻。通婚的范围大多限制在族内，也有与塔塔尔、维吾尔、哈萨克族通婚的。但是绝对不允许与不信仰伊斯兰教的民族通婚，也不允许本族内同胞兄弟、姐妹与辈份不同的异性通婚。结婚前，一般都有

提亲的过程。提亲先由男方主动提出。男方请媒人到女家去提亲。经媒人介绍来意之后，女方父母总要先以女儿年岁小、不懂事等为理由婉言推辞，待听了媒人反复介绍男方条件和求亲诚意，并认为门当户对，看中男孩，满意男方条件之后方应允。之后，按照习惯，男女双方就要商定婚期。在商定婚期的日子里，男女双方都要设宴摆酒招待亲友。女方先向媒人赠送布料或衣服等礼物，男方也要向媒人馈赠礼物表示感谢，媒人要向男女双方表示恭贺之意。婚期一般都选在良辰吉日。解放后，一般选在节日。商量婚期的活动和仪式，实际上是订婚仪式。订婚之后，凡遇节日，男方都要到女方家中去送衣料、食品或其他日常用品等，表示祝贺节日。在结婚的前夕，男方还必须给女方送去衣料、食品等礼品。在送礼物这天，女方请来亲友商量结婚事宜，确定各自帮助办理的事项。结婚的前一天，男方父母要到女方家中，与女方父母共同商议邀请客人的名单。然后送请柬，正式邀请亲友前来参加婚礼。

按照传统习惯，结婚仪式在女家举行。男女双方父母出面招待来宾。主人端出热乎乎香喷喷的抓饭、各种瓜果、美酒佳肴款待客人，并向客人嘉宾表示谢意。来宾纷纷向主人和新郎、新娘敬酒表示热烈的祝贺祈福。在结婚当天下午，新郎的妹妹等也来新娘家参加婚礼，女方在她们进门时，要在地上铺上一条“巴炎达孜”长布迎接，还要将糖果分给她们带来的孩子们吃。然后，请她们吃抓饭，饭后到事先准备好的房子休息。

结婚典礼，按照习惯在晚上举行。举行结婚仪式时，客人按照男左女右的顺序分站两厢，由阿訇或伊麻木诵古兰经，问询新郎新娘是否愿意结成夫妻。当听到“愿意”的回答时，阿訇勉励新郎、新娘要尊老爱幼，互敬互爱，辛勤工作，勤俭持家，祝婚姻美满幸福，白头偕老。

●俄罗斯族

俄罗斯族人口为13,504人（1990年统计），主要散居在新疆维吾尔自治区的伊犁、塔城、阿勒泰和乌鲁木齐以及内蒙古自治区等地。

俄罗斯族是18世纪，主要是19世纪及俄国十月革命前后，从俄国迁来的。

俄罗斯族有自己的语言文字。俄罗斯语属印欧语系斯拉夫语族，使用俄文。

俄罗斯族大多信仰东正教，也有信仰基督教的。

服　饰

俄罗斯族服饰具有浓郁的民族特色。姑娘从小穿连衣裙（布拉吉）、百褶裙，一年四季头上都要戴色泽艳丽的方头巾，直至婚前都保持这种装束。婚后，通常把辫子盘在脑后梳成发髻，腰间系上绣花小围裙，标志着成了家庭主妇。老年妇女还保持着头戴白头巾，四季穿裙子的习惯。男子主要穿西服、马裤或便装，有的穿领口和下摆都绣着花的偏领衬衣，头上一般戴鸭舌帽，脚穿皮靴。年轻人喜欢穿流行装，中年人穿着多与汉族中年人相同。

俄罗斯婚服别具一格。新郎的婚礼服是西装，肩到腋下斜挎着一条白麻披巾，上别一朵艳 丽的红花。若婚期在冬天，红花则别在帽子上。披巾两头用红黑两色丝线绣着一对大公鸡或花卉图案，显得格外艳丽。新娘的婚礼服则是白色薄纱拖地长裙，头带白色纱线结成的花环，内衣全是白色的，鞋袜亦为白色。这与俄罗斯人的审美观念有关。俄罗斯人崇尚红、白色，认为红色象征美丽和吉祥，男子披巾上别大红花即取此含意。认为白色象征圣洁、纯真，新娘穿一身白色婚礼服即象征爱情的纯洁。

饮　食

俄罗斯人的主食主要是自己烤制的面包，以及各种面食和大米饭。副食，喜吃土豆炖牛肉，以及新鲜黄瓜、西红柿等营养丰富的蔬菜。新疆维吾尔自治区的俄罗斯人受汉族、维吾尔族的影响，也经常吃包子、饺子、面条、馕、抓饭等。

俄罗斯人早餐一般是吃抹上黄油的面包，夹几片香肠，或是吃个煎鸡蛋，再喝一杯甜茶或酸牛奶。按照俄罗斯族人的习惯，午

餐不仅要吃饱，而且须吃好。因此，菜肴相对较为丰盛。在午餐桌上，汤较多，沙拉、肉冻、火腿、凉拌生菜、酸黄瓜是大多数人喜爱吃的菜。汤的品种也较多，有鲜鱼汤、鸡汤、肉杂拌汤、肉丸豌豆汤及酸白菜汤等。城镇俄罗斯族人由于上班，中午时间短，午餐反而简单。有的吃点面包，喝点茶就算一顿。相反，晚餐却比较丰富，一般吃米饭、炒菜或抓饭、面条等。

俄罗斯人做菜时重视放调料，认为菜肴中不放调料，不但乏味，而且营养价值也不高。除了常用的葱、姜、胡椒、芥末外，还喜欢在菜中放桂叶、丁香、茴香籽等。

俄罗斯人爱吃甜食，喜欢饮茶，好饮酒。他们自己制作的点心中往往要放牛奶、黄油、鸡蛋、蜂蜜、白糖等，有的果酱夹心。自己地窖中也经常存放着自制的柿酱、苹果酱、山楂酱、柠檬汁等。俄罗斯人喜欢饮茶，尤其是红茶，多数人家中都有铜制的茶壶。与其他民族不同的是，俄罗斯人喝茶时喜欢放糖。酒是俄罗斯人的一大嗜好，喜欢饮用一种叫沃特加的白酒和自酿的啤酒“毕瓦”。

风味食品饮料

俄罗斯族风味食品、饮料很多，著名的有“比罗什给”、“苏波”和“毕瓦”。

“比罗什给”在俄语中意为“馅饼”。俄罗斯族的“比罗什给”种类很多。其作法是：先把大米洗净，蒸熟，牛肉切碎热炒，再放入葱头及花椒、大料等。然后，把炒熟的牛肉与米饭混在一块搅拌成馅。再把和好的面用手拍成很薄的皮，包上馅，再拍成扁形的馅饼，烘烤到熟。俄罗斯人一般用手拍面皮，而不用擀面杖擀。由于馅儿不同，“比罗什给”较其他民族的馅饼另有一番风

味。

“苏波”在俄语中是“汤”或“汤菜”之意。其作法是：先把元白菜切成条炒熟，放花椒、酱油，然后放入羊肉汤中，随后再放切好的西红柿、土豆、胡萝卜等。俄罗斯人切土豆、胡萝卜一般都切成块，而不切成条。“苏波”味道鲜美，可开胃，是待客的佳肴。

“毕瓦”在俄语中是“啤酒”的意思。俄罗斯人制作“毕瓦”别具一格。制作时，先把啤酒花熬成水放到专用的坛子中，然后发酵，放糖，两三个星期后即可饮用。“毕瓦”味甜，不像一般的啤酒味苦。客人来到，少不了用“毕瓦”相敬。

住　宅

俄罗斯族的住宅保持着自己民族的特点。房舍大多选择在有水有树的地方。新疆俄罗斯人的房子盖得又高又大，墙壁很厚，达30厘米以上。保持冬暖夏凉，适应西北地区高寒气候的特点。从前，居住城镇的俄罗斯人住房一般都装有直通屋顶的大壁炉，既可以做饭，又可取暖，节省燃料。今天，因住上了现代化的房舍，取暖设备齐全，已不再安装壁炉。俄罗斯族 人和西北地区大多数民族不同，没有睡火炕的习惯，大都睡木床和铁床。室内陈设布置十分整洁，窗户上、桌上和床上都苫盖着手工绣的窗帘，编织白布及抠花床围等。整个房间使人感到清新、典雅，充满了艺术美感。

城镇俄罗斯族人的院落中通常都种满了各种花草树木。常见的有苹果树、丁香树、白杨树、玫瑰花等。春天花香四溢，蜂蝶纷至沓来，秋天硕果累累。

农村俄罗斯族人的住房多为土木结构，房屋周围是土墙砌成

的宽大院落。一般前院空地上种植蔬菜花草，后院建有畜圈、库房，挖有地窖。地窖里存有白酒、啤酒及各种蔬菜。塔城一带的俄罗斯人住房，多用牛粪掺黄土抹地，既有清香之味，又使屋内不生虫子。厨房一般宽大，除烹调做饭的锅台外，一般都有一个烘制面包、点心、饼干的大烤炉。近年来，不少家庭的大烤炉已被电烤箱所代替。

婚　礼

俄罗斯族的婚礼有着浓郁的民族特点。

婚礼前，女方不要彩礼，男方只须为新娘准备结婚礼服和必需用的东西就行了。请客的费用，双方各自准备。女方父母为女儿准备丰厚的嫁妆，包括被子、枕头、箱子等。经济条件宽裕的要买铁床、缝纫机等。婚礼前一天，新娘邀请女友们到家里作客，以告别自己的少女时代。

结婚当日清晨，新郎在伴郎及亲友陪同下赴女家迎亲。新郎着西装，戴红花，迎亲的车辆或其他交通工具都用红绸彩带装饰。迎亲的人们拉着手风琴，喜气洋洋，纵情歌唱。新娘的婚礼 服是白色的薄纱拖地长裙，头上是白色头纱结成的花环，脚穿白色的鞋袜，这一切都象征新娘似白玉无瑕。女儿向父母告别之际，父母要向女儿祝福，也有的要让女儿跪在皮袄上，父亲手拿撒上盐的面包，母亲手捧圣母像，一边在女儿头上画十字，一边祝福。

迎亲队伍来到后，众人边吃喜糖，喝喜茶，边唱歌跳舞。新郎与新娘则坐着喜车，准备去教堂举行结婚仪式。俄罗斯人信奉东正教，凡在幼年时经过洗礼并且信教的人，婚礼都要在教堂举行。在教堂里，新娘头戴桂冠，手执鲜花，与新郎并排站在圣像面前。主持仪式的牧师分别向新郎、新娘询问结婚是否自愿，能

否永远忠诚相爱。新郎和新娘作出肯定答复后，互换爱情的信物——戒指。随后，牧师为一对新人祈祷，并拿出一点蜂蜜让二人品尝，表示新婚夫妇今后的生活会香甜如蜜。尔后，新郎、新娘互相跪拜，并接吻三次。至此，教堂礼仪结束。今天，不少年轻人已不再信教，因此也很少去教堂举行婚礼仪式。

从教堂出来，新娘即被迎到夫家。当新人入座后，客人们便面对喜酒，高兴地喊“苦啊！苦啊！”这时，新郎、新娘要亲吻。婚宴这才开始。人们边喝喜酒边随着手风琴的伴奏，跳起旋律欢快的踢踏舞，热烈庆贺新婚之喜。俄罗斯族原无闹洞房的习惯，但由于长期受到汉族结婚习惯的影响，现在也逐渐兴起闹房的习俗。

婚礼纪念日

俄罗斯族重视夫妻之间的感情。民间流传着“美满和谐的婚姻是长寿的秘诀”的俗谚。

俄罗斯人把结婚之日称为“绿婚”。“绿”字在俄语中有“年轻”和“不成熟”的意思。纪念绿婚的那一天，夫妇双方要在庭院中种一棵小树，象征着爱情，期待着它结出丰硕的爱情之果。

婚后一周年，人称“花布婚”。因为这期间夫妻关系还不巩固，容易像花布一样破裂。这一天，夫妇之间要互赠花布手帕留作纪念，期望爱情不要像花布那样容易破裂。

婚后第三年，称之为“皮婚”。皮革结实且有韧性，标志着夫妇的爱情已有一定的巩固性，经得起考验。

婚后第五年被称作“木婚”。这时夫妇要举行一定的仪式祝贺。前来道喜的亲朋好友们要赠送各式木制品，祝贺他们的爱情如木材般的坚固。

婚后六年半被称为“锌婚”，届时亦举行庆贺仪式。这个名称告诉人们，美满的婚姻应该像镀锌制品那样不断保持光泽。这一天，来祝贺的人都要向夫妇赠送锌制器皿。

随着婚龄的增长，俄罗斯人以一些金属名称来命名婚礼纪念日。结婚七周年为“铜婚”，夫妻之间要相互交换铜币。结婚八周年被称作“白铁婚”，前来贺喜的亲友们送的贺礼皆是闪闪发光的白铁炊具——烤盘和蛋糕模子。结婚九周年称作“锡婚”。

俄罗斯人把结婚十周年称作“玫瑰婚”，芳香馥郁的玫瑰花在人们心中象征着爱情的纯洁坚贞，用这富有诗意的名称，表示夫妻之间的婚姻爱情经受了长期的考验，像玫瑰花一样散发出不败的芳香。

结婚25周年称为“银婚”，标志着家庭生活十分美满幸福、和谐。

结婚50周年是俄罗斯人婚礼纪念日中最隆重的，人称“金婚”。这标示着夫妻俩同甘共苦地走完了人生旅途中的大部分路程。二人由壮年变为老年，未来生命的路途虽然有限，但爱情却是坚固永恒的。俄罗斯人对金婚的纪念十分隆重。金婚纪念通常在家庭范围内举行，受庆贺的老夫妻与亲友、儿孙们欢聚一堂。众人向老人赠送礼物，频频举杯祝贺。最后，老两口合着古老的《金婚舞曲》的节拍，从容地跳起《金婚》双人舞。

丧　葬

俄罗斯族的丧葬仪式较为简朴，一般实行土葬。人死后要及时清洗，让死者穿戴整齐。老年妇女的寿衣多用黑色金丝绒缝制。遗体旁点燃蜡烛，亲友们要向死者告别，一般在死者的遗像下放上鲜花。死者房间中的穿衣镜必须用黑布盖上。俄罗斯族人认为，镜子是神圣的物品。镜中的形象是本人灵魂的化身，为了使死者的灵魂得到安息和减轻家属的悲伤，镜子必须严实地遮住。棺木的颜色通常为黑色，一般先不钉盖，用白布带系好，抬往墓地后，信教者入葬前要请牧师祈祷，送葬者向遗体作最后告别，这时方可钉上棺盖埋葬。

葬礼中的花圈亦有一定规格，一般不宜扎得过大。多用松柏、紫杉、冬青、核桃等树叶并配以素雅的菊花、水仙等花卉。花朵的数目必须成双，切忌用色泽鲜艳和香气馥郁的花，如玫瑰花等。

死者的棺木运至墓地后，先要停放在活动的支架上，这时牧师作最后一次祈祷，死者家属亦作诀别发言，大家再默哀片刻，然后由家属用一块白布蒙在死者脸上。下葬时，死者遗体要头朝东，脚朝西。按照东正教的习俗，先从家属开始，每人往墓穴中撒一把黄土，然后埋葬。棺木入土后，人们要把鲜花和花圈摆放在墓碑前，十字架上写有死者的名字和生卒年月。这时，葬礼主持人再一次向死者家属表示慰问，并向参加葬礼的所有人道谢。至此，整个葬礼仪式结束。

俄罗斯族对亡人有定期悼念的习俗。在死者去世40天或一周年时，亲属要举行简朴的葬后宴。一为悼念亡人，二为答谢在办丧事中操劳的近亲和密友。每年4月，死者的子女还要佩戴黑纱前去扫墓。

圣诞节和复活节

圣诞节和复活节是俄罗斯族人隆重的节日，这两个节日都源于宗教。

圣诞节是基督教的重要节日之一，主要为纪念传说中基督教创始人耶稣 的诞生。基督教会规定于每年 12 月 25 日过此节。俄罗斯族信奉东正教，圣诞节在俄罗斯历法中为 12 月 25 日（相当于公历 1 月 6 日或 7 日）。节日在早晨 8 点至晚上 6 点举行。节日前一天，教徒们要守大斋。节日当天教会神职人员要到教徒家中念喜经祝贺。人们欢聚一起，互相贺节。这一天，教徒不做针线活。

复活节主要是纪念耶稣“复活”的节日，又称“主复活节”或“耶稣 复活瞻礼”，这也是基督教的重要节日之一。基督教规定“复活节”在每年春分月圆后第一个星期日，即公历 3 月 21 日至 4 月 25 日之间，东正教规定在俄历 4 月 13 日（即公历 4 月 26 日）举行。我国的俄罗斯族在公历 4 月间举行。复活节前 40 天为大斋期，这期间停止一切娱乐活动，教徒不许举行婚礼。还要“禁食”，即在规定日期内一天只吃一顿饭，其余只吃半饱，以示虔诚。

俄罗斯族复活节仪式在晚上零点至凌晨 4 点举行。这天夜里 12 点，教徒们齐聚于教堂举行“圣礼”。晚上 6 点至 7 点，教徒们拿着各种颜色的鸡蛋及其他食物到教堂“呈圣”，仪式完毕后就带回家中，放到圣像前的供桌上。新疆的俄罗斯族人按规定复活节放假一天，人们齐聚一起除举行传统的宗教仪式外，还举行跳舞、唱歌等娱乐活动，并利用这一天互相拜客，赠送礼物，见面时说：“耶稣复活了”，“耶稣真的复活了”，并相互亲吻。

禁　忌

俄罗斯族人注重礼节，在日常生活中有一些禁忌。这些禁忌反映了俄罗斯族传统文化、审美情趣及民族心理。

俄罗斯人见面后接吻、鞠躬和握手等礼节十分普遍。亲朋或好友久别重逢时，须拥抱并互吻面颊。两边各吻一下。同事、同学、同乡若是同性亦拥抱接吻，异性之间一般只握手。遇有长辈或妇女时，不宜先伸手，等对方主动伸手时再与之握手。对初次见面的妇女不能握手，只能行鞠躬礼。

到俄罗斯族人家中作客或办事，进门必先敲门，否则主人不悦。进屋后要脱帽，要坐在主人让坐的位置上，禁止坐床。好客的主人一般总是将客人让到客厅或卧室内，若把客人引进厨房，则是最不礼貌的接待。

俄罗斯族干净整洁，对容貌和服饰的整洁尤为重视。出席宴会或赴友人家作客，事先要刮脸化妆、擦亮皮鞋、换好干净衣服。穿西服必须打领带，衬衣下摆要束到腰里。参加宴会、舞会时须穿皮鞋，妇女一般都穿裙子，显得十分庄重。

俄罗斯族人忌送黄色礼品，认为黄色不忠诚；喜欢蓝色礼品，认为蓝色代表着友谊。从前，俄罗斯族人忌讳赠送手套，认为这意味着挑衅。据说，古代俄罗斯族人决斗前双方先互递手套，这也是决斗即将开始的一种信号。与俄罗斯人初次交谈，不宜探问对方的生活细节，如年龄、工资收入等。与妇女交谈时，切忌问年龄。说话时，忌讳对着人正面打喷嚏，大声咳嗽，抠鼻孔，伸懒腰，随地吐痰等。

俄罗斯人忌讳“13”和“星期五”这两个数字和日子，认为是“不祥之日”，结婚时要避开13日，一般人家不在星期五举办

较有纪念意义的活动。据《圣经》故事称：基督教最早的创始人耶稣星期五被钉死在十字架上，所以称“星期五”为“耶稣受难日”，此后成了教徒们的“忌日”。另传说，耶稣和他的12个弟子共进最后的晚餐，加起来共13人，其中有一个名叫犹大的弟子出卖了他，耶稣遂被钉死在十字架上。俄罗斯族民间有“十二加魔鬼等于十三”的说 法。

俄罗斯人对颜色的审美颇有讲究，认为红色是美丽和吉祥的象征。因此，人们常把红色与自己喜爱的人或物联系在一起。相反，人们认为黑色是肃穆和不祥的预兆。所以，人们通常不喜欢黑猫，认为它不会带来好运气。俄罗斯族人还认为，白色代表纯洁、温柔；绿色代表和平、希望；粉红色是青春的象征；蓝色表示忠诚和信任；紫色代表威严和高贵。俄罗斯族视盐为珍品，至今保持着遇有贵宾临门献盐和面包的习俗。打翻盐罐在俄罗斯人看来是“家庭不和”的预兆，民间流传着“打翻盐罐，引起争端”的俗话。凡遇上这种事，只有将打翻了的盐撒在头上才能解除争端和不幸。

在部分俄罗斯族人的心目中，镜子是神圣的物品，镜中的形象是本人灵魂的化身。若打碎镜子意味着灵魂的毁灭，个人也将出现疾病、灾难甚至死亡等种种不幸。但是若打碎的是杯子和碗，特别是盘子和碟子，则意味着富贵和幸福，是吉祥的征兆。据说，在国外有些俄罗斯人在喜筵、寿筵或其他隆重的场合还特意摔碎一些盘碟以示庆贺。

此外，俄罗斯人认为马能驱邪，会给人带来好运气，相反，认为兔子从自己跟前跑过是不祥之兆。

●鄂温克族

鄂温克族人口为26,315人（1990年统计），主要分布于内蒙古自治区呼伦贝尔盟的鄂温克族自治旗及黑龙江省讷河县等地。

鄂温克族因历史上多次迁徙，居住分散，曾分别被称为“索伦”、“通古斯”、“雅库特”等。自称“鄂温克”，意为“住在森林中的人们”。解放后，根据本民族人民的意愿，统称为鄂温克族。

鄂温克族有自己的语言，鄂温克语属阿尔泰语系满—通古斯语族通古斯语支，分海拉尔、陈巴尔虎和敖鲁古雅3种方言；无本民族文字，牧区通用蒙古文。

鄂温克族过去多信仰萨满教，牧区的鄂温克人同时信仰藏传佛教。

长　袍

鄂温克族在漫长的生活中，创造了绚丽多姿而风格独特的服装。

鄂温克族一年四季的服装基本上都不一样，而且均有不同的讲究。但是，这些服装有共同的特点：上身衣与下身衣成一体，上身衣较紧，下身则宽大呈裙形。人们习惯上把这种衣服叫“长袍”。长袍的样式、颜色和做法因季节、年龄、婚否等不同，有着相当严格的规矩。男子的长袍一般用青色和蓝色布料制做，女子的则多选用绿色和粉红色布料。长袍的镶边无论男女多用金黄色和绿色的布料，这些鲜亮的颜色使长袍显得格外潇洒、雅致。

尤其是女子长袍上的那道绿色镶边，十分引人注目。不过，未婚女子的缝道较宽，前后相同，已婚女子的缝道前宽后窄，已婚女子长袍肩部有重迭式的起肩，起肩比肩高出近 6 厘米。未婚女子的长袍上缝有倒垂直角的独特花边。

男子长袍有其独特的风格，长袍下边有开叉。穿长袍的鄂温克族男子，不论老人、儿童都必须系宽长的腰带，尤其是在见长辈时，不扎腰带，被认为是极大的无礼，轻者要挨骂，重者要受罚。所以他们在见长辈之前都要认真地整理一下腰带。鄂温克族女子一般不扎腰带，只有出远门或参加劳动时才扎腰带。腰带的颜色，一般为绿色或金黄色，这两种颜色象征着生命与希望。

鄂温克人穿长袍时还经常戴帽子，穿长筒皮靴。鄂温克人的帽子呈倒圆锥形，帽顶尖端有红色的穗子，帽面多用蓝色和天蓝色的布料缝制，帽子上绣有各种美丽图案。另外，鄂温克族无论春夏秋冬均穿跟长袍相配的长筒皮靴。这种皮靴舒适、结实，特

别适合长年骑马放牧和狩猎驯鹿的鄂温克人。

鄂温克族妇女穿长袍时喜欢配带耳坠、耳环、手镯等饰品。这些银制装饰品与样式别致的长袍浑然一体，熠熠生光。

奶　茶

鄂温克人自古就有喝奶茶的习惯。奶茶对于鄂温克人来说是生活中的必需品。鄂温克人常说："一天可以不吃饭，但是不能不喝奶茶。"尤其是鄂温克老人，从早到晚不能断茶。喝奶茶时经常在茶里面放入奶油、奶皮子、奶酪和一些事先煮好并切成薄薄的肉片等食物。奶茶里放入这些食物后变得更加喷香可口，回味无穷，使你喝了第一碗还想喝第二碗。

从鄂温克人的饮食习惯来说，一般是早晨和中午喝奶茶、吃烙饼，有的干脆只喝奶茶，晚上才吃一顿肉粥或肉面。但是，吃完晚饭后无论如何要熬一锅奶茶喝，否则，总觉没吃饱，或胃感到不舒服。

鄂温克人熬奶茶时先将清水放入锅内，待水温热时把捣碎的红砖茶放入里面，然后加火煮沸，煮至水呈较浓的茶色时放入食盐，再将茶水全部用大水勺舀进茶桶里。茶水舀出后，将一碗稷子米倒入锅内炒熟，再把过滤的茶水倒入锅内，加上鲜牛奶煮沸，就可舀入奶茶桶里随时饮用。

鄂温克族不仅自己非常喜欢喝奶茶，家里来了远方的宾客，也首先用喷香、味美可口的奶茶来接待客人。

驯　鹿

鄂温克族历史上曾被称为"使用驯鹿的人"、"林木中的百

姓”等。这一带的人文地理环境为驯鹿的繁殖提供了得天独厚的资源。世代从事狩猎生产的鄂温克族，以驯鹿为交通工具，披星戴月地行走在山林里，狩猎度日。

驯鹿是一种野生动物。驯鹿具有顽强的抗寒能力，善于在沼泽、森林、雪海中行走，是一种罕见的珍奇动物，被鄂温克人誉为“林海之舟”，是国家重点保护动物之一。

驯鹿角似鹿，蹄似牛，头似马，身似驴，因而也俗称“四不像”。

驯鹿性情温和，易于饲养。驯鹿有褐色、灰色、白花色等种类。驯鹿的脖子下系有一个铜铃，走起路来，清脆的铃声传遍长空，悠远悦耳。

驯鹿在鄂温克人的生产和生活上起着举足轻重的作用。它是鄂温克人主要的生产工具，也是唯一的交通工具。鄂温克人在深山密林中游猎，他们所需的生活用品都靠驯鹿驮运，猎取的野兽也是用驯鹿驮回，猎民们每次迁徙、移动时，驯鹿更是身负重任，除了搬运货物外，驯鹿还载运年老体弱者和幼小孩童。无论是在枝叶繁茂的密林，还是在塔头草遍布的沼泽地，或在马匹难以奔驰的峡谷，驯鹿均能平稳地穿行无阻，以每小时 5 公里的速度行走 10 多个小时，平均日行三四十公里，真不愧“林海之舟”之称号。

鄂温克人的游猎生活，离不开驯鹿。正如鄂温克人所说，“我们在山中游猎，除了靠猎枪还靠驯鹿，二者缺一不可。”驯鹿是鄂温克猎人的伴侣，同时，也为鄂温克人提供丰厚的生活资料。

乳白色的驯鹿奶芳香、甘醇，甜美诱人，具有丰富的营养。驯鹿皮可做衣服、皮靴、褥子等。驯鹿奶与驯鹿皮制品使鄂温克人的狩猎活动更加充实、安全。驯鹿成为鄂温克人财富的象征。青年男女结婚时，驯鹿成为陪嫁品。女方带到男方家 10 只驯鹿，男

方家也必须带来同样数量的驯鹿送给女方家。参加婚礼的亲朋好友们也纷纷带来驯鹿或驯鹿皮制品赠给结婚的新人。这些驯鹿从此成为新家庭的伙伴与财源。

驯鹿在鄂温克人的生活中发挥重要作用，鄂温克人对驯鹿有着深厚感情。尤其是鄂温克妇女一年四季看管、饲养驯鹿，她们与驯鹿相依为命。每逢春季接鹿羔时节，她们日夜守护在驯鹿身旁，点起火堆为驯鹿驱赶蚊虫。她们像爱护自己孩子一样爱护驯鹿。

额尔古纳鄂温克乡是我国唯一饲养驯鹿的地区。

桦皮船

桦皮船是鄂温克族的狩猎工具之一。桦皮船制做简单、造型精巧。桦皮船船身狭窄而细长，船头船尾很难分清。舳舻锋尖，呈流水形，前后均可行驶。整艘船不焊一块铁，不铆一颗钉，整个船架用较粗的柳条制成，船架外围用桦树皮包裹。除柳树条与桦树皮相接的关键位置钉上几枚木钉之外，其他地方均用松树脂油粘合接缝。一只桦皮船最多能乘坐五人左右，但狩猎时一艘船只乘坐两个人。乘桦皮船狩猎的主要对象是犴。这种野兽十分机灵，稍有响动就能觉察逃走，所以很难在草木丛生、树枝纵横交叉的山林里猎得，只能趁它在河水里啮“针古草”听不到水面上的声音时开枪猎获。针古草是生长在沼泽地里的一种水草，每当夜半时分犴就到沼泽深处潜水啮针古草，这正是猎人猎犴的好时机。猎人们乘着桦皮船从水边的芦苇丛中隐匿处悄然无声地靠近犴，待它探出鼻子换气时，将其捕获。

火崇拜

鄂温克人十分崇拜火，并且有着各种敬火习俗和规定，每个鄂温克人对这些规定信守不渝。鄂温克人深知有了火才有了生命，火就是生命的希望，若没有火也就无所谓生命。所以，他们认为必须崇敬火，否则火就会发怒，从而给人类带来莫大的灾难。他们甚至认为，阳光被黑云遮盖，发生山火以及天灾人祸等都由于没有尊重火而导致。可以说，他们对火的崇敬几乎超越于其他任何一个民族。比如说，鄂温克人无论吃什么都首先敬给火一口或一块，喝酒时也往火堆或火炉子里洒上一杯，以表敬意；逢年过节时，人们给老人、长者拜年之前，要先给火磕头或低头敬礼；会见客人时，主人要拿着一根火棍站在门前，双方捏火把上面握手问候，以示相互诚心诚意地友好往来用火作证；家人出门远行后返回家时，在进屋以前要围着事先点燃的火堆转三圈，以示用火洗身驱邪。他们认为，出门在外的人会遇到许多不幸，若在进屋之前不用火洗身，就会把不幸带进屋内，从而给这个家庭带来灾难。除了这些规定以外，还有不准从火上面跨过去，不准向火吐痰，不准对火比手划脚，不准用水灭火或用脚踩灭火等禁忌。所以，鄂温克族猎民每到一处离去时，只能让篝火自行熄灭，从不采用任何灭火措施。不过，他们往往是一直等到火自行灭尽后离开。

达拉干

“达拉干”是鄂温克语，意为“烧荒”。在经营畜牧业的鄂温克人当中，达拉干是一项重要活动。过去，在辽阔富饶的草原上

鄂温克族几家一组自然而然地组成一个达拉干队，分片地在牧场上进行烧荒。达拉干结束后几家人聚在一起，一边喝酒吃肉，一边唱歌跳舞，祈祷新的一年风调雨顺、牛羊肥壮、花草茂盛。

鄂温克人认为，长年不搞达拉干，牧场会越来越糟，而且牲畜吃草后会得病。因为这种牧场上的草不透空气容易腐烂发臭，从而长出各种杂草。所以草原上的人们特别重视达拉干。达拉干一般在春季四月初进行。春天阳光明媚、风和日丽、空气湿润清新，特别适宜进行烧荒活动。如果过早草还发湿而点不起火，过晚青草就会长出来，点火会影响刚刚长出的嫩草。达拉干后的牧草，长得繁茂，质量好，营养高，对牲畜夏天抓膘起决定作用。所以牧民们说：再好的牧场也比不过春天进行达拉干的地方。

牛粪圈

牛粪圈是在冬季和春季用牛粪搭起的畜圈。当然牛粪圈也不是只用牛粪制成。制做牛粪圈时首先用柳条编制高度约为 1 米左右的简易畜圈，然后从柳条圈外面用湿牛粪抹上好几层，但是，一般不超过四层，最多见的是抹上两层牛粪。天气一冷抹在圈外的牛粪都冻在一起。在严寒的冬天无论刮多大的西北风都无法穿透牛粪圈。牛粪圈不仅制作简单、方便，而且不透风。为了使牲畜过上一个暖和的冬天和春天，牧人们在方型或圆型的牛粪圈里专用柳条打上几个隔壁，然后在柳条隔壁上又抹上一层牛粪，而且在牛粪圈里面转圈搭上约有 4 米宽的棚子。棚子的横梁上面先放柳条，然后把所有柳条紧紧地拴在横梁上。把柳条和横梁拴好以后，在柳条上面铺上薄薄的一层草，最后才在铺好的草上面抹上四到五层厚的牛粪。这样一来牛粪圈变得更加暖和，甚至在严寒的冬季人都可以睡在暖烘烘的牛粪圈里。无论是定居的还是游牧

中的牧民都要使用牛粪圈。到春天气候渐渐地变暖时，牛粪圈上面或外层的牛粪也慢慢地解冻并变成干牛粪。这时牧民们每天将它抠下一些，供取暖或做饭熬茶时使用。所以牛粪圈在从事游牧生产的鄂温克族当中深受珍视。

套马杆

从事牧业的鄂温克族老人、壮年和青年，人人都备有一杆或两杆以上的套马杆。他们除了放牧时随身携带外，串门或去商店买东西时只要需要也一定要带上套马杆。只是上山打猎或不骑马时没有带套马杆的习惯。套马杆主要用于套马、抓马，但也用于套牛、骆驼、羊等其他牧畜。当然，在放牧时遇到黄羊、狍子、獾子、狼、狐狸等野生动物时，牧人们往往快马加鞭地追上前去，用套马杆套住。所以牧人们常说，“手中有了套马杆，妖怪见了也躲开。”

鄂温克人使用的套马杆长度一般为 1.3 米，但也有 0.7 或 1 米长的套马杆。这主要取决于牧人本身的套马技术，即套马技术越高超，使用的套马杆越长，套马技术越差，使用的套马杆就越短。因为套马杆越长，套马的距离就越远，所需的准确性和技术也越高。否则不仅套不上马，还常常出现套马杆的尖端扎入草地被折断或人仰马翻的不幸事故。套马杆在夏天时一般用柳树干制作，因为柳树干被雨淋或太阳曝晒后不易弯曲变形，套马时也很少出现断裂现象。冬季制作套马杆一般选用干而轻快的桦树干。秋季则主要选用干一点的臭李子树干制作。因为臭李子树干坚韧不易折断，适宜于套秋季膘肥体壮的马或其他牧畜。套马杆的杆子虽然随着季节的变化不断更换，但套马杆上的鞭绳一年四季始终如一，由三股牛皮绳制成。牛皮绳的最合适的长度为 0.5 米。牛

皮绳的长短取决于使用者的套马技术。套马技术越熟练，套马杆上的牛皮绳也越长，反之亦然。

草原上的鄂温克姑娘们谈情说爱时，很注意小伙子们随身带的套马杆和骑的马。也许正因为如此，小伙子们在谈情说爱的季节里往往带上最长、最漂亮的套马杆，骑上最好的骏马奔驰在绿草花丛之中。

杆子马

杆子马在鄂温克语里叫“浩格尼毛林”，意思为专为套马用的马。杆子马不一定要跑得特别快，但是要聪明、机灵，听从骑士的指挥。杆子马全凭主人对它的训练。鄂温克族小伙子擅长训练杆子马。训练时，从套牛羊等笨拙的牲畜开始，进而套小马，然后在马群中套骒马。因为骒马肚子大，虽然有力气，但跑不快。这些训练结束后，才能在野外平原上训练杆子马的速度和善解人意的能力。对于杆子马来说，这是一个严格而艰苦的训练阶段。骑士骑上杆子马在野外以最快的速度疾驰中不断地进行急转弯、急转身的训练，以及立刻停跑等动作的训练。骑士要在马骤停时骑到马鞍子后边，使劲拉嚼子。经过反复类似的训练以后，只要骑士一骑到马鞍子后不用使劲拉嚼绳，杆子马就会自然四蹄插地立刻停住。另外，在训练时骑士还要让马根据套马杆尖端所指方向左右转弯。最后，骑士的套马杆尖端指向哪里，杆子马就奔向哪里。哪怕在成千上万匹马群中，骑手也能随心所欲地把要套的马套住。

杆子马专为套马使用，不得用于放牧及其他。不套马时，骑士们让杆子马充分休息。为使杆子马养成迅速、敏捷的反应能力，骑士们抓、骑、用、放它时的动作也都相当快。不过，对不同习

性的杆子马进行训练时，骑士们往往采取不同的手段，使各种马都能成为鄂温克族小伙子们的理想助手。

狩　猎

狩猎生产是鄂温克人生活的主要方式和来源。在漫长的狩猎生产活动中，鄂温克人形成许多禁忌，这些禁忌在人们的心目中神圣不可侵犯。

鄂温克人对山林中的熊非常崇拜。猎人去打熊，不能说打熊，而是说“我们去做客”。打熊的枪不叫枪，而叫“呼翁基”，即吹火筒，意思为打不死任何动物的工具。打死熊后，不能说熊死了，而说熊“睡了”，并且一再说“不是我们鄂温克人打死了你，是别人打死了你。”熊死后，由老年人先去看是公还是母，禁止青年人看，因为熊的生殖器与人完全相同。剥熊皮时，必须用毡子或其他东西盖住熊的后身，同时要把动脉的血挤进心脏，不割断动脉。猎人打到熊回家后见到家人就“嘎——嘎——”地喊，家里人也要发出同样的声音。这样喊了，熊的亲属就不会来报复。吃熊肉时，大家都要学乌鸦“嘎——嘎——”叫，以示“乌鸦吃熊的肉”。切熊肉的刀不叫刀，而叫“刻尔根基”，意为什么也切不断的钝刀。熊尾和前肢，男人不能吃，如果吃了，将来会被熊夺去猎枪。熊的心、大脑、眼睛、肺、肝任何人都不能吃，因为这些均是熊的灵魂。

猎人打回鹿或犴等野兽，先要把它的头放在三角木棚上祭祖先。这样做会再打到野兽。野兽的头、心脏、肺肝需拿到家族长的“撮罗子”内，供在神的前面，用苫皮盖好，不能让人看。

鄂温克人狩猎生产中的禁忌，深受鄂温克人生存环境、宗教信仰等影响。这些禁忌活动，随着生活方式的改变也逐渐地发生

变化。

采人参

鄂温克人认为人参是一种神草，所以采人参有许多讲究。他们上山采人参时路上遇到任何猎物都不许开枪，看到人参后不能叫人参，更不能喊叫，只能轻声说“棒槌”，然后迅速地把随身带来的拴着丝绳的两个钢针，用左手刺入人参枝杆上。据说这是怕人参跑掉。在鄂温克人的眼里，最好的人参高约有 40 厘米左右，有 4 片叶子，结的果圆而不裂开。他们挖人参根部时首先将人参周围的草用手拔干净，然后摘下人参草的果实，用犴皮包上，接着拿出特制的鹿角骨针细心地挖人参根部。拿回去时必须将洗净的人参用桦树皮包好后用左手拿走。鄂温克人认为不用桦树皮包的话，人参本有的味道都会跑掉，从而也失去应有的价值。有的还拿着根据人参的长度和粗细用桦树皮制作的小圆桶去挖人参。最后将挖出来的人参捧到河里洗掉根部的泥土。

在挖掘或冲洗人参时不许损坏任何一根长须。鄂温克人深信少了一根长须，挖人参的人将一辈子不顺心，不得福，甚至还会遇到天灾人祸。所以鄂温克人采人参时自始至终都万分小心谨慎。

鄂温克人的礼节

鄂温克人把敬重老人、爱护孩童、热情好客、尊重友谊、以礼相待看成生活中的一个主要内容，并成为他们的社会风习。他们从不对长者直呼其名，只呼尊称，而对平辈者常称呼为“阿哈尼勒”、“纳呼尼勒”、“达敖勒”等，以表示亲切、友爱。这些词类似汉语的“朋友”一词。若在路上或在屋内见到老一辈们，晚

辈立刻把双手放在双膝上，将上身稍微下蹲拜礼，同时要问安。对长辈敬酒或敬烟时必须将酒杯或烟袋用双手高高举过头，喝酒喝茶吃饭吃肉时一定要让老辈或长者先喝一口或先吃一口，也就是说老人或长者开始吃喝之后，晚辈们才以年龄的大小先后用餐具开始吃喝。尤其在山林中或野外，假若不同村寨的人相遇时，虽然彼此十分兴奋，但是不急于会面，只是从较远的距离相互呼唤。然后把各自的人集中起来，从老到小排成两行，在各自临时住宅外围绕行三圈，最后，各方都举着已点燃的木棍、火把来到双方的正中央位置，相互一一握手，一一问候祝福，并且女与女、男与男在同辈之间相互拥抱。这些活动结束以后，大家就地坐成一个圆圈，各方的老者或长辈用简单的几句话介绍各方的情况，尔后各方都拿出随身带的最好的食物开始一边吃喝、一边谈天说地。吃喝得差不多了，老辈们就开始唱歌，这时小伙子和姑娘们也跟着唱歌跳舞。

鄂温克人非常讲究礼节，除此以外，还有老年人进屋后必须坐在屋内背面的床上或炕上；送客人时必须客人的影子消失在天边后主人才能进屋；若骑马串门一定要在一百米以外下马，牵着马走到被访人家等。

打狗熊游戏

鄂温克族儿童根据所处的生活环境和生活方式创造了许多有趣的游戏。“打狗熊”游戏是鄂温克族儿童最喜欢的游戏之一。这种游戏由三个儿童玩耍，三个儿童中最大的那一个把自己装扮成狗熊，头戴狗熊头皮，若没有狗熊头皮就戴上用其他野兽皮制成的毛朝外的假狗熊头，并且学着狗熊的样子摇头摆脑地走来走去。当假狗熊慢慢悠悠地爬入灌木丛舔蚂蚁的时候，装扮成猎狗的儿

童，头戴好似猎狗头的毛朝外的面具，模拟着猎狗用鼻子嗅着地的动作躬腰踮脚地寻找猎物。不一会儿，装扮成猎狗的儿童表演出嗅到狗熊的气味的样子，同时“汪！汪！汪！”地叫着向狗熊扑去，接着猎狗与狗熊就展开一场你死我活的激烈的格斗。但是，由于猎狗身单力薄，打不过狗熊，狗熊将要取胜。在这关键时刻，扮演猎手的第三个儿童手拿自制的玩具弓箭出现在猎狗和狗熊格斗场的一侧，拉弓射出柳条箭子。中箭的狗熊惨叫一声扑向猎手，猎手非常熟练而且迅速地射出第二箭。狗熊中了第二箭后倒在地上一动也不动，表示已经死去。这场游戏就此结束。

●德昂族

德昂族人口为15,462人（1990年统计），主要居住在云南省潞西县和镇康县，少数散居于盈江、瑞丽、陇川、保山、梁河、耿马等地。

德昂族自称“纳安诺买”、“梁”、“昂”、“冷”、“布雷”等。旧称“崩龙族”，1985年改为德昂族。

德昂族有自己的语言，德昂语属南亚语系孟高棉语族佤德昂语支；无本民族文字，部分人通用傣语、汉语、景颇语。

德昂族信仰小乘佛教和原始宗教。

五色娑罗布

德昂族妇女的手工纺织有较悠久的历史。早在唐代，德昂族的先民就已有较高的纺织技术，能纺织五色花布，史书上称为“五色娑罗布”。纺织的原料主要是木棉。先民濮人就是以纺织木棉出名，被称为“木棉濮”的。

为解决穿戴问题，德昂族的妇女们付出了艰辛的劳动。他们的纺织工具比较简单，只有手摇纺车和纺锤。手摇纺车放置在固定场所使用，而纺锤则成了妇女们随身携带之物。她们即使在下地劳动或背水途中，也要边走边用手将棉花捻成纱线，缠绕在纺锤上。由于德昂族妇女主要利用农业劳动间隙的零星时间来纺纱线，所以，要备足一件衣服的纱线，往往要用几个月的时间。为了赶制衣服，经常是纺织到深夜。木棉是一种多年生灌木，树干一般有 3 米多高，枝繁叶茂，树冠像一把伞。在气候好的年景，一株木棉可摘来籽棉近 1 公斤。德昂人多把木棉种植在田边地角或园地边。木棉的纤维长而且坚韧，比草棉的纤维略粗，便于手工纺织。德昂族种植的草棉也是一种多年生植物，但不必像内地那样每年都要播种。因为这里气候温暖，冬无霜雪，草棉不会冻死，到来年春天又抽枝发叶了。只有在几年之后，株干衰老，产量减少时才另行播种。

由于德昂族妇女的家务劳动十分繁重，同时还要在劳动的时间经常纺织纱线，可以说，除睡眠之外，她们的双手没有停歇的时候。但是，即使这样也难以解决全家人的穿戴问题。所以到了近代，随着德昂族同周围各族群众的接触和交往的频繁，她们便渐渐同傣族妇女建立起协作关系。她们把棉花交给傣族妇女纺成纱线，对半分成，这就节省了时间，也提高了效率。

纱备足之后开始织布。如果织的是做衣服用的布，就将纱线按所需长度穿在经盘上，用腰机或木架织机织成白土布，再根据需要染色。若要织妇女做裙子的布料，就要先将棉染成各种色线，织布时将五色线按需要排列组合织成五色花布。这种五色花布就是史书上所称的“五色娑罗布”。

德昂人与竹

大青树挺立，竹林成荫，是德昂族村寨的特点之一。德昂人喜爱竹，在他们居住的地方，多产竹子；竹子的种类繁多，常见的有龙竹、京竹、凤尾竹、实心竹、茨竹、毛竹等多种。特别是龙竹，大的直径达 30 厘米，干粗梢长。远在汉晋时期，德昂族的先民永昌濮人就把它作为向中原王朝纳贡的贡品，所以史书把这种大龙竹称为“濮竹”。

在德昂族的生活中，竹的用途十分广泛，从建造房屋，制造生产工具到制作日常生活用具，他们多以竹为原材料。竹在德昂人的生活中起着十分重要的作用。

走进德昂村寨，就会看到一幢幢形状独异的竹楼，即史书上说的干栏建筑。除屋架是用较好的木料构成外，其他的椽、壁、楼都用竹构建，竹楼的门窗也用的是竹。竹是德昂族地区的特产，容易种植，成长快，二至三年即可砍伐使用，是德昂族群众都喜爱的价廉物美的建筑材料。

德昂族的生产工具有许多是用竹制作的，比较简单的有扁担、锄柄。经过编织而成的，有屯粮用的大大小小的囤箩，计量用的量箩，骡马、牛帮驮运货物的驮箩，还有捕鱼的鱼笼等，都是竹制的工具。

德昂人对竹的使用，更具特色的是在生活用具方面。用大龙

竹锯成各种不同长度的竹筒，有的用来背水、储水，有的用来储藏干燥食物，有的用来腌制酸笋、酸茶。吃饭用的篾桌，长方形、正方形、圆形的都有，而且编制造型都很精美。进餐使用的竹筷、竹饭盒，甚至洗脸、洗脚、喂猪也使用竹制器具。竹还可以作为野外的炊具。砍一节新鲜的竹子，把淘洗好的米放进竹筒，加水，封口，然后放在火堆上烧烤，煮成的竹筒饭，清香可口，别有风味。德昂人在野外劳动，还常常用竹筒沏茶。一个沏茶用的竹筒可以使用半年以上，即使外边烤得很焦，甚至底部已薄如纸，只要不是意外损坏，还可继续使用。“竹筒茶”已成为德昂人生活中的一个专用词语。

在旧社会，穷人家里死了人，无钱购买棺木，德昂人就用龙竹编制竹棺，埋葬死者。

竹在德昂人的生产、生活中有如此广泛的用途，所以他们喜爱竹，家家户户的住宅周围都栽竹；他们的村寨，莫不修竹成林，蔚然可观。

妇女腰箍

德昂族妇女，不论分属那个支系，都在腰部装饰着鲜明的“腰箍”。

德昂族妇女的这种装饰，历史悠久。据唐代史书记载，他们的先民“茫蛮部落”就有“藤篾缠腰”这一特殊习俗。后经宋、元、明、清各朝，一直流传至今。德昂族姑娘成年后要在腰部裙子外佩戴上五六或十余圈，甚至二三十圈藤或韧性强的草制腰箍，宽窄粗细不一，多漆成红、黑、黄、绿诸色，有的上面刻着各种花纹图案，有的还包上银或铝皮，在阳光照耀下闪闪发光，鲜艳夺目。姑娘身上佩带的腰箍越多，做得越精细，人们就认为这个姑

娘越勤劳、聪明，也表明她心灵的美好。腰箍既然体现了女青年的美德，因此，在青年男女社交期间，小伙子们为了获得姑娘的爱，往往费尽心思，精心地制作有动植物图案和花纹的腰箍，送给自己心爱的姑娘佩戴，于是，它又成了男女青年爱情的信物。

这一独特、历史悠久的装饰，在德昂妇女中久盛不衰，是与它的一个美丽的神话故事紧密相连的。传说，德昂族的祖先是从葫芦里出来的。刚出来的男子们都长得一个模样，分辨不清，姑娘出了葫芦口就满天乱飞。后来智慧的天神把男子的面貌一一区别开来，聪明的男子们用亲手做的藤篾圈抛上天空把她们套住，姑娘们便不能再飞，纷纷落到地上与男子们一起生活。从此以后，妇女身上就佩戴腰箍。德昂人还认为，妇女们不戴腰箍，还会飞去。因此，他们的古歌里说“腰上系着藤圈的姑娘才靠得住”。说德昂族妇女会飞，那是神话，是一种想像，至于说到男子想出办法用藤圈把妇女套住，妇女才和男子一道生活，似乎是反映了德昂族古代先民从母系氏族向父系氏族转变的史影。

自主婚

德昂族青年男女在缔结婚姻关系上有比较充分的自主权，据说这是用血和泪换来的。相传，古代德昂族的一个大村落里，有一对青年，男的叫昆撒罗，女的叫殴比木，他们互相爱慕，情投意合，愿意结为终身伴侣。但殴比木的爹妈听了头人的谗言，嫌昆撒罗贫穷，千方百计阻挠，破坏女儿与昆撒罗的爱情，并向昆撒罗提出苛刻的条件，要他付一大笔彩礼。昆撒罗为了心爱的姑娘决心外出挣钱，娶回殴比木。就在昆撒罗外出之际，殴比木的父亲设了一个诡计，叫殴比木到地边窝棚里守庄稼，这样昆撒罗就见不到殴比木了。

聪明勤快的殴比木到了田棚竹楼上，搓了许多草绳，一根接一根地拉在谷地四周，挂上一串串笋叶，随着秋风吹拂。那些笋叶好像只只鹞鹰在地边飞翔，雀鸟不敢来吃谷子了。殴比木也不必东奔西跑去赶雀，可以安心地在田棚楼上纺纱、织裙子、织挂包。在一个月明星稀的夜晚，一只金钱豹窜到竹楼上伤害了殴比木。外出的昆撒罗经受了不少苦难，终于挣了钱回来，当他辗转探寻到殴比木的住地时，从窝棚里窜出来的是一只金钱豹，而不是殴比木。就在这一瞬间，昆撒罗迅速抽出长刀砍下了豹子的头。但昆撒罗再也见不到殴比木的笑容，再也听不到殴比木的欢乐歌声。在这万分悲痛的夜晚，昆撒罗收拣起殴比木的银耳筒、项圈、手镯，拾起了她残存的双手和为自己织的挂包等物品，回到昔日殴比木舂米的脚碓房，把殴比木的残骸、遗物和豹子头挂在碓头上，吹起了悲愤的芦笙，伤心地唱起哀歌来。

后来，昆撒罗在哀歌声中也渐渐消逝了。清晨殴比木的妈妈走进碓房，看见女儿的遗物，万分悲痛，悔恨莫及，但已无法使女儿再生。

这个悲剧故事在德昂族中传开了，男女老幼都咒骂那个出坏点子的头人和嫌贫爱富的父母。德昂青年为悼念这对恋人的不幸，把昆撒罗的《芦笙哀调》和《哀歌》一代一代地传了下来，以作为家长们的借鉴，作为青年男女争取婚姻自主的武器。直至今日，有的地区在举行婚礼的仪式上还在唱昆撒罗的《哀歌》。

这个悲剧教育了做父母的德昂人，婚姻大事应尊重子女们的意愿。因此，现在德昂族的女方家长，大多对女儿选中的伴侣来求婚，总是应允的，家长们认为“姑娘爱着人了，不同意是不好的”。并认为只要他们相爱就是幸福，至于今后生活中的贫困与挫折，那是儿女的“命运”，做爹妈是无能为力的。话虽如此说，父母对女儿选择对象的事还是很关心的，他们对常和女儿来往的男

青年的身世、品德都留心考察，出主意，帮助女儿选择理想的伴侣。

竹篮探情

德昂族男青年向自己中意的女青年求爱，除了夜里到女青年家中对歌，直接倾诉爱慕之情外，还可以用送竹篮的方式表达爱情，试探对方的心。但是这种送竹篮的方式，不像对歌那样随时可以进行，一般是在一年一度的泼水节期间集中地进行。德昂族同傣族一样，每年公历四月中旬要过三至五天的泼水节。泼水节是德昂族的盛大节日。其间，男女老幼都穿上节日盛装欢度佳节，在丰富多彩的节日活动中，竹篮作为男女青年爱情的探测器，更牵动着无数青年男女激动的心，给节日增添了紧张、欢乐的气氛。在节日到来之前，小伙子们都躲到僻静的地方，精心编制竹篮，少的编一个，多的编六七个，这要由小伙子选中姑娘的数目而定。竹篮编好后，在节日到来的前三天，小伙子乘夜深人静，以串姑娘方式，先将编得最好的竹篮，送给自己最中意的姑娘，依次再送给其他平日相处得好的姑娘。要知道姑娘对自己有没有意，就得看这位姑娘在泼水节的时候背的是不是自己送的竹篮子。节日里的德昂族姑娘，都背一个装有竹水筒的细眼竹篮。这个竹篮是她们从小伙子们送来的若干个竹篮中挑选出来的。选竹篮也就是选他们满意的小伙子。所以节日期间，小伙子们总是紧盯着姑娘们身上背的竹篮。当泼水节仪式举行完毕，人们可以自由地互相泼水表示祝贺时，小伙子们便去寻找身上背着他们编制的竹篮的姑娘。

小伙子把竹筒里的水先浇在鲜花上，又用花束轻轻地洒向姑娘。这时，姑娘也用同样的方式，将花束上的水轻轻洒到小伙子

身上。这一来一往的水珠，既是他们之间爱情的表白和许诺，也使他们之间秘密的爱情向社会公开。

德昂族男女青年虽然通过送竹篮和互相泼水的方式肯定了恋爱关系，但是按照德昂族的习俗，男青年的家长必须请媒人到女家说亲，获得女方家长的同意才算正式订婚。

撒鲜花祝新娘

德昂族青年结婚，在娶新娘时，新郎要在陪郎、媒人陪同下去新娘家迎亲。在进入新娘村落时鸣枪数响，表示娶亲人员已到，新娘家把迎亲队伍请入屋后要招待饭食。新娘梳装打扮完毕告别娘家时，由舅母、姊妹及本寨未婚女青年送行，并将女方家中陪嫁的衣服、锄头、镰刀、嫁妆及女方父母赠给男方父母的衣服等等带往男家。

新媳妇到夫家，登梯上竹楼时，双脚一定要踩在专门置于楼梯脚的石板上，表示他们的婚姻像盘石一样坚固长久。新媳妇上楼时，婆婆要给她撒米花。在镇康地区，新娘到来之前，新郎的亲戚朋友还要采摘鲜花。然后把花瓣摘下，按红、黄、白色分装在三个竹箩里，当新娘随着欢乐的鼓声、铿锣声登上新郎家竹楼的第一级阶梯时，婆婆捧起大红、淡红、深红的花瓣向儿媳头顶

撒去：新娘登第二级阶梯时，婆婆将那深黄、淡黄、紫黄的花瓣撒向新娘；新娘登第三级阶梯时，婆婆又将那雪白的花瓣撒向新娘。当新娘走到楼上时，婆婆将各色鲜花花瓣混在一起抛向天空，纷纷落向新娘和宾客头上，增添了欢乐的气氛，也给人们以吉祥、幸福和美的感受。

献佛不献坟

德昂族的丧葬也有自己的习俗，除佛爷（和尚）实行火葬外，一般群众都是土葬。各村有公共墓地，只要是同一村落的正常死亡者均可葬入，没有姓氏界限，也不分头人与百姓，不过他们的坟向与其他民族不同，不是顺山向，而是横山向埋葬。

按德昂人的习惯，人将死时，要把事先准备好的一枚银币放入口中，意思是给死者的灵魂到阴间过河的摆渡费。人一旦停止呼吸，其家属即在门外鸣枪三响，向亲戚和邻里报丧。这时，近亲、家族、邻里即纷纷来帮助料理丧事。如帮助制作棺木、洗尸、入殓等，一般停尸家中不超过三日。停尸期间要请佛爷（和尚）念经超度，祈祷死者的灵魂进入西方极乐世界。

出殡时，棺材小头朝前，大头朝后（即让死者的脚先出门），意思是要亡魂向前走，不能倒回来。埋葬完毕，由长老念祷词，说明死者和活人走的是两条路，死了的去阴间找归宿，安心地去；活着的好好回家。长老念完祷词，各人折一树枝拂身，表示扫除身上的邪气，就可转身回寨子。返回时，不能掉头向后看。

葬后七日，死者家属再请和尚念一次经，他们以为这样就可以超度死者灵魂早日转世投生，并嘱咐他来世要变人，变人要先变出五官，因为变出眼睛，好人坏人才能看得清；变出耳朵，别人讲好讲坏才能听得分明；变出鼻子，香、臭才能闻到；变出嘴

巴，酸甜苦辣才能分辨；最后要有一颗心，才能变成人。

经过超度，活人对死者的哀悼追思告一段落，日后不扫墓不祭祖。德昂族不献坟，他们有自己的的说法：相传在很久很久以前，德昂族有个大头人叫腊有，他的妻子叫哈木，夫妻二人到40多岁才生了一个儿子，取名阿托。夫妇俩十分珍爱这棵独苗，视如掌上明珠，吃饭怕他噎着，睡觉耽心他凉着，走路怕他跌着。于是专门嘱咐家里的一个长工，寸步不离地照管着他。不幸的是，阿托长到10岁那年，染上恶性疟疾死了。老夫妇哭得死去活来，但也不能使儿子复生，为了表达父母的一片心意，请工匠建造了一座阳光晒不着，雨水淋不进，蚂蚁穿不透的房子，把儿子的尸体放在里边，并由长工每日去献三次饭。长工为阿托送饭已三年，仍坚持不断地送。一天傍晚，长工去送饭时，遇上暴雨，山洪大发，过不了沟。这时迎面来了三个释迦弟子，长工便把饭菜虔诚地献给了佛爷，拎着空提篮回了家。就在这天夜里，腊有夫妇同时梦见儿子回到家里，并说：我走了三年，直到今晚才吃到家里送来的饭菜。腊有夫妇很惊奇，次日一早就唤长工来询问，长工说每日三餐没有少送，但老夫妇仍不相信，到坟上检查，果然三年送的饭堆积如山丘。又问昨晚的饭送到那里去了？长工如实回答，说是送三个和尚吃了，于是老夫妇感慨地说："献坟不如献佛。"从此德昂族不再献坟。

谷娘权力比佛大

德昂族是一个虔诚信仰小乘佛教的民族，在他们的人生哲理、节日、婚丧禁忌中无不深受佛教的影响，然而在涉及到人类生存最基本的问题时，他们对佛祖另有评论。

大米是德昂人的主要食物，因此他们对如何得到充足的食物

十分关心，对他们的一个女性谷物保护神——谷娘十分崇敬，甚至把她的作用凌驾于神佛之上。

说起谷娘，德昂人是这样说的：古时候，有个名叫哥德玛的大佛，曾与谷娘发生过争执。哥德玛认为他能普度众生，权力最大；而谷娘则认为她能主宰谷物丰收，给人以食物，权力也不小。争执双方相持不下，谷娘一气之下飞走了。这时人们正要做“大贡”（大规模的斋僧礼佛活动），由于谷娘飞走了，没有谷物，饿着肚子怎么能举行拜佛活动呢？大佛哥德玛着急了，感到没有谷娘确实不行，于是亲自驾云到天边寻找谷娘。哥德玛费尽心思找到谷娘后，首先向他合掌跪拜，并承认错误说：谷娘！我得罪你了，事实证明是你的权力大，离开了你，人们便没有饭吃，就办不成事了，现在向你赔罪，请你回到人间给人们以谷物吧！谷娘为了人们的生存，不计前怨，况且大佛已认错了，便飞回人间。从此人们又有了谷物，可以“做贡”拜佛了。所以德昂人从下种到收获，每一个重要环节都要献谷娘，特别在吃新谷米饭时更加虔诚。

在一个笃信佛教的民族中，居然把谷娘置于执掌天堂、人间、地狱三界的大佛之上，而且用不吃饭就拜不成佛的简明哲理加以论证，体现了粮食比拜佛重要的道理，这确是很有意义的。它一方面反映了物质的东西比精神的宗教重要，另方面也反映了佛教传入与原始宗教的斗争，而原始谷神未被佛教征服的一个侧面。

洗手洗脚礼

德昂族有一种良好的尊重长者的风尚。在家庭内，长辈抚育幼辈，幼辈尊重长辈。他们对社会上的老人也同样尊重，把爱护、尊重与赡养老人，视为民族的美德。因此每当逢年过节时，年轻

人都要把家里最丰美的饭菜送一份给村里的高寿老人，以表示敬意。对于村里丧失劳动能力的孤寡老人，当他们无能力种田时，亲戚们要无代价地替他们下种和收获，使他们有饭吃；有的则把他们接到家里和自己一起生活。住在澜沧县的德昂族，每年新谷登场吃新米饭时，首先要由后辈子孙添饭敬长辈老人，长辈尝新后，说几句祝福的话，然后全家才能进食，否则认为是对长者的不敬。

一年一度的泼水节时，德昂族在佛寺院坝里，用洁净的水洗涤释迦牟尼偶像上的灰尘，并互相洒水祝福。而在家中，幼辈要为长辈洗手洗脚。当一盆温暖的水端到老者面前时，幼辈先向长辈合掌叩拜，口中喃喃自语，说明一年来自己在某几件事情上，有违背长者教诲之处，或在某些方面有对长者不够尊重的地方，望长辈指教原谅。长辈也说自己有时对幼辈发了脾气，在某些事情上起表率作用不够，但愿今后共同和和气气地相处，阖家幸福等。然后幼辈用温暖的水为长者洗脚。如果父母去世，哥哥、嫂嫂、姐姐都算长者，就像爹妈一样，应当接受弟弟、妹妹的洗手洗脚礼。嫁出去的女儿、妹妹，或出门已入赘的儿子、弟弟，也要偕同他们的配偶回家来为长者举行洗手洗脚礼。如果路远不能回来，可由一方做代表，并向长者说明不能回来的原因。他们回来时，将一小包茶叶和几块糯米粑粑，用双手恭恭敬敬地献给长者。

●保安族

保安族人口为12,212人（1990年统计），主要分布于甘肃省积石山保安族东乡族撒拉族自治县，少数散居于甘肃省临夏回族自治州和青海省循化撒拉族自治县等地。

“保安”一名系地名演变而来。明初，朝廷在保安族居住地设置“保安站”，招募士兵戍边并筑“保安城”，以加强对周围地区屯田事务的管理。

保安族有自己的语言，保安语属阿尔泰语系蒙古语族，分大河家和同仁两种方言，无本民族文字，通用汉文。

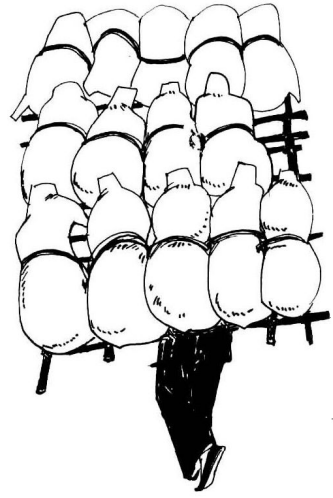
保安族信仰伊斯兰教。

保安装

保安族的祖先最先与蒙古族毗邻居住，其服饰式样与蒙古族大同小异。后来保安族又与青海藏族、土族相邻居住，服饰又吸收了这两个民族的长处。以后，随着同回族、东乡族、汉族人民的频繁交往，服饰又有了新的明显变化。保安族男子喜欢戴白色或青色的号帽（圆顶布帽），穿白布衫，套青布夹袄（坎肩），在节日或喜庆场合，带礼帽，穿翻领大襟藏式长袍，多褐色，但较藏袍稍短，并饰有与藏袍不同宽度和不同花色的“加边”。扎4米多长的彩色腰带，通常是围腰三圈再垂下半米，挂腰刀和火镰等小饰物。脚蹬牛皮长筒马靴，显得格外威武英俊，很具有民族特色。妇女多喜欢穿紫红、墨绿等色彩鲜艳的灯芯绒大襟上衣，蓝色或黑色裤子，有的还爱穿过膝的长袍，外套深色的坎肩。衣袖和裤脚都绣有花纹图案的镶边。男女上衣均长于坎肩，穿时以露衣边为美。遇到喜庆节日时，妇女们的穿戴较平常更为讲究，喜欢上穿苹果绿衣衫，下着粉红色花裤，看上去既艳丽又俊俏。不过随着年龄的增长，未婚和已婚女子穿戴有明显区别，少女爱梳长辫，着各色鲜艳的上衣，节庆日或外出参加活动时，戴细、薄、柔而透的绿纱盖头；已婚妇女除新嫁娘外，中老年妇女多着黑、白、蓝、青服装，喜庆节日，穿得讲究些，所戴盖头，少妇和中年妇女是黑色的，而老年妇女则是白色。现在保安族妇女的穿戴又有变化，妇女（除农村外）大多不再戴盖头，有的系各色纱巾，也有的戴白色卫生帽，鞋袜的要求也开始讲究起来。

羊皮筏子

保安族和毗邻的东乡族聚居的甘肃临夏地区，地貌由梁昂、沟壑、川台、河谷四部分组成。西南是巍峨峭拔的积石山，重峦叠嶂，北面有湍湍急流的黄河阻挡。区内狭长地带多是些崎岖的羊肠小道或便道，交通十分闭塞，给人们的生活带来种种不便。聪慧倔强的保安人为了战胜险境，通过长久实践，学会了在浅水急流的关津地带利用羊（或牛）皮筏子渡河的过硬本领。



羊皮筏子是这里独特的交通工具，其制作方法是：宰羊（牛）时，先割去头，不开膛，从颈部和四肢取出骨肉，仅剩下一张皮筒，将皮熟制后，把颈部、生殖器和三只脚部位扎死，留下一只后腿不扎，用以充气，这就是皮囊，史书上称作“革囊”，实际就是羊皮口袋。一个人用一个羊皮口袋泅渡叫“单抱”，两个人用一个羊皮口袋泅渡叫“双乘”；三人以上过河的羊皮工具称作乘羊皮筏子。羊皮筏子是用几个甚至十几个皮口袋缚连一起绑在木制或竹制方形架子上，这种皮筏子也可几个或数十个接为一体，大的能载数十人或几吨重的货物。乘客坐在筏子上面，主人双手扳起桨棹子，在积石峡口水势惊险处横渡或顺流而下，待乘客上岸后，主人再将筏子扛回上游（叫搬筏子），再载渡乘客。自古以来，中外商贾、边将使节在此往来经过，都要乘坐这种特制的交通工具，所以古代曾留下“不用轻

帆并短棹，浑脱飞渡只须臾”的有名诗句。后来，一些保安人为了维持生计，就靠自制羊皮筏子在河面上摆渡收费度日。

近几十年来，由于刘家峡水电站的建立，黄河上中游地区水面变得宽阔，滚滚黄河上架设了钢筋混凝土大桥和钢索吊桥，交通状况大为改观。羊皮筏子或牛皮袋不再是当地人过河的唯一交通工具。但居住在黄河流域滩多口险的保安人仍利用这种传统的运输工具载物过河，并在近年发展成特有的体育运动项目——羊皮筏子竞渡。这种比赛是三四人同乘一筏横渡黄河，看谁能最先划向彼岸，这是一项比力量、比技术、比胆识的比赛。此运动项目同时也包括有“单抱”羊皮袋和“双乘”牛皮袋过黄河的项目，它是一项有鲜明地区特点的水上运动。

保安婚礼

保安族的婚姻，要经过媒人说亲、下聘礼、认亲、结婚等过程，一般在女方接受了彩礼后，即选定吉日举行婚礼，其婚礼习俗，独特而饶有风趣。

保安族举行婚礼，大多选在“主麻日”，即星期五，其程序有娶亲、送亲、迎亲、贺嘉（闹宴席）等几个热闹的场面。

婚礼首先由娶亲开始。这一天早上，新郎家从其家族中选出十人左右组成娶亲队伍，其中一名是新郎的伴郎，由两名年轻妇女作为新娘的伴娘，他们都身穿盛装，和新郎一起骑着披红挂绿的马，由媒人引路到女方家去娶亲。娶亲人一踏进女方的庭院，先吃“进门下马宴席”，入门后，媒人带着新郎和伴郎给新娘亲属中的长辈逐一请安问好。之后，娶亲者按位入座，新郎和伴郎跪在阿訇和新娘家长席前，新娘坐在另一间房内。这时，新娘的父亲直呼新郎的乳名，当众宣布把女儿许配为妻，阿訇接着问同意否，

新郎回答“我承领”。再去问新娘同意否，待得到满意的应允后，新郎和伴郎起而入座，请阿訇念《古兰经》中关于证婚的内容。念毕即考问新郎有关伊斯兰教教义的常识，直至得到圆满的回答后，在座的人们立刻抓起桌上事先准备好的红枣、核桃等从窗口撒向院中前来贺喜的宾客，以示吉祥如意，喜事盈门，夫妻美满幸福之意。届时，年轻人为了讨个吉利，都要奋身抢拾，你推我搡，争先恐后，其情景真是欢快异常。

祝福仪式结束后，新娘的父母敬请娶亲的客人入席吃贺宴。席间，同村男青年结伙拥入客堂，向娶亲的索要“奴古木哈”（保安语，即羊羔肉的意思），如不兑现，待宴席一结束，他们就开始取闹娶亲人，有的以诮言谑语戏逗，使在场者笑得前仰后合，有的则手拿沾有锅灰的毡块或羊毛团儿，躲在门外，娶亲人一出客堂，他们便一拥而上将娶亲人拉到院中抹花脸，满院宾客也都围拢过来取闹，这时，娶亲人必须强装笑脸，不许恼怒，否则被认为不吉利。

当娶亲人将要离开女家，同村的年轻人还要对媒人取闹一番，其热闹达到高峰。他们先是纠缠着媒人要其交出羊羔钱，媒人有意不给或少给，取闹者则不依不饶，再不然，就把媒人按倒在地，脱去鞋袜，拉起来拖逼着在冰雪上或泥水中来回跑，众多围观者则站一旁为年轻人呐喊助威，直闹得媒人周身泥水狼狈不堪，并拿出足以供晚上贺嘉聚会用的手抓羊肉钱后，才在一阵欢快的呼喊声中停止。为了显示女方家的威风，婚后不致使姑娘被小视，娶亲人临走还要经受娘家人一顿象征性的踢打，然后留下两匹马给新娘和伴娘，才能策马上路回男家。接着，是女家送亲。

送亲仪式也十分有趣。送亲的人，少则 10 多人，多达 30 多人，一般有两个妇女，8 至 10 个男人。送亲时，先由家族中一年长的妇女左手扶嫁女右手托一盛有麦、豆、玉米、青稞、小米等

五色粮和茯茶的盘子，从一出闺房门开始，即让嫁女边走边抓起五色粮往后撒，直到走出院门为止，以示报答养育之恩，将吉祥幸福的种子留给父母兄弟，然后，嫁女才头盖面纱，身披红毯和伴娘一起被扶上坐马，其他的送亲者则抬着嫁妆簇拥在后，跟着新娘缓缓走到新郎家。

当送亲队伍一到新郎的家门时，迎亲的鞭炮齐鸣，早已等候在路两旁的迎亲人便一哄而上，拦阻新娘的坐马，不准他们连人带马一起进入家门，送亲者则坚持新娘骑马进去，双方相持不下。如果这时送亲人得势，连人带马则可冲进新郎家，若是输了，只好由新娘的亲属抱着新娘走进新郎家的大门，抱走的距离越远，越证明迎亲者们的胜利，于是大家欢呼雀跃，热闹非凡。送亲者与迎亲者如此嬉闹一番后，待新娘入了洞房，送亲人再将新娘的嫁妆和给新郎全家人作的鞋，一一摆放在院中，名曰“亮嫁妆”。这时，新郎家则象征性地要给抬嫁妆的一点钱，以作酬谢。

送亲仪式结束，客人们在新郎家稍进菜饭，即去“转客”，就是送亲人被新郎的近亲家族中的伯父、叔父、哥哥等邀请到家中作客，以显示家族内的团结和睦，然后再返回新郎家中吃喜宴。

晚上，为新郎迎进新娘后最热闹的时刻，同村人开始闹宴席场了。这时，先是由年纪较小的男青年从新郎家的大门口边走边喊“特郎味！特郎味！歪寸热！歪寸热！”（保安语，意思是拿柴草来），待跨进大门，主人拿出柴草后，大家便七手八脚地在院中燃起熊熊的篝火。院子周围张灯结彩，篝火旁放着木凳，火上烧着铜壶茯茶，人们围坐在火堆的四周，边喝茶，边唱“宴席曲”，伴着轻盈的舞步，歌声此起彼伏，歌词有问有答，情趣豪爽，舞姿奔放，戏笑玩耍，直闹到午夜。当唱完“讨喜曲”，主人热情地拿出红枣、核桃等喜果招待大家时，人们才互相道喜离开。

次日，新郎父母宴请新娘的母亲、舅舅。第三天，新郎的姐

姐、嫂子、婶妈等陪同新郎、新娘“回门”（娘家），整个婚礼程序即告结束。

保安腰刀

保安腰刀，向以刀刃坚韧、锋利著称。它工艺精致，风格独特，式样美观，久负盛誉，深受我国各民族人民的喜爱。

保安族打制腰刀的技术，源于何时，众说不一，但在元代时，由于生活的需要，保安人为了自卫和屠宰牛羊，已经能制作出一种带木柄的皮鞘刀了。到了清代同治年间，保安人从青海省同仁县隆务河边的保安城、下庄、尕沙日一带东迁，路经循化县塔撒坡地区时，向当地兄弟民族制土枪的工匠学会了制刀技术，经过借鉴又提高了本民族的打刀锻造技术。以后，保安族人民过积石山，到甘肃省大河家地区（今临夏回族自治州积石山保安族东乡族撒拉族自治县境内）定居下来，经过几代匠人的不断钻研创新，至1930年前后，他们制作的腰刀，不但品种增多，花样翻新，而且质量不凡，无论在设计、锻垫，还是淬火、镶嵌、砸铆等技术方面，都达到了炉火纯青的水平。另外，制作腰刀的工序，也十分精细，一把腰刀少则40多道，多的要经过80多道工序。

腰刀的品种有“什样锦”、“波日季”、“雅五其”、“双落”、“满把”、“扁鞘”、“双刀”、“细螺”、“哈萨刀”、“蒙古刀”等多达一二十种。其中以“什样锦”最精巧。

“什样锦”腰刀有大小三种规格。刀把由护口、平罗（直线条罗纹）、弯罗（曲线条罗纹）、盖子等组成，用黄铜片、红铜丝、白铁丝、牛角、塑料、赛璐珞等材料按图案叠合铆制，经过精心打磨，显现出五光十色、鲜艳夺目的色料。腰刀的刀鞘由黄铜或白铁打成外壳，鞘内装木芯固定和保护刀刃；鞘侧又附设一小鞘，用

于装插拔鼻毛（保安族男子有拔鼻毛的习惯）和测毒的银制镊子。刀体是在反复锻打的铁中加钢淬火而成，所以，异常坚韧、锋利、耐用。刀身打成后，工匠再在刀面上刻上“七颗星”、“五朵梅”、“一条龙”、“一把手”等图案，作为工匠的代号或商标。

保安族制作腰刀，原来是作为依附于农业的一种副业，所以大多数是以家庭手工业的形式进行，规模较小，一家一户为生产单位，一般不把技艺传给别人，多为父传子，兄传弟。生产设备简陋，只有铁锤、钻子、剪子、钳子、钢锉、土砌炉子和木制风箱等，全部工序均凭一锤一锉一人完成。产量不高，产品多为自产和自销。现在，制刀工匠已经组织起来，建立了刀具厂，购置了机器，翻新了工艺，增添了特色品种，可以成批加工生产，产量也大大提高。因此不仅满足了当地少数民族日常生活需要和市场供应，而且发展成为保安族特有的手工艺品了。保安腰刀，不但是保安族男子喜爱佩带的精美之物，保安族青年在谈情说爱的时候，把它当做表达爱情的信物，而且也是藏族等兄弟民族青壮年男子在节假日挎在腰间显示英俊威武的饰品和馈赠亲友的礼品。现在它还被当作具有特色的精品，赠送给外宾，或被带到尼泊尔、日本、印度、巴基斯坦、沙特阿拉伯等国家，以传递友情。

保安令

保安令是保安族“花儿”的曲调。在保安族文学艺术园地中，它是一支独具特色的奇葩。由于保安族 只有本民族语言而无文字，民间文学艺术均靠口头流传，因而通俗、动听，为群众所喜爱的民歌——“花儿”便成了保安族文学艺术的主要表现形式。

“花儿”的曲调叫“令”，保安族“花儿”有“保安令”、“大眼睛令”、“拔青稞令”、“哎西干散令”等，以保安令（即脚户

令）为主调。保安令多用汉语演唱，但为了表达情感，在唱词里往往加上保安语，如“尕尕呢麦尔艳”（即哥哥的妹妹）、“哎西日考”（感叹之意）等，另外，还掺入一些撒拉语、藏语。歌词一般以六句式为多，也有八句、九句、十二句，甚至四十八句的。保安令多属上下乐句结构，四句歌词反复一次；若是折断腰式，则在上下乐句间插入一个过渡性乐节。节拍多以三拍及复拍为主，兼有少量混合拍和四拍。旋律高亢优美，音色明亮豪放，曲调婉转动听，词语朴实生动，比喻贴切，内容一般是表达保安人的劳动场景和生活情趣；也有反映青年男女坚贞不渝，纯洁爱情的“花儿”，两者比较，后一类数量多，艺术性较高，流行也广。其原因是由于过去保安族青年男女的婚姻不能自主，他们为了追求自己的幸福，倾诉相互间的爱慕之情和美好的愿望，往往用“花儿”寄托情思，如有一首“花儿”，男唱：“大山背后山靠山，十二瓣叶叶的牡丹；我不害怕王法铁绳（啦）连，只怕我俩路断。”女唱：“大山背后婚姻散，黄河水干，积石山摇给（者）动弹。”这首“花儿”强烈地控诉了封建包办婚姻的残忍，表现了保安族男女青年敢于冲破旧礼教的束缚，忠于爱情，争取婚姻自由的坚强意志。

保安令是在青年男女聚会和传统节日时演唱的，不少老人也都能唱祖先流传下来的传统唱段，这些“花儿”更能体现过去的风格。

马上运动

保安族人民酷爱体育活动。在日常生活中形成了一些不受场地局限，容易开展的传统体育项目。其中尤以“打五枪”和“抹旗”等马上运动最具有特色。

“打五枪”流行在积石山保安族东乡族撒拉族自治县的“保安

三庄”。其规定是人骑在飞驰的马背上，在200米路程中，完成往自制的土枪内装火药、扣压引火帽到射击动作，并且连续进行五次。这种体育活动，多在农闲和节庆的日子举行。比赛前，骑手们个个生龙活虎，昂首挺胸，在起跑点持枪上马，待号令一发，即策马飞驰。这时，骑手们左手持枪，右手装药，取装引火帽，然后射击。谁如此连续射完五枪并先期到达终点，谁就是优胜者。余者以到达先后排列名次。这种马上体育运动要求骑手们既要有勇敢顽强的意志，又要有娴熟的骑术和高超的射击技能。运动激烈、紧张，为男女老少所喜爱，每有比赛，“保安三庄”的群众，无不扶老携幼出来观赏助威，其场面异常热烈壮观。

“抹旗”是人骑在马背上进行比赛的一种体育项目。比赛前，将旗先套在旗杆上。旗杆是用四五片竹子特别扎制而成的。杆上抹胶水后，再用黑布层层缠裹起来，坚韧而不易折断，保安人称之为“纂竹”。旗杆杆长因参赛者而分为2.5米、3米、3.5米三等。比赛时，参赛者骑在马上，精神集中地等在起跑线上，右手扶着插在马鞍右侧铁孔里的旗杆，左手持缰待命。当号枪一响，即刻松钗夹镫，策马飞奔，与此同时，右手拔出旗杆，握住末端，在100米距离内，连续完成从右到左，从前到后，再从头顶挥过去，即向五个方向挥旗的动作。保安人叫做抹“五门旗”。参赛者谁先完成这几个动作，并到达终点，谁就是第一名。这一体育项目，主要比赛选手们惊人的臂力，高超的骑术和灵活的动作。因此，获胜者不仅自己和家人感到高兴和自豪，而且，还获得同庄人的赞扬，因为他们认为优胜者为全庄争了光，赢得了荣誉。所以，当比赛结束，名次一公布，人们就兴高采烈地跳呀、唱呀，并自动纷纷离开赛场，相互转告，有的则为获得第一的选手宴请宾客，以示祝贺。

夺腰刀

保安族制作的腰刀是全国著名的传统手工艺品，每个保安族男子成年后都要佩戴一把自己最喜爱的腰刀作为装饰。腰刀不仅成了保安族人的佩饰和赠送朋友的礼品，而且还在民间传统的体育运动项目中，作为一种运动道具。

保安族有一种特殊的体育比赛项目叫做夺腰刀。参加比赛的双方男青年各将一把精致的带有“什样锦”刀鞘的小双刀藏在身上。比赛开始，双方进入场后，或前进或后退，或左右移动脚步，想各种办法躲闪对方的窥视，同时把自己的腰刀藏在最不易被人发现的地方。参赛者在观众呼喊和鼓动下，渐渐移动步伐靠近对方，一旦摸清和发现对方藏刀的部位，便一跃而上奋力夺刀。双方交手时，不能使用其他办法故意伤害对方，只能徒手想出巧妙的办法去夺，同时还要保护好自己身上的腰刀，不被对方夺去。这种比赛是力量和智慧的较量。有智谋的小伙子在夺刀时，都不先发制人，而是躲闪对方不让靠近自己，故意逗引对方暴露藏刀的部位，然后想办法出其不意地去触摸到对方身上的腰刀，使用撕、拉、拱、摔各种搏斗的方法，直到将刀夺到手为止，但不能伤及对方的皮肉。比赛时，如双方都把对方的刀夺到自己手里就视为平局。如果一方未夺得对方的刀而自己的刀被对方夺去就算输。比赛一般是三局两胜，中间要休息五分钟。比赛形式简便文明，饶有风趣，所以这种体育项目深受保安族人的欢迎。

●裕固族

裕固族人口为12,297人（1990年统计），主要分布于甘肃省肃南裕固族自治县、酒泉市黄泥堡裕固族乡和青海省祁连县。

裕固族史称“撒里畏兀”、“撒里畏兀尔”、“锡喇伟古尔”等，自称“尧呼儿”、“西刺尧呼尔”。解放后，根据本民族人民的意愿，以“裕固”为族名。

裕固族有自己的语言，分西部裕固语和东部裕固语，分属阿尔泰语系突厥语族和蒙古语族；无本民族文字，通用汉文。

裕固族主要信仰藏传佛教，但原始的萨满教残余在裕固族中仍然存在。

高领长袍

裕固族服装，其原料多取自牲畜皮毛，这与他们以游牧为主的经济生活有着十分密切的关系。其服装虽受藏族、蒙古族的影响很大，但仍然有着自己民族的特色。男子一般穿氆氇长袍，长度相当于身长，以红蓝色腰带束腰，显得庄重、大方、稳健、朴素。山区的牧民还常常根据气候的冷热或干活的方便，将双袖卷于腰际。戴圆筒平顶锦缎镶边的白毡帽或礼帽，穿高统皮靴或双鼻梁圆头靴。有的裕固族地区老人穿矮领白褐子镶黑边的长衫，衣襟下边开小衩，外套马蹄袖的短褂。左耳戴大耳环，腰带上挂有腰刀、火镰、火石、小佛像、酒壶、鼻烟壶、旱烟袋等物；若是短烟杆就斜插胸前，长烟袋则烟嘴向下插在脖子后边。过去，有的头上还留着长辫子，并将带有丝线辫梢的发辫盘在头上；现在多留短发。

妇女穿高领长袍，衣领高齐耳根，长袍习惯做成绿色或蓝色，下摆开衩，衣领、袖口、襟边用丝线绣有各种美丽的图案花纹，给人以轻松愉快、无拘无束的美感。长袍外面套一件坎肩，一般用大红、桃红、翠绿、翠蓝色绸缎缝制。着长布靴。束红、紫、绿色腰带，腰带两端垂于腰后两侧，腰带在左侧系有几条各色手帕。戴喇叭形尖顶帽或用芨芨草制作的帽子。尖顶帽是用白羊毛制成的，帽沿上缝有两道黑色丝条边，后沿微翘，前沿平伸，帽顶上缀着红线穗子，垂在尖顶周围，十分潇洒。未婚少女的前额带“格尧则依捏”，即在一条长红布带的上边缀各色珊瑚珠，下边缘是用红、黄、白、绿、蓝五色珊瑚和玉石小珠串成的许多穗，它像珠帘一样齐眉垂前额，梳五条或七条辫；辫梢内夹有彩色的丝绒线，系在背后的腰带里。盛装的妇女，戴宽沿圆筒平顶帽，帽

顶上垂下大红的彩络。已婚妇女佩戴长形的头面，即先将头发梳成三条大辫，一条垂在背后，两条在胸前，头面亦分三条系于发辫上，每条又分三段，用金属环子连接起来，上面镶有银牌、珊瑚、彩珠、贝壳等饰品，构成美丽的图案，在阳光下，异彩纷呈，耀人眼目。走起路来，伴着清脆的银器、珠贝的撞击声，悦耳动听。

甩头茶

甩头茶，又称炒面茶、酥油奶茶，是裕固族特有的一种茶，因喝茶的时候须用嘴吹，还得左右摆头，故名。甩头茶与藏族的奶茶不一样，其做法是：先把茯茶或砖茶捣碎，放进盛凉水的锅里，并根据需要，加放草果、姜片等。待茶熬酽，再调上食盐和鲜奶，用勺子反复搅动；在碗里放上炒面、酥油、曲拉（奶渣）和奶酪皮，把煮沸的奶茶倒入碗中即成。茶中的盐和炒面是必不可少的，他们认为“茶中无盐水一般”。沸腾的奶茶化开了酥油，如同一块金色的盖子，盖在碗面，再用筷子一搅，酥油、曲拉、炒面便成了糊状，故边吹边喝时必须左右摆头。

裕固人的饮食习惯是一日三茶（甩头茶）一饭，或两茶一饭。在喝早茶之前，须先舀一勺净水或开锅的茶，洒在帐房周围，表示消灾避邪，然后才开始喝。若有客人前来访问、投宿，热情好客的裕固人按照本民族待客的习俗，首先用甩头茶为客人接风洗尘。客人喝甩头茶时，须吃净沉在碗底的曲拉，方表示已经喝够，否则，主人便会不停地给客人添茶。

裕固族是一个大量饮茶的民族，饮茶的历史十分悠久。早在五代、北宋时期，裕固族的先民甘州回鹘，就通过“朝贡”或榷场，以马匹、骆驼和白玉等物，换回大量的绢、帛、丝、茶。到

了明、清，裕固族又通过茶马贸易来满足自己对茶叶的需要。今天，裕固人已喝茶成瘾，如若断了茶，尤其是老人，就会流鼻涕、淌眼泪，既头疼又无神，如同患了大病一般。这可能因为茶可使人醒脑提神，消困解乏，滋润咽喉，消食祛疾，并可弥补维生素的缺乏。茶叶，不仅成了裕固族人民须臾不可离开的生活必需品，而且也是历史上裕固族人民与汉族人民友好往来的媒介。甩头茶更是裕固族人民对饮茶习俗的一个发明。

支果干

支果干，是裕固语，对形似灌肠的一种食品的称呼。吃支果干是流行于甘肃肃南裕固族地区的饮食习俗。裕固族常年游牧，肉食在他们饮食中占有重要的地位。裕固族以麦面、青稞面和牛羊肉为主食，特别是牛羊肉富有营养，含多量蛋白质和适量脂肪，胆固醇含量低。居处高寒地区的裕固族牧民，正是靠着牛羊肉来满足人体对热量、蛋白质和脂肪的需要，在与风寒的搏斗中繁衍生息。

虽说裕固族牧民长期大量地食用牛羊肉，但食肉的方法却较简单，多以白煮或加工成肉肠、支果干等。白煮肉，十分讲究火候，一般是带骨的大块肉煮到基本熟即捞出供食，吃起来鲜嫩不腻，越嚼越香。因以手抓食，故称手抓。支果干制作较之手抓要复杂得多。平时或到秋末冬初牛羊膘满肉肥的时候，牧民们便成批地屠宰牲畜，为冬春贮备肉食。他们把割去头蹄的牛羊胴体对折成肉块，再用其皮包裹起来，垛放在帐房的一角。剩下的心、肺、肝等内脏便是制作支果干的上好材料。制作支果干时，将心、肝、肺切成碎块，然后伴以炒熟的面粉、葱、蒜等调料，并搅拌均匀，用肚油卷成直径 5 厘米左右的圆卷儿，切成长约 20 厘米的段儿，

待锅里的手抓肉块煮熟时，就将支果干放进锅里煮。有时则和羊头肉、里脊肉、肉肠一起煮，煮上几滚，立刻捞出，晾干即成。

支果干是裕固族牧民最为喜爱的食品之一。除了平时食用外，还用以招待宾客。当有朋自远方来，热情好客的裕固人在敬过双杯酒后，都要为客人端上手抓肉以及切成薄片的支果干以飨宾客。吃支果干时，蘸以蒜汁、香醋，其味酸辣爽口，美不可言。

九杆帐房

在绿草如茵、山花烂漫的草原，一顶顶帐房扎在避风向阳处，缕缕青烟从帐房顶上袅袅升起，甘肃裕固族牧民便住在这一顶顶帐房里。他们以帐房为家。除少数有几世同堂者外，多数都是四五口人的小家庭住在一个帐房内，一顶帐房一个家庭。

过去，裕固族的帐房呈圆锥形，由四、六、九根木柱支撑，不同于蒙古包，有着独特的风格。因九根柱子支撑的帐房为最大，故有九杆帐房之称。1958 年后，改用藏族式方形帐房。帐房是用牦牛毛和山羊毛制成毯子，用毛线缝制而成，质料坚实，既避风又挡雨。为了便于搬迁时驮运，每顶帐房分为两大片。扎立帐房，要选择避风向阳、水草丰美的地点，根据山形和水路确定坐向，大多是坐北向南，也有坐东向西或坐西向东的。帐房门忌朝北开，因为裕固人认为门朝北开不吉利。有句俚语："人只有到了倒霉的时候，门才朝北开。"坐向选定后，先用一条横梁，两根柱子撑起来，再将两片帐毯盖在上面，然后用绳子拉成四方形。外面四角的杆子和绷绳起主要的作用，其余的起辅助作用。帐房固定好以后，周围挖上排水沟。帐房内的布置井然有序：正方过去是摆神位的地方，现多放家具、座钟、收录机等物。左边是用木板拼成的板炕，夏秋两季可以防潮，冬季可以用牛羊粪填热炕。板炕上垫以毛毡、

兽皮，叠放着被褥、毛毯，平时盘腿坐在上面吃饭。若有客来，分男左女右让坐，而且按不同的辈份坐不同的位置。帐房内的右边放置奶桶、锅碗等炊具，同时也是女客的坐位。中间是炉灶，过去是三石一顶锅，现多用铁炉，是取暖和做饭的地方。帐房顶端开窗，白天掀开，以通空气，夜晚盖住，以避风露。

居住巴丹吉林沙漠边缘明花区的裕固族牧民，虽说他们早在几十年前就已普遍住上了土房子，但在姑娘戴头或结婚时，仍须搭起帐房，放骆驼和请喇嘛念经。

戴　头

戴头是裕固族的古老婚俗，一直沿袭至今。姑娘到了婚龄期，经过自由恋爱或他人介绍，与小伙子订下了百年之好，在结婚之前必须举行戴头仪式，又称戴头面。所谓戴头就是将一副用银牌、玉石、珊瑚、玛瑙、海贝等饰物编织成宽约 10 厘米、长约 1 米、重约三四公斤的精致头面，系在待嫁姑娘的发辫上。姑娘的 12 根小辫要组成三条大辫子，左右辫由后耳垂在胸前，一条在背后，头面分三片，分别系在姑娘的三条发辫上。

姑娘戴头须举行隆重的仪式。事先要把编织华丽的头面挂在墙上或帐房杆子上，再请喇嘛根据姑娘的属相和生辰选择戴头的吉日良辰，一般都在天刚亮时举行。到了戴头那天，姑娘家的亲朋好友纷至沓来，姑娘的父母要备下美味佳肴，款待前来参加戴头的宾客和请来的歌手。当人们尽情地吃喝时，蹲在帐房的一角、替女家说话、唱歌的两个人开始与男方代表对歌，为了不让别人看见，用布帘把自己遮蔽起来。戴头开始时，由两个事先选定的妇女给姑娘往发辫上系头面，请来的客人和歌手则一旁唱《戴头面歌》和《送亲歌》。

裕固族出嫁时戴头的习俗，据说是为了纪念本民族女英雄萨尔阿玛珂的。传说很久以前，在裕固族故里西知哈至有两座大山，一座叫白山，一座叫黑山。白山下住的是裕固族的白头目，黑山下住的是外族的黑头目。白头目手下有个大管家很坏，总想当头目，便千方百计地挑唆白头目与黑头目打仗；由于大管家暗通黑头目，白头目打了败仗，受了重伤。在这危急关头，白头目的妻子萨尔阿玛珂，率领一支娘子军杀向战场，击溃了黑头目。大管家阴谋未能得逞，便又挑拨白头目与他妻子的关系，迫使萨尔阿玛珂离开白头目回到娘家去住。大管家心怀叵测地为萨尔阿玛珂准备了一匹烈马和两个褡裢的“礼物”。在快到娘家的牛皮帐篷时，萨尔阿玛珂刚想打开褡裢口看看里面装的是什么礼物，一群鸽子便从褡裢里面飞了出来，惊吓了烈马。萨尔阿玛珂因毫无防备，便从马背上滚落下来，一只脚套在马镫里，被烈马拖死了。全部落的人闻讯后都感到万分悲痛。为了纪念这位女英雄，他们决定姑娘出嫁时必须戴头面。头面上镶嵌红色珍珠，表示萨尔阿玛珂的乳房；那白色的海贝，象征着萨尔阿玛珂的白骨；帽尖上缀的红缨穗，表示萨尔阿玛珂头顶的鲜血。

戴头的当天早上，迎着东方升起的太阳，由女方亲属、亲戚

等人送姑娘到男家完婚。

瑶达曲戈

瑶达曲戈，裕固语，意为羊干巴骨或羊巴骨，实为一根煮熟的羊小腿，是裕固族男女结婚的凭证。

婚礼的当天，新娘在男方为其专设的小毡房里喝过茶（酥油炒面茶）以后，男方迎新娘入大帐房。客人也相继进入大帐房依次就座停当。这时新郎新娘开始对天地和神像磕头，今改为向来宾鞠躬。宾客们开怀畅饮。在喧闹声中，两个歌手站起，一个手拿一根略带点毛的羊小腿，一人手端一碗奶茶，奶茶碗中放一大块酥油、四边放几块小酥油。据说茶代表大海，大块酥油代表高山，四小块酥油代表四个宰桑（宰相、大臣）。两位歌手徐徐走到帐房内的上方，以生动的语言向人们讲述“瑶达曲戈”的来历：从前有两家可汗结亲，用的是龙腿、狮子腿、老虎腿和大象腿。我们牧民人家结亲，怎么能弄到这些东西？于是人们请四位宰桑来商议。宰桑说：“我们是放牧的，有的是肥羊美羔，他们比什么都珍贵。我们把一只羊分成12份，送给头目、贵宾和客人，只剩下一根干瘦的羊巴骨，就拿它作为结婚的凭证吧！”两位歌手一边说着，一边唱起了《瑶达曲戈》。

歌手在说唱期间，新郎新娘依次向长辈和贵宾鞠躬致意。歌手唱完之后，端起盛满酥油的小碗，或向新郎新娘口中各喂一小块酥油，或蘸点酥油涂抹在新郎额头上以示祝福，并将羊干巴骨插入新郎腰间作为结婚的凭证。待新郎新娘入洞房以后，由新郎取出羊干巴骨与新娘一起把骨头上的肉吃净，以示夫妻恩爱，白头偕老。

杜苏尔池

在娶亲路上举行“杜苏尔池”（打尖）仪式，是裕固族别有情趣的婚俗。

随着裕固族姑娘依依惜别的歌声和送亲队长“上马盅”的高喊声，女家请来帮忙的人赶快给主要客人敬“上马盅（酒）”，并把新娘扶上卧倒的驼背上，由新娘的姐妹或嫂嫂一人和新娘同骑一峰骆驼，在后面照顾新娘。然后，一支浩浩荡荡、喜气洋洋的送亲队伍，或骑马，或骑驼，便从新娘家出发了。他们按照预定的路线，绕道避开途中经过的牧村、院落，一边行进，一边唱歌。送亲姑娘们对歌的内容或是触景生情，或是劝慰新娘，或是戏谑之言，十分欢快。当送亲的队伍快到男方家的时候，新郎的父母要委托几位能说会道、娴于骑术的人在途中铺上毡毯，摆上手抓羊肉、120 个小圆烧馍、酒和哈达表示迎候。这一仪式裕固语叫杜苏尔池，即打尖。

送亲的队伍来到打尖的地方，男方迎亲的人要马上前去迎接，快速拉住送亲队伍中的第一匹马，请送亲队长、新娘的舅舅、贵宾和伴娘到铺好毡毯的地方去休息。这时，男方不得稍有怠慢和疏忽，否则，送亲的人则愤然骑马东奔西跑，不堪收拾。送亲的队伍中总有几个故意挑剔的人，特别是在新娘的主要亲戚中，有的嫌男家迎客不及时，不热情；有的嫌男家小气、酒少、肉瘦、馍不白；有的借酒胡闹，骑马四处乱跑。这时，男家要赶快派人跑步上前向他们赔礼道歉，请求他们理解男方的一片诚心，这样才算罢休。

经过一番折腾，送亲队伍中的主要客人相继下马，下驼，在毡毯上就座，亲戚和一般客人则不下驼、马，继续坐在驼背、马

背上休息。待客人坐定后，男方迎亲的主事人先将一杯酒洒向天，后将一杯酒泼于地，意思是先敬天地，后敬鬼神；然后再向四周泼洒少量的酒，表示见面的和不见面的都喝了，一起恭贺新禧。男方向新娘的长辈献哈达、敬酒、敬食，并给骑在马上或驼上没下来的客人敬酒、分献肉块和馍馍。客人吃喝开始后，迎亲的主事人要向客人简要地介绍酒席准备情况，并高声唱起深情的《打尖歌》：

牛背子香哟羊背子嫩，
尊敬的客人们尝一尝，
路上太阳晒哟，马晃荡，
喝一杯喜酒添力量。

此时，新娘一般不吃不喝。等主客吃喝满意之后，送亲的和迎亲的一起上马启程，形成一个比来时更加庞大的喜庆队伍，一路歌声连天，向着男家继续前行。

马踏迎亲帐房

马踏迎亲帐房，亦称踏房，是裕固族古老而又有风趣的婚俗。女方送亲队伍中途打尖后，在欢声笑语和歌唱中，浩浩荡荡来到离婆家两三公里远的地方，一场戏剧性的马踏迎亲帐房便开始了。先由女方熟谙送亲事务的送亲队长，指定几个骑马的送亲人（必须是双数）作为第一批踏帐房者，纵马冲向男方为新娘专设的小帐房，绕着帐房转三圈，察看男家准备的情况。并且每个人都要尽力使马接近帐房，设法弄断帐房四周的拉绳，使帐房倒塌，以此奚落新郎家。第一批踏帐房者未能取胜，在一片笑声中退了回来。送亲队长复派6个骑骆驼的送亲者，作为第二批去踏帐房，他们绕帐房转了两周，自然也未能取胜。就在此时，新郎由伴郎陪

同第一次露面，并把一个装有五谷杂粮的瓶子向东南方向扔出去，以祈福祛灾。最后，骑马与骑骆驼的送亲者一起冲上去，绕帐房三周后返回，以示得胜。其实，男方早有准备。在送亲者马踏帐房前，新郎的姊妹兄弟或亲友，早在帐房内作好准备，当踏房时，他们便用红柳条使劲敲打帐房四壁，使其发出啪、啪、啦的响声，并派一些人故意大声呼喊，使前来踏房的马匹受惊，乘骑不敢靠近帐房。同时由一男子手持破木碗，击打客人的马后腿，意为避邪。如果女方送亲者的马或骆驼踏倒了帐房，那就意味着不吉利，说明婆家迟早会家破人亡遇大难，女方也不会把女儿嫁给这家了。不过，这种情况几乎没有发生过，因为现在的踏房，只不过是一种礼节，不像古时那样要动真格的。送亲者骑马转完帐房，男方早挑选好的十几个精干利落的小伙子，奋勇前去抓住客人的马。他们先把送亲队长及主要客人接下马，其余客人或被扶下马，或自己下马。此时若不快速跑步上前接马，不仅会被认为失礼，还会引起一场混乱，送亲队长骑着马乱跑，其余送亲者也跟着跑，直接影响婚礼的进行。

在新郎家的门外，由本家族中与新郎同辈的一个男子，跪在地上，双手捧盘给主要客人敬迎亲酒。婆家所有的客人，都要出门迎接，然后请客人进家门，在待客的席棚内坐下，喝酥油奶茶，吃油炸果子。新娘、伴娘及新娘姊妹、姨娘等人则到为新娘专设的那顶白帐房内落坐、吃喝。至此，马踏迎亲帐房结束。

柔箭射新娘

新郎以红柳条为箭射新娘，是裕固族婚礼习俗。

新娘由两位伴娘陪同步入大帐房与新郎见面时，女方客人要牵一匹白马，驮着新娘的嫁妆，跟在新娘的后面，走到火旁再把

白马牵回；马的额鬃上系一条方哈达，表示新娘是乘这匹马来的。据说白马代表白象，象征着吉祥。新娘手拿面纱（即用红柳条扎成三角形，上蒙蓝色纱布）遮面，由两个伴娘左右扶持向新郎走去。新娘的前边有两个男家请来作向导的人，他们横拉一条两头结疙瘩的长哈达，边走边唱。新郎备有用红柳枝条做成的一弓三箭，站立在家门前的西北方向。此时，宾主都到帐房外，迎接新娘进门。新郎家门前东南方向点燃两堆火，当新娘从火堆中间走过时，新郎用一个小弓和三支无镞箭射向新娘。有的地区则要求射中新娘腰带以下。在新郎射箭时，新娘趁势将面纱扔掉，露出羞涩而愉悦的面容。如若射不中，新郎会遭到别人的嘲笑。射过的弓箭由新郎折断，扔到门旁，断箭由老人捡起扔到火里烧掉。

关于箭射新娘的来历，民间传说：很久以前，草原上有一对名叫耶尔和萨热的尔的恩爱夫妻，过着美满幸福的生活。那时，没有专门引火的东西，人们只好用干牛粪或羊巴粪来煨火。萨热的尔家煨的火始终没有灭过。一天，突然刮起了一股旋风，萨热的尔家的火被吹灭了。萨热的尔眼看夕阳西下，仍无处找火，十分焦急。正在这时，她忽然看见对面山梁上亮光闪烁，便急忙奔去，只见火堆旁坐着一个白发老太婆，身边蹲着一条大白狗。萨热的尔恳求老太婆借给她一点火，老太婆慷慨应允。过了几天，老太婆骑着白狗来到萨热的尔家门前，她一进家，就让萨热的尔把头伸向她。萨热的尔刚把头伸过去，便失去了自制能力。原来那老太婆是个妖婆。老妖婆用锥子刺破了萨热的尔的前额和左右手，她和白狗吸吮完萨热的尔的鲜血后扬长而去。萨热的尔怕耶尔难过，一直对他隐瞒着，但萨热的尔的身体一天比一天消瘦下去。后来，在耶尔的央求下，萨热的尔才说出了真情。耶尔决定整弓磨箭，和妖精算帐。一天，老妖婆又来了，耶尔怒不可遏，一箭射掉老妖婆的头，老妖婆骑狗逃去。不多时，老妖婆又来了，而且肩上长

着两个头，耶尔又用两支箭射掉了老妖婆的两个头。虽然打败了老妖婆，耶尔也身受重伤离开了人间。萨热的尔因悲伤和悔恨自己错借妖火而去世。据说从此以后，裕固人结婚时，须燃两堆火，新娘从中间走过，新郎须手持弓箭射向新娘，以示驱妖。

原始信仰“汗点格尔”

“汗点格尔”是裕固族人民过去所敬奉的神，其象征物是一条细毛绳，上面缠有各种牲畜的毛穗和各色布条，下端是一个小白布袋，内装五谷杂粮。解放前，不论是讲东部裕固语还是讲西部裕固语的裕固人，都有对汗点格尔的原始崇拜。

“汗点格尔”在裕固语中原意是“上面”，引申意为“上苍、天”，“汗”即“可汗”，“汗点格尔”意即“天可汗”。敬汗点格尔的仪式由专门神职人员主持，裕固语称其为“艾勒哲 ”，意为来往于人与神灵之间的“使者”，汉语称其为师公子（巫师）。担任此职者均为男性。艾勒哲衣着同于平常人，只是留着长发辫，上缠许多绿、白、蓝色布条，平时盘在头上，不梳洗头发，每年农历除夕才梳理一次。艾勒哲平日参加劳动，也信仰藏传佛教。

请艾勒哲敬汗点格尔的活动，一般每年两次。一次在正月初开始，每家必须请，一家一天，直轮到二月初。一次在立秋之后，但不是每家都举行祭典。正月敬汗点格尔的活动比较隆重，仪式是：地上铺一毯子，上摆九堆粮食，每堆粮食上放一盏神灯（酥油灯），灯上缠绿、白、蓝三色布条。毯子上方摆一小方桌，上供一神杆座（用芨芨草扎成一草墩子），中插缠着羊毛和各色布条的神杆（柳枝），神杆的多寡，视各家家长的地位而定，但须是单数。祭典时，点燃神灯，牵过一只肥壮的公绵羊（禁用山羊），由专请的人或艾勒哲一刀刺入羊腹，立即伸手掏出羊心，揪断大动脉，名

为“攥心羊”。然后，将羊头割下，连同跳动的羊心一起置于盘中，献于九杆一座之间。随后用开水烫羊、刮毛、洗净，用酥油涂于羊脊背、四肢等处，取一半羊毛塞入神杆座中间。将羊的后半截肉切碎、煮熟，连同牛奶放在大盘中。接着开始祭典活动。只听艾勒哲口中念念有词，绕着地毯、小方桌供品转圈子，同时用祭品勺舀肉、奶等，通过天窗向天空洒祭。几个助手随声附和，重复艾勒哲所念经文。其内容主要是赞颂苍天和诸神，请其享用祭品，祈求神灵赐福，保佑人畜平安。艾勒哲念经毕，随即将神灯推倒，根据灯花预卜该家一年中的吉凶祸福。若祸事临头，艾勒哲则告诫主人在某月某日请喇嘛念经消灾。祭典后第二日晨由家人将神杆上座送往本家族中的固定地方。七天后将神杆座所插神杆的羊毛和各色布条取回包好，敬供在神龛上方，翌年继续使用。羊心、肝、肺、前肋在仪式完毕后送与艾勒哲作酬谢，羊头由家人分享。羊骨头不得乱扔，要送到艾勒哲指定的地方。立秋以后的祭典比较简单，不点灯，只在盘子中盛些奶水，宰一只绵羊。艾勒哲在念经后，用芨芨草编的小扫帚蘸着盘中的奶水四处散洒，祈福祛灾。每逢转移牧场搬迁帐房时，要用一条干净的毯子把汗点格尔包好，暂时放到一个高而洁净的地方。驮子搭好后，放到驮子最上面。到了目的地仍须将汗点格尔暂放在高处，帐房扎好后，先将汗点格尔供奉在帐房内的上方右侧，然后才能搬其他东西。

到裕固人家做客，不能持枪枝、弹药、牧鞭、生皮、生肉进入帐房，据说汗点格尔不喜欢这些东西，并忌讳俗人穿红衣、骑红马走近帐房。

敬客双杯酒

向客人一次敬双杯酒，是裕固族民间礼俗。裕固族待客先献

茶，后敬酒，最后是抓肉。他们所敬之酒，是一种用青稞酿成的度数很低的白酒，即青稞酒。敬酒时，一敬就是双杯。主人端来酒具，双手捧杯至客人面前，如果客人只喝一杯，主人会劝饮说："你是双脚进，不是单脚进来的，必须喝双杯。"待客人将双杯酒饮尽，再如此敬上双杯酒。男主人敬过酒，女主人敬，主人家有几口人，都要依次一一向客人敬酒。如果客人只喝男主人敬的酒，女主人会说："你瞧不起女人。"只喝老年人敬的酒，小伙子又会说："你看不起年轻人。"有的时候，他们还唱着祝酒歌来敬酒，唱一支歌，敬一次双杯酒。

当然，客人实在不能饮酒，只要主人家的心尽到了，不喝也可以。裕固族人待人忠厚、诚实，讨厌虚情假意，客人必须以诚相待，尊重其风俗习惯。如果第一次在牧民家里作客不诚实，下次再来时，决不会受到热情礼遇。

羊背子

赠羊背子，是裕固族民间礼俗。每逢较大的喜庆之事，裕固人都要互相祝贺。客人来时带上洁白的哈达献给主人，主人家用丰盛的酒席招待客人。席间，主人需给客人送羊背子，并回献每个客人一条哈达。所谓"背子"，即将一只新宰的羊，整只或将羊头割下，羊身辟作两半一起煮熟，然后分成若干份，每一份称为一个背子。主人要根据客人的身份、社会地位、与自己的关系，将背子分为头背、二背、三背等不同的等级，分别赠送。宰一只羊，除羊巴骨（小腿）不做背子外，共分十二个背子：羊臀尖是头背子，享受这个背子的是地方上有声望的人，或是上面下来的干部，或是舅舅等长辈至亲，过去，对大头目、活佛的回赠，还要在头背子上放羊头，是谓"全羊"；羊头是二背子，赠给有威望的老人；

羊胸岔是三背子，给一般亲友和宾客；羊前胸的四根肋条是四背子；羊前胸中间的六根肋条是五背子；羊软腰的三根肋条是六背子；羊左胯骨是七背子；羊右胯骨是八背子；羊左大腿是九背子；羊右大腿是十背子；羊左前腿胡郎板是十一背子；羊右前腿胡郎板是十二背子。每一个客人都可以得到主人一份羊背子，每份羊背子都凝结着主人的深情厚意。给客人回赠羊背子时，主人是非常讲究而又慎重的，并要根据每个客人的身份辈数，分别说上一段祝愿、感谢的话语。客人收到羊背子后，当场不能吃，因为这是给客人走时带回去的礼物，以便客人回家后，全家老小也能共享这份情意。

婴儿剃头礼

为婴儿举行剃头礼，是裕固族重要的人生礼俗。一个婴儿呱呱坠地，便给裕固族家庭带来了无限的喜悦。等孩子长到一岁或三岁时，全家人就为孩子的剃头仪式忙碌起来。裕固人认为，娃娃剃头才能成人，才能长命。在剃头仪式举行之前，孩子的父母要请喇嘛或家里的老人选定吉日良辰，一般认为初一、十五是吉庆的日子，多在午时进行。同时准备好剃头时用的剪刀、盘子、酥油等。

举行剃头仪式的日子到了，家里像过节一样洋溢着欢乐、喜庆的气氛，给娃娃穿上新衣，打扮得十分漂亮、可爱。亲戚朋友或步行或骑马，带着送给孩子的礼物，如舅舅家送一匹三岁的小马驹，或一头两岁的小牛犊，络绎不绝地来到主人家里。剃头仪式开始时，先由婴儿的母亲领着或抱着娃娃来到舅舅或年纪最大的长辈面前，其后另有一个人端着放有剪刀、奶子和酥油的盘子，也跟着来到舅舅的面前，请舅舅为婴儿开第一剪。这时，舅舅一

手爱抚着娃娃的头发，口里说着“给你个金马驹，给你头白奶牛，快快长大成人”，一手用剪刀（男孩从左边，女孩从右边）剪下一绺头发放在盘子里，然后用手指蘸些酥油，点在孩子的额头上，再抹到孩子的嘴里。随后，客人们依次各剪一剪，剪的方式是先剪左右两边，再剪中间和后边。舅舅和客人在给婴儿剪发时，要对婴儿唱祝福歌。

客人们全部剪完后，由舅舅将孩子的头发剃光，但要在娃娃的头顶前面留下一绺头发，意思是留给未到的客人来剪。至此，剃头仪式结束，主人盛宴款待来客。

马驹剪鬃仪式

给马驹剪鬃，是裕固族牧民重要的生产习俗。对于逐水草而游牧的裕固族来说，牲畜犹如命根子一样，十分宝贵。哪家牧民家里降生了一匹小马驹，欢乐便充满了这家帐房。全家人对小马驹视若掌上明珠，爱护备至。经过精心饲养，细心护理，小马驹健壮地长到一周岁，需要进行剪鬃的时候，马驹的主人就要为它举行隆重的首次剪鬃仪式。先是由主人选定剪鬃的日子（一般为农历四月十一日）后，请来亲朋邻友，给马驹剪鬃作准备。剪鬃时，先准备一个小盘，用炒面疙瘩在小盘中间垒一个五至七层的小塔，上面浇酥油，表示既有中心，又有四面八方。再备一把锋利的剪刀，系上30厘米长的白哈达。届时，由两个人牵来马驹，主人请客人中的能手操剪刀，给马驹剪鬃毛，被请的人互相谦让一番，最后一位既会剪鬃又会唱歌的人，一面唱《剪鬃歌》，一面在马驹的鬃毛上抹酥油。开剪时，先剪一绺拿进帐房，献给所崇敬的神。其他客人也跟着边剪边唱《剪鬃歌》。

剪下的鬃毛，主人要收起来留作纪念。剪完鬃毛，主人要款

待客人；客人们借酒助兴，赞美主人家有了这样的骏马，今后一定会骡马成群，牛羊满圈等。待完客以后，主人便骑上马驹在草原跑几趟，表示马驹已经长大。

●京　族

京族人口为18,915人（1990年统计），主要分布于广西壮族自治区防城的山心、万尾、巫头三岛，少数散居于恒望、谭吉、红坎、竹山等地。

京族自称“京”。京族有自己的语言，语言系属未定，大多使用汉字。

京族主要信仰道教，并混有佛教和巫术色彩。

认　亲

京族青年男女订婚之后，男青年要由“带中”（京语，即能说会道的人）带到女方家认亲。认亲自始至终以歌代言。男方一到女家，女家便由邀请的歌手一边唱歌，一边向宾客献槟榔、香菜等象征美好幸福的物品。这样，赛歌就开始了。歌手们每唱一支，男方就要和一首，你来我往，场面十分热烈。为了试探男方的才智，女方的歌手们一边唱歌，还一边用一些预设的麻烦（如在饭碗里放一只竹篾圈圈，或递一双一触即断的用纸粘接的假筷子）来戏弄对方。因此，男方不仅要对歌，还要解决遇到的麻烦。如果男青年应付不过来，就会引起哄堂大笑，陷入窘态。在这种情况下，认亲的成败与否，“带中”是个关键人物。他要充分发挥自己的特长，为男青年圆场解围。大家尽情地嬉戏、唱闹，直到凌晨鸡叫时，认亲方告结束。

踢沙和撒木叶

京族男女青年的恋爱是自由的，他们以歌为媒，以物寄情，在欢乐的交往中，自由地选择如意佳偶。每逢喜庆节日，特别是在过哈节时，青年男女成群结队，欢聚在一起，来到海边沙滩或丛林间，以歌代言倾诉自己的爱慕感情。京族居住的三岛，原是冲积岛屿，岛边浮沙连绵，放眼一片平平沙滩，有人写诗描述这里的景致：“风起沙飞不见天，水来沙走不见田”，为了挡风固沙，京族人民自古以来就注意广植防风林带。沙和林是京族三岛上特有的风貌景观，也形成了青年男女试情的“踢沙”和“撒木叶”两种特有的交往方式。在男女聚会过程中，如果有一小伙子看中了

某一姑娘，便悄悄设法靠近姑娘身边，用脚尖将沙滩上的沙粒撩向姑娘身上；若在丛林中交往，小伙子则折来一树枝，将上边的叶子撕成碎片，撒到姑娘身上。若是姑娘不愿意，便不理对方并走开；若是有意，就照样用脚尖撩起沙粒踢向对方，或者照旧折下树枝，撕碎叶子撒到小伙子身上。一对有情人就这样用朴素的方式表达彼此心意，然后坐在沙滩上，或伫立丛林间，用绵绵情歌抒发自己的情怀。

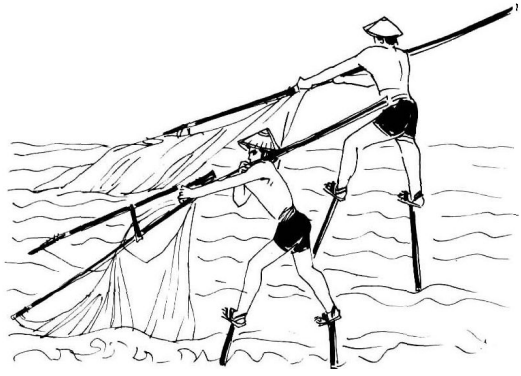
青年男女表诉了愿结终身之好的心愿后，互赠的定情信物也很特殊。过去是送描有花草的彩色木屐，送时不能直接送给对方，男女要分别请一位“蓝梅”（京语为牵引情丝的人），并各自编好一首定情歌，由“蓝梅”把歌和木屐一起传送给对方。两只彩色木屐要左右有别，正好合为一双时，这对情侣才算定情，否则就说明这对男女无缘成双。实际上，热恋中的男女每个人该送哪只脚的木屐早已商定，递送来的木屐配不成对的几乎是不存在的。双双彩色木屐与曲曲美好的定情歌，促成了对对情侣的幸福结合。互赠木屐配对之后，男女两家便择定佳期进行“联亲”。

踩高跷与游水捉鸭

每年秋季到来，京族居住的北部湾浅海里便出现一群群海虾，这个季节一到，当地的京族人便兴高采烈地扛着捕虾工具虾罗下到浅海里捕虾。大约100多年前，京族人就有利用踩高跷的办法下海捞虾的习俗了。踩高跷为了升高身体的位置，捕虾时方便操作。因为踩高跷不仅要在平地上行走，还要在海滩及海水里行走，需要掌握一定的技术，不是什么人都可以做到的。后来这种捕虾活动逐渐演化成本民族的体育运动，即参赛人在两脚下各缚上一条80厘米至1米左右高的木柱在海滩或平地上行走，以行走平稳

而速度又快为优胜。比赛分接力赛和竞速两种：接力赛是三人以上组成若干个比赛队（每队人数必须相等，每队有多少人赛前确定），两队均以一路纵队站在同一起点线上。当听到信号发出，便同时向前行走30米左右，然后绕过标志竿再向后返回原出发地，由第二人接力按同样路线再向前走，然后绕回，直到本队最后一人走完，看哪个队最先走完全程而不犯规便为胜队。有时，参赛队员还要负重行走，如背着自行车行进，就更增加了比赛难度。竞速是两队或两人一组参赛，在一定距离上进行直线行走，谁最先到达终点为胜。

京族男女生长在海滨，自小都擅长游泳潜水，所以本民族中还保留着一种独特的游水捉鸭比赛项目。每年夏秋两季，京族人便把鸭子放入河塘或海滩水域里。参赛人数不等，当比赛号令一下，站在同一距离的参赛者同时下水捉鸭，场面异常热烈。参赛者在水中翻滚，争先恐后地追逐，鸭子被赶得张翅乱飞，无处躲藏，站在水边的旁观助兴者也呐喊助威，笑闹不停。直到最后裁判发出停止信号，大家才安静下来。看谁捉的鸭子最多，谁就是优胜者。参加这项比赛的人要有娴熟的游泳潜水技术和强壮的体力，优胜者会受到全村人的尊敬和奖励。



渔　箔

渔箔是京族大型近海捕鱼设施，已有200多年历史。它选择地势倾斜、水流较急的滩窿、滩沟，以宽约10厘米的木条，沿窿沟水流两旁，像漏斗一样，分两行一直插到海边最低潮线处；并以小竹、竹篾或山藤绕结相连，形成两条栅栏似的篱沟，约250米长。这两条篱沟伸到海边形成一个由大而小的漏斗尖口（宽约3米）。再以竹片和木条编织三个依次由大到小的鱼室，与两条篱沟的漏斗互相衔接。每个鱼室的入口处都组装有鱼虾能进不能出的笼须。潮水涨起时，海水将渔箔全部覆盖，鱼虾随水闯进渔箔遨游。水紧浪急，篱沟的木条呼呼摇晃，鱼虾在其间随波逃命。最后潮止浪宁，它们窜入层层鱼室之中，渔民便驾着竹筏、小舟用网罩捕鱼。每所渔箔产量少则数千公斤，多达一万多公斤。一所渔箔约需大小木条一两万条，竹子数百根，藤两三千条，投资巨大。过去，渔民常合伙向箔王租用，解放后由国家扶植，渔民互助建设渔箔。

嘎古集团

嘎古，京语，即老人；嘎古集团即由乡村内有名望的老人组成的社会组织。嘎古集团推选具有说话办事能力和文化知识以及为人公正的人担任“翁村”（相当于村长），负责处理村内发生的事端及村外交际，筹办哈节，执行祭祀仪式，召集村内会议，宣读乡村公约等，任期三年。任职期间，嘎古集团抽出一些公田或公有渔箔归他管理作为报酬。嘎古集团管理公田，公有山林和渔箔。村中重大事情由嘎古集团讨论决定后交翁村执行。翁村处理

不了的事情，交嘎古集团处理。嘎古集团还推选“翁模”（专管哈亭烧香）、“翁宽”（看管山林）、“翁得”（负责观音庙烧香）、“翁记”（负责宗教活动和收支帐目），协助翁村办理村里的公共事务。

祭海神

京族是居住在海岛上以渔业为主的民族，男子出海打鱼，妇女扒螺、出售海产品，都离不开海，所信奉的神也大多与海有关，如“海龙王”、“镇海大王”、“海公”、“海婆”等等。生产生活中每遇到大事，都要祭祀海神，以保人丁平安，渔业丰收。过去京族捕鱼，工具简陋，缺乏科学知识，加上海上风云莫测，出海打鱼人身安全无保障，因此，都寄托在神灵的保护上。如新鱼网刚织好，新船刚造好，在没有下水前，或者捕鱼季节的开始和结束，都要准备好祭品前往海边祭海神。这些祭祀活动，都不请执行法事的法师去作道场，只是各个家庭自己备好祭品去海边举行祭祀仪式。若是某一个家庭出海捕鱼没有收获或在海上遇上风险，这时就必须请法师作道场。届时，法师手持一根火把，嘴里含口生食油，一边作法，一边喷油，叫做“过油获”，京族人认为只有这样才能驱除野神，出海顺利，捕鱼也才能获得丰收。有的地方京族人为了祈祷渔家交好运，借“唱哈节”的那一天，全村男女老幼齐集哈亭举行迎神、祭神活动，过程是：在“唱哈节”的前一天，人们将他们信仰的海神，如万尾的护岛神“镇海大王”接入哈亭供起来。在迎神后的当天下午三点左右开始祭祀。祭祀仪式是由主祭者读祭文，然后再由陪祭、礼生、执事等各尽其职。祭神结束三天后，唱哈活动也告一段落，接着便是送神。万尾送“镇海大王”海神，必须选定吉日才能送，否则，认为是对海神的不敬不诚。还有的地方每年在农历十二月二十四到二十八这些天，举

行“做晚年福”的活动，这也都是向海神祈求护佑出海人顺利平安，渔业丰收。近几十年来，由于京族人民普遍学到了科学知识，掌握了先进的生产技能和比较现代化的捕鱼工具，渔业生产有了显著的提高，对大自然的依赖和迷信减少了，祭海神的活动和风俗也不容易见到了。

哈　节

“哈”，京语，即吃或唱歌；“哈节”即乡饮节或唱歌节。它是兼有祀神、祭祖、乡饮、文娱四项活动内容的节日，流行于广西防城京族地区。哈节举行的日期各地不同，巫尾、巫头两村在农历六月初十，山心村在八月初十，红坎村在正月十五。各村都建有“哈亭”，哈亭兼神庙、祖祠、乡饮堂、音乐观赏厅四重作用。其正堂内，供奉镇海大王等护岛神，筑有三级顺次高低的木板台级，成年男子按年龄长幼和捐款多少分高低入座参加乡饮和听歌。对于哈节的来历，有这样一则传说：古代蜈蚣精危害过往船只，镇海大王诛妖，蜈蚣精尸碎三段，化作为巫头、山心、巫尾三岛，京族人把镇海大王奉为护岛神，于哈节祀之，祈祝海上平安、渔业丰收。节日活动程序包括：(1) 迎神。人们结队举旗掌伞抬着神座到海边，朝向白尾半岛镇海大王庙遥遥迎神入哈亭。(2) 祭神。跳《天灯舞》、《舞花棍》等舞蹈。(3) 乡饮、听歌，共活动三天。成年男子入观赏厅，妇女儿童在哈亭外听歌。(4) 送神。其主要内容是“唱哈”，即由哈哥一人奏乐器，哈妹二个轮流主唱和伴唱。所唱内容有几种：民间宗教信仰诗，借助神灵对族人进行道德规范教育；京族传说故事和民间叙事诗，如《斩龙传》、《琴仙》、《十三哥卖鬼》、《宋珍陈菊花》、《金桃姑娘》、《刘平杨礼结义》等；汉族古典诗，如白居易的《琵琶行》、苏轼的《念奴娇·赤壁怀

古》等，译成京语用京曲唱；哲理诗，如《京汉结义歌》；情歌，哈妹、哈哥在哈亭中唱，青年男女自由在哈亭外唱。此外，哈节还进行斗牛活动等。

跳天灯

跳天灯是京族唱哈节中娱神、娱人的舞蹈形式。它由4个、6个或8个女青年表演。舞蹈者身穿白衣衫、黑长裤，头扎紫色头带，头上顶一只底部朝上的大碗，大碗上放一只碟子，碟子上竖立着三支点燃的蜡烛（俗称“天灯”），双手还各拿一只酒杯，酒杯里也竖立一支点燃的蜡烛（俗称“手灯”）。舞蹈时双手托灯弯曲在胸前，右手在上，左手在下，成圆形绕动，并不时地向前进或后退，或左右互换位置，因而构成各种优美的动作，烛火与白衣交相辉映，显得十分优雅。舞蹈者还边跳边唱：“月下是谁顶灯？顺水行舟为桨停？喜时上埠神游，愁时我弹一两次琴。”一首歌曲与一首鼓曲交替进行，不断重复演唱，旋律抒情、婉转。

独弦琴

独弦琴，又名匏琴，京族乐器，流行于广西防城。以半个大竹筒（或长方形木匣）作琴身，长约80厘米，一端插上一根小圆木与琴身成直角；另一端安一个把手系一条琴弦，连接于小圆木上。奏时，用一枚小竹片拨弦线，弹出乐曲，音调丰富，音色柔和缠绵，曲音清雅，娓娓动听。此琴来历，京族民间有多种传说。其一，阮通和石生是一对义兄弟。石生在乌鸦精的枯井洞救出公主，让她坐吊箩上到地面。阮通则在上面抛石填井，公主因此急哑。石生在井底救出龙子，龙子请他到龙宫，龙王酬以独弦琴。石

生找到阮通去官府论理，被关进水牢，只好在牢中弹琴解忧。琴声传到公主耳里，哑症不药而愈，偕父王循琴声寻到阮府水牢，救出石生，惩办阮通。石生与公主结为终生伴侣，丁丁冬冬弹起琴，龙宫独弦琴于是传到了人间。其二，张元与阮氏芳新婚第二天，张元被抓从军，十年不归。阮氏芳与婆婆渡海寻找张元，在深山遇贼，一双眼珠被挖。仙姑赠独弦琴，教算命寻夫。阮氏芳弹琴算命寻夫，张元回朝当了大官，返乡途中闻琴声，请她算命。阮氏芳听出丈夫语音，奏独弦琴算命，说："你叫张元，海边人，家有慈母贤妻。十年前被迫从军，十年后封官，如今正想回家。"张元认出妻子、母亲，阮氏芳却要他拿出十年前离家时所赠两颗珍珠，张元撕开衣角取出珍珠，阮氏芳接过，珍珠滚进眼眶里，重见光明，全家团圆。仙家独弦琴传入京家。其三，美丽善歌的哈妹征婚，谁所造琴新奇而奏得最好便嫁给谁。后生们各自造月琴、二胡、天琴等等，都不中哈妹的意。有个后生拿出一个谁都没见过的琴弹奏，讲出它的来历：一个孤儿为一个白发老人潜入湖底取出宝葫芦塞，老人授剑。孤儿受老人指引，上山斩山魈，砍得神木及其所结匏瓜。白发老人叫孤儿将匏瓜子撒向四方，大地长出牧草、森林、庄稼，众人得到幸福。老人又叫孤儿救司雨龙。龙被天帝石锁锁于海底，人血涂剑才能解救。孤儿剑砍自身，鲜血染剑，救出龙王。龙王按孤儿要求年年下及时雨，并酬一根龙须。白发老人教孤儿以神木、匏瓜壳和龙须制独弦琴，教乐曲，回京族三岛与众人同乐。哈妹与琴哥终于结为伉俪。独弦琴琴曲有《高山流水》、《骑马》、《静静的大海》、《做海歌》、《送迎新郎新娘歌》、《槟榔歌》、《饮茶歌》等，在婚礼或月夜纳凉时演奏。独弦琴弹奏出的曲子多带装饰音和长颤音，因而特别委婉凄绝，悦耳动人。

●塔塔尔族

塔塔尔族人口为4,873人(1990年统计),主要分布于新疆维吾尔自治区的伊宁、塔城、阿尔泰、昌吉、乌鲁木齐等地。

塔塔尔族史称“达怛”、“鞑靼”、“达达”,系不同译名。解放后,根据本民族人民的意愿,以“塔塔尔”作为族称。

塔塔尔族有自己的语言文字。塔塔尔语属阿尔泰语系突厥语族西匈语支;文字系以阿拉伯字母为基础的拼音文字。由于长期与维吾尔族、哈萨克族共处,现多使用维吾尔文和哈萨克文。

塔塔尔族信奉伊斯兰教。

服　饰

塔塔尔族的服饰很有特点，十分别致。无论男女老幼，通常都喜欢穿绣花白衬衣，在衬衣的领口、袖口、胸前都绣有十字等几何图案的花纹，色彩和谐而美观，在白色的衬衣上，再套一件黑线紧身短背心。这种黑白两色的强烈反差搭配，在男子的服饰上更为普遍。男子除了衣服是这样，帽子也喜欢戴黑白色的绣花小帽，冬季则戴一种用羊羔皮做的黑色卷毛皮帽，显得潇洒、英俊。

塔塔尔族妇女的服饰艳丽而大方。通常穿连衣裙，多为白、黄、紫红等颜色，素雅中透示着鲜艳。也喜欢穿一种镶有半绉边的长裙，更富民族特色。头戴镶有各色珠子的花帽，配以金、银等各种质地的耳坠、项链、戒指、手镯等不可缺少的装饰品，伴以热情、爽朗的性格，更显得楚楚动人。

刺绣是塔塔尔族妇女最擅长的本领之一。她们灵巧的双手，不仅在各种服饰上绣出令人赏心悦目的花纹，同时，还在枕头、被褥、床围、墙围、桌布、窗帘等室内物品上绣出多姿多彩的图案。姑娘出嫁时的婚礼服，更是她们显露自己才能与智慧的“用武之地”，一方方图案，一朵朵花卉，无不表达着姑娘温顺、善良的性格和对新生活的美好希望与追求。塔塔尔族的小伙子们通常也都是以姑娘刺绣技艺的水平来作为择偶标准的，但无一例外的都会被姑娘们高超的本领所折服。

塔塔尔族食品

塔塔尔族的食品种类很多，平日的主食主要有烤馕、抓饭、拌

面、馅饼等，副食有牛羊肉和土豆、西红柿、黄瓜、元白菜等蔬菜。饮料除茶外，多为牛奶、羊奶和马奶。每当喜庆节日或宾客临门时，人们总要拿出最好的食品和饮料招待，其中最富民族特色、最受青睐的是食品“古拜底埃”和饮料“克尔西玛”。“古拜底埃”是一种用大米做的烤饼，它的制做方法是：先将大米洗净、晒干，倒入一个金属器皿中，大米上面复以奶油，撒上杏干、葡萄干等各种果品，然后置于火炉中烘烤而成。这种烤熟后的米饼，吃起来外皮酥脆，内里松软，香甜可口。还有一种做法与之完全相同的风味烤饼，叫“伊特白里西”，只是原料稍有变化，它是以南瓜为主，再加大米和肉。“克尔西玛”是一种用蜂蜜发酵制成的饮料，类似啤酒，喝起来清凉甜润，醇香提神。它与用野葡萄酿成的另一种称为“克赛勒”的低度酒一起，是塔塔尔人自制的喜庆节日宴饮待客最受欢迎的饮料。

建筑工艺

塔塔尔族的工艺美术品制作，种类繁多，技艺高超，闻名遐迩。而其中的建筑艺术，更是一枝独秀，具有独特的民族风格。

彩绘和镂刻，在塔塔尔族的建筑工艺中，应用得十分广泛，尤其是清真寺建筑，它的大门、横梁、柱子和木制天花板都有彩绘装饰。用单线平涂彩绘，以天蓝色为底色，按图案要求，使用各种颜色，色彩对比强烈，艳丽而醒目。彩绘图案取材于各种花卉，且以对称、交错、并列、循环等多种手法构成。寺院建筑的门扇、门框、窗框、窗扇等，大都有精美的雕刻。雕刻样式多是两方或四方连续的花纹样几何图案，结构极为复杂。其中的花卉，大多涂染为白色或红色的鲜花，在天蓝色、浅绿色等底色的衬托下，显得光彩夺目。此外，还有镶嵌在门窗、柱子、天棚上的拼接花草，

是用本色木条，按花草纹样和几何图案拼接而成，再涂以油彩。这种雕花装饰，表现了一种淳朴自然的审美观念。

新疆乌鲁木齐市的“奴格伊麦斯奇提”清真寺（俗称南梁清真寺），是塔塔尔族寺院建筑风格的典型代表作。它别致的拱门、穹隆、塔楼和栅栏构成了外部的轮廓特点。室内装饰艺术主要体现于梁、柱、门、窗、天花板的精美雕刻与彩画。尤其是寺内的神龛——“麦合拉甫”和阿訇讲经用的木制楼梯形高座——“明拜尔”，更是一种繁复华丽、金碧辉煌的塔塔尔族建筑艺术佳作。

婚　礼

塔塔尔族婚礼别致有趣。按照传统习惯，婚礼在男女双方家长同意订婚之后一两个星期内即可举行。结婚前几天，男方要把为新娘制做的全部服装、炊具、屋内陈设和婚礼时所需的糖果、糕点、肉类食品等送到新娘家，同时，还要送上一份专赠新娘父母的丰厚礼物。结婚之日的傍晚，新郎在一群伴郎的陪同下，驾着马车，吹着木箫，拉着提琴、手风琴，唱着欢快的歌曲前往新娘家。到达之后，先要绕着院落转一圈才能到门前。这时，新娘家大门紧闭，新郎一行要立即献上礼物才会被开门放进。接着，新郎进屋、吃饭以及到床前，都要一一送上喜钱。

结婚仪式按伊斯兰教教规进行，由宗教职业者主持。先由阿訇诵《古兰经》，并向站在两边的新郎新娘询问是否愿意与对方成婚，待双方回答“愿意”之后，便端上一杯糖水或蜜水，让新郎新娘共饮，象征夫妻生活和睦、甜蜜，白头偕老。仪式结束即入洞房。次日清晨，新郎要先拜见岳父母，然后返回自己家中设宴待客，并举行各种文娱活动。晚上再回到新娘家。婚后，双方共同在女家住一段时间，有的要住到第一个孩子出生后才能共同返

回夫家。当新婚夫妇一同回到夫家时，男方亲友用绳子拦住新娘，待得到糖果，方可放行。进到屋里，人们要向新娘身上撒糖果，接着举行宴会，招待邻友亲朋，人们载歌载舞，尽情欢乐，全部婚礼仪式至此才告结束。

葬　俗

塔塔尔族信仰伊斯兰教，丧葬习俗深受伊斯兰教教规影响。当人将临终时，要请阿訇念经。人死之后要立即用温水净身，缠以白布，尸体上再放置一把刀和一块石头，上面蒙以白布单，头高脚低地停放在屋内的阴凉处。一般是尽快埋葬，最迟也只能延长到第二天。死者家属不能大声嚎哭，但要戴孝，形式是：妇女披白色头巾，男子戴白色小帽，帽上复以黑纱或是左臂戴黑布。送葬前要作“吉那孜乃孜尔”。“吉那孜”是指清真寺内专置的一种抬尸的木架，“乃孜尔”就是指将尸体放上抬尸架之后举行的一次替死者祝福祈祷的仪式。死者若是男性，就在“吉那孜”上放一块白布，死者若是女性，则在“吉那孜”上放一条毛巾。尸体往屋外抬时，要脚在前，头在后，待抬出门外，便调转方向，头朝前行。抬到墓地的尸体，要以头北、脚南、面西的形式放在地上，由阿訇带领全体送丧者进行诵经等祈祷仪式。祈祷结束，每个送丧者都从地上抓一把土，口诵一句自己最熟悉的古兰经经文，把手中的土交由一专人收集起来，放在死者的胸上，然后才将尸体下葬到一个长深各两米、宽一米的坑中，用土掩埋，上面做一个圆形坟堆，前后立以石碑。

摇篮礼和40份水礼

在塔塔尔族传统的生命礼仪中，摇篮礼与40份水礼是两个古老而又颇具特色的重要礼仪。

塔塔尔族把孩子的降生视为家庭以及亲朋邻友中的一件特大喜事。按照传统习惯，除了大家都要前来祝贺、送礼之外，还要举行一系列的礼仪活动。比如，孩子出生后的第3天要举行命名礼，传统的方法是由宗教职业者帮助从伊斯兰教经典中取一经名作为本名，待成年后，在自己本名之后加上父亲的名字，然后再加上自己所在部落的名字，以构成个人的全名。孩子出生后第7天，要举行摇篮礼，它是由外祖母将事先做好的一个婴儿的摇篮，以及一些衣物、食品一并送给襁褓中的外孙或外孙女，以表示母亲的家族对孩子成长的关怀之情。第40天，要举行40份水礼。这一天，孩子的父母、家人纷纷出动，先后要从40个不同的地方（包括邻居家）取回干净的清水汇积在浴盆里来给孩子洗澡。塔塔尔族认为，孩子沐浴了四方之水，以后就能够具备适应各种生活环境的能力，就会健康地成长。摇篮礼与40份水礼充分体现了塔塔尔民族对新生婴儿无限爱护与关怀之情，同时，也反映了人们对自己民族兴旺发达的责任感与殷切之情。

撒班节

塔塔尔族的撒班节也叫犁头节或春耕节，时间在春耕之前，是为迎接春耕而举行的，亦是全民族一年一度的盛会。地点大多选择在山坡、河边等风景优美的地方。届时，不论是居住在山乡、牧区还是城镇的塔塔尔族群众，都要把自己打扮一新：男人们总喜欢穿上传统的宽袖、直领绣花白衬衫，外加一件黑色齐腰短坎肩，或穿黑色对襟长外衣，配上一条漂亮腰带（城里人系皮带，乡下人多系布带），下穿黑色长裤，脚蹬长筒皮靴，头戴黑色或红、绿色绣花小帽；妇女们则身着以白色、黄色或酱色为主的宽身、皱边、窄袖口连衣裙，下穿宽大紧口长裤，脚蹬高筒皮靴或称为“喀以喀”的花皮鞋，头上有的喜欢戴镶有珍珠的小花帽，有的系一条漂亮的花头巾，饰以耳环、项链、手镯、戒指以及领口上的别针等。年轻妇女还要在两条长辫子上缀饰一些闪闪发光的特制小形金属牌或旧银币。人们打扮完毕，前往聚汇时，家家还都要带上自制的“古拜底埃”、“伊特白里西”等各种点心和“克尔西玛”、“克赛勒”等各种饮料，同时，也不忘带上木箫、口琴、七弦琴、提琴、手风琴等各种乐器。当到达聚汇地点后，大家首先互相祝贺节日，接着便开展游玩、聚餐或进行歌舞、拔河、摔跤、赛马、爬杆、“赛跳跑”等各种传统文体娱乐活动，直至傍晚，尽兴方归。

民间舞蹈

塔塔尔族是个能歌善舞的民族，其舞蹈艺术，历史悠久，颇负盛名。近代以来，又与音乐、诗歌融为一体，使传统的舞蹈艺

术又有了新发展，新内容。

塔塔尔族民间舞蹈很多，一般可分为劳作歌舞、节庆歌舞、婚礼歌舞和模拟歌舞等形式。

劳作歌舞主要有《农耕舞》、《放牧舞》、《打猎舞》等，它们都是从不同的角度，反映了塔塔尔人民在生产斗争中的勤劳、智慧和乐观、豁达的民族性格。

节庆歌舞主要是跳一种令人眼花缭乱的《踢踏舞》，它节奏鲜明，欢快热烈，与俄罗斯民间的踢踏舞很相似。其基本动作特点是点脚尖，擦脚。男子双手插腰，两腿反复伸屈，上下跳动；女子摆动双臂，大幅度旋转，可男女双人跳，也可多人共舞。

婚礼歌舞也形式多样，其中年轻人最爱跳的是《艾皮拍》。《艾皮拍》的音乐节奏鲜明，悦耳动听，且结构简捷，旋律较固定。歌舞高潮时，人们往往伴以高声的呼唤和尖锐的口哨声，使婚礼的场面更加热烈、欢快。

模拟舞，是一种模仿某种动物，或人们日常的捕猎、放牧等劳动乃至战斗场景的舞蹈，通过提炼、夸张和美化，使之充分体现出人们抑恶扬善、爱憎分明的感情。脍炙人口的《白天鹅舞》，描绘的便是塔塔尔民族崇尚的白色天鹅，它纯真、美丽，而且性格坚毅，尤其是对爱情自由忠贞不渝的情操，通过舞蹈，给予了充分的表现。它从一个侧面反映了塔塔尔民族高尚的道德观。

赛跳跑和爬杆

塔塔尔族人民聪颖、智慧、豪放、开朗。他们十分擅长以各种有趣的文娱与竞技性体育活动来丰富自己的生活。人们普遍爱好与擅长的文娱活动有戏剧、音乐和歌舞等；竞技体育活动有赛马、摔跤、赛跳跑、爬杆等。在竞技体育活动中，又以赛跳跑和

爬杆最具民族特色，因而也最受广大群众的普遍喜爱。赛跳跑是一种集灵巧、速度、毅力于一身的比赛。参加者口衔一匙，匙内放一鸡蛋，一同站在起跑线上，当发令员一声令下，衔匙者迅速向前跑去，以鸡蛋不落地为准，先跑到终点者为优胜。这一比赛简单、易行，不论男女老少都可以参加，因此也深受人们的喜爱。爬杆也是一项竞技性的娱乐活动。方法是在比赛场地上竖起数根一样高的木杆，每个木杆上都涂以稀释的肥皂，使其十分滑润。参赛者各站在一根木杆下，待发令员一声令下，便立即争相上爬，先到杆顶者为优胜。这个项目的参加者多为青少年男子。参赛者在观众的欢呼声和各自拉拉队的加油声中奋力上爬，由于木杆太滑，十分费力，有的不慎还要向下滑落，引起人们的阵阵的哄笑。整个赛场气氛热烈、紧张、欢快、兴奋。赛跳跑与爬杆这样的竞技游戏大多是在喜庆节日里，与唱歌、跳舞、赛马、摔跤等一并举行。

●独龙族

独龙族人口为5,816人(1990年统计),主要聚居在云南省贡山独龙族怒族自治县的独龙河两岸。

独龙族在汉文史籍中曾被称为“俅人”，自称“独龙”。解放后，根据本民族人民的意愿，定名为独龙族。

独龙族有自己的语言，独龙语属汉藏语系藏缅语族；无本民族文字。

独龙族相信万物有灵，崇拜自然物，如山川、河流、大树、巨石等。

独龙毯

独龙毯是独龙族的象征，独龙人的生活离不开它：白天为衣，夜晚当被。它又是青年男女恋爱的信物，姑娘常把自己织的独龙毯送给小伙子，以示爱慕。独龙毯还可缝成口袋装运粮食，盛放食物。

独龙族织独龙毯的历史较晚，据说，在学会织麻布前，多以树叶、兽皮作衣料，女子用树叶围下体，男子则披兽皮防寒。自从织麻布的技术传入该地区后，织麻布成了女子的主要家务。一般姑娘在10岁左右便开始学习纺织技术。

独龙毯以野生亚麻为原料，以多种植物作染料。先把野麻的皮扯成丝，洗后晒干，捻成线，本色呈白。再用纺锤纺成麻线。然后用各种植物颜料染出各色的麻线。如今，妇女们从商店里购买各种颜色的棉线，与原始的麻线交织，织成色彩鲜艳的独龙毯。

独龙毯的纺织工具，与景颇、佤、德昂、傈僳等族的织机结构大致相同，也称“腰机”。腰机即是将九根木杆插于地上作为机架，各种部件穿上经纬线。织布时，妇女席地而坐，将腰机皮带系在腰部，腰机末端挂在木架上即可。织机由腰机带、梭板、木板、机架等部分组成。

独龙毯是人们馈赠亲朋好友的礼物，亦是独龙族男女的装饰物。男子多用独龙毯披身。由左肩腋下拉向前胸，在右肩上用草绳或针拴结，袒露左肩左臂，前后布片则让其自然披落。

董棕粉

独龙族喜食含有丰富淀粉的野生植物，如野芋头、野山药等。

董棕粉就是其中的一种。相传在远古时候，独龙族的祖先就是靠食董棕粉和野生动物肉过日子。

董棕粉是从一种叫“四维”的董棕树干的芯部撮出来的淀粉。董棕树系热带植物，树身比较高大，生长周期较长。撮淀粉时，先用砍刀从树的根部向上试砍，如见刀刃上沾有粉质的白浆，就从此处下刀放倒大树，把树干砍成若干段，去树皮，再劈成小块，用一石锤砸碎，捣成粉状，用水过滤。等淀粉沉淀、凝固之后，再切成小块，或烧吃，或与其他面粉掺在一起烤粑粑吃。如今，独龙族已不以此为主食，但董棕粉被视为珍稀食品，每逢异乡的客人到来，独龙族人就用董棕粉做成食物招待，以示热情和友好。

长竹楼和藤网桥

独龙人的房舍多建在独龙河两岸陡峻的山坡上。盖房时先在地基上竖数根木桩，然后用竹篾编织成地板或墙壁；屋顶覆盖多层茅草，或铺以木板，绑扎在人字形屋梁上。所有竹和木相接处，均用藤条和竹篾捆扎牢固。人字形屋一端接连山坡，另一端面江，高出地面一二米左右。

独龙族的长竹楼有两种形式，一种称“皆木巴”，意为父亲的房屋。这种房屋由前门入口直通后门出口，过道左侧或右侧隔成若干单间，每间设一个火塘，称单排火塘。另一种长竹楼称“皆木玛”，意为母亲的房屋，这种房屋中间有一条通道，由前门入口直通到后门出口，通道两侧用篱笆隔成若干单间，每间设一个火塘，称双排火塘。由于独龙族习惯数代同居，子女一结婚就须加盖一间，且都连结在一起，随着子女结婚，房屋数也就逐渐增多，所以竹楼越盖越长。有的长竹楼长 20 米，宽 8 米，面积达 150 多平方米。

有的独龙族家庭到80年代后才出现分居制。现在在独龙族地区仍能看到连片同居的竹楼房。

独龙族人分散居住在南北长200多公里，水流湍急的独龙江两岸。藤网桥是独龙族群众往来过渡的重要交通工具。说到独龙江的藤网桥，有一个流传已久的故事：相传很久很久以前，有两个独龙族兄妹，聪明能干，都是织篾编竹的好手。有一次，兄妹俩去担丹力卡雪山为母亲挖贝母治病。当他们来到独龙江边，面对滚滚的江水犯了愁，寻思良久，哥哥决定用龙竹扎成筏子划到对岸，妹妹则要在江上架一座藤网桥，从网桥上过江。两人分头开始行动。哥哥从山上砍来龙竹扎好了竹筏；妹妹从山上砍来藤竹编好了藤索，找好结网用的山藤和铺桥用的金竹，然而却没法将两根藤索拴到江对岸的树干上。这时哥哥划着竹筏把藤索送到对岸拴在树干上，终于架成了藤网桥。

藤网桥的结构古老别致。它以独龙江畔特有的藤竹编结两根藤篾索，平行拴在两岸粗壮的树干或固定的木桩上，再用山上的野藤或竹篾在两边编结成网吊在藤索上，网底铺设比脚掌稍宽的木板或数根并拢的竹竿，供人行走。架设藤网桥是独龙族人生活中的一件大事。每架设好一座藤网桥，人们都要身着节日服装，击皮鼓敲铿锣，载歌载舞以示庆贺。

独龙族身背重物，在藤网桥上行走自若，但外地人要从桥上走到彼岸却非易事。因为用藤网、木板、竹子作材料架设的桥轻便，人踏上桥后，一举足迈步，桥身就抖动摇晃，过桥者只感觉地转天旋，仿佛桥就要飞走一般。加上桥下激流滚滚，白浪滔天，更令人心惊胆颤。此时，一定要镇定自若，双手紧紧抓住藤索，两眼平视对岸，一步一步慢慢地就能走到江的对面。

剽牛祭天日

独龙族一年只有一个节日，即剽牛祭天日，独龙语称“卡雀瓦”或“得里瓦”。卡雀瓦无具体日期，均由各家族的巫师占卜择定。一般在农历腊月间举行，为期三天。

卡雀瓦的第一天，妇女们要把自己新织的彩色独龙毯挂在房顶以示节日来临。夜晚，人们围坐火塘边喝酒互祝吉祥。然后由巫师把木碗抛向悬挂在火塘上的竹架上，碗口朝上为吉，预示来年粮食丰收，人畜兴旺；碗口朝下则为凶。

第二天，人们高唱各种赞颂山神的歌，各家奉献食物祭祀山神，并举行模拟射野兽的活动。

第三天，进行剽牛祭天仪式，这是节日的高潮。剽牛时，先由家族长及巫师把牛从厩内牵出，绕场地一周，妇女们把早已准备好的彩色玻璃珠挂在牛角上，把鲜艳的独龙毯披在牛身上。然后，主祭司牵牛绕牛主人房屋一圈，再把牛拴在早已钉在地上的木桩上，主祭司手握剽枪朝牛身上刺去，以一枪剽死为最好。牛

倒下后，人们击鼓欢舞，主祭司则割下牛头，背在身上和大家一起跳舞。

入夜，人们围坐在熊熊的篝火旁烧食牛肉，继续歌舞，直到东方破晓方才陆续离去。

独龙山寨夜不闭户

独龙族是历史上被誉为不用锁的民族。该民族的生活中，至今还保留着“路不拾遗，夜不闭户”的纯朴遗风。

独龙族社会自古就公认偷盗是最可耻的。因此独龙族人从小就受到以偷盗为极不光彩的教育。

相传100多年前，独龙江四乡有个叫拉瓦多珍的妇女。一天，家里来了客人，她想烧火热酒招待客人，可家里的火种灭了，火镰又被上山打猎的丈夫带走了。出于不得已，她到邻家，取下拦在门上的木棍，开门进去取回火种。不料邻舍的一位妇女看见后，就说她偷了东西。后来，此事逐渐传开，任凭拉瓦多珍怎么解释，也难以消除不良影响。她感到无地自容，遂投河自尽。

又据史书记载，独龙族的传统习惯法中，对偷盗的惩罚极严厉，轻者割耳，重者杀头。若发生偷盗粮食的行为，不仅要查抄全部财产，还要被活活打死。

独龙族人拾到别人的东西，一定设法物归原主，不论翻山过江，路途多远。人们在途中见到任何东西，只在上面压着石头，便知那是有主之物，决不会动的。独龙人若出远门，往返路途遥远，就把所带口粮用小麻布袋装好，挂在路边的大树上或放在岩洞里，返回时再取下煮食。其他过往行人即使饥肠辘辘，也绝不擅自取食。独龙族收玉米时，即在地边修一简易的楼房，俗称“包谷楼”，把收获的玉米储藏在山上过冬，需要时再上山背取。所种的

芋头都在原地过冬，随吃随刨，不用愁有人去偷取。独龙人出门，家门上别两根竹条或木棍，过往行人及邻居一看即知主人不在，决不闯入。远途客人，若到此非用火不可，也可以打开门进去，在主人屋里生火煮饭，但须等主人回来再走，主人绝不怪罪。

●鄂伦春族

鄂伦春族人口为6,953人(1990年统计),主要分布于内蒙古自治区呼伦贝尔盟鄂伦春自治旗、布特哈旗、莫力达瓦达斡尔族自治旗，以及黑龙江省呼玛、逊克、黑河、嘉荫等县、市。

“鄂伦春”这一名称，始见于清初文献记载。“鄂伦春”一词有两个含义，一是“使用驯鹿的人”，一是“山岭上的人”。

鄂伦春族有自己的语言，鄂伦春语属阿尔泰语系满—通古斯语族通古斯语支；无本民族文字，一般通用汉文。

鄂伦春族宗教信仰是多神的萨满教，其中自然崇拜、祖先崇拜和巫术交织在一起。

狍皮衣饰

鄂伦春族为了适应寒冷的气候和游猎生活，创造了独具特色的狍皮服装。冬季狍皮是绒毛，御寒性高，可制成冬装；夏季狍皮为沙毛，制成春秋装或夏装，板厚耐磨，毛朝外翻穿，既防雨，又是极好的狩猎伪装。

狍皮服鄂伦春语叫“苏恩”，多为狍皮本色，也有用烟熏成黄色的。苏恩用狍筋搓成细线缝制，形式多为右偏襟长袍，个别地区也有对襟的。为便于骑马，苏恩都有开衩，不同地区有前后、左右之分。衩口接缝处，饰以弓箭形、鹿角形、云卷纹等图案，既美观，又起加固作用。女袍尤其漂亮，领口、袖口和襟边均以他色镶一宽边，宽边外围辅之黑色细条边，宽细边之间再衬以艳丽的彩线，而且在衩口图案中装饰铜钮或彩扣，给人以典雅明快的美感。

颇具匠心的“密塔哈”（狍头皮帽），显示了鄂伦春人的智慧。这种帽子生动逼真，保暖性能好。它是用一副完整的狍子头颅，剔其骨肉鞣制而成，顶部不但完整地保留着双角、双耳，而且在原来的眼眶处绣制出黑色的眼珠，戴在顽童的头上，俨然像一只跳跃着的小狍子。

“其哈米”是一种靴子，用狍腿皮拼缝成腰儿，以狍脖皮或砸软的犴皮作底儿，与狍皮袜子配套穿用，暖脚、轻巧无声，鄂伦春人最喜欢穿用。

鄂伦春人的手套也别具一格。初秋刚长出绒毛的狍皮，经过熟化，皮板柔软，颜色雪白，将其做成五指手套，再绣上精美的花鸟图案，既是实用的保暖装备，又是工艺品。

“考考落”是一种带腰儿的两指手套，这种手套在掌面腕部留

有缝口，手掌可以从缝口中伸出，手套护在手背上，即使是在低于零下40度的严寒中处理猎获物，也不会觉得冻手。

狍皮还可以做成裤子、套裤、口袋、挎包、荷包等多种生活用品和工艺品。

桦皮桶煮肉

鄂伦春族在长期的游猎生活过程中形成了自己独特的饮食习惯。过去，主要以食肉为主，其中食用最多的是狍子肉。当时，由于生活用具简陋，大多用桦皮桶煮肉。具体方法是：先将洗好的肉放在盛有水的桦皮桶里，然后将烧红的石块不断轮换地投放到桦皮桶里，一会儿肉就煮熟了。现在鄂伦春族吃得最多的要算手扒肉了。把肉切成大块，下锅煮到约七八分熟时捞出，每人手拿一块用刀割着吃，吃肉时还要蘸些盐水。盐水是用煮肉汤调制的，里面放少许食盐，再撒些葱花。

鄂伦春族食用兽肉的方法还有烤、烧及晒肉干。烤肉是用两端削尖的木棍把切成片的兽肉穿上，然后插在火堆旁烘烤，待肉表面烤成焦黄、冒油并发出肉香味时即可，其味道十分鲜美。烧肉，将肉切成片状放在炭火上烧，直烧到外面呈焦糊状，里面呈暗红色，然后蘸盐水吃。这两种吃法是在狩猎期间的传统吃法。

夏季，当猎人们猎获到较多的狍子或犴后，便采取晒肉干的方法保存。一种是把肉切成条，撒上盐搭在支好的木杆上晾晒。下面要点上一堆火，经日晒、火燎、烟熏出来的干肉条，一般可储存三四个月。另一种晒肉干的方法是将肉切成块状，放到锅里煮，加上适量的调料，待煮熟并把水煮干后捞出来晾晒。鄂伦春族认为最有营养的食物是“阿素”。做的方法是把煮熟的狍脑、狍心、狍肺、狍里脊肉切成小块，再浇上野猪油，放点葱花搅拌而食。鄂

伦春族还有生吃狍肝及肾的食俗，大多是打到狍子后，打开腹腔先取出肝和肾，用清水洗一洗或用雪擦干净即可食用，别有风味。尤其是狍肝，味道甜美，经常食用，可以祛火、清肝、明目，实属难得的药膳佳品。

烧面圈

鄂伦春人最爱吃烧面圈，鄂伦春语称之为“布拉曼乌恩”。

烧面圈外皮焦脆呈黄色，里面松软，吃起来喷香可口，其作法是将面和好，制成中间空的面圈。猎人早上出门前，将生面圈埋在炭火里，晚上归来即可食用。鄂伦春族喜吃烧面圈，还有一个动人的故事。从前，小兴安岭脚下住着一个犸猊（妖怪之意），不仅吃野兽吃马，还经常伤人。一天，一位老猎人从炭火里取出面圈，自言自语说：“唉，这是最后一个了，吃完了再吃什么呢？”话没说完，面圈就从他手里掉下去，并且沿着山坡滚下去。老猎人急得大喊：“面圈，面圈，你到哪儿去？”面圈回答说：“我去杀掉那个该死的犸猊。”面圈一直滚到犸猊的住所，趁他不在，将一块野猪皮放在门口，然后将两个臭的野鸭蛋埋在火盆里，最后又拿一把野刺玫枝放在犸猊的铺位上。一会儿，犸猊回来了，一进门踩到野猪皮上便跌倒在地，他又气又恼，爬起来匆匆走到火盆前，准备烧点肉吃，没想到木棍刚触到炭火，里面的野鸭蛋炸开了，犸猊的双眼又刺又痛，片刻之间四周变得漆黑，犸猊捂着疼痛的双眼摸到铺位，刚躺下便是针刺般的疼痛。犸猊一跃而起，在房里东撞西碰，最后倒在火盆里烧死了。从此以后，鄂伦春人认为吃了烧面圈，就会变得勇敢、聪明。烧面圈便成了他们最爱吃的面食之一。

忌食狗肉

鄂伦春族出于对猎狗和猎马的特殊感情，从不食用狗肉和马肉。除非需要殉葬，一般不杀狗和马，都是任其自然死亡，然后埋掉。

狗和马是鄂伦春猎民必不可少的狩猎帮手，尤其是在使用弓箭和火枪时期，没有猎马的速度和猎狗的灵敏，再出色的猎手也难以对付凶猛的野兽。就是狩猎工具得到大大改善的今天，狗和马仍然在默默地担负着帮助主人猎获野兽的使命。在危难关头，猎狗和猎马还能挺身搭救主人。据传说，以前鄂伦春民族既养狗又养狼，因为狼在帮助猎人狩猎时表现得比狗还出色。但是有一次，一个猎人几天没有打到东西，又饿又累，倒在地上睡着了。睡梦中听到狗和狼在打架，他起来训斥了它们一顿就又睡了，结果再一次被吵醒。他很奇怪，便佯装睡觉进行观察。这时，他看到狼正张着血盆大口一步步向自己逼来，而狗却不顾一切地向狼扑去。他明白了原委，开枪打死了狼。

定居后，这种习俗在年轻人中已逐渐改变，开始有人吃狗肉、马肉了，但在经历过游猎生活的老人中，至今仍忌食狗肉和马肉。

仙人柱

“仙人柱”是鄂伦春族传统的居住房屋，外形呈圆锥状，用30至40根5米长的木杆搭盖。先用四根顶端带杈的杆子交错接搭，然后将其余的杆子搭在上面，这样仙人柱的基本框架就搭好了。

仙人柱的围子有狍皮、桦树皮及棉布三种。冬季使用狍皮围子，春夏秋用桦树皮或棉布围子。仙人柱的门多朝正东或正南，门

上挂有狍皮或由柳条编织的帘子。顶端不围，以便通烟。一个“乌力楞”的仙人柱按一字形排开，无前后之分。仙人柱内正面铺位叫“玛路”，其旁边供奉神灵，妇女不准坐到玛路上去。左右两侧的铺位叫“奥路”。左侧奥路是老年夫妇的席位，右侧是年轻夫妇的席位。玛路里侧放桦皮箱、桦皮篓及皮口袋等物。奥路里侧放粮食、衣服等。进门左侧放马具，右侧放灶具。仙人柱的后面大多供奉神像，妇女不能经过。铺位是席地搭一个木边，里面铺上干草，草上铺狍皮。仙人柱内，中间是一堆火，上面架吊锅，用以做饭取暖和保存火种。

此外，还有“奥伦”（仓库）和“恩克力纠哈罕”（产房）。奥伦的制作方法是：立4根4米多高的木桩，顶端搭两根横木，横木上再搭一排木杆，制作成奥伦的底座。然后在底座上面用树枝做一个圆形的架子，铺盖上一块块树皮，再用柳条捆绑好，旁边留个小门，上下用梯子。恩克力纠哈罕是专为产妇搭设的，类似仙人柱，但比仙人柱小，由20几根树杆搭成，设备简单，只有奥路和火盆。产妇住在右边，婆婆住在左边。这种产房盖在仙人柱的东南面，男子不许入内，产妇的丈夫为妻子送食物时，也只能用一木棍将门帘挑开，把食物递进去。

认　亲

鄂伦春族男女青年的婚姻，一般由父母作主。男方父母若看中某家姑娘，便请媒人前去求婚。若求婚成功，男方父母即去拜访，商定认亲和过彩礼的日子。

认亲订婚选择吉日进行。这一天，媒人领着男方的父母、婶婶和男青年，带上酒肉前往女方家。订婚仪式开始后，男青年要给除岳父母以外所有的长辈磕头敬烟。晚上，男女双方面对面坐

在仙人柱的左侧铺位上，共用一双筷和一个碗吃“老考太”（粘饭），象征着两人的爱情永远炽热，感情永远不破裂。女方还要绣一个精美的烟荷包或一副五指手套作为爱情的信物赠送给男方。

送彩礼也要选择吉日。男青年在父母、媒人和近亲的陪同下，带着酒、马匹、兽皮、衣物等到女方家。这时男青年才给岳父母磕头、敬烟、敬酒，成为正式的未婚女婿。这一天要选定结婚的日子。

结婚时，新郎带领“乌力楞”的兄弟姐妹各骑一匹马前往女方的“乌力楞”迎亲。女方派送亲的客人在途中迎接。新娘离开“乌力楞”时，女方家陪嫁的用品中除了马匹、猎装、兽肉外，有代表意义的就是桦皮箱。箱子中央刻有象征爱情幸福的南绰罗花，箱盖边沿和周围的花纹被染成红、黄、黑三色。红色象征新娘之喜，黄色象征新郎之喜，黑色为陪衬。迎亲的队伍到达后，要和女方的亲人们围着篝火载歌载舞。此时，新娘故意策马离开人群，向远方驰去。新郎则策马尾追，追上之后双双并行而归。之后，新郎与送新娘的小伙子们以赛马的形式驰向男方“乌力楞”。结婚之日，新娘头蒙红布或花布，佩戴各种首饰和猎刀。新郎则戴着有飘带的头饰，也佩猎刀。婚礼上，双方各请几位能言善辩，会唱会跳的人活跃气氛。之后，双方向南跪拜，先拜天地，后拜公婆。随后，进入仙人柱，坐在左侧的铺位上举行酒宴，直至深夜。

丧葬仪式

鄂伦春族的丧葬仪式，一般以老年人和成年男子最为隆重。人死后，首先要用冰雪或清水为其净身，然后换上寿衣。寿衣一般选用黑或蓝布缝制，没有布也可以用兽皮，但必须用光板皮子，他们认为穿带毛的寿衣下辈子就要托生成野兽。寿衣穿好后，在仙

人柱的地上铺草或铺板，将死者头朝北，脚朝南停放好，并用纸把脸盖上，据说这样人的灵魂就能贴在纸上很快到“阎木坎”（即阎王）那里去了。头顶前摆上小米饭、点心、野果、酒、烟等供品。这时家人骑快马到各“乌力楞”报信儿。亲友闻讯带着祭品前来奔丧。奔丧的人要向死者磕头，死者家属也向奔丧者磕头。

墓地要请萨满帮助选择。一般都选在向阳、地势高、有雾气缭绕的地方，而且必须靠近水和树，因为树能生根发芽，水能潺流不息。选择这样的墓地，死者的子孙后代才能延续不断。

鄂伦春人死后的棺比较简单，早先是把死人放在事先搭好的铺位上，盖以树枝。有的在地上挖一个长方形的坑，四壁用木杆垒起来，上面盖上桦皮后培土。以后改用桦皮缝制和用柳条编制的棺材。有的将空心树从中间劈开，把死者放在里面后再合上。到了现代才开始用木板制做棺材，材料一般选用不易腐朽的松木或杨木。

死者入棺时要用布遮住阳光，据认为尸体被阳光照射灵魂就会返阳。随葬品除衣食等物品，还有烟斗（必须是铁锅玻璃嘴，不能用木锅石头嘴的）、烟荷包，男人还要做一副弓箭和木刀，女人则把她生前使用过的熟皮用具和针线盒放在棺材里面。这些随葬品还必须损坏一处，据说不这样死者就带不到阴间。过去还有殉葬猎马和猎狗的习惯。下葬时，将死者生前骑过的马，拴上长长的缰绳，由死者的亲人按辈份、年龄依次牵着，萨满念着“你骑过的马随你去了，它会保佑你的灵魂”等咒语，把马杀死后连同鞍具和被击毙的猎狗一起葬在墓旁。若是风葬，则去掉马肉，头和内脏用带有四条腿的皮裹着放在死者脚下。如果死者家里很穷，葬不起马，也可牵着死者生前骑过的马，绕墓地转三圈，或扎一草马烧掉，以示死者乘马而去。现在有的人还用纸糊一些马、狗、鞍具等殉葬。

如果死者子女多，出殡时还要请萨满举行送走灵魂仪式。先扎一个草人，身上系多条带子，死者子孙每人拉一条，萨满念咒祈祷，并用“神棒”打断系带，用力将草人抛出，表示死者的灵魂已远去而不复返。

风葬，又叫树葬，多用于土地难掘的冬天和死于外地的人。选择4棵枝叶茂盛的大树在离地面约一米高的地方搭上架子放棺木，周年后再将尸骨埋掉。有的地方尸体风葬后则不能再动。暴死的人和孕妇实行火葬，即把尸体烧掉再将遗骨装棺土埋。

周年祭

鄂伦春老人死后三年内要举行一次隆重的祭奠仪式，一般是在周年祭日这一天举行。祭奠时，要在仙人柱前另搭一个仙人柱，里面点上篝火，在“玛路”上铺好被褥，放上枕头（头朝右脚朝左），象征故人返回在此休息。床铺前的桌子上，摆着“老考太”（粘粥）、兽肉、酒等祭物，床铺上面拉一条绳子，用以挂亲友送来的衣物。还要请一位识满文的人，在一张白纸上写死者的姓名、出生年月日和出生地、死亡日期和原因等，并写上参加祭祀者的姓名，与死者的关系及送来的祭祀礼物。写完，单腿跪在灵位前大声宣读。念到谁的名字谁就要答应一声，并向灵位鞠躬或磕头。念完后再誊写一份没有人名的礼单随纸烧掉。随后饮宴、守夜。天黑后和午夜时各烧一次纸，黎明时将纸全烧完，周年祭结束。客人临走时，死者的儿孙要一一敬酒、磕头。长辈接受磕头，接过酒后要说“你脱去了灾难，以后好好过日子”（鄂伦春人以为带孝的人运气不好，祭过周年死者家属便可以脱孝了）等，平辈人则跪下还礼。最后，主人把剩下的祭品分赠给每一位客人，受惠者都视其为能除魔避邪的吉祥之物。

周年祭带有脱孝的性质，一般只限于故去的老年人。青壮年去世一周年时只烧纸，不举行仪式。现在鄂伦春人周年祭只搞一般的纪念活动，不再举行隆重的仪式。

安　嘎

“安嘎”是鄂伦春族狩猎生产中的临时狩猎组织。狩猎旺季临近时由一人发起，串联几个志趣相投的人，组成一个安嘎。本次狩猎结束，安嘎自行解散，下次出猎再重新组合，所以，其成员并不是固定的。但为了使狩猎能够有组织、有计划地进行，每一个安嘎组成以后，都要民主选举“塔坦达”、“乌纠鲁达”和“吐阿钦”。

塔坦达是安嘎的首领，主要负责指挥生产、分配猎物等事宜。塔坦达本意为“一个火堆的首领”，原用以称呼家族长，因为安嘎出猎，其成员也是围着一个火堆生息，所以延用了这一名称。其人选必须具备出色的狩猎技术、较强的组织能力和较高的群众威信，这样安嘎成员才甘愿受其领导和听其指挥。

乌纠鲁达是塔坦达的助手，他除了协助塔坦达搞好狩猎生产外，主要分管集体的生活问题。

吐阿钦意思是烧火的人，负责炊事和一些杂务。其人选为“乌力楞”中的老弱孤寡或狩猎技术差的人，猎手们为照顾他们生活而把他们吸收为自己安嘎的成员。而且谁也不歧视他们，有些猎手在狩猎闲暇时还能主动帮他们负担一些诸如提水、喂马之类的杂活。那些受到照顾的吐阿钦们也都能尽职尽责想方设法地安排好安嘎的伙食和管好所有的马匹。有些安嘎没有吐阿钦，猎手们狩猎归来一齐动手砍柴、提水、喂马、煮饭，年轻人自然多干一些，有些狩猎技术不高的人，也往往主动多做来弥补自己的不

足。

乌恰吞和尼玛都伦

这是鄂伦春族狩猎生产中比较有趣的两种分配形式。“乌恰吞”是分半的意思。当一个猎人猎获到一只野兽正在剥皮时，刚好有另一个山客路过，按习惯就要将这只猎物的一半分给过路人。鄂伦春人常说“见面分一半”，就是指这种情况，赶得巧了，不劳动者亦得食。但是这种乌恰吞只限于猎场上，如果猎人已在归途或回到宿地，则过路人赶得再巧也不能享受那一半猎物。有的地方乌恰吞仅限于兽头尚未解开或兽皮剥到一半以前，待兽头已经解开或兽皮剥至过半，有巧遇者也不能享受乌恰吞，但猎人还是会慷慨地割些兽肉送给他。

“尼玛都伦”是赠送的意思。在猎场上，猎人除同巧遇者乌恰吞外，有时还向巧遇者“尼玛都伦”。比如一个猎人猎获一只狍子，正在剥皮时刚巧有人路过，猎人有时会把这只狍子全部送给他。

与人结伴同行，打到第一只猎物一般自己都不要，而是送给同伴。三人同猎，第一只猎物送给狩猎技术差或年纪大的人。如果猎获第一只猎物的是一位老人，他要把这只猎物送给年轻人，而年轻人一般都不肯接受，认为他年纪大了，打到一只猎物也不容易。若三人分别姓孟、吴和葛，姓孟或姓吴的打到第一只猎物要送给姓葛的，因为孟和吴原本为同一氏族，葛是外姓人，应该礼让。

“乌力楞”组织安嘎集体出猎，猎产品应该在安嘎成员中分配，但是分配前如果塔坦达提出应该送给“乌力楞”中某个孤寡之家一张大兽皮，其他成员无异议，就留出一张然后进行分配。猎手们回到“乌力楞”以后，还都要从自己所分得的猎物中拿出部分

来送给那些孤寡病残、无依无靠的人。因为赠送的人多，这些没有劳动能力的人所获得的猎物往往比猎者还要多。

妙法诱兽

每当夏日的和风吹遍山野的时候，在黄花绿草环绕的鄂伦春山村里，到处可闻狍崽的叫声。其实那是嬉戏的孩子们在模仿大人吹“卡皮兰”。卡皮兰是用桦树皮制做的一种哨子，能够模仿狍崽的叫声。其制做方法是将桦树皮剥薄，剪成凹形状，里面划几条竖线，以便气流顺线滑出。然后折起放在口中吹。只要掌握了技巧，便能吹出狍崽的叫声。

每年农历六月是狍子产崽的季节。母狍子将新出生的狍崽寄放在草丛中，独自去觅食饮水，当听到狍崽的叫声便立即跑回来哺乳。鄂伦春人就是根据狍子的这一特点创造出狍哨，用以诱捕母狍子和一些前来捕食狍崽的食肉动物。

与狍哨相似，鄂伦春人还用软木或“老山芹”杆儿，制做出一种称作“乌力安”的鹿笛，放在嘴上吸或吹，便能模仿出公鹿为求配偶时发出的“噢噢”的叫声。秋季是鹿交配的季节，用鹿笛模仿公鹿的叫声，不但母鹿会闻声而至，更主要的是引诱公鹿。尚没有找到情侣的公鹿以为有公鹿叫的地方定会有母鹿，已经得到配偶的公鹿，听到叫声，以为别的公鹿要来夺己之所爱，所以都会威风凛凛地冲上前来准备“决斗”。待鹿靠近时，猎人便可开枪猎取。犴的生活习性同鹿差不多，用同样的方法也可以诱捕犴。

桦皮制品

鄂伦春族妇女心灵手巧，擅长制作精美实用的桦皮用品。每

年农历五六月间，桦树皮水分充足易剥取。此时人们纷纷上山剥取桦皮，先用猎刀在白桦树上横划两道，再竖划一道，用手一掀，整张桦树皮即可剥取下来，然后用马驮回家里在水中蒸煮片刻即可使用。

用桦树皮制成的生活用品及工艺品，装饰花纹古朴，美观大方。其形状亦是千姿百态，扁、圆、方、圆锥形应有尽有。用桦树皮制成的生活用品主要有：桦皮桶、桦皮篓、拾果具、桦皮盒、桦皮碗以及打猎用的桦皮船、桦皮狍哨，盖仙人柱用的桦皮围子等。桦皮制品中最漂亮的当属“阿达玛勒”。这是一个长而扁的桦皮盒，长约30厘米，高约15厘米，盒盖及周围的花纹是用鹿腿骨刻制的。阿达玛勒系女子结婚时的陪嫁。因此，其图案及花纹有着特殊的意义。盒盖中心的花纹是“珠勒都很”纹，象征结婚之后夫妇双方永远团圆。盒盖外围边沿是“奎热格音”纹，象征妻子对丈夫忠贞不渝。有些阿达玛勒上还刻南绰罗花。这种七月开放，花瓣呈绿色的花，是鄂伦春人最偏爱的花卉之一。鄂伦春族通常把未婚女子视作南绰罗花，把未婚男子视作孤独的人。所以结婚时，岳母给女婿制作刻有南绰罗花纹的阿达玛勒，随女儿嫁妆带去，以祝福女婿从此不再孤独。

轻巧、美观实用的桦皮船则是男人们的杰作。其制作方法很独特，底部要选用十分光洁的桦树皮，船帮、船架则选用质地良

好的樟松。一个优秀的猎手往往只用一把猎刀就能完成整个桦皮船的制作。

诸神崇拜

鄂伦春族崇奉多神，所有的神都称“博如坎”，并供奉神像。神像分木制和皮制两种。木制神像多以桦木、松木为料，其名为“毛木太”。皮制神像多用干净的狍皮制成。神像多挂在仙人柱入口处的对面，并装在桦皮盒里。

鄂伦春族最敬重的自然神是山神和火神。猎人打到第一只野兽时，都需将头割下供奉山神。猎人出门凡遇到悬崖峭壁、枯树怪石，皆认为是山神住所，不敢大声说话。为求得山神的庇护，人们往往在枯老的树上，扒去根部的一块树皮，在上面画一个男性老者，象征山神。猎人经过此处都要下马，为山神供食、点烟、磕头、敬烟，或割下几根马尾系于画有山神像旁边的小树上，或在树旁积一堆石头，插上几棵草。祭祀火神在每年正月初一早上举行。此时，家家都要向篝火烧香，并斟一杯酒供在篝火边，并不时将小块肉扔进火里，还要磕头祈祷。平时吃饭前要往火里投放一些食物后才可举筷。同时，鄂伦春族禁止往火上泼水；不许用刀及尖状器具夹篝火上烧的肉；不用棍子捅火，以防触伤火神。

鄂伦春族还崇拜太阳神、月亮神及北斗星神。太阳神被称为“地拉沙”，他们认为太阳是生活中不可缺少的。在供奉的各种神像上都画着太阳；两人发生争吵往往向太阳起誓，以求明辨是非；人们有了委屈和遇到困难也要向太阳祈祷，以求保护和帮助。当发生日食时，以为黄狗在吃它，“乌力楞”的成员往往全体出动，敲着空心树，频频磕头，以求太阳永远存在。

月亮神称作“别亚”，除了在神像上画月亮外，每年农历八月

十五都要供奉，平时若打不到野兽就在仙人柱外面放一个清洁的桦皮盆，猎人在盆旁边向月亮磕头，祈求月亮神帮助他们猎获野兽。次日，盆子里出现什么兽毛，就预示着将要打到什么野兽。如果发生月蚀，也同样敲空洞树或盆呼叫驱狗救月亮。

北斗星称作“得劳恩”。鄂伦春族对北斗星有着特别亲切的感情，他们认为北斗星是指明方向的神，猎人夜间所以能辨明方向不迷路，是北斗星指路的缘故。因此猎人们常常把北斗星画在一块黄布上加以供奉。

狍骨占卜

用狍肩胛骨占卜，是鄂伦春族特殊的占卜形式，多由老人主持，几乎无所不占，无所不卜。

狍骨占卜方法是：猎获狍子后，将肩胛骨的肉剔光，对着太阳看是否透亮，若明亮，则预示着猎人一生运气极佳；若发黑，则表明有鬼怪挡住了猎人的枪口，猎人在近日内将会遇到困难和挫折。然后根据卜骨的其他特征再进行占卜。卜骨的顶部出现凹穴，表明这个猎人是个“莫日根”（好猎手）；相反此处不是凹穴而是又平又直则表明这个猎人不是“莫日根”。卜骨的下部左角若非常尖，表明猎人的妻子能说会道；若呈圆形，则表明其妻子老实憨厚。卜骨的顶部圆坑很深，表明猎人的日子平安舒坦，有吃有喝；相反，则表明猎人的日子很拮据。卜骨中部凸出的地方若出现许多小疙瘩，预示猎人将来会儿孙满堂。作完上述一系列占卜活动后，将狍肩胛骨放到炭火里烧，烧到胛骨呈黑色时取出。然后根据胛骨的裂痕再进行占卜。卜骨中部右侧若出现裂痕，表明猎人的马面临着死去的危险。卜骨中部凸片上若发现竖的裂痕，预示猎人将马上可以打到更多的野兽，若这一竖痕靠近上方意味着过

几天才能猎获。卜骨上方的一片大骨，若发现两道竖痕，则告诉猎人马上可以猎获到大野兽，卜骨上方的左侧小骨上若出现一道竖痕，表明猎人近日可以猎获一头猛兽。作完上述占卜活动后，占卜者将烧过的卜骨向空中抛去，看卜骨顶部圆坑所指的方向，如果向东，猎人今天就要向东出猎，这个方向预示着猎人将获得猎物。

●赫哲族

赫哲族人口为4,245人(1990年统计),主要分布于黑龙江省佳木斯、同江、抚远、饶河等市、县。

赫哲族史称“黑真”、“黑斤”、“赫真”、“奇楞”、“赫哲”等,自称因地而异,有“那贝”、“那乃”、“那尼傲”等。本世纪30年代后统称为赫哲族。

赫哲族有自己的语言,赫哲语属阿尔泰语系满—通古斯语族满语支;无本民族文字,通用汉文。

赫哲族原信仰萨满教,相信万物有灵。

鱼皮衣服

赫哲族擅长用鱼皮制作衣服。其制方法是，将鱼皮剥下，晾干、去鳞，用手揉搓或以“铡床”与槌子锤砧熟好至如同绒棉一样柔软，将数张皮子拼成一大张，然后剪裁缝制。

可制皮衣的鱼多系胖头、赶条、草根、鲤鱼等，一般重量在几公斤至几十公斤。赫哲族的妇女们将加工好的鱼皮，精巧地剪裁缝制成各种衣服。平时经常穿用的衣服有如下几种：

鱼皮长衫。主要是妇女穿着。样式颇似旗袍，身长过膝，腰身较为狭窄，下身和底摆较宽大，呈扁形，便于走动；袖稍肥短，只有领窝，而无高起的衣领。在衣服襟口、袖口、领窝、前胸和后背上，都有云纹和野兽图案镶缀。有的是用一块鹿皮染成红、蓝、黑等色，剪成鹿形和各类花纹缝上的；有的用贝壳缝在衣服的下边缘；也有用绦子镶在衣服边上的。

鱼皮套裤。一般有两种，一是上端齐口；一是上端斜口。冬季穿着打猎，耐磨损；春秋穿着捕鱼，不易透水。鱼皮套裤主要是男子狩猎、捕鱼时穿，妇女外出劳动时也穿。

鱼皮靰鞡，即鱼皮鞋，其优点在于轻巧、暖和、抗湿，在泥泞的道路上行走不滑，多在捕鱼时穿用。

除了作衣服、鞋外，鱼皮还用来制作绑腿、围裙、手套、腰带和各式口袋等。

缝制鱼皮衣服和靰鞡要用鱼皮线，这种线是用胖头鱼皮做的。将胖头鱼皮熟好后，再用狗鱼肝涂抹，因鱼肝有油性，涂抹后既柔软又不干燥。把加工好的皮子压平，割去四周不整齐部分，折起来如同切面条的办法切成细条；其一端细的做线头，另一端稍粗的未切断相互连在一起，用线时，一条条切下来后再拉一拉，

使线更细一些，用起来就流畅了。

地窨子

早先，以渔猎为生的赫哲人，长期生活于江河沿岸、山林旷野之中。这样，就出现了适应赫哲人渔猎生活的居住房屋——冬暖夏凉、搭盖方便的地窨子。

地窨子，赫哲人称“胡如布”。其搭盖方法是：在地面上挖约一米深的坑，坑的大小根据住人多少而定。再在地面上筑起一米高的墙，上竖楔形木架子，用粗壮的大木头作梁，搭上檩子、椽子。上铺箔条或树枝，顶盖培上约 15 厘米厚的土，然后铺上草。也有的因气候原因或者急用，只盖土不铺树枝。

地窨子一般选择高处搭盖，大都坐北朝南，向阳开门。门是入洞式的坡面，门旁开一小窗户，以透阳光。过去，一般用胖头鱼皮去鳞后糊窗户，既亮又结实。

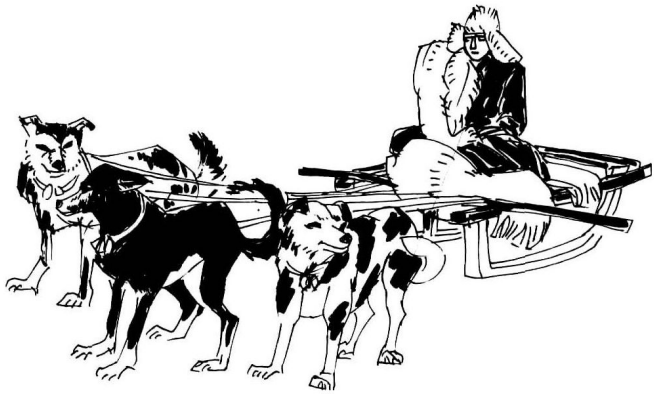
地窨子里边大都搭火炕。炕与灶之间砌有一道小矮墙，以防儿童掉进锅中。也有的地窨子是搭板铺，上面铺上狍、熊等兽皮，既隔潮又暖和。屋中有的放泥筑的火盆，有的放火炉，烟囱由房顶伸出。碗架、水缸均在锅灶旁边。

现在，赫哲人已定居，并住上了砖瓦房。但外出捕鱼狩猎仍住简便的地窨子。

狗拉爬犁

赫哲人历来习惯养狗，狗拉爬犁是早先赫哲族地区的主要交通工具。狗爬犁的构造很简单：用两根直径约 5 厘米、长约 3 米多的柞、榆、桦树杆子，两头砍薄，弯成弓形使两头翘起；两根

杆子的前后各安装两根立柱，高 50 到 70 厘米，宽约 60 厘米；用 4 根横档拼接在一起，中间铺树枝，可坐人或载物。



拉爬犁的狗，需经过训练。幼犬出生后就不让其外出，用脖套栓在家中的木桩上，以锻炼其臂膀的拉力，尤其是头狗必须经过特殊训练。每个狗爬犁可套五至七只狗，多者可套十几只。头狗在前拉一长绳，其余的狗套在支绳上，合力拉总绳。一只狗可拉 35 公斤左右，在冰雪上行走如飞，日行 100—150 公里。赫哲地区从元朝起，即用狗爬犁传递信息。每隔一段距离设一狗站。元朝后期，狗站由 12 站增至 15 站，明朝发展至 45 站，清朝也沿袭使用狗站，以利交通。

到了现代，由于马爬犁逐渐代替了狗爬犁，狗主要用于狩猎了。经过训练的狗，跟随猎人出猎时，常常发挥出寻踪、嗅洞、追捕的功能。当嗅到洞内有猎物时，它就用前爪挠洞口，以示洞内有猎物。对擒到的猎物，猎犬本能地看守，不让外人接近。猎人在野外栖息，如遇猛兽突袭，猎犬能提前唤醒主人，并全力保护主人的安全。猎人在深山如遇到险情时，猎犬能迅速出击排除险情。据说，早先有个猎人穿着滑雪板在深山里狩猎时，一只大野猪突然扑过来，猎人仓促用扎枪猛扎过去，未中要害，野猪就把

他撞倒了。在这紧急关头，猎犬扑过来一口咬住野猪的肩部肉薄的地方，向后猛拖，等野猪剧痛难忍回顾猎犬时，猎人已脱险，随即把野猪扎死了。

结婚仪式上的训话

赫哲族很讲究婚礼。结婚大喜之日，新郎、新娘都穿新衣服，扎腰带，佩带烟荷包等装饰品。新郎由傧相陪同，在亲戚朋友相伴下骑马前往迎亲。迎亲的人一般规定是单数，将新娘迎至家中算上新娘即成双数，以图吉利。夏季娶亲时，多以船作为迎亲的交通工具。冬季则多用雪橇。

迎亲队伍来到新娘家时，新娘家要摆酒席招待。如路途近，当日即将新娘迎回新郎家中，如路程较远，需在新娘家住一夜，次日早晨迎回。

新娘坐的雪橇或船要搭上彩棚，挂上彩绸或红布。新娘头上也要蒙上红布，由合适的人，将新娘抱上船或雪橇。这时新娘要哭泣。新娘家须有若干亲戚朋友送亲到新郎家。送亲的人数连同新娘是双数，返回的时候应成单数。

送亲队伍和新娘到新郎家时，男方请亲友出去迎接，向送亲的人们一一敬酒，并给予热情的招待。

赫哲人结婚也拜天地，时间安排在上午，以示兴旺。拜天地时，在院中放一张桌子，桌上有香炉焚香，并供馒头果品及酒等。拜天地的仪式在新郎的叔父主持下举行，新郎、新娘双双跪拜磕头。拜过天地后，新娘被叔婶们扶着来到房门口，新郎用马鞭子将新娘蒙在头上的红布挑起，新郎、新娘二人这时才得以相见。

新娘的蒙头红布被新郎挑下后，主持人手持两端绑扎红布的三根芦苇，示意新郎跪在门槛里，新娘跪在门槛外，向灶神磕头。

然后主持人开始对新娘训话：从今后你就是我们家的人了，你要好好尊敬长辈；做饭时不要敲打锅沿或灶门，以免引起老人生气；扒灰土要小心，干活要勤快；做事要谨慎，待人要和善；不可多嘴多舌，家里事不要往外讲，外边不可靠的话，也不要往家里传等等。训话完毕，将新娘领进室内，叩拜三代祖宗，再说些祝福的话。然后，主婚人向在场的老年人、亲戚朋友各敬酒一杯，并让新娘一一拜认。至此，结婚仪式才全部结束。

送魂仪式

在赫哲族的丧葬礼仪中，送魂是一种隆重而又严肃的古老仪式。

赫哲人过去相信人有灵魂，认为人死后灵魂并不死。因此，人死后，死者亲属有迎接死者的灵魂回家，过一段时间再向灵魂告别的习俗。赫哲人把这种送魂仪式叫做“撂挡子”。撂挡子没有统一规定的时间，有的一年，有的三年，有的百日，视情况而定。

迎接灵魂回家，其过程是：死者入殓后，家属每天按时给死者上供。有的人家，从死后第七天或第九天开始，每天晚上还照常为死者铺好褥子，放平枕头。如果死者生前抽烟，还在烟袋锅内装入烟叶，放在枕头边，以表示死者每天晚上都回来睡觉。

送魂的仪式是这样的：到了规定的日子，死者的亲属除长辈外，都穿上孝服，用事先做成的木人代表死者，并给其穿衣服、戴帽子、上供品、点香、烧纸。死者的儿女们行跪拜礼，默默地向其祷告，并请萨满跳神。将死者灵魂送走时，萨满要站在高处或特地搭起的高架子上，先射三箭，第三箭射向西方，是给死者灵魂指示所去的方向。射箭是在夜晚，箭头上拴着火炭，以知其去向。射箭完毕，萨满护送走死者灵魂。

送魂的最后程序是处理死者生前用过的被褥以及家中晚辈人脱孝服，这要在坟地上进行。届时，全家人都到坟地上去。以前，都把死者用过的物品烧掉，后来改为送人。脱孝服，不能自己动手，要请外人代脱。孝子们跪在应邀来代脱孝服的人面前，由被邀请的人先动手象征性地代脱部份，然后孝子们即自行将孝服全部脱下，算是与死者的灵魂告别。

干钩钓鱼

赫哲族在长期捕鱼实践中，摸索、掌握了一套独特的本领——干钩钓鱼。

所谓干钩钓鱼，就是拿不用鱼饵的钩钓鱼。这种钓法，赫哲人称“蹶跶钩”，鱼钩是用铅铸成的，约10厘米长，形似小鱼，头部和尾部各有一支锋利的钩。垂钓的方法是，在冰封的江面上凿出两个直径约30厘米的冰窟窿，把这种特制的鱼钩放入冰眼里去，每人两手各提一把钩，不住地拉动鱼钩一起一落。

每年冬季，是赫哲人施展这种独特本领的大好时机。清晨，临江居住的赫哲渔民冒着严寒，拖上小爬犁，奔向江中去钓“早喷鱼”。钓鱼人有男有女，有老有少。不少人坐在小板凳上，聚精会神地垂钓。尽管眉毛胡须上挂上一层白霜，脸颊冻得红朴朴的，但谁也不介意，只管专心致志地起落着钓鱼的干钩。

每次钓鱼收获都不小，像蜇罗、雅巴沙、兔子鱼、白鱼和狗鱼，每条几公斤至十几公斤，一人一天可钓几十公斤。有人偶尔钓到一条一二十公斤重的蜇罗鱼，三四十公斤重的鲟鱼，或一百公斤重的鳇鱼，那就得招呼邻近的钓友帮忙了。他们有的扩大冰眼，有的手拿抄网，等鱼头接近水面，一下子就把捕获的鱼兜抄上来。冰封的江面，是天然的冷冻场，钓上来的鱼，只要往冰上

一扔，蹦跶几下就冻僵了，不必担心它溜掉。

赫哲人为什么能用干钩钓着鱼呢?原来三江流域有一种鱼，夏天在山林小溪里生活，冬天就到江里过冬。它们在冰下照常游动，往往饥不择食，误将起落的钓钩看成蹦跳的小活鱼，纷纷争咬，结果上钩被捕。

挡亮子捕鱼

在长期的捕鱼实践中，赫哲人摸索出许多捕鱼方法，总结出许多捕鱼经验。挡亮子捕鱼，就是其中之一。因最初是在水深1米多的小河口或水泡中，用杨、柳树枝插在水里，将鱼堵拦在一定范围内，故称挡小亮子。

随着时间的推移，赫哲人逐渐兴起挡大亮子。挡大亮子用直径3厘米粗的柳条做成一片一片的帘子，用柳条皮纤维纺成1.5厘米粗细的径绳，每隔约3.5厘米长勒一道径绳。亮子的箔长8米，箔最高13道径绳，约5米多高。用直径20多厘米的柳树或柞树做箔桩，每隔3米竖一根，再用直径20多厘米的柳树做压梁子。竖箔时箔要靠在压梁子上，不能倒下。水小时，每隔一个箔桩支一个撑杆；水大时，又是大梁子，每个箔桩各支一个撑杆。如果是石头江底，打不下桩子，要做成三角形的木马戗上。

在箔脚下，也是第三道径的地方，横压上拉水条子，其上绑牢筏子，使箔下沉江底。早先，均用筏子压箔根，不抗水浸泡，也容易被鱼盗成窟窿，后来便用石头压箔根，既坚固，又不致出洞。

挡上箔后，每隔三四天遛一次箔，如有鱼群闯箔，可用木棒打水或搅水把 鱼吓走。看守亮子的人不时地划船到箔里检查，或潜入水底检查箔底是否有漏鱼的洞。如有洞时，可用筏子堵上，不使鱼逃跑。

正在涨水时不能挡亮子，只有水势将停时，才能挡上箔。因为水涨时挡亮子鱼进不去，撤水时挡亮子鱼已游走。在水涨到已超过箔条的长度时，需割草叠坝，再用杆子钉牢。

亮子有不同的类型：伏水亮子、草芽水亮子和土亮子。伏水亮子捕的鱼最多。挡伏水亮子，一般在冬季取鱼。草芽水亮子是随挡随取鱼。土亮子是用土将小河口堵好，将大小鱼一同挡住。

叉草球

叉草球是赫哲族具有民族特色的体育项目之一。草球用草编制而成。叉法是将参加此项活动的人（参加者人数不限）分成两队对面站立，中间隔着一定的距离，参加者每人一把三齿木叉。活动开始后，其中一队由一人将草球向对方掷去。掷球的高度以对方举起木叉能叉到为宜。当草球飞至另一队的前方时，对方队员就一齐举叉向草球叉去，如将草球叉住，就算赢。如果叉不住，或叉上但又掉下来，就算输。连续数次掷、叉，以赢的次数多者为胜利。

叉草球活动，是从叉鱼的生产劳动演化而来。通过这项活动，使青年男子养成坚毅智慧的性格，练就一手快速、准确的叉鱼本领。过去，赫哲族中流传着这样一个故事：江边有一对年轻的夫妇，男的是叉鱼的能手，女的是缝衣巧匠。尽管丈夫常常叉获大鱼回来，但妻子都嫌鱼戳有窟窿，用这样的鱼皮做衣服不好看。丈夫根据她的意愿，积极参加叉草球活动，不断改进叉鱼技术。后来不仅每叉必中，而且都叉在鱼鳍上，保留了完整的鱼皮。妻子缝纫技巧也不断提高，做出的鱼皮衣服愈加美观合体。

赫哲族叉鱼的高超技术表现在会观察水纹动向。看见水中冒出一圈圈的水纹，就知道鲤鱼在水下吃食，将鱼叉直插下去，必

然命中。如果水纹是向两边分开，就知道是草鱼在水中吃青草，这时只要将叉侧掷过去，必定会手到擒来。叉鱼是赫哲族捕鱼中拿手的一招。

现在，叉草球不仅已成为群众喜爱的体育活动，而且也搬上了舞台，成为赫哲人喜闻乐见的民族民间舞蹈。

●门巴族

门巴族人口为7,457人(1990年统计),主要分布于西藏自治区的门隅地区，以及墨脱、林芝、错那、隆子等县。

“门巴”原是藏族对门巴族的称呼，意为“住在门隅的人”，后成为门巴族的自称。解放后，根据本民族人民的意愿，定名为门巴族。

门巴族有自己的语言,门巴语属汉藏语系藏缅语族藏语支;无本民族文字，通用藏文。

门巴族宗教信仰以藏传佛教为主，有些地方的门巴族信仰原始宗教。

门巴服饰

门巴族的服饰，取自于他们生活的大自然的色彩和线条，以色彩鲜艳、线条飘逸、形制优美为特征，是门巴族人民精神风采的形象显现。

门巴族妇女喜欢梳两条长长的辫子，辫子的下部直到辫梢，衬以红、黄、白、绿等各色棉线和丝线，两条辫子垂落下来，像是色彩斑斓的串珠；不过她们一般都习惯把辫子盘在头上，或缠在帽子上，又像是璀璨夺目的群星。错那县门巴族男女喜欢戴一种特制的小帽，门巴语叫“巴尔袷”。巴尔袷的圆顶用黑色氆氇制成，帽围是用红色氆氇或毡绒缝制6厘米高的筒状，翻沿部分用的是桔黄色的毡绒，镶以孔雀蓝的沿边，并留以楔形缺口。每逢戴时，缺口对着右眼的上方。许多门巴族妇女还喜欢在帽子和翻沿上插上一只孔雀翎或雉鸡尾，十分鲜艳夺目，美观别致。门巴族妇女都佩戴耳环、项饰。耳环，取用自然生成的松耳石和玛瑙珠用绿色丝线串缀起来，丝线的吊穗一直垂到两肩，给人以飞动、飘逸之感。项饰，是用若干根细细的皮条，串缀着许多珍珠、玛瑙、珊瑚、翡翠，中间的一颗很大，两边的较小。这些项饰垂挂于胸前，色彩灿烂，像一片浮动的彩云。门巴族妇女的衣着，内衣有红、白、花各种颜色，无领无袖无开襟，只开一圆口以套头。外衣，错那县门巴妇女多用红色和黑色氆氇制作，向右搭襟，无领，无扣，沿边压以孔雀蓝色，长至膝下，腰部再围一条白氆氇做的围裙。墨脱县门巴妇女，上身无外罩衣，只穿一件无领、无袖、搭襟的短内衣，下身喜欢围一条有竖条花纹、下边带飘穗的筒裙。无论穿围裙或筒裙，均系腰带，腰间佩挂小腰刀，十分潇洒。

错那县勒布区门巴族妇女，还有一件特殊的装束，就是她们

披挂在后背上的小牛犊皮。无论是白发苍苍的老妇，还是天真烂漫的少女和女孩，背后都要披挂一张完整的小牛犊皮，毛向内，皮板朝外，小牛皮的头部向上直抵颈项，牛尾向下，四肢向两侧伸展。披小牛犊皮是勒布门巴族妇女特有的美饰。传说，唐代文成公主远嫁吐蕃时，身上就披着一张牛犊皮以避妖邪。文成公主进藏后，即把此物赠给勒布门巴妇女，她们随即仿效公主披挂在身，从那以后，相沿成习，一直传至今日。

门巴族男子服饰与妇女略有不同。男子留长发，梳一根辫子绕在头上。戴耳饰，耳饰是用两个珠子串结而成。穿的内衣均是白色，搭襟，有袖，无扣，长至胯部。外罩衣多用红色的氆氇制作，向右搭襟，长袖，无衣袋和衣扣，长至小腿，衣摆开衩。挎短刀、长刀和烟袋等物。

错那县门巴族男女都穿藏式软筒靴，靴筒用红氆氇缝制，靴面用黑氆氇缝制。靴底用软牛皮制作。腿肚以上至膝下缠扎花带，用以捆牢靴筒。墨脱县门巴族男女多赤脚。

门巴服饰如烂漫的山花争奇斗艳。他们从大自然的色彩、线条和形象中得到美的启示，用以美化自身；同时通过对自身的美化，又美化了他们生活的大千世界。

酒醉歌迷

踏进西藏门隅地区，徜徉在门巴族的村村寨寨，从竹林深处、溪水之畔，就可以听到飘来的阵阵歌声，闻到缕缕酒香。酒与歌，是门巴族人民生活的伴侣，千百年来，门巴族人民把他们的悲凄和欢乐，苦难和幸福，体验和追求，都酿作酒，化作歌，融进情海心潮之中。

门巴族善酿酒。门隅地区盛产稻米、玉米和鸡爪谷，这些都

是酿酒的好原料。用稻米酿的酒叫米酒，酒色清亮，酒味甘醇。用玉米酿的酒叫黄酒，色泽金黄而酒味浓郁。但门巴族更喜欢用玉米和鸡爪谷混合酿酒，酒汁粘稠，酒味清淡而略带酸苦。酿酒的用具是特制的竹编酒漏和竹筒酒漏，将发酵的酒米盛放在酒漏里，让酿好的酒液一滴滴的滴进铜锅里。饮酒时，用大铜勺从铜锅里舀酒，注进碗中。酒漏都习惯吊挂在火塘一侧的显眼之处。吊挂的酒漏多少，是衡量一个家庭是否富裕的标志。

门巴族男女老幼都能饮酒。每天早晨醒来，一家人便围坐在火塘旁边，由主妇向每一位家人斟酒，就着干饼和干肉，边饮边谈家事，或是商议一天的活计。每晚，一家人又围坐在火塘边，或是请来邻里亲朋，欢聚同饮。这时，主妇要唱劝酒歌，全体应和。酒酣歌迷，众人不由得翩翩起舞。

门巴族十分好客，接待客人的还是酒。宾客临门，主人家则赶忙把客人让于上座，立刻献上满满的一大瓢酒，客人一饮而尽，主人方才高兴。这时邻里亲朋会背上一桶桶酒，接踵而至，顿时，灶塘旁边便挂上一串酒桶，像葡萄串似的吊在梁上，气氛热烈。

歌离不开酒，酒离不开歌。门巴族爱酒也善歌，是一个富有诗情歌意的民族。在酒会上，人们喜唱情歌和酒歌。情歌六字一句，四句一首，风格清新，悠扬婉转。酒歌属长短句，每首歌无固定的行数和节数，风格激越、豪迈、粗犷而浑厚。在酒光杯影中跳荡着歌的节奏和旋律，令人痴迷神往。

婚　礼

在门巴族中间，男女青年的恋爱与婚姻比较自由，正如情歌中所唱："东北的山再高，遮不住天上的太阳；父母的权力再大，挡不住儿选伴侣。"在生产劳动和日常交往中，男女青年互相了解，

并通过对歌和唱情歌，谈情说爱，倾诉衷肠。当彼此心心相印，愿成眷属，各自征得父母的同意后，则由男方父母聘请媒人（门巴语称“嘎东”）带上一桶酒，若干条哈达，向女方父母求亲。如无变故，则另选吉日，男方携带礼品，再到女方家正式订婚，并签订婚约。女方也以礼物回敬男方。订婚后，要等半年或一年才完婚。在这期间，男女双方仍有社交自由。

门巴族婚礼，丰富多彩，妙趣横生。整个婚礼期间，新娘的舅父是最高权威。迎亲前，男方要带上酒和肉到女方家中，首先向新娘的舅父敬酒献牲，然后请喇嘛择定吉日。迎亲的前两天，男方还要到女方家中，向女方的每一位亲人，首先是向新娘的舅父献哈达。迎亲的前一天，男方则开始请喇嘛念经，为新人祈祷，直到举行婚礼。

迎亲吉日到来，男方要派出能说会道的几个人，前往迎亲。新娘离家门时，要向父母敬酒，以谢养育之恩，向天、地敬酒，以祈庇佑幸福。新娘上路，伴郎伴娘护卫左右，舅父、父母和邻里亲朋尾随相送。新娘背插五色彩箭，表示姑娘有“主”了。迎亲途中，男方专有候亲的人，向新娘和女方家中的人敬献三道酒，门巴语称“苏羌”，意为迎亲酒。到达新郎家村口，又有邻里乡亲敬酒。进入新郎家门，迎接新娘的是公婆及男方家人。随即，伴娘带新娘入内室，里里外外换上婆家一套新装，大有脱胎换骨的意味。新娘入屋后，新郎千呼万唤始出来。顿时，欢歌乐舞举杯传盏，喜庆狂欢。

门巴族婚礼一般举行三天。婚礼期间，是村寨盛大的节日。主人要准备大量的酒菜，邀请亲朋邻里聚欢同庆；亲朋邻里也带上酒菜，踊跃前来助兴，不分男女长幼，彼此敬酒劝歌，并不断夸耀新郎新娘品貌出众，祝福新郎新娘婚姻美满。婚礼期间，演出“骂郎家”和“抢亲”的闹剧，把热烈的气氛推向高潮。

婚后第四天，新娘要回娘家省亲一次，此后，娘家才把陪嫁，如奶牛、耕牛、粮食、衣服等物件陆续送给嫁出的姑娘。婚后的第一个孩子要回娘家生。

骂郎家

门巴婚礼，热闹非凡。尤其是在婚礼进行中的“骂郎家”，独具喜剧色彩和气氛。

门巴婚礼，一般举行三天。婚礼中，新娘舅父权力最大。在婚礼的第二天，正当宾客盈门，交杯换盏，歌舞欢腾的时刻，突然间，在坐的新娘舅父首先发难，新娘的父母兄弟及娘家众朋友随之齐声呼应，拒绝新郎家端上来的一切酒肉饭菜，大声呵斥叫骂：“这酒酿得跟水一样没味道，这肉切得厚薄不匀牙难嚼，这是看不起我们的女儿故意怠慢，这是对我们的女儿不亲要的花招。难道我们的女儿眼斜嘴歪脸难瞧?!”边骂边推杯捶案，敲碗摔碟。这时，新郎及其父母和家人，连忙上前，堆笑赔礼，斟酒劝盏，但仍不能平息舅父及娘家亲人的“怒气”，新娘则在一旁装作哭泣状。如此叫骂约一个时辰，直到新郎家里重新摆好酒菜，媒人出面劝解，最后以舅父接受新郎捧上的“赔罪酒”，一场闹剧方才停息。

到了婚礼的第三天，娘家的客人要返家了，又是一场闹剧开始了。临行前，姑娘的舅父和父母又要大声教训女婿：“你听着，你要好好待她，不要现在把她当成仙女，以后又把她看成魔鬼，我们不依!”说到这里，突然喊叫起来：“女儿呀，回去吧!”说着，舅父率娘家亲人拉着新娘的手就往屋外拖，新郎、媒人、新郎父母及家人随即跟出，在村头或路口扭作一团，“抢夺”新娘。最后，新郎家将新娘“夺”回屋内，舅父等娘家人也随之跟进，坐定。媒人好言相劝，新郎家重备酒席，歌劝舞谢，敬杯挽盏，遂皆大欢

喜。

“骂郎家”的戏剧性表演，是对原始女权时代的回忆，显示舅父的权威，警告男方好生对待远嫁的女儿，也包含有抢亲的遗风。

石楼和木楼

生活在西藏东南部错那县的门巴族居住的是石楼，生活在西藏东部墨脱县的门巴族居住的是木楼。门巴石楼，巍然高耸，坚实浑厚；而门巴木楼，拔地凌空，轻盈精美。东西两地，建筑风格各异。

错那县门巴族的房屋建筑，是一种方堡式石楼。石楼的屋顶用木板或石板苫盖，有屋檐伸出楼壁，楼顶两面坡斜成人字形。石楼基层多为长方形，楼壁垂直高耸。基屋和楼壁全用石块砌成，不用柱梁。楼层之间铺排木板，木板平担在墙壁上。门巴石楼一般分作三层：底层，门巴语叫“沙龙”，意为“圈”，有条形窄窗，敞门；或三面石壁，一面全敞。“沙龙”供圈养牲畜使用。中层，门巴语叫“欠木”，意为住室，有单扇木门和方形小窗，窗扇用木板做成。“欠木”是供人居住的地方，一般有里外套间，木板隔开。里间较小，门巴语叫“酿窘”，意为仓库，一般不住人。外间较为宽大，在屋中央靠窗口处设一火塘，火塘里支搭三角铁架或三块灶石，以作锅灶。锅灶上多架石锅。门巴族把火塘和锅灶视为神圣之物。火塘里终日烟火不息，烈焰熊熊。夜晚，全家围着火塘欢聚歌舞，合衣睡卧。有亲朋宾客，也在火塘边接待，或留在这里歇息。石楼的上层，门巴语称作“庞”，屋间较矮，是储放干柴和饲料的地方。门巴族住宅无院墙，走进门巴村寨，可见一幢幢石楼，或鳞次栉比，或星罗棋布，在密林雾霭中若隐若现，与大自然浑然一体。

墨脱县门巴族木楼，另有一番风情。这里的门巴族村寨，一般习惯于坐落在面向河谷的台地或山坡上，背山面水，绿树掩映。门巴木楼的底层有六根或八根主柱，将小木楼高高擎起，离地面约1.5米或2米高。底层没有围墙，四面敞开，供拴养牲畜用。木楼上层是仓库和居室，均用木板间隔。木楼上层外侧有外走廊，有木梯连接底层和上层的外走廊。与外走廊相通的是狭长的小过厅。经过小过厅可以直达居室。居室两侧是耳室，即仓库，作存放粮食之用。居室中央是火塘。居室面南开窗。阳光从窗户透进，与室内塘火交相辉映。木楼楼顶用木板苫盖，两面坡斜成人字形。墨脱县门巴族木楼，周围多有竹林或芭蕉树围绕，竹林苍翠欲滴，芭蕉树婀娜摇曳。远处梯田层层，稻谷飘香。每当黄昏，夕阳的余晖把大半个山岗抹上一层桔红色，一簇簇竹林和芭蕉树掩映着一幢幢红色的小木楼，炊烟缭绕，令人神驰情荡。

门巴木桥

西藏门隅地区，多高山峡谷，河床不宽，但河水湍急。生活在这里的门巴族人民，在长期的生产实践中，修造了一座座门巴木桥。那种木桥像两只紧握的手臂，高高地悬于空中，颇具特色。

门巴木桥修造方法十分特殊：在必经的路段，选择河床窄处，先在河的两岸坝地上整平一块地，靠近河岸的一边略高，远离河岸的一边略低。然后，在坝地上向河流方向五指平伸式地平摆一排松树圆木，亦呈倾斜状。圆木约三分之二长的一端放在岸坝上，上面平压一层大石块；另三分之一长的一端悬空，上面不压石块。接着在平压的一层石块上再横向摆一排圆木，与最底层圆木成横竖交叠状；上面再顺摆一排圆木，比底层圆木再向河中伸出约1.6米长，靠陆地一端的上面也平压一层大石块。依次方法，可叠摞

三五层圆木，逐渐向河中延伸。两岸同时相向构筑，直到中间所留空隙可以搭木板为止。这时，在两岸向河中伸出圆木上搭架圆木和木板，则成桥面，一座木桥就飞架河上了。

门巴木桥，反映了门巴族的智慧和长期实践中积累下来的创造才能。

本教巫师

门巴族信仰本教（西藏原始宗教）和藏传佛教。本教巫师具有崇高的地位，施行巫术是最基本的宗教活动。

本教巫师，按其职能可分两种：送鬼巫师和请神巫师。送鬼巫师由男性充当，又分“登龙坎”、“巴窝”、“本波”三种。登龙坎是为生病送鬼的，他们认为生病是病人的灵魂被恶鬼摄去所致，因此送鬼时，边跳边唱，并从室外捉一活的昆虫，放在病人耳后，说：“这就是病人的灵魂，已找回来了，病快好了！”登龙坎作法，杀牲祭祀。巴窝的送鬼仪式比较复杂，他们头缠红白两色布巾，外戴彩色条形“仁安”纸帽，这种纸帽呈“山”字形，后部有若干纸穗，两侧有扇形大耳至肩，前部挂若干串珠遮面。胸挂串珠，斜披白带，供祭食物和清水。法器是鼓。作法时，巴窝击鼓，晃动身躯，节奏由慢而快。同时挥刀起舞，由室内舞向室外，边舞边似喊似唱：“天上的雪啊向我降吧，山谷的风啊向我吹吧！妖魔鬼怪啊跟我来吧！殃祸灾难啊集于我身吧！”以此表示镇妖慑鬼的气概。称得上本波的巫师很少，其职能与藏区的本波基本相同。

请神巫师由女性充任，又分“觉母”和“巴母”两种。觉母肩披红布，头饰一般是银制链条上拴有三个圆盘的银饰物，门巴语称“冗浪”，手执银器。请神时，双手抹脸，全身颤抖，好似迷狂，表示灵魂飞升。神话说，觉母是天神的女儿，有九姐妹，住

在南迦巴互峰上，人间的觉母，是天神女儿的化身。巴母自称是坎主女神的化身。神话说，天上有一大神的五个手指化成五姐妹，即五位坎主女神，人间的巴母就是其中一个女神的化身。她的灵魂可以离开肉体去向她的姐妹和母亲询问病因和治病的方法。巴母的装束与送鬼巫师巴窝相同。作法时，手摇小鼓和铃铛，跨八字脚，半步一停，有节奏地转圈，同时左右摇头，如此持续若干时辰，坐定，巴母问话，其助手“张米巴”答话，均用韵语唱对，意思是请五位坎主赴宴，询问哪些神尊致人生病。在作法的同时，将五条彩线一端绕缠在病人中指上，另一端分别与代表东、西、南、北、中的五面彩旗相连。作法毕，用火将五条彩线烧断，以断线的长短不同，判定致人生病的坎主，故须请坎主神赴宴禳灾。

门巴族本教较多地保留着原始宗教的遗迹，信奉万物有灵，崇拜鬼魂和自然物。生活在苦难现实中的人民，希求在与神灵的感应中得到解脱，以获得心灵的慰藉。

●珞巴族

珞巴族人口为2,312人(1990年统计),主要分布于西藏自治区东南部的珞渝地区及相邻的察隅、墨脱等县。

“珞巴”一词为藏语，意为南方人。因居住地不同而有多种称谓，如“博嘎尔”、“崩尼”、“崩如”等。珞巴族有自己的语言，珞巴语属汉藏语系藏缅语族。无本民族文字，部分人使用藏文。

珞巴族信仰万物有灵的原始宗教。

炫耀力与勇的装束

对力量和勇敢的赞美和歌颂，是珞巴族人民普遍的审美倾向。珞巴族男女服饰，就是在狩猎生产活动中产生的，是对力量和勇敢的炫耀。

博嘎尔部落的珞巴族，不分男女，一律蓄有齐眉披肩的长发。男子喜穿山羊皮或羚羊皮套装。这种套装是把整张皮革用刀将其不规则的边角稍加裁割，皮革中间挖一与头围相当的圆孔。穿时，头从圆孔伸出，皮革则披搭在肩上，护住前胸后背，长至过膝，腰束饰带。男子戴有一种特制的熊皮盔帽。帽盔是用熊皮生革压制或用竹条、藤条编制而成，帽沿镶有熊皮帽围，帽的后部缝连一块方形的熊皮，直搭后背，有防止野兽抓咬和刀砍的作用。女子喜穿野麻制成的无袖短上衣，粗呢统裙。男女均喜欢佩戴各种器物装饰。佩戴在颈项上的装饰，珞巴语叫“波阶”，即项饰，多用海贝、兽骨、兽牙或玉石磨制成珠状，串成链环。佩戴时，有的箍紧颈项，有的垂于胸前，有的垂至脐上。佩戴的项饰，少至三五串，多至二三十串。珞巴族传说，古代狩猎英雄阿宾肯日，每打到一头猛兽，就把兽头割下来挂在胸前，以此扬威显勇，这就是项饰的来历。猎物愈来愈多，不能都挂在胸前，于是猎物的头

悬于梁上，只取其牙齿等制成项饰，作为力量和勇敢的标志。珞巴族男女，两腕都套有腕饰。腕饰多取猛兽的牙齿嵌在湿皮条上制成。有的人佩戴的腕饰，从腕部排到肘部，成了护肘。男女腰部均束饰带，珞巴语叫“布怒”。饰带用兽皮制作，带面上镶满了一排排兽牙或海贝，两端各缀接一块磨制近似方形的大螺壳。系用时，把两端扣拢于脐部正中。饰带上还悬吊数条金属链条。每根链条的一端系结于脐部正中，另一端分结在腰部两侧。正面看上去，就是若干个左右对称的、悬于两腿前的半圆弧，十分飘逸潇洒。腰间还佩戴火镰、烟斗和珞巴弯刀，男子腰间还斜插长刀，肩背长弓和箭筒。除了长刀、长弓和箭筒，男女装饰基本相同。走起路来，珠光金彩，叮哨作响，英姿飒爽。

居住在西霞巴曲河流域的珞巴族崩尼部落，男女衣饰的装饰，又有一番风彩。男女上身均裸露，下体系一遮羞物，都扎护腿，赤足。男女均蓄长发。男子将长发束于额前，挽一发结，发结上横穿一竹签。妇女将长发束于额前，挽二个发结，横穿两根竹签，签子均约 40 厘米长。男女均文面，在额头、眼角、两颧和下颏上文有斧形、三星和须状图案纹饰。崩尼部落男女还有穿鼻习俗，在两鼻翼上各穿一大孔，戴金属鼻环以作装饰。崩尼人从十一二岁开始文面、穿鼻。崩尼人均戴耳环、项饰和腕饰，与博嘎尔部落大同小异。只是双耳有的各穿两个耳孔，同时可戴四个大耳环和若干小耳环。

珞巴族的装饰、服式，无不和他们的狩猎生产密切相关。他们用打到的猎物装饰美化自身，或是把自己装扮成氏族部落所崇拜的图腾物。某个人或某个生产单位打到的猎物愈多，装饰品也愈多，装饰便成了勇敢、力量和智慧的象征。到了后来，装饰便成了一家财富多少的标志。

米酒鼠宴

珞巴族诚实好客。过往行人进入珞巴村寨，不分民族、男女和亲疏，均热诚相待，如同亲人。

珞巴族待客有一套特殊的方式。屋内有专门为客人准备的坐席。西藏米林县博嘎尔部落的珞巴族，把室内火塘向门方向的左侧称作“光东”的位置让给客人。墨脱县米古巴和米辛巴部落珞巴族，认为室内靠窗口的位置是上座，让给客人。客人在屋内就坐，女主人会立即站在客人面前捧上米酒，先自饮一口，以示无毒，然后殷勤劝进，客人须连饮三杯方休。主人如见客人醉倒，则视为知己，格外高兴。珞巴米酒，以玉米、鸡爪谷为原料酿造而成，色黄味淡而略酸，但后劲很足。主客叙谈，则以酒代茶，轮杯交盏，亲密非常。主人还百般挽留客人共同进餐。招待客人的饭食用石锅闷蒸的稻米干饭为主，有时还有用石板烘烤的荞麦饼和用石锅做的“曼加”（鸡爪谷）稠糊。菜食则以熏烤的兽肉，或是清炖兽肉、木耳、蘑菇为主，以辣椒、野蒜、盐巴为佐料。珞巴族习惯分食，饭、菜分别盛于碗中，用右手三个手指抓食。客人用餐之前，主人总是先吃一口，以表示款待的诚意。

珞巴族有一种招待贵客的特殊的食物——野鼠肉。这种野鼠，体大圆肥，呈灰褐色，习居山野。人们捕捉到以后，制成肉干，以备食用。当贵宾莅临，主人则将鼠肉用石锅火炖烂，佐以野蒜、干辣椒，肉味鲜嫩，十分可口，是作为款待贵客的主菜。传说，珞巴族祖先阿巴达尼善捕野老鼠，喜食鼠肉，并摆鼠宴款待他的妻子、太阳的女儿冬尼海依。从那以后，珞巴族有了食鼠的习俗。

过往行人路过珞巴村寨，如正遇上主人家猎得野物，一定要留下同主人一起进餐，分享美味。如遇上婚嫁喜事，就要同村里

人一道去为新人祝福，饮酒欢歌。

珞巴族以宾客云集为荣，如果怠慢客人，就会受到众人谴责。

长屋和小栋房

珞巴族的住宅建筑与珞巴族的氏族制度和家庭结构密切相关，是珞巴族家庭形态的象征。

珞巴族住宅分两种，一种是长屋，一种是方形小栋房。

长屋，各部落方言有不同称谓，崩尼部落称“南塔”，邦波人称“郎金”或“邦固”，意为公房。长屋成一字形，十数间或数十间连成一排，长达几十米。长屋用途分两类，未婚女子（包括寡妇）住的长屋，邦波人称“姆妹郎金”，多建在村边，内部分出若干居室，以竹席或木板相隔，壁上留一小洞，用以传递信息。同胞姐妹或关系亲密者同居一室，共一个火塘，开一道门通向室外。未婚男子（包括鳏夫）住的长屋，邦波人称“底鲁邦固”，多建在村寨中央，内部不分居室，均为通铺，开四五道门通向室外。男子住的长屋也作议事厅用，凡遇氏族中的重大事件，便召集氏族全体成员，集合于男子居住的长屋中，共同议决。

已成婚的男女则搬出公房，另立门户。在有些部落里，一个家族中的若干小家庭共同居住在一个长屋内，每一小家庭占一居室，自立火塘。

小栋房多呈方形，崩尼部落称“南纵”，或“南纵布朵”。小栋房是一夫一妻的个体小家庭居住，内有一室或三室不等，周围常有粮仓、库房等附设建筑。

无论是长屋还是小栋房，都以整根松树或桦树圆木为料，采取干栏壁榫式结构。房屋一般分三层，底层是若干立柱，高出地面1.5至2米，作畜圈用。第二层是居室，四壁用圆木层层叠起，

屋角榫合，不留窗户，因为怕“恶鬼”进入，但留有若干小洞，作为射箭孔和传递信息使用。面向大山开一门，有一小的过厅通向室内，有的设有外廊，室内中央设火塘。第三层即顶棚，置放柴草。屋顶成人字形，坡度较小，多用木板、芭蕉叶苫盖，压石块以防大风掀动。博嘎尔等部落还有一种地居式建筑，一般为两层，没有底层的立柱，在地面上直接起筑居室，其他部分与上述干栏壁榫式结构无大差别。

相传，很早很早以前，珞巴族祖先曾有穴居和树居的历史。解放后，珞巴族人民已住上了窗明壁净的新居，永远告别了穴居、树穴和居住在阴暗、潮湿的木屋里的时代。

藤网桥

藤网桥除了是独龙族的重要交通工具，也是珞巴族最具特色的桥梁建筑。西藏墨脱县德兴区横跨雅鲁藏布江上的藤网桥，是现在尚存的年代最久的一座，距今已有三百多年的历史。

珞巴族生活的珞渝地区，山高谷深，河流纵横，特殊的自然环境和地理条件，锻炼了珞巴族的架桥技术。在珞渝，随处可见珞巴族建的独木桥、木板桥、溜索桥、竹索桥、藤索桥等等。一场暴雨过后，山洪倾泻，干涸的沟谷，顿时会出现一条条奔腾的河流。这时，珞巴族群众，只要放倒沟边的一棵参天大树，搭到对岸，就是一座桥梁。

墨脱县德兴区藤网桥，离县政府驻地大约有两公里多。远远望去，这座藤网桥，似一条蛟龙，绕山缠岭，飞腾于空中。藤网桥是网筒状。上方有两条粗大平行的铁索（解放前用藤索）横跨江面，两端缠绕在两岸的岩石和松树上。这两根铁索是桥的骨干。铁索以下，与铁索平行的是千余根藤索，也横跨江面。藤索两端

也缠绕在两岸的岩石、松树和木桩上。藤索间距约70厘米。与铁索和藤索垂直的仍是藤索，弯成“V”形，两端系在铁索上，相距也70厘米。横竖的藤索构成井字形网眼，故称藤网。为使藤网牢固，每相距约5米远，有用3根粗藤拧成的藤环，直径约2米，藤环与铁索垂直，上部系在铁索上，下部托住藤网。桥的底部是可以供人行走的用藤子编的宽60厘米的篾席。藤网桥全长约150米，高出江面约50米。凌空飞架，气势雄伟，令人叹为观止。

建造藤网桥，是珞巴族特有的技术。据说，最初是用射箭的方法把竹索或绳索送到江对岸，往返多次，拧成索绳，牢牢地拴在两岸的石崖和大树上，然后再固定藤环和藤网，这样就架起了藤网桥。传说，这是珞巴族祖先阿巴达尼发明的架桥术。

关于墨脱县德兴区的藤网桥，还有一段动人的传说：很早很早以前，江东岸的小伙子达东和江西岸的姑娘亚乃，隔江对唱情歌，天长日久，互相爱慕。可是，大江阻隔，使他们不能结成良缘。一天，亚乃根据梦中一位老人对她的暗示，便约达东手持长弓，身背20支竹箭，每一支箭尾都拴上一根长长的细藤，来到江边。这时，水中跃出一条金色的大鱼，达东和亚乃在两岸同时朝着大鱼射箭，箭中鱼身，鱼在江中翻腾，把两根细藤绞成了一个疙瘩。达东和亚乃在两岸连忙拉紧细藤，一条藤索便横跨在大江之上。从此达东和亚乃得以相会，结成了夫妻。

200年前，当第一批门巴人沿着雅鲁藏布江河谷穿越喜马拉雅山密林，从西部的门隅来到墨脱时，当地的珞巴族就在这座藤网桥上，手举着香蕉、柑桔、蜜桃、兽肉和珞巴米酒，欢迎远方来客。这座藤网桥，是珞巴族和门巴族人民友谊的金桥，是珞巴族祖先开发墨脱——这块莲花圣地的丰碑。

葬　仪

珞巴族信仰灵与肉的二元观，认为肉体死亡而灵魂永在，所以他们十分重视葬礼，为的是给灵魂安置适当的处所。各个部落有不相同的葬礼。

人死以后，博嘎尔、米古巴、米辛巴等部落将死者换上新衣，将尸体双臂前屈，双拳置于腮旁；两腿向前并屈，呈蹲式。然后用粗呢片或衣服将尸体包裹起来，用麻绳或皮条等捆扎，别上竹签，停放在房内门右首，面向西方，意为跟着太阳走了。死者生前使用的工具和装饰品等摆放在头侧或身旁。亲属每餐祭以酒肉饭菜，邻里亲朋也以酒肉献祭。崩尼等部落则将死者的腰部以上裸身，用藤条或竹条捆缚裹严，腰部以下严禁摸弄。尸体在室内停放，亲友邻里也前来致哀献祭。

死者下葬，要请占卜师“米剂”杀鸡看肝，确定尸体停放的日期和下葬的时辰，并请祭司“纽布”念诵咒语。在崩尼部落，死去的老者，一般在下午下葬；死去的青少年，一般在上午下葬。出殡时，由死者亲属或其他同族的人背尸，严禁外族人背尸。全村人停止劳动，列队前来送葬。

具体葬法，各部落因地制宜，有土葬、树葬、树洞葬、崖洞葬、石冢葬等多种。

博嘎尔部落和崩尼部落实行土葬。博嘎尔部落有公共墓地，崩尼部落没有公共墓地。背尸人手拄一根削尖的硬木棍，边朝着巫师指定的方向走，边用硬木棍使劲地戳地，一直到硬木棍可以顺利插入地下的地方，就作为下葬的墓地。墓地选定，先垂直挖一竖穴，深及肩部，再西向挖一长方形横穴。墓穴底部铺放木板、竹签、香草等物，将尸体面向西方放入穴中。博嘎尔部落对被人杀

死者，尸体取直坐式，以示复仇；其余均取侧卧姿势。死者生前所用工具、装饰品等随葬。墓穴前安一木门或树桩即填土掩埋，不留坟头。埋葬毕，背尸人要在墓前栽一木杈或搭一人字形支架，上面挂弓箭、牛角和盛放饭菜的竹篓，献祭10天。

米古巴、米辛巴等部落不分男女老幼，均实行树葬。将死者穿上新衣，用红氆氇包裹，捆成蹲式，侧身盛入木棺。请巫师举行送魂仪式后，即将棺木置于村旁的大树上，如同鸟巢，尸体面向东方。此后，不再举行特殊的祭祀仪式，任凭尸腐棺朽。

西藏隆子县的珞巴族，实行崖洞葬和石冢葬。崖洞葬是将死者双腿前屈，双臂十字交叉合抱胸前，白布裹尸，捆缚置于竹筐内。然后，将盛尸的竹筐连同死者生前用品一并置于山上的崖洞中，面向东方，洞口砌石墙封住，上方留一灵魂出入孔。石冢葬，对尸体处理方法同于崖洞葬，只是不置于崖洞中，而是在村边或自家房后挖一圆形深坑，将尸体面向东方，连同盛尸的竹筐一起置于坑内，上面垒积石块，成圆形石冢。

德根、巴依、玛雅、达足等部落，实行的是树洞葬。葬时，将盛尸竹筐放进山林里的空心树洞中，然后将洞口用石块封住，上方留一灵魂自由出入的小孔。

在崩尼部落，死者下葬后，全村寨人停止劳动三天。在博嘎尔部落，死者下葬后，全村寨的人每隔三天停止劳动一天，连续三次。其他部落也有停止劳动的惯例，时间不等，以示悼念。

物候历

珞巴族在长期的狩猎、采集和农业生产活动中，培养了对自然现象敏锐的观察力。他们理解年、月、日是根据月相盈亏、寒暑冷暖、草木荣枯等自然现象的变化规律来判断，创造了具有鲜

明地域特征的原始历法——物候历。

以博嘎尔部落为例：

年，博嘎尔方言称“宁”，以桃树开花为岁首，月亮周期变化十二次为一年。

季，各部落差异较大。崩尼部落将一年分为春夏秋冬四季，春季为植物萌发的季节，称“弱得波露”；夏季为枝叶浓绿的季节，称“多利波露”；秋季为食物丰收的季节，称“吉得波露”；冬季为草木凋零的季节，称“德拉波露”。而博嘎尔部落把一年划分为暖、冷两季，暖季自二月至九月，称“洛波”，意为暖天，冷季自十月至第二年的元月，称“底龙”，意为冷天。

月份是根据月相盈亏来确定，月相盈亏的每一个周期为一个月。日，是根据月相盈亏制定的。每月三十日，“月黑夜”是每个月的起迄点，每日用月亮的具体形象作标志，当月亮像弯刀时，就说“新的月份开始三天了”；当月亮剩下了一半时，就说“这个月只剩五六天了”。

万物有灵观

珞巴族信仰原始宗教。在珞巴族古老的观念中，认为人类生活的周围环境中的一切事物都充满了灵或魂。一切变化，一切事件，都是由于灵或魂的驱使的结果。他们就是生活在灵动魂飞的虚幻世界中。

珞巴族认为万物有灵，但不是把崇拜投向一切“灵物”。他们所崇拜的只是“灵”中的“强者”。这种“灵”中的“强者”，在珞巴语不同方言中称作“乌佑”、“渥勒”或“渥伊”，亦即“精灵”或“鬼”。山有山鬼，水有水鬼，石有石鬼，树有树鬼，各种动物也有各种动物的鬼。在不同的范围内有不同的精灵或鬼。不

同的氏族和部落，精灵或鬼的名目也不相同。精灵或鬼也有不同个性，或善或恶，或喜怒无常。对精灵或鬼的信仰，产生了最初的崇拜仪式。生活在西藏米林县、以狩猎为生的博嘎尔部落珞巴人，猎获野牛和青牛、祈求交战胜利时，祭祀“崩布乌佑”和“岗布乌佑”。猎获野猪、宰杀家猪、祈求得到漂亮妻子时，祭祀“东金乌佑”和“东英乌佑”。“东金乌佑”和“东英乌佑”还会主宰人们贫富，或使人们成为哑巴或傻瓜。出猎、出征以及为防止痢疾等传染病流行，以及祈求人身安全时，祭祀“崩德乌佑”和“岗德乌佑”。祈求生活富足或打赌起誓，或遇纠纷以求和解，或为孩子健康不遭夭折时，祭祀“米古乌佑”和“麦德乌佑”。举行婚礼时，祭祀“崩吉乌佑”和“崩达乌佑”。妇女流产、难产或生下死婴时，也要祭祀“崩吉乌佑”和“崩达乌佑”。妇女遭到厄运，或是生病，要祭祀“宁德乌佑”和“宁一乌佑”。它们也主使妇女喜怀身孕。“比尼乌佑”和“百奈乌佑”，既可以保护猎人获得丰收，如不祭祀，它们也可以使猎人头晕、恶心、全身疼。“布鲁乌佑”和“布秀乌佑”，既可以让渔夫满载而归，也可以让渔夫溺水而死，它们还常使田地干旱，庄稼枯萎，等等。珞巴族的大自然崇拜，实际上是对精灵或鬼的崇拜。祭祀就是为了对善鬼的报答，对恶鬼的安抚。

珞巴族对“魂”的信仰也极为普遍，称“魂”为“亚洛”。“亚洛”平时寓居于活人的肉体之中，只有在做梦、生病或死亡时才离开人的肉体。离开人的肉体的“亚洛”，或进入地下的“乌佑蒙”，即鬼域，则成为鬼魂，珞巴语称“窝朗姆乌佑”；或顺着天梯升到天上的“达令蒙”，升到“达令蒙”去的“亚洛”，珞巴语称“肉锡”。珞巴族普遍相信魂是可以转体的。解放前，在珞巴族的某些氏族或部落中实行杀人治病，某些氏族和部落投毒之风盛行，意在寻找“替身”，就是灵魂转体观念的血腥的实践。

对“魂”的信仰和灵魂转体思想，是珞巴族图腾崇拜、祖先崇拜和英雄崇拜的根据。珞巴族各氏族崇拜的图腾物有几百种之多，上至天上的太阳、月亮，下至地下的猛兽、毒蛇、鱼虫，还有自然现象如大风、冰雹，生产工具如木臼、刀子等。崩尼部落和博嘎尔部落有虎图腾和刀图腾神话。以虎为图腾的氏族，又不能直接称虎，只能尊称“哥哥”、“叔叔”、“爷爷”。狩猎中如无意打死了老虎，要在家中设虎灵堂，供献祭品，还要像埋葬长辈一样举行隆重的丧葬仪式。珞巴族普遍崇拜的祖先和英雄是阿巴达尼，他上可以达天庭，下可以通地府，变化莫测，逾越鬼魔，是智慧的化身。

珞巴族认为，灵与魂是超人的和超自然的，只有巫师可以影响和统驭灵与魂，所以珞巴社会巫风十分盛行。

●基诺族

基诺族人口为18,021人（1990年统计），主要居住在云南省西双版纳傣族自治州景洪市基诺乡。

“基诺”为本民族自称，意为“舅舅的后代”或“尊敬舅舅的民族”。基诺族有自己的语言，基诺语属汉藏语系藏缅语族彝语支；无本民族文字，使用汉文。

基诺族信奉万物有灵，崇拜祖先。

上新房

基诺族有一个奇异的习俗，只要父亲去世一年，儿女们就要重盖新房，意思是把自己的房子献给父亲。

每当新居落成，基诺族人就要举行一次隆重的祭祀活动，这就是“上新房”。

上新房这天，全寨亲戚朋友都来祝贺。届时先由寨子中年纪最大的妇女登上竹楼，进入新居支好锅灶，并点燃火塘中的第一塘火，然后用扫把清扫室内灰尘，意思是将恶神鬼怪全部扫出新房。接着，主人拿起锤子钳子，稳步走至楼梯口，高声对毛丕（巫师）说：“我们要上新房了，请诸神保佑。”说完便敲响锤钳，边敲边念祈祷词：“别处的鬼神快出去！别处的鬼神快出去！”然后家人按顺序登上楼梯，进入新房。进房，他们先敲打火塘四角，后全家老小围火塘转三圈。这样，人们才能将打铁的工具、甑子、野兽骨头等东西搬进室内。一切就绪，新主人要把事先挂在楼檐上的冬瓜取下来，用力砸到院中，将砸碎的冬瓜献祭土神，求土神保佑全家平安。

上新房这天杀牛要用弩，并请毛丕念经。所念内容是祈求祖宗保佑家庭富裕，六畜兴旺。然后毛丕吟诵本民族史诗，说唱三兄弟打捞父亲的故事。

深夜十一二点钟，贺新房的酒宴才摆开，人们饮酒唱歌，主唱“上新房调”，其内容主要是介绍民族发展的历史，叙事性较强。也有的唱“巴格勒”情歌，向青年人进行恋爱、婚姻道德和传统习俗教育，除此之外，还可以唱一些生产劳动歌，盖新房的歌。歌声彻夜不断，一直要唱到东方日出，宴会才宣告结束。

毛丕离开新房时主人要送他牛腿、牛肋骨、牛头肉、小鸡和

酒米等食物。毛丕回家之后，将这些东西煮熟，用以祭祀毛丕神，并向神汇报这次祭新房的情况。最后，毛丕还要请寨中老人来吃祭品，吃完祭品上新房的仪式才算结束。

巴漂与巴宝

基诺族青年一旦举行了成年礼，就获得了恋爱自由的权利。根据约定俗成的世代规范，其恋爱过程有两个阶段。

第一阶段是恋爱的开始或初级阶段，基诺语叫“巴漂”。基诺族有这样的成语：“巴漂咪带约”，即爱情是从男女两双含情的眼睛相互注视开始的。男女在一寨生产、生活，爱慕之后便以含情的眼睛表达心声，彼此心领神会，这就是爱情的开始。如此再三，便相互赠礼，但此时一般是秘密进行，如劳动途中女子主动迅捷地将包好的槟榔送给小伙子，小伙子立即接下，赶紧放在口中。基诺族成语又说：“三口槟榔不算巴漂”，就是说，作为恋爱初级阶段的巴漂不只互赠槟榔，而且女子还向恋人的耳饰中装上并蒂成双的鲜花，小伙子则向姑娘回赠草烟，有的还以精心刻制的刀把之类相赠。彼此多次往复，直至幽会密语，情不自禁地互相拥抱，才标志爱情第一阶段的结束。

第二阶段是恋爱的发展阶段，基诺语叫“巴宝”。

这一阶段的特点是恋爱的公开化，即可以当众赠礼。此时男子较为主动，其赠品又增加了甘蔗、纺线、雕刻精细的竹桶、自编的竹烟盒、饭盒、槟榔盒等。女子的回赠主要是田间的香瓜、甜瓜、橄榄果，以及自织的挎包、绣有纹饰的绑腿布等。男方家凡打到野兽或杀猪宰鸡，男方都手持一包由母亲选择的芭蕉叶捆成方形的上等好肉送到女家。这期间，恋人们还在村社的社交场所出现，男子借着篝火编制竹器，女子则持原始石锤纺线。小伙子

可把旱烟管放在女子嘴边，女子则把熏有漆色染料的铁片递到男子面前请其漆齿，情不自禁时可偎依拥抱。经过村社社交场的交往，爱情得到巩固和发展。

泼污水

基诺族在婚礼中要举行泼水仪式，且所泼之水常常是污水，如洗碗水、涮锅水、米泔水等等。

基诺族婚礼，历时三天。第一天，新郎和媒人带着烟酒肉菜到新娘家，宾客们也到新娘家祝贺。下午四五点钟，新郎家的人到新娘家接亲。男方来接亲时，要送女方母亲一点“奶母费”，送给舅舅一点“接人费”。卓巴（寨母）卓生（寨父）也必须亲临。第二天，新娘在自己的房间里梳洗打扮，染黑牙齿，擦红嘴唇。新郎来接时，新娘由两个好友扶着下楼。这时，过去曾经与之恋爱或同居过的男子互相邀约，将竹筒灌满污水，站在路边高坎处或是竹楼阳台上，当新娘从他们身边走过时，将竹筒中的污水泼在新娘身上。据说手持竹筒泼污水的男子对新娘曾有一定感情，但不能成婚，眼看着自己心爱的人跟随别人去生活，就以泼污水发泄内心的嫉恨，同时对女伴的忘情给予报复，对女伴出嫁表示抗议，以这种认可的嬉戏方式在女友的身心上打下难以磨灭的印记。

新娘到男家，母亲要给她一个鸡蛋，在她手上拴一根红线，红线绕手腕三圈，新郎敬新娘一杯酒。敬酒时新郎要唱“成双歌”，其大意是：“今晚我请来寨中的老人，我俩一辈子像白木虫花朵一样成双了。我教给你我家的一切家务，你不会做的就问父母亲。我的母亲像母鸡带儿一样，她会耐心地教你，我的父亲像大鱼带小鱼一样，他会教好子孙后代。”当新娘走进竹楼后，父亲要给她一支鸡脚，并在她手上拴红线。拴红线表示把姑娘的心和魂拴住了。

新娘到夫家后，亲戚朋友前来祝贺，村寨的卓巴、卓生必须参加，祝贺新婚夫妇生活幸福，要求他们和睦相处，永远相爱。

舅舅赠送新娘的竹凳

在基诺族婚烟中，女方的舅舅具有重要的作用和地位，这从婚礼仪式等各方面都反映出来。

基诺族婚礼仪式中，舅舅赠给新娘的精制的方形竹篾凳占有令人注目的位置。婚礼通常在夜晚举行，届时迎亲和送女的队伍打着火把鱼贯而行，走在前面的人背着装有衣被的大竹篓，新娘在其后，接着是抱着母鸡笼、小母狗笼、小母猪笼者及手持各种生产、生活用具者。在生产、生活的必需品中，至关重要的是新娘的舅舅赠送的竹凳。提此凳者是一位男子，紧跟在新娘之后。待新娘进入洞房，必先在这个精制的竹凳上坐定。平时对这一礼物也颇为珍视，待新娘未来分娩时也必须坐在这个竹凳上。

在婚礼仪式上，新郎要向岳母致敬，并亲手将两个“半开”（旧中国云南地方的银币）交给岳母，其名目叫“乳汁费”；新郎还要向新娘的舅舅致敬，并将四个“半开”亲手交给舅父，叫“接人费”，以此表示新娘的母亲只是用乳汁养大了女儿，而对新娘具有亲权的法人却是舅父。此外，新郎迎亲的队伍来到女方家时，新娘要根据惯例躲藏起来，而舅父则打着火把，高叫着新娘的名字四处寻觅。舅父找到新娘，并把新娘亲手交给新郎。

从以上婚俗中，都证明了舅父在婚姻中的特殊地位，它反映了基诺族婚礼中的母系制的遗风。

拟人式葬俗

基诺族村社都有各自的公共墓地，墓地均由一幢幢小型竹楼式房屋构成。有的公共墓地中还划分为不同氏族或大家族的小区域，所以，公共墓地俨然一个小村社。

基诺人实行独木棺葬，人死后即赶紧砍倒一棵粗大的刺通树，由外氏族长老或其子量好长度，取其一节从中剖开挖空后，即将死者置于其中。棺内放入死者生前必备或喜爱之物。棺木深埋一米多，不留坟堆，在墓表建一小竹屋，将死者的生产、生活用具都置于屋内。屋内进门处设一饭桌，供死者家属祭祀之用。有的村社还要一日向死者献饭三次，时间长者可达一至三年。有的人家为表示对死者的追思，要守墓数月。村社的墓都不宽大，即使有的氏族人丁兴旺也不得扩大村社划定的墓地，否则，认为会对活着的后代不利。因为墓地不能扩大，三年之后的墓地房屋可以拆除，新的入葬者可将旧墓主挤在一边。基诺人认为村社附近的公共墓地不是死者灵魂的最终归宿，而在基诺山东北约30公里高大的孔明山下，这里有一块山间平地，称之为“生杰左米”，是祖先居住的村寨，是死者灵魂的最终归宿地。因此人死后的灵魂不能立即归入祖先的世外桃源，必须在村社附近的公共墓地生活三年。如果该死者还有生活在人间的氏族内恋人，那么，他（或她）在公共墓地三年之后还必须在“生杰左米”附近的一个叫三条叉路口的地方等待三年，以便与氏族内恋人在祖先的村社举行婚礼。

随着风俗的演变，现在基诺族村社的拟人式墓地已经存留不多，有的已采取了汉式葬法。

成年礼

基诺族的成年礼有其鲜明的特色。札果寨的成年礼在过年前的上新房仪式中举行。男子通常要经受突然袭击式的劫持。年满15岁的男子，往往在劳动的归途中，或在出门办事时，受到事先埋伏好的青年们的袭击。青年们事先串通，躲藏在村寨或田间的隐蔽之处，发出某种特殊的呼唤声，等到男孩出现时，就乘其不备一拥而上，将其绑架到举行祭祖仪式的会场。在庄严隆重的宗教仪式中，被绑男子接受村社长老分给的两包祭祖圣肉，接受父母赠送的全套生产工具，然后在母亲的协助下更换成年衣服，将帽子换成包头，穿上圆形花纹的月亮衫，背起绣着彩色图案的筒帕。这样，他就取得了正式社员的资格。如果举行成年仪式的是女孩，那么则免去劫持仪式，只要上新房后到场，举行祭祖仪式时就位，就可以接受村社长老分给的祭祖圣肉，接受父母赠送的生产工具。她们更换成年衣服后，还要举行梳发仪式。年满15岁的女孩，经过成年仪式，她们的围裙就换成夹层的了。肩上可以挎彩色筒帕，头发也改梳为一条独辫。这样，她们就取得了正式社员的资格。

成年礼被视为基诺族青年成长史上的一个重要转折。举行过成年礼的青年即可参加一种社会性组织，男青年的叫“绕考”，女青年的叫“米考”。组织内有一定的规矩，如共同遵守村社的法规，大家聚会时不说脏话，人与人之间要团结互助等等。参加组织的男青年要为村寨巡逻放哨，维护村社治安，调解人事纠纷，对违法者要进行教育和惩罚。参加组织的女青年则多在一起纺织唱歌。

参加了组织的男女青年才能取得到“尼高作”玩耍的资格。在“尼高作”，青年们有谈情说爱的自由，新入社的青年向老成员学

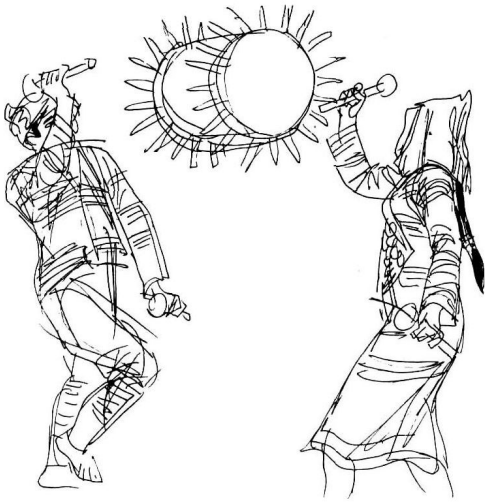
习，早入社的青年也愿意言传身教，青年们很快就能学会恋爱的方法，并按照古老的习俗和自己的理想标准去选择对象。

基诺族青年的恋爱生活比较自由，而且充满了情趣。青年男女相爱后就可以互相赠送礼物，礼物多为烟叶、烤茶和槟榔等，随送随吃。两人的感情发展加深后，便可赠送自制的筒帕。青年们恋爱的方式也比较灵活，除了在“尼高作”中增进感情外，还常常在劳动中通过对歌加强感情交流。收工时，恋人往往把树叶花草等信物，放在自己情人必须经过的路口，表示约会的时间和地点。

村社神器大鼓

基诺族各村社都有一面大鼓，被认为是整个村社至高无上的神器。大鼓直经约 70 厘米，长约 140 厘米，由一株被称为“什沙”的大树干穿凿而成。鼓面是未去毛的黄牛皮，敲击时声音浑厚。无论是伐木制作鼓身，还是杀黄牛作鼓面，特别是大鼓移入村社首席长老家内，都要经过一系列隆重的祭祀仪式。因此在人们的心目中，鼓是村社首席长老权威的象征，也是关系村社安危的神器。

按照传统习俗，只有首席长老的家内才有供奉大鼓的特权。同样也只有首席长老才有依例击鼓权。基诺族村社通常有七个长老，小村社的长老可少于七人，长老依年龄长幼排列，首席长老要产生于村社的古老氏族之中，一旦首席长老去世，就由早已排好年次的第二长老继任，大鼓也就立即移往继任长老之家，而且只有首席长老谢世和新长老上任时，才能照例击鼓。长老主持村社的生产、生活和宗教祭祀。年节亦由长老议定，一旦首席长老家的大鼓敲起，这就宣布了新年的开始。在首席长老家举行新年仪式



时，长老们要依次向大鼓祭酒致敬，并击鼓起舞。可见，基诺族村社的大鼓不仅是一种神器，而且被当作了神灵。

关于大鼓的来源有一个传说：据说古代洪水淹没大地，只有一对同胞兄妹因创世主的指示躲入大鼓内才幸免于难。兄妹乘的大鼓随水漂流到基诺山的苏毛朴它山梁着陆，以后又得到创世主赠的葫芦籽，种下后结出了房屋般大的葫芦，而且里边还有人说话，葫芦破开后依次出来了布朗、汉、傣、哈尼、基诺等民族，他们都各自寻找到了乐土。

多元连名制

基诺族命名的特点，是以父子连名为主的多元连名制。

父子连名的特征是子连父的最后一至二个音节，像链环般一环扣一环，每一环反映了父系制下的一个血缘世代，如杰右—右保—保杰，等等。其他命名方式有以下多种。

与巫师连名。基诺族巫师名白腊胞，在人们心目中他是人神之间的中介，因此，凡是婴儿出生或幼儿多病，就请巫师祭祀并为婴儿命名。巫师命名的婴幼儿只取巫师名的头两个字——白腊，这样，无论男女，凡是以白腊为名者，都是与巫师连名的结果。

借用布朗族名。布朗族在西双版纳扮演过重要角色，其巫师

的法力胜于他族，所以孩子连连夭折，人家的婴儿就与“濮”（基诺族对布朗族的称呼）连名，如濮车、濮蕾，等等。

让违禁外人给孩子命名。如妇女分娩一个月内禁忌外人进家，如有人违忌，就让该人为孩子命名，以借这外力保佑孩子成长。因此，基诺族名字中又有了汉族式名或傣族式名。

此外，妇女分娩时脐带绕在婴儿的肩上被认为是一种怪异现象，为此也不得连父名，而在其名前冠以“沙”字，如沙腰（男），沙蕾（女），等等。孩子降生时不知其父，此子名前冠以“少”字，如“少腰”即无父者名腰。也有不知其父者年长后与其舅父连名者。如孩子在路上分娩，不得与父连名，而与路——基诺语谓“牙”连名，如“牙且”。